

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

現代日本語における多機能動詞研究
—「する」と「ある」—

大塚 望

2018年度

目次

序章 本研究の目的と概要

第1節 本研究の目的……p1

第2節 本研究の趣旨……p2

第3節 本研究の概要……p5

第1章 多機能動詞研究の方法……p7

第1節 形式動詞研究

1.1.1. 形式動詞研究の意義と始まり

1.1.2. 橋本進吉—補助用言……p8

1.1.3. 山田孝雄—形式用言……p10

1.1.4. 松下大三郎—形式動詞……p12

1.1.5. 時枝誠記—形式動詞……p15

1.1.6. 「なる」と「言う」の形式性……p17

1.1.7. 「である」「だ」「です」の形式性……p18

1.1.8. 形式性の比較……p19

1.1.9. 本研究との関わりと問題点……p20

第2節 機能動詞研究……p21

1.2.1. 岩崎英二郎（1974）「機能動詞 Funktions verb」

1.2.2. 村木新次郎（1980、1991）……p22

1.2.2.1.機能動詞の定義と範囲

1.2.2.2.機能動詞の典型例「する」

1.2.2.3.機能動詞の周辺—「する」の一部は機能動詞ではない—

1.2.2.4.機能動詞と共起する名詞の特徴

1.2.2.5.機能動詞と実質動詞の対立—機能動詞かどうかは用法によって決まる—

1.2.3.本研究との関わりと問題点……p26

第3節 軽動詞研究……p27

1.3.1.軽動詞の定義と範囲

1.3.2.「類似した表現」機能動詞……p28

1.3.3.「語」であることの判断テスト—軽動詞と機能動詞の違い—

1.3.4.定性制限の問題点……p30

1.3.5.本研究との関わりと問題点……p31

第4節 三者の比較……p32

1.4.1.定義の比較

- 1.4.2.実質的意味を担う要素の比較……p33
- 1.4.3.該当する動詞の比較
- 1.4.4.分析手法の比較
- 1.4.5.三者の比較と本研究のねらい……p34

第5節 文機能論・発話機能論……p35

章のまとめ……p37

第2章「する」文の構造……p38

第1節 格と名詞句を記述することの重要性と意義

第2節 構文を記述するために

- 2.2.1. 先行研究
- 2.2.2. 格……p39
- 2.2.3. 形式格・表層格……p40
- 2.2.4. 意味格・深層格……p41
- 2.2.5. 本研究における意味格の設定……p45
- 2.2.6. 「する」と意味格……p46

第3節 「する」文の格構造……p47

- 2.3.1. 「する」自動詞構文
- 2.3.2. 「する」他動詞構文……p50

第4節 「する」と共起する名詞の種類……p54

- 2.4.1. 「名詞ガスル」を述語とする文
- 2.4.2. 「名詞ヲスル」を述語とする文……p57
- 2.4.3. 「～ニスル」文……p65
- 2.4.4. 「～トスル」文……p68
- 2.4.5. その他の構文……p70
 - 2.4.5.1. 「名詞スル」を述語とする文
 - 2.4.5.2. 「擬態語・擬音語スル」を述語とする文
 - 2.4.5.3. 「形容詞・形容動詞スル」を述語とする文
 - 2.4.5.4. 「副詞スル」を述語とする文
 - 2.4.5.5. 「副助詞スル」を述語とする文
 - 2.4.5.6. その他

第3章 「ある」文の構造……p82

第1節 本研究における意味格の設定

第2節 「ある」文の格構造……p83

第3節 「ある」と共起する名詞の種類……p85

3.3.1. 「名詞ニ名詞ガアル」文……p85

3.3.1.1. [具象物] ガアル

3.3.1.2. [抽象物] ガアル

3.3.1.3. [出来事] ガアル

3.3.1.4. [期間] ガアル

3.3.1.5. [抽象物（心理事象）] ガアル

3.3.1.6. (原因・要因・理由) ガアル

3.3.2. 「名詞ニ名詞ニ名詞ガアル」文……p94

3.3.3. 「名詞デ名詞ガアル」文……p95

3.3.4. 「出来事ガアル」について……p96

3.3.4.1. 場所格ニとデの違い

3.3.4.2. テンス的意味

3.3.4.3. 取る格

3.3.5. 「名詞カラ名詞へ名詞ガアル」文……p100

3.3.6. 「名詞ガアル」文……p100

3.3.6.1. [抽象物] ガアル

3.3.6.2. [具象物] ガアル

3.3.7. 「名詞ガ名詞ガアル」文……p102

3.3.8. 「名詞ガ名詞ニ名詞ガアル」文……p104

3.3.9. 「名詞ガ名詞ト名詞ガアル」文……p105

3.3.10. 「名詞ガ名詞マデ名詞ガアル」文……p106

3.3.11. 「名詞ガ名詞マデ名詞アル」文

3.3.12. 「名詞ガ名詞マデ副詞アル」文……p107

3.3.13. 「名詞ガ形容詞アル」文

3.3.14. 「(文コト) ガアル」文

3.3.15. 「名詞ニ(名詞、文) トアル」文……p108

3.3.16. 「名詞アル」

3.3.17. 動詞ツツアル

3.3.18. 動詞テアル

3.3.19. 副詞アッテ

3.3.20. 動詞デアル

3.3.21. 格と格の入れ替えについて……p109

- 3.3.21.1.関係性を表わす名詞
- 3.3.21.2.相互性を表わす名詞
- 3.3.21.3.因果関係を表わす名詞
- 3.3.22.まとめ……p112

第4章 「する」の構文的な多機能性……p116

第1節 「する」文の多機能性—文法的機能—

- 4.1.1.先行研究
- 4.1.2.「する」の多機能動詞論……p117
- 4.1.3.「する」文に見られる文法的多機能性……p118
 - 4.1.3.1.「する」と語の結合度
 - 4.1.3.2.「～する」動詞一語相当
 - 4.1.3.3.動詞一語との置き換え
 - 4.1.3.4.形容詞との関係
 - 4.1.3.4.1.形容詞との意味的な類似性—形容詞一語相当—
 - 4.1.3.4.2.形容詞との構文的な類似性—副詞による修飾—
 - 4.1.3.4.3.形容詞との構文的な類似性—比較表現—
 - 4.1.3.4.4.形容詞との構文的な類似性—人称制限—
- 4.1.4.形態的特徴—描く時と局面の多様性—……p126
- 4.1.5.まとめ……p128

第2節 「形容詞・形容動詞する」文の構造と意味……p128

- 4.2.1.「形容詞する」の意味分析における2つの視点……p129
 - 4.2.1.1.「形容詞する」の意味—変化の用法—
 - 4.2.1.2.「形容詞する」の意味—行為の用法—
 - 4.2.1.3.変化用法・行為用法・両義的なもの
- 4.2.2.共起する要素との関係性……p133
- 4.2.3.「～を形容詞する」を広く捉える……p135
 - 4.2.3.1.「動作性名詞を形容詞する」
 - 4.2.3.2.「非動作性名詞を形容詞する」
- 4.2.4.変化動詞と「形容詞する」—結果構文との関わり—……p137
 - 4.2.4.1.動作を被る対象の変化
 - 4.2.4.2.産出される対象と変化—「する」文の二義性—
 - 4.2.4.3.「形容詞する」の多義性
- 4.2.5.アスペクトとテンス……p140
 - 4.2.5.1.動作（様態）の用法における「形容詞していた」
 - 4.2.5.2.「形容詞している」文のアスペクト的意味

4.2.6.「形容詞する」文と形容詞文との関係性……p142

4.2.6.1.「形容詞している」の意味と形容詞文—アスペクト的意味—

4.2.6.1.1.変化の結果の継続（変化の方向）

4.2.6.1.2.変化の継続（変化の方向）

4.2.6.1.3.動作の継続（様態）

4.2.6.1.4.その他

4.2.6.2.「形容詞する」の意味と形容詞文—テンスの意味—

4.2.6.3.形容詞文との近似性—人称制限、程度副詞修飾、比較表現—

4.2.6.3.1.人称制限

4.2.6.3.2.程度副詞による修飾

4.2.6.3.3.比較表現

4.2.7.まとめ……p147

第3節 「擬音語・擬態語する」文の構造と意味……p148

4.3.1.先行研究

4.3.2.「擬音語・擬態語する」は1つの動詞

4.3.3.「擬態語する」の意味……p149

4.3.3.1.擬態語と「する」の意味的な関係

4.3.3.2.類義の動詞との関係性

4.3.4.「擬態語する」と「擬態語だ」……p153

4.3.4.1.「擬態語だ」の活用形

4.3.4.2.置き換え可能性とその要因

4.3.4.3.「擬態語する」の特徴

4.3.4.4.感情・感覚を表す「擬態語する」と状態を表す「擬態語だ」

4.3.5.「擬態語する」と「擬態語やる」……p158

4.3.6.「擬態語する」のテンスとアスペクト……p159

4.3.6.1.アスペクトによる動詞の分類について

4.3.6.2. 動詞の4分類

4.3.6.2.1 状態動詞—テイル形なし、ル形（現在）—

4.3.6.2.2 継続動詞—テイル形（進行中）、ル形（未来）—

4.3.6.2.3 瞬間動詞—テイル形（結果残存）、ル形（未来）—

4.3.6.2.4 第4種の動詞—テイル形（状態）、ル形なし—

4.3.6.3. 感情感覚動詞—テイル形（状態）、ル形（現在）—

4.3.6.4.「擬態語やる」のテンス・アスペクト

4.3.6.5.「擬態語する」のテンス・アスペクトまとめ

4.3.7. 形容詞との構文的類似性……p165

4.3.7.1.主語の人称制限

4.3.7.2.形容詞一語相当

- 4.3.7.3.程度性
- 4.3.7.4.まとめ
- 4.3.7.5.「擬態語する」の表現の多様性
- 4.3.7.6.形容詞、動詞との関係性—「ギリギリする」「痛い」「痛む」—
- 4.3.7.7.知覚を表す属性形容詞
- 4.3.8.「擬音語する」の存在……p169
- 4.3.9.「擬音語・擬態語する」全体のまとめ……p170

- 第4節 「～とする」文と「～にする」文の構造と意味……p170
- 4.4.1. 先行研究とその課題……p171
 - 4.4.1.1.「とする」の先行研究
 - 4.4.1.2.「にする」の先行研究
 - 4.4.1.3.先行研究—「とする」と「にする」の表す意味
 - 4.4.1.4.問題提起—「にする」は変化だけを表すのか、「とする」は変化を表さないのか
- 4.4.2.「～とする」文だけに見られる意味・用法……p174
 - 4.4.2.1. 引用—「N ガ [S] トする」
 - 4.4.2.2. 仮定—「S トする」「S モノトする」「仮に N ヲ N トする」
 - 4.4.2.3. 将前—「S [V (ヨ) ウ] トする」
 - 4.4.2.4. 決定—「N が S モノトする」「N が N ヲ N トする」
 - 4.4.2.5. 同定—「N ヲ N トする N」「N ヲ N トする」
 - 4.4.2.6. 「決定」と「同定」の違い
 - 4.4.2.7. 「決定」と「同定」の違い—主語の有無—
- 4.4.3.「～にする」文だけに見られる意味・用法……p179
 - 4.4.3.1.決定—「N ガ N ヲ N ニする」「N ガ N ヲ N トイウコトニする」
 - 4.4.3.2.変化—「N ガ N ヲ N ニする」「N ガ N ヲ N ノヨウニする」
 - 4.4.3.3.実現努力—「N ガ S [V ル形] ヨウニする」
 - 4.4.3.4.仮想同定—「N ガ S [V タ形] コト／トイウコトニする」
 - 4.4.3.5.様態—「N ガ N ヲ N ノヨウニして」「N ガ V [ル形] ノヨウニして」
 - 4.4.3.6.「～にする」文の「決定」と「変化」の決定要因
- 4.4.4.「～とする」文と「～にする」文に共通する意味・用法……p182
 - 4.4.4.1.決定—「N ガ N ヲ N ト／ニする」「N ガ S コトト／ニする」
 - 4.4.4.2.同定—「N ガ N ヲ N {ト／ニ} する」
 - 4.4.4.3.「決定」と「同定」の違い—文体的違い—
 - 4.4.4.4.置き換え可能だが、意味が変わるもの
 - 4.4.4.4.1.「とする」決定、「にする」変化
 - 4.4.4.4.2.「とする」同定、「にする」変化
 - 4.4.4.4.3.「とする」仮定、「にする」変化
- 4.4.5.まとめ……p186

第5節 「～とする」文と「～にする」文における主語の存在……p187

4.5.1. 「～とする」「～にする」と主語

4.5.2. 主となる語とその存在一用語の検討

4.5.3. 「～とする」文の主語……p188

4.5.3.1. 「名詞ガ名詞ヲ名詞トする」文の主語

4.5.3.1.1. 主語が顕在化している場合

4.5.3.1.2. 主語が潜在化している場合

4.5.3.1.3. 主語が生起不可の場合

4.5.3.1.4. 主語生起不可の連体修飾節—「とする」状態

4.5.3.1.5. 主語生起不可の主節—「とする」状態・仮定

4.5.3.1.6 主語が生起不可能であることの意味

4.5.3.1.7 主語の存在と「とする」の意味・用法

4.5.3.2. 「{名詞ガ名詞ヲ／名詞ガ} 動詞（ヨ）ウトする」文の主語

4.5.3.2.1. 主語が顕在化している場合

4.5.3.2.2. 主語が潜在化している場合

4.5.3.3. 「文コトトする」文の主語

4.5.3.3.1. 主語が顕在化している場合

4.5.3.3.2. 主語が潜在化している場合

4.5.3.3.3. 主語が生起不可の場合

4.5.3.4. 「文モノトする」文の主語

4.5.3.4.1. 主語が生起不可の場合

4.5.3.4.2. 主語が顕在化・潜在化している場合

4.5.3.5. 「文トする」文の主語

4.5.3.5.1. 主語が顕在化している場合

4.5.3.5.2. 主語が潜在化している場合

4.5.3.5.3. 主語が生起不可の場合

4.5.3.6. まとめ

4.5.4. 「～にする」文の主語……p200

4.5.4.1. 「名詞ガ名詞ヲ名詞ニする」文の主語

4.5.4.1.1. 主語が顕在化している場合

4.5.4.1.2. 主語が潜在化している場合

4.5.4.2. 「名詞ガ文〔動詞ル形〕ヨウニする」文の主語

4.5.4.2.1. 主語が顕在化している場合

4.5.4.2.2. 主語が潜在化している場合

4.5.4.3. 「名詞ガ文〔動詞現在形／動詞過去形〕コトニする」文の主語

4.5.4.3.1. 主語が顕在化している場合

4.5.4.3.2. 主語が潜在化している場合

4.5.4.3.3.まとめ

4.5.5.「～とする」文と「～にする」文の主語の存在……p202

4.5.6.まとめ……p203

第6節 「～とする」文における引用と決定・同定の連続性……p203

4.6.1.「～とする」の形式性

4.6.2.「～と言う」との比較……p205

4.6.2.1.「～と言う」の結合度

4.6.2.2.「言う」から「する」への置き換え

4.6.2.2.1.「言う」が「する」に置き換え不可能な場合

4.6.2.2.2.「言う」が「する」に置き換え不可能と可能の両方を持つ場合

4.6.2.3.「言う」から「する」への置き換えに関する両者の比較

4.6.2.4.「言う」から「する」への置き換え不可能な場合（その他）

4.6.3.「する」から「言う」への置き換え……p209

4.6.4.「～とする」の引用……p210

4.6.5.引用と決定・同定の連続性……p211

4.6.5.1.引用、決定、同定の文構造

4.6.5.2.解釈の揺れる文の構造

4.6.6.まとめ……p214

第5章 「やる」との比較から見る「する」の多機能性……p216

第1節 生理・病理現象の名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」

5.1.1.問題の所在

5.1.2.「する」と「やる」のとり格と文型……p218

5.1.3.「する」と「やる」のヲ格名詞（C）……p219

5.1.3.1.ヲ格名詞の使用実態

5.1.3.2.「する」のヲ格名詞（C）の意味的特徴

5.1.3.3.「やる」のヲ格名詞（C）の意味的特徴

5.1.3.4.「する」「やる」をとらないヲ格名詞

5.1.3.5.ヲ格名詞（C）のまとめ

5.1.4.「する」と「やる」の機能と意味……p222

5.1.4.1.「する」の機能と意味

5.1.4.1.1.「する」の機能

5.1.4.1.2.「する」の意味

5.1.4.2.「やる」の機能と意味

5.1.4.2.1.「やる」の意味

5.1.4.2.2.「やる」の機能

| | |
|---------------------------------|------|
| 5.1.4.3. 「する」と「やる」の比較—機能と意味— | |
| 5.1.4.3.1. 「する」と「やる」の機能的相違 | |
| 5.1.4.3.2. 「する」と「やる」の意味的相違 | |
| 5.1.5. まとめ…… | p226 |
| 第2節 非動作性名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」…… | p227 |
| 5.2.1. 先行研究と課題 | |
| 5.2.2. 考察の対象…… | p229 |
| 5.2.3. 考察の手順と方法…… | p230 |
| 5.2.4. 「～ヲする」ヲ格名詞の分類と動詞の機能…… | p231 |
| 5.2.4.1. 様相・様子 | |
| 5.2.4.2. 着装・付帯 | |
| 5.2.4.3. その他 | |
| 5.2.5. 「～ヲやる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能…… | p235 |
| 5.2.5.1. 嗜好 | |
| 5.2.5.2. 害悪・殺傷 | |
| 5.2.5.3. 放送・放映 | |
| 5.2.5.4. 趣味・習い事・勉強 | |
| 5.2.6. 「～ヲする／やる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能…… | p239 |
| 5.2.6.1. 遊戯・スポーツ | |
| 5.2.6.2. 役職・役割・役柄 | |
| 5.2.6.3. 行事・集団活動・催し物 | |
| 5.2.6.4. 生業 | |
| 5.2.6.5. その他 | |
| 5.2.7. 小まとめ | |
| 5.2.8. 「～ヲする／やる」動詞機能の連続性 | |
| 5.2.9. まとめ…… | p245 |
| 第3節 動作性名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」…… | p246 |
| 5.3.1. 先行研究 | |
| 5.3.2. 「する」の意味的・統語的振舞い | |
| 5.3.2.1. 結合の強さ | |
| 5.3.2.2. 名詞の動作性 | |
| 5.3.3. 統語的分析…… | p248 |
| 5.3.3.1. 動詞と目的語との関係性 | |
| 5.3.3.2. サ変動詞語幹の種類 | |
| 5.3.3.3. サ変動詞語幹（A）と動詞 | |
| 5.3.3.4. サ変動詞語幹（B）と動詞 | |

- 5.3.3.5.サ変動詞語幹と動詞との関係性―「やる」との交替要因―
- 5.3.4.まとめと今後の課題 ……p254

第4節 「する」と「やる」の俗語性……p255

5.4.1.俗語

- 5.4.1.1.「やる」俗語説
- 5.4.1.2.「やる」俗語としての二面性

5.4.2.俗語―話しことば性―……p257

- 5.4.2.1.話しことば性を測る
- 5.4.2.2.新聞記事の言語的性質
- 5.4.2.3.話しことば性の強さ

5.4.3. 俗語―卑俗性―……p259

5.4.4. 「やる」独自の俗語……p260

5.4.5.まとめ……p261

第5節 初級日本語教科書における「する」と「やる」 ……p262

5.5.1.調査概要

5.5.2.初級日本語教科書に見られる「する」文……p263

5.5.2.1. 名詞を補語にとる「する」文

- 5.5.2.1.1. 「Nをする」文
- 5.5.2.1.2. 「Nをする」文の説明
- 5.5.2.1.3. 「Nがする」文
- 5.5.2.1.4. 「Nがする」文の説明
- 5.5.2.1.5. 「Nにする」文
- 5.5.2.1.6. 「Nとする」文
- 5.5.2.1.7. 「Nする」文

5.5.2.2.形容詞と共起する「する」文

5.5.2.3. その他の動詞と共起する「する」

- 5.5.2.3.1. 「Vたり Vたりする」
- 5.5.2.3.2. 「Vとする」
- 5.5.2.3.3. 「V ることにする」
- 5.5.2.3.4. 「V たことにする」
- 5.5.2.3.5. 「V るようにする」
- 5.5.2.3.6. 「V ようとする」

5.5.2.4. オノマトペと共起する「する」

5.5.2.5. 「する」文型のまとめ

5.5.3.初級日本語教科書に見られる「やる」文……p276

5.5.3.1. 「Nをやる」文

5.5.4.まとめ……p278

第6章 「ある」の構文的な多機能性……p279

第1節 「～がある」文の多機能性

6.1.1.動詞「ある」に関する先行研究

6.1.2.「～がある」文の多機能性を記述するために……p281

6.1.2.1.「～がある」文の意味するもの

6.1.2.2.日本語モダリティ論に見る「～がある」文

6.1.2.3.「ある」の多機能動詞論

6.1.2.4.「～がある」文の機能

6.1.3.「～がある」文に見られる多機能動詞としての文法的特徴……p284

6.1.3.1.「～がある」の結合度

6.1.3.2.「～がある」と形容詞との関係

6.1.3.2.1.形容詞との意味的な近親性—置き換え、翻訳—

6.1.3.2.2.形容詞との構文的な近親性—副詞による修飾—

6.1.3.2.3.形容詞との構文的な近親性—比較表現—

6.1.3.2.4.形容詞との構文的な近親性—人称制限—

6.1.3.3.小まとめ

6.1.4.「～がある」文の構造……p288

6.1.4.1.5種の構文

6.1.4.2.疑似所有構文

6.1.4.3.疑似存在構文

6.1.5.「ある」の特質……p290

6.1.5.1.〔ある〕という前提

6.1.5.2.英語「have」との比較

6.1.5.3.日本語におけるその他の多機能動詞

6.1.5.4.ナ形容詞（形容動詞）との類似

6.1.6.まとめ……p293

第2節 動詞「ある」の持つ意味—存在・状態・属性の連続性—……p293

6.2.1.意味・用法の分布……p294

6.2.2.「～がある」だけが持つ意味・用法……p294

6.2.3.「～がいる／ある」両方が持つ意味・用法……p297

6.2.4.「～がいる」だけが持つ用法……p298

6.2.5.分布のまとめ……p298

6.2.6.「～がある／いる」以外の用法

6.2.7.「～が～でいる」と「～が～である」……p300

- 6.2.7.1.属性をもった存在「～でいる」と「～である」
- 6.2.7.2.ある状態での存在「～でいる」と「～である」
- 6.2.7.3.「～が～でいる／である」のガ格とデ格
- 6.2.7.4.コンピュータとしての「～である」
- 6.2.7.5.小まとめ
- 6.2.8.「～が～に／ある」と「～が～くいる／ある」……p304
- 6.2.9.文書の引用「～とある」……p305
- 6.2.10.補助動詞「～てある」と「～ている」……p306
 - 6.2.10.1.「～てある」
 - 6.2.10.2.「～ている」
 - 6.2.10.2.1 アスペクトを表わさない「～ている」:「存在状態」
 - 6.2.10.2.2 アスペクトを表わさない「～ている」:「存在様態」
 - 6.2.10.2.3 存在様態と存在状態の連続性
 - 6.2.10.3. 存在、状態、属性の連続性
- 6.2.11.ガ格名詞が必須ではない用法—数量……p311
- 6.2.12.存在の場所ではない「～に」 —「～が（位置）に／ある」 —
- 6.2.13.まとめ……p313

第3節 「～が数量詞ある」文の考察—ガ格名詞と数量詞の省略を中心に——……p314

- 6.3.1.問題の所在
- 6.3.2.「数量詞ある」文の格構造……p315
- 6.3.3. ガ格名詞と数量詞との関係……p316
 - 6.3.3.1. 一対一の関係にあるもの
 - 6.3.3.1.1. 「お金」と「～円」
 - 6.3.3.1.2. 「時間」と「～分」
 - 6.3.3.1.3. 「人」と「～人」
 - 6.3.3.2.一対複数の関係にあるもの
 - 6.3.3.2.1.ガ格名詞が省略可能なもの—属性—
 - 6.3.3.2.2.ガ格名詞が必須なもの—存在、所有、属性の一部—
- 6.3.4.数量詞が無い「ある」文……p321
 - 6.3.4.1.ガ格名詞—誰にでもどれにでもあるもの—
 - 6.3.4.2.「特別な意味」の意味
 - 6.3.4.2.1. 普通よりも程度が大きいこと
 - 6.3.4.2.2. 思ったよりも程度が大きいこと
 - 6.3.4.2.3. 他と比べて程度が大きいこと
 - 6.3.4.2.4. 「何を差し置いても」という強調の意味
 - 6.3.4.3. ガ格名詞—実例検索—
 - 6.3.4.3.1. 身体部分—腕—

| | |
|---------------------------------------------|------|
| 6.3.4.3.2. その他の名詞—金、時間— | |
| 6.3.4.3.3. 量 | |
| 6.3.5. まとめ…… | p326 |
| 第4節 「名詞ある」について—「名詞がある」「名詞のある」との比較—…… | p328 |
| 6.4.1. 問題の所在 | |
| 6.4.2. 「名詞ある」の文法的特徴…… | p329 |
| 6.4.2.1. テンス対立が無いこと | |
| 6.4.2.2. 結合度が強いこと | |
| 6.4.2.3. 形容詞との類似性 | |
| 6.4.2.3.1. 程度副詞の修飾 | |
| 6.4.2.3.2. 別の形容詞との言い換え | |
| 6.4.2.3.3. 形容詞のテンス | |
| 6.4.2.4. 連体詞との相違 | |
| 6.4.2.5. 格助詞が無いことの意味—歴史的変遷 | |
| 6.4.3. 「名詞ある」における名詞の特徴…… | p335 |
| 6.4.3.1. 抽象的な名詞 | |
| 6.4.3.2. 時を表す名詞 | |
| 6.4.3.3. 親族名詞 | |
| 6.4.3.4. 数値・数量を表す名詞 | |
| 6.4.4. 「名詞がある」「名詞のある」との比較…… | p338 |
| 6.4.4.1. 語構成 | |
| 6.4.4.2. 「名詞がある」について | |
| 6.4.4.3. 「名詞のある」について | |
| 6.4.4.4. 「名詞がある」が「名詞のある」より少ない理由 | |
| 6.4.4.5. 文体の違い | |
| 6.4.4.6. 共起可能性 | |
| 6.4.4.6.1. 全て可能な名詞—「名詞（ ϕ ／が／の）ある」 | |
| 6.4.4.6.2. 二用法が可能な名詞—「名詞（* ϕ ／が／の）ある」 | |
| 6.4.4.6.3. 二用法が可能な名詞—「名詞（ ϕ ／？が／の）ある」 | |
| 6.4.4.6.4. 一つだけ可能な名詞—「名詞（ ϕ ／*が／*の）ある」 | |
| 6.4.4.6.5. 一つだけ可能な名詞—「名詞（* ϕ ／*が／の）ある」 | |
| 6.4.5. まとめ…… | p344 |
| 第7章 「する」文と「ある」文の対人的機能…… | p345 |
| 第1節 「する」文の文機能…… | p346 |
| 7.1.1. 〈遂行〉…… | p347 |

- 7.1.2. 〈表出〉
 - 7.1.2.1. 〈情意表出〉
 - 7.1.2.2. 〈感覚表出〉
 - 7.1.2.3. 〈知覚表出〉
 - 7.1.2.4. 〈意志表出〉
 - 7.1.2.5. 〈願望表出〉
 - 7.1.2.6. 〈思考表出〉
- 7.1.3. 〈命令〉 ……p350
- 7.1.4. 〈演述〉 ……p350
 - 7.1.4.1. 〈描写〉
 - 7.1.4.2. 〈叙述〉
- 7.1.5. 「～する」サ変動詞の文機能……p352
- 7.1.6. 文機能論からの「～がする」文の位置付け……p353

第2節 「ある」文の文機能……p355

- 7.2.1. 〈表出〉
- 7.2.2. 〈演述〉 ……p356
 - 7.2.2.1. 〈描写〉
 - 7.2.2.2. 〈叙述〉
 - 7.2.2.2.1. 〈属性叙述〉
 - 7.2.2.2.2. 〈関係叙述〉
- 7.2.3. 文機能論からの「～がある」文の位置付け……p359

第3節 「する」と「ある」の文機能を比較……p361

第4節 「する」文と「ある」文の発話機能……p362

- 7.4.1. 「する」文の発話機能……p362
 - 7.4.1.2. 終止形《命令》の文機能
 - 7.4.1.3. 否定命令の「する」文
 - 7.4.1.3.1. 非意志的行為の否定命令
 - 7.4.1.3.2. 意志的行為の否定命令
 - 7.4.1.4. 「する」文の発話機能全体
 - 7.4.1.4.1. {宣言}
 - 7.4.1.4.2. {演述}
 - 7.4.1.4.3. {表出}
 - 7.4.1.4.4. {策動}
- 7.4.2. 「ある」文の発話機能……p373
 - 7.4.2.1. {演述}

7.4.2.2. {表出}

7.4.2.3. {策動}

7.4.3.まとめ……p375

終章 本研究のまとめ—多機能動詞研究—……p376

第1節 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

第2節 多機能動詞の定義と特徴……p378

第3節 課題と今後の展望……p380

第4節 本研究のまとめと意義……p381

既に刊行された論文との関連—初出一覧— ……p I

参考文献・用例出典……pIII

序章 本研究の目的と概要

ここでは、本研究の目的やねらいを述べ、その全体の趣旨について具体的に例を挙げ説明する。そして、本研究の概要を最後にまとめる。

第1節 本研究の目的

本研究は、現代日本語の動詞が持つ「機能」について研究するものである。

本研究で考察する機能とは、第一に文法的な機能であり、そして、第二に対人的な機能である。第一の文法的な機能とは、その動詞の統語論的・形態論的そして意味論的な機能を指し、文を成す際に動詞が共起する要素との関係性とそこから出現する述語の役割などを意味する。そして、第二の対人的な機能とは、文全体が果たす発話の際の機能と、聴者を前提とした語用論的な機能の二つを指す。

これまでの文法研究は文法的な機能に注目して考察する例は多いが、語用論的な機能までも同時に考察する例は少なかったように見受けられる。語用論的な機能は語用論という言葉学領域のものであって、統語論や形態論を扱う言語学領域を足場にする文法研究では、広げてみても意味・用法という意味論までが考察範囲であるというのが一般的であろう。

しかし、現代日本語動詞の中には、その動詞の特質を記述し把握するのに、この二つの機能を同時に考察しなければ、それが果たせないような動詞が存在する。それが、「する」と「ある」という動詞である。両者は、日本語研究の歴史の中でも早くから注目され、形式用言（山田孝雄 1908）、形式動詞（松下大三郎 1903）、補助用言（橋本進吉 1933）、機能動詞（岩崎英二郎 1974、村木新次郎 1986）、軽動詞（影山太郎 1993）と特別な名を与えられてきた動詞である。そして、その名にある「形式」「補助」「機能」「軽」という語が示す通り、実質的な意味を削ぎ落とし文法的な機能性を強く示す動詞とされてきた。つまり、第一の文法的な機能からの研究に限定され、第二の対人的な機能については考察されることはなかった。しかし、形式動詞の形式性、あるいは機能動詞の機能性が多様であればあるほど、強ければ強いほど、多様な構文を生み出し、それが現実的にコミュニケーションの上でも多様な意味を紡ぎ出すと考えられるのである。これが、文法的な機能だけでなく対人的な機能も合わせて分析の観点に入れる理由でもある。

動詞の機能性という点でその極端に位置するであろう「する」と「ある」の機能性を多角的に捉えることは、日本語動詞全体における「動詞の機能」を議論する重要な糸口あるいは筋道をつけるものと考えている。したがって、具体的に「する」と「ある」を取り上げながらも、「現代日本語動詞の機能」について考えていくことを本研究の底流に置いている。そして、最終的には、先行研究の概念規定の問題点を乗り越え、新たに「多機能動詞」という概念を提示したいと考えている。

まとめると、本研究の目的は以下の三点である。

1. 動詞の機能性を捉えるという観点から、形式動詞・機能動詞・軽動詞研究の総括を行う。
2. 動詞の機能の最大幅とその段階性を捉える。

3. 多様な機能を示す動詞を捉えるための新たな枠組みを提示する。

そして、具体的には以下の点を明らかにしたい。

- ①形式動詞、機能動詞、軽動詞の異同を明らかにし、動詞の機能を捉える視点を整理する。
- ②動詞「する」と動詞「ある」の文法的機能を捉える。
 - (ア) 文の構造（形式格と意味格、共起する名詞）を記述する。
 - (イ) 動詞と共起する要素との関係性、表わされる意味を考察する。
 - (ウ) 類義語「やる」・類義語「いる」との比較を行い、多機能な動詞の特徴を浮き彫りにする。
- ③動詞「する」を述語とする文、動詞「ある」を述語とする文の対人的機能を捉える。
 - (エ) 文機能（一文の機能）を記述する。
 - (オ) 発話機能（語用論的な機能）の広がり確かめる。
 - (カ) 文法的な機能と対人的な機能の関係性を捉える。

これらを通して、現代日本語における多機能な動詞のその機能を明らかにし、同時に、多機能な動詞を分析する方法を示すことを目的としたい。

第2節 本研究の趣旨

ここで、本研究全体で論じようとしている趣旨、方向性を明らかにするために論述の一部を事例として示すことにする。以下、動詞「する」を取りあげる。

- (1) 太郎が次郎を殴る。
- (2) 太郎が英語の勉強をする。

この二つの文の動詞をそれぞれ見てみると、「殴る」は動詞自体に「力をこめて叩く」という意味を汲み取ることができる。ところが、「する」はそのような具体的な意味を指定することができない。さらに、動詞のとりつづ格名詞を考えてみると、「殴る」は動作対象となる人物や生物、物がつづ格名詞となる。しかし、「する」は動作対象がつづ格名詞となるのではなく、「勉強」という動作内容がつづ格名詞となっている。この他にも、例えば「ゲームをする」、「ネクタイをする」、「事務員をする」、「あくびをする」、「きれいな目をしている」など、つづ格名詞は動作性名詞だけでなく、具体的な物、役割や職業、生理現象や身体部位など非常にさまざまな名詞句が共起する。「殴る」がつづ格に持つのが、殴る対象である人や物に限定されるのと異なっている。加えて、次の例もある。

- (3) 息子を医者にする。

(1) の文は、「殴る」という動詞をその他の要素と位置を入れ替えても、「次郎を太郎が殴る」のように、意味はほぼ変わらず、文として成立する。しかし、「する」という動詞は、その他の要素と入れ替えてしまうと「*医者に息子をする」¹となり、文として成立しなく

¹ 記号の意味は以下の通りである。*: 非文（日本語の表現としておかしく成立しない）。?: 不自然（日本語の表現として不自然でおかしい感じがする）。?は数が増えるほど不自然さを感じるという意味で用い

なってしまう。つまり、動詞と名詞とのつながりの強さが異なるのである。さらに、次の例を見てみる。

(4) しばらく殴ると男は立ち去った。

(5) しばらくすると男は立ち去った。

副詞「しばらく」は「殴る」の時間的な範囲を限定するのに対し、「する」はその時間的な範囲が単に経過したことしか表わさない。そして、次のような形容詞の連用形と共起する例もある。

(6) 太郎が次郎を強く殴る。

(7) 太郎の言葉が花子を強くする。

形容詞「強い」の連用形は、(6)では「殴る」という動作の様態を示すのに対し、(7)では「する」の動作を修飾・限定するのではなく動詞と一体化し、強いという状態に変化することを表わすようになる。

以上、副詞の場合も形容詞の場合も動詞との関係性が「殴る」と「する」では異なっている。さらに、次の例を見たい。

(8) a. あ、頭痛がする。

b. *君は頭痛がする。→君は頭痛がするはずだ。

c. *彼は頭痛がする。→彼は頭痛がするらしい。

(1)「殴る」の主語は「太郎」であり、主語の特徴は第三人称・動作主格であるが、同時にこの人称は限定されたものではない。第二人称であっても第一人称であっても文として成立する（私が次郎を殴る。君が次郎を殴る）。ところが、(8)「する」の場合には上記のように、第一人称でなければならないという人称制限が見られるのである。第二人称や第三人称主語では非過去・言い切りの形（終止形）では文が成立せず、「はずだ」「らしい」のようなモダリティ付加辞がなければならない。このような人称制限が存在するのは、通常、動詞ではなく(9)のような感情形容詞に見られる特徴である。

(9) a. あ、頭が痛い。

b. *君は頭が痛い。→君は頭が痛いはずだ。

c. *彼は頭が痛い。→彼は頭が痛いらしい。

また、(8)の文が発話される場合には、話者自身の痛みを表出する〈感覚表出〉という対人的な機能を担うが、このこともまた、(9)の感情形容詞文が担う機能と同様のものである。そして、「～がする」という格構造だけでなく(11)のような「オノマトペする」もまた同様である。

(10) 頭がガンガンする。

次に、ト格と共起する「～とする」は、(11)のように引用の意味を示すが、それは通常の動詞を用いた引用文とは異なっている。

(11) 当局はこれで調査は終わったとした。

(12) 当局はこれで調査は終わったと言った。

る。#：他の意味として実現（文として成立するが元の文と意味が違っている）。

(12)は明確に発言したことを意味しその発言内容がト格で引用されている。しかし、(11)は下された判断がト格で示されているのである。しかも、「する」そのものには具体的な意味が無い。

この他「～とする」は(13)で仮定の意味を、(14)で決定の意味を表す。

(13) 雨が降ったとする。

(14) 彼女を合格とした。

同じ「とする」の述語を持つのに、異なる意味を表し得るのはなぜなのだろうか。

一方で、「何らかの行為・動作を相対的に示す」動詞として「する」と類義語の関係にあるのが動詞「やる」である。

(15) 太郎が研究室で実験をする／やる。

(2) ' 太郎が英語の勉強をする／やる。

このように、「やる」は「する」と置き換え可能な場合もある一方、置き換え不可能なものもある。

(3) ' #息子を医者にやる。

(5) ' #しばらくやると男は立ち去った。

(7) ' *太郎の言葉が花子を強くやる。

(8) ' *あ、頭痛がやる。

(12) ' *当局はこれで調査は終わったとやった。

(3) 'では授受の意味が、(5) 'では動作性が出てしまうなど、両者の意味が異なるものも見られる。類義語の関係にある「やる」と「する」がその機能性において、どのような違いを示すのか考察することで、「する」の特徴がさらに明確になると考える。

最後に、次のような例は属性形容詞の文と似た意味を表し²、文としても主体の属性を述べる〈属性叙述〉の機能を示している。

(16) 花子はきれいな目をしている。

(17) 花子は目がきれいだ。

以上、なぜ「殴る」と「する」は同じ「動詞」という枠組みに入りながら、このような様々な相違を表すのだろうか。両者の相違は、文法的な機能と対人的な機能において、顕著な差異となって現れている。文法的な機能としては、意味的な希薄化という意味論的特徴、語の結合の強さ、共起する語と格助詞の多様さなどの統語論的特徴がある。そして、対人的な機能としては〈事象描写〉だけでなく〈感覚表出〉まで「する」が表し得るとの違いが見られる。さらに、「する」には形容詞との類似性という品詞を超えた機能の広がりも見られるのである。

このように、「動詞」という品詞に分類されているものの中に、「する」のような多様な意味・用法そして機能を示す動詞が存在する。その機能性とは何か、どのような広がりを見せるか、そして、その機能性はなぜ発生するのかといった点を、その他の動詞との比較を通して論じていく。同様に、多機能であると考えられる「ある」についても詳細に考察して

² ただし、厳密には少し意味が異なる。形容詞文の方は、花子の特徴を述べたに過ぎないが、「している」文の方は見た目の特徴だけでなく、花子の内面まで示している。

いく。これらの考察を通し、これまで形式動詞、機能動詞、軽動詞と別々に呼ばれ、別々に研究されてきた点を再検討し、現代日本語動詞における「機能」とは何かを再定義し、新たに「多機能動詞」という概念を提示したい。

したがって本研究は、「する」と「ある」という形式的な動詞の文法的な機能と対人的な機能を明らかにし、現代日本語における動詞の機能性について論じるものである。このことによって、現代日本語の動詞の全体像がその機能性（文法的側面・対人的側面）によって明らかになるものとする。

第3節 本研究の概要

以下に、簡潔に本研究の概要を述べる。

第1章では、「多機能動詞研究の方法」と題して、動詞の機能について論じたこれまでの形式動詞研究、機能動詞研究、軽動詞研究を取り上げ、本論文との関わりと問題点を指摘する。また、三者を比較し、形式動詞研究の総括を行う。そして、対人的な機能について論じた文機能論と発話機能を取り上げる理由を述べる。以上、文法的な機能と対人的な機能を研究する方法について論じるのが第1章である。

第2章では動詞「する」、第3章では動詞「ある」について、それぞれの動詞を用いた「文の構造」について記述する。まず、動詞と共起する格について、形式格と意味格の2点から記述し、次に、それぞれの格と共起する要素、特に名詞の意味的な分類を行う。以上、動詞「する」と動詞「ある」の文の構造を全て記述するのが、第2章と第3章である。このことによって、機能の多様性を生む構文的な理由を明らかにしたい。

第4章では、「する」の構文的な多機能性について考察する。第1節では、「する」は単独で用いられず他の要素と連語を作る。その連語が動詞一語に相当する機能を持つこと、さらに、動詞でありながら形容詞と類似した機能を示すことがあることを論じる。第2節では「形容詞・形容動詞する」文、第3節では「擬音語・擬態語する」文、第4節では「～とする」文と「～にする」文、それぞれの構造と意味について論じる。第5節では「～とする」文と「～にする」文における主語の存在とその在り方について考察し、第6節では「～とする」文における「引用」を通常の動詞「～と言う」と比較しその相違を明らかにする。そして、「引用」と「決定」と「同定」という意味が連続するものであることを論じる。以上、「する」の文法的な機能について考察するのが、第4章である。

第5章では、類義語である「やる」と比較することで、「する」の多機能性をさらに明らかにしたい。第1節では、例えば「くしゃみをする」「下痢をする」「大病をやる」のような生理・病理現象の名詞がヲ格に立つ場合の「する」と「やる」について比較し、ヲ格名詞の違い、動詞の果たす意味や機能について考察する。第2節では、「ゲームをする」「ネクタイをする」「覚醒剤をやる」のような非動作性名詞がヲ格に立つ場合の「する」と「やる」を比較し、第3節では「運動をする」「勉強をする」「点検をやる」などの動作性名詞がヲ格に立つ場合の「する」と「やる」を比較する。第4節では「する」と「やる」に俗語の性質が見られるかを検討する。第5節では、日本語教育の面で両者がどう教えられているかという点を検討するため、初級日本語教科書の中に見られる「する」と「やる」の例文を分

析し、どう提示され、何が教えられているかの調査を行う。このことで、動詞の機能性を見る本研究の結果が教育の場面で応用可能であることを提案という形で行う。

第6章では、「ある」の構文的な多機能性について論じる。第1節では、特に「～がある」文を取り上げ、「ある」と結合する語との関係性を論じ、機能的な動詞になっていることを指摘する。さらに、感情形容詞文との類似性、「疑似所有構文」「疑似存在構文」の存在について考察する。第2節では、「本がある」「痛みがある」「勇気がある」のような各文の持つ意味が、「存在・状態・属性」の段階で連続していることを構文と意味の関係から考察する。第3節では、「～が数量詞ある」文を対象に、数量詞とガ格名詞の関係性、「田中は金がある」のような数量詞があるべきではない文についての特殊性を考察する。第4節では「由緒ある家系」のような「名詞ある」が形容詞や連体詞に類似した機能があることを指摘し、さらに、ガの挿入されている「名詞がある」と、ノが挿入されている「名詞のある」と比較し、それらの違いについて述べる。以上、「ある」の文法的な機能について論じるのが、第6章である。

第7章では、「する」文と「ある」文の対人的機能について論じる。先行研究を吟味し、「する」と「ある」に見られる多機能性を記述するためにはモダリティ論からの言及ではなく、新たに文機能論からのアプローチが妥当であることを論じ、その対人的機能の広がりを示す。第1節では「する」文の機能、第2節では「ある」文の機能を記述する。第3節では両者の文機能の比較を行う。第4節と第5節では、対人的な機能の2つ目である発話機能について、「する」文と「ある」文を考察する。以上、「する」文と「ある」文の対人的な機能である〈文機能〉と《発話機能》について考察し、動詞の対人的な機能について論じるのが第7章である。

終章では、以上の考察を統合し、先行研究における問題点を再度取り上げ、機能はその強弱、多少、濃淡で示されるべきであり、それを実現するには「多機能動詞」という概念こそが用いられるべきだということを提案する。「ある」は状態性の動詞として、「する」は動作性の動詞として、ともに日本語動詞の多機能性を最も発揮する動詞の双壁であり、その両極である。さらに、そのことが日本語における表現のバリエーションを広げるとともに、その造語力によってこれからも日本語の表現を変えていく可能性があることを考察する。最後に、残された課題や今後の展望について述べる。

第1章 多機能動詞研究の方法

日本語の動詞の中には、実質的な意味が希薄で、主に述語としての働きのみを示すような動詞が存在することが古くから指摘されている。そして、このような動詞について、これまで「形式動詞」「機能動詞」「軽動詞」と名付けられ、それぞれ研究が行われてきた。

本研究で取り上げる「する」と「ある」という動詞は、実質的な意味が希薄である。「する」は動作を表し、「ある」は存在を表しているが、動作という概念は動詞全体に共通する意味で漠然としており、存在という概念はそれ自体が普遍的である。両者には、実質的な意味をほとんど見いだすことができない。しかし、その一方で動詞である以上は述語となり、活用し、様々なテンス的意味（あるいは『する』はアスペクト的意味も）を表す。したがって、「ある」と「する」はこのような特異な動詞であると考えられるのである。

そこで、第1章では、このような専ら動詞の機能的側面を中心に発揮する動詞を研究するにあたって、「形式動詞」「機能動詞」「軽動詞」という、それぞれの研究を振り返り、それらの相違を明らかにし、本研究が研究の流れにおいてどのように位置づけられるかについて、述べる。これが第1章の目的である。以下、第1節では明治期に集中して行われた「形式動詞」の研究について取り上げ、「動詞の形式性」とは何かについて考察する。そして、本研究で考察する「する」と「ある」がどう位置づけられてきたかについてまとめる。第2節では「機能動詞」の研究について、第3節では「軽動詞」の研究について取り上げ、それぞれの定義、扱う日本語動詞の範囲、「する」と「ある」の位置づけ、そして問題点や課題を指摘する。

第1節 形式動詞研究

日本語における形式的な述語である「形式用言」、「形式動詞」、「補助動詞」を取り上げ、それらがこれまでどのように定義・考察されてきたかを整理する。ここでは、特に、橋本進吉（1933、1935、1936、1948）、山田孝雄（1908、1922、1936）、松下大三郎（1903、1928）、時枝誠記（1941、1950）を取り上げ、形式的な動詞の研究を概観する。

結論の概略を先に述べると、橋本進吉（同）は意味を添える語として「補助用言」を、山田孝雄（同）と松下大三郎（同）は実質的意義の無さと補充する語の必要性から「形式動詞」を、時枝誠記（同）は特に文法的機能のみを担っている「陳述の動詞」を、それぞれ認定し動詞の形式性に迫っていた。いずれの研究においても「する」と「ある」は、それらの動詞の一つとして取り上げられている。その異同の詳細は、以下に述べるとおりである。

1.1.1. 形式動詞研究の始まりと意義

日本語を概観するに、その日本語ということばの中には様々な「単語」が存在している。もっと厳密に言えば、言語の中身は単語だけではないから、様々な「要素」があると言うべきだろう。つまり、ある事柄を表現・伝達するのに使われる言語要素には様々なレベルのものがああり、「単語」という資格を有する単位と認定でき「品詞」と呼ばれるものもあれば、

そのレベルではなく接辞³等と呼ばれる単位のものもあれば、それらが複合あるいは合成することで別の単位を作ることもある。言うまでもなく、言語の中身、とりわけその単位についての研究は最も基礎的な研究でありながら、言語の普遍性と個別性に関わる問題であり、また、言語の特質であるその分節性を証明する一端であることを考えれば、言語研究において重要な意味を持つことは間違いない。それゆえに、単語の認定は当該言語の「礎」を解明することに直結しているのである。

特に明治期以降、近代言語学が西洋から日本に伝わる段階で、新しい言語学の知識をもって自国のことば「国語」を見つめなおそうという気流が出てきた。しかも、当初行なわれたような「西洋文典」そのままを日本語にあてはめた解釈ではなく、もっと咀嚼し実際の日本語に適合した「日本文典」を目指す国語学者が多く現れた。つまり、単語の認定は、品詞論という形で展開されたのである。その後の長きに渡る品詞研究の歴史は日本語研究の大きな流れとなっている。

その中で、実質的意義の稀薄さあるいは文法的機能の専用さから、特別な地位を与えられてきた単位がある。それが、「する」や「ある」といった単語であり、その所属は研究者によって形容詞に入れられたり、動詞に入れられたり、はては特別な動詞として補助用言などと呼ばれてきた。まさに、所属が一定でないことはこれらの単語の特異性によるものであり、それは、品詞論、単語の文法的特徴を探るという基礎研究の上では非常に重要なことと考える。そこで、「する」と「ある」が、品詞論という大テーマの中でどのように分析されてきたのかを概観し、形式用言や補助用言と言われた概念との関わりについて考察していく。そして、新たに現代日本語の「する」「ある」論として捉えなおし、品詞論から引き出して考察を加えたい。この流れは明治、大正にかけて盛んであったことを踏まえ、その代表的な研究者として、山田孝雄、松下大三郎、橋本進吉という三大国語学者の論を取り上げる。さらに、昭和に入っては時枝誠記を取り上げ同様に考察していく⁴。

1.1.2. 橋本進吉—補助用言

橋本進吉は、学校文法として知られる国語科教育用文法をまとめあげた。その他の業績は取り上げるまでもないが、その後国語学や国語教育に与えた影響は大なるものがある。橋本(1933)は品詞論の中で、「補助用言」という新しい概念を設定している。「補助的である」ことを表すこの用語にまず注目したい。

用言が他の用言に附いて、之に附属的の意味を添へる為に用ひられる事を、用言の補助的用法といひ、その用言が動詞であれば、之を補助動詞、形容詞であれば補助形容詞といひ、又その二を総括して補助用言と申します。(橋本 1935)

³ 接辞は現在最も一般的な呼び方であるが、辞(橋本進吉)、原辞(松下大三郎)、複語尾(山田孝雄)等と呼ばれてきた。

⁴ この他、三上章(1953)(『代動詞「スル」と「アル」』という言い方がされていた)、寺村秀夫(1982,1984)についても見たが、形式動詞についての記述は見られなかった。

さらに、この補助用言を5つに分け解説を行なっている。1つ目は、補助動詞「ある」(形容詞・副詞+ある⁵⁾)とその否定を表す補助形容詞「ない」⁶である。

2つ目は、同じ「ある」だが「である」の「ある」とその否定である「でない」の「ない」である⁷。「である」の「ある」は補助動詞であるが、指定の助動詞「だ」「なり」と同じ意味になると述べており、意味が同じでもその働きの違いから別の品詞にそれぞれを分けている。

3つ目は、尊敬語や謙譲語に現れる「～くださる」「～致す」「～申し上げる」「～なさる」「～申す」「～なる」⁸があげられている。『あなたが御読み下さればいいが』のやうに用ひると、敬譲の意を表はす補助動詞となります」とし、さらに「口語では上の動詞に『お』を附けて、『お誘ひ下さる』『お呼びなさる』『お送り致す』『おとめ申す』のやうにいふのが普通であります」と述べ、敬譲の補助動詞とした。したがって、補助動詞「なる」には「医者になる」「大きくなる」のように用いられる「なる」は含まれていない。

4つ目は、補助動詞「する」である。あげられていた例は「聞きはしたが、見はしない」「行きさへすれば、それでいい」「誰が眠りなどするものですか」など副助詞の後に来る「する」であり、「音がする」「学問をする」のような「する」は含まれていない。

5つ目は、動詞の「～て」につく補助動詞で「いる」「下さる」「いただく」「あげる」「しまふ」「おく」「御覧なさい」「くる」「参る」「行く」「見せる」と補助形容詞「ない」である。「動詞の下に『て』のあるものに附いて、いろいろの意味を添へる補助動詞であります(同)」と説明している。ところが、「てある」の「ある」はなぜか見当たらない。

以上、橋本(1935)は「他の用言に附いて、之に附属的の意味を添へる為に用ひられる事を、用言の補助的用法」と述べているように、一方で独立した動詞や形容詞としての用法を持ちながら、あるとき補助的に使われる用言が「補助用言」であるという考え方である。「ある」も「である」「涼しくありません」のような例のみ、また「する」も「行きさえする」のように「する」の前に副助詞などをさしはさむ例のみを補助動詞としている。つまり、「ある」や「する」が独立して用いられる用法は一般的な動詞であると考えており、この点で、以下の山田論や松下論とは違う立場である。また、補助用言の定義には、実質的な意味の希薄性や文法的な機能性という説明は見られない。

以上を再度、筆者の論点からまとめると、橋本論の「補助動詞」は以下のようになる。

橋本論「補助動詞」(以下の下線は筆者)

定義：「用言が他の用言に附いて、之に附属的の意味を添へる為に用ひられる事を、用言

⁵ 補助動詞「ある」の例は「涼しくありません」「遅うございます」「静かでありません」(下線は引用のまま、以下、注の中の下線は同様)。

⁶ 補助形容詞「ない」の例は「面白くない」=面白くあらず、「丈夫でない」=丈夫にあらず。

⁷ 補助動詞「ある」の例は「私は級長ではありません」「閉会したのは五時でございました」で、補助形容詞「ない」の例は「落伍者はただの三人ではなかった」。

⁸ 敬譲の意を表す補助動詞の例は「近々またお訪ね致しませう」「それは私の方から御届け申上げます」「いつお帰りになりますか」。

の補助的用法」と言い、「その用言が動詞であれば、之を補助動詞」と言い、補助形容詞と合わせて「補助用言」と言う。

範囲：①「～ある」：「形容詞・副詞＋ある」「名詞＋で＋ある」

②「～する」：「動詞連用形＋副助詞＋する」

③敬讓表現に用いられる動詞：「お＋動詞＋ {くださる・致す・申し上げる・なさる・申す・に＋なる}」

④「～て」の後の動詞：「動詞＋て＋ {いる・下さる・いただく・あげる・しまう・おく・御覧なさい・くる・参る・行く・見せる}」

1.1.3. 山田孝雄—形式用言

山田論では、「ある」「する」という口語表現はあまり出てこないが、しかし、文語「あり」「す」については早くから「形式用言」と名づけ論じている。まず、その形式用言の定義と範囲について見ていく。

形式用言とは其の意義甚広汎にしておぼろげに或は属性をあらはすと見ゆるもあれど、そは唯極めて形式的なる普遍的觀念にして之に実質を有する語を添へでは完全なる意義を成就し得ざるものなり。(山田 1908)

形式用言とは陳述の力を有することは勿論なるが、実質の甚しく欠乏してその示す属性の意味甚だ稀薄にして、ただその形式をいふに止まり、その最も抽象的なものはただ存在をいふに止まり、進んでは単に陳述の力のみをあらはすに止まるものなり。(山田 1936)

形式用言を具体的に「動作性形式用言（形式動詞『す』）」と「純粹形式用言『あり』」と「形状性形式用言（形式形容詞『ごとし』）」に分類している。さらに、純粹形式用言には「存在動詞（あり）」、「形容動詞（～かり（くあり）」、「説明動詞（專統覺作用）（なり（にあり）、たり（とあり）、である、だ、です）」、「動作存在動詞（せり、をり、はべり、いまぞかり）」がある。また、「形式用言といへども微弱ながらも或属性觀念を有するものなきにあらず」と述べ、「純粹に形式的なるもの」を純粹形式用言とし、「幾分か偏する所あるもの」を形状性形式用言と動作性形式用言とした。純粹に形式的であることが純粹形式用言だとすれば、事物の存在を表す用法はこれに該当しないと思われるが、山田は「昔小野の篁といふ人ありけり」の例をあげ、純粹形式用言に入れている。一方、純粹形式用言の中で「專統覺作用をあらはすに用いらるる」ものが「説明動詞」だと述べている。しかしながら、「てある」「ている」のような例は見られず、橋本（1935）における補助用言とは異なることがわかる。

加えて、意味の実質が乏しい点を補うものについて、以下のように述べる。

直接に述語の地位に立てるは殆稀にして大抵は他の語を伴ひて之をして其の觀念部を

抛当せしめ自家は其の決定要素たる統一作用をのみあらはすこと甚多し。かかる時に其の観念部を抛当せる語を賓語と称す（山田 1908）

また、「あり」を「存在詞」と名づけ一品詞を立てる。その理由について、「古来その所属の不定なる『あり』といふ用言はこれ実に形容詞にも動詞にも属すべきものにあらざして二者に共通して兼ねる点もあり、しかもその実質極めて広漠としてただ存在を示すのみのものなるが、その用い方によりてはただ断言の用をなすにすぎざるものあり。（中略）若、この『あり』をのみ一の品類と立つる時は存在詞と名づくべきものなり。（山田 1922）」と説明している。さらに、口語「ある」については、「口語にては（中略）存在と陳述との用法はなほ明白に存す。『ここに梅の樹がある』の『ある』は存在を示し、『これは梅の樹である』の『ある』は陳述をあらはすなり。口語にて説明存在詞と称すべきものは『である』『だ』『です』の三語なり（山田 1922）」とさまざまな「ある」を存在詞に含めている。

以上をまとめると、山田は実質的な意義が稀薄で陳述の力を表すのを専らにするような用言を形式用言とし、「ごとし」「あり」「す」の3つを挙げた。さらに、形式用言の中心は「あり」であるとして、特に「存在詞」という名称をつけている。また、「あり」から派生される語もすべて形式用言に入るものとし、特に口語については「である」「だ」「です」も含めた。しかし、「てある」「とある」は取りあげていない。

また、「す」の造語力についても触れ、名詞、漢語、外国語を動詞に変える力があることを指摘している。体言につく例として、「罪す。くみす（与）。心地す。音す。心す。」を挙げているが、現代語で考えると「する」に置きかえて使えるもの「与する」「心する」と、使えないもの「*罪する」、格助詞を挟んで使うもの「心地がする」「音がする」とがある。また、形容詞と共に使う例（『衣冠を軽くして馬車をのみ重くす』）、副詞と結合する例（副詞『さ』『かく』『と』『しか』+『する』→とすれば、かくすれば、さしたる⁹）を挙げている。

このように、山田における形式用言はその定義のとおり、広汎な用例を指摘し記述していることが読み取れる。現代語の「ある」「する」の用法の広さにそれは引き継がれていると言ってい。山田で出てこなかった例としては、変化を表す「息子を医者にする」、仮定・措定を表す「AをBとする」、状態を表す「一枚10円する」、時間の経過を表す「30分する」などであるが、当時の口語にないものもあっただろうと思われるためその評価が揺らぐことはない。むしろこのような例も含め、再度考察を加え、その広がりを見ていく必要がある。山田はこれら形式用言について「広汎な用法」と何度も述べている。

山田の文法論は口語についての記述がほとんど見られないため、現代語の「ある」「する」との異同をそのまま単純に述べるわけにはいかないが、その意味論的な観点、統語論的な観点からの特徴については学ぶことが多い。

⁹ この他の例は以下。体言+す「こえはする。まどかうしあげなどして」。動詞+す「ふりする。書きする。死にする。うんずる」。漢語・外来語+す「勉強す。論ず。特別化(スペシャライズ)する。祝(ブレス)す。命ずる。疎んずる」。形容詞語幹+み+す「無みす (蔑)。おもみす (重んず)。よみす (嘉)。うるはしみす」。

なお、機能動詞研究¹⁰と近い発想が見られる。「人知れぬ思ひを常にするが(『思ひをする』は『思ふ』に意同じ)(山田 1908)。「～をする」の語結合が1つの動詞に対応するものであることを述べている。ただし、この一箇所のみ言及であり、また、基本的には格助詞を差し挟んだ連語としての用法はほとんど出現しないのが山田論でもある。これをもって、即、機能動詞的なあるいは軽動詞的な発想を持っていたとはいいがたい。しかし、実質的意味の希薄さと述語としての機能(陳述)を持つものとしての指摘が明確になされている。

以上を再度、筆者の論点からまとめると、山田論の「形式用言」は以下のようになる。

山田論「形式用言」(以下の下線は筆者)

定義:「其の意義甚広汎にしておぼろげに或は属性をあらはすと見ゆるもあれど、そは唯極めて形式的なる普遍的觀念にして之に実質を有する語を添へては完全なる意義を成就し得ざるもの」「実質の甚しく欠乏してその示す属性の意味甚だ稀薄にして、ただその形式をいふに止まり、その最も抽象的なものはただ存在をいふに止まり、進んでは単に陳述の力のみをあらはすに止まるもの」

範囲:①「ある」:「名詞+が+ある」「名詞+で+ある」

②「する」:「{体言・形容詞・動詞連用形・副詞・形容詞語幹み・漢語・外来語}+す」「体言+副助詞+す」「名詞+が+する」「名詞+を+する」

③「だ・です」:専統覚作用

1.1.4. 松下大三郎—形式動詞

松下(1928)は動詞を4分類しているが、その内の1つが「形式動詞」である。その定義は「形式動詞は実質的意義が無く唯形式的意義だけを持っている動詞である」とする。そして、例として「旅行す 運動す 賛成致す 御喜び申す 教へて遣る 助けて貰ふ 泣いて居る 載せて置く の____の類」をあげる。さらに、山田(1908)と同様「觀念部を抛当せる語(賓語)」として、松下(同)は「補充語」と名づけ「形式動詞は実質的意義を控除して形式的意義だけを表すものであるから、他語を以て其の実質的意義を補充する必要がある。例の____の上に在る¹¹「旅行」「運動」「教へて」などの語は形式動詞の補充語である」とした。山田論と相似している点は、実質的意義が無いこと、他語によってそれを補充することの2点を形式性としている点である。しかし、文を統率する力(陳述)については言及しておらず、したがって陳述の力のみを示す単語の存在については述べていない。また、形式性の議論は動詞までに限り、用言までは広げていない。このため、両者の形式動詞の範疇は大きく異なるものとなっている。範疇としては、橋本(1935)のいわゆる補助動詞を含み、さらに独自の範囲を設定し、三者の中で最も広汎なものとなっている。松下(同)は形式動詞を3つに分類し以下のようにする。

¹⁰ ドイツ言語学で行なわれた Functional Verb の概念で、「名詞+動詞」の語結合が一つの動詞に相当し、その動詞が文法的機能を専らにすることから名づけられたもの。日本語における初期研究には岩崎英二郎(1974)がある。

¹¹ 原典では縦書きのため「下線の上」とあるが、横書きの本稿であれば「下線の左」とすべきところである。以下、松下のところの「上の語」「下の語」も同様である。

助動詞 (Auxiliary verb)・・・上の語に補充される

接頭形式動詞・・・・・・・・下の語に補充される

寄生形式動詞・・・・・・・・直接の関係なき語に補充される 松下 (1928)

まず、助動詞から見ていく。助動詞の定義は、「他語を統率し之に由って自己に欠けた実質的意義を補充する動詞」あるいは、他語を「補充語として自己の形式的意義を実質化する」ものとある。その助動詞の1つ目が「無活用動詞を受ける助動詞」であり、名詞に直接、動詞が後接するような動詞である。「す、為さる、致す、遊ばす、申す、申上ぐ、下さる、まします」「あり、なる、出来る」「いふ、申す」が挙げられる¹²。ここに「あり」が見られるが、山田の「あり」とは違い、無活用動詞につく「あり」のため「人あり」のような例はここに含まない。そして、助動詞の2つ目は、「て」を受ける「助動詞」で、この中には「である」の「ある (ございます)」、「て云ふ」の「云ふ (おっしゃる、申す、申上げる)」も見られる。さらに助動詞の3つ目は「主客語を受ける助動詞」で、「す」「あり」「なる」「いふ」「致す」「候ふ」「出来る」「申す」が挙げられる¹³。

形式動詞の1つである「助動詞」だけでも多くのものがここに含まれている。例えば、「なる」は山田では形式用言に入っていないが、これを松下 (1928) で説明すると、「長くなる」の「なる」は「長く」を統率してそれによって自己に欠けた実質的意義を補充している、「長く」を補充語として自己の形式的意義を実質化する、という説明になる。確かに「なる」だけでは「どうなるのか」、「言う」だけでは「何と言う」のかがわからない。そのために補充語によって自己の欠けた意義を満たし実質化することになる。「する」は動作、「なる」は変化、「ある」は存在、とそれぞれ重要な意義を担った、しかしながら広漠たる動詞ということになる。

次に、「接頭形式動詞」だが、これは「他語の上に従属して他語に形式的意義を附加するもの」とある。具体的には「得こそ言はね 打って変わった態度 相も変わらず」のようなもので数は少ない。

最後の「寄生形式動詞」は「自己と直接の関係の無い語に寄生して実質化せられるもの」とある。いわゆる接続詞がここに入っており、例へば「雷が盛に鳴り出した。すると忽ち電燈が消えた。」が挙げられている¹⁴。接続詞まで形式動詞の中に含めている。これらを動詞

¹² 具体例は以下。(研究、どたんばたん、行きつ戻りつ、行ったり戻ったり、御教え) す、致す、なさる、遊ばす、出来る。(そよそよ、五円、一年) す、致す。(わんわん、にゃあにゃあ、がたんびしゃん) いふ、申す。(行幸、還御) 為さる、遊ばす、あり、なる、まします、出来る。(御賛成、御招き) 致す、為さる、遊ばす、申す、申上ぐ、下さる、有り、なる、出来る。

¹³ 具体例は以下。主語を受ける(鐘の音す、虫の声す、善い句がする、いやな心持がする、徳望有り、斯かる事も候ふ、勉強が出来る、我慢がならない)。名詞を受ける(勉強をす、入学を致す)。客語を受ける(日曜にあらず、小生に候ふ、大人になる、わらはに侍り、官吏となる、官吏と(も)ある者、将として軍に赴く、然りといふ、そよそよとす、遠くもあらず、近くなる、長くなる、静にはあらず、確になる、親切にする)。

¹⁴ 具体例は以下。「今日は風は無い。{だけれども、ですけれども、だが、ですが、でございますけれども、でございますが} 寒い」「どうも不景気で困りますよ。かと云って商売変へも出来ませんしなあ。」「日曜は休みでせうなあ。」「でせうなあ。」「幹事などにされては迷惑だよ。」「でもありますま

と見るか、接続詞と見るか。動詞の統語論上の特徴は述語に立つことだが、これらは述語に立ってはいない。そう考えると動詞の枠から出てしまう。接続詞は他の語や他の品詞からの転用によって成り立つが、現在「すると」はこの塊で一語として、接続して展開を示すという意義が確定していると解釈できる。そういういみではもはや一語であると認定していいと考える。

以上、松下(1928)の形式動詞は補助動詞から接続詞まで、果ては複合助詞「として」や実質動詞とされることの一般的な「なる」「言う」までが含まれている。しかし、意義がそれ自体では明確でなく、それを補う補充語によって意義が明らかにされるものが形式動詞であることを考えれば、これらが形式動詞の範囲に入ってくることはおかしいことではない。広いと言いながら、一方で、山田で入っていた「だ、です」が入っていない。「である」の「ある」が入るなら、「だ、です」も入れられるべきではないだろうか。例えば「今日が25日です」を例にして考えると、「です」は他語である「25日」を統率し、これによって自己「です」に欠けた実質的意義を補充しているとも言える。つまり、「今日が、です」では実質的な意味がわからないので、それを「25日」で補充する。しかし、この文は「です」がなくとも成立する。「今日が25日。」で文として統率したものとなるならば、「です」の存在は元々このような名詞が述語に立つ文においては補充的なものとなる。加えて言うならば、「映画が面白い(です)。」「教室が賑やか(です)。」の形容詞、形容動詞が述語の文においても「です」はなくてもいい。ただ、逆に「です」があったものが省略されたと考えれば、その限りではない。

松下(1928)は「だ、です」を「原辞」と考えていた。つまり、「単独性を欠くものであって自己だけの力で一概念を表はすものではない」ため、そもそも品詞という単語認定を受けないものとして排除している。山田(1922)もいわゆる助動詞を「複語尾」と名づけ、詞の中に入れなかったが、形式用言の説明では口語の「だ、です」をそこに含んでしまっている。以下の例を考えてみたい¹⁵。

- (1) A: 鈴木さんがしたんだよ。
B: 何を?
(2) A: 行ったら、あつたんだよね。
B: 何が?
(3) A: 鈴木さんとうとうなつたね。
B: 何に?
(4) A: *鈴木さんて、だよ。
B: 何?
(5) A: 鈴木さんも行くんでしょ。
B: だね。

「する」と「ある」は、上例のように単独であっても非文との扱いは受けない。ところが、

い。」「明日は休みですよ。」「ですが僕は休めない。」

¹⁵ 例文中の記号は以下の意味で使用する。*: 非文、?: 不自然、#: 文として成立するが元の文とは意味が異なる。

「だ」は初めての発言では単独で文の中に出現することができず(4)のように非文となる。しかし、(5)「だね」は前の文を補充部分とすれば単独の出現が可能となる。これは話し言葉に限られる用法である。形式性だけを取り上げていくなれば、いわゆる助詞も助動詞もすべて形式的な単位に入ることになる。ただし、動詞という範疇にそれを限定していくなれば、松下(1928)のように排除すべきだろう。

以上を再度、筆者の論点からまとめると、松下論の「形式動詞」は以下のようになる。

松下論「形式動詞」(以下の下線は筆者)

定義：「実質的意義が無く唯形式的意義だけを持っている動詞」「他語を以て其の実質的意義を補充する必要がある。」

範囲：①「ある」：「名詞＋あり」「名詞で＋ある」「動詞つつ＋ある」「動詞て＋ある」「名詞と(も)＋ある名詞」

②「する」：「擬態語＋す」「動詞つ動詞つ＋す」「名詞＋す」「擬態語と＋す」「名詞が＋する」「名詞を＋す」「名詞と＋して」「形容動詞＋する」

③「いう」：「擬音語＋いう」「句と＋いう」

④「なる」：「名詞に・と＋なる」「形容詞＋なる」「形容動詞＋なる」

⑤その他：いわゆる接続詞、いわゆる補助動詞(てくる、てみる、てよこす、ている、てくれる、てもらう、てしまう、ていけない、てもいい、てかまわない)、～ができる、といけない

1.1.5. 時枝誠記—形式動詞

時枝(1941、1950)は、その言語単位の形式性あるいは機能性について言及しているが、それが形式動詞に分類されるか否かは、それほど重要なことと思っていない。つまり、「形式用言を特に実質用言と区別する必要を認めないことは、形式名詞の場合と同じである(時枝1950)」と述べ、「形式用言といふものを特立せず、動詞の中で、概念内容の極めて希薄にして、従ってそれには常に何等かの補足する語を必要とするやうな動詞を形式動詞として述べようと思ふ(同)」と言う。したがって、その機能性つまり「陳述のみを表すに至る」という山田論の見解を継ぎつつ、それがどの具体的事象にあてはまるものを論じている。これを踏まえたうえで、形式動詞という用語が出てくるところを見ていく。

時枝(1950)の形式動詞は具体的には「ている」「する」「なる」「なす」「いたす」「てあげる」「てもらう」「てやる」「てくれる」「給ふ」「申す」「あそばす」を挙げる。いずれも、補足する語「補語」が必要であることがその特徴となる。

特に、時枝は山田論を紹介しつつ論を進めているが、山田論が重要視した「ある」については、以下のように述べる。「『ある』は陳述だけを表現する助動詞として廣く用いられているが、形式動詞としては、あまり用いられず、むしろ『いる』を多く用いている。(同)」つまり、時枝(同)の形式動詞はその意義を補うものが必要な動詞であって、「である」の「ある」のように意義の有無を問題にしない、実質的意義がなくても補う必要がなく、ただ役割として陳述を為すものは、別物(指定の助動詞)だと考えている。一方、山田論は陳述

を専らにする「あり」は形式用言の究極の形と考えている。また、一方で、松下（1928）はこれを「て（で）」を受ける助動詞として、補助する語がないのではなく、「～で」がそれにあたると考え、形式動詞とした。

時枝（1941）では、形式動詞という名称は出てこないが、次のような言及がある。

ここに梅の木がある。これは梅の木である。「が」に接続する「ある」が存在の概念を表し、「で」に接続する「ある」が判断的陳述を表すことは明かな事実である。「あり」を意味内容の具体性といふ点で他の動詞より区別する以上に重要なことは、「あり」に右述べた様な概念的表現と、陳述的表現との二の相違があることである。時枝（1941）

以上のように、時枝は存在の用法も陳述の用法も同じ「あり」という動詞に見られる二局面であるという考えを持ってはいるが、後者「である」の「ある」は助動詞に、「てある」の「ある」は「～て」という連用修飾語を受ける形式動詞に最終的には分類している。また、「だ・です」については「存在の概念を表すことなく、『何々だ』といふ陳述を表すものであることは明かである」と述べ、陳述を専らにする形式的な存在であるとの指摘をしている。

次に「する」だが、これを形式動詞とした上で、陳述だけを表す用法について言及している。

「する」の表現する内容が希薄であるために、「あり」が陳述を表はす辞に転換して行ったと同様な経路をとって、殆ど陳述を表はすに近くなっている場合もある。（時枝 1950）

「流れは（も、など）しない。」「月明かには（も、など）ありや。」「山高くは（も、など）あるか。」他の語の介在によって、新しく現れて来る「す」「あり」は、殆ど用言の属性概念を抽象して、陳述の表現に代用されたものと考えることが出来るのである。

「あり」が陳述を表すことは上に述べたが、「す」も亦同様な傾向がある。（時枝 1941）

「行きはしない」「高くはあった」のような「する」「ある」は、陳述だけを表すに過ぎず、このことが特殊であることを強調している。したがって、時枝の着眼点は自身の「詞」と「辞」の分類であり、その際に有効だったのが山田における「陳述」論だったわけで、さらにそれが概念か陳述かという話に結びつき、その延長線上に形式動詞の話が展開されたものと言える。そのため、陳述の観点からは、「だ」「ある」「する」すべてがその論戦上に登ってくるが、分類の観点からは別の品詞である、という結論になった。

時枝から引き出されるのは、山田の「陳述専門語」としての特徴であり、それが実質的意味の有無の話を超えたところにある重要な特質だという指摘である。機能性という点が焦点化されたと言えよう。

以上を再度、筆者の論点からまとめると、時枝論の「形式動詞」は以下のようになる。

時枝論「形式動詞」(以下の下線は筆者)

定義:「概念内容の極めて希薄にして、従ってそれには常に何等かの補足する語を必要とするやうな動詞」

範囲: ①「する」:「擬態語+する」「形容詞+する」「動詞+副助詞+する」「句と+する」

②「なる」:「形容詞+なる」「名詞に+なる」「お+動詞+に+なる」

「陳述のみを表す表現」①「ある」:「名詞+で+ある」「形容詞+副助詞(は、も、など)+ある」②「する」:「名詞+に+しては」「動詞+副助詞(は、も、など)+する」③「だ・です」

1.1.6. 「なる」と「言う」の形式性

ここで一考すべきは、「なる」と「言う」を形式動詞に入れていいかどうかの判定である。「ある」「する」についてはこれまで形式動詞から外れることはなかったが、「なる」と「言う」については判断が一樣ではない。動詞の機能性を考察するのが本研究であるため、ここで形式性とは何かを考えるために、「なる」と「言う」の形式性について考察しておく。

(6) 手が冷たくなる。

(7) 部屋がきれいになる。

(8) 息子が社会人になる。

(9) 血液がドロドロになる。

(10) 速度が急にゆっくりになった。

動詞「なる」は形容詞、形容動詞、名詞、擬態語、副詞などと共に使われ、連用形または格助詞ニを伴って、動詞と接続する。「なる」にとっての必須成分は、主体のガ格名詞と変化結果を表すニ格名詞あるいは形容詞・形容動詞の連用形、副詞などである。また、「なる」という動詞の意味は「変化」であり、普遍的な概念であるが実質的意味は広漠としている。

(11) * 彼がなる。

(11) は必須成分のニ格名詞句がないというだけでなく、一文全体の情報量が絶対的に不足している。また統語的に動詞の前に何もない構造を許さず非文となる。

(12) 彼が食べる。

(12) と比べれば違いは明らかで、こちらにも必須成分たるヲ格名詞がなく情報量の不足はあるが、非文とはならない。動詞の求める格と名詞が無いという問題ではなく、その必須成分の必須度が異なるのである。つまり、「なる」は「食べる」よりも具体性や実質性に欠ける意味を持ち、共起する要素無しには文として成立しにくい特徴を持っている。こう考えれば意味論的にまた統語論的にも「なる」は形式動詞である。

(13) 彼が弟に明日は来ないと言った。

(14) 彼が弟に「林君はおもしろいねえ」と言う。

(15) 彼が弟に言った。

「言う」は、必須成分として主体のガ格名詞と対象のニ格名詞、その内容を表すト格名詞句・節をとる。「言う」の具体的内容は引用として(14)のように「」でくくっても、(13)のように間接的なものとして特に引用記号がなくても構わない。(15)は(12)と同様に情報

量は不足しているが非文とはならない。確かに、意味的に具体的な内容（発言内容）が動詞一語の中に示されないという点は、「食べる」などの動詞に比べると意味が稀薄であるとは言える。しかし、統語論的には違いはなく、形式性の意味的な違いはあるものの、「言う」は意味論的にも統語論的にも実質動詞であると言っていい。もし「言う」を形式動詞とするならば、「伝える」「思う」「話す」なども同様の理由で形式動詞に入れなくてはならないことになる。

さらに、統語論的な分析をもう一つ行なう。動詞に実質的な意味が不十分なために、その意味を補充する語が必要になるのが形式動詞だが、その補充する語の位置は、動詞から離れてしまっただけではその意味の補充関係が曖昧になってしまうと考えられる。そのため、統語論的に形式動詞と補充する語とは一体化して実質の意味を表すことになるはずである。そこで、統語論的に不可分かどうかを語順の移動によって見てみる。以下、統語的に操作した後の例文を示す。

- (6) ' *冷たく手がなる。
- (7) ' *きれいに部屋がなる。
- (8) ' 社会人に息子がなる。
- (9) ' ?ドロドロに血液がなる。
- (10) ' *ゆっくりに速度が急になった。

補充する語と動詞を分離してみると非文になるものが多い。「夕飯を父が食べた」という入れ替えとは異なっているという点で、この点でも「なる」は形式動詞の特徴を持つと言える。

- (13) ' 明日は来ないと彼が弟に言った。
- (14) ' 弟に「林君はおもしろいねえ」と彼が言った。

「言う」の方は以上の通り、ト格のついた名詞節と動詞を分離してみても非文にはならない。この点においても「言う」は形式動詞ではない。

さらに、「ある」「する」はその補充する語の意味内容が具体的なものから抽象的なものまで、あるいは、状態性のものから動作性のものまで、非常に多様な語が見られる。それは、まさに動詞そのものの形式性による許容度の大きさということでもある。簡単に「なる」の補充する語を確認してみたい。すでに用例に挙げたとおり、状態を表す語が多いが、具体的な事物もあり、品詞の面でも多様である。物、人、出来事、状態、動作¹⁶がある。

以上、「なる」は形式動詞として認めていいと考える。ただし、「する」「ある」に比べると山田が述べたような陳述の力だけを表すような用法はなく、動詞としての用法に限られている。つまり、「変化」という動詞の意味を保持しているのである。しかし、補助動詞の用法は持つため（お書きになる）、やはり形式動詞に入るような特徴を持っていると言っていいだろう。

1.1.7. 「である」「だ」「です」の形式性

次にもう一つ、「である」「だ」「です」の形式性について考察する。

¹⁶ 例えば「聞き取りは即、捜査になる」「スクワットは筋肉を鍛えるいい練習になる」「他人の日記を読むことは盗みになる」などの「捜査」「練習」「盗み」などの例である。

(16) これが梅 {である／だ／です}。

(17) これがきれい {である／だ／です}。

(18) これが白い {*である／*だ／です}。

(17) 形容動詞の場合は「きれいだ」で一語と考えるのが一般的で、「きれいである」は連用形に「ある」が接続したもの、「きれいです」は終止形「きれいだ」の「だ」の丁寧形「です」が入れ替わったものということになる。ただ、「きれいだ」が一語であるのに、「です」と入れ替われるということ自体は矛盾を含んでいる。一方、(16) 形容詞の場合は「白い」が終止形であるため、「である」や「だ」が後接することはなく、丁寧形「です」のみ可能となる。したがって、「です」だけはこの中でどの述語にも立つ形式で、他語を助けて丁寧であることを表すものとしていわゆる助動詞に入れられるのも妥当である。「である」「だ」は「*これがである」「*これがだ」では文が成立しないという点では、形式動詞という概念にあてはまる。しかし、助動詞もまた「*これがられる」「*これをようだ」では文が成立しないという点では同様である。

(19) これが食べられる。

(20) これを食べるようだ。

(21) これが梅 {である／だ}。

助動詞「られる」は、それ無しには動詞が連用形で終わるので文が成立しない。助動詞「ようだ」はそれ無しでも文は成立するが意味は全く異なるものとなる。また「である」「だ」は、それ無しでも文が成立しなくはなく、かつ意味は同じである。以上を比べると助動詞とされる三者であるが、「だ」が異なる性質のものであることがわかる。つまり、「だ」は文を完結させる機能のみを担った非常に形式的な要素である。また、「である」の「ある」も同様である。山田論に見られたように、元々「とあり」が「たり」となり、「にあり」が「なり」となり、さらに「だ」という形に変化を遂げたことを考えると、そこに見られる「あり」の陳述の力のみを示す特異性といったものが際立つのであり、それゆえに「存在詞」という一品詞を立てたのであった。ただ、これらが動詞であるか否かを考えると、「だ」「です」が単独で使われることがないことから動詞とは言い難い。「である」は「ある」という形式が動詞として存在するため、形式動詞「ある」の極めて形式性の高いものと判断することができる。そのいみでは、「てある」「ことがある」も同様である。

したがって、「です」「だ」も「である」の「ある」も、実質的な意味は無く、ただ文を成り立たせるためだけに存在する文法機能専用の形式だと言える。その違いは、動詞の用法を持つか否かという点で、前者 2 つが助動詞、後者が形式動詞となる。

以上、筆者の立場としては、形式動詞として認めるべきは「ある」「する」「なる」の 3 つの動詞であり、「だ」「です」は形式性専用の単位として特別に考えたい。

1.1.8. 形式性の比較

以上、形式性を示す動詞についてこれまでの研究を振り返りながら、研究者ごとの視点の異同、考察結果の分析、現代日本語における形式性を示す動詞とは何かについて論じてきた。

それらの違いをまとめるならば、まず、大きく 2 つに分けられるのは、橋本 (1933) に

における補助動詞という考え方と、山田（1908）に始まる形式動詞という考え方である。橋本（1935）は「用言が他の用言に附いて、之に附属的の意味を添へる為に用ひられる事を、用言の補助的用法」とし補助用言と呼んだ。山田（1936）は「形式用言とは陳述の力を有することは勿論なるが、実質の甚しく欠乏してその示す属性の意味甚だ稀薄にして、ただその形式をいふに止まり、その最も抽象的なものはただ存在をいふに止まり、進んでは単に陳述の力のみをあらはすに止まるものなり」とし、意味の稀薄さと陳述の力、さらに補充する語「賓語」の存在をその特徴として挙げる。松下（1928）は、「形式動詞は実質的意義が無く唯形式的意義だけを持っている動詞」とし、実質的意味の無さと「補充語」をその特徴として述べた。さらに時枝（1950）は、「概念内容の極めて希薄にして、従ってそれには常に何等かの補足する語を必要とするやうな動詞」とし、概念内容の稀薄さと「補語」をその特徴として述べ、加えて陳述のみとなった用法を強調する。まとめてみると、山田以降はその定義はほとんど変わりがなく、意味内容が稀薄であること、文法的機能だけが突出して現れること、そして、その意味的稀薄さを補う語が存在することが述べられている。定義はほぼ同じと言っているものの、その範囲がかなり異なっていることは既に述べた。

橋本（1935）の補助用言では単独で使われる動詞はその範囲から排除しているが、山田以降の形式用言ではそれらもその範囲に入ってくる。形式動詞は、山田では「する」「ある」「だ・です」、松下では「する」「ある」「なる」「言う」、時枝では「する」「なる」、そして陳述だけを示す形式性の動詞として「ある」が取り上げられる。また、「あり」からできた「である」「だ」「です」は、山田では形式用言に入れ、松下と時枝ではその形式性は認めつつも、動詞ではないことからそれぞれ「原辞」と「助動詞」に入れた。

以上、「する」と「ある」は品詞論の中で特殊な存在として認識され、また、それらに意味を補充する語が隣接することも指摘されてきた。加えて、それぞれがよりその形式性を高めた用法が見られることも触れられている。

1.1.9. 本研究との関わりと問題点

これらの先行研究は明治から昭和初期にかけて、日本語における語の認定とその分類という品詞論の観点からいずれも研究されている。したがって、その語が基本的に持っている文法的な性質を検討し分類することを主眼にした、「品詞」という枠組みを足場にする研究である。形式動詞とは、日本語全体を下位分類化していく作業の中で示された 1 つの分類であり、本研究の目指す「動詞の機能性」を中心に置いた研究ではない。そのため、「する」と「ある」の意味・用法という一点に絞ってもまだ不十分である。また、古語が中心で、現代語の用法が記述されていないという問題も残されている。逆に品詞論の立場であるなら、「すると」のような既に 1 つの語として用いられるものは接続詞に、「てある」のような「ある」は補助動詞に分類するような、品詞の枠組みを単語に当てはめていくという方向性が妥当ではないかと考えるが、形式動詞研究では「する」と「ある」を品詞の枠組みのどれか 1 つに入れることを目指しながら、結果的に両者がその枠に入りきらないことを指摘することになったと考えられるのである。

次に、形式動詞研究は意味論的な観点からの説明が多く、統語論的な観点からの説明が不

十分である。例えば、動詞の形式性を補充する語の存在は指摘されているが、その語と動詞との統語的な関係性については述べられていない。また、意味を補充する語以外の語との関わりや文全体の表す意味や機能などについては考察されていないのである。あるいは、形式性とは何かについては時枝（1950）に至って「陳述」のみを示す用法の指摘が強調されたが、その他の用法と比較した形式性の段階や程度差についての指摘はない。本研究の最終的な目標の1つは、動詞の機能の軽重や強弱を見ることでもあるため、結果として、補助動詞や助動詞、接続詞、副詞まで含まれる形式動詞研究の枠は広すぎて使いづらい。加えて、品詞論という単語分類を大目標に掲げているために仕方ないとも言えるが、例えば、山田（1908）がこれらの用法は「広汎」に及ぶと述べていることが、実際にどの程度の広がりを持つかについては記述されていない。とりわけ、「ある」や「する」と共起する名詞の意味や性質が動詞に強い影響を与えるはずだが、共起する名詞については全く触れていないのである。

したがって、動詞の多様な機能について「する」と「ある」を中心に考察するという本研究の立場としては、形式動詞の概念をそのまま用いることはできないが、動詞の形式性の広がりや指摘されている点や意味の希薄さと陳述機能という形式性の基本的定義は出発点として重要だと考える。

以下、本研究の関わりから問題となる点をまとめた。

問題点1. 品詞論の枠組みであるため、動詞の機能についての論述が中心ではない。

2. 動詞の機能が意味の希薄さと陳述という2点から述べられるだけで、補充する語との関係性が述べられていない。
3. 動詞の機能の程度性や段階性について述べられていない。
4. 定義が広いために、動詞の枠を超えている。
5. 「する」と「ある」の考察が古語が中心で、現代語の「する」と「ある」の意味・用法の分析がなされていない。
6. 各研究者で形式動詞の範疇の異なりが大きい（つまり、定義や概念が曖昧、あるいは広すぎる）。

第2節 機能動詞研究

本節では、動詞の機能性について考察した研究として「機能動詞」研究を取り上げ、その内容の吟味と形式動詞研究との比較を行う。そして、本研究の立場からの問題提起を行いたい。

1.2.1. 岩崎英二郎（1974）「機能動詞 Funktionsverb」

岩崎英二郎（1974）はドイツ語学で用いられていた「Funktionsverb」を「機能動詞」として導入し、日本語にもそのような動詞が存在することを指摘した論文である。そして、機能動詞を以下のように定義づけた。

意味内容のきわめて希薄な、いわば純粋な文法機能そのもののはたらきだけしかもたぬもの（岩崎 1974）

その機能動詞に不可欠な要素として「行為名詞」を挙げ、「元の動詞の意味内容に対応する名詞」とする。次のようなドイツ語の例を挙げて説明している。

（ア）Er hifft seinem Freund.

（イ）Er leistet seinem Freund Hilfe.

（ア）と（イ）は同義であり、（ア）の「hifft」という動詞一語は（イ）の「leistet Hilfe」に対応する。つまり、（イ）は「機能動詞＋行為名詞」の構造を成す。このような機能動詞を含む文を「名詞文体」¹⁷と呼んだ。そして、日本語の機能動詞として「体言＋〔を〕する」を指摘したのである¹⁸。

ここに、形式動詞とは別に機能動詞という概念が導入された。形式動詞と共通する点は動詞の定義に見られる、意味の希薄さと文法機能専用という2点である。そして、形式動詞と異なる点は、その対象となる動詞の範囲が狭い（『する』のみ）ということと、機能動詞には行為名詞が必ず共起し、そして元の動詞が存在するとした点である。つまり、機能動詞は「行為名詞＋機能動詞」という連語に限定され、かつ、この連語が動詞一語相当であることという特徴が付されている。また、実質的な意味を補充する語が「行為名詞」であるという限定を受けた点である。

1.2.2. 村木新次郎（1980、1991）

1.2.2.1. 機能動詞の定義と範囲

村木新次郎（1980）は、岩崎（1974）によって導入された機能動詞という概念をより徹底させ、日本語の動詞に応用させた。よって、岩崎（1974）で機能動詞とされたのが「する」だけであったのに対し、村木（1980）では、その定義から考えられるあらゆる動詞を含むに至った。そして、村木（1991）で日本語の動詞全体についてその統語的・形態的特徴を考察し、機能動詞を記述したのである。ここにおいて、機能動詞は形式動詞とは異なる形で、その広がり指摘されることとなる。

例えば、「誘いをかける」、「連絡をとる」、「考慮にいれる」、「においがする」などの連語について、この連語の意味は、『さそい』『連絡』『考慮』『におい』などの広い意味での動

¹⁷ 岩崎（1974）では「名詞文体（Nominalstil）」を「名詞的な要素（名詞と形容詞、いわゆる Nomen）の支配的な文体」としている。つまり、機能動詞が述語の文を指す。

¹⁸ ただし、ドイツ語研究の機能動詞と岩崎（1974）がそれだと指摘した「する」を比較すると、多少のずれが生じている。ドイツ語研究では機能動詞には対応する元の動詞が存在するのに対し、日本語には元の動詞が存在しない場合もある。例えば、岩崎（1974）が例として挙げた「引っ越しをする」は「引っ越す」という元の動詞が考えられるが、「あいさつをする」にはその名詞部分に対応するような元の動詞というものを考えることは難しい。また、同じく例に挙げた「通用する」は既にそれ自体で一つの動詞であるから、元の動詞の意味内容に対応する名詞（行為名詞）をとというものを考えるにくい。この点がドイツ語文法での機能動詞の定義から外れるところである。この他にも、「お届けする」「お考えになる」「おさそいいただく」は〈体言＋機能動詞〉型の敬語表現とされ、また、「がんばん〔と〕する」「すっきり〔と〕する」は指摘するに留めた。

作性（行為・過程・状態・現象）の名詞によって表現され、これらの名詞とくみあわさっている『かける』『とる』『いれる』『する』のような動詞は、実質的な意味が希薄で、述語形式をつくるための文法的な機能をはたしていると考えられる。（村木 1991:204）」と説明した。そして、機能動詞の定義を次のように書いている。

実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞（村木 1991:203)

形式動詞研究では、「かける」「とる」「いれる」のような動詞は実質的な意味を持つ動詞であるために形式動詞に入れられなかったが、機能動詞研究ではこれらの動詞がその範疇に入ってくる。そして、岩崎（1974）との違いは、岩崎（同）においては「名詞＋動詞」が動詞一語に相当、変換できることが必須条件だったが、村木（1991）では、「機能動詞結合が一つに一つの動詞と交替するものではない。それは特徴の一つにすぎない。」とし、その条件を取り払った点である。そのため、「誘いをかける」＝「誘う」、「連絡をとる」＝「連絡する」という動詞一語に相当するという標準的な例だけでなく、「注目をあつめる」≠「注目する」のように 1 つの動詞にまとめられないものもその範疇に入ることとなった。言わば、機能動詞は形式動詞とは異なり、「実質動詞」の意味の希薄さまでを入れているのである。

1.2.2.2. 機能動詞の典型例「する」

そして、「日本語のもっとも基本的な動詞の 1 つである『する』は、このような機能動詞の典型例」だと述べ、「名詞が伴う格のうちいずれの格形式ともむすびつく」とその広さを指摘し、以下のような「する」例を「機能動詞結合」としている。

「機能動詞結合（村木 1991）」

- (a) 主格の名詞＋機能動詞（だれかが唾液を呑む音がした。{稲光、におい、声、味、感じ、気疲れ、胸騒ぎ、息切れ、耳鳴り…} がする）
- (b) 対格の名詞＋機能動詞（あれが思いのほか綺麗な起きかたをしているかもしれない。{まね、まばたき、マスク、テニス、貧乏、教師…} をする）
- (c) 与格の名詞＋機能動詞（足蹴にした。{頼り、人任せ、折半、空…} にする）
- (d) 与格／共同格の名詞＋機能動詞（前提として、{おわり、根拠、目的、問題…} に／とする）
- (e) 名格の名詞＋機能動詞（一万円もする。数年して）

以上の通り、これまでの形式動詞・機能動詞の中で最も多く「する」の例を取り上げ、結びつく格助詞の数や種類を示している。そして、いずれも実質的な意味は名詞に託され、動詞自体は文法的な役割を果たすだけだとその機能を説明した。

ただし、これらの指摘についても本論文の立場から見ればまだ十分ではない。まず、意味・

用法の記述がなされていないこと、次に、機能動詞の範囲が動詞の機能を見るにはまだ狭いことの2点が問題となる。1つ目の意味・用法の記述がないというのは、「する」という動詞がどのような意味を持つ名詞と結びつき、どのような実質的意味を名詞に預けるのか、そして、「する」の実質的意味はゼロなのか、その段階性はどのようなものなのかという諸問題が明らかにされていないからである。2つ目の範囲が狭いというのは、村木(1980、1991)の定義する機能動詞は「名詞＋動詞」であり、名詞以外と共起する用法、例えば「きれいにする」「しらばくすると」「話したりする」のような「形容詞、副詞、動詞」＋「する」は機能動詞ではない。そのために、意味の希薄さと文法的機能専用という特徴を持つこれらは、その範疇に入っておらず、動詞の機能性を見るという本研究からすると問題が残っている¹⁹。

1.2.2.3. 機能動詞の周辺－「する」の一部は機能動詞ではない－

村木(1980、1991)では「する」を機能動詞の典型としながらも、「機能動詞結合をとりまいている領域」として「する」の一部は機能動詞ではないとの立場を示している。つまり、「名詞＋動詞」が機能動詞結合であり、それ以外の語結合は機能動詞の範疇を超えるというのである。このことは、機能動詞の概念が限定的であり、機能性を持つものの全てを捉えきれないことを示している。もっと厳密に言うならば、機能動詞は形式動詞と違い、実質動詞の用法を持つ一般的な動詞(例、とる、かける、あつめる)までもその範囲に含んでいるという点で形式動詞よりも広い。しかし、一方で統語的に「名詞＋動詞」に限定している点で形式動詞よりも狭い。

具体的に「する」について、機能動詞の周辺と位置付けたものを以下に挙げる。

「機能動詞結合に近接したむすびつき(村木 1991)」

〈形容詞＋動詞〉〈形容動詞＋動詞〉 (顔を)赤くする、丸くする

「機能動詞結合の周辺に位置をしめるもの(村木 1991)」

〈副詞＋動詞〉 しばらくする(と)…、閑散とする

「機能動詞の枠外²⁰(村木 1991)」

〈動詞＋動詞〉 読んだり書いたりする、詰め寄りさえする

しかし、「赤くする」「閑散とする」「読んだり書いたりする」、あるいはオノマトペを用いた「ズキズキする」も全て「する」が意味の希薄さと述語としての文法的機能を担うだけの働きしか持たないという特徴が見られる。したがって、動詞の機能性を分析する本研究からすれば、これらを排除することはできないのである。

¹⁹ 一方で、これらの「形容詞、副詞、動詞」＋「する」は形式動詞の範囲に入っている。

²⁰ 「形式動詞の一つであろうが、機能動詞の枠外である(村木 1991 : 208)」とする。

1.2.2.4. 機能動詞と共起する名詞の特徴

さて、形式動詞では動詞の実質的な意味を補充する語の存在は指摘されていた（『賓語』と称す（山田 1908））が、その特徴や性質については述べられていなかった。機能動詞研究においては、それは第一に「行為名詞（岩崎 1974）」であり、さらに村木（1991）ではそれを広げ典型的には「動作性の名詞」であるが、他に「状態名詞、現象名詞がある（村木 1991 : 214）」とした。

1.2.2.5. 機能動詞と実質動詞の対立—機能動詞かどうかは用法によって決まる—

機能動詞と対立する概念として、形式動詞研究の山田孝雄(1908)は「陳述の力と共に何らかの具体的属性観念の同時にあらはされたる用言」を「実質用言」と名付けた。同様に、機能動詞研究でも村木新次郎(1991)はその対立概念として「実質動詞」を置く。その実質動詞と機能動詞の対立について、以下のような重要な指摘を行っている。

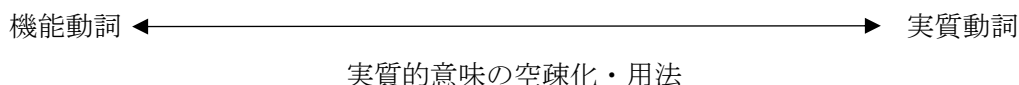
一般に、機能動詞は、実質的な意味の有無によって、実質動詞と対立する。機能動詞であるか実質動詞であるかは、その用法によってきまるものであって、動詞に固有の性質ではない。一方、実質的意味の空疎化にはいろいろな段階があり、機能動詞としての性格も、その空疎化の程度に応じて典型的なものから、実質動詞との中間的なものまであり、いわば連続している。(村木 1991 : 217)

重要だと考えるのは、実質の意味の空疎化には段階があり、典型的なもの、中間的なものと連続しているという指摘である。ここに至って、形式動詞研究では考察されることのなかった実質の意味の段階性が指摘された。これは、機能動詞研究が実質的な意味を持つ一般的な動詞にまで、その文法的機能が特化された姿を見出し考察したことに始まる。

しかし、問題となるのは、「実質的な意味の有無」だけが両者を対立させる要因なのかという点である。この他、共起する要素の意味的特徴は動詞にとって重要なはずである。

そして、さらに問題なのは、「機能動詞であるかは用法によってきまる」とした点である。これは読みかえれば「機能動詞は用法である」ということになり、動詞の「用法」に、「機能動詞」や「実質動詞」という名づけをすることの不整合が浮かび上がってくるのである。それは、両者が対概念として「機能」という 1 つのスケールの両極にあり、その両極の「動詞」の間に段階的に「用法」が存在するという、動詞という品詞分類の範疇と、用法という機能の範疇が一つのスケールに乗るという矛盾である。

機能動詞研究 (村木 1991)

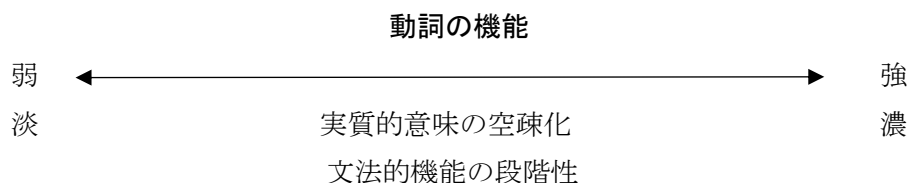


また、もし実質動詞と機能動詞を対立する 1 つのスケールの程度性だと見るならば、全ての動詞が用法によってその中間点に來たり、実質動詞寄りになったり機能動詞寄りにな

ったりするということになる。つまり、どのような動詞も実質動詞と機能動詞の用法を幅として持つということになる。果たして、そうだろうか。実質動詞としてしか存在しない動詞は無いだろうか。また、機能動詞としてしか存在しない動詞は皆無だろうか。このことについては考察の余地がある。したがって、機能動詞の機能性の段階の捉え方には問題が残されている。

実際にあるのは実質動詞か機能動詞かの二項対立ではなく、「一本の機能性の幅」とその機能の「強」と「弱」という二項対立と見るべきである。つまり、「実質的な意味」の「濃淡」とそれに伴う「文法的機能」の「強弱」といったものがスケールとして存在し、その両端に位置するのは、程度や段階の「最高」と「最低」であって、名前の付いた動詞ではないはずである。したがって、本研究では、機能を1つのスケールと捉え、その機能性に段階性があると考え。そして、そのような機能性の動詞を「多機能動詞」と名付け、その文法的機能の段階性や実質的な意味の空疎化の程度を測るべきだということを新たに提起したい。詳しくは、「する」と「ある」の構造と意味、そして対人的機能を分析したのちに、終章で論じることとする。概略は以下のように考えている。

本研究（多機能動詞研究）



1.2.3. 本研究との関わりと問題点

本研究は、動詞の機能性について「する」と「ある」を取り上げ、考察することにある。まず、機能動詞研究では「する」について多様な文型が存在することについての指摘があること、その他の動詞を例に動詞と名詞の関係性について、その名詞の性質、名詞との結合度を分析していること、これらの点は学ぶべき点が多く、引き続き本研究でも深めていきたい点である。ただ、既にいくつか指摘したが、機能動詞研究における問題点や課題は本研究との関わりから見ると、以下のようにまとめられる。

- 問題点 1. 機能動詞が「名詞＋動詞」の語結合に限定されるために、その他の機能的な動詞が排除されている。
- 2. 機能動詞と実質動詞の概念規定に問題がある。
- 3. 「ある」の意味・用法の分析が無い²¹。
- 4. 「する」の意味・用法の分析が十分ではなく、詳細なものが無い。
- 5. 機能動詞の定義が意味に偏っており、曖昧さが残る。

²¹ 動詞「ある」については村木（1991）で4例「夕立、連絡、迷子、客がある」が出てくるだけで、詳細な分析は行われていない。

6. 機能を見る視点が語の結合に限定され、一文の機能については考察されていない。

本研究では、機能性の幅を見るために 1 つのスケールとしての多機能動詞という用語を提案し、その機能性とは何か、何が機能性を決めるのか、「する」と「ある」の機能性はどのようなものかについて考察を進めることとする。

第 3 節 軽動詞研究

ここでは、軽動詞 (light verb) という用語で動詞の形式性について考察する軽動詞研究について取り上げる。特に日本語についての指摘や考察を中心に振り返り、形式動詞や機能動詞と比較し、本研究との関わりや課題を述べたい。

1. 3. 1. 軽動詞の定義と範囲

軽動詞 (light verb) は英語学での用語であり、「軽動詞構文と言え、英語では have a look at the paper や give the door a kick」の「have」や「give」を指す概念であると影山太郎 (2004b) でも述べられている²²。軽動詞が日本語の動詞にもあることを指摘し論じたのが影山太郎 (1993、2004ab、2005) である。軽動詞の定義は以下の通りである。

見かけは句でありながら機能的には語に近い振舞いを示す (影山 1993)

形式動詞や機能動詞では、意味の希薄性が強調されていたが、軽動詞の定義においては意味的な観点はそぎ落とされ、統語的な特徴だけが指摘されている。そして、その範囲は非常に限定的でこの 3 つの研究の中では最も狭く、「する」の一部と「ある」の一部のみである。

「する」については、この動詞が持つ様々な意味・用法の中で 2 つの用法「動名詞 (VN) を＋スル (影山 1993)」と「身体属性文のスル (影山 2004a)」だけが軽動詞構文であると指摘する。具体的には、「出場をする」のような動名詞を目的語にとる場合の一部²³と、「青い目をしている」のような身体を目的語にとる場合である。

「ある」についても 2 つの用法、「親族名詞＋アル (影山 2004 b)」と「動作主名詞 (出来事発生名詞) ＋アル (影山 2004 b)」が軽動詞構文であるとする。具体的には、「私には兄がある」のような親族名詞をガ格に持つ所有文、「昼間は乗客がある」のような動作主体を表わす名詞がガ格に立つ文である。

実質の意味が動詞にあるかどうかよりも、「名詞＋動詞」が 1 つの語であるような動詞を軽動詞と考えている。しかし、「名詞＋動詞」に焦点を当てながらも、それが 1 つの動詞に

²² 本研究では日本語動詞の機能性を見るのが目的であるため、軽動詞が日本語にも存在することを指摘し考察を加えている影山太郎の一連の研究を見ていく。

²³ 「新しい法案の検討をする」の「する」は軽動詞ではなく、「このスルは『重いスル』と呼ばれる (影山 2004 b : 12)」。

置き換えられるという機能動詞の特徴は問題にしていない。そして、「名詞＋動詞」が「語」であるためには、名詞の持つ基本的な特徴であるモノという意味的な性質が消え失せていなければならないと考えており、それは村木（1991）が動作、現象や状態を表わすという特徴を持つと指摘した点のちょうど逆のアプローチである。名詞のモノ性に焦点をあてたものである。

1.3.2. 「軽動詞と類似した表現」機能動詞

さて、形式動詞、機能動詞、軽動詞といずれも動詞の高い機能性を見る動詞概念だが、これらが相互に引用あるいは比較されたことはほとんどないと言っていい。村木新次郎（1991）の第3部は「形式動詞とその周辺」というタイトルになっているが、これは機能動詞よりも一般的な用語である「形式動詞」を用いることで、機能動詞の位置づけや理解をはかったものと受け取れるものであり、機能動詞と形式動詞が比較検討される箇所は見られない。また、軽動詞についての言及は機能動詞の村木の研究の中では見たことがない。

一方で軽動詞研究の影山（2002）の中で一箇所、機能動詞について触れたところがある。そこでは、例として「決断をくだす、成功をおさめる、注意をはらう、計画をたてる、工夫をこらす」の機能動詞結合を取り上げながら、これらは軽動詞と「類似の表現（p177）」の一つであって、「軽動詞ではない（同）」と述べる。その理由は、「これらは『決断がくだされた、工夫がこらされた』のように自由に受身化できるから、形態的緊密性は有しておらず、本章で言う意味での『語』にはなっていない。目的語と動詞の連語関係が慣用的に定まっているものの、あくまでも句である。」とした。このように、軽動詞が機能動詞よりも狭いことがわかる。なお、形式動詞についての言及はない。このように「類似した表現」としながらも、相互にほとんど関わらずに研究が進められたと言っていいが、本研究ではそれらの比較も重要な考察事項と考えている。

1.3.3. 「語」であることの判断テストー軽動詞と機能動詞の違いー

軽動詞研究では、「見掛けは句でありながら機能的には語であるもの」＝「軽動詞」を判別する統語的な基準やテストといったものが存在する。つまり、「語＋語」の句が「一つの語」に相当する「形態的な緊密性（影山 1993）」を有しているか否かを、意味に頼らずに決定しようとする試みがなされている。その判断テストが、「擬似分裂文、語順交替、受身化（影山 1993）」、そして、「定性制限（影山 2004a）」である。擬似分裂文、語順交替、受身化はいずれも語と語の結びつきの強さや一体化の度を測るための方法である。例えば「私は北海道に出張をした」の下線部分の語の緊密性を測るために、擬似分裂文「*私が北海道にしたのは、出張だった」、語順交替「*私は、出張を北海道にした」、受身化「*出張が北海道にされた」のテストを行い、いずれもそれらが不可能であることから、「出張」と「した」が引き離せないほど一体化し、一語となっていると判断する。したがって、「出張をする」は軽動詞であると判定される。

これと類似したことが機能動詞研究の村木（1991）でも行われている。村木（同）では、機能動詞結合の諸特徴として、名詞と動詞の「結合のつよさ（p 230）」を挙げている。それ

は、「語句の挿入」「語順の交替」「連体構造への変換」であり、例えば「さそいをかける」が語句の挿入ができにくいこと「?山田にさそいをいつかける」、語順交替「?さそいを友達にかける」、連体構造への変換「?友達にかけたさそい」が難しいと述べ、「さそいをかける」は機能動詞結合と判断している。しかし、機能動詞研究では「機能動詞結合にも、いろいろなタイプがあって、一律にこのようなふるいわけができるわけではない (p232)」と述べ、軽動詞のような厳密な条件とは考えていないことがわかる。

以上、方法は少し異なる部分もあるが、機能動詞と軽動詞の研究では、このような語と語のむすびつきが通常の動詞とは異なって強いことを指摘しているのである。

そして、ここにもう一つ加わったのが、名詞の「定性制限 (DR)」(影山 2004a) である。軽動詞は「不完全指定の語彙概念構造を持ち (影山 2004a)」と説明する。つまり、不完全ということは骨組みだけを示すことを表し、骨組みだけなので、そこに意味を補充しなければならない (意味編入)。つまり、骨組みだけのところに、どこからか意味のあるものを取り込んでくるために両者が一体化するわけである。ここに至って、軽動詞の概念規定に、意味の観点をはっきりと加わることになる。

そして、「意味は補部となる名詞句から吸収する (同)」が、どんな名詞句でもいいわけではない。「指示的、特定のな名詞句は独立した存在 (同)」だから不可であり、「不定名詞句に限る (同)」とする。不定名詞句は「不定」であるために、指示詞で指示されることがなく量化詞をつけないと説明している。そして、具体的には『～ヲスル』『～ガアル』全体で一つの意味的な述語概念を形成する。だから形式上は『句』でも意味的な合成述語を作るという点で語彙の緊密性と共通した特徴を持つ (同)」と述べた。

量化詞について影山 (2004 b) は、Milsark(1979)が英語の *there* 存在文に関して指摘した定性制限 (DR)「*there be* の後の名詞句は指示性 (referential) がなく、定名詞句 (*the*、人称代名詞、固有名詞など) は適合しない。*there be* の後の名詞句には、*some, many, three, no* のような弱い量化詞は付くが、*every, all, each, most, both* のような強い量化詞は付かない。」を紹介し、「具体的な個物の存在を表すアルが DR を伴わないことは明白 (影山 2004 b : 6)」であり、「親族がある」のような文は「DR が明瞭に現れる (影山 2004 b : 6)」から軽動詞だと結論付けた。例えば、DR とは、代名詞で置き換えられない「*彼女には彼 (= 兄) がある」、強い量化詞が見つからない「*私には {すべての / ほとんどの} 男兄弟がある」となる。つまり、定性制限とは名詞が指示性を受けるような具体的なモノではないということの意味している。名詞の最も基本的な意味は物や人などの具体的な概念であると考えられるが、それが抽象的な概念になると名詞の核 (コア) から性質的に徐々に離れていってしまう。その意味で、DR が無いのが最も基本的な名詞の概念・モノであり、「名詞+動詞」の句構造でそれぞれが独立して語として用いられていることの支えとなると考えている。

さらに、この DR を「する」文にも適用している。「そもそも VN²⁴に量化詞をつけること自体が不自然だが、それを斟酌して (中略) 比べると、Miyamoto(1999)も指摘するように、強い量化詞と弱い量化詞で許容度に差が認められる。(影山 2004 b : 12)」とし、軽動詞の

²⁴ Verbal Noun のことで、動作性の名詞を指す。

研究では定性制限を重要な特徴と見ている。そして、はっきりと「重要なのは形態的緊密性ではなく、DR である（2004b : 12）」「名詞句の性質そのものが重要である（同）」と述べている。動詞が、共起する名詞の特徴に従って動詞の性質を変えるのは事実であり、その意味から共起する名詞句の性質そのものが重要だとした点は妥当である。動詞の研究ではあるが、同時に名詞の研究にもなるという示唆を与えてくれる。DR は語彙概念構造の違いという視点から述べられている研究である。

1.3.4. 定性制限 (DR) の問題点

軽動詞研究で用いられている定性制限 (DR) については、2 つの問題点があると思われる。

1 点目は、DR のテストは動詞の機能性の幅を見ることには向いていないということである。

統語論的操作や形態的緊密性というのは語の結合度を測るテストで、緊密で結合が強いというのは独立した要素ではなくどちらかがどちらかに依存している、2 つで 1 つの役割を果たすことを示すものである。そして、DR とは名詞が定性を持たないことを確かめるテストであり、つまり「モノではない」ことを確かめている。影山 (2004b) は、この 2 つのテストのうち、DR をより重要と考えた。つまり、名詞の性質が軽動詞においては重要だと考えているのである。そして、「検討」と「出張」はどちらもサ変動詞語幹であり、「検討が行われた」「出張が続く」のように動作を表わす名詞としても使われる。ところが、DR のテストを行うと両者には違いがあり、「検討をする」は「重いスル」（つまり非軽動詞）、「出張をする」は軽いスル（つまり軽動詞）であると影山 (2004b) では考えている。

軽動詞は、本研究からすれば、「名詞＋格助詞＋動詞」の中では最も機能性が高いレベルのものを指すことになる。そのため最も高いレベルを限定できる可能性があるが、逆にそれゆえに、動詞の機能性の「幅」を見ることには向いていないのである。軽動詞研究では「軽動詞か否か」の規定が議論の中心となっているためである。本研究ではむしろ、量化詞の付き方に差があるのであれば、その差を含めて考察し、動詞の軽重を見ていきたいというのがその立場である。例えば、軽動詞研究では、強い量化詞とされる「ほとんどの／すべての」がつけられないものが軽動詞であると規定する。その一方で、弱い量化詞とされる「二三の／たくさんの」と被修飾語となる名詞の間には、3 つの修飾パターンが考えられる。1 つ目は、強い量化詞も弱い量化詞もつけられないもの、2 つ目は弱い量化詞はつけられても強い量化詞はつけられないもの、3 つ目が弱い量化詞も強い量化詞もつけられるものである。軽動詞は以上の 1 つ目と 2 つ目が該当するわけだが、その両者の違いについては軽動詞研究では問題にしていない。しかし、これらが名詞の違いを規定するものならば、この 3 つの違いは動詞の機能性にどのような影響を与えるかをこそ、考えなければならないだろう。例えば、「相席をする」と「相談をする」は、どちらも強い量化詞 {ほとんどの／すべての} がつけられない (* {ほとんどの／すべての} 相席をする、* {ほとんどの／すべての} 相談をする) ため軽動詞とされるが、その動作名詞「相席」と「相談」には弱い量化詞の可否に差がある (* {二、三の／たくさんの} 相席をする、{二、三の／?たくさんの} 相談をする)。

しかし、そこは軽動詞研究では問題にされないが、本研究では問題となる点である。

2 点目は、DR のテストが厳密に行われていないものが見られ、テストの有用性の信頼度が下がることである。

例えば、影山 (2004b) の例 (40)「伝言をする」の「伝言」はVN (動作名詞)、「お歳暮をする」の「お歳暮」は通常の名詞としているが、DR の判定をしてみると、「* {ほとんどの／すべての} お歳暮をした」で強い量化詞がつけられないため「お歳暮」も通常の名詞ではなくVNになるのではないのか。また、弱い量化詞が可能だと判定している「(39) 課長は九州に {二、三／たくさん} の出張をした。(影山 2004b)」は「お歳暮をする」同様、筆者には不自然に感じられる。他にも「(55) 私はその男に {恨み／貸し／恩} がある。」は「DR がない」としているが、「*私はその男に {ほとんどの／すべての} {恨み／貸し／恩} がある」となり「DR はある」と筆者には思われるのである。

「そもそもVNに量化詞をつけること自体が不自然」と自ら述べる通り、VNは名前の通り動作を表わし、その動作に量をうんぬんする量化詞をつけることは概念的に合わない。量化詞をつけることの意義についての考察が不十分に感じられ、量化詞そのものが本当に名詞の性質を規定できるのかわからない。以上の点から、VNに関しては、形態的緊密性による判断もやはり重要ではないかと考えるものである。

1.3.5. 本研究との関わりと問題点

ここでは本研究と軽動詞研究 (影山論) との関わりを述べながら、軽動詞研究の本研究から見る問題点をまとめる。

軽動詞研究では、語彙概念構造の違い (DR) を示すことによって、軽動詞かそうでないかの線引きが明確に行われている。「彼女が青い目をしている」が軽動詞構文であり、「彼はネクタイをしている」が軽動詞構文ではないとの指摘は、軽動詞研究の論点からするならば妥当である。しかしながら、後者の例もまた意味の希薄性という点においてその他の一般的な動詞 (例、締める) とは明らかに異なっている。また、「彼には兄がある」は軽動詞構文、「彼には {財産／ほくろ／温かみ} がある」は非軽動詞構文 (『重いアル』) とされるが、いずれも「彼」についての属性を述べる文であり、意味の軽重に差を感じることはできない。あるいは、「重いアル」の「彼には温かみがある」は、「机の上に本がある」と同じ「重いアル」でいいのだろうか。この2つが、1つの枠組みである「重いアル」に入れられてしまうことに違和感を覚えるのである。

ここでも、機能動詞研究と同様に、軽動詞でなければ重い動詞との二項対立が見られるのである²⁵。最も動詞の実質性が軽い部分を切り取るため、切り取られて落ちた部分が持つ機能性を見ることがなく、動詞の機能性を幅広く捉えることができない。つまり、動詞が軽くなるという現象が非常に限定的であると定義するところから出発するために、その周辺部が一切切り落とされているのである。本研究の目指すものは、動詞でありながら多くの動詞と異なる特徴を示し、特に語として根本にあるべき「意味」というものをそぎ落とし、あた

²⁵ ただし、軽動詞研究の方が明確に軽動詞と非軽動詞を区別するという立場を示しており、その考え方は妥当であるが、本研究の目指すところを分析できないという点が問題点である。

かも、助動詞や助詞のように文法的な機能を前面に押し出す姿を追究していくということである。

次に、本研究が取り上げる「する」と「ある」に関する考察が軽動詞研究ではまだ十分に
なされていない。例えば、「親族名詞がある」を軽動詞構文として取り上げているのに、も
っと抽象度の高い「痛みがある」「人気がある」「可能性がある」などは全く考察されてい
ない。この他に「見覚えがある」を軽動詞として挙げているが、これは1つだけ見られた特殊
なものなのか、「親族名詞がある」とどう関係するのかについても考察がない。また、「する」
についても「名詞にする」「名詞がする」「非動作名詞をする」は考察されていない。そして、
「形容詞する」「擬態語する」は名詞句ではないという理由で、初めから軽動詞構文の範疇
からはずれる。定性制限は名詞に関する規定であるため、名詞以外が考慮に入っていないこ
とは明らかである。このように、「する」と「ある」という動詞の分析という点でまだやる
べきことがあると考えられる。

以上、本研究から見る軽動詞研究の問題点を以下にまとめる。

- 問題点1．軽動詞は非常に限定的で、動詞の機能性の段階やその他の語との関係性など、
日本語全体があまり見えない。
- 2．「する」と「ある」の分析が不十分である。
 - 3．「名詞＋動詞」に限定されており、動詞の機能性の全容を見ることができない。
 - 4．DRの判定結果に疑問があるものがある。

第4節 三者の比較

本節では、形式動詞、機能動詞、軽動詞の三者を比較しその異同をまとめ、本研究の位置
づけを行う。

これまで、この三者はその動詞の枠組みをほとんど比較されないまま、個々に研究が行わ
れてきたと言えよう。ところが、この三者はこれまで見てきた通り、動詞の意味の希薄さと
文法的機能の強さを持つ動詞を取り上げる研究である。しかし、その定義、実質の意味を担
う要素、該当する動詞、分析手法はそれぞれに異なっている。節を改めて、以下ではこの4
点について比較した結果をまとめる。

1.4.1. 定義の比較

まず、動詞の定義から振り返る。形式動詞は「実質的意義が無く唯形式的意義だけを持つ
ている動詞（松下 1928）」であり、機能動詞は「実質的な意味を名詞にあずけて、みずか
らはもっぱら文法的な機能をはたす動詞（村木 1991）」、軽動詞は「見かけは句でありな
がら機能的には語に近い振舞いを示す（影山 1993）」動詞である。

三者に共通している点はこの定義から見ると、実は無い。

この中で特徴的な2点について見てみる。1つは実質の意味、1つは文法的な機能である。

1つ目の実質的な意味については、形式動詞と機能動詞では定義の中で明確に述べており、

実質的意味が無いこと、あるいはその希薄さを指摘する。軽動詞は「不完全指定の語彙概念構造を持ち（影山（2004a）」「意味は補部となる名詞句から吸収する（同）」とあるように、動詞に実質的意味が無いことが示されている。しかしながら、定義として明確に述べなかったのはその視点の中心がそこに無いことを暗示するものであり、この三者が実質的意味の希薄さを同じように見ているわけではないことがわかる。

2 つ目の文法的な機能については、形式動詞では「形式的意義（松下 1928）」「その形式をいふに止まり（山田 1936）」「陳述の力（山田 1936）」と述べ、形式とは動詞としての形、述語としての役割、あるいは文をまとめ成立させる陳述の力に特化されていることを述べている。この点は機能動詞でも同様に文法的な機能とは述語としての機能を表わしている。軽動詞では定義の中ではこの点について述べられていない。

1. 4. 2. 実質的意味を担う要素の比較

それぞれの動詞は実質的な意味が希薄であることが指摘されているが、その実質的な意味を担う要素が何かについて比較する。形式動詞では「観念部を拠当せる語（賓語）（山田 1908）」「補充語（松下 1928）」と名付けているが、その範囲は非常に広い。例えば松下（1928）では「主客語」「て」「無活用動詞」が補充語にあたり、つまりガ格名詞、ヲ格名詞、動詞に接続助詞テが接続したもの、ト格名詞、擬態語、形容詞、形容動詞、動詞なども含まれている。一方で、機能動詞と軽動詞ではどちらも名詞に限定されている。つまり、形式動詞研究ではその対象を「句」に限定していない。形式動詞がその範囲を一番広くとり、機能動詞と軽動詞は「語＋語（名詞＋動詞）」の範囲に限定しているという違いが見られる。

1. 4. 3. 該当する動詞の比較

それぞれの動詞の定義から該当する動詞が何かについて比較しまとめると、形式動詞は最も広く様々なものが該当する。補助動詞や接続詞、助動詞などの用法も含んだ「する」「ある」「なる」「いう」や動詞の連用形に接続助詞テが付いた補助動詞などが該当する。機能動詞は「する」と多くの一般的な動詞（とる、かける、あつめる、はたらくなど）が該当する²⁶。軽動詞は、「親族名詞＋アル」と「動作主名詞（出来事発生名詞）＋アル」、「動名詞（VN）＋スル（影山 1993）」の一部と「身体属性文のスル（影山 2004a）」のみである。該当する動詞という点で見ると、このように「ある」「する」の一部のみとした軽動詞研究（影山論）と、「ある」「する」の全て＋「なる」等を入れる形式動詞研究と、「する」「ある」＋多くの動詞を入れる機能動詞研究（村木論）の違いが見られる。

1. 4. 4. 分析手法の比較

それぞれの動詞の特徴を分析する手法として、どのようなものが用いられたかについてまとめる。最も厳密な方法を用いて動詞を抽出したのが、軽動詞研究である。それは、形態的緊密性を探る「擬似分裂文、語順交替、受身文」と定性制限（DR）である。一方、機能

²⁶ 「ある」については例があるだけで詳細な考察はされていない。

動詞も名詞と動詞の結合の強さを「語句の挿入、語順の交替、連体構造への変換」で見ているが、それを絶対的なものとは見ていない。軽動詞と機能動詞で共通する部分は、形態的緊密性の判断の一つである「語句の挿入、語順交替」がどちらも不可能であると指摘する点である。そして、機能動詞研究では用いられていないが、軽動詞研究では形態的緊密性の判断の一つである「受身化」を絶対条件に入れており、受身化できないものが軽動詞とする。そのために、「決断をくだす、成功をおさめる、注意をはらう、計画をたてる、工夫をこらす」は「決断がくだされた、工夫がこらされた」のように受身化できるために形態的緊密性はあるしておらず軽動詞ではないとする。しかし、これらは機能動詞研究では機能動詞である。

つまり、このような語の結合度についての判断が異なっており、十分条件だと考える軽動詞とそう考えない機能動詞²⁷という違いが見られる。

形式動詞ではこのような手法は一部書かれていても、それが文法的な特徴だとは述べられていない。

1.4.5. 三者の比較と本研究のねらい

ここまでの三者の比較を以下の表1から表3としてまとめる²⁸。

表1. 動詞の範囲

| 研究 | 範囲 | 具体的な動詞例 |
|-------------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 形式動詞研究（山田論） | 限定せず | 動作性形式用言（形式動詞『す』） 純粹形式用言『あり』存在動詞（あり）、形容動詞（～かり（くあり））、説明動詞（専続覚作用）（なり（にあり））、たり（とあり）、である、だ、です）、動作存在動詞（せり、をり、はべり、いまぞかり） 形状性形式用言（形式形容詞『ごとし』） |
| 機能動詞研究（村木論） | 名詞＋動詞 | 「する」「ある」「かける」「とる」「いれる」「あつめる」など多くの一般的な動詞が入る。 |
| 軽動詞研究（影山論） | 名詞＋動詞 | 「する」の一部と「ある」の一部 |
| 多機能動詞研究（本論） | 限定せず | 「する」と「ある」を代表に、一般的な動詞も入る。 |

表2. 「する」と「ある」の該当範囲

| | 「する」 | 「ある」 |
|-------------|-----------------------------------------------------------------|--------------------|
| 形式動詞研究（山田論） | 「{体言・形容詞・動詞連用形・副詞・形容詞語幹み・漢語・外来語}＋す」「体言＋副助詞＋す」「名詞＋が＋する」「名詞＋を＋する」 | 「名詞＋が＋ある」「名詞＋で＋ある」 |

²⁷ 「機能動詞結合にも、いろいろなタイプがあつて、一律にこのようなふるいわけができるわけではない（p232）」と述べ、軽動詞のような厳密な条件とは考えていないことがわかる。

²⁸ 形式動詞研究については、代表として山田孝雄の論を挙げる。橋本進吉と松下大三郎の中間的な立場にあると考えられるためである。

| | | |
|-------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 機能動詞研究（村木論） | 名詞{が／を／に／と／無格}する | 「客、夕立、連絡、迷子、客がある」の4例を示すのみ |
| 軽動詞研究（影山論） | 「動名詞（VN）をする」 身体属性文のスル「名詞句をする」 | 「親族名詞がある」 「動作主名詞（出来事発生名詞）がある」 |
| 多機能動詞研究（本論） | 「～する」の全ての構文 | 「～ある」の全ての構文 |

表 3. 動詞の規定基準²⁹

| | 語順交替 | 動詞一語 との交替 | 形容詞一語 との交替 | 受身化 | 擬似分裂 文 | DR（量 化詞） |
|-------------|------|--------------|---------------|-----|-----------------|-------------|
| 形式動詞研究（山田論） | — | ○ | — | — | — | — |
| 機能動詞研究（村木論） | ○ | ○ | — | — | — ³⁰ | — |
| 軽動詞研究（影山論） | ○ | — | — | ○ | ○ | ○ |
| 多機能動詞研究（本論） | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — |

本研究の内容や結論についての説明は、以下の章や結論において述べるため、以上は概略のみをここでは示した。

本研究は、これら三者の研究の流れに属するものである。これまでの研究との接点を見出せば、まず、その広がりや、品詞を越えて見ていこうという視点は形式動詞研究に立つ。次に、動詞とその他の語との関係性に注目していこうという視点は機能動詞、軽動詞研究に立つ。

従来の枠組みでは機能の段階性や幅を捉えることができないこと、さらにその代表例とされる「する」と「ある」の分析がまだ十分ではないこと、多機能であることの広がりや捉えにくいことなどから、形式動詞や機能動詞の土台を借りながらも、新たに多機能動詞という枠組みを設定すべく、以下考察を行っていききたい。本研究は、多角的にその機能性を追究していくという点では先行研究を踏まえながらも、新たな多機能動詞論を展開するものと位置づけたい。

第 5 節 文機能論・発話機能論

さて、「する」と「ある」を研究するにあたって、もう一つ考えなければいけないのは、これらの動詞を用いた「文」が果たす機能である。第 4 節までの機能が、統語論的に隣り合う要素同士の関係性、そしてそれが果たす述語としての働きという文法的な機能だったのに対し、第 5 節で取り上げる機能とは、もう一回り大きな「文」としての機能、そしてそれを実際に用いる際の語用論的な機能である。言い換えれば、文としての機能とは文全体の意

²⁹ 表中の○はその動詞を規定するための基準として用いていることを表す。—は用いていない、述べていないことを表す。

³⁰ 村木（1980、1991）では、連体修飾構造への変換、語句の挿入という形で行っている。

味を類型化したものであり、語用論的な機能とは言わばコミュニケーション上の機能である。したがって、以上の文法的な機能と語用論的な機能という両面の機能³¹を明らかにできれば、「する」と「ある」の機能全体を捉えることができたと言えるだろう。そして、その方法や分析の仕方が日本語動詞の機能を把握する際の指標となると考えている。

そこで、文としての機能と語用論的な機能を見ていくにあたって、援用したいと考えるのが山岡政紀（2000b、2008）による文機能と発話機能という理論である。

あらゆる発話は二重の機能を果たしているとし、第1の機能は「聴者を前提とせず、発話の素材である文が話者から発話されることそれ自体における機能（山岡 2000b : 62）」であり、それを「文機能」と呼んでいる。したがって、文機能は、文で用いられている要素とその構造によって複合的に生まれる、1つの文として機能である。それらの構造的要素群は、その文機能を発揮するための「命題内容条件」と呼ばれる。例えば、「あー、頭が痛いなあ。」という文は、第1人称主語、現在時制、感情形容詞述語などの命題内容条件によって、文全体としては〈感情表出〉という文機能を発生させているということになる。一方で、過去形で表示される「あー、頭が痛かったなあ。」という文は、話者の感情を表出しているのではなく過去における一時的な状態を描き出した文とされるため、〈状態描写〉という文機能になる。命題内容条件も先の例とは異なり、過去時制となる。つまり、単なる文字通りの意味ではなく、対人的な要素が加味される段階の意味と言ってもいい。この発想は、上記のような「痛い」という1つの形容詞でも、それが共起する構成要素群によってその都度文になったときに異なる機能を示すという見方であり、それは、単語の意味1つ1つの足し算から見える文の意味とは別の、すなわち、記述的な意味を超えた対人的機能を記述していく優れた方法だと考える。このことによって、「する」と「ある」のような、実質的な意味が薄く文法的機能を全面に押し出した動詞が、対人的機能においても多様な機能を持つのかを見ることができるわけである。そして、山岡（2000b）では、既に多くの日本語述語についての文機能の分析と記述がなされている。それらと「する」と「ある」の結果を比較するならば、日本語動詞文における「する」と「ある」の位置づけができ、多機能な動詞を規定する足掛かりになると考える。

そして、発話の持つ二重の機能のうち、第2の機能は「聴者の存在が前提にされてはじめて発動する機能（山岡 2000b : 62）」とし、これを「発話機能」と呼ぶ。そして、どのような発話機能が発動するかは、「発話の文脈や発話参加者の人間関係などの語用論的条件（同 2008 : 4）」によって決定される。この段階の機能は、まさに私たちが言葉を使ってコミュニケーションする際の機能であり、多様で豊かな言語コミュニケーションの世界を捉えようとする視点である。発話機能の具体例としては、先の例「あー、頭が痛いなあ。」を発話した場合、相手や状況によっては「薬をください」という《提供要求》になったり、「休ませてほしい」という《依頼》になったりする。この相手や状況などの違いを語用論的条件と

³¹ 言語研究における統語論、意味論、語用論にまたがる機能を文法的機能と語用論的な機能と捉え、この二大機能を考察することで動詞の果たす機能の広がりや段階性を明らかにしたい。この他、機能には韻律的な情報が果たす機能もあるが、それは動詞そのものが果たすのではなく、ピッチやイントネーションが果たす機能であるため、以上の機能が動詞が果たす機能の全てと言ってもいいだろう。

して設定するのである。この発話機能論を用いて、「する」文と「ある」文が聴者を前にしたときにどのような語用論的な機能を果たすのか考察していく。

以上、文機能論と発話機能論を用いて、「する」文と「ある」文の対人的な機能の多様性を分析することとし、これを多機能動詞研究の方法の 1 つとしたい。その詳細は、第 7 章に示す。

章まとめ

第 1 章では、先行研究を振り返りその問題点を指摘したが、ここで全体を簡潔にまとめる。まず、本研究は、現代の日本語において、多様な意味・用法を持ち特異な振舞いを示す動詞「する」と「ある」を文法的・対人的に多様な機能性があるといういみで「多機能動詞」と捉えなおし、考察を行うものである。動詞の機能性を二極的な概念（実質動詞と機能動詞、あるいは重いスルと軽いスル）を用いずに、機能という 1 つの幅を設定し、その機能の強弱や濃淡を明らかにすることを目指す。そのための手法としては、先行研究から得られた語結合の強さ、あるいは結合する名詞の性質などを参考にしたい。この他、動詞と共起する要素との関係性、実質的意味を担う要素の内容、機能性を示す動詞結合が担う一語の役割なども見ていく。また、これらと類義の関係にある「やる」と「いる」と比較を行い、その機能性の特徴をさらに明らかにしたいと考えている。

そして、これらに加えて本研究で、新たに考察する観点として対人的な機能を研究する「文機能論（山岡政紀 2000b）」と「発話機能論（山岡政紀 2008）」を導入する。対人的な機能とは、1 つの「文」を発話することによって聴者に何を伝えることになるのかというレベルの機能である。この視点から見る機能は、これまでの形式動詞、機能動詞、軽動詞には無かった機能である。この観点を新たに加えることによって、動詞が多機能であるとはどういうことなのかがさらに浮き彫りにできると考えている。動詞が動詞の枠を超えて、形容詞や形容動詞の枠にまでその機能を広げていることが捉えられるはずである。

以下、第 2 章では「する」について、第 3 章では「ある」について、その文法的な機能を明らかにすべく、まずは、両者の動詞がとる名詞の種類とその格を記述し、文の構造を捉える。

第2章 「する」文の構造

本章では、機能性の動詞が作る多様な構文を記述するという立場から、「する」文の格構造を整理する（第3節表7と表8）。そして、それぞれの構文において、「する」と共起する名詞（句）の種類を記述する（第4節）。このことによって、「する」という動詞の持つ語彙的・統語的な性格を把握し、「する」が多様な機能を示す理由である構文的な多様性を明らかにしたい。

第1節 格と名詞句を記述することの重要性と意義

仁田義雄（1993）は、「動詞の示す名詞句への共起制限が、動詞の有している類的語義と密接に関わっていることによって、動詞の示す名詞句への共起制限の諸タイプをきめ細かく抽出することは、動詞を語彙的にも統語的にもより明示的により正確に性格付けることになる」とその重要性を指摘する。つまり、その動詞の特性は、その選択的に要求された名詞句によく表れるということになる。本章では、動詞「する」の名詞句との共起関係を記述し、そのことによって、動詞「する」の語彙的・統語的特徴を明示的に描き出したい。そして、「文の形成にあたって自らの表す動き・状態・属性を実現するために、いくつかの名詞句の生起を選択的に要求する（『日本語文法事典』2014、仁田義雄）」とあるように、「する」が持つ「動き」だけでなく、動詞でありながらも「状態」や「属性」といった特徴が見られる可能性についても確認していく。

また、日本語の場合、これらの名詞句は動詞と共に文を成す際に通常、格助詞を伴う。格助詞は、その名詞句がどのような意味役割を果たすかをマークするものであり、動詞が求める格のパターンは決まっている。文型と呼ばれる概念に見られる通りである。そこで、文の格構造である「形式格」を記述し、「する」が要求する格助詞のパターンをまとめる。そして、その格が表わす意味である「意味格」についても合わせて記述する。これによって、「する」という動詞がどのような意味を持つ名詞と共起し、その名詞にどのような格表示を求めるのかが明らかにされ、「する」の文法的機能や意味の広がり把握されると考えるものである。

日本語全体の格とは何かという根本問題を論じるには、用意周到な厳密な格の認定が求められるが、本章の目指すものは「する」という動詞の特徴、特にその多様性を明らかにすることである。そのため、ここでは代表的な研究のいくつかを踏まえながら、構文を記述する枠組みである「格」について考察し、それに基づいて「する」文の格構造を記述する。そして、格構造は必須のものを中心に記述する方向で進める。

第2節 構文を記述するために

2.2.1. 先行研究

これまで、森田良行（1977）、安達太郎（1999）、『日本語基本動詞用法辞典』（1989）などで「する」を述語とする文の種類や文型が示されてきた。その構文の記述は、いずれも助詞（特に格助詞）を表示する形で行なわれている。

森田良行（1977）では、「AハCヲする」「BニCヲする」「CヲDニする」「…CヲE

ニする」「…ガする」「…トする」「…ハ…数量…する」「…ハ…ニする」と8つの文型を提示している。安達太郎(1999)では、自動詞型の「する」(Nがする)、他動詞型の「する」(NがNをする、Nが(Nを)Nにする、NがNをNにする、NがNをAする)、思考・発言動詞型の「する」((Nが)とする、Nからすると)という3つの型・7つの文型を提示する。『日本語基本動詞用法辞典』(1989)では、「する」の意味を17に分け、さらにその中でどのような意味の名詞をとるかによって下位分類し25個の文型に分けている。このように、広いものは25個の文型、少ないもので7つの文型が示されており、分類にはばらつきがある。つまり、構文の記述と言っても分類の基準については議論されていないのである。

そこで、本章では今一度「格」について振り返り³²、「する」の語彙的・統語的特徴を明らかにし「する」文の多様性を見るための手段として、格の定義やその認定、格の種類や区別に関する問題を論じておく必要がある。

2.2.2. 格

格の定義は「名詞・代名詞が文中で他の語とどのような関係にあるかということ(すなわち統語関係)を示す文法範疇(『現代言語学辞典』1988)」であり、主格、対格、与格、奪格、属格、処格、具格、呼格などがある。印欧諸語を中心とする伝統文法では、屈折に基づき、原則として異なる語形を持つ場合にだけ格を認めてきた。例えば、サンスクリット語の8格(主・対・与・奪・属・処・具・呼)、ギリシア語の5格(主・対・与・奪・呼)、ラテン語の6格(主・対・与・奪・属・呼)などである。各語形は特定の意味領域と対応すると考えられ、例えば、主格は陳述の主体、対格は動作の客体、属格は名詞の限定、呼格は呼びかけを表す。しかし、現代英語は、屈折によって区別される格が人称代名詞の属格及び第一人称・第三人称の目的格しかないので、語順や前置詞によって表される統語関係を考慮に入れ格を規定している。日本語は名詞の屈折がなく、上記のような格は存在しないが助詞によって統語関係を表示することができる。伝統文法で行われた格の規定を狭義の格とすると、狭義の格における名称である主格・対格・与格・目的格といった名称をそのまま引き継いで日本語の格表記に用いるのは適当ではない。なぜなら、研究史上の意味のみならず、一つの語形が一つの格を表すとは限らず、例えば日本語の「ガ」は主格にも対象格にもなるからである。また、統語関係と言いながら、すでにこれらの名称には意味的な側面が含まれている。

統語関係を示す格とは別に、もう一つ考慮すべき格が意味関係を示す格である。Fillmoreによって1960年代後半から1970年代にかけて提唱された格文法における、「深層の格」と言われる格である。文は命題とモダリティから構成され、文の中核をなす命題が動詞と一つあるいはそれ以上の名詞句から成ると考え、さらに、動詞によってそれらの名詞句の数と種類が規定されると考えた。名詞句の種類を分けるのが意味的な格範疇であるAgent、Object、Source、Goal、Experiencerなどである。ただし、日本語の場合、動詞述語文だけでなく形容詞や形容動詞を述語に持つ文³³もあるので、動詞だけではなく、これらも考察に入れる必

³² 格の認定そのものは本研究の目指すべきものではないが、先行研究を振り返り、形式格と意味格の代表的なものを整理し「する」文の多様さを適切に把握したい。

³³ 日本語の形容詞や形容動詞は単独で述語になるため用言とされた。

要がある³⁴。また、名詞と名詞との連体関係もある。

したがって、本章では格の記述において、「名詞が文中で他の語と持つ文法的な関係を示す形式」のことを統語関係を表す格（形式格・表層格）、「名詞が文中で他の語と持つ意味的な関係」のことを意味関係を表す格（意味格・深層格）とに分け、用いることとする。

2.2.3. 形式格・表層格

仁田義雄（2005）は「述語に対する表層格には、ガ格・ヲ格・ニ格・ヘ格・カラ格・ト格・デ格・ヨリ格・マデ格がある（p97）」とする。また、名詞に対するものは「ノ格³⁵」であり、さらにそれを分化させた「ヘノ」「カラノ」「トノ」「デノ」「ヨリノ」「マデノ」があるとし、全部で 10 の格を認定している。

村木新次郎（1991）は、述語との関係を表すものに主格（ガ）、対格（ヲ）、与格（ニ）、出発格（カラ）、方向格（ヘ）、共同格（ト）、比較格（ヨリ）、状況格（デ）といった「格助辞」の存在を指摘する。さらに文法格には「ガ、ヲ、ニ（与格）」があり、これらは他の形式よりも優位に立ち、これらを取り巻く形で広義の場所格としての「ニ（位格）、カラ、ヘ」と、基準・異同・対称・比較などの抽象的な関係を表す関係格としての「ニ（依拠格）、ト、ヨリ」があるとした。また、この他に「副詞相当句をつくる状況格としてのデと数量格のφ（一時間、三キロ、…）」を挙げている³⁶。ニ格のみ意味機能との関わりから 3 つに分けているが、無格を取り込み、全部で 9 の格を挙げる。

その他、益岡隆志・田窪行則（1987、1992）はノを除く 9 の格を、青木伶子（1980）は連用格助詞のマデを除きシテを加えた 10 と連体格助詞としてノ・ト・ニの 3 つの格を、高橋太郎（2005）はハダカ格とマデニを加え、ヨリを除いた連用格 10 と、ノ・ヘノ・デノ・トノ・カラノ・マデノの連体格 6 を挙げている。

この中から、最も一般的な「ガ・ヲ・ニ・ヘ・カラ・ト・デ・ヨリ・マデ」の 9 つの格助詞と、ハダカ格に該当する無格を形式格として取り上げることとする。格助詞を入れるのは、その名詞が動詞「する」とどのような関係にあるかを表す格に値するからであり、また、無格の名詞もまた「する」と共起する重要な要素であるためである。その他、格助詞相当の語句として、ヲシテ、ヲモッテ、ニツイテ、ニオイテ、ニヨッテ、ニトッテ、ニシテ、ノタメニ、ノヨウニ、トシテなどがあるが、複合的なものなので記述には入れない。また、ノは名詞と名詞の関係を表すものであり、「する」との関係を示すものではないため、除外する。

³⁴ 山岡政紀（2000b）で、Fillmore の「意味格が『名詞類の動詞に対する意味関係』と定義されているのは、英語の統語構造が念頭にあるからであり、日本語であれば、形容詞述語や名詞述語との関係も同列に論じなければならないはずである。（p26）」とある。

³⁵ 「ノ」は「準副体助詞（橋本進吉 1934）」とされ、格助詞から外される考えもある。

³⁶ 村木（1991）は「文法格の中では、主格は対格よりも、対格は与格よりも優位にある（p145）」と形式格の優劣についても述べている。また、格助辞「ニ」は、文法格（弟にわたす）、場所格（東京にいる）、関係格（叔父に似る）の 3 つのグループにまたがる位置を占めることや、場所格のグループは特に主格と対格の名詞の広義の場所（静的場所・起点・着点）を規定すること、また、関係格のグループは特にそれらの名詞の抽象的論理的な関わりを規定することなど、相互の関係性についても言及する。

2.2.4. 意味格・深層格

外崎淑子（2005）に『文』が構築されるためには、その要となる動詞（述語）がまず必要であり、その動詞が最低限必要とする要素が選ばれ、その要素の役割が明らかになることで、文は構築される（p5）」とある。動詞（述語）が最低限必要とする要素「項 argument」と、無くても文が不完全になることはない「付加詞 adjunct」がある。能動文における項は「動作主と対象であり、その他の意味役割は述語によって付加詞にもなる（p7）」と述べる。意味役割は「経験的に設定される（p6）」とする点が格認定の方法として弱い、以下のよう
に意味役割の定義を述べている点で有効である。以下にそれを表にまとめなおす³⁷。

表 1. 外崎（2005）による意味格と形式格の対応

| 意味役割 | 定義 | 形式格 |
|---------------------|-------------------------------|-----|
| 1 動作主 (Agent) | 述語によって表される活動を意図的に起こす主体 | ガ |
| 2 原因 (Causer) | 述語によって表される変化を引き起こす原因 | デ |
| 3 受動者 (Patient) | 述語によって表される活動によって影響を受ける主体 | ヲ |
| 4 対象 (Theme) | 述語によって表される活動によって移動・変化する主体・変化体 | ヲ |
| 5 経験者 (Experiencer) | 述語によって表される（心理的）状態を経験する主体 | ガ |
| 6 着点 (Goal) | 述語によって表される活動が向う点 | ニ |
| 7 起点 (Source) | 述語によって表される活動の結果として何かが動く際の出所 | カラ |
| 8 場所 (Location) | 述語によって表される活動の場所や、対象が存在する場所 | デ、ニ |
| 9 受益者 (Benefactive) | 述語によって表される活動から利益を得る主体 | ニ |
| 10 道具 (Instrument) | 述語が表す動作を可能とする道具 | デ |

意味格として 10 が設定されている。先行研究の何を参考にしているかについては明記していないが、当然 Fillmore に連なる理論を背景にしていることは明白である。

山岡政紀（2000b）では、一文の果たす機能という文機能の観点から日本語文を分析する上で、意味格を用いている。あらかじめ、分析の道具としての意味格について Fillmore (1968) を元に規定している。意味格の具体的な定義はないが、一つの形式格を複数の意味格に解釈する場合の根拠として文法現象を取りあげている点が、経験的・直観的に解釈されやすい意味格を客観的に捉える上で大変参考になる。例えば、受動化、他の格助詞との言い換えなどの文法的なテストである。以下に簡略化して表にする。

表 2. 山岡（2000b）による意味格と形式格の対応

| 意味格 | | 形式格 |
|--------|---------|--------|
| 1 動作主格 | Agent | ニ、ガ、デ |
| 2 対象格 | Object | ガ、ヲ、ト |
| 3 相手格 | Patient | ニ、カラ、ト |

³⁷ いずれの表も格助詞のみを取り入れた。

| | | |
|---------|--------------|--------|
| 4 起点格 | Source | ニ、ガ、カラ |
| 5 目標格 | Goal | ニ、へ、マデ |
| 6 経験者格 | Experiencer | ニ、ガ |
| 7 道具格 | Instrumental | デ |
| 8 原因格 | Cause | ニ、ガ、デ |
| 9 場所格 | Local | ニ、ヲ、デ |
| 10 基準格 | Criteria | ニ、ヲ、ヨリ |
| 11 受益者格 | Beneficiary | ニ、ガ |

意味格として 11 が規定されている。

仁田義雄（1993）では、「動詞が文を生成するにあたって、自らの表す動き・状態・関係の実現・完成に必須的に参画する関与者を表した成分」を「共演成分」とし、その抽出において、意味だけをその根拠にするのではなく、主題化、連体修飾節の主要語化、分裂文の焦点部化、付加・削除の制約の 4 つのテストを用いている³⁸。その結果、「N ガ」「N ヲ」「N ニ」「N カラ」「N ト」「N デ」が共演成分として抽出され、意味格は「格的意味」として表示されている。表にまとめると以下のようなになる（※：主要格・文法格、その他：副次的格）

表 3. 仁田（1993）による意味格と形式格の対応

| 格的意味 | 定義 | 形式格 |
|--------|-----------------------------|--------|
| 1※主 | 動きや状態を体言する項 | ガ、カラ、デ |
| 2※対象 | 動きがめざす対象 | ヲ |
| 3※相方 | 動きや状態の成立の一端を担う相手 | ニ、カラ、ト |
| 4※基因 | 動きや状態を引き起こす原因となる項 | ニ、デ |
| 5 出どころ | 主体や対象の出立点や離点を表した項 | ヲ、カラ |
| 6 ゆく先 | 主や対象の目標や着点を表した項 | ニ、へ |
| 7 ありか | 主や対象の存在・所属する空間的・非空間的場所を表した項 | ニ、ト |
| 8 経過域 | 動きが経過する領域を表した項 | ヲ |

意味格として 8 つが記述されている。

村木新次郎（1991）では、「述語を中心に文の構造をとらえる立場（p138）」をとり、「日本語の文構造を、述語がいくつかの補語（＝アクタント、共演成分）とむすびついて文の骨格をつくっている（同）」と考える。「日本語の名詞の格の体系にもとづき、主格および対格の、他の格に対する優位性が考慮されている点に特徴がある（p138）」とあるように、ガ、ヲ、ニを文法格として他の格から区別する。その根拠はノ、ハ、ダケ、バカリの後接の仕方、ヴォイスの格の交替現象、数量詞遊離、格形式が ϕ になる格、形式動詞「する」との結合、の 5 つである。そのうえで、名詞と動詞の間に成り立つ関係概念を「叙述素」と呼んだ。そ

³⁸ 「こういった基準も一応の目安といったものに過ぎない（仁田 1993：6）」と述べ、最終的には意味論に関するものであることを述べている。

れを以下に表としてまとめなおす。各形式の組合せで、叙述素が対応する形式格には下線を付すこととする。

表 4. 村木（1991）による意味格と形式格の対応

| 叙述素 | 定義 | 格形式の組合せ |
|-----------|---------------------|---------------------------------|
| 1 空間的位置 | （具象語）が存在するところ | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 2 非空間的位置 | （非具象語）が存在するところ | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 3 空間的起点 | （具象語）が起点となるところ | [ガ／ヲ、 <u>カラ</u>] |
| 4 空間的着点 | （具象語）が着点となるところ | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 5 方向 | 至るところ、または方角 | [ガ／ヲ、 <u>ヘ</u>] |
| 6 空間 | V する空間 | [ガ／ <u>ヲ</u>] |
| 7 時間 | V する時間 | [ガ／ <u>ヲ</u>] |
| 8 範囲 | V するときの範囲 | [ガ、 <u>ニ</u>] |
| 9 対称 | 共同者 | [ガ／ヲ、 <u>ト</u>] |
| 10 関連 | 関係づけられる基準 | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 11 比較 | 比較の対象 | [ガ／ヲ、 <u>ヨリ</u>] |
| 12 資格 | 資格 | [ガ、 <u>デ</u>] [ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 13 内容 | 着点となる物事や事柄の内容 | [ガ／ヲ、 <u>ト</u>] |
| 14 相手 | 物品・情報が移動する相手 | [ガ／ヲ、 <u>ニ／カラ</u>] |
| 15 数量 | 数量 | [ガ／ヲ、 <u>Φ</u>] |
| 16 起因 | V する起因 | [ガ、 <u>ニ</u>] |
| 17 動機 | V する後の出来事 | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 18 逆動機 | V する前の出来事 | [ガ、 <u>カラ</u>] |
| 19 非空間的起点 | （非具象語）が起点となる物事 | [ガ／ヲ、 <u>カラ</u>] |
| 20 非空間的着点 | （非具象語）が着点となる物事 | [ガ／ヲ、 <u>ニ</u>] |
| 21 対象（出現） | V する結果、出現するもの | [<u>ガ</u>] [ガ、 <u>ヲ</u>] |
| 22 対象（消滅） | V する結果、消滅するもの | [<u>ガ</u>] [ガ、 <u>ヲ</u>] |
| 23 対象（変化） | V する結果、変化するもの | [<u>ガ</u>] [ガ、 <u>ヲ</u>] |
| 24 対象（受影） | V する結果、作用するが変化しないもの | [ガ、 <u>ヲ</u>] |
| 25 動作主 | 意志をもって V しうる | [<u>ガ</u>] |
| 26 態度 | V する（精神活動の）対象 | [ガ、 <u>ニ</u>] |
| 27 対象 | 21～24 の特徴をもたないもの | [<u>ガ</u>] [(ガ)、(<u>ヲ</u>)] |
| 28 手段 | V するときに用いる手段・道具 | [ガ、 <u>デ</u>] |
| 29 部分 | 部分 | [ガ、 <u>ガ／ヲ／ニ／カラ／デ</u>] |
| 30 焦点 | 側面 | [ガ、 <u>ガ</u>] |

叙述素は意味格として解釈できるので、30 の意味格があることになるが、「こうした叙述素には、互いに近似しているため統合してよいものもある (p167)」とし、統合できるものは、

3、19、14、16 で広義の「起点」、4、20、14 で広義の「着点」、1、2、6、7、8 で広義の「位置」、12、13 で「同定」、と 21 の広分類ができる。格の組み合わせまでまとめている点は参考になる。

深層格あるいは意味格の規定を行ない、格文法を提唱した Fillmore の意味格の規定について簡単に確認する。フィルモア (1975) は、“The Case for Case” (1968) と格文法関係の論文 5 編を一緒にし、著者の指示もあり原文にない修正も行われている。これを元に訳出された語と原典の英語表記をあわせてまとめると以下の表になる。「語彙情報の種類」という論文では、7 つの格を提示している (p201)。これを 1 と表示する。さらに「格文法の諸問題」という論文において「次のような格に落ち着くようになった」と 8 つの格を提示する (p244)。これを 2 と表示する。

表 5. Fillmore の意味格

| 格概念 (略語) | 原語 | 定義 | 出典 |
|------------|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 1 動作主格 (A) | Agent | 出来事を引き起こす者。何かの行為をする者ある動作を引き起こす者の役割。 | 1、2 |
| 2 対象格 (O) | Object | 動いたり変化したりする実体。その位置や存在が考慮されている実体。動作主の行為または行為提供、移動する対象物や変化する対象物。判断、想像のような心理事象の内容を表す役割。 | 1、2 |
| 3 結果格 (R) | Result | 動作の結果として存在するようになる実体。 | 1 |
| 4 道具格 (I) | Instrument | ある出来事の刺激または直接の物理的原因。ある出来事の直接原因。ある心理事象と関係して反応を起こさせる刺激となる役割。 | 1、2 |
| 5 源泉格 (S) | Source | 何かが移動する際の起点となる場所。対象物の移動における起点。状態変化や形状変化における最初の状態や形状を表す役割。 | 1、2 |
| 6 目標格 (G) | Goal | 何かが移動する際の到着点となる場所。その行為や行為提供の方向またはそれを受ける者。対象物の移動における終点。状態変化や形状変化における最終的な状態、結果を表す役割。 | 1、2 |
| 7 経験者格 (E) | Experiencer | ある動作の影響を受けたり経験したりする実体。ある心理事象を体験する者の役割。 | 1、2 |
| 8 時間格 (T) | Time | ある出来事が起こる時間を表す役割。 | 2 |
| 9 場所格 (L) | Location | ある出来事が起こる場所及び位置を表す役割 | 2 |

2 で消えた「結果格」は「目標格」に吸収された。例えば「詩を書いた」、「橋をかけた」の「詩」や「橋」は「述語で表される行為が行われた結果、存在するようになった事物の最終結果」なので、「ある動作や変化の後期の状態または最終結果を表すために使われる」目標

格だとされる。また、新しく加えた「時間格」「場所格」は「あらゆる述語の任意的な補助部」³⁹だと述べる。

2.2.5. 本研究における意味格の設定

以上の意味格の分類を参考に、本研究で用いる意味格を以下にまとめる。まず、村木(1991)の分類は詳細ではあるが30の意味格は記述においては煩雑であり、簡潔である方が望ましいと考える。一方、仁田(1993)の分類は簡潔にまとめているが、感情や感覚を経験する経験者という意味格がなく主格のみである点は、「する」のような多様な性質を示す動詞の文を記述するには大枠に過ぎる。そこで、山岡(2000)と外崎(2005)、フィルモア(1975)をベースにして意味格を考える。

表 6. 本研究における意味格と形式格の対応―「する」文を分析するために

| 意味格 | | 定義 | 形式格 |
|---------|-------------|------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 1 動作主格 | Agent | 述語の表す活動・行為・動作を行う主体。また、出来事を引き起こす者。 | ニ、ガ、デ |
| 2 対象格 | Object | 述語の表す活動・行為・動作によって移動・変化・影響を受ける主体。判断・想像などの心理事象の内容。述語の表す状態の主体。述語の表す動作・状態の具体的内容。 | ガ、ヲ、ト |
| 3 相手格 | Patient | 述語の表す活動・行為・動作の相手。 | ニ、カラ、ト |
| 4 起点格 | Source | 述語の表す活動・行為・動作の結果、何かが移動する際の起点。および状態変化における最初の状態。 | ニ、ガ、カラ |
| 5 目標格 | Goal | 述語の表す活動・行為・動作が向うところ。移動の到着点・終点。状態変化や事態認定の後の状態、結果。 | ニ、へ、マデ、ト |
| 6 経験者格 | Experiencer | 述語の表す心理事象を経験する主体。 | ニ、ガ |
| 7 道具格 | Instrument | 述語の表す活動・行為・動作を可能にする道具。 | デ |
| 8 原因格 | Cause | 述語の表す変化・出来事・動作・心理事象の原因、理由。 | ニ、ガ、デ |
| 9 場所格 | Location | 述語の表す活動・行為・動作の場所や、対象が存在する場所や位置。 | ニ、ヲ、デ |
| 10 基準格 | Criteria | 述語の表す性質の基準になるもの。 | ニ、ヲ、ヨリ |
| 11 受益者格 | Benefactive | 述語の表す活動・行為・動作によって利益を得る主体。 | ニ、ガ |
| 12 数量格 | counter | 述語の表す数量的な具体的内容。 | φ |

³⁹ ただし「動詞によっては、場所格と時間格の補助部を直接とるものもある (p 256)」として、be<ある>の一用法、live<住む>、spend<過ごす>をあげている。

本研究では、道具格と原因格を別に立てた。その理由は、「ナイフでりんごを切る」は、「ナイフを使つてりんごを切る」と言い換えられるが、「病氣で体を壊す」は「病氣を使つて体を壊す」とは言えないためである。

また、相手格と目標格も区別した。例えば「A さんとご飯を作る」のト格名詞は、目標格より相手格とした方が意味的に合う。加えて「B さんにりんごを送る」(目標格)は、「B さんがりんごを送ってもらった」「りんごが B さんに送られた」となるが、「A さんにご飯を作る」(相手格)は「A さんがご飯を作ってもらった」「*ご飯が A さんに作られた」となり、元の文と意味が変化するので、両者の意味格は異なると考え、相手格を設定した。

受益者格も目標格や相手格と似ているものではあるが、「C さんにお金を援助する」(受益者格)は「C さんがお金を援助してもらった」「?お金が C さんに援助された」となり、相手格や目標格とは異なる。また「D さんに迷惑をかける」は「*D さんが迷惑をかけてもらった」となり、これは利益を得ることの反対であるため目標格となる。

基準格は、日本語には比較の基準を表すヨリがあるため、これも意味格として立てることにしたい。

最後に、「受検に 6000 円かかる」の下線部は格助詞が付かないが無くてはならない要素であるためここに加えた。なお、いずれも必須要素になりうるものを立てた。場所格は必須項ではないとされるが、例えば「主要な道路が日本海側を通る」のヲ格名詞は動詞にとって必須である。一方、時間格「5 時に図書館へ行った」のニ格名詞は必須になることがないと考えられるため、上記には入れなかった。

2.2.6. 「する」と意味格

以上の意味格を動詞「する」で考えてみたい。

- (1) トランプをする。
- (2) 立ち読みをする。
- (3) 難しい判断をする。
- (4) マスクをする。
- (5) 青い目をしている。

上記のようなヲ格が何を意味するかと言えば、(1) ～ (3) は「する」の具体的な内容であり、「彼を叩く」「ケーキを食べる」のような動作の影響を受ける対象とは異なる。フィルモア (1975) に「判断、想像のような心理事象の内容」が対象格にあることを考えると、このような「動作の内容」が対象格の範疇であっても整合性がないわけではない。ところが、(4) (5) のヲ格は意味を抽出することが難しい。動作の対象でも動作の内容でもない。(4) はマスク、ネクタイ、ネックレスなどの身に着けるものをヲ格にとる装着を意味する語結合であり、通常のヲ格とは異なる。(5) は、そもそも「する」が動作ではない。あえて言うならば、「述語の表す状態の具体的内容」である。このような名詞と動詞の意味関係は別に考察することとする。

- (6) 街を調査する。

このような、名詞（特に漢語）が「する」と結合していわゆるサ変動詞を成す場合にのみ、ヲ格が持つ最も一般的な「動作の対象」という意味役割が生じるということを特記しておく。

(7) 問題とする。

(8) 医者にする。

(9) 頭痛がする。

(10) コピーは一枚 10 円した。

(7) (8) のト格、ニ格は事柄認定の目標、変化の結果を表すので、目標格とする。は、動作の表す具体的な内容とすれば対象格となる。(9) のガ格も (10) の無格も、「する」が状態を表しており、述語の状態の具体的な内容を示すもので (5) に似ている。無格の名詞が無いとこの文が成立しないため、これを数量格として認定した。

ここで断っておきたいのは、これらを既存の意味格の中に位置づけようとすると些かはみ出す形となり、特異な存在であることが浮き彫りにされることである。これが「する」という動詞の特質でもある。

第3節「する」文の格構造

「する」文に現れる語の品詞と後続する助詞（形式格）、さらに意味格を記述することで格構造を明らかにする。複合的な格助詞相当については煩瑣になるために行わない。また、2.1.1 でも述べたとおり形式格には文の骨組みとして重要な格とそうでない格がある（村木（1991）ガ、ヲ、ニの3つが基本。仁田（1993）ガ、ヲ、ニ、カラ、ト、デが必須項）。そのため、以下では構文にとって必須の格を中心に記述し⁴⁰、連体関係を表すノ、ト、ヤなど必須ではないものは省くこととする⁴¹。

これによって、「する」がどのような語と共起し、どのような格が付与されるのか、また動詞が求める意味的な資格は何か明らかにでき、「する」の文法的機能や意味の広がり把握されると考える。以下、大きく自動詞構文と他動詞構文に二分してまとめる。なお、広がり全体を捉えるために、格だけでなく、名詞以外の品詞に関わる文や表現の全てを以下では記述することとする。

2.3.1. 「する」自動詞構文

名詞と「する」が結合してできる「～する」の動詞（サ変動詞）、「～がする」「擬態語・擬音語する」「形容詞・形容動詞する」「副詞する」「文にする」「文とする」などの自動詞文である⁴²。

⁴⁰ 必須項の判断は仁田（1993）の動詞の共演成分の抽出方法である（1）主題化、（2）連体修飾節の主要語化、（3）分裂文の焦点部化、（4）付加・削除の制約、の4つのテストを参考に考える。また、場所格については「船は日本海側を通る」のように必須になるものもあるため、デやニについても記述した。

⁴¹ 「傘と鞆を拾う」のト格は、名詞と名詞の意味関係を表わす格である。このような名詞の関係を表わす格については、すべての名詞と名詞との間で可能なものであるため、形式格の記述は行わない。

⁴² 「お手伝いする」「ご説明する」などの謙譲語に入る「する」の例も、その広がりを捉えるという趣旨から入れてある。

表7 「する」自動詞構文の形式格と意味格

| | 「スル」構文 | 意味格・形式格 |
|----|----------------------------|-------------------|
| 1 | 名詞ガ 名詞スル | 対象格ガ 数量格 |
| 2 | 名詞ガ 名詞デ 名詞スル ⁴³ | 動作主格ガ 場所格デ |
| | | 動作主格ガ 原因格デ |
| | | 動作主格ガ 道具格デ |
| | | 対象格ガ 原因格デ |
| 3 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞スル | 動作主格ガ 目標格ニ |
| | | 動作主格ガ 相手格ニ |
| | | 動作主格ガ 場所格ニ |
| | | 対象格ガ 目標格ニ |
| | | 対象格ガ 相手格ニ |
| | | 対象格ガ 場所格ニ |
| | | 対象格ガ (場所格ニ) |
| | | 経験者格ガ 対象格ニ |
| | | 経験者格ガ 相手格ニ |
| | | 対象格ガ 基準格ニ |
| | | 対象格ガ 対象格ニ |
| 4 | 名詞ガ 名詞ヘ 名詞スル | 動作主格ガ 目標格ヘ |
| 5 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ニ 名詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 対象格ニ |
| | | 経験者格ガ 場所格デ 相手格ニ |
| 6 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞スル | 対象格ガ 原因格カラ |
| | | 動作主ガ 起点格カラ |
| 7 | 名詞ガ 名詞デ 名詞カラ 名詞スル | 動作主ガ 場所格デ 原因格カラ |
| 8 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞マデ 名詞スル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ |
| | | 対象格ガ 起点格カラ 目標格マデ |
| 9 | 名詞ガ 名詞ト 名詞スル | 対象格ガ 対象格ト |
| 10 | 名詞デ 名詞ト 名詞トガ 名詞スル | 原因格デ 対象格ト 対象格トガ |
| 11 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ト 名詞スル | 動作主ガ 場所格デ 相手格ト |
| 12 | 名詞スルト、名詞カラ 名詞スルト | 起点格カラ |

⁴³ 「名詞スル」はサ変動詞を指す。

| | | |
|----|----------------------|------------------------------------|
| 13 | 名詞ガ 擬態語・擬音語スル | 対象格ガ |
| 14 | 名詞ガ 名詞ガ 名詞デ 擬態語スル | 経験者格ガ 経験者格（部分）ガ 原因格デ |
| 15 | 名詞ガ 名詞ニ 擬態語スル | 経験者格ガ 対象格ニ |
| 16 | 名詞ガ 名詞デ 擬態語スル | 動作主格ガ 場所格デ |
| 17 | 名詞ガ 名詞ト 名詞デ 擬態語スル | 動作主格ガ 相手格ト 場所格デ |
| 18 | 名詞ガ 名詞ガ 擬態語シテイル | 対象格ガ 対象格（知覚対象）ガ |
| 19 | 名詞ガ 名詞ニ 形容詞・形容動詞スル | 動作主格ガ 相手格ニ |
| 20 | 名詞ガ 名詞デ 副詞スル | 動作主格ガ 場所格デ |
| 21 | 副詞スルト | |
| 22 | 名詞ガ 名詞ガスル | 経験者格ガ 対象格ガ 対象格ガ 対象格ガ |
| 23 | 名詞カラ 名詞ガスル | 起点格カラ 対象格ガ 経験者格ガ 原因格カラ 対象格ガ |
| 24 | 名詞デ 名詞ガスル | 場所格デ 対象格ガ 経験者格ガ 原因格デ 対象格ガ |
| 25 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞ガスル | 経験者格ガ 対象格ニ 対象格ガ |
| 26 | 対象格ガスル | 対象格ガ |
| 27 | 名詞ガ 文コトニスル | 動作主格ガ 文コト 目標格ニ |
| 28 | 名詞ガ 文トイウコトニスル | 動作主格ガ 文トイウコト 目標格ニ |
| 29 | 名詞ガ 文ヨウニスル | 動作主格ガ 文ヨウニスル |
| 30 | 「名詞ニスル」条件節 | 対象格ニ |
| 31 | 文トスル | 文 対象格ト |
| 32 | 文（～ヨウ）トスル | 文（～ヨウ） 対象格ト |
| 33 | 名詞ガ 文トスル | 動作主格ガ 文 対象格ト |
| 34 | 名詞ガ 文コト トスル | 動作主格ガ 文コト 対象格ト |
| 35 | 名詞ガ 動詞サエ／バカリ／スラ／マデスル | 動作主格ガ |
| 36 | 「名詞／文カラスル」条件節 | 起点格カラ |
| 37 | 「名詞ニスル」条件節 | 対象格ニ |
| 38 | 名詞ガ 動詞タリ動詞タリスル | 対象格ガ |
| 39 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ニ オ動詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ 動作主格ガ 場所格デ 受益者格 |

| | | |
|----|-------------------|-----------------|
| | | ニ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 目標格ニ |
| | | 動作主格ガ 原因格デ 相手格ニ |
| 40 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ト オ動詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ト |
| 41 | 名詞ガ 名詞ニ ゴ名詞スル | 動作主格ガ 相手格ニ |

2.3.2. 「する」他動詞構文

名詞と「する」が結合してできる「～する」と、「擬態語・擬音語する」「形容詞する」「～にする」「～とする」「～をする」などの他動詞構文がある。

表 8 「する」他動詞構文の形式格と意味格

| | 「スル」構文 | 意味格・形式格 |
|---|----------------------|-----------------------|
| 1 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞スル | 対象格ガ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 対象格ヲ |
| | | 対象格ガ 基準格ヲ |
| 2 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格デ 対象格ヲ |
| | | 対象格ガ 対象格ヲ |
| 3 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 目標格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 相手格ニ 対象格ヲ |
| 4 | 名詞ガ 名詞ヘ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 目標格ヘ 対象格ヲ |
| 5 | 名詞ガ 名詞ヨリ 名詞ヲ 名詞スル | 経験者格ガ 基準格ヨリ 対象格ヲ |
| 6 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ニ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 受益者格ニ 対象格ヲ |
| 7 | 名詞ガ 名詞ト 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 相手格ト 対象格ヲ |

| | | |
|----|---------------------------|------------------------|
| | | 動作主格ガ 相手格ト 場所格ヲ |
| 8 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ト 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ト 対象格ヲ |
| 9 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 相手格カラ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 起点格カラ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲ |
| | | 経験者格ガ 原因格カラ 対象格ヲ |
| 10 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ニ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格ニ 対象格ヲ |
| 11 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ヘ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格ヘ 対象格ヲ |
| 12 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞マデ 名詞ヲ 名詞スル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ 対象格ヲ |
| 13 | 名詞ガ 名詞ヲ 擬音語スル | 動作主格ガ 対象格ヲ |
| 14 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞デ 擬態語・擬音語スル | 動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲ |
| 15 | 名詞ガ 名詞ヲ 形容詞・形容動詞スル | 動作主ガ 対象格ヲ |
| 16 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ヲ 形容詞・形容動詞スル | 動作主ガ 道具格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格デ 対象格ヲ |
| 17 | 名詞ガ 名詞ヨリ 名詞ヲ 形容詞・形容動詞スル | 動作主格ガ 基準格ヨリ 対象格ヲ |
| 18 | 名詞ガ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 対象格ヲ |
| 19 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲ |

| | | |
|----|---------------------|------------------------|
| | | 動作主格ガ 原因格デ 対象格 |
| 20 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 目標格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 場所格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 相手格ニ 対象格ヲ |
| | | 経験者格ガ 相手格ニ 対象格ヲ |
| 21 | 名詞ガ 名詞ヘ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 目標格ヘ 対象格ヲ |
| 22 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ニ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 受益者格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 道具格デ 相手格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主ガ 原因格デ 場所格ニ 対象格ヲ |
| 23 | 名詞ガ 名詞ト 名詞ヲスル | 動作主格ガ 相手格ト 対象格ヲ |
| 24 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ト 名詞ヲスル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格ト 対象格ヲ |
| 25 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 相手格カラ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 起点格カラ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲ |
| | | 経験者格ガ 起点格カラ 対象格ヲ |
| 26 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ニ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格ニ対象格ヲ |
| 27 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞ヘ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格ヘ 対象格ヲ |
| 28 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞マデ 名詞ヲスル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ 対象格ヲ |

| | | |
|----|----------------------------------|---------------------------------|
| 29 | 名詞ガ 連体修飾句＋名詞ヲシテイ ル | 対象格ガ 対象格ヲ |
| 30 | 名詞デ 名詞ヲスル | 動作主格デ 対象格ヲスル |
| 31 | 名詞ガ (名詞ヲ) 名詞ニスル | 動作主格ガ 目標格ニ |
| 32 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞ニスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 目標格 ニ |
| | | 経験者格ガ 対象格ヲ 目標格 ニ |
| 33 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞カラ 名詞ニ スル | 動作主格ガ 対象格ヲ 起点格 カラ 目標格ニ |
| 34 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞カラ 名詞マ デニスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 起点格 カラ 目標格マデ 目標格ニ |
| 35 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞カラニスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 起点格 カラ 目標格ニ |
| 36 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞マデニスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 目標格 マデ 目標格ニ |
| 37 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞トスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 対象格 ト |
| 38 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞カラトスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 起点格 カラ 対象格ト |
| 39 | 名詞ガ 名詞ヲ 名詞マデトスル | 動作主格ガ 対象格ヲ 目標格 マデ 対象格ト |
| 40 | 名詞ガ 名詞カラ 名詞マデ 名詞 トスル | 動作主格ガ 起点格カラ 目標 格マデ 対象格ト |
| 41 | 名詞ガ 名詞ヲ 動詞連用形サエ／ バカリ／スラ／マデ スル | 動作主ガ 対象格ヲ |
| 42 | 名詞ガ 名詞ヲ 動詞タリ動詞タリ スル | 動作主ガ 対象格ヲ |
| 43 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ニ 名詞ヲ オ動詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格 ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 受益者 格ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 場所格デ 目標格 ニ 対象格ヲ |
| | | 動作主格ガ 原因格デ 相手格 ニ 対象格ヲ |
| 44 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ヘ 名詞ヲ | 動作主格ガ 場所格デ 目標格 |

| | | |
|----|--------------------------|--------------------------|
| | オ動詞スル | へ 対象格ヲ |
| 45 | 名詞ガ 名詞デ 名詞ト 名詞ヲ オ動詞スル | 動作主格ガ 場所格デ 相手格 ト 対象格ヲ |
| 46 | 名詞ガ 名詞ヲ ゴ名詞スル | 動作主格ガ 対象格ヲ |

以上、自動詞構文に 41、他動詞構文に 46 の文の種類が見られた。

ここまで、構文を記述する枠組みとして格について論じ、その枠組みに基づいて「する」構文を分析した結果、膨大な構文が存在することが表 7 と表 8 としてまとめられた。

第 4 節 「する」と共起する名詞の種類

さて、形式格と意味格の 2 点を記述することで動詞「する」が多様な構文を成すことがわかり、統語的・語彙的な特徴をある程度見出すことができた。しかし、「する」の持つ多様性と広がり进行を明らかにするには、これではまだ不十分である。

例えば、「名詞をする」は、形式格としてヲ格を、そしてそのヲ格は意味格としては対象格である。「名詞をする」の骨組みはこのように「名詞ヲ(対象格)する」とシンプルだが、このヲ格に立つ「名詞」の方はそう単純なものではなく、寧ろ多種多様で複雑な様相を呈している。具体例を挙げれば、「掃除をする」「調べものをする」「ピアスをする」「変な顔をする」「役員をする」「くしゃみをする」「ゲームをする」など動作、行為、装身具、表情、役割、生理現象、遊びなどである。したがって、「する」と共起する名詞の種類を記述しなければ、その実態の全てを把握することにはならない。ここまで記述した構文が具体的にどのような名詞(句)をとるのか、それはどのように分類できるか、本節では動詞「する」と共起する「名詞の種類」を記述することを目指す。ただし、あまりにも「する」文が膨大な数に上るため、その全てを漏らさず完全な記述を行うことは不可能である。以下では、例文を提示する形で、その全体像を描き出すことを第一義とする。また、名詞の記述は「する」と最も近い位置で共起し連語を成すものについてのみ、その種類を記述することにした⁴⁴。

2.4.1. 「名詞ガスル」を述語とする文

名詞に格助詞「が」を後接して「する」と結合する以下のような文がある。

(9) 頭痛がする。

ガ格名詞の「頭痛」が何か動作や行為を行うわけではなく、この連語全体で「頭が痛い」ことを表す。したがって、動詞「する」は実質的な意味のほとんどを名詞に預け、述語という文法的な機能のみを担っている。そして、次の例に見るように、このガ格名詞は動作や状態の主体でもない。

⁴⁴ 本来は共起する全ての名詞についてその種類を記述したいと考えていたが、特に、サ変動詞を述語に持つ文については途方もなく動詞の数が多く、その全容を現段階では示すには至っていない。今後の課題としたい。

(9) ' 私は頭痛がする。⁴⁵

「私」の方が頭痛という痛みを感じる主体である。他にも、以下のような例がある。

(11) アップルパイは甘い香りがする。

この文は、「アップルパイ」が文の主語であり、それがどうであるかという述部に「甘い香りがする」が来ている。このことは、他に柴谷方良(1978)の主語認定の方法の一つ(主語によって敬語表現が呼応して発現する)を用いても確認することができる。

(12) a. 太郎は嫌な予感がしたらしい。

b. 先生は嫌な予感がされたらしい。

「太郎」を「先生」に変えた結果、その述語である「する」の尊敬語化が可能になっている。つまり、述語の「する」と呼応関係にある主語は「嫌な予感」ではなく「先生」であるということである。

このように実質的な意味は結合するガ格名詞句が担い、動詞「する」は述語としての文法的機能を果たすだけの文が「～がする」文である。また、ガ格名詞と動詞との結合の強さは非常に強く、二語でありながら、あたかも一語のような振る舞いを示す。したがって、このような文法的観点からも、「名詞がする」全体が一つの述語として文中で機能していることがわかるのである⁴⁶。

また、このことは、形式格としてガ格は出現するが、意味格としてこのガ格は独立したものと考えることはできないということである。意味格は「名詞が文中で他の語と持つ意味的な関係」であり、この定義の「他の語」とは、言うまでもなく述語を指している。「頭痛がする」「甘い香りがする」が述語になっているということから、この連語内のガ格を他のものと同レベルの意味格として抽出することはできない。この点は、先行研究において特に述べられることはなかったが、形式格と意味格の存在のずれとして指摘しておきたい⁴⁷。

以下では、第3節での記述を基に、「する」と最も近い位置に共起し連語を成す名詞の種類を[]の中に記す⁴⁸。

I. 自動詞構文

①経験者格ガ 対象格ガスル

[身体感覚、病理現象、心的感覚] ガスル

終いには息切れがして油汗が額から流れた。(あすなろ物語)

執念深い飢がいつもつきまとっている私から、明日から幸福になる前ぶれの風が吹いて来たような気がする。(放浪記)

⁴⁵ この例と次の例は、主格のガを用いずに主題のハを用いた文を載せたが、それは主題のハの文の方が自然な文だからである。しかし、元々はガ格と考えるべきであるため、「頭痛が」「甘い香りが」が主体や主格でないことは確かである。

⁴⁶ このような統語的な分析は第4章において詳細に行う。

⁴⁷ 格としての役割が他のものよりも低いという意味で「低格」、あるいは、その実質が無いという意味で「空洞格」と呼んでもいいかと考える。しかし、ここでは格の議論が中心ではないため、既存の格を用いて考察を進めることとする。

⁴⁸ 例文に出典があるものは()の中に入れた。その表示が無いものは作例である。また、例文にはナンバーを振らない。数が多く、例を使って考察するわけではないためである。

男はその様子をしばらく黙って見ていたが、急に吐き気がした。

これは、経験者格と対象格がどちらもガ格をとり、一般的には経験者格は主題化して「～ハ」となるか、あるいは第一人称の場合には形式化されないことも多い。「悪寒、寒気、頭痛、動悸、息切れ、めまい、肩こり、胸騒ぎ、耳鳴り、～予感、～気持ち、～気、～感じ」などがガ格に立つ。

②対象格ガ 対象格ガスル

修飾語〔嗅覚、味覚、聴覚〕ガスル

彼女の息は湿り気を帯びて生温かく、人間の肺から出たとは思えない、甘い花のような薫りがします。(痴人の愛)

お土産にもらった鈴がいい音がするんだ。このタオルが血の匂いがする。

これらの知覚を感じる経験者は存在することが想定されるが、文において形式化・顕在化することはなく、潜在的に存在することが考えられる文である。したがって、「*私はアップルパイが甘い香りがする」という文は現実的には用いられない。その知覚を感じる対象は主題化されて「～ハ」となることが多く、また知覚を表す名詞は修飾語を伴うという特徴がある。「～味、～音、～香り、～匂い」などがガ格に立つ。

③経験者格ガ 対象格ニ 対象格ガスル

(寒気、吐き気) ガスル⁴⁹

私はその浅ましい姿に寒気がした。太郎はそのにおいに吐き気がした。

その感覚を感じる対象としてニ格をとる文である。この格パターンをとるものは少ない。

④起点格カラ 対象格ガスル

〔聴覚、嗅覚〕ガスル

あしおとがする度、きき耳をたてる。(放浪記)

人間の足音がしても逃げようとしなかった。(パニック)

台所から焦げ臭いにおいがする。バラの花束から馥郁たる香りがした。

起点となる場所をカラ格として取り、「音、足音、声、におい、香り、振動」などをガ格に取る場合である。これも同様にこれらの事象を感じ取った主体としての経験者格はあるが、文の形式上、表には現れない。

⑤場所格デ 対象格ガスル

〔聴覚、嗅覚〕ガスル

遠くで多摩川電車のごうごうと云う音がする。(放浪記)

裏道で女の叫び声がした。屋上で喧嘩の声がある。台所でガス臭い匂いがする。

ある場所であることを知覚したことを表わす文で、④と同様に「音、声、匂い、香り」など

⁴⁹ 共起する名詞の種類が少なく項目名や分類としてまとめられない場合は、具体例として()の中に入れることにする。

聴覚と嗅覚のガ格が現れるものである。

⑥経験者格ガ 原因格カラ 対象格ガスル

〔病理現象〕 ガスル

太郎は疲れからめまいがしている。花子はあまりの緊張から動悸がし始めた。

カラ格をとる自動詞構文で、④起点格と⑥原因格がある。起点格をとる構文では、知覚を感じる経験者格は潜在的に存在し、文中に形式化されることはなかったが、原因格を取る構文では、知覚を感じる経験者格は文中に形式化することが可能で、主題化して文に出現することが多い。「病理現象」のガ格をとる。

⑦経験者格ガ 原因格デ 対象格ガスル

〔病理現象〕 ガスル

私は恐ろしさで寒気がした。次郎は風邪でめまいがする。

⑥の原因格カラをデに変えるとできる文である。デ格をとる自動詞構文で、⑤場所格と⑥原因格がある。場所格デをとる文では知覚の経験者格は潜在して形式化されないが、原因格デをとる文では経験者格を形式化することが可能である。また、⑥の原因格がカラではなくデをとったものである。「病理現象」のガ格をとる。

⑧対象格ガスル

（地響き） ガスル

あ、地響きがする。あれ、声がする。

これは、何に対して、あるいはどこで、どこから、何か原因で、などの情報を付加せずに（というよりは付加できない）、経験者である話者が感じたままを表出するような文である。

以上のような「～がする」を述語に持つ文の共起する名詞の種類と例文を挙げた。「～が」は、全体としては（内的経験）を表す名詞群だとまとめることができる。ただし、その内的経験も多様であり、その経験は、感覚や知覚という点で聴覚（声、音）、嗅覚（匂い、香り）、味覚（味）の3つの感覚がある。さらに、病理現象（頭痛、耳鳴り、悪寒）の一部、感情（感じ、気、気持ち、予感）などがガ格名詞の種類である。

2.4.2. 「名詞ヲスル」を述語とする文

「名詞をする」は、形態的にヲ格名詞句を持つという点で他動詞構造を成しているように見えるが、「する」には実質的な意味が薄く、専ら述語としての機能を果たしているに過ぎず、その薄い実質的な意味を担うのが結合しているヲ格名詞句だということになる。この点で通常の動詞とは異なっている。したがって、通常のヲ格は動作を受ける対象であるが、「名詞をする」のヲ格はそのような役割を持たない。以下の例を見てみる。

(13) 太郎がコーヒーを飲む。

- (14) 太郎が次郎を殴る。
(15) 太郎が勉強をする。
(16) 太郎が立ち読みをする。

「飲む」のヲ格は、飲む動作を受ける対象を表す。同様に、「殴る」行為を受けるのはヲ格名詞の「次郎」である。しかし、「する」のヲ格は「する」という漠然たる行為の対象ではなく、その行為の内容それ自体を表す。それがヲ格名詞の「勉強」と「立ち読み」である。したがって、「飲む」や「殴る」が述語であるのは、その実質的な意味と文法的な機能が一体となった単位であると認められるからであり、同様に「勉強をする」と「立ち読みをする」では、意味と機能を担うものはそれぞれヲ格名詞と「する」に分担されているが、その全体である「名詞をする」が述語である。このヲ格は、他動詞構文の形を表面上はとりながら、その実、他動詞構文ではなく自動詞構文と言ってもいいような性質を持っている。

- (17) 太郎が役員をする。
(18) 太郎が湿布をする。
(19) 太郎がマスクをする。

先の「勉強」「立ち読み」は動作性を示す名詞であったが、これら「役員」「湿布」「マスク」はその動作性を読み取ることが難しい。しかし、やはり「する」という漠然たる行為を受ける対象ではなく、その行為の内容に関わる役割や道具であると考えられ、「飲む」などの通常の動詞が要求するヲ格名詞とは異なっている。(15)～(19)の動作や行為は他動性が感じられない。

(15)(16)と(17)～(19)との違いは、前者は実質的な動作の内容がヲ格名詞にあるのに対し、後者は「～をする」全体にあることである。「役員」「湿布」「マスク」は、あくまでも物である。しかし、これに「する」が下接することによって、動作・行為であることが浮かびあがってくる。「何をするか」は、ヲ格名詞の「マスク」が単独で示すものではない。したがって、同じ格構造をとっていても、ヲ格名詞と動詞との関係性は異なる。そして、その表す意味としては、いくつか用法としてまとめられるような特徴を持つのである。これについては、第5章の類義語「やる」との比較において詳細に述べる。

つまり、「名詞をする」はヲ格名詞をとるために形式上は他動詞構文ではあるが、そのヲ格の役割は通常の他動詞構文とは異なり、動作の対象ではなく、動作の内容となっている。また、他動詞構文はヲ格をガ格に変えて受動態を作ることが可能であるが、「～をする」は以下のようにできない。

- (15) ’ *勉強が太郎にされる。
(16) ’ *立ち読みが太郎にされる。
(17) ’ *役員が太郎にされる。
(18) ’ *湿布が太郎にされる。
(19) ’ *マスクが太郎にされる。

このように、「名詞をする」は統語的に受動態を作ることが難しい。したがって、意味的にも統語論的にも「名詞をする」文は、ヲ格を述語の一部として、他動詞構文の形式をとりながら、自動詞的なものであることがわかる。そこで、これを「擬似他動詞構文」と名付け

る。

しかし、その意味内容までも自動詞的かと言えば、そうではないものもある。

(20) a. 太郎はピエロを真似て、おどけた態度をとった。

b. 太郎はピエロの真似をして、おどけた態度をとった。

「真似る」という他動詞の行為の対象は「ピエロ」である。一方、「真似をする」は具体的にその対象をヲ格としてとらないという点で他動詞構造ではないが、「真似」の修飾部分「ピエロの」にその対象が示されている。つまり、文の中に他動性の及ぶ対象が示されているという点において、意味的には他動性の動詞である。

(21) a. 太郎は花子に太事なことを話した。

b. 太郎は花子に太事な話をした。

a「話す」の具体的な内容はヲ格名詞に、b「話をする」の具体的な内容は形容詞という修飾語に、やはり現れている。ただし、(21)はヲ格が動作の対象ではなく、その動作の内容とも言うべきものである点で、もともと他動性は低い。すべてのものがこれと同じではない。

(22) a. 太郎は形見の金時計を賭けた。

b. *太郎は形見の金時計の賭けをした。

c. 太郎は賭けをした。形見の金時計が賭けの対象だ。

(22)は、bのように他動性の及ぶ対象を名詞修飾の形で示すことができない。「賭ける」と「賭けをする」は同じように見えて、「賭けをする」は動作の対象が想起できたとしても、それを描出の範疇に入れていないと捉えることができる。そのために「賭けをする」は他動性のない動作として自動詞的と言える。また、次のような例もある。

(23) a. 花子がダイヤの指輪をはめると、貴婦人のようだ。

b. 花子がダイヤの指輪をつけると、貴婦人のようだ。

c. 花子がダイヤの指輪をすると、貴婦人のようだ。

「はめる」「つける」は実質的意味のある動詞で、その動作の対象が「指輪」であるという点で他動詞である。他に様々なものをその対象にとって使用される（子供を型にはめる、ガラスをはめる、香水をつける、傷をつける）。ところが、「する」は「指輪をする」という連語においてのみ生じる意味である。指輪に対する働きかけということではなく、「花子がどうしたか」に焦点があてられた表現であると解釈できる点で自動詞的である。

したがって、形式格としてヲ格が現れるものの、このヲ格が意味格として他のものと同程度に独立したものと考えることはできない。先に見たようにヴォイスの変換が不可能な点からもわかる。「～がする」のガ格と同様に「～をする」のヲ格も、形式格を持つがその意味格の役割は通常の動詞とは異なり、動作の内容を指し示す対象格ということになる。

以下では、格構造を中心に例をまとめながら、ヲ格名詞の種類について記述していく。

Ⅱ. 擬似他動詞構文

①動作主格ガ 対象格ヲスル

〔動作、催事、生理・病理現象、役割、表情、装身具〕ヲスル

自分はそれからすぐに、あのはにかむような微笑をする若い医師に案内せられ、或る病

棟にいれられて、ガチャンと鍵をおろされました。(人間失格)

実に真剣に、実に親切に、病人の世話をする娘さんが付き添ってたけど、あれ細君かね。

(雪国)

そんな恰好をするほど寒いのかね。(雪国)

合格したのならば大きな顔をして教えてやれるんだがね(青春の蹉跌)

なぜそんなに青い顔をしたり、ひや汗を流したりするんだ。(青春の蹉跌)

康子は狡い顔をした。(青春の蹉跌)

牛が一匹優しい眼をして私を見ている。(放浪記)

ビフテキの好きな彼女は訳なくペロリと三皿ぐらいお代りをするのでした。(痴人の愛)

ピクフォードはこう云う笑い方をするとか(痴人の愛)

彼女が大きく欠伸をするのを見るにつけても(痴人の愛)

或る緊急な調べ物をする用事が出来て(痴人の愛)

「ちんちん」と云えば「ちんちん」をする、「お預け」と云えば「お預け」をする(痴人の愛)

自分の信じている亡霊が、そんなへまをするとは、実朝には全く考えられなかったろう。

(実朝)

危いじゃないか。無茶をするね。(雪国)

私は舌打ちをすると(放浪記)

一般にも、春と秋との真中頃、「日祀り」をする風習があった。(実朝)

本当なら、もう帯をしなくてはならんのですよ。(青春の蹉跌)

彼は手袋をしたままの手で女の頬をしたたかに打った。(青春の蹉跌)

一同手に手に打冠り、姉さま唐茄子、頬かぶり、吉原かぶりをするも有り(われから)
ライバルが抜け駆けをする。会社が違法行為をする。母がPTAの会長をしている。Aチームが重要な会議をする。祖父が重い病気をした。秘書がスケジュールの調整をする。花子が昨日から眼帯をしている。妹があくびをする。

この構文は場所格などが特に必要ではないもので、ヲ格名詞にはさまざまな種類のものが立つ。

②動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲスル

[動作、職業、役割、装身具、生理現象] ヲスル

十四日の夜は家々の注連縄を貰い集めて来て、堂の前であかあかと焚火をする。(雪国)

あのアントニーがオクタヴィアヌスの軍勢を迎えてナイルの河上で船戦をする、(痴人の愛)

人の家で病気をすると母が恋しかった。(友情)

この家で食事の支度をするのは陽子にちがいがなかった。(処女懐胎)

村の寺で二人の供養をすることだった。(あすなろ物語)

本当は、学生主催のパーティで、二三度だけダンスの真似をしたことはあった。(青春の蹉跌)

あるとき、仲田の家でピンポン大会をするからよかったらしに来てくれと云う通知を杉子をもって来た。(友情)

小説を読むとか、編物をするとか、(痴人の愛)

その先生がピアノのわきに坐って、譜をめくる役をしていました。(飛び出しナイフ)

市立病院の看護婦をしてる女でな(飛び出しナイフ)

太郎が図書館で英語の勉強をする。母が台所で魚の調理をする。太郎がハワイで結婚式をする。老人が公園で散歩をする。小学生が体育館で縄跳びをする。子供が家でゲームをする。人前であくびをする。先生が実験室で化学の実験をした。中学生がデパートで万引をした。息子が大学病院で医者をしている。叔父が田舎で本屋をする。姉が東京で学校の先生をする。太郎が東京で本のセールスをしている。結婚式で司会をする。議会で議長をする。地元のチームで監督をする。犬が玄関で首輪をする。子供が外でマスクをする。若い女性が会社で赤いマニキュアをする。鏡の前でネクタイをする。学生が研究室で手袋をする。先生が教室で大きなくしゃみをした。祖父が部屋でせきをする。子供が食卓でげっぷをする。犬が車の中でおならをする。犬が沿道でおしっこをする。

この構文は、さらに広く様々なものがヲ格に立ち、動作の場所をデ格で立てることができる。

③動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

太郎が箒で庭の掃除をする。画家が鉛筆で絵の複写をする。祖母が洗濯機で毛布の洗濯をする。小学生が洗濯紐で縄跳びをする。子供がビー玉で賭け事をした。

④動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

部下が不注意から書類の紛失をする。太郎が貧しさから盗みをする。

⑤動作主格ガ 原因格デ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

太郎が事故で 30 分の遅刻をした。部下が風邪で欠勤をする。母が病気で入院をする。

⑥動作主格ガ 目標格ヘ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

郷里の方の親やきょうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。(痴人の愛)

肉親のいる場所へ里帰りをするという恰好であった(あすなろ物語)

学生が事務へ書類の提出をする。店主が市役所へ転居の届け出をする。

⑦動作主格ガ 目標格ニ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

私もしまいには面倒になって好い加減な返辞をすると（痴人の愛）
思い切ってふざけた無作法な態度をする（モオツァルト）
今きみにむかってこの申込をする権利ができたようにおもう。（処女懐胎）
作り手が料理に工夫をする。業者が空き地に不法投棄をした。

⑧動作主格ガ 場所格ニ 対象格ヲスル

〔医療行為、装身具、負傷、動作〕ヲスル

そうして、その注射をすると自分は、からだの衰弱も忘れて、漫画の仕事に精が出て、自分で画きながら噴き出してしまうほど珍妙な趣向が生れるのでした。（人間失格）
傷は手当をして包帯をしてありました。（飛び出しナイフ）
黒の蝶ネクタイをして、いつも真白なワイシャツを着ていた。（青春の蹉跌）
蓋をするとき、しっくり寸法の合ったその蓋が、ぴしっと、たしかな封印のように、たのもしき音をたてた。（処女懐胎）
医者が腕に注射をする。看護師が肩に湿布／包帯をする。左手の薬指に指輪をする。犬が首にリボンをする。幼児がおなかに腹巻をする。女の子が首にチョーカーをする。犯人が機械に細工をした。料理人が肉に塩こしょうをする。父が足に怪我をした。母が手にやけどをした。

⑨動作主格ガ 相手格ニ 対象格ヲスル

〔動作、表情〕ヲスル

お祈りをすると、神様が、何でも下さるって、ほんとう？（人間失格）
島村はこくんとおじぎをするとそのまま立ち止まった。（雪国）
浜田があんな忠告をしたのは、恐らく彼の実験から来ているのでしょうか（痴人の愛）
奴隷でさえ奴隷らしい卑屈なシッペがえしをするものだ、（人間失格）
殆ど敵意をさえ含んだ眼つきで睨めくらをする。（痴人の愛）
譲治さんがそんな眼つきをするから、あたし尚更からかってやりたくなるんだわ。（痴人の愛）
二人に対してイヤな顔をするでもないし（痴人の愛）
一カ月ばかり勤めていた栗おこし工場の二十三銭也にもさよならをすると、（放浪記）
太郎が上司にスピーチのお願いをする。太郎が花子に失恋をした。姉が弟に意地悪をする。
子供が母親にキスをする。彼は同級生にいたづらをした。太郎が次郎に変な顔をした。

⑩経験者格ガ 相手格ニ 対象格ヲスル

〔心的経験〕ヲスル

君子もたまにはイキな心配をするのもよからう？（痴人の愛）
そんなことをいうと却って彼女が肩身の狭い思いをするであろうと察して、（痴人の愛）
ちょっと二人でふざけるのにも何だか窮屈な思いをする。（痴人の愛）
上司が部下に激しい非難をする。皆が太郎に惜しみない賞賛をする。皆が太郎の作品に共感

をする。学生が恩師に感謝する。

⑪動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

部長が朝礼で部下に新入社員の紹介をする。社員が廊下で社長に挨拶をする。

⑫動作主格ガ 場所格デ 受益者格ニ 対象格ヲ

〔動作〕ヲスル

男がレストランで女に指輪のプレゼントをする。父が会社で社長に贈り物をした。

⑬動作主格ガ 道具格デ 相手格ニ 対象格ヲ

〔動作〕ヲスル

学生が電話で先生に連絡をする。

⑭動作主ガ 原因格デ 場所格ニ 対象格ヲ

〔動作・負傷〕ヲスル

後輩が不注意で電車の中に忘れ物をする。子供が事故で足にけがをする。太郎が熱湯で手にやけどをする。

⑮動作主格ガ 相手格ト 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

熊谷と喧嘩をするのが当たり前だのに（痴人の愛）

やっと彼女とダンスをする光栄を有しました。（痴人の愛）

鮎太は祖母と話をする時は、（あすなろ物語）

私の会社が彼の会社と取引をしている。太郎が花子と映画の視聴をする。太郎が花子と計画の調整をする。

⑯動作主格ガ 場所格デ 相手格ト 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

部長がロビーで課長と名刺の交換をする。太郎が友達と部屋でゲームをする。友達と学校で喧嘩をする。太郎がホールで花子とダンスをする。太郎が花子と家で掃除をする。彼女がレストランで彼と見合いをした。妻が公園で夫とデートをする。A校が国立体育館でB校と試合をする。A国が山間部でB国と戦争をする。

⑰動作主格ガ 相手格カラ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

太郎が花子から金品の強奪をする。財団が受賞者から賞の剥奪をする。男が金融機関から借金をする。

⑩動作主格ガ 起点格カラ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

テロ集団がビルの上からビラの配布をする。事務員が名簿から名前の削除をする。

⑪動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

男が病気から辞職をした。人が傲慢から愚かなことをする。

⑫経験者格ガ 起点格カラ 対象格ヲスル

〔心的経験〕ヲスル

そこに集められた豊富な文献から、いろいろと空想をするのが楽しく（痴人の愛）

⑬動作主格ガ 起点格カラ 目標格ニ／ヘ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

太郎がハワイから母親に／へ電話をする。校長先生が壇上から子供たちに／へ会釈をする。
親企業が子会社から他社に／へ仕事の委託をする。地方自治体が地域から都心部に／へ物資の移動をする。

⑭動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

ホテルのバスがホテルから駅前まで客の送迎をする。配送会社が東京から福岡まで荷物の運送をする。A 部隊が山間部から平野部まで B 部隊の護送をする。

⑮対象格ガ （連体修飾句）名詞ヲシテイル

〔身体部位、形態、色〕ヲシテイル

肥ってはいないが、娘らしいふくらみのあるからだつきをしていて、眼が冴えている。
（青春の蹉跎）

黒い頬鬚をはやして、堂々とした威厳のある様子をしていましたが（ビルマの豎琴）

少年は鳶いろのつやのいい膚をして、（飛び出しナイフ）

彼と入違いに三十過ぎの重そうな腹をした妊婦が、用心ぶかくバスを降りて行った。
（青春の蹉跎）

不思議な形をした器具。（青春の蹉跎）

メアリーが青い目をしている。花子がきれいな手をしている。少女は白い歯をしている。ボブがあどけない顔立ちをしている。この馬はすばらしい脚をしている。あの山は変な形をしている。夕日がオレンジ色をしていた。

これは、連体修飾句が必ずついて、述語はテイル形であることが特徴である。連体修飾節になる場合は、実例のように「～をした名詞」の形になることもある。

②動作主格デ 対象格ヲスル

〔動作〕ヲスル

みんなで野球をする。二人でキャッチボールをする。グループで討議をする。

動作主格がデ格の例である。仁田（1993）は「〔主〕の表示形式は『N ガ』であるのが原則ではあるが、(7)女 {カラ／ガ} 私に何とか言ってくるだろう～、(8)警察 {デ／ガ} 念入りに老婆の足どりを検べた～、に示されるように、『N カラ』や『N デ』といったものがないわけではない (p29)」とあるように、動作主格であるものもある。また、山岡（2000）では「残務処理は私たちでやります」のデ格を動作主と考え、様態とされる「太郎は裸で町を歩く」は「太郎は裸だ」という従属節を形成するもので「動詞との間に直接の格関係はない (p30)」と述べる。「みんなで野球をする」の「みんな」は「野球をしたのはみんなだ」「野球をしたみんな」のように分裂文あるいは連体修飾構造に直した場合、主格の位置に立つ。しかし、様態の「(私は) ひとりで遊んだ」は「*遊んだのはひとりだ」「*遊んだひとり」となるため動作主格ではない。

以上、「名詞ヲスル」を述語とする構文（擬似他動詞構文）について整理した。サ変動詞の文と同様非常に多様なものを持っている。

2.4.3. 「～ニスル」文

ここでは、「～にする」文について名詞の種類を記述していく。自動詞文と他動詞文がある。

I. 自動詞構文

①動作主格ガ 文コト 目標格ニ⁵⁰スル

〔動作・存在〕文コト ニスル

あちらへいって私はやすむことにするよ（新源氏）

五個そろってから、いっしょに食うことにする。（驢馬）

じゃあ、あんたに頼むことにするわ。（あすなろ物語）

「一応、川のあたりを探してみることにする、手伝ってくれ」（不意の唾）

一定の履歴を有する者に限り試験を用いず、医師開業免許を与えることにした明治十年の内務省布令（花埋み）

太郎は旅行に行くことにする。私は彼を待たずに出ることにする。ここには金がないことにする。犯人は自分達に銃があることにした。私たちはそのいたずらを太郎がやったことにした。警察はその事件はすでに解決したことにしている。

決定や仮定を表すのが「にする」である。「する」の実質的意味である「どうするか」の内容は、上接する補文と「にする」とが結合した単位で、その動作への変更・決定あるいは、その存在・非存在の状態への仮定がその意味である。また、過去形の補文の場合には、過去

⁵⁰ コトニスルの二格が意味格として何かについては、可能性としては目標格と対象格があろう。ある方向への決定や仮定という意味では目標格になる。

形の事態は実際にはそうではなかったが、そうであったように見なすという意味を表す。

②動作主格ガ 文トイウコト 目標格ニスル

〔動作・存在・状態〕文トイウコト ニスル

私が旅行に一人で行くということにする。みんなが彼が悪いということにする。ここに大金があるということにする。持ち家などないということにする。警察があつた男が犯人だということにする。

連体修飾節「ということ」に「にする」が結合する文である。これは、先の「ことにする」とは異なり、専ら事実を反した仮定、仮想の意味を表す。そして、動詞文だけでなく、形容詞文、名詞文なども補文として連体修飾節になりうる。

③動作主格ガ 文ヨウニスル

〔動作・存在〕文ヨウニスル

金川にいわれたようにすること自体がなにか犯罪を犯すようでいやだった。(孤高の人)
君の席を北村と顔を合わせないようなところ取るようにするから出ろよ(孤高の人)
私が出迎えの人がすぐわかるようにする。主催者側が会場に一般人が入れないようにする。
できるだけ勉強するようにする。ゴミ一つないようにする。毎日健康で元気でいるようにする。

形容詞文は「ようにする」を後接できないため、存在や動作の文だけに限られる。

④対象格ニ スル 条件節

〔人、集団〕ニ

加藤にしてみれば、彼らが山に生命を賭けるには、それだけのなにかの理由を持っているように思われた。(孤高の人)

私にすれば、良かれと思ってやったことだ。彼にしたら、ただの迷惑だったんだ。会社にしても悪い話ではない。チームにしてみると、負けるなんて許せなかったんだ。

名詞に「にする」が接続して単独で条件節をつくり、名詞の表すものの立場を表しその視点から見た、行為、判断を主文で述べる文である。ただし、「～にすると」はない。

Ⅱ. 他動詞構文

①動作主格ガ (対象格ヲ) 目標格ニスル

〔具象物〕ニスル

彼が夕飯をステーキにしたいと言った。僕はうなぎにする。昼食をうどんにするのは簡単だからだ。挨拶はメールじゃなくて電話にする。飲み物は紅茶にする。

ヲ格名詞を文中に形式化あるいは明示しないのが通常であるが、それを明示しないからといってヲ格をとらないわけではない。例えば「僕が注文をうなぎにする」「私が昼食をうどんにする」「自分が挨拶をメールではなく電話にする」のように意味的には存在するが、このままの表現を使うことはないため(対象格ヲ)という表記にした。決定を表わす用法で、

ニ格名詞は具象物が現れる。

②動作主格ガ 対象格ヲ 目標格ニスル

〔職業、役割、具象物、時〕ニスル

結婚の日取りはいつにするかね。(孤高の人)

な、加藤君、きみを技師にするについては、おれは非常に苦勞した。(孤高の人)

サブザックの中に水筒を入れ、それを枕にして宮村の頭を北に向け(孤高の人)

ピッケルをその枕元に立てて置いた。遺体発見の目じるしにするためだった。(孤高の人)

その灌木の芽を、味噌であえて酒の肴にする父を思い出しながら(孤高の人)

母親が子供を医者にする。私が君を社長にする。姉が弟を味方にする。子供がみかん箱を机にする。幹事が旅行先をイタリアにする。子供が石ころを遊び道具にする。そこにあった紐を帯にする。この工場がパルプを紙にする。太郎が第二外国語を中国語にする。両親が子供の名前を太郎にする。父が鍬を手にする。時計を腕にする。先生が試験日を来月 10 日にすると言った。

③経験者格ガ 対象格ヲ 目標格ニスル

〔気、耳、目〕ニスル

園子はあたりを気にするように見廻してから、(孤高の人)

金川はそのことばを耳にするとサンマに伸ばした箸を止めた。(孤高の人)

女は恐ろしい情景を目にする。

動作主格をとる「～が～を～にする」文は、対象格の名詞「～を」を目標格の名詞「～に」に「変える、見なす、決める」ことを表すが、経験者格をとる「～が～を～にする」文は対象格の名詞を目標格の名詞に「知覚させる」ことを表す。この中には慣用句として定着しているものもあり、「耳にする」で「聞く」、「目にする」で「見る」を表す。

④動作主格ガ 対象格ヲ 起点格カラ 目標格ニスル

〔具象物〕ニスル

太郎が旅行先をイタリアからフランスにする。花子が携帯電話をドコモから au にした。

起点格カラを持つ文は、変更を表す。

⑤動作主格ガ 対象格ヲ 起点格カラ 目標格マデニスル

〔時間、場所〕カラ 〔時間、場所〕マデニスル

担当者が勤務シフトを 1時から5時までにする。市がマラソンコースを A 地点から B 地点までにする。

⑥動作主格ガ 対象格ヲ 起点格カラ／目標格マデニスル

〔時間、場所〕カラ／マデニスル

彼女はダイエットを明日から／までにする。会社は休憩を 1時から／までにする。

⑤と⑥は決定を表わす。

「名詞にする」は結合度が強く、一つの固まりとなって述語としての役割を果たす。「する」の実質的意味は通常の動詞に比べれば希薄であるが、その実質的な意味を二格名詞が単独で担うとは考えにくい。なぜなら、二格名詞はいずれも動作を表す名詞ではなく、具象物の名詞である。具象物を示す名詞にニという方向性を持った格助詞が接続し、さらに「する」が下接することによって、ニの方向へと対象を動作する、という意味が生じると考えられる。しかし、その動作はどのような動作をも表し得るのではなく、ある限定された意味しか表わさない。また、「医者にする」が「医者に育てる」、「社長にする」が「社長に任命する」、「イタリアにする」が「イタリアに決める」という実質動詞と類義関係にあるが、「名詞にする」はこれらの動詞の代理ではない。「名詞にする」自体がこれらの意味を包括する、あるいは異なる独特の意味合いをもって存在する。したがって、「私が君を社長にする」は「私が君を社長に任命する」という意味以上のさまざまな意味を持つ。詳細は第4章で論じる。

2.4.4. 「～トスル」文

「名詞・文トスル」文は、先に見た「名詞・文ニスル」文と意味・用法の点で重なる点がある。独自の意味もあるがその詳細は第4章で考察することとし、以下、「とする」の前節する要素の意味的な特徴を簡潔に見ていく。

1. 自動詞構文

①文 対象格ト スル

〔動作、状態、存在〕文トスル

北鎌尾根へおりて、また登って来るとすると、その往復にどんなに急いでも二時間はかかる。(孤高の人)

もし、宮村と二人で北鎌尾根へ出かけるとするならば、非常食を持っていく必要がある。(孤高の人)

宮村があくまでも加藤と二人で北鎌尾根を狙うとするならば、今日中に肩の小屋に着いて、(孤高の人)

たとえばもし陛下から御下問があつたとしたら、いくら末次といえども「アメリカと戦争になった場合には必ずアメリカを屈伏させて御覧に入れます」とは奉答出来なかつたろうと思われる。(山本五十六)

明日7時に我々が出発するとする。テストでカツオが100点取れたとする。今自分が1000万円の年収があるとする。彼が世界一のハンサムだったとする。

文に対して「とする」が後節する場合は、仮定を表わし、補文は現在形でも過去形でも同様であるが、主文はテンスの展開はなく現在形のみである。実例では条件節で用いられるものが多い。

②文（～ヨウ） 対象格ト スル

〔動作（～ヨウ）〕 文トスル

時の海軍大臣山本権兵衛の諒解を取りつけようとしたことがあった。（山本五十六）
彼は声をかけようとしてなにげなく課長をふりかえったが、そのまま顔をもどして口をつぐんだ。（パニック）

俊介は策略のむだを説明しようとして口をひらきかけたが、圧倒的な不利をさとってやめることにした。（パニック）

猫が魚を食べようとする。日が昇ろうとしている。太郎がけんかをとめようとする。

この文の構造は、「(猫が魚を食べよう) とする」ではなく「(猫が魚を食べる) ようとする」と考えられる。ヨウトスルで事態が引き起こされる前段階を示す。内容的には、動作を表わす文しか来ない。

③動作主格ガ 文 対象格ト スル

〔動作、状態、存在〕 文トスル

各府県ごとに試験場を設けることを得るとした、明治十二年の医術開業試験規則改正等、（花埋み）

政府が「今後審議を続けていくには問題が山積みである」とした。政府が今回の訪米を非常に評価するとした。裁判所が子供の養育権は扶養者にあるとする。

これは、トによって文が引用される形をとっている。ヲ格として設定されるものが想定しにくく、新聞などの報道記事に多用される表現である。この意味は動作主格が表明したコメントを引用したことを示す。あるいは、決定を表わす。

④動作主格ガ 文コト 対象格ト スル

〔動作〕 文コト トスル

（市が）各家庭が給食費を月 5000 円払うこととした。（学校が）学生が制服を 4 月から変更することとした。国土交通省が河川敷の工事を一旦中止することとした。

これは、規定する、決定の宣告といった意味合いを持ち、補文の内容に決定した主体が存在することは確かではあるが、この文においてはそれを形式化して述べるのがそぐわない⁵¹。裁判所や公的な機関からの宣告、公示といった場合に用いられる表現である。

Ⅱ. 他動詞構文

①動作主格ガ 対象格ヲ 対象格トスル

〔具象物、抽象物〕 トスル

素行の悪い者を対象とするとなると（孤高の人）

酒を飲むのはいいが、酒を飲んで我を失うのは、それを目的とした日以外はルール違反だと、きつく言われている。（太郎物語大学編）

⁵¹ 両者が一致する場合にはそれを形式化できる。

あつというまに清洲城をのっとり、これを居城とした。（国盗り物語）

家は仕舞屋風の小さな家で、玄関六畳を患者控室とし、次の八畳間を診察室とした。（花埋み）

仮に A を 10 とする。公園の名前を「平和公園」とする。3 月 3 日を「耳の日」とする。8 月 8 日をそろばんの日とする。政府は基本方針を減税とした。

仮に設定するという意味を持つものがある。もう一つは「にする」と同じで、決定を表す。ト格名詞は具象物だけでなく抽象物も立つ。

②動作主格ガ 対象格ヲ 起点格カラ 目標格マデ 対象格トスル

〔時間、場所〕カラ 〔時間、場所〕マデトスル

先生が自習時間を 1 時から 2 時までとした。鉄道会社が点検場所を A 駅から B 駅までとする。

③動作主格ガ 対象格ヲ 起点格カラ／目標格マデ 対象格トスル

〔時間、場所〕カラ／マデトスル

研究班が実験を明日から／までとした。会社が休憩を 1 時から／までとする。

2.4.5. その他の構文

「～する」を述語とする文には、その前接要素によって 4 つのタイプがある。

1. 名詞+する：「勉強する」「協議する」などのいわゆるサ変動詞
2. 擬音語・擬態語+する：「ワクワクする」「ガンガンする」など
3. 形容詞・形容動詞+する：「赤くする」「静かにする」など
4. 副詞+する：「ゆっくりする」「のんびりする」など

この他にも「失敗ばかりする」「飲んだり食べたりする」「実地訓練さえする」のような副助詞や接続助詞を伴った特殊な表現も見られる。

本節では名詞の種類を記述することが目的だが、本章の構文記述の領域に入るものであり、かつ「する」の特殊性はこれらの多くの品詞と共起可能であるという点にあることから、ここではこれらについても例を記載しておく。また、1 のサ変動詞語幹は実は名詞でないものもある。加えて基本的にそれらは動作性の名詞である。そのため、やはり名詞の記述という点で外れ、記述すると言っても種類はほぼ一つであるという結果が先に見えてしまう。しかしながら、本章の目的は「する」文の構文的広がり全体を捉えることであるため、こちらも含めてその例文を資料的に示すことにしたい。

2.4.5.1. 「名詞スル」を述語とする文

「する」が名詞に下接し、複合動詞として一つの動詞になっているものがある。いわゆるサ変動詞と呼ばれるものである。以下、自動詞構文と他動詞構文に分けて記述する。

I. 自動詞構文

①対象格ガ 数量格スル

〔物〕ガ 〔値段〕スル

時計が3万円する。マグロが100グラム300円する。この布は1メートル1000円する。

この構文は基本的にガ格名詞句と動詞のみで成り立つ構文である。これは「名詞する」の名詞が「金額」を示す語に限られており、「マグロが100グラム300円だ」と同義であり、動作を表す「する」でありながらも同定文の「だ」「である」と同じように、ものの状態を表している。

②動作主⁵²格ガ 場所格デ ～スル

〔人、集団、物、出来事〕ガ 〔動作〕スル

太郎が地域で活躍する。日本チームがイタリアで優勝する。爆弾が地下で破裂する。事件が都市部で頻発する。

③動作主格ガ 原因格デ ～スル

〔人、生物〕ガ 〔動作〕スル

太郎が心臓発作で死亡する。花子が恐怖で失神する。父が疲労で憔悴する。生物が地球温暖化で減少する。

④動作主格ガ 道具格デ ～スル

〔人〕ガ 〔動作〕スル

武士が刀で切腹する。

⑤対象格ガ 原因格デ ～スル

〔物〕ガ 〔動作〕スル

家が地震で倒壊する。会場が地震で崩壊する。花粉の飛散が雨で減少する。会社が経営難で倒産する。

⑥動作主格ガ 目標格ニ ～スル

〔人、生物、集団〕ガ 〔動作〕スル

登山家が頂上に到達する。太郎が東京に出発する。

⑦動作主格ガ 相手格ニ ～スル

〔人、生物、集団〕ガ 〔動作〕スル

太郎が花子に失恋する。人が生に執着する。男がサラ金に借金する。部下が苦情に対応する。

⑧動作主格ガ 場所格ニ ～スル

⁵² 動作主格は動作の主体となるもの、対象格ガは動作の主体でもなく経験者格でもないものとし、主として物などである。

〔人、生物、集団〕ガ 〔動作〕スル

彼は工場に寝泊りする。ネコが裏山に集合する。

⑨対象格ガ 目標格ニ ～スル

〔物〕ガ 〔動作〕スル

気温が 34 度に達する。

⑩対象格ガ 相手格ニ ～スル

〔物〕ガ 〔動作〕スル

光が鏡に反射する。長雨が作物に影響する。

⑪対象格ガ 場所格ニ ～スル

〔物〕ガ 〔動作〕スル

工場が森に隣接する。門が北に位置する。

⑫対象格ガ (場所格ニ) ～スル

〔存在〕スル

シーラカンスが(海中に) 存在する。未知の生物が(惑星上に) 実在する。大遺跡が(エジプトに) 現存する。神社が(村中に) 散在する。井戸が(村に) 点在する。

⑬経験者格ガ 対象格ニ⁵³ ～スル

〔感情、情意、内的経験〕スル

夢想家が現実に幻滅する。子が父の存在に安心する。親がその事実に困惑する。住民が騒音に迷惑する。社長が不祥事に立腹する。人が音楽に感動する。先生が生徒の作文に関心する。太郎が貧乏に苦悩する。私が彼の意見に同意する。

⑭経験者格ガ 相手格ニ ～スル

〔感情、情意〕スル

(私は) 母に感謝する。母親が息子に期待する。皆が彼に同情する。彼が母に依存する。

⑮対象格ガ 基準格ニ ～スル

〔関係、状態〕スル

彼の業績がノーベル賞に匹敵する。値する。平和への願いが全世界に共通する。A が B に類する。符合する。この商品が要介護者に適する。業績が昇進に関係する。彼がこれに該当する。小判一枚は 10 万円に相当する。この呼称が発明者に由来する。怪我は事故に起因する。違反行為が法律に抵触する。

⁵³ 対象格ニは事物、相手格ニは人である。

⑩対象格ガ 対象格ニ ～スル

〔所属〕スル

AがBに属する。

⑪動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ ～スル

〔動作〕スル

イタリアが世界大会でブラジルに勝利する。太郎が図書館で花子に相談する。被告人が留置所で被害者に謝罪する。

⑫動作主格ガ 場所格デ 対象格ニ ～スル

〔動作〕スル

医者が医務室で腕に注射する。

⑬経験者格ガ 場所格デ 相手格ニ ～スル

〔感謝〕スル

彼は墓前で父に感謝した。

⑭対象格ガ 原因格カラ ～スル

〔動作〕スル

病気がウイルスから感染する。男が働きすぎから過労死する。

⑮動作主ガ 起点格カラ ～スル

〔動作〕スル

委員が委員会から離脱する。彼が危険から脱出する。彼が火災ビルから避難する。病気が隣の男から感染する。

カラ格をとる「名詞する」構文で、カラ格には原因格と起点格がある。原因格カラをとるものは、原因格デ格もとりのものもある。デ格をとるもので、カラ格を同時にとれるものは少ない。また、原因格カラを取る構文は、場所格デが共起可能なものもあり、それを構文②②としてまとめておく。同じ原因格のデ格は場所格のデ格と重複するために、共起することは避けられる。さらに、起点格カラを取る構文は目標格マデが共起することもある、それを構文②③としてまとめる。

⑯動作主ガ 場所格デ 原因格カラ ～スル

〔動作〕スル

男は山で借金苦から自殺する。二人は車中で将来の不安から心中する。

㉓動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ ～スル

〔移動〕スル

列車が新宿から上野まで移動する。中継車がスタートからゴールまで走行する。

㉔対象格ガ 起点格カラ 目標格マデ ～スル

〔上下〕スル

株が通常値から最低値まで下落する。温度が 24 度から 35 度まで上昇する。

㉕対象格ガ 対象格ト ～スル

〔関係〕スル

私の意見が彼の意見と一致する。相違する。

㉖原因格デ 対象格ト 対象格トガ ～スル

〔関係〕スル

この点で A と C とが共通する。一致する。相違する。競合する。拮抗する。背反する。矛盾する。符合する。両立する。対立する。

㉗動作主ガ 場所格デ 相手格ト ～スル

〔動作〕スル

太郎がハワイで花子と結婚する。太郎が空港で花子と喧嘩する。太郎が実家で花子と仲直りする。太郎が裁判所で花子と協議する。太郎が家で花子と相談する。

㉘無格スル（条件節）

〔時間〕スル

一時間すると、戻ってきた。

㉙起点格カラ 無格スル（条件節）

〔時間〕スル

あれから五年すれば、もう大人じゃないか。

この構文は条件節となって、時間の経過を表す用法である。格をとらないものと、起点格カラをとるものがあるが、いずれも時間を表す名詞に「する」が直接結合している。

Ⅱ. 他動詞構文

①対象格ガ 基準格ヲ ～スル

（超越）スル

名作が時代を超越する。

②動作主格ガ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

我が軍が敵を粉碎する。激流が岩を粉碎する。日照不足が生育を阻害する。秘書がスケジュールを調整する。不作に備えて農家が食料を備蓄する。太郎が資格を喪失する。被告人が面会を拒絶する。息子が援助を拒否する。先生が叙勲を辞退する。医者が病気の足を切断する。医者が盲腸を手術する。

③経験者格ガ 対象格ヲ ～スル

〔感情、情意、内的経験〕スル

(私が) 太郎を賞賛する。作品を絶賛する。生き方を尊敬する。軽蔑する。相手を信用する。上司が失敗を非難する。

④対象格ガ 対象格ヲ ～スル

〔関係、抽象的概念〕スル

チームが強力なエースを擁する。「やあ」が挨拶を意味する。p が真であれば常に q も真であるとき、p は q を含意する。

⑤動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

軍楽隊が後甲板で音楽を演奏する (山本五十六)。
太郎が図書館で英語を勉強する。母が台所で魚を調理する。

⑥動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

太郎が箒で庭を掃除する。学生が鉛筆で文字を複写する。母が洗濯機で服を洗濯する。

⑦動作主格ガ 原因格デ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

後輩が風邪で会社を欠勤する。私が不注意で書類を紛失する。

⑧動作主格ガ 目標格ニ／ヘ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

学生が事務に／へ書類を提出する。

⑨動作主格ガ 相手格ニ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕スル

妻が弁護士に離婚を相談する。社長が消費者に不手際を陳謝する。

⑩動作主格ガ 場所格デ 相手格ニ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

部長が廊下で部下に新入社員を紹介する。

⑪動作主格ガ 場所格デ 目標格ニ／ヘ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

男がレストランで女に／ヘ指輪をプレゼントする。

⑫動作主格ガ 相手格ト 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

太郎が花子と家を掃除する。花子と映画を視聴する。花子と計画を調整する。

⑬動作主格ガ 相手格ト 場所格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

太郎が花子と信濃を旅する。旅行する。

⑭動作主格ガ 場所格デ 相手格ト 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

部長がロビーで課長と名刺を交換する。

⑮動作主格ガ 相手格カラ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

太郎が花子から金を搾取する。財団が受賞者から賞を剥奪する。

⑯動作主格ガ 起点格カラ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

店員がビルの上からビラを配布する。事務員が名簿から名前を削除する。

⑰動作主格ガ 原因格カラ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

男が病気から会社を辞職した。

⑱経験者格ガ 原因格カラ 対象格ヲ ～スル

〔感情、情意〕 スル

人が傲慢から他人を軽蔑する。

⑲動作主格ガ 起点格カラ 目標格ヘ 対象格ヲ ～スル

〔動作〕 スル

親企業が子会社から他社へ仕事を委託する。会社が地域から都心部へ物資を移動する。

②動作主格ガ 起点格カラ 目標格マデ 対象格ヲ ～スル

〔移動〕スル

ホテルのバスがホテルから駅前まで客を送迎する。配送会社が東京から福岡まで荷物を運送する。伝達する。

②経験者格ガ 基準格ヨリ 対象格ヲ ～スル

〔感情、情意〕スル

太郎が花子より千恵子を愛している。

2.4.5.2. 「擬態語・擬音語スル」を述語とする文

擬態語あるいは擬音語と動詞「する」が結合して、一つの動詞のように振舞う「擬態語・擬音語する」述語文を整理する。以下、自動詞構文と他動詞構文に分ける。

I. 自動詞構文

①対象格ガ （擬態語・擬音語）スル

雷がゴロゴロする。砂がサラサラする。床がピカピカする。その場がざわざわする。空気がジメジメする。空がどんよりする。足音がドンドンする。香水がプンプンする。納豆がねばねばする。

②経験者格ガ 経験者格（肉体部分）ガ 原因格デ （擬態語）スル

私が頭が風邪でがらがら、ずきずき、クラクラする。彼が目がじんじん、チカチカ、ショボショボする。手がびりびり、ひりひり、カサカサする。体がさっぱりする。口がスースー、すっきりする。胸がすっと、ドキドキ、ムカムカする。骨がボキボキする。歯がガクガクする。胃がキリキリ、ムカムカする。背中がムズムズする。足の裏がチクチクする。耳がキンキンする。気持ちがむしゃくしゃする。傷口がひりひりする。体がぞくぞくする。

これは経験者格が2つある構文であるが、一方は肉体部分を表す語で、もう一方はその所有者である。所有者を表す経験者格は主題化して「は」となる場合が多い。原因格デをたてることができる。

③経験者格ガ 対象格ニ （擬態語）スル

私がその男にイライラする。妻が夫の醜態にムカムカする。パーティーにウキウキする。彼が勉強にうんざりする。再会にドキドキする。父の様子にハラハラする。遊園地にわくわくする。その絵にぞっとする。かつとする。かつかする。びくびくする。

ニ格を有する自動詞構文であり、いずれも感情を表す表現で経験者格がガ格に立つ。

④動作主格ガ 相手格ト 場所格デ （擬態語）スル

彼が彼女とベンチでイチャイチャする。母が近所のおばさんと外でべちゃくちやする。上司が部下と居酒屋でどんちゃんする。

⑤対象格ガ 対象格（知覚対象）ガ （擬態語）シテイル

彼女が声がきんきんしている。彼が髪がふさふさしている。私が顔がぼっちゃりしている。彼女が手がほっそりしている。祖母は手がごつごつしている。彼は態度がそわそわしている。この家は構造ががっしりしている。

対象格を2つ持つ自動詞文で、一方は知覚対象である身体部位や声、雰囲気などで、もう一方はその所有者である。所有者は主題化され「は」となり文頭に立つことが多く、また、「する」はテイルがついた形でのみこの構文は成り立つ。

⑥動作主格ガ 場所格デ （擬態語）スル

猫が浜辺でうろうろする。子供が布団の中でゴロゴロする。

以上、自動詞構文として「擬態語・擬音語する」を述語とする文は6つ見られた。

Ⅱ. 他動詞構文

①動作主格ガ 対象格ヲ （擬音語）スル

太郎が急に顔色を変えて窓をピシッとした。男が蕎麦を一気にずるずるとする。

②動作主格ガ 場所格デ 対象格ヲ （擬態語・擬音語）スル

太郎が玄関で傘をバサバサする。花子が台所でたくあんをポリポリする、バリバリする、パリパリする。男が風呂場で体をごしごしする。

③動作主格ガ 道具格デ 対象格ヲ （擬態語・擬音語）スル

母が電子レンジで買ってきたお弁当をチンする。

「擬態語・擬音語する」を述語とする文で他動詞構文をとるものは、少なく3つの構文である。いずれも擬態語よりも擬音語を表すと考えられるものである。擬音語や擬態語と結合する「する」文は感情感覚を表す自動詞文が多いということがわかる。

2.4.5.3. 「形容詞・形容動詞スル」を述語とする文

形容詞や形容動詞と「する」が結合して一つの述語のようにになっている文について、その構造を記述する。

I. 自動詞構文

①動作主格ガ 相手格ニ （形容詞・形容動詞）スル

人が人に親切にする。姉が弟に優しくする。親が子供に厳しくする。

相手格ニを伴う自動詞文であり、この他には自動詞文は見られない。

Ⅱ. 他動詞構文

①動作主ガ 対象格ヲ (形容詞・形容動詞) スル

娘がスカートを短くする。息子がドアをだめにした。その発言が事態を複雑にする。社長が会社を立派にする。友達が話をおもしろくする。

②動作主ガ 道具格デ 対象格ヲ (形容詞・形容動詞) スル

子供が掃除機で部屋をきれいにする。男がペンキで壁を白くする。高校生が目の周りをアイラインペンシルで真っ黒くする。

③動作主格ガ 原因格デ 対象格ヲ (形容詞・形容動詞) スル

花子が緊張で顔を赤くする。太郎が過労で体を悪くする。金持ちが財力で人を不幸にする。友人が温かい言葉で老人を元気にする。

④動作主格ガ 基準格ヨリ 対象格ヲ (形容詞・形容動詞) スル

母が浴室より台所を新しくしたいと言った。太郎が勉強より仕事を大事にした。

他動詞構文では4つの構文が見られ、デ格を共起させることができるものと、そうでないものとがあった。これら「形容詞・形容動詞する」を述語に持つ文は、その意味が変化あるいは様態を示すものであるために、それに伴った構文の種類となっている。

2.4.5.4. 「副詞スル」を述語とする文

「副詞⁵⁴スル」を述語とする主文は少ない。複文の従属節にこれを述語とする文がある。

I. 自動詞構文

①動作主格ガ 場所格デ (副詞) スル

一日旅館でゆっくりする。のんびりする。

擬態語ではない副詞で「する」と結合するものは少なく、限られている。他動詞構文は見られない。また、複文の条件節には以下のように「副詞スル」を述語とするものがある。

②無格 (副詞) スル (条件節)

もう少しすると、来るよ。もう少しすれば、わかるよ。もう少ししたら、出る。しばらくすると、人がやってきた。しばらくしたら、電話ください。しばらくすれば、はっきりする。

⁵⁴ 擬態語・擬音語は副詞として機能するものが多い。この副詞は擬態語・擬音語を除いたものと規定する。

以上、語と「する」が結合して、一つの動詞となる構文について見てきた。様々な漢語と結合してサ変動詞を作ることから、その漢語の示す意味にしたがって、様々な格をとり、様々な構文を為すことがわかった。また、漢語だけでなく、擬態語・擬音語、形容詞、形容動詞、副詞とその結合する要素の幅も広く、結果、その構文の種類、共起する語、性質も様々なものがあった。「する」の造語力によってその機能性の広がりには単に、「する」自体が文法的機能を主とする機能性専門の動詞であることにとどまらず、「する」動詞文の多様性となって広がるのである。

2.4.5.5. 「副助詞スル」を述語とする文

I. 自動詞構文

①動作主格ガ 名詞バカリスル

私が部屋で勉強ばかりする。子供が友達とゲームばかりする。子供が友達にいたずらばかりする。花子が貧乏ばかりしている。

②動作主ガ 名詞サエスル

兄弟が殴り合いさえした。勉強さえしてくれれば安心できるのに。

③動作主格ガ 名詞スラスル

出会った少女が殺人すらする人間だった。息子が店のものを盗みすらした。

④起点格カラスル（条件節）

（名詞・文）カラスル（条件節）

私からすると、そんな考えは甘すぎると言いたい。大人からすれば、子供は本当に子供にすぎない。きちんと説明していたことからすれば、もう十分だと言われかねない。

⑤対象格ニスル（条件節）

（名詞）ニスル（条件節）

私にすれば、相手の方が自分勝手だ。弟にすれば、そんな扱いはご免だろう。

カラとニは格助詞ではあるが、ここにまとめて入れておく。「にすれば」「からすれば」で、判断の根拠、立場を設定する役割がある。

II. 他動詞構文

①動作主格ガ 対象格ヲ 名詞サエスル

A が壊れたところを修理さえしない。花子とその男を軽蔑さえする。

②動作主ガ 対象格ヲ 動詞連用形サエスル

太郎が相手を殴りさえた。

2.4.5.6. その他

「動詞タリ動詞タリスル」

子供が泣いたり笑ったりする。伸ばしたり縮めたりする。引張ったり押したりする。

並列的に行う動作をいくつか並べ、「～たり～たり」でつなげて最後に「する」を下接する。実質的な意味は動作を表す「動詞たり」が表し、「する」は最後に述語として文をひとまとめにしている。自動詞構文も他動詞構文もある。

「オ動詞スル」

お話しする。お聞きする。お見せする。お呼びする。

これは、和語の動詞連体形に「お」を上接し、「する」を下接することで、謙譲語を作る。実質的な意味は動詞連体形部分が担い、「する」は文法的な述語としての機能を示す点で、「する」が文法的機能を主として担うことになっている表現といえる。自動詞構文も他動詞構文もある。

「ゴ名詞スル」

ご説明する。ご報告する。ご連絡する。ご訪問する。

先のものと同じで、漢語に接頭語「お」をつけ、「する」を下につけることで謙譲語を作る。

第3章 「ある」文の構造

本章では、第2章と同様に「ある」を述語に持つ文について、その形式格と意味格の記述を行い、「ある」の特徴や多様性を確かめる。なお、動詞の文法的な特徴を明らかにすることが第一義のため、その共起成分が厳密に必須であるか否かといった点は実際には問題にならない。記述の上で煩雑になることを避けるために必須と思われる成分を中心に記述し分類を行う。言うなれば、仁田義雄（1993）で述べるところの「共演成分」を中心に、場合によっては「副次的共演成分」が抽出されることがあるということになる。

例えば、「昼休みに公園で子供が犬と遊ぶ」の「遊ぶ」という動詞の必須成分は、動作主の「子供が」だけであり、時と場所と相手は必須成分ではないとされる。一方で、「倉庫に備品がある」の「倉庫に」も場所であり必須成分ではないと考えることもできるが、「倉庫でバザーがある」という文も「ある」には存在する。その両者の違いを名詞の意味と格表示によって示したいというのが本章の目的であるために、通常の動詞では共演成分ではないとされる要素も以下では扱うことがある。また、その他にも、「ある」にとっての場所は動作の場所よりも必要性が高いという意味的な理由もある。動作そのものにとって場所の概念は付随的だとしても、存在は存在場所の概念は存在たる土台を支えるために重要だと考えられるからである。

この記述を行うことで、動詞の持つ意味範疇や、動詞が作り出す文の類型を明らかにすることを目指す。

第1節 本研究における意味格の設定

第2章と同様に、今度は「ある」文を分析するための意味格と形式格の設定を行う。「ある」は「する」に比べると求められる格の種類や数が少ないが、以下のようにまとめられる。

表1. 本研究における意味格と形式格の対応―「ある」文を分析するために

| 意味格 | | 定義 | 形式格 |
|------|-------------|------------------------------------------------------------------------------|----------|
| 対象格 | Object | 述語の表す活動・行為・動作によって移動・変化・影響を受ける主体。判断・想像などの心理事象の内容。述語の表す状態の主体。述語の表す動作・状態の具体的内容。 | ガ、ヲ、ト |
| 相手格 | Patient | 述語の表す活動・行為・動作の相手。 | ニ、カラ、ト |
| 起点格 | Source | 述語の表す活動・行為・動作の結果、何かが移動する際の起点。および状態変化における最初の状態。 | ニ、カラ |
| 目標格 | Goal | 述語の表す活動・行為・動作が向うところ。移動の到着点・終点。状態変化や事態認定の後の状態、結果。 | ニ、へ、マデ、ト |
| 経験者格 | Experiencer | 述語の表す心理事象を経験する主体。 | ニ、ガ |
| 道具格 | Instrument | 述語の表す活動・行為・動作を可能にする道具。 | デ |

| | | | |
|------|-------------|---------------------------------|-------|
| 原因格 | Cause | 述語の表す変化・出来事・動作・心理事象の原因、理由。 | ニ、デ |
| 場所格 | Location | 述語の表す活動・行為・動作の場所や、対象が存在する場所や位置。 | ニ、ヲ、デ |
| 受益者格 | Benefactive | 述語の表す活動・行為・動作によって利益を得る主体。 | ニ |
| 数量格 | counter | 述語の表す数量的な具体的内容。 | φ |

この中で最も適応範囲が広いのが、対象格である。

- (1) 机の上に本がある。
- (2) 学校で文化祭がある。
- (3) 太郎に人気がある。
- (4) A が B と 関係がある。
- (5) 背中に痛みがある。
- (6) 父が店に借金がある。

以上の例を見ると、「ある」文では「～がある」のガ格名詞が多様であることがわかる。(1)では存在の主体、(2)では出来事であり、(3)～(5)は属性、状態、感覚である。そして、(6)には2つのガ格が出現し、最初のガ格名詞はこの文全体の主体、後ろのガ格名詞は「借金がある」という状態を表す述語の一部である。したがって、「ある」文のガ格を意味格として「存在の主体」とであると設定するには難がある。また、主体には、存在主体、動作主体、感情主体、状態主体などさまざまなものが考えられるが、この中でこれまで意味格として抽出されたのは動作主、経験者の2つだけである。山岡(2000)でも「自動詞文や受動文においてガ格名詞句として現れ得る格は対象格(p31)」としている。「ある」文も自動詞文であることから、以下「～がある」のガ格は対象格と判断した。

第2節 「ある」文の格構造

動詞「ある」が作る構造について、以下のようにまとめられる(表2)。「ある」は他動詞としての用法を持たないため、動作主格が見られず、ヲ格と共起することがない。文型は「～に～がある」を基本として「～で～がある」のような出来事の表現、「～とある」のような引用、「副詞ある」「形容詞ある」などが見られる。

表2 「ある」文の形式格と意味格

| | | |
|---|-----------------------------|-----------|
| | 「アル」構文、「アル」表現 ⁵⁵ | 意味格・形式格 |
| 1 | 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格ニ 対象格ガ |

⁵⁵ この中には動詞「ある」を述語に持つ文だけでなく、連体詞のように名詞を修飾するための「名詞ある」のような表現なども含む。

| | | |
|----|------------------------|------------------------|
| | | 目標格ニ 対象格ガ |
| | | 経験者格ニ 対象格ガ |
| 2 | 名詞ニ (名詞ノ) 名詞ガ アル | 原因格ニ (結果ノ) 対象格ガ |
| 3 | 名詞ニ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格ニ 原因格ニ 対象格ガ |
| | | 場所格ニ 目標格ニ 対象格ガ アル |
| | | 経験者格ニ 目標格ニ 対象格ガ |
| 4 | 名詞ニ 名詞デ 名詞ガ アル | 場所格ニ 場所格デ 対象格ガ アル |
| 5 | 名詞ニ 名詞デ 名詞ト 名詞ガ アル | 場所格ニ 場所格デ 相手格ト 対象格ガ |
| 6 | 名詞ニ 名詞ヘ 名詞ガ アル | 場所格ニ 目標格ヘ 対象格ガ |
| 7 | 名詞デ 名詞ガ アル | 場所格デ 対象格ガ |
| 8 | 名詞デ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格デ 目標格ニ 対象格ガ |
| | | 場所格デ 受益者格ニ 対象格ガ |
| 9 | 名詞デ 名詞ト 名詞ガ アル | 場所格デ 相手格ト 対象格ガ |
| 10 | 名詞デ 名詞カラ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格デ 起点格カラ 目標格ニ 対象格ガ |
| | | 道具格デ 起点格カラ 相手格ニ 対象格ガ |
| 11 | 名詞ガ アル | 対象格ガ |
| 12 | 名詞ガ 名詞ガ アル | 対象格ガ 対象格ガ |
| 13 | 名詞ガ 名詞ヨリ 名詞ガ アル | 対象格ガ 基準格ヨリ 対象格ガ アル |
| 14 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞ガ アル | 対象格ガ 相手格ニ 対象格ガ |
| 15 | 名詞ガ 名詞ト 名詞ガ アル | 対象格ガ 相手格ト 対象格ガ |
| 16 | 名詞ト 名詞ト 名詞ガ アル | 相手格ト 相手格ト 対象格ガ アル |
| 17 | 名詞カラ 名詞マデ 名詞アル | 起点格カラ 目標格マデ 数量格 |
| 18 | 名詞カラ 名詞マデ (名詞ノ) 名詞ガ アル | 起点格カラ 目標格マデ (数量ノ) 対象格ガ |
| 19 | 名詞カラ 名詞マデ 副詞アル | 起点格カラ 目標格マデ |
| 20 | 名詞カラ 名詞ヘ 名詞ガ アル | 起点格カラ 目標格ヘ 対象格ガ |
| 21 | 名詞ガ (名詞ヨリ) 形容詞アル | 対象格ガ (基準格ヨリ) |
| 22 | 文コトガアル | (文) 対象格ガ |
| 23 | 名詞ニ 名詞・文ト アル | 場所格ニ 対象格ト |
| 24 | 名詞アル | 対象格 (無格) |
| 25 | 動詞 ツツ アル | |
| 26 | 副詞アッテ | |
| 27 | 動詞テアル | |
| 28 | 動詞デアル | |

第3節 「ある」と共起する名詞の種類

さて、形式格と意味格の二点を記述することで動詞「ある」が多様な構文を成すことがわかり、統語的・語彙的な特徴をある程度見出すことができた。

「～に～がある」という文は、形式格として「ニ」と「ガ」を要求し、その意味格は「ニ」が「場所格」、「ガ」が「対象格」である。このように動詞が求める格の構造として第2節で見たように二段階の特徴（形式格と意味格）を示すことができた。しかしながら、この構文の実例を観察すれば、場所格ニと対象格ガが後節する名詞は多様であることがすぐにわかる。場所格に立つ実際の名詞は、「机の上」「駅」という場所と呼ぶのにふさわしいものだけでなく、「太郎」「ネコ」などの人や生物、あるいは「地位」「立場」などの抽象的な概念まで見られるからである。加えて、場所格だけでなく、対象格についても同様である。例えば、「本」「充電器」などの物、「兄」「親戚」などの人、「火事」「発着」などの出来事や動作、「雰囲気」「考え」などの抽象的な概念とやはり多岐にわたる。また、これらが組み合わさって、「ここに本棚がある」のような場所と物との存在関係、「猫に尻尾がある」のような生物と身体部位との所有関係、さらに、「思想に問題がある」のような抽象的な概念と抽象的な概念との関係性を表すものもある。

このように、形式格と意味格を記述するだけでは見えてこない多様性が隠されているのである。一方で、通常の動詞は形式格と意味格を記述するだけで十分にその動詞の統語的・語彙的特徴を捉えることができる。例えば「食べる」という動詞であれば、「～が～を食べる」のようにガ格とヲ格を要求し、それらの意味格は動作主格と対象格である。そして、動作主格のガ格名詞は有情物（人・生物）、対象格のヲ格は動作の対象（食物）が基本であり、それはわざわざ名詞の種類を記述するまでもない。普通の動詞には形式格と意味格の二段階で動詞の意味的・統語的特徴を記述することができるのである。

したがって、「ある」という動詞の特殊性や多様性をさらに明らかにするために、共起する「名詞の種類」を記述していく。以下、形式格の文型順に具体例を挙げながらその特徴をまとめていくこととする⁵⁶。ただし、「する」と同様「ある」の場合もその全てを漏らさずに完全な記述を行うことは現段階では不可能である。そのため以下では、実例検索で抽出された例文を中心に記述し、その全体像を描き出すために行うものとする。

3.3.1. 「名詞ニ 名詞ガ アル」 文

「名詞ニ名詞ガアル」は「場所格ニ対象格ガアル」という格構造をとる。これが「ある」文の基本的なものである。例えば、「机の上に本が2冊ある」「駅前に時計台がある」などの、具体的な場所や空間に具体的な物が位置すること、あるいは存在することを表す。一方で、「彼に勇気がある」「彼には用事があった」「彼に時間がある」など、「勇気」「用事」「時間」などの抽象的なものが存在する、あるいはそれらを所有するのが「彼」であることを表

⁵⁶ 「ある」は「～がある」が基本的な形のため、「する」のように「～をする」「～がする」「～にする」のような単位で区切って論を進めることができない。そこで、ここでは文型の順に考察を進める。なお、例文番号は多数にわたるため振らないことにする。

す例も多い。ニ格名詞句は、場所というよりは厳密には「ありか（仁田 1993）」と呼ぶ方が適している。村木（1991）ではこの2つを分けて「空間的位置」と「非空間的位置」とする。一方、存在のガ格を「その他の叙述素」の「対象」に入れる（村木 1991）⁵⁷。これは「叙述素の中でもっとも意味的な特徴に欠けるものである（村木 2005：106）」とある。「ある」のガ格の内容を詳細に書くなら、「存在の主体」「出現した出来事」「所有する対象」「所持する属性」ということになる。

まず、存在の主体を表すガ格名詞は、「具象物」つまり具体的な人物、物、生物を表すか、あるいは「抽象物」つまり抽象的な内容を表すか、の2つに大きく分けられる。そのうえで、その存在する場所であるニ格名詞がどのような内容を表すかによって、さらに下位区分していく。

3.3.1.1. [具象物] ガ アル

具象物を人、生物、物と規定したが、例えば「脈」「栄養」「空気」などは具象物なのか否かとなると判断が揺れる。本研究では、「机の上に本がある」のような物の存在という基本的な意味と、そうでないものを分けることに重点を置く。そのことで、物の存在と物ではないものの存在がどう区切られ、さらに物でないものの存在がどのように広がっているかを明らかにしたいからである。したがって、以下では、具象物をかなり限定し「人、生物、物、物質、具体的な存在物として認識できるもの」とする。また、名詞は動詞と一緒に用いられることでその性質を変えるという面を持つため、名詞単独での意味を抽出することはしない。あくまでも文を作るときの名詞の意味を記述する。したがって、「こいつはまだ死んでいないぞ。脈がある」の「脈」は具象物、「まだ相手方に脈がある」の「脈」は抽象物とする。あるいは、「山には肺に負担をかけないきれいな空気がある」は物質なので具象物、「会議には人をやっつけようとするような嫌な空気がある」は雰囲気の意味のため抽象物とする。

以下では、「具象物ガアル」のニ格名詞の種類によって、さらに分類して記す⁵⁸。

① [場所] ニ [具象物] ガ アル

[場所] はいわゆる場所名詞であり、移動の動詞（例「行く」など）と「～のところ」なしに直接共起できるタイプの名詞とする⁵⁹。例文の中の下線は、点線がニ格名詞句に、実線がガ格名詞句と「ある」に引かれている⁶⁰。ガ格名詞句は実例の中では「～は」の形で主題化されているものもある。

造船所は、その海岸にあるのだが（戦艦武蔵）

そんな家が東京にあるかね？（痴人の愛）

⁵⁷ 「桜の木がある」「雪が降る」の例が挙げられており、抽象的なガ格名詞は挙げていないが、「対象」に分類する。

⁵⁸ 例文は例文末に（ ）で出典があるものが実例、無いものは筆者の作例である。

⁵⁹ 「駅に行く」が可なので「駅」は場所名詞、「彼に行く」は不可なため非場所名詞である。

⁶⁰ 修飾語句が長いものは下線を引かず主要部になるものを中心に引いた。

あたしに鍵があったの（痴人の愛）
京橋にSと云う同業の店がある。（小僧の神様）
駅にコンビニがある。
学校にプールがある。
東京に国会議事堂がある。

② [位置] ニ [具象物] ガ アル

[位置] には「方角、位置、立場、地位」などを含めた。
向いに『サーティワン・アイスクリーム』があるから（世界）
「ここ、ここ…その俵のわきに、梯子があるから…」（砂の女）
女の砂まみれの頭が、ちょうど眼の高さにあった。（砂の女）
門の外には獣たちのための場所がある。（世界）
門からはいと正面に役所と役人たちの居住する家があり、（さぶ）
それはこの地内の中央で、人足たちの動静を看視するのにももっとも都合のいい位置にあった。（さぶ）
博士は星の寄付金を管理する学術後援会の会長という地位にある。（人民）
この冬以来父の病気に就いて先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういふものか、それが大して苦にならなかった。（路傍の石）
ご承知のように、当社はいま、非常に苦しい立場にある。（人民）
祖父や母の死骸が傍にある。（城の崎にて）
南に海がある。
北側にグラウンドがある。

③ [人・生物] ニ [具象物] ガ アル

彼の叔父に、元根府川の石切人足で、今、海軍の兵曹長になっている男がある。（真鶴）
西洋人の見た一角獣はひどく獐猛で攻撃的ね。なにしろ三フィートっていうから、一メートル近い角があるわけだものね。（世界）
猫に尻尾がある。
彼にお兄さんがある。
彼が書いたへびには足があった。

④ [集合・集団] ニ [具象物] ガ アル

ほかの人足たちはもう寝床にはいって、中には鼾をかいている者もあった。（さぶ）
死んだって、こんなに立派なおともらいをしてもらう人があるのに……と思うと、吾一は涙が出てしかたがなかった。（路傍の石）
部員にはかなり年配の人もある。

これは、部分集合（寺村 1984）を表わす「人がある」の例である。ある集団の中に、部分的

な集団としてこのような人が存在する、あるいは、世の中にはこのような人が存在するという意味である。

⑤ [物] ニ [具象物] ガ アル

根や葉は食用にならないが、一二〇年ぶりにみのったその実には小麦とおなじほどの栄養価がある。(パニック)

机に抽斗がある。

自転車に大きな前かごがある。

箱に取っ手がある。

3.3.1.2. [抽象物] ガ アル

次に、具体的な物ではなく抽象的なもの（ここでは『抽象物』とする）が存在の主体としてガ格を取る文について、その場所格の種類を以下、分類・記述していく。

① [場所] ニ [抽象物] ガ アル

家ごとに、男が居り女が居り、そして子供が居る。そこに家庭があり、人間の生活がある。(青春の蹉跌)

家に重苦しい雰囲気がある。

以下のように場所名詞の明示はないが、文脈上「ここに」「そこに」という場所格が共起する例文は多い。村木（1991）の「非空間的位置」にあたる。

会社員が見た西鉄香椎駅の男女は、九時三十五分の電車の降車客といっしょだったというから、十一分の開きがある。(点と線)

そこにはある種のつながりがあるように感じられたが、(世界)

どこに一週間もの空白があったのやら、ほとんどその痕跡さえ見分けられない。(砂の女)

② [位置] ニ [抽象物] ガ アル

その取締り規則のあいだに微妙な差がある。(人民)

国鉄の香椎駅には九時二十四分に着く。西鉄香椎駅は九時三十五分に着く。十一分の差がある。(点と線)

老人が留守にしているあいだに二回か三回休憩時間があったと思う。(世界)

私とナオミとの間にはガラスの壁が立っていて、どんなに接近したように見えても、実は到底踰えることの出来ない隔たりがある。(痴人の愛)

それでは獣の頭骨とペーパー・クリップのあいだにどういう関連性があるかということになると、私にも皆目見当がつかなかった。(世界)

戸は閉ざされているが、その奥に人の気配がある。（青春の蹉跎）

現実もまた、後藤に対していくらか優位にある。（人民）

この「位置」の中には位置関係を表す語の他「優位」などがあるが、「具象物」がガ格の場合に現れる方角、具体的な位置を示す語は現れない。具象物の存在を表す位置という意味とは異なるからである。

③「人・生物」ニ 「抽象物」ガ アル

昆虫採集家にはつねに用意がある。（砂の女）

われわれ日本の青年は、勇気をもって戦線から離脱する、君ら海の向うからの同学に腕をさしのべる用意がある。（戦いの今日）

「お前は熱があるぞ」（山科の記憶）

君にはどこか見どころがある。（路傍の石）

そのうち社員ともだんだん親しくなり、隔てのない話をするようになった時、彼ははからずも、藤本老人がやめたのは、彼に原因があるのだということを知った。（路傍の石）

子供には子供独特の体臭がある。（裸の王様）

前田は子爵であり、大臣をやった経歴もある。（人民）

学生にも学生側の正義はある。（青春の蹉跎）

康子には気位の高さがある。（青春の蹉跎）

あの女には一種の虚栄心がある。（青春の蹉跎）

資格がとれなかった時には、父が何と言おうと、自分には拒否権がある。……（青春の蹉跎）

私は始めて彼女に深いたくらみがあったのを知りました。（痴人の愛）

読唇術というのはたしかに有効な技術です。私もいささか心得がある。（世界）

自分には独自にやらなければならない研究があるからと言ってね。（世界）

実例の場合には以下のように二格が現れないことが多い。いずれも文脈によって、それが「私に」「我々に」「～（人）に」などの語を二格として出現させることができるため、二格の省略として考える。

彼らがあなたの部屋にきて頭骨を探しまわったのなら、それはあなたの部屋に頭骨があるという根拠があったからです。（世界）

「そういう場合は、こちらとしては警察に届け出る義務があるんだがね」と医者と言った。（世界）

このあとにちょっと予定があるもんでね（世界）

そりゃ、そんな風に思った時代もあったけれども、（痴人の愛）

手応えがあった。すぐには信じかねたが、ロープは事実動かない。さらに引手に力をこめてみる。（砂の女）

心があるのなら、心があるうちにそれを働かせなさい。（世界）

その場で、断われないところをみると、脈があるものと思い、(路傍の石)

きっと何か事情があるのだろう。(世界)

ほんとに真面目で頼むんだから、そのくらいな親切があってもいいでしょ？(痴人の愛)

これはいわば職業的な勘のようなもので、具体的な根拠があるわけではない。(世界)

男には身長があつた。

「男に身長、背、体重、力、腕力、…がある」は、数量詞を立てない表現であり、その程度が大きいことを表わすものである。これは第6章第3節で考察する。

④ [集合・集団] ニ [抽象物] ガ アル

人々の輪のなかに、倒れている人の姿があつた。(青春の蹉跌)

その中には、白布におおわれた木箱と白い繃帯に包まれた宇垣参謀長の憔悴した姿があつた。(戦艦武蔵)

総督府内は腐敗し、一部の民間人と結託がなされ、利権をめぐって大きな不正がある。(人民)

フランスの政府には、民間の事業の勃興をねたむ傾向がある。(人民)

「結婚」と云うと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。(痴人の愛)

部員のあいだに、疑心暗鬼の様子がある。

⑤ [物] ニ [抽象物] ガ アル

まあ、言ってみれば、砂には現代人をひきつける、不思議な魅力があるんですね…(砂の女)

太郎の明るい薄茶色の瞳には、はっきりそれとわかる抗議の表情があつた。(裸の王様)

なにしろ逸物がまことに立派で、これはもう一見の価値がある (アメリカひじき)

その頭骨には探すだけの価値があつたんです。(世界)

いくら今になって日本の誰かが、日本人の顔には味があるの、肌がきれいのいうても、(アメリカひじき)

五〇メートル以上の水深がある港外の福田浦で取りはずし作業がおこなわれた。(戦艦武蔵)

日本にもこれに割り込める可能性はある。(人民)

私の耳はまともで、問題があるのは女の口の方なのだ。(世界)

それぞれの骨にはそれぞれ固有の音がある (世界)

ひとことで頭蓋骨といっても、ほんとうにいろんな音色があるものだと私は思った。(世界)

そんな風に太り方にもいろんな特徴があるのだ。(世界)

図説シリーズは人気があるし（世界）

柄には作るものそれぞれの好みがあるが（世界）

その名前には面白い由来があった。

壁には高さがあった。

「壁には高さ、厚さ、重さがある」などのような抽象物をガ格に持ち、数量詞を立てない「ある」文はその程度が大きいことを表わす。

⑥〔動作・事態〕ニ 〔抽象物〕ガ アル

よくよく、おれの舵は、左にふれるくせがある。（砂の女）

母の晩婚には祖父の病気という理由があった。

彼が口を利かなくなったのには原因がある。

これらは動作や事態の中に、ある事柄が入っていることを示すもので、多様な「ある」文を示す例である。

⑦〔抽象物〕ニ 〔抽象物〕ガ アル

人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。（鼻）

だが、倒錯した情熱にも限度がある。（砂の女）

隣寸の数には限りがある。（放浪記）

よいことばはアルコールなぞよりも、はるかに人を酔わせる力がある。（路傍の石）

そうだ、安田の主張はもう一つ類似がある。（点と線）

唇なども、上唇の真ん中のところが、ちょうど桜の花弁のように、いやにカッキリと二つに割れていて、しかもその紅さは、普通の口紅をさしたのとは違った、生き生きとした自然のつやがある。（痴人の愛）

人間の太り方には人間の死に方と同じくらい数多くの様々なタイプがあるのだ。（世界）

たぶんそれは私自身の人間性にいろいろと欠点があるせいだろう。（世界）

もうひとつの単角の欠点は、力を入れにくいという点にあるの。（世界）

日本の女の第一の短所は確乎たる自信のない点にある。（痴人の愛）

たしかにひさの間のびした無感動さには、若々しいがさつさとか新興のいきいきとした活力とは縁が遠いものがあつた。（楡家の人々）

彼女らの聞きかたには大田夫人とすこしかわった匂いがある。（裸の王様）

六カ月前にトラックに向った折とは、戦局にかなりの差があつた。（戦艦武蔵）

その一つの生命があしたは断たれる運命にあると思うと淋しい気持になる。（濠端の住まい）

以上の二格もガ格も抽象的な概念が来る例だが、非常に多くの単語がこの文を成すことがわかる。

3.3.1.3. [出来事] ガ アル

ここにまとめたガ格名詞は大きく分ければ上記の「抽象物」に入るが、一つのまとまった特徴を持つために「出来事」として意味を抽出する。場所格はデ格ではなく、ニ格が用いられる文である。

① [場所] ニ [出来事] ガ アル

その夜ふけて、近所に火事があった。(青春の蹉跌)

② [人] ニ [出来事] ガ アル

おめえ、今夜、夜業があるんか。(路傍の石)

③ [集団] ニ [出来事] ガ アル

鶴川は何か一族にごたごたがあって、一週間ほど休暇をとって東京へかえっていた。
(金閣寺)

3.3.1.4. [期間] ガ アル

同じ「～に～がある」文でも意味格が異なっており、「目標格ニ 対象格ガ アル」で、ニ格が「～までに」の意味を表わす目標(goal)である場合である。ガ格名詞は期間や時を表わす名詞で、ニ格名詞は動作の範囲や時期などが示される。

[動作・時期] ニ [期間] ガ アル

清七が島を出るにはまた期間があった。(さぶ)

発表時間には間がある。

夏休みにはまだ日がある。

3.3.1.5. [抽象物(心理事象)] ガ アル

同じ「～に～がある」文でも意味格が異なっており、「経験者格ニ 対象格ガ アル」で、ニ格が心理事象を体験する経験者(experiencer)であるものと、「場所格ニ 対象格ガ アル」があるものの2つである。後者は、ガ格名詞句が心理事象でありながらも経験者格ではなく場所格だけが出現する文である。

経験者格は、村木(2001)では〈動作主／経験者〉にあたり、「無意志性の動詞とむすびつくと、経験者格としての意味役割が読み取れる(p105)」『『あわてる』『困る』『焦る』『びっくりする』は、無意志性の動詞で、経験者をガ格にとるのが普通である(同)』と規定する。ここでは経験者格を「述語の表す心理事象を経験する主体」と定義づける。そして、心理事象としてのガ格名詞には感情、感覚、経験、記憶に関する語彙が見られる。

① [人] ニ [抽象物(心理事象)] ガ アル

江藤は合格を信じていた。六十問のうちの五十四問までは確信があった。(青春の蹉跌)

「江藤には確信があった」というこの文は、何に対する確信かを述べた文ではない。文意からすると「60 問中 54 問まで正解できたという確信」であって、それは「60 問のうちの 54 問までは正解に確信があった」という型に変更することができない。つまり、目標格が無い文である。目標格がある 3.3.2. の②の例とは異なる。

僕には影がおそらくその靴をばらばらにして地図を探索だろうという確信があった。

(世界)

所員たちには、一つの確信があった。(戦艦武蔵)

それならそれで、こっちも考えがあるんだから。(路傍の石)

そ、それについて、ぼく、少し考えがあるんですが……(路傍の石)

私にも覚えがあるよ。(世界)

以前にもたしかこういう風に、せっぱつまった記憶がある、あれは何時だったか、

(アメリカひじき)

何かしきりに悪い予感があった。(青春の蹉跌)

小川たちは、釈然としない表情をしていた。大型艦を建造するための態勢は、一応整えてきたつもりではあったが、予定されている艦の規模は、自分たちの想像をかなり上廻ったものであるらしい。技術的には受けて立つ気構えだけはあるにしても、それを実行する際の不安はある。(戦艦武蔵)

それに、成功への自信はある……(人民)

「はい、これからは、北風の季節で砂嵐の心配もありますし……。」(砂の女)

その時から母は、この娘に賢一郎を奪られてしまうのではないかという風な、直感があった。(青春の蹉跌)

実例には心理事象を表す名詞に修飾語句が付いて、その心理現象がどのようなものかを示す表現が多い。

②〔抽象物〕ニ 〔抽象物(心理事象)〕ガ アル

意味格が「場所格ニ 対象格ガ アル」という構造のものである。

そういう考え方は、理窟としてはどこまでも正しいと江藤は思っていた。少しばかりエゴイズムの匂いはある。(青春の蹉跌)

このタイプは、「そういう考え方にエゴイズムの匂いがある」を「*私にはそういう考え方にエゴイズムの匂いがある」のように、「匂い」の感覚経験者を二格で文中に出現させることができない。そのため、この文は経験者格を持つ①の文とは異なる。確かに「匂い」というガ格名詞は感覚であり、感覚は経験者を必要とするが、この文は二格名詞句(場所格)の「考え方」の中に「エゴイズムの匂い」の存在を認識したという話者の判断や叙述であるといった側面が強い。そのため、二格は目標格ではなく場所格と捉えられる。以下の例も同様である。

彼女らの聞きかたには大田夫人とすこしかわった匂いがある。(裸の王様)

あの男は非常に見込みがある。(青春の蹉跌)

火箸は頭骨とは逆にずっしりと重く、まるでフルトヴェングラーがベルリン・フィルを指揮するのに使う象牙のタクトのような威圧感があった。（世界）

普通の骨とはちがう少しざらりとした感触があった。（世界）

どちらの動物もどことなくグロテスクな感じがあった。（世界）

3.3.1.6. （原因・要因・理由）ガ アル

同じ「～に～がある」文でも意味格が異なっており、「原因格ニ （結果ノ） 対象格ガ アル」の文である。

〔原因〕ニ 〔結果〕ノ（原因・要因・理由）ガ アル

姑に彼女の離婚の原因があった。

不断の努力に合格の要因がある。

腕の火傷に外出嫌いの理由がある。

「原因、要因、理由がある」を述語に持つ文で、ガ格名詞が限定的である。そして、その原因の具体的なものがニ格名詞に来るため、ニ格名詞は種類として具象でも抽象でも構わない。さらに、ニ格名詞句が原因になって引き起こされた事態や結果をガ格名詞句の修飾部（～の）として持つという特徴がある。このような限定的な名詞が来る場合には、その具体的な語を（ ）の中に入れて表示する。いわば、このように表記される文型は特殊な格構造であることを示している。

3.3.2. 「名詞ニ 名詞ニ 名詞ガ アル」文

この文は意味格として「場所格ニ 原因格ニ 対象格ガ アル」の文である。

①〔人〕ニ 〔原因〕ニ （必要）ガ アル

「～に～ために（～する）必要がある」という文がある。これは、述語の表す内容に関する理由や原因を示すニ格名詞が必要であり、実例では「ため」という形式名詞にニ格が後接する例が見られた。この文も限定的なものである。

よいお客さんを捜すためには、子どもを使う必要があるのだ。（路傍の石）

そのためには、山を大幅にきり崩す必要がある。（戦艦武蔵）

船体を進水させるのには、完全な満潮時をねらう必要がある。（戦艦武蔵）

これらの例に「必要がある」のは誰かという述語の主体を出現させることができれば、「～に～ために～必要がある」という文の場所格ニの省略ということになる。場所格を顕在化してみる。

？私たちにはよいお客さんを捜すために子供を使う必要がある。

？我々にはそのためには、山を大幅にきり崩す必要がある。

？人には船体を進水させるのには、完全な満潮時をねらう必要がある。

以上のように場所格ニの名詞句は実際には顕在化させるとかなり無理のある表現になる。また、いずれも「我々」「私たち」あるいは一般に「人」のように主語が特定の誰かであることを示さないものであるという特徴を示すものである。以下の例のように、場所格ニが顕

在化しているものもあった。

だからこそ我々は皮と果肉とをはっきりと分離しておく必要があるのだ。（世界）
他に「～ために」などの原因を文中に立てない文も以下のように見られた。

下宿を出る必要がある。（路傍の石）

この場合は、顕在化していないが話者が場所格であり「私（に）は」が隠れている。

② [人] ニ [具象物、抽象物] ニ [抽象物（心理事象）] ガアル

同じ形式格でも意味格が「経験者格ニ 目標格ニ 対象格ガ アル」の文である。

2つ目のニは「～に対して」という意味から単に場所ではなく、「主体や対象の目標や着点を表した項（仁田 1993）」である「ゆく先（同）」として目標格とした。

この問答を聞きながら、栄二は「おや」と思った。いつかは見た顔だと思ったが、次郎吉の声にも聞き覚えがあった。（さぶ）

じっと眺めているとその頭骨には何かしら見覚えがあるような気がした。（世界）

彼は記憶力に自信があった。（青春の蹉跌）

この戦術で勝つことには八〇パーセントの自信がある。（パニック）

私は出来あがった品を動かして利益を得ることに、あまり興味がありません。（人民）

悪事を働く可能性のある人間として監視されている。その事に屈辱感があった。（青春の蹉跌）

社会というものはいつの時代にも、大人たちのものだった。大人になりきらない青年たちにとっては、一種の違和感がある。肌になじまない窮屈さがある。（青春の蹉跌）

あの子に気でもあるのか？（世界）

それ以外の約束はしなかったし、約束することを避けようとする気持もあった。（青春の蹉跌）

彼にはその視線に辟易ぐ気持があった。（山科の記憶）

さすがに出しなの一瞥には、ひきさかれるような痛みがあった。（砂の女）

「武蔵か」かれは、胸の中でつぶやいた。「大和」という艦名にくらべると華やかな豊かさには欠けるが、武蔵野を野分が走るような荒々しい印象がある。（戦艦武蔵）

「ぼくにも責任がある」（戦いの今日）

息子には父親に競争心がある。

私にはあの人に恨みがある。

最初の二格は「～がある」の感覚や感情を経験する主体である。そして、何に対する感覚や気持ちなのか、つまりターゲット（目標）が2番目の二格で表わされる。

3.3.3. 「名詞デ 名詞ガ アル」文

この文の意味格は「場所格デ 対象格ガ アル」である。存在を表すという基本的な意味から考えると、「ある」に動作の場所を示すデ格が共起するのは不自然なはずだが、「ある」は対象格に多様な種類の名詞を共起させることを許すために、「存在」という静的な状態と

「動作」という動的な様態のどちらも表し得る。

〔場所〕デ 〔出来事・行為〕ガ アル

いつぞや帝劇でバンドマンのオペラがあった時、私は若い西洋の女優の腕の白さに見惚れたことがありました（痴人の愛）

場所格デが後接する名詞は、場所を表す名詞に限られる。また、この場合の対象格ガが後接する名詞は、出来事や催し、犯罪、動作や行為など、いずれも動作性の名詞が来る⁶¹。実例の他に「火事、小火、放火、争い、戦争、紛争、騒ぎ、デモ、スト、万引き、事件、祭り、結婚式、葬式、卒業式、入学式、入社式、壮行式、…式、ライブ、スピーチ、音楽祭、文化祭、体育祭、…祭、試合、協議、試験、実験、調査、審査、操作、相談、通知、連絡…」などがある。

そして、そのガ格名詞によって共起する格のタイプが変わる。以下のものである。

銀行で客に発砲があった。（場所格デ 目標格ニ 対象格ガ アル）

「発砲」という動作性の名詞は、動作の場所、動作の向かう先である目標の二つが共起する。

会場で当選者に賞品の授与がある。（場所格デ 受益者格ニ 対象格ガ アル）

「授与」という動作性の名詞は、動作の場所、動作の結果恩恵を被るものの二つが共起する。

国境地帯で隣国と戦争があった。（場所格デ 相手格ト 対象格ガ アル）

「戦争」「試合」「協議」などの動作性の名詞は、動作の場所、動作の相手二つが共起する。

講堂で校長先生から全校生徒に話がある。（場所格デ 起点格カラ 相手格ニ 対象格ガ アル）

「相談」「連絡」「通知」「話」などの動作性の名詞は、情報が移動する際の起点、動作の相手、さらにはその出来事や行為の場所も共起が可能である。

ガ格名詞の持つ動作内容によって要求する格とその名詞の種類が異なる。そのため、この構文におけるガ格名詞とデ格名詞以外の名詞の種類は特に記述しない。ただし、「場所格デ 対象格（出来事・行為）ガアル」の意味格のパターンはおおよそ以上の5つのタイプと考えられる。以上のようにガ格に立つ名詞の種類によって必要となる格と名詞が異なる。これが「ある」文の格構造を複雑にしている理由である。

3.3.4. 「出来事ガ アル」について

3.3.4.1. 場所格ニとデの違い

「出来事ガアル」の共起する場所格は、ニ格の場合とデ格の場合とがあることを見た。ここで両者の違いについて整理しておきたい。まず、場所格に立つ名詞の種類には以下の3つがある。それぞれニ格とデ格の可否、文の表す意味について考える。

⁶¹ 「～に出来事がある」の文型は、ガ格名詞が行為ではなく、その場所の属性や歴史になるような事柄であるように思う。しかし、「～で」の文では出来事だけではなく行為自体もガ格名詞に立つために、〔出来事・行為〕とした。

① [場所] ニ／デ

いつ、どこのうちに葬式があるか、お寺はどこであるか、帰りには菓子オリをくれるか、これをまず、さぐっておかなければ、この商売は成り立たない。(路傍の石)

その夜ふけて、近所に火事があった。(青春の蹉跌)

いつぞや帝劇でバンドマンのオペラがあった時、私は若い西洋の女優の腕の白さに見惚れたことがありました(痴人の愛)

このように実例には、場所を表す名詞にニ格とデ格を伴うものが見られる。意味を考えると、ニ格の方は「葬式」や「火事」がある場所に属する物事のように描かれ、そのことがある場所の特徴や、ある場所に対する人の記憶として捉えられている点に特徴がある。一方、デ格の方はある場所で出来事や動作が行われることを表すに過ぎない。

以下の実例は場所格の出現がないが、デ格あるいはニ格の想定が可能である。

もちろん現在に至るまでは幾多の増築や改築があった。(楡家の人々)

つづけて小さな砂なだれがあった。(砂の女)

何度か会っているうちに彼は彼女をつうじて大田氏にわたりをつけ、グループ展や個展があると、ときたま一点、二点と画を買いあげてもらうところまで懇意になった。(裸の王様)

児童画コンクールの審査会があるからでてこいというのである。(裸の王様)

シャンパンの乾杯があった。(青春の蹉跌)

私は近所の酒屋の主人と知りあいになって、輸入ウイスキーのバーゲンがあるたびに少しずつそれをとどけてもらい、今ではけっこうな在庫量になっていたのだ。(世界)

次に、場所を表す名詞と出来事を表す名詞の組み合わせなら、ニとデがいつも可能かというところではない。次の例のように、ニ格の方が限定的である。

隣家 {に/で} (火事、小火、法事、葬式、騒ぎ) があった。

市役所 {*/に/で} (相談会、調査、壮行式、事件) があった。

これは、先に述べたとおり、ある出来事がある場所に属する物事のように描かれ、そのことがある場所の特徴や、ある場所に対する人の記憶として捉えられている場合に、ニ格になるようである。したがって、ニ格名詞も一般的な場所というよりは「近所」「近隣」「うち」が立ちやすく、ガ格名詞もそれに伴って、生活に関わる行事や事件、事故などの名詞が来ることが多い。

② [人] ニ／*デ

「出来事がある」の場合、人を表す名詞にデ格を取ることができない。それは人が場所ではないからではない。人はあるものの存在のありかになり得るため、「人に」でも場所格であるが、出来事や行為の行われる場所にはなりえないという意味において、デ格を許さない。これは村木新次郎(2005)の「非空間的位置」に該当する⁶²。

⁶² 「非空間的位置」は「非具象物が存在するところ」と村木(1991、2005)にはある。そのため「彼には週末出張がある」の場合は、「彼(非空間的位置)」「出張(非具象物)」で説明のとおりである。しか

「(人)に(出来事・行為)がある」で、その人が出来事やある行為を体験することを表す。同じ場所格ニでも①[場所]ニではなく、②[人]ニの場合には、より一層ニ格名詞に属する出来事として描くという性質が強くなる。そのため、動詞が現在形の場合、その人に属する「予定」を表すことになる。以下の例である。

おめえ、今夜、夜業があるんか。(路傍の石)

この兵隊たちには一週間あと朝鮮での戦いがまちうけている、そこでの命がけの殺しあいがある。(戦いの今日)

太郎、{に/*で}は来月、海外出張がある。

子供たち、{に/*で}はサッカーの試合があるから、出かけるはず。

また、人の予定を表すために、先の①「[場所]デ出来事がある」全体が、②[人]ニ属するものであるとする表現も可能になる。例えば以下の例である。

私には来週東京でB社と打ち合わせがある。

私には[来週東京でB社と打ち合わせ]がある

このように、「私」の中に存在する予定的出来事として描かれている。

以下の実例は、場所格が文中に現れていないが、補うとすれば「(主人公)に」「彼女に」という人を表わす名詞がニ格と共に出現する。

夜会がある時は殊に大変で、風呂場へ行って、アマに手伝わせて、体じゅうへお白粉を塗ります。(痴人の愛)

③[集団]ニ／デ

鶴川は何か一族にごたごたがあつて、一週間ほど休暇をとって東京へかえっていた。(金閣寺)

この例は集団を表す名詞がニ格とデ格を取るものである。意味は両者ともにそれほど変わらない。「集団の中において」という意味である。

3.3.4.2. テンス的意味

「ある」は存在を表すために、その現在形の表す意味は「現在」を表すのが普通である。例えば、物の存在を表す「ある」、人の存在を表す「いる」の例では、以下の通り未来時は動詞単独では表しづらい。

今ここに田中さんがいる。(現在) ?明日ここに田中さんがいる。(未来)

今鞆の中に財布がある。(現在) ?明日鞆の中に財布がある。(未来)

動作を表す動詞は、現在形で未来を表し、現在を表すためにはテイルという補助動詞を付加しなければならない。

し、「グラウンドで試合がある」の場合は、「試合(非具象物)」の存在するところが「非空間的位置」ではなく、「グラウンド(空間的位置)」となるためこの説明に該当しない。そのため、本章では大枠的な分類である「場所格」を用いるものとする。

来週、胃カメラを飲みます。(未来)

今、胃カメラを飲んでいます。(現在)

テンス的意味は、動作動詞が現在形で未来を、状態動詞が現在を表す。ところが、「出来事・行為がある」は「ある」が状態動詞でありながら動作性名詞をガ格に持つために、動作動詞と同様、現在形で未来を表す。このことは、「ある」が形式的な形で動詞の型を保持しながらもその実質的な意味、つまり動作が動詞「ある」の側ではなく、共起するガ格名詞の側に完全に移行していることを示すものである。以下の例の通りである。そして、このことは場所格がニ格でもデ格でも同様である。

あさって学校で体育祭がある。(未来)

来週わたしには残業がある。(未来)

そのため②[人]ニの場合は現在形で、その人の持つ「予定」という意味合いが強くなっている。例えば「来週わたし(に)は残業がある」は来週という未来時に残業という業務が予定されていることを、「一週間後子供たちには試合がある」は、一週間後の予定として試合が行われるということを表している。一方で物の存在を表わす「ある」が示す現在というテンス的な意味を逆に表わすことができなくなっている。

*今、学校で体育祭がある。(×現在)→体育祭をやっている

*今わたしには残業がある。(×現在)→残業をしている

このように、動詞のテンス的な性質が状態動詞から動作動詞へ変化しているのである。それが、動詞の形態的变化や複合・合成などを行わずに実現するところに、「ある」という動詞の特殊さが見られると言っている。つまり、本章で整理するような多様な名詞との共起がこの動詞の多様性を生み出している。また、それを許す概念的普遍性といったものが「ある」にはあるのである。

さらに、同じ「出来事ガアル」でも「人(に/*で)」と「場所(に/で)」とでは表わす意味が異なる。前者が現在その人に未来におけるある行為の予定が存在することを表すのに対し、後者は出来事が単に未来に行われることを表すものである。「来週わたしは残業がある」は現在のところ、私という者は予定として(来週残業をする)ことを持つ人物であることを表す。そのため、焦点は「わたし」という人物の現在時に焦点が当たっていると言っているだろう。ところが、「明日近所(に/で)法事がある」は、明日法事が行われることをただ表すだけである。あくまでも未来時としての捉え方である。また、「来週わたしは残業がある」には「来週わたしは残業する」に見られる意図性もない。また、「明日近所で法事をやる」では動作主が話者になってしまうが、「明日近所で法事がある」はその関与性は低い。このような物事の描き方の違いが見られる。

「ある」はガ格名詞に動作性名詞を立てることによって、「ある」自体が持つ「存在」の時間的幅が動き、未来時というテンス的意味を持つようになっていいると考えられる。この点も「ある」の多様性を示すものとして重要であろう。

3.3.4.3. 取る格

この他、「～デ出来事ガアル」は先に見た通り様々な格を他にもとることができるが、「～

「出来事ガアル」もまたガ格名詞の種類によって様々な格を取ることができ、似ている。以下の通りである⁶³。

弟（に）は東京で説明会がある。（場所格ニ 場所格デ 対象格ガ アル）

子供たち（に）は近くの小学校でBチームと試合がある。（場所格ニ 場所格デ 相手格ト 対象格ガ アル）

太郎（に）は東京へ出張がある。（場所格ニ 目標格へ 対象格ガ アル）

まだその外にも注文があるわよ（痴人の愛）→まだその外にも私にはあなたに注文があるわよ。（場所格ニ 目標格ニ 対象格ガ アル）

3.3.5.「名詞カラ 名詞へ 名詞ガ アル」文

この文は、「起点格カラ 目標格へ 対象格ガ アル」という意味格の構造を持つ。これに「場所格デ」が加わった構文を既に確認した。この文は、場所格デが不必要な例であるために、ここに新たに項目として立てる。

【出来事・行為】ガ アル

その船は中洲へ着いたのであるが、六の死体は干潮時に流され、佃島の岸の杭にひっかかってい、水玉模様の仕着で、すぐに寄場へ知らせがあった。（さぶ）

「知らせ」は「知らせる」という動詞の名詞である。「知らせる」は「～が～へ～を知らせる」という格をとる。そのため「知らせがある」はへ格を要求する。この他に、「連絡がある」「問い合わせがある」「通知がある」「密告がある」などがある。

「敵同島に上陸開始」の連絡があったが、その発信を最後に連絡を絶った。（戦艦武蔵）

その後、総務部長から、今日の内命の件については、最高機密に属することなので、決して他言しないこと、海軍部内でも上層部の極く限られた者しか知らないことであるから、その点は充分留意していただきたい、と注意があった。（戦艦武蔵）

そして、長崎造船所側からもその流れを円滑なものにするため、造船所員の呉出張をはかるように要請があった。（戦艦武蔵）

少年の供述書をとっている刑事から、首席監督官室に電話があった。（戦艦武蔵）

所長室に、かれらと監督官が集って、島本首席監督官と小川所長からそれぞれ激励の挨拶があった。（戦艦武蔵）（誰かに対して？）

足もとの闇のなかから、ランプの灯がゆらいで、答えがあった。（砂の女）

これに道具格デ格が加わったものが、以下のものである。

電話で部下から私に相談があった。

3.3.6.「名詞ガ アル」文

⁶³ 例文は、主題化した例の方が自然であるためニ格を（ ）内に入れてある。

この文は、対象格のガ格名詞以外は出現しない。あるいは、削除・省略された要素を想定することが難しい。場所格として「私に」あるいは「ここに」が考えられるものがなくはない。しかし、実際に場所格ニを顕在化すると不自然な表現になる⁶⁴。

対象格の内容としては、[抽象物][具象物]の2つのタイプがある。

3.3.6.1. [抽象物] ガ アル

まず一つは以下のように、ガ格名詞に修飾節がつくタイプがある。ガ格名詞も「おそれ」「憾み」などの物事への話者の判断などの名詞が目立つ。以下、実例である。

テロや自衛隊への襲撃の可能性を指摘する声がある。(北海道新聞 北海道新聞社 2004)

「インドネシアのスハルト政権崩壊時と同様の社会動乱を招く恐れがある」とする「嚴重警告」を掲載した。(中日新聞 中日新聞社 2002)

登録した外国人のうち約百六十人に不法入国や不法残留の疑いがあるという。(朝日新聞朝日新聞社 2004)

じかにこの^{ひさげ}提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧れがある。(鼻) 少しの過失でも大事故に発展するおそれがある。(戦艦武蔵)

航海長は、右へ向きをかえることを考えた。そうすれば魚雷を回避できる可能性が十分あったが、万が一避け損った折には、舵をやられるおそれがある。(戦艦武蔵)

船台から水飛沫をあげて進水した船体は、そのまま海面を進んで対岸に激突するおそれがある。(戦艦武蔵)

しかしながら直ちにこれを廃止するためには、社会の実状がなお整っていないという憾みがある。(青春の蹉跎)

内供が鼻を持てあました理由は二つある。(鼻)

そのうち東京に出たという噂があった。(楡家の人々)

入選した子供は得意になってそれ以後自己模倣をくりかえし、あとの子供たちはみんなそのまねをするという危険がある。(裸の王様)

九月の十日すぎのある日のこと、大きな颱風が襲うかもしれぬという予報があった。(金閣寺)

その上、第二号艦は、対岸までわずか六八〇メートルの狭い海面に進水させなければならぬという不利な条件があるし、(戦艦武蔵)

やみくろのやつがこちにまぎれこんだような形跡があったんで心配になって、あんたをここまで迎えにきたですよ。(世界)

「実はそういった状況の中で、一角獣の頭骨が発見された記録があるのよ」(世界)

以下は、ガ格名詞に長い修飾語句がつかない例である。

「おうい、もう一人分、カンカラとスコップ持ってきてやったぞう！」メガホンをつか

⁶⁴ 3.3.1.2.の「場所格ニ 対象格ガ アル」は実例では二格が現れないことが多いが、具体的にそれらを文中に戻しても自然であるため二格名詞句の省略である。しかし、当該のものは省略ではないと考える。

っているのかもしれない、距離感があるわりに、はっきりした声が、緊張を破った。(砂の女)

ちっとやそつとの不都合があつても、それと『あの顔』と引き換えになると思っているのか。(痴人の愛)

ああ、そうですか、機会があつたらそれも十分そう云って見ますよ(痴人の愛)

あと約一時間の猶予はある。(砂の女)

これらの例文の前後を読んでも、「私に」や「ここに」を文中に顕在化するのはどこか不自然で大げさである。そのため、二格のない「ある」文とする。

3.3.6.2. [具象物] ガ アル

雨滴が洲の乾いた河原を染めた。と思う間に、私の上へおちかかる雨があつた。(金閣寺)

積雪二メートル。曇り空で、風があつた。(青春の蹉跎)

「こん畜生、笑ってるやつがあるか。」

蜂は羽目のあわいから摩抜けて出ると、一ト先ず玄関の屋根に下りた。其処で羽根や触角を前足や後足で叮嚀に調べると、少し歩きまわる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。(城の崎にて)

このように具象物の場合は、天候や気象現象など、さらに人物のガ格名詞が来る。人物を表す名詞の場合は、部分集合を表し、全体の中で(社会全体、集団全体)そういう人があることを表す。

3.3.7. 「名詞ガ 名詞ガ アル」文

この文は意味格として「対象格ガ 対象格ガ アル」の格構造を持つ。そして、2つ目の名詞は「形容詞派生の名詞」であるという特徴を持つ。

[具象物] ガ (形容詞派生の名詞) ガ アル

日本で最も大きい主力戦艦「陸奥」の舷側甲鉄が三〇センチの厚さがあるといわれているが、(戦艦武蔵)

「甲鉄に三〇センチの厚さがある」という言い方もできるが、この例はあくまでもガ格が2つ出てくる。「ある」文は基本的には「～に～がある」だと考えるべきだが、実例では「～がある」のガ格が無いことはほとんど見られないが、その他の格、特に二格は文脈上省略されているものが多い。一方で、3.3.6.のように二格が元々無いと考えられるものもあり、さらにはこの例のように二格ではなく、もう一つのガ格と捉えるべきものもある。主題化した場合はいずれも「～は」となるため、格関係が判断しにくい場合がある。それも「ある」文の多様さであろう。この例の「厚さがある」は「厚い」ことを表わしているため、最初のガ格名詞「甲鉄が」は主格、次のガ格名詞「厚さが」は文を成立させるための道具的なものと

言える。そこで、「三〇センチ」という修飾語句を削除して、2つのガ格の意味を考えてみたい。

甲鉄が厚さがある。

甲鉄に厚さがある。

甲鉄が厚い。

「甲鉄に厚さがある」が最も自然な表現であるが、「甲鉄が厚さがある」も決して不自然ではない。一方で形容詞文「甲鉄が厚い」を見ると、「厚さがある」が「厚い」と同じ意味役割を果たしているために、「厚い」の主体にガ格が用いられるのと同様、「甲鉄が」となっている。つまり、通常同じ格表示が同一文中に立つこと（二重ガ格⁶⁵）は嫌われるにも関わらずこれが成立するということは、この2つのガ格が同じ役割を果たしていないためである。前者は主格、後者は形式的なもので格の意味役割はない。この他にも作例だが、以下のようなものが考えられる。

話の展開がスリルがあるから、読んでいて飽きない。

話の展開にスリルがあるから、読んでいて飽きない。

Aの漫画が人気がある。

Aの漫画に人気がある。

いずれも「～に～がある」「～が～がある」のどちらも可である。先に説明したものと同じ現象である。「Aの漫画に人気がある」は基本的な「ある」文の格パターンを保持したものであり、「Aの漫画が人気がある」は「人気がある」の語結合が形容詞同様になっていることから出現した格パターンである。つまり、「Aの漫画が人気だ⁶⁶」と同様である。

一方で、より基本的と考えられる「～に～がある」を作りにくく感じられる以下のような例もある。

建物が20メートルの高さがある。?建物に20メートルの高さがある。

道路が10メートルの幅がある。?道路に10メートルの幅がある。

池が3メートルの深さがある。?池に3メートルの深さがある。

形容詞文に近づいた格関係を持つようである。しかし、「ある」の便利な点は「建物が高い」と「20メートルの高さだ」ということの2つを1つの文に表わし得ることである。以下は実例である。

ビルでいえば三、四階ぶんくらいの高さがあるし（世界）

僕はコートの袖に腕を通してみた。肩幅がいくぶん広く、着慣れないとよろめいてしまうほどの重みがあったが、なんとか体にはあいそうだった。（世界）

⁶⁵ 「花子が母が好きだ」は両者のガ格が異なる役割を果たすために格としては共起できる。前者は主体、後者は対象である。言語運用の際にはどちらかが主題化される。同じことが「甲鉄が厚さがある」には見られ、両者のガ格が異なる役割を果たしている。ただし、2つ目のガ格は格の意味役割を果たしてはおらず形式的なものである。

⁶⁶ 「人気だ」という表現は「*人気な」「*人気に」のように形容動詞が持つ活用を持っていないという点では完全な形容動詞とは言えないが、英語では「popular」という形容詞が該当するように意味的・統語的には形容詞である。

甲鉄が船底より厚さがある。

Aの漫画がBより人気がある。

以上の例が形容詞と類似した意味を表わすのと同様に、そのために比較のヨリ格をとることが可能である。つまり、「対象格ガ 基準格ヨリ 対象格ガ アル」意味格の構造をとる。基準格は山岡政紀（2000）で「状態性述語だけが取る意味格として、本書で初めて設定したもの（p33）」である。それは、「基準設定」のためのものであり、「ニ、ヨリ、ニシテ、ニトッテ」がある。ここに加えておく。

3.3.8. 「名詞ガ 名詞ニ 名詞ガ アル」文

この文の意味格は「対象格ガ 相手格ニ 対象格ガ アル」である。それぞれの名詞の種類は以下の通りである。

〔人〕ガ 〔人・物〕ニ 〔抽象物〕ガ アル

……いいかい。おまえのおやじさんは、お店にたくさん借りがあるんだよ。（路傍の石）

この実例は、主題化されているためわかりにくいので、主題化しない文を考えると以下の2つの可能性がある。

a. おやじさんが お店に 借りがある。

b. おやじさんに お店に 借りがある⁶⁷。

さて、どちらが元々の文なのかを判断するのは容易ではない。まず、どちらが自然な日本語であるかという点では、a である。例えば、疑問文を作ると「誰が店に借りがあるんだ？」「*誰に店に借りがあるんだ？」となり、ガ格の方が支持される。二重にニ格が出現することを避ける可能性を排除するため、「店に」を削除すると「#誰に借りがあるんだ？」となり、本来聞きたい部分である主体の疑問にならず、相手が疑問になってしまう。

次に、「ある」にとっての基本となる格関係は何かという点では、b である。この点については一考しなければならない。なぜなら、既に見てきたとおり、「ある」にとっての格構造は予想以上に複雑であり、基本であるべき「場所に物がある」という構造以外に非常に多くの格と名詞の共起が見られる。このことを考えると、多様性という点でこの例文の基の格関係がb である必然性はない。

さらに、例えば「部屋に柱時計がある」の中で主たる要素は、ガ格が付与された「柱時計」である。その「柱時計」という主体がどういう位置関係で存在するかを表示したものが「部屋に」のニ格である。つまり、ガ格が付き得るものは文の主体となることが多い。それではb が基の文とすれば、この文の主体はガ格が後接する「借り」となるはずであるが、この文には他に「おやじさん」「お店」の二要素がまだある。そして、「おやじさん」という人を表す名詞は当然ながら文の主体としての判断を受けやすい。「ある人物がどうであるか」ということを表す方が「ある抽象物がどうであるか」を表すよりも一般的である。さらに、抽象的な概念である「借り」がただ存在することだけを表すことが、その文の主たるものである

⁶⁷ 「おやじさんにはお店に借りがあるんだ」のように主題化した文として「～には」がなくはない。そうだとすれば、「おやじさんにお店に借りがある」という格関係がないとは言い切れない。

とは考えにくいのである。したがって、この文の基となるものは、a であると考えられるのである。つまり、「おやじさんがどうであるか」ということを述べるにあたって、「おやじさんがお店に対して何かを借りている、債務を受ける立場にある」ことを表す文と捉えるのが妥当である。他に、実例は以下の通りである。

話がある⁶⁸から、ちょっとこい、と言うのだ。(路傍の石)

「ええ、ちょっと話があるんです」と僕は言った。(世界)

ところで君に相談があるのだがどうだろう(路傍の石)

「そこで、一つお願いがあるのですが……」(戦艦武蔵)

しかし、ひとつお願いがございます(人民)

「ひとつ質問があるんですが」と私は言った。(世界)

「ところでもうひとつ頼みがあるんだけどいいかな？」(世界)

3.3.9. 「名詞ガ 名詞ト 名詞ガ アル」文

〔抽象物(関係)〕ガ アル

ここには「関係がある」「関連性がある」「類似性がある」「共通点がある」「差がある」などの、あるものとあるものとの関係を述べる文で、ガ格に抽象的な概念をとる文をまとめる。いずれも関係性のガ格名詞であるため「(関係)ガアル」と記す。以下、3つの格構造が見られた。①「対象格ガ 相手格ニ／ト 対象格ガ アル」、②「対象格ガ 相手格ト 対象格ガ アル」、③「相手格ト 相手格ト 対象格ガ アル」である。名詞の種類をそれぞれ挙げる。

①〔抽象物〕ガ 〔抽象物〕ニ／ト 〔抽象物〕ガ アル

どの新聞も佐山の死は、汚職に関係があるとみていた。(点と線)

「佐山の死が汚職に関係がある」となり、「佐山の死」が「汚職」に「関係している」と解釈できる文である。つまり、「関係がある」で一語相当である。そう考えると、「佐山の死」は主格であり、「関係が」は見た目は主格でありながら実際には主格の役割の無いものである。その意味では、3.3.8.で見た例と同じ構造を持つと考えられる。ただし、こちらの文は関係性を示す語をガ格名詞に持つために、最初のガ格と二格の名詞が入れ替え可能である。

佐山の死が汚職に関係がある。

汚職が佐山の死に関係がある。

また、この文は相手格の格表示がニだけでなく、トも可能である。以下のものは実例ではトだが、ニと置き換えられる。

長崎造船所での第二号艦建造のきざしは、すでに昭和八年秋、第二船台にガントリークレーンの建設が企てられたときからはじまっていたと言っていい。そして、それはまた、日

⁶⁸ 「話がある」は先に「出来事・行為」ガアルのところにも出てきたが、当該のものはそれとは異なる。先のものは〔場所〕デの共起が可能であるが、当該のものはそれが不可である。つまり「学校で先生から生徒に話があった」は場所での成立を問題にした出来事であり、「僕があなたにちょっと話があるんです」は場所とは関わらない、ある状況や状態を提示している。かつ、後者はテンスの分化がなく過去形では用いられないという特殊な事情もある。異なるために別に分類した。

本の軍事的・経済的な動きと密接な関係があったのだ。(戦艦武蔵)

一角獣やらやみくろやらが、私といったいどんな関係があるというのだ？(世界)

② [抽象物・具象物] ガ [抽象物・具象物] ト [抽象物(関係)] ガ アル

睡眠時間が労働力と関連がある。

緑茶が紅茶と共通点がある。

AがBと10点の差がある。

サルが人間と類似性があるのか。

これらの例も最初のガ格とト格は置き換えが可能である。

労働力が睡眠時間と関連がある。

③ [抽象物・具象物] ト [抽象物・具象物] ト [抽象物(関係)] ガ アル

安田とお時とは深い情事関係があることが想像されます。(点と線)

佐山の死と汚職と関係がある。

睡眠時間と労働力と関連性がある。

緑茶と紅茶と共通点がある。

AとBと10点の差がある。

サルと人間とは類似性があるのか。

これらは、上記2つの格パターンを持つものがさらに取る格パターンであり、「(関係) ガ アル」を述語に持つ文の全てに可能なものである。

3.3.10. 「名詞カラ 名詞マデ 名詞ガ アル」文

この文は「起点格カラ 目標格マデ 対象格ガ アル」という意味格の構造を持つ。

[場所・位置・事象の開始⁶⁹] カラ [場所・位置・事象の終了] マデ (距離・時間・幅)
ガアル

学校から家まで距離がある。

出発から到着まで時間がある。

こちらから向こう側まで幅がある。

範囲をカラとマデで示し、その範囲に「距離、時間、幅」が存在することを表す。具体的にどのくらいであるかを示す場合には、これらの名詞に具体的な数字を「～の」の形で修飾させる。3.3.11. と混合したような文である。

学校から家まで10 kmの距離がある。

3.3.11. 「名詞カラ 名詞マデ 名詞(数量詞) ガ アル」文

この文は「起点格カラ 目標格マデ 数量格アル」という意味格の構造を持つ。

⁶⁹ 実際にはカラとマデは「始まってから終わるまで」のように動詞の成分もとれる。

〔場所・位置・事象の開始〕カラ 〔場所・位置・事象の終了〕マデ （数量詞）ガアル

それまでに、あと十五六時間ある。（青春の蹉跎）

出発から到着まで12時間ある。

学校から家まで10 kmある。

これらは、ある時点から目標となる期日、事態までに、時間や距離がどのくらいあるかを表す。以下のように、時間や距離を表す名詞には格助詞を付与することができない。

*出発から到着まで12時間がある。

起点格の方は、「ここ」「今」が起点となる場合は、それを文中に示さないことが多い。

（今から）出発まで15分ある。

3.3.12. 「名詞カラ 名詞マデ 副詞アル」文

この文は「起点格カラ 目標格マデ 副詞アル」という意味格の構造を持つ。

〔場所・位置・事象の開始⁷⁰〕カラ 〔場所・位置・事象の終了〕マデ （副詞）アル

学校から家までだいぶある。

離陸から到着までしばらくある。

ここから家まで少しある。

ある範囲の中で、時間あるいは距離がある程度かかること、離れていることを表す。

3.3.13. 「名詞ガ 形容詞アル」文

〔人〕ガ （形容詞）アル

この文は「対象格ガ 形容詞アル」という意味格の構造を持つ。例は以下の通りである。

人が美しくありたいと願うのは、当然である。

人が潔くあるのは一瞬に過ぎない。

形容詞の連用形に「ある」が用いられるもので、形容詞の表す意味の状態で存在することを意味する。

3.3.14. 「(文コト) ガ アル」文

あるとき、ぐうたら者で有名な一人の書生が、どうしたわけか朝早くから病院の玄関の廊下に立っていたことがある。（楡家の人々）

それでも例外中の例外として、奥づとめの女中の一人が、院長と大奥様が諍いをしてい
るのを耳にとめたことがある。（楡家の人々）

ときには何カ月も前の新聞を読むこともある。（楡家の人々）

二、三日前の新聞にめぐりあうこともある。（楡家の人々）

それまでも祝い日などに、店で酒の出るときは盃に二つか三つは舐めたことがあつた。（さぶ）

そして両方で一寸まごついて危く身をかわし、漸くすり抜けて行き過ぎるような場合

⁷⁰ 実際にはカラとマデは「始まってから終わるまで」のように動詞の成分もとれる。

がある。(好人物の夫婦)

文が「こと」や「場合」という形式名詞によって名詞化し、ガ格で受ける対象格である。経験や習慣を表す。意味格は「対象格ガ」である。

3.3.15. 「名詞ニ (名詞・文) ト アル」文

〔場所〕ニ (名詞・文) ト アル

貼り紙に18歳未満入場禁止とある。

チラシには、駅から徒歩10分閑静な住宅街で月5万円とある。

主に書いてあることを引用するという意味を表す文で、その引用内容をトで受ける。意味格は「場所格ニ 対象格ト アル」である。

3.3.16. 「名詞アル」

〔特徴・属性〕アル

名詞に格助詞が後接することなく「ある」が続くもので、名詞を修飾するという働きがある。述語として用いられることはないため、文ではないがここに合わせて加える。

この興味ある研究は、意外なほど凡庸な結論に達している。(モオツァルト)

現代では、教養ある人が、自分には絵は解らぬと平気で言っている。(偶像崇拜)

僕等は、恐らくこの世界について、統一ある観念に至るどの様な端緒も掴み得まい、そういう世界である。(モオツァルト)

名誉ある軍人(山本五十六)

実行力ある政治家、一旦事ある場合(弟子)

魅力ある文章、特色ある著書(蘇我)

光秀のこんにちあるのは信長のその偏執的なまでの道具好みのおかげではある(国盗り物語)

3.3.17. 動詞ツツ アル

彼は現在廊下を帰りつつある滝を追って行く或気持の自身にある事を感じずる事がよくあった。(好人物の夫婦)

小耳の川ちゃんが、あきらかに酔ってデキ上りつつある声で言った。(新橋烏森口青春篇)

これは動詞のアスペクトを表わす用法で、完了に向けた途中段階であることを示すものである。名詞との共起ではないが、合わせて載せておく。以降も同様である。

3.3.18. 動詞テ アル

明日に備えて準備してある。

窓が開けてある。

弟に伝えてある。

動作が完了していることを表わすアスペクト表現で、補助動詞の用法である。

3.3.19. 副詞アッテ

ややあって、通信が再開した。

しばらくあって、音が聞こえてきた。

「やや、しばらく、少し、かなり」のような程度を表わす副詞の後に「あって」が後節することで、全体として時間の経過を表わすものである。この他の副詞はこの表現を作れない。

「*ゆっくりあって、話し始めた。」「*大変あって、会合が始まった。」

3.3.20. 動詞デ アル

吾輩は猫である。

考察は以下のとおりである。

名詞を述語に立てる際に使う断定の表現として「である」がある。補助動詞の用法である。

3.3.21. 格と格の入れ替えについて

以上、「ある」が要求する格と名詞の種類を分類してきた。その中で、動詞に対する2つの格（あるいは名詞と言ってもいい）が入れ替え可能なものが見られた。形式格と意味格が異なるのに、なぜ両者は自由に入れ替えができるのか。入れ替えが可能ということは動詞との意味的な関係が同じということにはならないのか考えてみたい。

3.3.21.1. 関係性を表わす名詞

まず、関係性を表す名詞から見ていく。

佐山の死が 汚職と 関係がある。(点と線)

汚職が 佐山の死と 関係がある。

「佐山の死」と「汚職」の2つの名詞は、「関係性」という概念で結びつけられている。矢印で示すなら、以下のようなになるだろう。

佐山の死 ← (関係性) → 汚職

両者は関係づけられているだけで、どちらがどちらに、どう影響したかを積極的に示すものではない。しかし、この文にはガとトという別の格助詞があり、それがどちらかに付加されなければ文は成立しない。なぜ、別の助詞なのか、ガとトではどう違うのか考えてみる。

ガ格には「他でもない～が」という総記の用法を持つとされる。そのために、「佐山の死」と「汚職」という名詞は「関係」という点で対等（単に結びつけられた）ものであっても、ガ格でマークされた名詞が焦点的立場に立つ。そのために、ガ格は対象格、つまり述語の表す関係性を有する主体、そしてト格は述語の表す関係性を有する主体の相手である相手格となる。先の図を使うと、以下のようなになる。線で囲んだものに焦点を当てたということである。

佐山の死 ← (関係性) → 汚職

もう一つ、それでは主題との関係はどうか。主題化とは、名詞を主題として取り上げハと

いう助詞を後接させることである。主題化した文を載せる。

佐山の死は 汚職と 関係がある。

汚職は 佐山の死と 関係がある。

対象としてガ格を付与され、さらに主題化されハが付与された。このことで、二度の焦点化が行われていると考えられる。それは動作を表わす次のような文では起こらないことである。

太郎が 英語を 勉強する。

太郎は 英語を 勉強する。

動作を表す文では、「太郎」と「英語」の二つの名詞は役割が異なるために（『太郎』が動作主、『英語』は対象）、主体はあくまでも一方の名詞だけである。そこに、主題化が起こったわけで、取り上げるという焦点化は一度起こっているに過ぎない。したがって、「関係がある」文ではガ格付与という焦点化が普通の文よりも多いわけである⁷¹。

次に、どの名詞も焦点化されずに述べられる場合がある。それは、どちらもト格で表示される場合である⁷²。

トラと ライオンと 類似性がある。

ライオンと トラと 類似性がある。

ただし、これは単に並列を意味する並立助詞ではないことは、以下のように名詞の移動が自由にできるものとは異なることからわかる。

鉛筆と 消しゴムと 定規が ある。

消しゴムと 鉛筆と 定規が ある。

定規と 鉛筆と 消しゴムが ある。

*類似性と トラと ライオンが ある。

「類似性」という関係を表わす名詞は、残り二つの名詞と並列の関係ではなく「類似性がある」で一つの意味を表す、いわば述語である。ガ格名詞以外は対等な立場で、類似という概念がその間に存在することを表すのである。

トラ←（類似）→ライオン

3.3.21.2. 相互性を表わす名詞

次に相互性を表す例である。

日本がアメリカと戦争があった。アメリカが日本と戦争があった。

田中に鈴木と約束がある。鈴木に田中と約束がある。

花子に太郎とデートがある。太郎に花子とデートがある。

「～がある」のガ格名詞句が相互的な動作を表す場合には、その相互的な動作の二者が「～が～と」「～に～と」のような格によって示される。相互的な動作のためそのどちらの立場で

⁷¹ 「ある」だけでなく、「関係する」「関わる」などの関係性を示す動詞は同様のことが考えられるだろう。

⁷² ト格名詞の両者がまとまってガ格の指定を受ける場合もある。「トラとライオンとが類似性がある」「トラとライオンが類似性がある」

ものを述べるかの違いはあっても、両者に役割の差はない。ト格名詞の方が補助的な役割になっている。

① 日本 ← 戦争 → アメリカ 「日本がアメリカと戦争があった」
② 田中 ← 約束 → 鈴木 「田中に鈴木と約束がある」

3.3.21.3. 因果関係を表わす名詞

因果関係を示す例にも入れ替えが可能なものがある。以下に、そのパターンを示す。

① ～が～に {原因、要因、理由} がある

失敗が 調整不足に 要因がある⁷³。

彼女の離婚が 金銭トラブルに 原因があった。

外出嫌いは 腕の火傷に 理由があった。

② ～に～の {原因、要因、理由} がある

調整不足に 失敗の 要因がある。

金銭トラブルに 離婚の 原因があった。

腕の火傷に 外出嫌いの 理由があった。

因果関係も関係性の一つではあるが、この関係性は対等なものではなく、原因が結果を引き起こすという方向的な関係性が明示されている。矢印で示すと次のようになる。

失敗（結果） ← 調整不足（原因）

① （結果）が（原因）に原因がある。

② （原因）に（結果）の原因がある。

このように整理すると、二格名詞に具体的な原因が示され、他の格に具体的な結果が示されている。上の例文の名詞を入れ替えてみる。

① *調整不足が 失敗に 要因がある。

*金銭トラブルが 彼女の離婚に 原因がある。

*腕の火傷が 外出嫌いに 理由がある。

② *失敗に 調整不足の要因がある。

*離婚に 金銭トラブルの原因があった。

*外出嫌いに 腕の火傷の理由があった。

失敗の要因に 調整不足がある。

離婚の原因に 金銭トラブルがあった。

外出嫌いの理由に 腕の火傷があった。

①の構文では入れ替えが不可能であるが、②の構文ではノの名詞移動でなければ入れ替えが可能である。厳密に言うと多少の意味の違いがある。しかし、原因と結果という意味役割が規定されている中で、入れ替えが可能とはどういうことだろうか。

⁷³ 主題化した文だとより自然になるが、格関係を示すために敢えて格助詞を用いた例文にした。主題化した文では「失敗は調整不足に要因がある」となり、より自然である。

調整不足に 失敗の要因が ある。



失敗の要因に 調整不足が ある。



図で示すとこのような関係性が見える。楕円はガ格で取り上げられる名詞であり、それがどこの中に存在するかを示すのが太い枠の四角である。一つ目は、失敗の要因が調整不足の中に入っていること、二つ目は調整不足が失敗の要因に入っていることを示す。したがって、「調整不足」と「失敗の要因」がほぼイコールになっている。厳密に言うと、前者は完全イコールで失敗の要因が調整不足だと捉えている。後者はほぼイコール(≒)か含まれる(⊂)で失敗の要因の一つが調整不足だと捉えている。

ところが、①のパターンは「要因がある」が一つの述語のように機能するために、二つの名詞「調整不足」と「失敗」の因果関係が一方向的に決定している。

3.3.22. まとめ

以上、動詞「ある」の要求する名詞の意味や種類について記述してきたが、一つの動詞とは思えないほど多様な格と名詞を要求する動詞であることがわかった。その多様性の理由は、「～がある」のガ格名詞にある。そして、その根本は「ある」の持つ「存在」という本源的・普遍的な意味そのものにある。それが多様な名詞との共起を可能にし、そして、そのガ格名詞の多様さが格の組み合わせを広く展開しているものである。そのため、一見すると単純な存在文にしか見えないものが、実際にはそれゆえに、複雑な語の結びつきを実現しているということになる。それは、「する」と同じ理由でありながら、その展開の仕方は異なっている。「する」は自動詞と他動詞の用法を持つために、取り得る格がそもそも多様である。例えば「～がする」「～をする」「～にする」「～とする」が見られる。ところが、「ある」は基本的に「～がある」しか存在しない。しかしながら、そのガ格名詞が実に多様である。このガ格名詞の多様さがこの構文を細分化していると言っていいだろう。

以下、構文を一覧の表3としてまとめた。

表3 「ある」文の共起する名詞の種類⁷⁴

⁷⁴ この中には動詞「ある」を述語に持つ文だけでなく、連体詞のように名詞を修飾するための「名詞ある」のような表現なども含む。

| | 「アル」構文、「アル」表現 ⁷⁵ | | 名詞の種類 | |
|---|-----------------------------|----------------------|------------------------|---------------------|
| | 品詞と格助詞 | 意味格と形式格 | アルの直前の名詞 | その他 |
| 1 | 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格ニ 対象格ガ | [具象物] ガ | [場所] ニ |
| | | | | [位置] ニ |
| | | | | [人・生物] ニ |
| | | | | [集合・集団] ニ |
| | | | | [物] ニ |
| | | | [抽象物] ガ | [場所] ニ |
| | | | | [位置] ニ |
| | | | | [人・生物] ニ |
| | | | | [物] ニ |
| | | | | [動作・事態] ニ |
| | | | | [抽象物] ニ |
| | | | [出来事] ガ | [場所] ニ |
| | | | | [人] ニ |
| | | | | [集団] ニ |
| | | | [抽象物（心理事象）] ガ | [抽象物] ニ |
| | | 目標格ニ 対象格ガ アル | [期間] ガ | [動作・時期] ニ |
| | | 経験者格ニ 対象格 ガ アル | [抽象物（心理事象）] ガ | [人] ニ |
| 2 | 名詞ニ （名詞ノ） 名詞ガ アル | 原因格ニ （結果ノ） 対象格ガ | [結果] ノ（原因・要因・ 理由） ガ | [原因] ニ |
| 3 | 名詞ニ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格ニ 原因格ニ 対象格ガ | （必要） ガ | [人] ニ [原因] ニ |
| | | 場所格ニ 目標格ニ 対象格ガ | [出来事] ガ | |
| | | 経験者格ニ 目標格 ニ 対象格ガ | [抽象物（心理事象）] ガ | [人] ニ [具 象物、抽象物] |
| 4 | 名詞ニ 名詞デ 名詞ガ アル | 場所格ニ 場所格デ 対象格ガ アル | [出来事] ガ | |

⁷⁵ この中には動詞「ある」を述語に持つ文だけでなく、連体詞のように名詞を修飾するための「名詞ある」のような表現なども含む。

| | | | | |
|----|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|-------------------|
| 5 | 名詞ニ 名詞デ 名詞ト 名詞ガ | 場所格ニ 場所格デ 相手格ト 対象格ガ | [出来事] ガ | |
| 6 | 名詞ニ 名詞へ 名詞ガ アル | 場所格ニ 目標格へ 対象格ガ | [出来事] ガ | |
| 7 | 名詞デ 名詞ガ アル | 場所格デ 対象格ガ | [出来事・行為] ガ | [場所] デ [集団] デ |
| 8 | 名詞デ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格デ 目標格ニ 対象格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| | | 場所格デ 受益者格 ニ 対象格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| 9 | 名詞デ 名詞ト 名詞ガ アル | 場所格デ 相手格ト 対象格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| 10 | 名詞デ 名詞カラ 名詞ニ 名詞ガ アル | 場所格デ 起点格カ ラ 目標格ニ 対象 格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| | | 道具格デ 起点格カ ラ 相手格ニ 対象 格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| 11 | 名詞ガ アル | 対象格ガ | [具象物] ガ | |
| | | | [抽象物] ガ | |
| 12 | 名詞ガ 名詞ガ アル | 対象格ガ 対象格ガ | (厚さ、高さ、重さ、人 気など形容詞派生の名 詞) ガ | |
| 13 | 名詞ガ 名詞ヨリ 名詞ガ アル | 対象格ガ 基準格ヨ リ 対象格ガ | | |
| 14 | 名詞ガ 名詞ニ 名詞ガ アル | 対象格ガ 相手格ニ 対象格ガ | [抽象物] ガ | [人] ガ [人・ 物] ニ |
| | | | [抽象物 (関係)] ガ | |
| 15 | 名詞ガ 名詞ト 名詞ガ アル | 対象格ガ 相手格ト 対象格ガ | [抽象物 (関係)] ガ | |
| 16 | 名詞ト 名詞ト 名詞ガ アル | 相手格ト 相手格ト 対象格ガ | [抽象物 (関係)] ガ | |
| 17 | 名詞カラ 名詞マ デ 名詞アル | 起点格カラ 目標格 マデ 数量格 | | |
| 18 | 名詞カラ 名詞マ デ (名詞ノ) 名詞 ガ アル | 起点格カラ 目標格 マデ (数量ノ) 対象 格ガ | [抽象物 (幅、距離、時 間)] ガ | |
| 19 | 名詞カラ 名詞マ | 起点格カラ 目標格 | | |

| | | | | |
|----|----------------------|---------------------|------------|--|
| | デ 副詞アル | マデ | | |
| 20 | 名詞カラ 名詞へ 名詞ガ アル | 起点格カラ 目標格 へ 対象格ガ | [出来事・行為] ガ | |
| 21 | 名詞ガ (名詞ヨ リ) 形容詞アル | 対象格ガ (基準格ヨ リ) | | |
| 22 | 文コトガアル | (文) 対象格ガ | | |
| 23 | 名詞ニ 名詞・文ト アル | 場所格ニ 対象格ト | | |
| 24 | 名詞アル | 対象格 (無格) | | |
| 25 | 動詞 ツツ アル | | | |
| 26 | 副詞アッテ | | | |
| 27 | 動詞テアル | | | |
| 28 | 動詞デアアル | | | |

第4章 「する」の構文的な多機能性

本章では、「する」を述語に持つ文について、その構造と意味・用法を考察していく。第2章で見た通り「する」は様々な要素に後続するために、その考察にあたっては、その要素ごとに細かく見ていく必要がある。

以下では、まず第1節で「する」文全体の文法的な機能がどのような広がりを見せるかを概観し、第2節で形容詞・形容動詞に「する」が後続する文、第3節で擬音語・擬態語に「する」が後続する文、第4節で名詞や文に「とする」「にする」が後続する文について考察する。そして、第5節では「とする」「にする」文の主語の存在について、第6節では「とする」と「と言う」を比較し、引用だけではない「とする」の意味を明らかにする。なお、名詞にヲ格を介して「する」が後接するものについては類義語の「やる」との比較を行うため、第5章で扱う。

第1節「する」文の多機能性—文法的機能—

本節では、「する」文全体の文法的な機能について概観する。具体的には、形式上の主語が事実上は述語の一部となっている「～がする」文や、形式上の目的語が述語の一部となっている「～をする」文、また形容詞や形容動詞が述語の一部となっている「形容詞・形容動詞する」文などに注目する。そして、「する」が文法的に多機能であることの統語論的・形態論的・意味論的な根拠を示していく。さらに、「する」文の構造を捉えなおし、その他の動詞・形容詞との異同についても考察を加え、動詞「する」が、日本語全体の中でどのような位置にあるのかについて述べる。

4.1.1. 先行研究

第1章でも述べたが、動詞「する」の先行研究は数も多く、その歴史も比較的長いと言っている。改めて「する」の先行研究だけをまとめると、その流れには以下の五つが見られる。

1. 形式動詞「する」の研究
2. 行為動詞「する」の研究（『やる』『行う』との比較）
3. サ変動詞「する」の研究（格助詞『ガ』『ヲ』の有無）
4. 機能動詞「する」の研究
5. 軽動詞「する」の研究（生成文法理論⁷⁶）

1は、実質的な意味の有無から文法範疇を大きく二分した概念である、実質動詞と形式動詞という範疇において、「する」の位置づけが行われた研究である。山田孝雄（1936）は、形式用言の一つとして形式動詞「する」を挙げ、「心す」「音す」「重くす」「ふりする」「勉強す」「論ず」「^{スペシャライズ}特別化す」「思ひをする」を例に挙げている。さらに、「すると」も形式動詞（助動詞）に入るものとした松下大三郎（1924）、一方、「暖かくする」「びくびくする」「駄目だとすれば」も形式動詞に入れた時枝誠記（1950）などもある。形式動詞としての「する」研究は、動詞ないし用言を文法範疇の一つとして立ち上げ、それをさらに下位分類する

⁷⁶ 特に、生成語彙論などで扱われる。

という品詞論的な立場からの研究であったため、「する」に関する詳細な個別的な研究というものではない。

2は、特に、同じように動作や行為を表す「やる」や「行う」との比較を中心に、その意味・用法の違いから共起する名詞の種類までを記述した研究である。その中でも、森田良行(1977)は、用例を多く記述し「する」の意味・用法に関する研究の中でも出発点となるものである。しかし、「する」と「やる」の違いは考察してあるが、その他の一般的な動詞文とどう関係するか、また共起する「～が」「～を」「～に」などの名詞句と「する」との統語的な関係についての言及などは、十分とは言えない。

3は、サ変動詞である「～する」が、時にヲ格を挿入することができる現象に注目した研究である。Miyagawa Shigeru(1987)や田野村忠温(1988)、平尾得子(1990)では、そのサ変動詞語幹である動名詞(Verbal Noun)を分析し、動作性や意志性を基準に説明している。しかし、格表示に焦点があるために、「する」の文としての考察や他の動詞文との関係性、名詞句と「する」との統語的な関係については、十分な考察がなされていない。

4は、実質的な意味が希薄でおおむね文法的な機能を果たしている動詞(機能動詞)という観点から、日本語動詞全体を捉えた研究(村木新次郎 1980、1991)である。全体を見ての位置づけという点で1と共通している。「する」については、「名詞+する」を中心に文型が整理されているに留まり、日本語全体における位置づけや周辺も含めた考察という点では考察すべき点が残されている。

5は、3の支流とも考えられ、動名詞(VN)は、他の要素に意味役割を付与する(意味役割付与)能力を持つ点から、そのメカニズムを解明するという生成文法理論からの研究である。Miyagawa(1989)、加賀信広(1993)、影山太郎(1993、2004a、b)などが、その原理的説明を試みたもので、「する」が取り上げられている。しかし、動名詞と「する」との関係性を考察する点は、3よりも充実しており、「する」とその他の一般的な動詞との相違や、一部形容詞との違いについて触れられているものの、まだ十分ではない。また、軽動詞は、「動名詞ヲスル」の一部と身体属性を示す「青い目をしている」のみであるとする点など、「する」全体を捉えるのではなく、その一部に限定されている。

以上、動詞「する」は、このように様々な違った観点から研究されてきたと言えよう。その中で「する」の果たす文法的機能について注目した研究は、4、5である。しかし、それらもそれぞれの観点の違い、目的の違いから、「する」の一部に限定されており、「する」の持つ様々な機能や、それを踏まえての、動詞全体、あるいは日本語全体における位置づけなど、まだ考察すべき点が残されている。特に、両者によって機能動詞、軽動詞の枠外に出されてしまった用法についても、本節で改めて考察しなおすことによって、「する」の持つ多機能性という特徴を明らかにしていきたい。

4.1.2. 「する」の多機能動詞論

動詞「する」の文法的機能について見直し、「する」及び「する」文を考察するのに、どのような方法が妥当であるか考えてみたい。

(1) 今日は花粉がひどいから、太郎はマスクをして出かけた。

(2) 太郎は研究所で花粉の調査をしている。

「マスクをする」の「マスク」は具体的な物だが、「調査をする」の「調査」は動的な事象である。両者の違いはヲ格名詞だけに留まらず、「する」との関係性においても違いを見せられている。前者は他の動詞に入れ替えるとすれば、「つける」「かける」「装着する」が可能であり、後者は「行う」「やる」が可能である。名詞の意味と動詞の意味から、後者の「する」は、前者の「する」よりも「動作」の実質的意味・内容が希薄になり、述語を形成するという文法的な機能のみを有すると考えることができる。

(3) 花子はきれいな目をしている。

また、(3)の「きれいな目」は物体を示しているが、「している」はアスペクト形式をとりながら、動作の継続でも変化の結果でもない、状態を示している。そのため、このような「する」もまた、述語を形成するという文法的な機能のみを有すると考えられるのである。

(4) a. いやなにおいがするな。

b. うん、におうな。

c. うん、くさいな。

さらに、名詞句「いやなにおい」が持つ実質的意味と、述語形成のための「する」が持つ文法的機能とを組み合わせることで、「においがする」は「におう」という実質語の動詞一語に相当する述語となる。さらには、それだけでなく「くさい」という実質語の形容詞一語に相当する述語となるのである。

このように、「する」は動詞だけでなく、形容詞が示す意味にまで広がっていることがわかる。「する」がどのような広がりを持つのかを見ることにより、その多機能性を記述できるのではないかと考えるものである。

しかし、第1章でも述べたが機能動詞論における機能動詞とは、「名詞＋動詞」との語結合に限定されている。そのため、「きれいにする」「赤くする」などの「形容詞＋する」は、機能動詞に「近接したもの(村木 1991)」、「しばらくする」「数年して」「閑散とする」などの「副詞＋する」は、「機能動詞結合の周辺(同)」とされている。さらに、サ変動詞や「脅迫さえする」「読んだり書いたりする」などは、「機能動詞の枠外(同)」と除外されている。

しかし、これらの「する」に実質的な意味を見出すのは難しく、やはり機能的な動詞としての振舞いを示すと考えられるのである。また、軽動詞論でも、多くの「する」文が考察から除外されている。軽動詞とされる「する」は、「動名詞(VN)をスル(影山 1993)」の一部と「身体属性文のスル(影山 2004a)」の二つのみである。したがって、機能動詞論では「近接、周辺、枠外」とされる「する」にも、軽動詞論で除外される「する」にも、実質的意味の希薄さと文法的機能性の顕著さが示されていると考え、多機能動詞と捉え直し、考察の対象に入れていくことにする。従来の機能動詞・軽動詞の定義では除外されてしまう、これらの機能的な表現も包括的に捉え、その全体像を明らかにしていきたいというのが、本研究のとり多機能動詞論の立場である。

4.1.3. 「する」文に見られる文法的多機能性

動詞「する」を通常の動詞としてではなく、多機能動詞と見なしうる文法的特徴について

多面的に考察する。

4.1.3.1. 「する」と語の結合度

「本を読む」では、「本を」と「読む」のそれぞれが独立した要素として出現している。それに対し、「調査をする」は「調査」と「する」が先の例と同程度に独立した要素とは考えられない。そこで、語順の交替によって「する」とその他の要素との結合度を見てみる⁷⁷。交替テストを行う要素は、動詞「する」の実質的な意味を担うと考えられる語句とする。以下、例文と交替後の例文（→以降）である。機能的な語の結合部分を下線で示してある。

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------------------|
| (5) ここに開会の <u>宣言をする</u> 。 | →開会の <u>宣言をここに<u>する</u></u> 。 |
| (6) あー、 <u>頭痛がする</u> 。 | →* <u>頭痛が</u> あー <u>する</u> 。 |
| (7) 胃が <u>キリキリする</u> 。 | →* <u>キリキリ胃が</u> <u>する</u> 。 |
| (8) 台所から <u>いやなにおいがする</u> 。 | → <u>いやなにおいが</u> 台所から <u>する</u> 。 |
| (9) 留学を <u>希望する</u> 。 | →* <u>希望留学を</u> <u>する</u> 。 |
| (10) 友達と <u>テニスをする</u> 。 | → <u>テニスを</u> 友達と <u>する</u> 。 |
| (11) 息子を <u>医者にする</u> 。 | →* <u>医者に</u> 息子 <u>を</u> <u>する</u> 。 |
| (12) 部屋を <u>きれいに</u> する。 | →* <u>きれいに</u> 部屋 <u>を</u> <u>する</u> 。 |
| (13) 顔を <u>赤く</u> する。 | →* <u>赤く</u> 顔 <u>を</u> <u>する</u> 。 |
| (14) 環境破壊を <u>問題とする</u> 。 | →* <u>問題と</u> 環境破壊 <u>を</u> <u>する</u> 。 |
| (15) 鉛筆が一本 <u>百円する</u> 。 | →*一本 <u>百円</u> 鉛筆が <u>する</u> 。 |
| (16) 彼女は <u>きれいな目をして</u> いる。 | →? <u>きれいな目</u> を彼女 <u>は</u> <u>して</u> いる。 |
| (17) 授業中は <u>読んだり書いたり</u> する。 | → <u>読んだり書いたり</u> 授業中 <u>は</u> <u>する</u> 。 |
| (18) <u>しばらく</u> すると雷は鳴り止んだ。 | →* <u>しばらく</u> 雷 <u>は</u> <u>する</u> と鳴り止んだ。 |

「する」文は、「する」と結合している要素を引き離してしまうと、上記のように不自然、あるいは非文になるものが多い。各文における結合度は一様ではないが、このように語順交替が許されないことを考えると、「～する」は「語＋動詞」で一語的な働きを示すものと考えられる。つまり、実質的な意味をその他の要素（名詞、形容詞、副詞、動詞、擬態語など）に担わせ、動詞は述語としての文法的な機能を果たすことが主になっている、機能性の動詞であるということである。

4.1.3.2. 「～する」動詞一語相当

先で、動詞「する」と語が強く結びついており、語順の交替を許さないものが多いことを見た。結合が強いということは、意味が希薄な動詞「する」がその実質的な意味を担うものとして他の語を必要とし、その語から離れて文中に存在することが難しいことを示している。これが顕著に現れていると考えられるのが、漢語や外来語と「する」が結びつくことによって動詞化し、サ変動詞と呼ばれる動詞に変化しているものである⁷⁸。

⁷⁷ 村木（1991）でも「結合のつよさ」として「語句の挿入」「語順の交替」「連体構造への変換」などから考察している。本節では機能動詞結合以外の用例に対しても検証を試みる。

⁷⁸ 漢語として、一字漢語とそれ以上の漢語が「する」と結合し、一つの動詞のように振舞う。ただし、

- (19) 太郎が次郎に電話する。
 (20) 太郎が次郎に屈する。
 (21) 太郎が次郎を集中攻撃する。
 (22) 太郎が次郎をプッシュする。

サ変動詞は通常の動詞と異なり、その構造を「名詞⁷⁹＋する」に分析でき、実質的意味を担う「名詞」部分と文法的な働きを担う「する」とに分けて捉えることができる。しかし、通常の動詞は、文法的な機能と実質的な意味とは融合して存在するので、例えば「あそぶ」の「あそ」までが実質的な意味を担い「ぶ」が文法的な働きを担っているとの分析は不可能である。それゆえに実質動詞なのである。

したがって、サ変動詞は通常の動詞のように「動詞」という同じ枠組みに入れてしまわれるが、改めて語結合の観点から見ると、サ変動詞は語と語が結合して形成された複合語であり、通常の動詞とは大きく異なる。ただ、その結合の強さによって一語相当の振舞いをなすために、「する」の活用の型から、サ変動詞と分類されているにすぎない。このように捉えるならば、「擬態語＋する」「副詞＋する」「形容詞＋する」「形容動詞＋する」もまた、その語結合の強度から同様に一語相当として文中で機能していると考えることができる。もはや、「漢語＋する」や「外来語＋する」のサ変動詞だけが特別なのではなく、その文法的特徴はこれら全てに共通しており、いずれも一語として振舞う機能性の動詞であると捉えるべきであろう。

また、「名詞にする」「名詞とする」も、動詞「する」と名詞部分との結合が強く、先の交替テストでは不自然になるものである。これらは動詞と名詞の間に格助詞という文法機能を示すものがある点が、先の直接その他の語と結合するものと異なっている。しかし、その振舞いはやはり一語相当との見方ができる。以下の例は、実質的な意味を持つ通常の動詞と比較したものである。

- (23) 着ていく服を赤いのににした。 →*着ていく服を赤いのににさっきした。
 (24) 着ていく服を赤いのにに決めた。 →着ていく服を赤いのににさっき決めた。
 (25) 70 点以上を合格とする。 →*70 点以上を合格と教師がする。
 (26) 70 点以上を合格と見なす。 →70 点以上を合格と教師が見なす。

語順の交替後は、「する」文の方が、実質的意味を担う部分が離れた結果、文として不安定なものに変わっている。しかし、通常の動詞には不安定さは生じない。このことを見ても、「名詞にする」「名詞とする」が結合の強い一語的な振舞いを文中で見せることがわかる。いずれも、「する」が文法的機能を示すのを主とする動詞であることを示している。

4.1.3.3. 動詞一語との置き換え

①「名詞をする」

一字漢語の中には活用の異なるものもあり「愛する」「適する」など未然形が「さない」の形になるものがあるので、厳密にはサ変動詞というよりも「スル動詞」と言うべきかもしれない。三字以上の漢語が「する」と結合する場合については小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』（ひつじ書房）があるが、視点が異なる。

⁷⁹ 名詞ではないものもあるため、語基も含む。

一方で、交替テストで分離不可能なほど結合度が強くないため、一語相当との文中での振舞いはなくとも、その語結合がその他の動詞一語に相当するものが存在する。これは、岩崎英二郎（1974）や村木（1980、1991）によって機能動詞結合として、特に取り上げられている点でもある。岩崎（1974）が、ドイツ語学から借用して始まったと考えられる機能動詞研究は、「名詞＋動詞」が他の動詞一語に変換できるようなタイプの動詞を機能動詞とするのが、その原型である。そのような当初の機能動詞の定義に従えば、最もそれにふさわしいのは、サ変動詞に変換できるような「名詞をする」の「する」動詞ということになる。「名詞をする」には意味的・構文的な観点から、動詞一語と同じ特徴を持つものが見られ、格の交替があるものの、その他の動詞一語と置き換えられる。

- (5) ここに開会の宣言をする。 →ここに開会を宣言する。
 (23) 子供が歌手の真似をする。 →子供が歌手を真似る。
 (24) 朝は水汲みをして、床磨きをした。 →朝は水を汲んで、床を磨いた。
 (25) 太郎が花子に英語のレクチャーをする。 →太郎が花子に英語をレクチャーする。

②「名詞にする」

また「名詞にする」の中にも動詞一語と置き換えられる例がある。

- (26) 困ったときは太郎を頼りにした。 →困ったときは太郎を頼った。

③「名詞がする」

村木（1991）では、「においがする（＝におう）」「かおりがする（＝かおる）」のように、「名詞＋する」が動詞一語に置き換えられることを指摘している。しかし、語結合ではなく文のレベルで考察すると、「においがする」は単独で使われることはなく、連体修飾語を必須とするために「においがする」＝「におう」とはならない。

- (26) a. *においがするね。
 b. {変な、いやな、臭い...} においがするね。 = におうね。
 c. いいにおいがするね。 旨そうなにおいがする。 ≠ におうね。

厳密には、連体修飾語の付加された「におい」が、ガ格に立ち「する」を述語とする場合に、「におう」と置き換えられるのである。「～においがする」＝「におう」となる。加えて、「におう」という動詞一語と置き換え可能なのは不快なにおいに限られ、心地いいにおいの場合には「におう」と交替不可能である。

また、似た語に「かおり」があるが、「かおる」とは形態的に関連性があるものの、「かおりがする」が「かおる」に交替することはできない。それは意味的な快・不快に関係がない。

- (27) いいかおりがするね。 ≠ かおるね。

その他、連体修飾語がついた「感じ、予感がする」が格の交替や修飾語が名詞化するが、他の動詞に交替できる場合がある。

- (28) あの男はいやらしい感じがする。 →あの男をいやらしいと感じる。
 (29) 林檎飴は懐かしい感じがする。 →林檎飴に懐かしさを感じる。
 (30) 成功の予感がした。 →成功を予感した。

ただし、動詞一語との置き換えが可能であることは、その両者の表現が意味的にまったく等価であることを指すものではなく、文法的特徴としてその形態面、あるいは意味的なつながりや類似性といった点で、「名詞＋格助詞＋動詞」という句のレベルのものが、ちょうど一つの語のように振舞うことを説明したものである。

以上、語結合の強度から、「名詞＋格助詞＋する」という語と語の結びつきが、文中では一つの語としての振舞いを示すことを見た。これは、動詞「する」が機能性の高い動詞であることを示している。

4. 1. 3. 4. 形容詞との関係

「する」文には意味的・構文的な観点から形容詞文と共通する特徴を持つものがある。寺村秀夫（1984）では「～ガスル」は「基本形で言い切ったときその心的状態の主体が話し手自身」とし、感情形容詞との共通点を指摘している。改めて機能性という点から考えてみたい。

4. 1. 3. 4. 1. 形容詞との意味的な類似性—形容詞一語相当—

形容詞⁸⁰と意味的な類似性がみとめられる最も顕著な例は、形容詞一語と置き換えられる例である。

- | | |
|----------------------------------------------|-------------------------------|
| (7) 胃が <u>キリキリ</u> する。 | →胃が <u>痛い</u> 。 |
| (31) 頭が <u>ガンガン</u> する、 <u>ズキズキ</u> する。 | →頭が <u>痛い</u> 。 |
| (32) 胸が <u>ムカムカ</u> する。 | →（胸が） <u>不快だ</u> 。 |
| (33) <u>ゾクゾク</u> する。 | → <u>寒い</u> 。 <u>怖い</u> 。 |
| (34) <u>ゾッ</u> とする。 | → <u>怖い</u> 。 <u>恐ろしい</u> 。 |
| (35) 胸が <u>ワクワク</u> する。 | → <u>楽しい</u> 。 <u>楽しみだ</u> 。 |
| (36) 耳の中が <u>ムズムズ</u> する。 | →耳の中が <u>かゆい</u> 。 |
| (37) タオルが <u>フワフワ</u> している。 | →タオルが <u>柔らかい</u> 。 |
| (38) タオルが <u>ゴワゴワ</u> する。 | →タオルが <u>硬い</u> 。 <u>古い</u> 。 |
| (39) 表面が <u>スベスベ</u> している、 <u>ツルツル</u> している。 | →表面が <u>滑らかだ</u> 。 |
| (40) 子供が <u>静かに</u> している。 | →子供が <u>静かだ</u> 。 |
| (41) 髪を <u>長く</u> している。 | →髪が <u>長い</u> 。 |
| (42) 人通りが無くここは <u>寂しい感じがする</u> 。 | →人通りが無くここは <u>寂しい</u> 。 |
| (43) 焦げた部分は <u>苦い味がする</u> 。 | →焦げた部分は <u>苦い</u> 。 |

「ガンガン、キリキリ、ズキズキ＋する」は、先述したように強い結合を示し、一語相当と考えられるものである。そして、格の交替なしに「痛い」という形容詞一語で置き換えられる。また、「する」は、アスペクト形式の付加を義務とはせず、ル形で状態性を示しうる。また、ル形で今現在の状態を表明するという側面から、アスペクト形式を付加することによって、客観的に状態を描き出すという側面に移っていくことになる。

⁸⁰ 形容詞と形容動詞を合わせて、形容詞一語に代表させる。

次に、「形容詞＋する」は変化を示すが、アスペクト形式の「ている」により現在の状態を示すことになり(40)(41)⁸¹、形容詞の状態性と一致し、形容詞一語と置き換えられる。

そして、(42)(43)「～感じがする」「～味がする」は、それぞれのガ格名詞に修飾する形容詞が実質的な意味を担うために、これらを取り去って形容詞だけを示しても意味的には変わらない。その取り去ってしまった「する」の文法的な働きは形容詞自体が持つことになる。

次の例は形容詞文と意味的に類似しながらも、意味を限定している。

(29) 林檎飴は懐かしい味がする。→林檎飴は懐かしい。

(44) 風鈴は優しい音がする。→風鈴は優しい。

形容詞文と比較すると「する」文の方が、ガ格名詞句に「味」「音」が示されているために「懐かしい」「優しい」の対象が何かということが限定されている。一方で形容詞文は、どんなところが懐かしいのか、優しいのかを示されていないために意味に広がりがある。この意味を限定するには、「林檎飴は味が懐かしい」「風鈴は音が優しい」とガ格で示さなければならない。

しかし、同じ構造を持つ「する」文だが、形容詞に置き換えられない例もある。

(45) その道は狭い感じがする。→#その道は狭い。

(46) その道は狭い気がする。→#その道は狭い。

「する」文は、感覚(狭さ)を経験する主体の存在(話者)があるが、形容詞文は感情・感覚ではなく客観的判断としての性質、言わば属性を述べる文である。そのため、形容詞文は属性形容詞としての側面を、「する」文は感情形容詞としての側面を描き出している⁸²。「する」文は、感覚の主体たる話者の存在が浮かび上がり、「感じがする」「気がする」がモデルな意味を担っている。形容詞文が断定で真偽値が決定されているのに対し、「する」文ではその真偽値が保留されて話者の判断に任されている。この意味においては、「その道は狭いようだ」に近いものがある。

以上、「語＋する」が一つの述語として機能し、形容詞と置き換え可能なものがあることがわかる。「感じ、味、音がする」「擬態語する」「形容詞している」は形容詞との類似性が大きく、動詞「する」は名詞句、擬態語、形容詞に動詞の形をもたすが、意味的にはその語の特徴を反映しているため、形容詞の特徴を持つ機能的な動詞になっていると言える。

4. 1. 3. 4. 2. 形容詞との構文的な類似性—副詞による修飾—

形容詞との構文的な類似性について考察する。西尾寅弥(1972)は『すこし』『かなり』『非常に』などの、いわゆる程度副詞は、主として形容詞を修飾することを職能とする⁸³と
言う。つまり、「非常に」などの程度副詞による修飾が可能であれば、それは形容詞的と言える。一方、量副詞は動詞を修飾するものと限定されている。したがって、「たくさん」な

⁸¹ 「髪を赤くする」の基本形では、髪を赤く変えるという変化の側面を描き出し、状態を示すことにならない。形容詞は状態性という特徴を持つため「している」に変えなければならない。

⁸² 属性形容詞か感情形容詞かは形容詞を厳密に二分する概念ではなく、その概念的違いを大きく分ける概念であるため、「ああ、太陽がまぶしいな」と「太陽はまぶしい」のように前者は感情・感覚としての側面、後者は属性としての側面を描き出している。

どの量副詞による修飾が可能であるとすれば、それは動詞的な特徴と言える⁸³。

「語＋する」文において、程度副詞あるいは量副詞による修飾が可能か否かについて検証し、構文上から形容詞との類似性を考察する。前掲の例文に「非常に」「たくさん」を挿入すると次のようになる。副詞が「する」の語結合を直接修飾するように一部例文を簡潔にしてある。以下、挿入後のみを→以下で示す。

- (5) →ここに〔*非常に／*たくさん〕宣言をする。
- (6) →〔非常に／*たくさん〕頭痛がする。
- (7) →胃が〔非常に／*たくさん〕キリキリする。
- (8) →台所から〔非常に／*たくさん〕いやなおいがする。
- (9) →留学を〔非常に／*たくさん〕希望する。
- (10) →友達と〔*非常に／たくさん〕テニスをする。
- (11) →息子を〔*非常に／*たくさん〕医者にする。
- (12) →部屋を〔非常に／*たくさん〕きれいにする。
- (13) →顔を〔非常に／*たくさん〕赤くする。
- (14) →環境破壊を〔非常に／*たくさん〕問題とする。
- (15) →鉛筆が一本〔*非常に／*たくさん〕百円する。
- (16) →彼女は〔非常に／*たくさん〕きれいな目をしている。
- (17) →授業中は〔*非常に／たくさん〕読んだり書いたりする。
- (18) →〔*非常に／*たくさん〕しばらくすると雷は鳴り止んだ。

(8)(16)のように連体修飾語を必須とする「する」文は、副詞が形容動詞を修飾してしまい、「語＋する」の部分修飾するか否かの判断が難しい⁸⁴。そこで、これらを省くと、程度副詞による修飾が可能で量副詞による修飾が不可能であるという、形容詞的特徴を持つ例は(6)(7)(9)(12)(13)(14)であり、形容詞との類似性が見られることがわかる。

4. 1. 3. 4. 3. 形容詞との構文的な類似性—比較表現—

西尾(1972)には「程度性ということは、『比較』ということと深い関係がある」とある。簡単に比較表現についても確認しておく。→以下が比較表現である。

- (5) →*前回より今回の方が開会の宣言をする。
- (6) →さっきより今の方が頭痛がする。
- (7) →下腹より胃の方がキリキリする。
- (8) →台所より今の方がいやなおいがする。
- (9) →就職よりも留学を希望する。
- (10) →友達より弟の方がテニスをする。
- (11) →*息子より娘を医者にする。

⁸³ 山岡(2000)では、「程度副詞が修飾することのできる動詞述語は、量的な変化を表す動詞、様態を表す動名詞（堂々とする、のろのろする、…）、感情動詞の一部（悲しむ、痛む、…）（p222）」と「属性動詞」をあげている。

⁸⁴ ただし、(8)(16)はどちらも形容詞・形容動詞を必須とするという点では、すでに語結合において形容詞成分が必須であるということであり、形容詞との類似性を示すものとも考えることもできる。

- (12) →台所より部屋をきれいにする。
 (13) →顔より目を赤くする。
 (14) →環境破壊より核造成の方を問題とする。
 (15) →*ペンより鉛筆が一本百円する。
 (16) →彼女は彼よりきれいな目をしている。
 (17) →放課後より授業中の方が読んだり書いたりする。
 (18) →*さっきよりもしばらくすると雷が鳴り止んだ。

(8)(16)は比較が形容動詞に対して行われている可能性があるので、比較テストから除く。その結果、比較表現を見てみると、「語＋する」で比較表現をとるものが(6)(7)(9)(10)(12)(13)(14)(17)である。また本来、行為の「する」には程度性はないので、何かを比較する場合には次のように量副詞を補わなければならない場合が多い。しかし、これは量的な程度性を示しており、形容詞に特徴的な純粋な程度性とは異なると考えられる。

- (10)→→友達より弟の方が「たくさん」テニスをする。
 (17)→→放課後より授業中の方が「たくさん」読んだり書いたりする。

以上、比較表現においても「する」文の中には形容詞との構文的な類似性を示すものがあった。

4. 1. 3. 4. 4. 形容詞との構文的な類似性—人称制限—

「する」文の中に、感情形容詞の構文的特徴である人称制限が見られることをまとめておきたい。これについては山岡政紀(2000)がすでに様々な感情動詞文の中で述べているので確認のために、例として(6)(7)について見てみる。そこに、人称代名詞を加える。

- (6) 'a. (私は) 頭痛がする。
 b. *君は頭痛がする。→君は頭痛がするはずだ。
 c. ?彼は頭痛がする。→彼は頭痛がするらしい。
 (7) 'a. (私は) 胃がキリキリする。
 b. *君は胃がキリキリする。→君は胃がキリキリするはずだ。
 c. ?彼は胃がキリキリする。→彼は胃がキリキリするらしい。

以上のように、いずれも意味上の主語(経験者格)が第一人称以外の場合には、何らかのモダリティ形式の付加が要求されることが多い。これは、感情形容詞文に見られる人称制限と同質である。

- (47) a. (私は) 頭が痛い。
 b. *君は頭が痛い。→君は頭が痛いはずだ。
 c. ?彼は頭が痛い。→彼は頭が痛いらしい。

また、感情形容詞文の第一人称は形式化されないことが多いが、(6)～(8)の「する」文も同様である。したがって、「する」文は「する」と結合する語によって、このような人称制限を持ち得るのであり、これは形容詞との類似性を示している。ところが、(8)は第二人称と第三人称でモダリティ形式を付加しても許容されない。

- (8) 'a. (*私は、*私には) 台所からいやなにおいがする。

- b. *君は台所からいやなにおいがする。
 → *君は台所からいやなにおいがするはずだ。
 → 君は台所からいやなにおいがすると言うんだね。
- c. *彼は台所からいやなにおいがする。
 → *彼は台所からいやなにおいがするらしい。
 → 彼は台所からいやなにおいがすると言っている。

この違いは、山岡(同)で指摘する通り、第一人称経験者格が「完全に潜在化している(p197)」ことである。(2)(3)は第二人称、第三人称が経験者格の場合はモダリティ形式を付加すれば文として成立したが、(4)においては、モダリティ形式を付加してもなお文としては成立しがたいのである。その場合、引用にして補文構造の中で経験者格が第一人称になるような表現をとらざるを得ない。

以上、「語」と「する」との結合度の強さ、さらに意味的特徴(置き換え)、構文的特徴(副詞による修飾、比較表現、人称制限)から「語+する」が、形容詞的特徴を備えた機能的な動詞結合であることがわかった。

4.1.4. 形態的特徴―描く時と局面の多様性―

文法的な特徴の一つとして、形態的な特徴、つまり、「する」が形を変える現象に関わるテンスとアスペクトについて述べておきたい。

これまでの例文で示されたように、「する」が接続している語は、名詞、擬態語、形容詞、動詞、副詞と様々である。その中でも、名詞は第2章で見た通り、具体物から抽象的概念まで存在し様々に性質が異なっている。このことによって、「する」は「動作・行為」を示すという語彙的な意味を超えて、意味が多様化して実現していると考えることができる。

動詞はこれまで、様々な分類のされ方をしてきたが、その中には、動作か存在かで大きく分け、「ある」「いる」などが存在を表す動詞として(山田孝雄ではあえて「存在詞」という一分類を立てた)、そのほかは動作を表す動詞として一括りにできるものがある⁸⁵。あるいは、動きを表さない動詞と動きを表す動詞に二分し、前者を状態動詞と特別に呼ぶものもある。一方、動きを表す動詞はアスペクトによって様々な動作の局面を表現することになる。以下は、(1)~(14)に「た」「ている」を加えたものである。

- (5) ここに開会の宣言をする／*した／*している。
 (6) あー、頭痛がする／?した／*している。
 (7) 胃がキリキリする／した／している。
 (8) 台所からいやなにおいがする／した／している。
 (9) 留学を希望する／した／している。
 (10) 友達とテニスをする／した／している。
 (11) 息子を医者にする／した／している。
 (12) 部屋をきれいにする／した／している。

⁸⁵ 「変化」は動作に入り、「状態」は形態変化によって「ている」で示されるものである。

- (13) 顔を赤くする／した／している。
 (14) 環境破壊を問題とする／した／している。
 (15) 鉛筆が一本百円する／した／している。
 (16) 彼女はきれいな目をしている／*した／*する。
 (17) 授業中は読んだり書いたりする／した／している。
 (18) しばらくする／*した／?していると雷が鳴り止んだ。

これらの例を見てみると、「する」が動詞であれば通常示す特徴を持つものと、持たないものがあることがわかる。通常、動作動詞が示すテンス的意味は、ル形は「未来」を、タ形は「過去」を表わす。そして、アスペクト表現のテイルは、動作の継続相あるいは動作の結果相を示す。

ここでは、タ形とテイル形にすると非文あるいは不自然になる文に注目したい。

まず、(5)はタ形もテイル形も非文になる。なぜならこの文は、発話と同時に「宣言」という行為が遂行されるような文であるためである。「ここに開会を宣言する」は文全体が特殊であり、今ここに限定された表現だからである。そして、ル形の意味も未来ではなく今・現在を示している。しかし、それも主語が一人称ではなく三人称になれば「ここに彼が開会の宣言をする／した／している」、通常の動作動詞と同様、ル形で未来を、タ形で過去を、テイルで継続相を示すようになるという特徴を持つ。

次に、(6)はテイル形がない。それはこの文が現在の瞬間的な「状態」を述べる文だからである。同じ「頭痛がする」でも、「朝からずっと頭痛がしている」のように継続的な状態であることを示す場合には使われる。タ形は、頭痛が一回切りで現在は痛みが無い場合は可能となる。他は「昨日は頭痛がした」のように過去のある時点に立つ文脈において可能となる。ちなみに、形容詞文は、「あー、頭が痛い」「朝からずっと頭が痛い」のようにアスペクト形式を持たないために、瞬間の状態も継続の状態も示しうる。したがって、「する」は形容詞との類似性を強く持ちながらも、形態的には動詞であるために、このような類別が可能となっている。(7)(8)も同様である⁸⁶。

(15)のル形は未来を示さず、ル形、タ形、テイル形、どの形態であってもやはり状態しか示さないという点で、動作動詞ではない。

(16)はル形、タ形を許さず、テイル形だけが可能で、その表す意味は状態である。しかし、動作の継続でも結果でもない。森田良行(1977)で指摘されているように「修飾語を冠して」使われる。また、このように主語の属性を示すような文においてはル形を許さない。

以上の点を、金田一春彦(1950)の動詞分類に従って考えると、「する」は動詞分類の全て「状態動詞」、「瞬間動詞」、「継続動詞」、「第四種の動詞」に該当することになり、動詞として非常に多機能であると言える。また、テンスやアスペクトの意味だけでなく、文として表す意味も一様ではない。(6)(7)(8)(9)は、話者自身の感覚や知覚、願望といった内面的な状態を表し、(12)(13)は変化、(18)は時の経過を表している。

このように、「する」文は描く局面というアスペクト的意味と、時というテンス的意味に

⁸⁶ 寺村秀夫(1984)でも、「基本形が現在の事象を表す(p99)」場合として、「～ガスル」を取り上げている。

において非常に多様であり、これは「する」が共起する語彙の多様性と、動詞「する」の語形変化によって出現していると考えることができる。一つの動詞がこのような多機能性を持つことが、「する」の大きな特徴でもある⁸⁷。

4.1.5. まとめ

以上のように、「する」は他の語との結合度が高く、完全に一体となって一語相当になるもの、あるいはその他の動詞一語に置き換えられるもの、また形容詞一語同然になっているものもあった。これらの特徴はすべて、語と「する」との関係性が機能的な動詞結合であることを示している。つまり、「する」は文法的な機能を担うことを専らにして、実質的な意味はその結合する語が担うというものである。しかし、機能動詞結合とは本来「名詞＋動詞」の結合形態に限定されるために、格助詞を介さない「する」は機能動詞には入らないことになるが、本節ではそれら全てを捉えて考察した。そして、「する」全てが機能性を強く示す動詞であり、その広がり、動詞でありながら形容詞との類似性を示し、動詞の中でも状態動詞、動作動詞、変化動詞、感情感覚動詞など様々な姿を示しうるものであることがわかった。これは、日本語動詞全体の中においても、その機能性、意味、用法の広がり、観点から見て、際立って多様な動詞であると言えよう。

第2節「形容詞・形容動詞する」文の構造と意味

第2節では、形容詞や形容動詞が「する」と結合する文について考察する。第1章で見た通り、「する」は形式動詞、機能動詞、軽動詞などと呼ばれることがあるが、それぞれの意味する範囲は異なり、この中で概念的に最も広いのは形式動詞である。機能動詞研究では「名詞＋動詞」という語結合が機能動詞に該当するため、本節で扱う「形容詞＋する」の語結合はその範疇に入らないため機能動詞ではないということになる。また、軽動詞は「定性制限と統語的操作の禁止」が必須の特徴であり、かつ名詞句に限定されていることから、本節の「形容詞する」はやはりその範疇外であり、軽動詞ではない。したがって、これまでの機能性の動詞を分析する枠組みからは外れてしまうのが「形容詞する」である。本研究では、「形容詞する」も多機能動詞の一つの実現形と捉え、ここで考察を加える。

さて、「する」が形容詞と結合すると「～くする」に、形容動詞と結合すると「～にする」になる。本節ではこれらを考察の対象とし、「形容詞・形容動詞する」文の構造と、その表わす意味・用法、さらに文法的機能を見ていく。また、動詞「する」と形容詞・形容動詞との関係性を捉え、多機能な動詞である「する」の新たな一面を明らかにしていきたい。そして、「する」が日本語の中でどのように位置づけられるか考えていく。なお、以下では「形容詞」の表記で形容詞と形容動詞を代表するものとする。

⁸⁷ 森山卓郎（1988）が、動的事態のアルペクト的性質を「持続性」「結果の可逆性」「終結点の有無」「変化の進展性」などの様々な素性の組み合わせとして類型化しているとおり、一つの動詞であってもその出現する文中の他の要素によってもアスペクトの意味が異なる。まさに「する」はその点において、突出した幅広いアスペクト的性質を示しうるということになる。

4.2.1. 「形容詞する」の意味分析における2つの視点

まず、形容詞が動詞「する」と結合した結果、どのような意味を表すのかについて考える。森田良行(1977)では「CヲDニする」のDには「名詞、形容動詞語幹が来るほか、(中略)形容詞連用形を立てる形もある」とし、「対象CをDの状態に変える“化成”」であると述べている。また、小泉保ほか(1989)では「物のある状態から別の状態に変える」、中北美千子(1993)では、例えば「甘くする」が「変化他動詞」一語に相当すると述べている。このように、いずれも先行研究では「形容詞する」を変化を表す他動詞であると捉えている。

さらに、中北(1993)では「形容詞する」の形容詞の表すサマには、動作・作用の結果として現れるモノのサマである「結果の状態」と、動作・作用そのものの行われ方である「様態」があるとする。

先行研究における「形容詞する」の意味分析とは、まず「形容詞する」全体が表す意味、そして「形容詞する」における「形容詞」の意味、という二つの視点で考察されていると考えることができる。森田(1977)と小泉ほか(1989)は前者の視点のみをとり、中北(1993)では両者の視点を述べてはいるが分析は後者の視点に偏っている。この二つの視点は同時に持つべきものであり、どちらか一つの視点では「形容詞する」の意味を的確につかむことは難しい。

次の例を見たい。矢印以降の文は、形容詞と「する」の間に他の要素を挿入したものである。

(1)部屋をきれいにする。→*きれいに部屋をする。(大塚 2007 : 27 (8))

(2)顔を赤くする。→*赤く顔をする。(同上)

このように「形容詞する」は形容詞と動詞という二語から成るものの、形容詞と「する」を分離することは難しく、その強度な語結合はまさに動詞一語相当をなすものである⁸⁸。まずこの点から、意味の分析には「形容詞する」全体への視点を持つべきである。「する」だけに視点を置いても「する」自体は何らかの動作や行為を意味するだけであり、その実質的な意味はこの語自体にはないため、動詞の意味を求めることはできないからである。そして、本来二語であって一語相当になっている「形容詞する」は、形容詞が実質的な意味の分担を、「する」が文法的機能の分担を行うという点で、「形容詞する」の「形容詞部分」を分析する必要がある。同時にこれは「形容詞」と「する」との関係性を捉えるうえでも重要な視点である。

したがって、ここでは「形容詞する」という述語全体の意味と、「形容詞する」の「形容詞」部分という、語結合における実質的な意味の二つを同時に考えていくことにする。

⁸⁸ 村木(1991)では、語と語の結合の強さから機能動詞の研究を行っているが、その中心は「名詞+動詞」であり本節の考察対象である「形容詞する」は「機能動詞結合に近接したむすびつき」と述べる。また軽動詞の研究の対象も(影山 2004 など)「青い目をしている」に限定され、「形容詞する」はそこに含まれていない。本研究ではまず基本的な文の要素同士の関係性や意味の分析などから「形容詞する」を考察し、機能動詞と軽動詞の枠外にはじき出されている「形容詞する」がどのような動詞述語であるか明らかにするものである。

4.2.1.1. 「形容詞する」の意味—変化の用法—

(4) 太郎がドアをだめにする。

(5) 息子が会社を立派にする。

(6) 太郎が話をおもしろくする。

いずれも形容詞の表す状態への変化を表している。(4)は「太郎」が「ドア」を「だめ」な状態に変えたことを表し、(5)は「息子」が「会社」を「立派」である状態へ変えたことを表している。この点から、「形容詞する」には変化動詞としての意味があることが確認される。また、変化には変化するもの、変化を引き起こすものが存在するので、変化を引き起こすものが動作主体となって、変化が引き起こされる対象（変化するもの）がヲ格名詞句となる。

そして、変化を表す用法における形容詞とは、変化の結果の状態あるいは厳密に言えば変化がどこに向かうのかという、変化の方向性を表す。結果の状態という述べ方は、変化の結果に着目したものであり、「ドアをだめにした」のようなテンスが過去の場合にはもっとも符合した述べ方であるが、「ドアをだめにする」のようなテンスが未来の場合には結果がまだ起こっていないため不自然に響く。変化には、変化の様々な局面が存在し、変化の始まり、変化の最中、変化の終わりがあり、結果という語は変化の終結部を指し示す。変化にはこのような局面とは違う次元として、その局面全体に関わる変化の方向がある。つまり、どう変化するかということであり、それは変化の始まり、途中、終わりのすべての段階に関わる。したがって、本研究では結果の状態よりも、「変化の方向」として捉えることにする。

まとめると、「形容詞する」全体の表す意味の一つは「変化」であり、その形容詞部分が表す意味は「変化の方向」である。

4.2.1.2. 「形容詞する」の意味—行為の用法—

次に、中北（1993）で形容詞の表すサマとしても一つ示された「様態」について見ていく。この用法は「する」の先行研究ではほとんど述べられることのなかった点である。以下は、中北（1993）で「様態」の例として出されたものである。

(7) 太郎は先生の前ではおとなしくする。（中北 1993 : 158(19)）

(8) 花子はいつもきれいにしている。（同 : 159(24)）

(9) 先生の前では太郎は静かにする。（同 : 159(25)）

(7)を中北（1993）では、「動作・作用の行われ方がおとなしい」と解釈しているが、一方で「おとなしい状態への変化」と考えることもできる。つまり、太郎はふだんおとなしくないのだが、先生の前ではおとなしいという状態に変化する、という意味である。また、(8)は、様態ではなく寧ろ「きれい」という状態に変化した結果が残存していると解釈される。このように、「形容詞する」の形容詞が様態を表すか、変化の方向を表すかの区別はそれほど明確なものではない。一方で、様態を表すとはしか解釈されない例もある。

(10) 花子は父からもらったかばんを大切にする。

(11) 太郎はお年寄りに親切にする。

これらは、それぞれ形容詞の表す状態で動作・行為を行うことを意味しており、(10)は「かばん」を「大切」という状態に変化させたわけではない。まして、(11)には変化を被る対象

自体が存在しない。したがって、これらの例における形容詞部分は動作の様態であると言える。この場合の「形容詞する」全体の意味が、具体的に何を意味するかについては後に述べることにし、ここでは変化に対して「行為」という大枠でまとめておくこととする。

以上をまとめると「形容詞する⁸⁹」は、以下の三つに分けられる。

1. 変化を表わす用法（形容詞は変化の方向を示す）例、「話をおもしろくする」
2. 行為を表わす用法（形容詞は様態を示す）例、「お年寄りに親切にする」
3. 両義的なもの（上記二つの可能性がある）例、「おとなしくする」

この三者の関係はどのようになっているのか、次で考えていく。

4.2.1.3. 変化用法・行為用法・両義的なもの

変化を表わす用法では、「だめにする」で形容詞の表す「だめな」状態へ「変える」という意味を表す。そして、これは他動詞に限られる(1)～(6)。

次に、行為を表す用法ではその形容詞部分は「様態」を表すが、その表される動作・行為はどのようなものだと考えられるだろうか。普通の動詞は、その動詞自体が実質的な意味を持つために一緒に用いられる形容詞の連用形が示す意味は、それらの動詞が担う具体的な動作・行為の行われ方であり、動作の様態と言うに足るものとなっている。

(12)太郎がおとなしく座っている。

(13)太郎が親切に教える。

(12)は「座っている」状態が「おとなしい」というあり方であること、(13)は「教える」行為が「親切」な態度で行われることを表している。それでは、「形容詞する」の例を見てみる。

(10)花子は父からもらったかばんを大切にする。

(11)太郎はお年寄りに親切にする。

(14)太郎は母親に冷たくする。

(15)倉庫の荷物は全部好きにしていい。

(16)自由にしててください。

「形容詞する」は、「する」の意味の希薄さを結合する語によって示すとは言え、「勉強をする」のような、その実質的な意味がすべてヲ格名詞句に託されているものとは少し異なる。

「形容詞する」は、動作の様態としての実質的な意味が形容詞にあり、「する」は形容詞と結合することで、「扱う、振舞う」のような意味を示すようになる。そのため、「名詞をする」の用法に比べ、実質的な意味と文法的な機能が二つに整然と分かれているわけではない。

「形容詞する」の「様態」を表す用法は、「形容詞の表す状態のように扱う、振舞う」という意味を表すということになる。また、他動詞の場合(10)(15)も自動詞の場合(11)(14)(16)もある。ただし、他動詞の使い方はそれほど多くはない。

そして、変化と行為のどちらの解釈も成り立つものは、そのどちらの特徴も示しうるものとすれば、上の考察から他動詞が両方の用法にあるので、他動詞の場合が両義的であると考

⁸⁹ 類義語「やる」の「形容詞やる」は、変化の意味は持たず、もっぱら「様態」を示す。「ゲームを楽しむ」は変化を、「ゲームを楽しくやる」は様態を示す。

えられるのである。

(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。

ところが、両義的である(7)は対象となる目的語がない。これにあえて目的語を付加すると以下のように不自然になり、他動詞であるとは言えない。

(7)'? 太郎が太郎をおとなしくする。

しかし、変化は、変化を引き起こすものと、その変化の影響を受けて変化するものとが存在する現象であるから、変化する対象が存在しなければならないはずである。そう考えれば、形式的には明示することはなくとも意味的には存在する変化の対象というものが考えられるのであり、それはこの文では「太郎」ということになる。したがって、変化を引き起こす主体も「太郎」であり、変化する客体もまた「太郎」であるということであり、一致する両者をどちらも示すのは重複することになるので、明示する必要がないと考えられるのである。この点では他動詞的であると言える。しかし、形式上は目的語を示せないという点では自動詞であり、この点が、様態を表す用法の解釈を受ける要因となっていると考えられる。このことを例文に示すと以下ようになる。

両義的なものの【変化の用法（形容詞は変化の方向を表す）】

(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。(形式的に自動詞)

a.* 太郎が太郎をおとなしくする。

b.* 太郎が自分をおとなしくする。

c.太郎が〔自分自身を〕おとなしくする。(意味的に他動詞)

一方、行為の用法（様態）の解釈では、「太郎は先生の前ではおとなしくする」は「お年寄りに親切にする」と同様に目的語を持たない。しかし、誰に対してかという行為の及ぶ先を持っている。誰に対して「親切にする」行為をとるのか、誰に対して「おとなしくする」行為をとるのか、と言え、それぞれ「お年寄り」であり「先生」である。行為の間接的に及ぶ相手を持つのである。これを「自動詞の持つ行為の間接的对象」と呼び、他動詞の持つ変化の直接的対象と区別する。例文に示すと以下ようになる。

両義的なものの【行為の用法（形容詞は様態を表す）】

(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。(自動詞)

以下の表は、「形容詞する」の意味・用法の連続性をまとめたものである。

表 1. 「形容詞する」の意味・用法の連続性

| 意味・用法 | | 自動詞 ～に対して：間接的对象 | 他動詞 ～を：直接的対象 |
|---------|-------|--------------------|-------------------------------|
| 変化の用法 | | × | ○直接的対象（話をおもしろくする） |
| 両義的なものの | 変化の用法 | | △潜在的な直接的対象（先生の前で〔自分を〕おとなしくする） |

| | | | |
|-------|-------|----------------------|-----------------------|
| | 行為の用法 | ○間接的対象（先生の前でおとなしくする） | |
| 行為の用法 | | ○間接的対象（お年寄りに親切にする） | ○直接的対象（かばんを大切に する） |

4.2.2. 共起する要素との関係性

「形容詞する」と文中で共起する要素である主体や対象が、互いにどのような関係性を持つのか分析していく。中北(1993)では「サマを生起させる主体」と「サマの持ち主」に分け、「主体とサマの持ち主が一致しない場合のサマは結果の状態、主体とサマの持ち主が一致する場合のサマは様態である（同 p159）」と述べている。

結果の状態（変化）と様態（行為）という両義の可能性がある(7)「太郎は先生の前ではおとなしくする」のような例を考えてみると、主体は「太郎」であり、「おとなしい」サマの持ち主もまた「太郎」であるので両者は一致し、様態を表していると言える。しかし、この文の主体（太郎）とサマの持ち主（太郎）が一致しないということとはありえない。そうすると、結果の状態の意味はないということになってしまうが、実際には結果の状態（変化）の意味はある。変化は変化させる対象を持つが、それが主体自身である場合も他者である場合もあるからである。この例は、主体とサマの持ち主が一致していても結果の状態である場合も見られることを示しており、中北（1993）の説明は十分とは言えない。

さらに、反例が見られる。それは(10)「花子は父からもらったかばんを大切にする」のようなタイプの文である。主体は「花子」でサマの持ち主は「かばん」であるため両者は一致しないので、中北(1993)の説明では結果の状態になる。しかし、この文は結果の状態ではなく様態を表しているのである。

そこで、主体とサマの持ち主について再度考察することにする⁹⁰。変化の用法で形容詞が変化の方向を示すものと、行為の用法で形容詞が様態を示すものとに分けて考える（主体は____、対象は_____で示す）。また、「なる」動詞文や形容詞文との関係性を見るために、→以降にそれを表示する。例文は一部変えて再掲する。

【変化の用法】

(5) 息子が会社を立派にする。→会社が立派になる。#⁹¹会社が立派だ。

(6) 太郎が話をおもしろくする。→話がおもしろくなる。#話がおもしろい。

(7) 太郎_____はおとなしくする。→太郎がおとなしくなる。#太郎がおとなしい。

変化の用法を見ると、(5)では主体である「息子」と、「立派」というサマの持ち主である「会社」は一致せず、「なる」文、形容詞文に変換するとサマの持ち主が主格に立つ文になる。

(6) も同様である。一方、両義性のある(7)は、主体である「太郎」と、「おとなしい」の持

⁹⁰ 様態の用法では、「サマを生起させる主体」と「サマの持ち主」という名づけが意味的になじまないところがある。「花子はかばんを大切にする」の「花子」は「大切」という「サマを生起させる」と言えるか、あるいは、「かばん」は「大切」という「サマの持ち主」かという点である。「大切」というサマの感情の持ち主としては「花子」、「大切」という感情が向けられる相手として、結果そのサマを持つ「かばん」である。

⁹¹ #は文として成立するが、意味が異なることを示す。

ち主である「太郎」は一致しているが変化の意味を表しうる。いずれも「なる」文との意味関係は見えるが、形容詞文とは意味的に異なる。つまり、「立派にする」ことは「立派だ」ということとは、ずれる。

【様態の用法】

(7) 太郎はおとなしくする。→#太郎がおとなしくなる。太郎がおとなしい。

(10) 花子はかばんを大切にする。→#かばんが大切になる。かばんが大切だ。

(11) 太郎はお年寄りに親切にする。→#太郎が親切になる。太郎が親切だ。

行為の用法を見ると、(11)は主体である「太郎」と、「親切な」の持ち主である「太郎」は一致するが、(10)は主体が「花子」、「大切な」のサマの持ち主は「花子」なのか「かばん」なのか判断しにくい。両義性のある(7)は、主体とサマの持ち主は一致している。こう考えると、主体とサマの持ち主が一致するか否かは、変化か様態かを分ける要因とはなっていないと言える。主体と対象という点でも、主体と対象が一致するのが両義的な文、一致しないのが変化と様態の文であるため、この点も確実な差ではない。

そこで、「なる」文と形容詞文との比較から両者の違いを見てみたい。変化の用法では、「太郎が話をおもしろくした結果、話がおもしろくなる」と「なる」との連続性を捉えることができる。行為の用法では、「太郎がお年寄りに親切にした結果、太郎が親切になる」わけではないため「なる」との連続性はない。一方、形容詞文と比較すると、「太郎が話をおもしろくする」と「話がおもしろい」とは異なり、変化は形容詞文とはつながらない。ところが、行為の用法では「太郎がお年寄りに親切にする」ことは「太郎がお年寄りに親切だ」ということとほぼ同様の内容になっているため、形容詞文との連続性が見られるのである。

つまり、変化の用法は「なる」文との連動性があり、様態の用法は形容詞文との関係性が強いと捉えることができる。

以上、ここでは新たに、先にまとめた直接的対象と間接的对象を導入し、「形容詞する」の述語内容の「対象」と、その述語内容を行う「主体」との関係性として捉えなおすことにする。

改めて例文を確認すると、次のようになる。

【変化の用法】

主体（太郎）≠直接対象（話） (6)太郎が話をおもしろくする。

主体（息子）≠直接対象（会社） (5)息子が会社を立派にする。

主体（太郎）＝直接対象（太郎） (7)太郎は先生の前ではおとなしくする。

【様態の用法】

主体（太郎）≠間接対象（先生） (7)太郎は先生の前ではおとなしくする。

主体（太郎）≠間接対象（お年寄り） (11) 太郎はお年寄りに親切にする。

主体（太郎）≠直接対象（かばん） (10) 花子はかばんを大切にする。

主体と対象がどのような関係になっているかを見た結果、変化の用法は直接対象を持ち、それは主体が、主体と異なる対象に対して変化を引き起こすものと捉えることができる。ただし、両義的な文の場合、主体が、明示されない直接対象である主体自身に対して変化を引

き起こす特殊なものであると考えられる。

様態の用法は間接対象が主体と異なるものと、直接対象自体を持ちそれが主体と一致しないものがある。後者は変化の用法と同じ関係性を持ち、両者の違いは語彙的な意味によって決まるものと考えられる。そして、両義的な文の場合は、行為の用法として形容詞が様態を表す以上、何らかの対象を変化させるという側面が背景化しているのであり、その意味では直接対象がないと捉える用法が様態の用法であると考えることができる。

したがって、「形容詞する」において両義性のある文は主体と潜在的な直接対象が一致する文であり、一方で行為の相手を設定することのできる文であることがわかった。

4.2.3. 「～を形容詞する」を広く捉える

4.2.3.1. 「動作性名詞を形容詞する」

中北(1993)では「掃除を丁寧にする」は「丁寧に」と「する」を分離させることができることから「丁寧に掃除をする」と同義であるので、これらを考察対象からはずしている。しかし、「丁寧に」が「掃除をする」の間に割って入ったかどうかは、「掃除を丁寧にする」からはわからず、ただそこには二義性という現象が見られるだけである。この点を考えてみたい。以下に例を示す。

(17)掃除を簡単にする。 a. (様態→：簡単に掃除をする。)

b. (変化→：掃除を簡単にする。)

「掃除を簡単にする」には、二義性があり、一方が様態を表し、一方が変化を表している。これは「～をする」を作れるものに見られ、上記のようなサ変動詞語幹だけではなく、次のような動作性名詞も同様である。

(18)片づけを簡単にする。 a. (様態→：簡単に片づけをする。)

b. (変化→：片づけを簡単にする。)

これらのヲ格名詞句は動作性名詞であり、それぞれサ変動詞語幹あるいは「片付ける」の動詞派生語句である。「掃除をする」「片づけをする」の語結合をなすことが可能である。このことと二義性の問題とどう関わるかといえ、ば、「～をする」の語結合が中心になる場合には形容詞は動作の様態として働くが、「形容詞する」の語結合が中心になる場合には形容詞は変化の方向として働くことがわかる。しかし、両者は文全体の示す動作や行為という点では異なったものを示している。「形容詞+動作性名詞ヲする」文では動作の実質的内容はヲ格名詞である動作性名詞によって示されているが、「動作性名詞ヲ+形容詞する」文では動作の実質的内容はヲ格名詞句ではなく「形容詞する」全体が示す形容詞の状態への変化ということになる。つまり、(18)aの動作内容はヲ格名詞である「片付け」ることであるが、bの動作内容は「簡単にする」が示す「簡単」である状態へ変化させることである。さらに、ヲ格名詞は対象ではなく動作内容の一部を表すことが大きく異なる点である。つまり、「片付け」という動作を行うことは確かであるが、そのやり方を「簡単」な方向へ変化させるわけである。

したがって、動作性名詞をヲ格にとり、形容詞を連体修飾として持つ、「する」文はその語順が「動作性名詞ヲ形容詞する」の文の場合、行為(様態)と変化(変化の方向)の両義

性を持つものがあるということである。また、形容詞が様態の意味を示す場合は「する」はヲ格名詞と結合するものであり、形容詞が変化の方向を示す場合は「する」は形容詞と結合するものである。

4.2.3.2. 「非動作性名詞を形容詞する」

次に、非動作性名詞がヲ格に立つ場合と比較する。次の(19)(20)のように非動作性名詞がヲ格の場合には、「形容詞する」は変化または様態を表す。

(19)本を大事にする。(○様態、×変化)

(20)コップをきれいにする。(×様態、○変化)

また、同じ様態を表す用法でも非動作性名詞の場合と動作性名詞の場合は同じだろうか。

(18)a「片づけを簡単にする (様態)」も(19)「本を大事にする (様態)」も様態を表すが、(19)の動作内容は述語全体「大事にする」が示す意味であり、その動作を受ける対象がヲ格名詞「本」である。一方、(18)aのヲ格名詞「片付け」は対象ではなく、動作の内容そのものである。様態を表す形容詞 (の副詞的用法) は、「非動作性名詞ヲする」文では動作内容そのものであり、「動作性名詞ヲする」文ではヲ格名詞の示す動作の様態を示している。同じ様態といっても様態のあり方が異なっている。

以上、「動作性名詞ヲ形容詞する」の二義性と、様態を表す「非動作性名詞ヲ形容詞する」と「動作性名詞ヲ形容詞する」のヲ格名詞句の働きの違いについてまとめた。

表2. 動作性名詞と非動作性名詞の形容詞スルとの関係

| 文構造 | 意味 | 語のまとまり | ヲ格名詞 | 形容詞の意味 |
|--------------|----|---------------|-------|--------|
| 動作性名詞ヲ形容詞スル | 様態 | 形容詞＋動作性名詞ヲスル | 動作内容 | 様態 |
| | 変化 | 動作性名詞ヲ＋形容詞スル | 動作の一部 | 変化の方向 |
| 非動作性名詞ヲ形容詞スル | 様態 | 非動作性名詞ヲ＋形容詞スル | 対象 | 様態 |
| | 変化 | 非動作性名詞ヲ＋形容詞スル | 対象 | 変化の方向 |

そして、「掃除を簡単にする」と同様に変化と様態の二つの用法を示す例は、「掃除」のような動作性の名詞だけでなく、以下の例のように非動作性の名詞でも見られる。

(21)リボンを華やかにする。 a. (様態→：華やかにリボンをする。)

b. (変化→：リボンを華やかにする。)

(22)パーティーを盛大にする。 a. (様態→：盛大にパーティーをする。)

b. (変化→：パーティーを盛大にする。)

このように、動作性名詞がヲ格に立つものと同様に非動作性名詞でも、様態と変化の両方を示せるものがある。様態を表す場合、ヲ格名詞は動作の対象でもなく動作の内容そのものでもない。(21)aの「リボン」は「リボンをする」という語結合で初めて「リボンをつける、結ぶ、飾る…」といった意味が語結合全体から出現するものである。また、b変化を表す場合には、「リボン」は対象を表し、「華やかな」方向へ変化を引き起こすのが「形容詞する」

の意味である。(22)も同様である。しかし、次例のように様態の意味を示せないものもある。

(23)湿布を冷たくする。 a. (様態→：??冷たく湿布をする。)

b. (変化→：湿布を冷たくする。)

(24)ネクタイを長くする。 a. (様態→：??長くネクタイをする。)

b. (変化→：ネクタイを長くする。)

(23)は、ぬるくなってしまった湿布を冷やすことを表す文であり、様態を表しにくく両義性を持ちにくい⁹²。(24)も様態の意味が出にくい例である。この点が、「～をする」の語結合を持つ文における動作性名詞と非動作性名詞の違いである。

4.2.4. 変化動詞と「形容詞する」—結果構文との関わり—

ここで、実質的な意味内容を持つ動詞でかつ変化の意味を示すような動詞(変わる、作る、塗る、切るなど)と、実質的な意味はほとんどなく、形容詞や形容動詞と結合することによって変化の意味を示すようになる「形容詞する」との違いについて考察する。

変化動詞が連用修飾成分と共に起することによって結果を表すような構文は「結果構文」と呼ばれ、これまでさまざまな研究がなされてきた。本節で扱っているような、形容詞が副詞的に働き変化の結果の側面を表すものも取り上げられている。そこで、語彙的意味のある変化動詞を持つ結果構文と、希薄な意味しか持たないため結合する形容詞によってその実質的な意味を示す「する」文とが、その変化と結果のあり方において、どう異なるか考察する。

結果構文の包括的研究としては仁田義雄(2002)があり、日本語の副詞的表現全体をとりあげ多くの実例をあげながら分析・記述を行っている。あるいは、結果と様態の副詞についてそのアスペクト的側面との関係を解明した矢澤真人(1983、1985、2000、2006)の副詞に関する一連の研究が見られる。そして、特に結果構文について焦点を当て述べたものに宮腰幸一(2007)がある。宮腰(2007)では、結果を表すような文成分を広く「結果句」と呼び、日本語における結果構文について先行研究を詳細に分析しながらその定義と分類を提案している。その他、多くの先行研究が見られるが、副詞的な修飾成分に焦点が当たっているために、動詞については一般的な語彙的意味を持つ実質動詞に限られ、「する」動詞が用いられた用例をこの中に見出すことはできない。しかし、「する」という動詞に対して形容詞が連用修飾成分として働くことは以上の考察でも明らかなため、結果構文の分析の範疇に入るものである。また、本研究の立場から言えば、こういった一般的な実質動詞と連用修飾成分との関係性と、「する」動詞とそれとの関係性を比較することによって、「する」の姿がより明らかにできるはずである。したがって、特に宮腰(2007)に見られる種々の結果構文の例をもとに、「する」がどう位置づけられるか検証していくことにする。ちなみに、宮腰(同)では「する」動詞文は一例もなく、すべて実質的な意味を持つ変化動詞について考察している。

⁹² 「動作性名詞ヲ形容詞スル」は両義性を持つが、様態と変化のどちらかが強く意味される場合もあり、「独立を急にする」のように様態の意味合いの強いものもあるが、非動作性名詞の場合とは異なりやはり両義性を保っている。これらは、形容詞と動作性名詞との語彙的意味合いの関係によるものと考えられる。

4.2.4.1. 動作を被る対象の変化

宮腰（2007）は、結果句が状態描写しているモノの種類に応じて四つのタイプに分類しており、「形容詞する」はその中の「被動作主志向」のタイプに該当する。つまり、行為が遂行された結果、ある影響を被るモノである「被動作主」に対して形容詞が状態描写しているとされるものである。具体的には「一郎が壁を白く塗った」の「白く」は「(壁をペンキで) 塗る」という変件事象の結果相におけるモノ（壁）の状態を表しており、壁は行為の影響を被ったモノなので被動作主志向の結果句となると考えている。この説明は妥当なものだが、「する」をこの例にあてはめて作ると以下ようになる。

(25)a. 一郎が壁を白く塗った。(宮腰 2007、p102)

b. 一郎が壁を白くした。

(25)b に宮腰（2007）の説明を用いると、『白く』が『(壁をペンキで) する』という変件事象の結果相におけるモノ（壁）の状態を表しており」となり、おかしい説明となる。「塗る」は単独でどのような変化が起こるかについて明白であり、その動詞自体が持つ変件事象がどのような結末を迎えるかについて述べるということが可能であるという語彙的な前提がある。しかし「する」にはそのような実質的な変化の意味は持ち合わせておらず、したがってそれが変化を表すことになるのかさえ単独ではわからないのである。語彙的に変化の意味を持つ実質的な動詞と、語彙的に変化の意味を持つか定かではない仮定的な動詞との違いが両者に見られる。さらに後半の説明「壁は行為の影響を被ったモノなので被動作主の結果句になる」における、その「行為」とは「する」ではなくあくまでも「白くする」なのである。「白くした結果白くなった」とは重複であり、こういった形での説明ができないことに「形容詞する」の特徴がある。この点は仁田（2002）で、「結果の副詞」の確認方法として「N {ガ/ヲ} + 結果の副詞 + V → V した結果、N ハ + 結果の副詞 + {ダ/ニナッタ}」をあげている。これに上記の例を入れると「壁を白くした」→「した結果、壁は白くなった」となり、言い換えが可であるとは言えない。しかし、この例の「白く」が結果を表すことは確かなので、この説明があてはまらないことになる。

4.2.4.2. 産出される対象と変化—「する」文の二義性—

また、「花子はパイを美味しく焼いた」は「花子は美味しいパイを焼いた」の文と交替可能であるという特徴を持つとされる。一方「壁を白く塗った」は「白い壁を塗った」と交替不可能であるために、両者の結果構文は異なるタイプのものとして分類されている。

(26)a. 花子はパイを美味しく焼いた。(宮腰 2007、p105) → 花子は美味しいパイを焼いた。

b. ? 花子はパイを美味しくした。 → * 花子は美味しいパイをした。

(27) 花子はきんぴらを辛くした。 → * 花子は辛いきんぴらをした。

(28) 花子は卵焼きを甘くした。 → * 花子は甘い卵焼きをした。

いずれも連体修飾の形の文と交替不可能であり、(26)a の結果構文とは異なるように見える。しかし、これらはそれ以前に形容詞と動詞の結合が強いために、両者を引き離して連体

修飾構造の文に直すことができないのである。統語的操作による比較はできないものの、これらの「する」文が「壁を白くする」のタイプの文（被動作主志向）とは異なることは、対象と変化との関係性の違いから明らかである。(26)aは、宮腰(2007)では「産物志向」のタイプに分類され、行為が遂行された結果、生み出されたモノの状態を描写しているとしている。(27)も「辛くする」行為の結果、生み出されたモノである「きんぴら」の状態が「辛い」のである。同様に、(28)は「甘くした」結果生み出されたモノである「卵焼き」の状態が「甘い」のであり、新しく産み出されたモノが対象をとっている。

それでは、(27)「きんぴらを辛くする」と「きんぴらを辛く作る」はまったく同じ意味を示すと言えるだろうか。「作る」文の「辛く」は「作る」行為の結果できあがった「きんぴら」の状態を示しており、対象であるモノは動作の結果生み出され、動作以前には存在しない。一方、「する」文は、対象となるモノが動作の結果生み出されたのではなく、むしろ動作以前にすでにできあがっていたモノであって、それを「辛く」変えたとも解釈される。この解釈は「被動作主志向」であり、このような解釈は「作る」文にはありえない。しかし、先ほど述べたとおり「辛くする」行為は変化でありながら同時に対象である「きんぴら」を「辛いきんぴら」に新しく作りだしたとも解釈されるので、「産物志向」でもある。これが、よりはっきりする例は「今日のきんぴらは辛くしてくれ」のような文で、これから作り出される産物であるきんぴらについて述べている。したがって、「する」文は、「産物志向」とも「被動作主志向」とも解釈されるものである⁹³。(28)も同様に、対象は産物とも被動作主とも解釈される。

4.2.4.3. 「形容詞する」の多義性

ここでは、変化動詞文との比較から、「形容詞する」述語が示しうる変化の意味の多義性についてまとめる。4.2.4.2.の二義性は、「形容詞する」述語の「変化」という一つの意味に、形容詞部分の描写する対象が「被動作主」と「産物」の二つが考えられるというものであり、4.2.4.3.での多義性は「形容詞する」述語の意味自体が複数あることを示すものである。

(29)太郎が壁を黒くする。

(30)花子が粘土を小さくする。

(31)花子が髪をきれいにしてきた。

どのような意味をこれらの文から読み取るだろうか。(29)は意味として「汚す」「塗る」「変える」などが考えられ、(30)は「まとめる」「分ける」など、(31)は「整える」「洗う」「切る」「結う」などが考えられるのである。これを実質的な意味を持つ動詞に替えた場合は、その動詞の持つ意味に文の意味は限定される。

(29)'太郎が壁を黒く {塗る／汚す／変える…}。

(30)'花子が粘土を小さく {まとめる／分ける…}。

(31)'花子が髪をきれいに {整えて／洗って／切って／結って…} きた。

「塗る」は「汚す」ことではないし、「まとめる」は「分ける」ことではない。「洗う」「切

⁹³ 結果構文にも産物志向か被動作主志向かは判然としないと宮腰(2007)も述べているが、「形容詞する」文は常にどちらも示しうるという点で、「作る」のような産物志向の動詞とは異なっている。

る」「結う」はすべて異なる動作である。しかし、これらすべての動作・行為を共起する要素にしたがって表しうるのが「する」という動詞であることがわかる。その意味の限定は、コンテキストによってなされる。「形容詞する」文は、形容詞の対象に関わる意味のあり方、さらに動詞自体に関わる意味のあり方の、二方向から、多義性を示すものである。

以上、先行研究における結果構文から「形容詞する」を考察した。その結果、結果構文の説明は「形容詞する」にそのまま用いることはできないものであった。その理由は、これまで述べたとおり動詞としての振る舞いが異なることによるもので、「形容詞＋変化動詞」とは異なり、「形容詞する」という語結合によって変化を表すのであり、形容詞と動詞の結合強度は実質動詞よりも形式動詞の方が強い。また、形容詞と対象との関係性の違い、動詞の表す動作・行為の多義性などを指摘した。したがって、結果構文の研究においても「形容詞する」はその他の動詞と同じ扱いはできない⁹⁴。そこで、本節では結果ではなく「変化の方向性」と名づけた⁹⁵。

4.2.5. 「形容詞する」のアスペクトとテンス

ここでは、アスペクトとテンスの観点から「形容詞する」文を考察する。これまで、見てきたとおり、その表す意味、対象と形容詞の関係、形容詞と動詞の関係などからアスペクトやテンスのあり方も多様であることが考えられるのである。

4.2.5.1. 様態の用法における「形容詞していた」

中北(1993)では、「過去の一時点で実現した一回的なことがら」として表現した時、結果の状態を表す場合は過去形「シタ」にすることができるが、様態の場合は過去形ではなくアスペクト表現を用いて「シテイタ」にしなければならないと述べている。次がその例である。

(32)その日に限って、花子は卵焼きを甘くした。(中北 1993 : 160) (結果の状態)

(33)その日に限って、太郎は{*おとなしくした／おとなしくしていた}。(同) (様態)
しかし、これは「過去」だけでなく、「現在」の一時点で実現した一回的なことがらにおいても同様である(33)′。さらに、(34)のように同じ様態の意味を表すものでも「シタ」が可能なものもある⁹⁶。

(33)′その日に限って、太郎は{*おとなしくする／おとなしくしている}。(様態)

(34)その日に限って、太郎はお年寄りに{親切にした／親切にしていた}。(様態)

様態を表す場合に「シテイタ」になる理由を、「様態は動作・作用そのものの行われるサ

⁹⁴ 結果構文のうち、形容詞・形容動詞が結果の副詞として働く場合に限定してとりあげた。このほか、「する」文には宮腰(2007)の「移動物志向」のタイプもあり、その意味・用法・機能の広がりを示唆している。この点については今後の課題とする。

⁹⁵ 結果構文など先行研究ではいずれも「結果」と名づけているが、「壁を白く塗る」は、テンスの意味は未来であり、「塗る」動作は「白く」という方向性と並び立つ。こう考えると一概に「結果」とするには違和感がある。「白く塗る」は動作、様態という側面もいくらか持ち、一方「白くする」は「白く」と「塗る」の関係よりも「変化」の側面がむしろ強いと思われるのである。そのため、本節では「変化の方向性」と名づけた。

⁹⁶ 本節では形容詞・形容動詞に限定しているが、「その日、花子は眠くて{うとうとした／うとうとしていた}。」のような例も様態を表すが、「た」「ていた」の両方が可能である。

マであり、動作・作用の始まりとともに生起したサマは動作・作用の終わりとともに消滅する（中北 1993 : 160）」からであると説明している。また、「A スルというコトがその時点では実現していない仮定表現などの場合は、まだそのサマも生起していないのでこの違いがあらわれない(同)」として、「太郎は腕白で仕方なかったが、花子先生に注意された時だけはいつもおとなしくした（様態）」の例をあげている。しかし、この例は「注意された時」に限って、「おとなしく」ふるまったということであり、過去のテンスは話者が現在という時間軸上の一点に立って、過去にまなざしを向けて述べる場合であり、現在時からすれば実現されたことを表している。しかも、これは実現か非実現かといえ、ば、「花子先生に注意された時」とともに実現することを表している。様態の解釈にはそこに変化の解釈の可能性を持つものもあることを述べたが、「おとなしくする」は、アスペクト形式を付加しない場合には様態よりも変化の局面が前面に出てくるのであり、「おとなしくした」は様態よりもむしろ「おとなしくなった」ということを意味している。そして一時点における実現を表しにくいようである（「* {その日／昨日／3 時頃}、太郎はおとなしくした」）。

これは、変化と様態の二義性を持つ文だけでなく、様態のみを表す文でも似たようなことが言える。「男は形見の壺を大切にした」は、「* その日、男は形見の壺を大切にした」と一時点では不可となる。また、一時点ではないということは、現在、あるいは過去という広がった時間において、主体がそのような動作・行為を行うということになり、次のように全てのテンス・アスペクトが可能となる。あるいは、主体を主題化し、それがどのような属性を持つか示すような文としてル形で現在を表す。

(7) 太郎は先生の前では {おとなしくする／おとなしくした／おとなしくしている／おとなしくしていた}。

4.2.5.2. 「形容詞している」文のアスペクト的意味

次に、テイルにおけるアスペクト的意味を確認していく。4.2.5.3.で形容詞文との関係性から改めて述べるので、ここでは簡単に記述する。

まず、「動作の継続相」を示すものとしては行為（様態）を表す用法のもの、例えば「花子は父からもらったかばんを大切にしている」「太郎はお年寄りに親切にしている」などがある。また、変化（変化の方向）を表す用法のもの、例えば「花子が粘土を小さくしている」「太郎がドアをだめにしている」などがある。後者は変化動作の継続とも言える。

次に、「変化の結果の継続相」を示すものとしては変化（変化の方向）を表す用法がこれにあたり、例えば「顔を赤くしている」「目を丸くしている」「髪を長くしている」などがある。変化の用法は、その変化の変化過程を表すテイルと変化の結果残存を表すテイルが可能である。

そして、当然、この両方の意味を表しうるものもあり、例えば「一郎が壁を白くしている」は白くしつつある動作の継続相、白くしてしまった結果状態の継続相のどちらも文脈によって示しうる。他に「花子が髪をきれいにしている」「太郎は先生の前ではおとなしくしている」などがある。変化の用法または、変化と行為を表す用法のものが見られる。変化結果の継続相を表す場合は、主題化されるほうが自然である。

以上の、三つのタイプはいずれも「形容詞している」だけが決定するのではなく、特に対象となるヲ格名詞がどのようなものとして述語と関係するかによって、そのアスペクトの意味が決定されるものである。「目を丸くしている」は変化結果の継続相を表すが、「お餅を丸くしている」は動作の継続相を表し、「後ろ髪を丸くしている」はその両方の可能性がある。

次に、アスペクト的意味しか表さないものがある。以下に例をあげる。

(35) 太郎は元気に {している／*する／*した}。

(36) 太郎は忙しく {している／*する／*した}。

(37) 太郎は恨みがましく {していた／*する／*した}。

(38) 太郎は英語を得意に {している／??する／??した}。

これらはル形・タ形が存在しない、あるいは言いにくい。意味的には形容詞文の「太郎は元気だ」「太郎は忙しい」「太郎は恨みがましかった」「太郎は英語が得意だ」と同じであり、変化や動作の開始も終了も表すことのない、ただ現在あるいは過去の時点での状態を述べている。

4.2.6. 「形容詞する」文と形容詞文との関係性

4.2.5.2.では以下のような例をあげて、「形容詞する」という動詞文が形容詞文と同じ意味を表すことを述べた。またそれは「形容詞している」と「形容詞一語」とが置き換えられる（格の交替のあるものもある）ということでもある。

(2)'子供が顔を赤くしている。→子供は顔が赤い。

(39) 彼女は髪を長くしている。→彼女は髪が長い。

(35) 太郎は元気にしている。→太郎は元気だ。

(36) 太郎は忙しくしている。→太郎は忙しい。

形容詞文も「形容詞する」文も、どちらも形容詞を述語内に持つために、当然ながら意味的な近似性があるが、「形容詞する」はその結合度の強さからも動詞一語相当として述語の役割を担っており、動詞でありながらも形容詞の性質を示しているという点が特徴的である。しかし、「形容詞する」は動詞であるために、動きを表す。そして、ル形やタ形は動きの開始の局面や終了の局面を表すために、状態を表さない。この点が動詞文である「形容詞する」文と状態を表すのを主たる機能とする「形容詞」文の違いである。

(2)"a. 子供は父に会うと顔を赤くした。→#*子供は父に会うと顔が赤かった。

b. 子供は怒ると顔を赤くする。→#*子供は怒ると顔が赤い。

「赤い」への変化を表す「赤くする」が成立した結果が継続する形で状態を示すようになる「赤くしている」が、「赤い」に通じるものなのである。また、「する」がアスペクト形式を持つことによって、その変化の過程を暗示することとなり、「赤くしている」文では単なる状態だけでなく、その発生と消滅を含んだものとして、現在の時点で「赤い」ことを示すこととなっている。(39)「髪を長くしている」と「髪が長い」との類似性も同様である。

一方、4.2.5.2.でも述べたが(35)(36)はその動作の開始と終了を含むことはなく、状態だけを差し出している。その点では形容詞文と同じであるが、一時点における状態という点では

形容詞文のほうが強く、「形容詞する」文はテイルによって継続性をいくらか示しうるといふ違いがあった。

それでは、「形容詞する」文のすべてがテイル形で形容詞文との置き換えが可能かというところ、そうではなく、形容詞文と意味が異なるものも見られる。ここでは、特に形容詞文と置き換え可能か否か、形容詞文との関係性を探っていく。

4.2.6.1. 「形容詞している」の意味と形容詞文—アスペクトの意味—

「形容詞する」のテイル形が形容詞文と関係性があることがわかった。ここでは、テイルの意味と形容詞文との関係について詳細に考察する。

4.2.6.1.1. 変化の結果の継続（変化の方向）

テイルのアスペクト的意味として、変化を表す用法の場合、その変化の結果が残存していると考えられるものがある(2)′(39)。形容詞文と比べるために例文を加える。

(40)花子はスカートを短くしている。→花子はスカートが短い。

(41)今日は大根を安くしてるよ。→今日は大根が安いよ。

(42)花子は目を丸くしている。→#花子は目が丸い。

変化が終了して、その結果が残存していることを表しているのが、形容詞文と似ている。ただし、(42)のように慣用句的な表現で、形容詞文との意味が異なっているものもある。

4.2.6.1.2. 変化の継続（変化の方向）

(43)目の前でシェフがパン生地をどんどん太くしている。→#パン生地が大きい。

(44)シェフがピザを薄くしている。→#ピザが薄い。

(1)′花子は掃除機で部屋をきれいにしている。→#部屋がきれいだ。

このように、まさに変化が進行中であることを表す場合には、進行中であることと状態であることには大きな差があるのは当然であり、形容詞文との関係性はないと言っていい。これらの例はいずれも変化しつつある様子が描写され、動作性の強い文であると考えられることができる。

4.2.5.でも述べたが、「形容詞している」は様々な文脈の中に出現して、それらの助けによって、変化結果の継続あるいは変化動作の継続を表す。そのうち、形容詞文と関係性があるのは前者であり、(40)「スカートを短くしている」も針と糸を持ってスカートの裾上げをしている最中であることを示す文ではなく、その動作の結果が残存している文が「スカートが短い」と似たものとなる。

4.2.6.1.3. 動作の継続（様態）

様態を表す「形容詞する」は、テイル形になった場合、動作が継続中であることを表す。すでに変化を表すテイルは同様に動作の継続を表し、形容詞文と関係性が無いことを見た。進行している最中の動作はその動作性の強さゆえに、形容詞文とは異なるものと考えられる。しかし、様態を表すテイル文には継続中の動作でありながら、形容詞文と言い換え可能なものが見られるのである。

(45)ちょっと子供が騒がしくしているから、電話切るね。→ちょっと子供が騒がしいから、電話切るね。

(46)ちょうど不機嫌にしているみたいだ。→ちょうど不機嫌みたいだ。

(45)は、「騒がしい」状態で「子供」がふるまっていることを表しているという点で、動作が進行中であると捉えることができる。今、まさに「騒がしく」行為している最中である。しかし、この文の実質的な意味は動詞ではなく形容詞にある。そのため、進行中の動作はそれが進行している過程であることを示しても、意味的に形容詞に依存するので結果的に形容詞文と同等の意味を示す。つまり、変化しつつあるという動作ではなく、一定の動作が続いているだけの一定の有り様を差し出すものであり、動作性は弱い。

しかし、様態を表すテイル文がすべて形容詞文と言い換え可能であるというわけではない。

(11)'あ、太郎がお年寄りに親切にしている。偉いな。→*あ、太郎がお年寄りに親切だ。

(14)'あれ見て、太郎が母親に冷たくしている。→*あれ見て、太郎が母親に冷たい。

動詞文は眼前の様子を描写している文〈状態描写〉であり、形容詞文は同じ意味を表そうとすると形容詞文を使うことができない。逆に言えば、このタイプの形容詞文は、眼前に展開されている様子を捉えて、その人物の状態を述べることはできないということになる。そして、その形容詞文が何を示すかといえば、主体の持つ属性を述べるという機能〈属性叙述〉を持っているのである（その場合、より自然なのは有題文）。このタイプと限定したのは、先述の形容詞文は眼前の、現在展開しつつある状況について述べる事が可能だったからである⁹⁷。

4.2.6.1.4. その他

〈状態描写〉ではなく〈属性叙述〉の文であって、形容詞文と言い換え可能な「形容詞する」文を見ていく⁹⁸。

(7)'太郎は先生の前ではおとなしくしている。→太郎は先生の前でおとなしい。

(9)'先生の前では太郎は静かにしている。→先生の前では太郎は静かだ。

(38)'太郎は英語を得意にしている。→太郎は英語が得意だ。

(46)'祖父はいつも不機嫌にしている。→祖父はいつも不機嫌だ。

これらのテイル文は、眼前に展開される進行中の動作ではなく、主体が持つ特徴・性質としての属性を叙述するものである。

アスペクトは、動作のある局面にあることを示す文法的カテゴリーであるが、これらは動作のどの局面にあるかということを超えている⁹⁹。副詞「いつも」がついて、主体がその

⁹⁷ 形容詞の分類では、属性形容詞にあたるもの（属性形容詞している）が状態描写できず属性叙述になるものであり、感情形容詞にあたるもの（感情形容詞している）が状態描写できると考えられる。属性叙述に関してはできるものもできないものもあるようなので、この点については別稿で考察したい。

⁹⁸ テイル形でなくても、「太郎はいつもしつこくするから嫌いだ」「太郎はいつもしつこいから嫌いだ」のように太郎の属性を述べる文が可能なル形もある。

⁹⁹ 変化の結果の継続を表す場合、「花子は爪を赤くしている」は一時的な状態であるため、状態描写である。「花子は父からもらったかばんを大切にしている。／花子は父からもらったかばんが大切だ。」「母はいつも玄関をきれいにしている。／*母はいつも玄関がきれいだ。」「太郎は机の中をいつも汚くしてい

動作を広げられた現在時制の中で継続していると解釈することも可能だが、それは形容詞文がその時制の中でその状態であることを指し示しているのと変わらない。ただ、形容詞文の場合には、「いつも」「人前では」などの時や場面の限定がなくとも構わないのに対し、「形容詞している」文ではこれらの要素がないとすわりが悪い場合もある。それは、継続相の他の意味が現れてしまう可能性があるため、あくまで〈属性叙述〉であることを補足成分であるその他の文の要素に求めたからではないかと考えられる。また、属性の場合には、誰かにについて取り上げて述べるという態度をとるために、文としては有題文の方が自然である。

(11) 太郎はいつもお年寄りに親切にしている。→太郎はお年寄りに親切だ。

(14) 太郎は母親にいつも冷たくしている。→太郎は母親に冷たい。

以上、「形容詞する」文と形容詞文との関係について見てきた。

「形容詞する」文はテイル形で形容詞文との近似性を示すことがわかった。テイル形が進行中の動作であっても、それが様態の場合には、動作性が弱い場合形容詞文と言い換えられる。また、テイル形が主題の属性を表す場合には形容詞文に近似する。したがって、「形容詞する」文は、その動作性が弱まる時に形容詞文と同じ特徴を示し、動詞でありながらも、その意味の希薄性によって形容詞のような特徴を帯びることが可能になっていると考えられるのである。これもまた、「する」の持つ多様な機能の一つとして捉えられるものである。

4.2.6.2. 「形容詞する」の意味と形容詞文—テンスの意味—

「形容詞する」のル形とタ形のテンスの意味を確認したい。形容詞文と関係性が見られるのはテイル形であることがわかったが、ル形とタ形は形容詞文との関係性が見られないだろうか。

【変化の用法】

(48)a. 花子は髪を短くする。→#花子は髪が短い。

b. 花子は髪を短くした。→#花子は髪が短かった。

変化の用法の場合には、ル形は未来を表す。形容詞文は「明日」という修飾語句によって支えられたとしても「*明日花子は髪が短い」で、そのままでは未来を示すことができない。

【様態の用法】

(11) a. 太郎はお年寄りに親切にする。→太郎はお年寄りに親切だ。

b. 太郎はお年寄りに親切にした。→太郎はお年寄りに親切だった。

様態の用法の場合には、ル形は現在を表し、通常有題文で属性を表す。形容詞文は、終止形で現在を表し、やはり有題文で属性を表す点で類似している。また、タ形は過去の行為を表し、形容詞文は行為ではなく状態を示すが、どうだったかを表すという様態の面では類似していると考えられる。それは有題文で属性を表し、示すテンスの意味が未来ではなく現在である点に共通点が見られるからであろう。

4.2.6.3. 形容詞文との近似性—人称制限、程度副詞修飾、比較表現—

る。／太郎は机の中がいつも汚い。」主体と対象の関係が所有関係にある場合は、形容詞文との言い換えが可能である。しかし、これらが主体の属性を叙述しているかという点では断定しきれない。

ここでは、さらに形容詞との近似性を見るために、これまでも用いた人称制限と程度副詞による修飾、比較表現について簡単に確認する。4.1.では「形容詞する」文として「部屋をきれいにする」「顔を赤くする」の二例だけを取り上げ、いずれも変化を表すことを述べた。新たに動作を表すものも加え検証することとする。なお、ル形は変化や動作の開始の局面を描くため動作性が強く、形容詞の状態性と相容れない。そのため、テイル形によって形容詞との近似性を構文的に確認していく。

4.2.6.3.1. 人称制限

人称制限は感情・感覚を表す形容詞文に特徴的であることが知られている。「形容詞する」文においては、まず、感情や感覚を表す「形容詞する」があるかどうかということが焦点になる。これまで見たとおり、「形容詞する」には変化と動作の二つの用法があり、いずれも感情や感覚をそのまま表出する機能とは異なる。例えば、以下の例のように感情形容詞の「嬉しい」「悲しい」「痛い」は「する」と結合しない¹⁰⁰。

(49)*娘のことばが母親を嬉しくした。

(50)*冷たい態度が周囲の人を悲しくしている。

(51)*注射が腕を痛くする。

このように結合すること自体も難しく、感情の動きの様態というのはそもそもありえない。また、感情の変化は「なる」を用いて「する」を用いない（嬉しくなる、悲しくなる等）。「させる」の使役形を用いても以下の通り難しい。

(49)*娘のことばが母親を嬉しくさせた。(喜ばせている)

(50)*冷たい態度が周囲の人を悲しくさせている。(悲しませている)

動詞「喜ぶ」「悲しむ」の使役形の方が使われるうえに、これらは感情をまったく表出していない。したがって、感情を表すような「形容詞する」はないと考えられる。

4.2.6.3.2. 程度副詞による修飾

形容詞は程度副詞による修飾が可能で、量副詞による修飾が不可能である（西尾 1972）との特徴から検証する。程度副詞には「非常に」を、量副詞には「たくさん」を用いる。「形容詞する」をその結合の強さと文法的特徴から一つの動詞的振る舞いをとるもの、つまり一語と考え、程度副詞による修飾の可能性を捉える。

(1)部屋を{非常に／*たくさん} きれいにしている。

(2)顔を{非常に／*たくさん} 赤くしている。

(3)豆を{非常に／*たくさん} 甘くした。

(7)太郎は{非常に／*たくさん} おとなしくしている。

(11)太郎がお年寄りに{非常に／*たくさん} 親切にしている。

(39)彼女は髪を{非常に／*たくさん} 長くしている。

¹⁰⁰ 感覚を表す形容詞として「痛い」「きつい」「冷たい」「熱い」などがあり、これらは「する」と結合できる場合がある。「痛くしないよ」「きつくしたらどう?」「冷たくするな」など。しかし、知覚そのものを表出することはないので、感情形容詞のような人称制限はないと考えられる。

(45) 子供が {非常に／＊たくさん} 騒がしくしている。

変化の用法、様態の用法いずれも程度副詞のみ修飾が可能であり、量副詞の修飾は不可であった。これは、副詞の修飾が「形容詞する」の実質的な意味を担う形容詞自体に主としてかかっていくためでもあり、「する」の持つ特徴によるものである。

4.2.6.3.3. 比較表現

形容詞は比較表現を作ることが可能である。副詞「もっと」による修飾を試みる。

(1) ”部屋を太郎の部屋よりもっときれいにしている。

(2) ”顔をりんごよりもっと赤くしている。

(3) ”豆を砂糖菓子よりもっと甘くした。

(7) ”太郎は花子よりもっとおとなしくしている。

(11) ”太郎はお年寄りに若い人よりもっと親切にしている。

(39) ”彼女は髪をかぐや姫よりもっと長くしている。

(45) ”子供が昨日よりもっと騒がしくしている。

このように、比較表現を作ることができ変化であれ様態であれ、形容詞との近似性が見られた。

4.2.7. まとめ

以上、形容詞と「する」が結合して一つの動詞のように振舞う「形容詞する」について、その構造と意味を中心に考察し、文法的に多機能であることを明らかにしてきた。

その用法が、変化または様態、そしてその両方を示すものの、三つに分けられること、さらに、共起する要素として主体と対象の関係性から間接対象と直接対象の存在とそれらの明示・非明示についてまとめた(表1)。また、「～を形容詞する」が語結合のあり方によって二義性を示すこと(表2)、そして、テンス・アスペクトの意味、結果構文との関わりについても「形容詞する」の特異性が確認された。最後に、形容詞文との関係では、テイル形の示す動作性の弱体化や属性叙述の特徴、ル形が未来ではなく現在を表す点が、形容詞文と似ていることがわかった。このように意味・用法の点でも、形容詞文との近似性の点でも、その多機能性の広がりを見ることができた。

本節では、特に「する」が形容詞という品詞、あるいは形容詞が持つ文法的特徴や意味といった領域にまで、その広がりを見ることが明らかにされた。

第3節「擬音語・擬態語する」文の構造と意味

本節では擬音語・擬態語と「する」の語結合を取り上げ、これらの語結合を述語とする文の構造と意味を明らかにする。また、「だ」と「やる」が擬音語・擬態語に結びついた類義表現と比較しながら、「する」の持つ特徴を考察する。さらに、テンス・アスペクトなどの統語的側面についても見ていくこととする。

4.3.1. 先行研究

擬音語・擬態語（オノマトペ）は表現をより臨場感のあるものに変え、微妙な感覚や様相といったものを描き出すことを可能にする語彙であり、日本語には多種多様なものが存在する。こういった擬音語・擬態語に「する」が後接した表現が、様々な様態を表わすことが古くから指摘されている。

擬音語・擬態語と「する」の結合を「動詞的な形式（西尾寅弥 1981）」『擬音語・擬態語＋する』動詞（鷺見幸美 1996）」と動詞であると捉える見方と、「形式動詞『する』（中北美千子 1991）」と「擬音語・擬態語」と「する」を区切って別々に捉える見方がある。前者の研究では、「擬音語・擬態語する」の文法的働きや動詞分類がテーマとなっている。

西尾（1981）では、「擬音語・擬態語＋する」が「状態詞」として働くものが多いこと、さらに他動詞や意志動詞が少なく複雑な格構造を持たないことを、用例を引きながらまとめている。しかし「以上、資料も考察もまことに不十分な報告であるが（西尾 1981: 226）」とあるように考察の余地が多く残されている。また、鷺見（1996）は西尾（1981）の問題点を明らかにし、「擬音語・擬態語＋する」動詞をテンス・アスペクトの違いによって、10のグループに分けた。この新たな動詞分類は参考になるものの、その分類が結果的に詳細に過ぎてしまい、逆に全体的傾向性などの点が見えにくくなっているとの指摘が否めない。

一方、後者の「擬態語」と「する」は別々の要素であるという捉え方の研究では、「擬態語＋だ」や「擬態語＋なる」といった表現との比較が中心的なテーマとなっている。中北（1991）¹⁰¹は「擬態語する」「擬態語だ」の両方が言えるものと、「擬態語する」は言えても「擬態語だ」が言えないものを分類し、その要因を探っている。他に楊淑雲（1993）は「擬態語＋なる」との比較を行ったものである。

先行研究では、意味用法の分類や動詞分類、あるいは意味的に関連のある表現との比較などが研究されてきたが、そもそもなぜそのような多様な動詞分類が可能なのか、なぜ意味・用法が多岐にわたるのかについての説明は十分ではない。本節では、当該の表現が「する」の機能性の広がりの中の1つであるとの視点から、詳細に考察しなおすものとする。

4.3.2. 「擬音語・擬態語する」は1つの動詞

まず、擬音語・擬態語と「する」の結合は一つの動詞と見るべきか、あくまでも二語として副詞と動詞と見るべきかについて考える。「擬音語・擬態語する」は、「擬音語・擬態語」

¹⁰¹ 中北（1991）では擬音語に「する」はつかないと考えているため、擬態語しか扱っていない。楊（1993）も同様である。

と「する」のように構成上分離することができるので、複合的な語構成である。しかし、分離可能といえどもそれは語構成においてそのような分析が可能であるということであり、実際に文中に現れる「擬音語・擬態語する」を分離することは以下の通り難しい¹⁰²。

(1) 太郎がイライラする。＊イライラ太郎がする。

(2) 猫が柱をカリカリする。＊猫がカリカリ柱をする。

一方で、漢語や外来語に「する」がついたサ変動詞はさらに分離が難しく、完全なる一語である和語の動詞は言うまでもなく分離不可能である。

(3) 花子が部屋を掃除する。＊花子が掃除部屋をする。

(4) 太郎が話す。＊話太郎がす。

以上のように、単純語と合成語という対立で見ると、単純語にあたる和語の動詞は分離不可能であり、合成語の複合語にあたるサ変動詞は、構成上は分離を考えることができるが構文的には不可能である。一方、「擬音語・擬態語する」は分離不可能ではないがサ変動詞同様かなり難しい。この点で、「擬音語・擬態語する」はサ変動詞と同じように複合語ではあるが、サ変動詞ほど強い結合ではない。漢語や外来語に「する」が後接するものをサ変動詞と呼ぶのに対し、擬音語・擬態語に「する」が後接するものがサ変動詞であるとの認識の薄さ¹⁰³はこのような結合の違いもその理由の一つである。以上、統語関係から「擬音語・擬態語する」は一つの動詞であると考えることができる。

4.3.3. 「擬態語する」の意味

4.3.3.1. 擬態語と「する」の意味的な関係

「擬態語する」¹⁰⁴動詞における、擬態語と「する」の意味的な関係性を見る。まず、中北(1991)では「擬態語する」の意味を以下の例を挙げて説明する¹⁰⁵。

(5) a. 花子はふいの来客にあたふたしてしまった。(中北 1991 例)

b. 散らかっている物をあたふたと片付ける。

c. あたふたとおしぼりを用意する。

d. あたふたとお茶を入れる。

(5) a は、b～d のような「いろいろな動作を行うサマをまとめて『あたふたする』と表現している(中北 1991 : 250)」「一つの動作・一回の動作を超えて、それらを全体的にサマとしてとらえている(同 : 251)」と述べている。

しかし、(5) a 「あたふたする」文が表す様子と、具体的な動作が示されている b～d 「あたふたと片付ける、用意する、お茶を入れる」文が表す様子とが同じであり、「それらの動

¹⁰² 擬音語・擬態語には点線を、「する」(活用形も含め)には実線を付す。

¹⁰³ 『現代擬音語擬態語用法辞典』の「擬音語・擬態語と品詞との関係」で「その用いられ方によって、名詞・副詞・感動詞など異なる品詞名で呼ばれることになる。(x)」と書いてあるように「動詞」との記述はない。また『新明解国語辞典第六版』の「サ行変格活用 p1636」の表の例に代表されているのは「する」「愛する」「参ずる」「対決する」であり「擬態語・擬音語＋する」の例は見られない。

¹⁰⁴ 「擬音語する」が少なく、また先行研究で取り上げられているのが「擬態語」であることを踏まえ、これ以降の考察ではひとまず擬態語を中心に見ていく。

¹⁰⁵ 下線は筆者付す。

作を超えて全体的にサマとしてとらえている」とは考えにくい。「あたふたする」が実際にどのような具体的動作であるかは示されていないが、示されていないからといって、それが具体的動作をまとめて表現できるとするのは、正しくないように思う。「あたふたする」は、具体性がないこと自体にその独特の意味合いがあると考えられるのである。この文を見ただけでは、その具体的な動作が想起されることはなく、慌てている様子が感じられるだけである。したがって、「あたふたする」ことが「あたふたと片付ける」こととは解釈されにくい。解釈のレベルでは具体的な動作とは無関係である。表現のレベルでも、特に具体的な動作をまとめたというよりも、「あたふた」という心理的側面を前面に押し出した表現だと考えられる。次の例も同様である。

(6) a. 太郎がぼんやりしている。(中北 1991 例)

b. ぼんやり考えごとをしている。

c. ぼんやり空をみつめている。

d. ぼんやり爪をいじっている。

「細かく言えば何かしてはいるのだが、その時の太郎のサマをまとめて『ぼんやり』と表現できる(中北 1991: 251)」とあるが、「ぼんやり爪をいじっている」とことと、「ぼんやりしている」ことは異なる。確かに「ぼんやり爪をいじっている」ことを「ぼんやりしている」と表現することはできるとしても、「ぼんやりしている」という表現形式を選択した意図は別にあると考えられるのである。むしろ、何かしら具体的な何もしないでいる様子、あるいはその心理的状態を積極的に描き出している。

ここには、擬態語と「する」の特殊な意味的關係性が働いている。一般的な実質的意味を持つ動詞の場合、擬態語はその動詞の表す具体的な動作の「様態」を示す。ところが、「する」はその具体的な語彙的意味が希薄であるという特殊性から、擬態語は希薄な動作の意味を補うものとして働く。そのために、「する」は主として述語としての文法的な機能を果たすに留まる¹⁰⁶。したがって、「あたふたする」は「あたふた」に実質的意味があり、表現の中心はそこにあると考えることができる。

しかし、表現の中心たるものが名詞ではなく、擬態語(副詞)であるために、例えば「サインをする」とは異なり、表現も解釈も多様性を生みやすい。「サインをする」は動作の具体的内容がサイン(名前を書くこと)であり、表現のレベルでも解釈のレベルでも明確である。しかし、「あたふたする」は動作の具体的な内容がこの語結合には示されず、ただその何らかの行為の有様が「あたふた」であることを示す。そのため解釈のレベルではあいまいさを持ち、表現のレベルでは動作よりも状態の描出に傾いている。結果的にはもはや動作や行為ではなく、落ち着かない状態であることを示す特別な語結合となっているのである。

したがって、「擬態語する」の動作・行為は、具体的な何らかの動作と直接的に結び付けられるものではなく、擬態語が指し示す様子を伴った動作、あるいは状態であると考えられるのである。

改めて例を挙げると、(6) a 「ぼんやりしている」は、もはや動作ではなく主体の不明瞭

¹⁰⁶ 中北(1991)も「文法的な動詞性のみを持った形式動詞『する』」であると述べている。

な漠然とした状態を表すもので、考え事なのかどうかも明確ではなく、まして「爪をいじる」といった具体的な動きを意味していない。(15) a「あたふたする」も主体の動揺した状態を示しているだけである。その意味においては、「擬態語する」は実質語の動詞を修飾する「擬態語＋動詞」とは、文法的機能だけでなく、その意味するところも異なる。「する」が、語彙的意味が乏しいからと言って、通常の動詞を修飾する場合の具体的な動作すべてをまとめるということはない。むしろ、「擬態語する」はすでに動詞一語として、独自の意味範疇を持つと考えていいだろう。

さらに、以下の例を見てみたい。

(7) ハンドバック、口がぱくぱくしてるわよ。(辞典¹⁰⁷: 383)

(8) 金魚が酸欠らしく口をぱくぱくしている。(辞典例を一部変更)

(9) ?子供がおにぎりをぱくぱくしている。

例えば「ぱくぱく食べる」は食べる様態を擬態語が表しているが、「ぱくぱくする」は(7)(8)のように開いたり閉じたりしている様子を表すだけで、(9)のように食べる様子を表すことはない。また、「ぱくぱく{食べる、口を開く}」をまとめて「ぱくぱくする」とは表現できないのである。「ぱくぱくする」は、この語結合で特別な意味を持つ表現として定着している。

4.3.3.2. 類義の動詞との関係性

「擬態語する」と類義の動詞との比較を行う。まず、「笑う」動作に関わる「擬態語する」について見てみる。

(10) 宝くじが当たって、太郎は一人でにんまりしていた。

(11) 男が若い女性を見てニヤニヤした。

(12) 畚にかかった鳥を見ながらニヤリとする。

(13) 子供がニコニコしている。

(14) 正直に打ち明けたら、母はにっこりしてうなづいた。

「笑う」動作には様々な笑い方があり、冷笑、微笑、失笑、爆笑、苦笑、含み笑いなど、様々な感情や様子を示すことがある。どのように笑うかを示すものに擬態語「にんまり、にまにま、にっこり、にたにた、にやにや、にこにこ、にやりと・・・」がある。しかも、これらは「笑う」動作の様態を表すことが決まっているために、ここに実質的な意味の希薄な動詞である「する」を結合させても、その擬態語の意味がそのまま動詞の実質的な意味となって反映され、様々な「笑う」という動作を示すことになる。「にこにこする、にんまりする、にっこりする、にたにたする、にやにやする、にやりとする」はすべて「笑う」という動作を表わす。

この点は、先に述べた「擬態語する」とは異なる。先に述べたのは、「擬態語する」が具体的な動作あるいは様々な実質動詞をまとめたものではないということであり、ここで述べるのは、「擬態語する」が限定的な動作あるいは一つの実質動詞の意味を示すことがある

¹⁰⁷ 辞典は『現代擬音語擬態語用法辞典』を指す。以下同様。

ということである。特に、類義の実質動詞が存在する「擬態語する」は、その類義語の表す動作の様態を示すことでその意味を限定的に表現しわけることができる。つまり、「にこにこする」は「笑う」ことを表わすと同時に、様々な「笑う」のうちの一つ「にこにこ」に限定している。

他の例では、「あたふた、おたおた、おろおろ、ばたばた、わさわさ・・・する」は、いずれも「慌てる」という動作の様々な様子を表現している。「慌てる」という一語にくくられてしまう動作も様々な慌てる様子があり、それはそれぞれの擬態語が示すような様態をとることができる。「慌てる」という動詞の意味の幅を擬態語が限定的に表現している。しかも、「擬態語する」の一つ一つは、意味するものが異なり、用法の上でも重複する部分と個別の部分を持っている。

(15) 父が倒れて {おろおろ／*あたふた} した。

(16) 好きな人の前では {そわそわ／*ばたばた} してしまう。

(17) {まごまご／*うろうろ} していたら、バスが行ってしまった。

このように、「慌てる」ことを広く意味していながらも、驚いて慌てる様子、うろたえるほど慌てる様子、予想外で慌てている様子、実際に激しく動き回って慌てる様子、気持ちだけが慌てる様子など、「慌てる」の中心的な意味合いから周辺的な意味合い（例えば『落ち着かない』）まで広がっているのである。「擬態語する」は、類義語の動詞が表わす意味の広がりをも的確に表現仕分けることを可能にしている。

「怒る」も同様で、その怒りの様子を巧みに描き出している。

(18) 今朝、部長は {ぷりぷり¹⁰⁸、ぶんぶん、むかつと} していた。

(19) 唇が {わなわな、ぷるぷる} する。

(20) 頭がカッカする。

感情を経験する主体が主語になるもの(18)と、具体的な主体の身体部位や感覚が主語になるもの(19)(20)とがある。

「泣く」ことを示す「擬態語する」も多様である。

(21) 叱られて、子供がめそめそしていた。

(22) 友人の話を聞いて、ほろりとした。

(23) 感動的で、うるうるしてしまった。

泣き方がそれぞれ異なっており、またそこに見られる感情も異なる。「めそめそする」が悲しくて泣く様子をもつぱら示すのに対し、「ほろりとする」はもらい泣きや感動など心がほだされて泣くことを表す。また「うるうるする」は「泣く」の涙が落ちる寸前、涙が目に溜まっている様子を表している。

また、「うつらうつら、うとうとする」は「まどろむ」様子を示し、「眠る」行為の初期段階にあることを示すものである。その他、感覚を表す動詞「しびれる」と類義の関係にある「びりびり、じんじん、じんとする」などがある。

以下に「擬態語する」で動詞一語の動作を示すことが決まっているものをまとめておく。

¹⁰⁸ ただし、「ぷりぷりする」は「怒る」様子だけでなく、「このエビはぷりぷりしている」のように別の意味を表すことがある。このように「擬態語する」は様々な様態や動作を示すことができる。

(笑う) にんまり、にまにま、にっこり、にたにた、にやにや、にこにこ、にやりと…
 する

(慌てる) あたふた、おたおた、おろおろ、ばたばた、わさわさ…する

(怒る) ぷりぷり、ぶんぶん、むかっと、わなわな、ぶるぶる、かつか、つんけん…する

(泣く) めそめそ、ほろりとする

(眠る) うつらうつら、うとうと、こっくりこっくり…する

(痛む) きりきり、ずきずき、ひりひり、じんじん、がんがん、ちくちく、ちくりと、
 しくしく、きーん、ずっきんずっきん…する

(驚く) びくっと、ぎくっと、ぎょっと、びくびくっと、どきっと…する

(騒ぐ) ドタバタ、バタバタ、ガチャガチャ…する

(怠ける) ぐうたら、のらくら、ぶらぶら、のんびんだらりと、ごろごろ、ぼけっと、
 ぼけっと…する

(滑る) ぬめぬめ、ぬらぬら、ぬるぬる、ぬめっと、にゆるにゆる、つるつる、つるつ
 と…する

(粘つく) ねちねち、ねとねと、ねちゃねちゃ、ねばねば、ねっちり、ぬたぬた、ねっ
 とり、にちゃにちゃ、ぬらぬら、ぺたぺた、ぺたっと、べちゃっと、べっとり、
 べとべと…する

(太る) ぶよぶよ、ぶくぶく、ぷよぷよ、でぶでぶ、ふっくら、ぷっくり、ぽちゃぽち
 ゃ、ぽっちゃり、ぽってり、むちむち…する

4.3.4. 「擬態語する」と「擬態語だ」

4.3.4.1. 「擬態語だ」の活用形

次の例に見るように、「擬態語する」は「擬態語だ」と置き換え可能なものがある。

(23) 新しい布団は {ふかふかしている／ふかふかだ}。

(24) 着古してしまって、ズボンが {テカテカしている／テカテカだ}。

中北(1991)では『だ』を伴っていわゆる形容動詞として(p248)「働くとの指摘がある。しかし、「擬態語だ」で述語になるものは多いが、「擬態語な」で名詞を修飾するものは少ない。その場合、代わりに連体助詞「の」を伴う。

(23) ' ?ふかふかな布団 ふかふかの布団

(24) ' ?テカテカなズボン テカテカのズボン

したがって、「擬態語だ」は活用形を持たないため形容動詞であるとまでは言えない。ただし、「～の」型の形容詞的用法を持つものと捉えられる¹⁰⁹。

4.3.4.2. 置き換え可能性とその要因

「擬態語する」は、「擬態語だ」に置き換え可能なものと置き換え不可能なものがある。

¹⁰⁹ 村木新次郎(2000,2002)では、「真紅の」などの「～の」で名詞を修飾するものを「第三形容詞」と呼ぶ。当該の「擬態語だ」もこれに該当すると思われる。

その置き換え可能性を決定する要因は何か。ここでは「擬態語だ」との違いを探ることで、「擬態語する」の特徴を探っていきたい。

中北（同）では、「擬態語だ」と置き換え可能なものは「モノのサマ」を表し、置き換え不可能なものは「コトのサマ」を表すと説明している。しかし、次のように「コトのサマ」を表わすが「擬態語だ」と置き換え可能なものも見られる。

(25) 太郎は毎日 {ぐだぐだしている／ぐだぐだだ}。

(26) 奥歯が {グラグラしている／グラグラだ}。

一方で、「モノのサマ」を表していても「擬態語だ」と置き換え不可能なものも見られた。

(27) 岩の表面が {ゴツゴツしている／？ゴツゴツだ}。

(28) 次郎は服装がダサくて、いつも {もっさりしている／*もっさりだ}。

さらに、以下のように感情や感覚を表すもので、広く捉えれば「モノのサマ」に入るが、置き換え不可能なものもある。

(29) ああ、{イライラする／*イライラだ}。

(30) 頭が {ガンガンする／*ガンガンだ}。

そこで、両者の違いを明確にするために意味的に分析する曖昧さを排除し、構文的な特徴を確かめる必要がある。以下は、擬態語が「の」を介して名詞修飾構造をとるか否かをテストしたものである。後ろに、「する」と「だ」と接続するかを○＝接続する、×＝接続しない、で示した。

(13) ' ふかふかの新しい布団：{○する／○だ}

(25) ' ぐだぐだの太郎：{○する／○だ}

(26) ' グラグラの奥歯：{○する／○だ}

(27) ' ? ゴツゴツの表面：{○する／？だ}

(28) ' * もっさりの服装：{○する／×だ}

(29) ' * イライラの私：{○する／×だ}

(31) ' * あたふたの太郎：{○する／×だ}

(30) ' * ガンガンの頭：{○する／×だ}

擬態語が「の」を介して名詞修飾構造をとることができる場合は「擬態語だ」が可能であり、擬態語が名詞修飾構造をとることができない場合は「擬態語だ」が不可能である。名詞修飾構造をとるということは、名詞に特徴を付与するということであり、形容動詞や形容詞としての文法的働きと合致する。しかし、名詞を修飾できないということは、その擬態語は性質を述べたものではなく、動作の様態を示すために使われたということを示していると考えることができる。そして、その根本的な要因は「する」と「だ」の違いに見ることができよう。「する」は動作であり、「だ」は状態を示す。そのために、「する」と結びつく擬態語は基本的に動作の側面を、「だ」と結びつく擬態語は基本的に性質・状態の側面を、示すと考えられるのである。

以上を整理して、それぞれの表現の擬態語の意味する点を明らかにすると、ひとまず以下の通りになる。

「擬態語だ」：モノのサマ

「擬態語する」：コトのサマ、モノのサマ

4.3.4.3. 「擬態語する」の特徴

「擬態語する」の特徴を以下四点にまとめる。

まず、「擬態語だ」は主語に立つモノの状態を表す表現である。一方、「擬態語する」は出来事や行為の様態を表わすことを基本にする。したがって、様態を表す「家でゴロゴロする」は「*家でゴロゴロだ」とは言い換えられない。これが一点目の特徴である。

【様態】

- (13) 子供が {ニコニコしている／*ニコニコだ}。
- (32) 家で {ゴロゴロする／*ゴロゴロだ}。
- (33) アサリの味噌汁を飲んだら {ジャリッとした／*ジャリッとだ}。

次に、コトのサマを表す「擬態語する」が、モノのサマを表す「擬態語だ」に置き換えられる例がある。例えば、「奥歯がグラグラしている／グラグラだ」である。前者は、奥歯がグラグラと揺れることを表わしている点でコトのサマ、つまり動作の様態を示している。しかし、それは同時に、テイル形にも示されるが「奥歯」の現在の状態を表している点で、モノのサマを示しているという解釈が同時に成立する。したがって、「グラグラだ」への置き換えが可能となると考えられる。これが二点目の特徴である。

【様態→状態】

- (25) 太郎は毎日 {ぐだぐだしている／ぐだぐだだ}。
- (26) 奥歯が {グラグラしている／グラグラだ}。

そして、「擬態語する」は様態を表すのを基本にしながらも、モノの特徴や状態を表す場合もある。例えば、「布団がふかふかしている／ふかふかだ」である。これもテイル形であるため、「布団をふかふかさせた」結果「ふかふかしている」ことを表す場合もあるうし、そのような「する」のアスペクトが含まれうるという点で全くの単なる状態（モノのサマ）ではないかもしれないが、「擬態語だ」との意味的な違いはほとんどない。ただし、「岩の表面がゴツゴツしている」は「*岩の表面がゴツゴツだ」とは言い換えにくいので、すべてがこの通りではない¹¹⁰。これが三点目の特徴である。

【状態】

- (23) 布団が {ふかふかしている／ふかふかだ}。
- (34) 赤ちゃんの肌が {すべすべしている／すべすべだ}。

四点目の特徴と関連して、「モノのサマ」か、「コトのサマ」かという二分法に適合しない意味が残されていることを指摘しなければならない。それは、「イライラする」「頭がガンガ

¹¹⁰ 本節では「擬態語する」を中心に考察するために、「擬態語だ」との徹底的な比較は別稿に譲ることにしたい。なお、「雑巾がボロボロだ」が「*雑巾がボロボロしている」に置き換え不可能なように、「擬態語する」がモノのサマを表し得るとしてもその基本はコトのサマであると考えていいだろう。

ンする」「わくわくする」のような、話者自身の感情や感覚を表わす表現である。例えば、「頭がガンガンする」は「頭」というモノの様子（サマ）を表したのが「ガンガン」なのではなく、話者である「私」が自分の感覚を「ガンガン」痛むものとして表出したものである。この点は、山岡政紀（2000）に〈感情表出〉を表すものとして多くの「擬態語する」が取り上げられている。同様に「わくわくする」はコトのサマでもなく、単純なモノのサマでもない。話者の感情を表出したものである。感情表出としての文は、何のサマかという二分法では表現しきれないものがある。感情・感覚を表わすという特徴が四点目の特徴である。「擬態語だ」との置き換えが不可能なものが多い¹¹¹。

【感情・感覚】

(29) ああ {イライラする／*イライラだ}。

(30) 頭が {ガンガンする／*ガンガンだ}。

(35) すごく {わくわくする／*わくわくだ}。

以上、「擬態語する」と「擬態語だ」を比較してきた。その結果明らかになった特徴を表にまとめておく。「擬態語だ」と「擬態語する」の意味するサマの違い、さらに何のサマかという観点からは明らかにできない「擬態語する」独特の感情用法があることを述べた。

表3 「擬態語する」の意味・用法と「擬態語だ」との置き換え

| 擬態語する | 擬態語だ | 例 |
|------------------------|-------|------------------------|
| 1. コトのサマ（様態） | ×「～だ」 | 家で {ゴロゴロする／*ゴロゴロだ}。 |
| 2. コトのサマ（様態）→モノのサマ（状態） | ○「～だ」 | 奥歯が {グラグラする／グラグラだ}。 |
| 3. モノのサマ（状態） | ○「～だ」 | 布団が {ふかふかしている／ふかふかだ}。 |
| | ×「～だ」 | 服装が {もっさりしている／*もっさりだ}。 |
| 4. 感情・感覚（様態・状態） | ×「～だ」 | {イライラする／*イライラだ}。 |

4.3.4.4. 感情・感覚を表す「擬態語する」と状態を表す「擬態語だ」

ここでは、先に指摘した感情・感覚を表す「擬態語する」について、改めて「擬態語だ」と比較し、「擬態語する」の持つ表現の多様性を明らかにする。

さて、「擬態語だ」と置き換え可能な「擬態語する」は、ル形ではなくテイル形がほとんどである¹¹²。

(36) a. 家の前の道は {でこぼこしている／でこぼこだ}。

b. *家の前の道はでこぼこする。

しかし、条件節を加え動作の変化を表す場合には以下の通り可となる。

b. →凍ると、家の前の道はでこぼこする。

¹¹¹ 置き換え可能なものもわずかだが見られる。例えば「あいつにはがっかりした／がっかりだ」「夜の散歩なんてドキドキする／ドキドキだ」など。

¹¹² 中北（1991）に挙げられている例も全て（例 22～26）「している」である。

その一方で、以下のように変化を表さなくともル形が可能なものもある。

(26) a. 奥歯がグラグラする。(中北 1991 例)

b. 奥歯が {グラグラしている / グラグラだ}。

中北 (1991) は、『ぐらぐらだ』が単に奥歯のサマを表すのに対し、『ぐらぐらする』は自分の感覚として『ぐらぐら』を感じとっている (中略)『ぐらぐらしている』はどちらにも解釈できる」と述べている。

動詞のル形は未来を表し、テイル形は動作の継続を表すのが通常であるが、山岡 (2000) にあるとおり、「擬態語する」の中にはル形で「現在の知覚」を表すものがある。したがって、(26) a「グラグラする」は現在の知覚を表出し、第 1 人称経験者が経験したものをそのまま言語化した表現と考えることができる。また、テイル形はル形と比較すると、動作のある局面を描くというアスペクトの働きにより、ある継続状態が描かれることになる。その結果、「擬態語だ」と同じように状態を描写するようになる。

さらに、感情・感覚を表わすものには、それを経験する主体である経験者を顕在化できるものとできないものがある。

(26) ' 私は奥歯がグラグラするんです。

(37) *私は床がつるつるするんです。

西尾 (1972) や山岡 (同) で属性形容詞と言われるように、(37) は外的対象である「床」に対する内的な知覚が表現されてはいるが、経験者格を言語化できないという点で、「床」という物体に対する属性を表していると考えられるものである。

さらに、感覚を表出した文は、知覚の主体だけでなく知覚の対象もまた話者自身でなければ不自然になる。例えば、「奥歯がグラグラする」は知覚の主体が「私」であり、知覚の対象は「(私の) 奥歯」である。主体も対象も話者自身であるが、「床がつるつるする」は異なっている。知覚の対象は、具体的には話者自身の身体部位 ((26) 奥歯) あるいは内的部位 (心、気持ちなど) である。

次の例を見たい。

(38) a. 校長先生の頭、つるつるする。(中北 (同) の例を一部変えた¹¹³)

b. 校長先生の頭は、見たところ、{*つるつるする。 / つるつるしている}。

実際に頭に触りながら述べる文であるならば、直接的な感覚を伴った状態描写でル形が可能である ((38) a) が、見ただけという間接的な観察ではル形は不可であり、テイル形にして客観的な状態描写にする必要がある ((38) b)。しかし、先に述べたとおり条件節を加え「擬態語する」が変化を表すようになれば、文全体の機能も大きく変化するためこの限りではない ((38) c)。

(38) c. 校長先生の頭に油を塗ったら、きつとつるつるする。

このように「擬態語する」文には、主体、対象によって、文として何を述べるかに大きな違いがあり、それは単に何のサマを表わすかといった点を越えた機能的側面として捉える

¹¹³ 中北 (1991) の例では「は」が入っており「?校長先生の頭はつるつるする」となっているが、「は」は提題の機能を持つために感覚を表出するという働きとぶつかることになる。そのため、「は」をはずし、「が」あるいは無助詞で表現するのが自然である。

ことが可能である。

4.3.5. 「擬態語する」と「擬態語やる」

「する」と同様に実質的意味が薄い動詞に「やる」がある。「やる」もまた擬態語との結合が可能であるが、そのあり様は「する」とは異なっている。

(39) 弟はカバンの中をいつまでもごそごそやっていた。

(40) 縫い針で指をちくりとやってしまった。

(41) 男は犬に足をガブリとやられた。

(42) 耳かきを耳に突っ込んでごぞつとやると、ぼろっと耳あかが取れる。(辞書 p137)

(43) 娘が習い始めたバイオリンをぎこぎこやるのがたまらない。(辞書 p78)

いずれも動作を表し、擬態語はその様態を表わす。擬態語がモノのサマを表わすことはない。そのために、「ジーンズは初めはごそごそ{して／*やって}着心地がよくない(辞書 p139)」は状態を表す意味のために、「やる」は非文となる。また、感情を表わす「頭がガンガンする／*やる」も同様である。

逆に「する」が使えない例は、「やる」独自の持つ意味である「攻撃・傷害」といったものの場合である((40) (41))。したがって、これは「やる」の動作性の強さが「する」との違いを明確に分けていると考えることができる。

さらに、以下のように擬音語と「やる」は共起することが容易く、擬音語との結合がないと言われる「する」とは異なる。

(44) 女房は妊娠 3 ヶ月で毎朝げーげーやっている。(辞書 p127)

(45) ホースを持ってジャージャーやっていると、男が門から顔を覗かせた。

「やる」は語としての独立性や動作性が「する」より強い。「擬態語だ」と比較すると、「擬態語やる」は「擬態語だ」と言い換え可能なものは、以下の通り見られない。

(39) ' *弟はカバンの中をいつまでもごそごそだった。

(40) ' *縫い針で指をちくりとだった。

(41) ' *男は犬に足をガブリとだった。

(42) ' *耳かきを耳に突っ込んでごぞつとだと、

(43) ' *娘が習い始めたバイオリンをぎこぎこなのがたまらない。

以上を、サマの違いでまとめると以下のようになる。

「擬態語だ」：モノのサマ

「擬態語する」：コトのサマ、モノのサマ

「擬態語やる」：コトのサマ

4.3.6. 「擬態語する」のテンスとアスペクト

次に、動詞の多機能性をそのテンス・アスペクトの分化という側面から考察する。すでに、この点については西尾寅弥（1981）や鷺見幸美（1996）でも述べられているが、ここでは、文中におけるその振る舞いの多様さという側面から捉えなおしていく。

4.3.6.1. アスペクトによる動詞の分類について

まず、西尾寅弥（1981）では、「動詞にテイルがつくつかないか、つく場合にはどういう意味になるか」を考察し、動詞を4つに分けている。その4つの分類には疑問点も多くその点を明らかにするために、鷺見幸美（1996）は分類の枠組みとして、先行研究における動詞分類のいくつかを参考に修正を行った。西尾（同）では「擬音語・擬態語する」がアスペクトにおいて一般動詞と同様に多様であることを示し、鷺見（同）ではそれを10のグループに分類した。

しかし、分類の観点が詳細すぎて、全体的な結論という点であいまいさを残している。例えば、変化動詞「時間の経過を伴う変化を表す『だんだんーテクル』」に分類されている「どきどきする」は、同時に、瞬間動詞「瞬間的な変化を表す『一タ瞬間』『一たまま』」にも適合する¹¹⁴。また、その分類にも細かな点で疑問がある。一例を挙げれば、「ふらふらする、ぼーっとする」を「〈動作性〉〈継続〉〈性質表現化〉動詞、ル形未来時（鷺見 1996 : 109）」とし、「いらいらする、わくわくする」を「〈動作性状態〉〈変化〉〈非性質表現化〉動詞、ル形現在時（同 : 107）」としているが、前者はル形未来時だけだろうか。「あー、頭がぼーっとする」という文が、「あー、いらいらする」という文と、時制に違いがあるとは考えられない。どちらもル形現在時である。また「ふらふらする」を〈継続〉、「いらいらする」を〈変化〉とするが、両者にその違いがあるだろうか。これを分ける指標として、継続動詞には「一始める」、変化動詞には「だんだんーテクル」を作るという特徴が挙げられているが、〈継続〉とされた「ふらふらする」も〈変化〉の「だんだんふらふらしてくる」の表現が可能であり、〈変化〉とされた「いらいらする」も〈継続〉の「いらいらし始める」が可能である。

そこで、アスペクトによる動詞分類の発端となった金田一春彦（1950）による動詞の四分類に基づき再度見直し、本節の目的である「擬音語・擬態語する」の特徴を明らかにするため考察する。またアスペクトだけでなく、テンスも見ていくことにする。この四分類で分析した後、それぞれの分類の中で異質なものを抽出していく形で「擬音語・擬態語する」の動詞としての文法的振る舞いを明らかにしたい。

4.3.6.2. 動詞の4分類

金田一春彦（1950）による動詞の4分類は、アスペクトの観点から見た動詞分類である。

¹¹⁴ 変化動詞と瞬間動詞とにまたがるという点は、継続動詞と瞬間動詞がまたがるのとは異なる。後者は「化粧をする」が「今化粧をしている」で進行中の動作を、「今日は化粧をしている」で動作の結果残存を表しうる。前者は、「だんだんやせてくる」で変化を、「やせたまま」で瞬間を表すとするが、「やせる」自体は「テクル」を付加して変化の相を表しうるということで、変化動詞に入るものすべてが瞬間動詞でもあるという分類の枠組みを設定するのは適切ではない。後者はその一部がそうであるということがあるので、分類の枠組みの設定としては存在意義があると考えられるからである。

以下の通りである。

状態動詞（テイルをつけることがない、状態を表す）例、ある、できる、形容詞に近い動詞。

継続動詞（テイルをつけることができ、その動作が進行中であること）ある時間内続いて行われる。例、読む、書く、降る、吹く。

瞬間動詞（テイルをつけることができ、その動作・作用が終わってその結果が残存していること）「ーている最中だ」ということができない。その動作・作用は瞬間に終わってしまう。例、死ぬ、点く、結婚する。

第四種の動詞（テイルの形で状態を表す、単独の形で動作・作用を表すために用いることがない）ある状態を帯びることを表す。例、そびえている、高い鼻をしている、すぐれる、おもだつ、ずばぬける、ありふれる、にやける、ばかげる、富む、似る、丸顔をする、紳士然とする、坊ちゃん坊ちゃんする、しんねりむつつりする、のんびんだらりとする。

金田一（同）が指摘するように、これらの分類のいくつかをまたがる動詞もあるので、動詞だけを分析せず、文単位で分析することにする。また、基本的には「テイル」の付加・非付加によって分類し、「擬態語する」がこれらの 4 分類のどこに所属するものか見ていく。

さらに、テンスについては、ル形で未来を表すのが、動作・作用を表す動詞の特徴である。タ形は過去を表すのはいずれも同じである。ル形で未来を表さずに現在を表す動詞が状態動詞である。これらをあわせて見ていく。

4.3.6.2.1 状態動詞—テイル形なし、ル形（現在）—

状態動詞はテイル形を持たず、ル形は現在を表すものである。

(46) あ、胸がどきんと {する／*している}。

(47) 車にひかれそうになってひやっと {する／*している}。

(48) 歩くと床がみしっと {する／*している}。

一回限りの動作の場合¹¹⁵は、テイル形をとりにくい。アスペクトが、その動作がどのような局面にあるかを描く文法範疇だとすると、アスペクトが無いということは動作の局面を描かず、その時点のみを問題にする表現だと考えることができる。また、動詞でありながらその性質は形容詞と同じであり、「痛い」「怖い」などと同じような感情を表出している。金田一春彦（1950）が挙げている状態動詞の典型例である「ある、できる」以外にも、「擬態語する」の中に状態動詞が存在した点は重要な点である。

さて、次にまとめた二つの点が通常分類には無い特徴である。テイル形がないという点では状態動詞に分類されるが、テンス的意味が状態動詞に見られるような現在ではなく未来を表わす点が異質である。（ア）（イ）としてまとめる。

（ア）テイル形なし、ル形（未来）

¹¹⁵ 擬態語が「～と」の形をとるものは一回の動作であるものが多いようだ。

テイル形が存在しないという点では上述のものと同じでありながら、ル形のテンス的意味が現在ではなく、未来を表すものがある。

(49) トンカチで飛び出ている釘をがつつと {する／?している}。

(42) ” 耳かきを耳に突っ込んでごそつと {する／*している} と、ぼろっと耳あかが取れる。(辞典 p137 「やる」を「する」に変えた例)

一回限りで瞬間的に行われる動作である。ル形の意味が現在ではなく未来である点が金田一(同)の状態動詞の定義から外れるところである。以上①②のようなテイル形がないものは数としては少ない¹¹⁶。

(イ) テイル形主文末なし、ル形(未来)

さらに、連体修飾節の中でテイル形は出現するが、主文末には立つことがないものがある。

(50) a. 魚はハリをはずすとき、ぴくつとする。

b. *魚がぴくつとしている。

c. ?魚はハリをはずすときぴくつとしていた。

d. 魚がぴくつとしているところをカメラで撮りたい。

dの連体修飾節内のテイルは、この動作が瞬間的なものであっても、結果残存を表さず、動作がある一定の幅で(非常に短い一瞬である可能性もあるが)継続しているものとして表現している。b、cのように主文末のテイルが許容されないのは、結果残存の継続としても瞬間的動作の継続としても表すことが難しいことを示している。実際に、dの連体修飾節のテイル形はル形との意味的な差がほとんどなく、つまり「魚がぴくつとすることをカメラで撮りたい」と変わらず、そこに動作の局面を描くというアスペクトの特徴はほとんど現れていない。

しかし、テイルが過去形になったテイタになると、主文末でも現れるものがある(例「暗闇で声をかけられ、男はぎくつとしていた」)。これらの表す動作はいずれも瞬間的な動作であり、ル形はその出現と終了を表すが、その動作の結果が残存することがないためにテイル形がない。しかし、それが過去形になれば許されるのは、過去のある時点に視点を動かし、その時点でのこの瞬間的な動作が過去であるために時間の長さを伸ばした形で描くことが可能であるからかもしれない。現在の今は、話者自身が立っている場所であり、かつ視点を同じ立っている場所に置くということは、時間的長さを引き伸ばして捉えることはかなり難しいのではないだろうか。

4.3.6.2.2 継続動詞—テイル形(進行中)、ル形(未来)—

継続動詞はテイル形(進行中)を持ち、ル形は未来を表すとされるものである。

¹¹⁶ 一回限りの動作あるいは感情であっても、インターネットの掲示板のような自由な表記が多いところでは、テイル形が見られるものもある。以下すべて google の例(2008年12月現在)。「すこしだけ胸がちくつと。あ、いや、ちくつとしてるのは私だけか。」「北陸の10月、一年前まで住んでいたオットの実家(古民家)では忍び寄る秋の寒さにぞくつとしていました。」「チョットむかつとしています。」「写真がきらつとしているのは、チャームポイントかも。」「このCMを見るたびに、どきつとしているのは私だけでしょうか?」最後の例は「～たびに」があるので、習慣化の「テイル」と考えることができる。

- (51) a. 子供が入り口でもじもじしている。
 b. きっと明日の面接でもじもじする。
- (52) a. 子供が2階でドタバタしている。
 b. 明日は休みだから子供がまたドタバタする。
- (53) a. 妻は朝からつんけんしている。
 b. 帰りが遅いと妻がつんけんする。
- (32) a. 太郎は家でゴロゴロしている。
 b. 明日は休みだから家でゴロゴロする。
- (54) a. 大臣が会議の間中こっくりこっくりしている。
 b. 寝不足で明日の会議もたぶんこっくりこっくりする。

これらは、動作としては時間的幅を持ち、瞬間的ではない。

4.3.6.2.3 瞬間動詞—テイル形（結果残存）、ル形（未来）—

瞬間動詞はテイル形（結果残存）を持ち、ル形は未来を表すものである。「その動作・作用は瞬間に終わってしまう（金田一 1950）」とあり、その瞬間性が「変化」と共通する点となる。例えば「電気が点く」の「点く」は瞬間的に起こりそして完了するが、それは前の状態である「点いていない」状態から「点いた」状態への変化を示す。「死ぬ」も同様に瞬間動詞であり、それは生から死への変化である。しかし、「食べる」は前の状態は「食べていない」のであるから、「食べる」が完了するのは「食べた」まで待たなければならない。つまり、瞬間動詞は動作が生起し終了するまでを一語に収めた動詞であり、その点が以前と以後のあり様を提示することとなり、変化になると考えられるのである。その点で、瞬間動詞は変化動詞でもある。

まず、テイル形が結果残存を示す場合を挙げる。いずれも変化の結果、その状態が続いていることを表わす。

- (55) a. 着古してシャツがよれよれしている。
 b. 何度も着れば、シャツもよれよれする。
- (56) a. 二の腕がたぶたぶしている。
 b. 太ると二の腕がたぶたぶする。
- (57) a. 雨が降って空気がひんやりしている。
 b. 雨が降ると空気がひんやりする。

以上が瞬間動詞とされる例であるが、これ以外に瞬間的な動作でありながら、テイル形は動作結果の残存を表すのではなく、主体の状態（属性）を表すものが見られた。それを（ウ）として以下にまとめる。

（ウ）テイル（状態）、ル形（未来）

テイルが動作結果の残存ではなく、主体の属性を示すものとして形容詞のように使われているものがある。この点だけを見ると第四種の動詞と同じである。しかし、ル形があり、未来を表す点が異なる。

- (58) a.花子は肌がぴちぴちしている。
 b.コラーゲンをとるとお肌がぴちぴちする。
- (59) a.彼女は金のことはきっちりしている。
 b.金のことは明日きっちりする。
- (60) a.隣のおじいさんはよぼよぼしている。
 b.年をとれば誰でもよぼよぼする。

「君の肌」は「ぴちぴちした」結果「ぴちぴちしている」のではなく、それは動作の結果や完了に関係なく、もともとそうであることを表している。その点では、変化の意味を主文末では表わせるが、テイルでは変化の結果ではなく、その状態を表す用法となっており、形容詞と同じである。

4.3.6.2.4 第4種の動詞—テイル形（状態）、ル形なし—

第4種の動詞はテイル形のみを持ちル形は持たない動詞とされる。以下例を見る。

- (61) a.あいつは江戸っ子でちゃきちゃきしている。
 b.？はっぱを着せたら江戸っ子らしくちゃきちゃきする。
- (62) a.太郎は骨ばってゴツゴツしている。
 b.？食糧難になれば、皆骨ばってゴツゴツする。
- (63) a.住宅街は小さな家がひしめき合ってゴチャゴチャしている。
 b.？たくさん人が引っ越すようになれば、町はゴチャゴチャする。
- (64) a.子犬の体は丸々太って、コロコロしている。
 b.*太ればこの犬もコロコロする。
- (65) a.あの人はいつもちゃらちゃらしている。
 b.*大人になったらちゃらちゃらする。
- (66) a.三郎は性格がねちねちしている。
 b.三郎の子供も大人になると性格がねちねちする。

はっきりとル形が不可という例は多くはないが、テイル形で専ら用いられている。そして、主体の状態や属性を表わしているという点で形容詞的なものと言える。

次の例は特殊なもので、連体修飾「した」でしか使われず、テイル形も持たない。

- (67) うらうらとした春の日差し

以上、第四種の動詞について見てきたが、ル形を持たず、タ形は連体修飾節でのみ使われる。動作の開始や終了には関わらず、また変化も表さない、状態の動詞である。そして、テイル形のみがある。

4.3.6.3. 感情感覚動詞—テイル形（状態）、ル形（現在）—

この4つの分類には入らない動詞をここにまとめる。それは、ル形が現在を表すので状態動詞になるはずだが、テイル形があるのでそれには入らず、また、テイル形が進行中を表すので継続動詞になるはずだが、やはりル形で現在を表すため継続動詞には入らない動詞

である¹¹⁷。「擬態語する」ではこのタイプの動詞が何を表わしているかという点と、以下の例の通り、感情や感覚といったものを表している。(26) (30) や以下のようなものである。

(68) うーん、こめかみのところが {ずきずきする／ずきずきしている}。

(69) わ、床が {ぬるっとする／ぬるっとしている}。

4.3.6.4. 「擬態語やる」のテンス・アスペクト

「擬態語やる」も動詞であり、アスペクトを持っている。それと「する」を比較してみたい。

(39) 弟はカバンの中をいつまでもごそごそやっていた。

(40) ” ??縫い針で指をちくりとやっていた。

(41) ” ?犬が男の足をガブリとやっていた。

(42) ” 耳かきを耳に突っ込んでごぞとやっている。

(43) ’ 娘が習い始めたバイオリンをぎこぎこやっている。

(44) 女房は妊娠 3 ヶ月で毎朝げーげーやっている。

テイル形が表わす意味はいずれも進行中であり、結果残存はない。また、テンスに関してもル形は未来を表わす。その他、テイル形を作りにくいものがある。したがって、もっぱら継続動詞として機能し、中に状態動詞に近いものがあることがわかる。ちなみに、「擬態語だ」は動詞ではないため、当然ながらアスペクトの体系を持たず状態のみを表す。テンスは「だ」で未来を表わす。

4.3.6.5. 「擬態語する」のテンス・アスペクトまとめ

以上、様々な例を挙げながら、「擬態語する」が動詞としてどのようなテンス、アスペクト的な意味を示しうるかを見てきた。その結果、「擬態語する」は様々なテンス的、アスペクト的な意味を表しうるもので、それは金田一 (1950) の 4 分類の全てを網羅し、あるいはそれに当てはまらないような機能さえ示す (ア、イ、ウ)、非常に幅広い文法的機能を示すことがわかった。また、その中にはアスペクト的な意味が様々に変動するものもある一方、連体修飾の用法しか示さず全くテンス・アスペクトから開放されているものもあった。

このような非常に幅広い機能を示しうるのは、「する」が様々な擬態語と結合が可能であるという点に帰結する。したがって、擬態語の示しうる様々な様態、性質などにしたがって、動作から状態、属性までを示し、その結果、テイルの意味やテンスの意味も大きく変動すると考えられるのである。一方、擬態語と「やる」の結合は 4 分類のうち一つだけを示し、「する」と比べると限定的なテンス・アスペクト的な意味を表わすことがわかった。

以上のテンスとアスペクトの考察から、「擬態語する」が主体の状態や属性を示す用法を持つことが確かめられた。それは形容詞が持つ特徴である。そこで、次に「擬態語する」と形容詞との類似性についてまとめておきたい。

¹¹⁷ 山岡 (2000) には同じような働きを示す動詞として、情意表出動詞「困る」「悩む」などが出てくる。

4.3.7. 形容詞との構文的類似性

西尾寅弥(1981)では、『ぞくぞくする』は話し手が、話している時点での自分自身の内的な状態をあらわし「自分以外の人を主体とした断定の表現は成り立たない」とし、「感情形容詞とよく似ている」と述べる。さらに鈴木重幸(1979)では「現在未来形だけ」に見られる特殊な用法として「話し手の内的な状態をあらわす文」として「胸がドキドキする」などの例が挙げられている。また山岡政紀(2000b)では〈情意表出〉〈感覚表出〉を表わすものとして多くの「擬態語する」の例を挙げた。以下三点に亘って、「擬態語する」の形容詞との構文的類似性を考察する。

4.3.7.1. 主語の人称制限

まず、形容詞との構文的な類似性として、主語の人称制限が見られる。ル形言い切りは1人称のみに許されるため、2人称、3人称主語の文を成立させるためにはモダリティ形式を付加する必要がある。以下の通りである。

- (70) a. {(私) / *あなた / *彼} は嬉しい。
b. {あなた / 彼} は嬉しいはずだ。
- (71) a. {(私) / *あなた / *彼} は胃がキリキリする。
b. {あなた / 彼} は胃がキリキリするだろう。
- (72) a. なんだか {(私) / *君 / *彼} はわくわくする。
b. {君 / 彼} はわくわくするかもしれない。

4.3.7.2. 形容詞一語相当

次に、「擬態語する」は形容詞一語に相当するものがあるため、形容詞と置き換え可能なものが見られる¹¹⁸。

- (71) 胃がキリキリする。→胃が痛い。
- (72) 背中がゾクゾクする。→寒い。怖い。
- (73) 耳の中がムズムズする。→耳の中がかゆい。
- (74) タオルが {ふわふわ / ふわっと / ふかふか / ふんわり} している。→タオルが柔らかい。
- (75) タオルがゴワゴワしている。→タオルが硬い。古い。
- (76) ハラハラする。→心配だ。
- (77) 気持ちが {鬱々する / どんより} する。→憂鬱だ。
- (78) 動作がきびきびしている。→動作が機敏だ。
- (79) 会場が {しんと / しーんと} している。→会場が静かだ。
- (80) 地下室はひんやりしている。→地下室は涼しい。
- (81) 体が {カッカ / ポツポツ} する。→熱い。
- (82) {ぞっと / ぞーっと} する。→怖い。

¹¹⁸ 置き換え可能でも全くの同義であるということではない。「擬態語する」は形容詞一語が表わし得ない細かなニュアンスまでを表現できる。

- (83) ズボンが {だぶだぶ／ぶかぶか／がばがば} する。→ズボンが大きい。
 (84) 舌が {びりびり／びりびり／びりっと} する。
 (85) 口が {ポッポ／カッカ} する。→辛い。
 (86) 体が {ぽかぽか／ほかほか／ぽっかぽか} する。→体が暖かい。
 (87) ガラスが ピカピカしている。→ガラスがきれいだ。
 (88) がっかりした¹¹⁹。→残念だ。

以上の通り、格の交替なしに形容詞と置き換えることができるものが多い。

4.3.7.3. 程度性

既に4章1節でも述べたが、形容詞は程度副詞によって修飾され、比較表現を作ることができる。つまり、形容詞が程度性を持つためである。同様に「擬態語する」もこの文法的特徴を示すものがある¹²⁰。

〔非常に〕嬉しい。贈り物よりその気持ちの方が〔もっと〕嬉しい。

- (71)' 胃が〔非常に〕キリキリする。胃の上部よりも下部の方が〔もっと〕キリキリする。
 (72)' 〔すごく〕わくわくする。その方が〔もっと〕わくわくする。
 (89) トマトジュースは〔非常に〕どろどろしている。トマトジュースはりんごジュースより〔もっと〕どろどろしている。
 (90) 取っ手部分がベタベタしている。取っ手部分が〔もっと〕ベタベタしている。
 (91) 地下室は〔非常に／＊たくさん〕ジメジメする。地下室は上階より〔もっと〕ジメジメする。

いずれも程度副詞による修飾が可能であり、比較表現を作ることができる。

4.3.7.4. まとめ

以上、構文的な特徴として、人称制限、形容詞一語相当、程度性の三点から「擬態語する」は動詞でありながら形容詞のように振舞うことがわかる。特に、それは感情や感覚を表す用法で見られるものである。

4.3.7.5. 「擬態語する」の表現の多様性

このように「擬態語する」は動詞でありながら、その性質において形容詞に近似しているものがある。形容詞一語と置き換え可能な「擬態語する」は、その形容詞とどのような意味的な違いがあり、どのような役割を果たしているのか考えてみたい。ここでは「痛い」という形容詞と置き換え可能なものを例として挙げる。以下は、全て形容詞「痛い」と格の交替

¹¹⁹ 「がっかりした」や「あー、さっぱりした」のようにタ形で現在を表し、第一人称経験者格の感情を表すものが「擬態語する」には見られる。この点は、山岡（2000b）でも指摘されているように、これらは「一般に過去を表す時制形式-taを用いて、変化後に維持されている感情状態を表現する動詞」である。

¹²⁰ 西尾（1972）p155「程度副詞は主として形容詞を修飾することを職能とする」と述べいくつかの形容詞を例に程度副詞が修飾可能か否かを提示する。

なしに置き換え可能なものである。

- (71) 胃がキリキリ¹²¹する。
- (92) 傷口がズキズキする。ズキンズキンする。
- (93) 頭がガンガンする。ズキツとする。
- (94) 火傷の場所がジンジンする。
- (95) とげが刺さって指先がチクチクする。
- (96) 擦りむいて膝がヒリヒリする。
- (97) 火傷して手がピリピリする。

これらの文は「身体部位＋ガ＋擬態語する」の構造を持つが、「擬態語する」と身体部位の組み合わせはおおよそ決まっており、いずれも痛みを表わすからといって自由に入れ替えることはできない。例えば、「キリキリする」は胃や腹に対する痛みとして表現されるが、頭・顔・皮膚・背中などの語とは共起することはない。また、「ズキズキする」は骨・歯・頭・背中・目・腰・傷口など比較的多くの身体部位と共起するが、しかし全てではなく、喉・手のひら・鼻・耳などは共起しにくい。このように、同じ痛みであってもその痛みの様子が示されているのが「擬態語する」であるために、形容詞のようにすべての身体部位をガ格名詞に伴うというわけにはいかない。

言い方を変えると、意味の面では、「擬態語する」は形容詞の表わす意味のバリエーションとして多様な表現を可能にしているという点で、重要な役割を持つ語結合であると考えることができる。「痛い」が「キリキリする、ジンジンする、ヒリヒリする、チクチクする、ピリピリする、ズキズキする」のように痛みの様子を多様に表わし分けることを可能にしているのである。

4.3.7.6. 形容詞、動詞との関係性—「キリキリする」「痛い」「痛む」—

4.3.3.2.で見たように「キリキリする」は「痛い」という形容詞だけでなく、同時に「痛む」という動詞と置き換えが可能である。ここでは「擬態語する」が類義の関係にある形容詞と動詞とどう関わるかについても少し考えてみたい。

- (71) a.あー、胃が {キリキリする／痛い／？痛む¹²²}。
- b.朝からずっと胃が {キリキリしている。／痛い／？痛んでいる}。
- c.昨夜は胃が {キリキリした／痛かった／？痛んだ}。
- d.会議が始まると胃が {キリキリし始める／＊痛い始める／痛み始める}。
- e.会議の日は胃が {キリキリする／痛い／痛む}。

121 「きりきり」について『現代擬音語擬態語用法辞典』では、「頭・胸・腹・胃袋など体の内部に鋭い痛みを感じるという場合に用いる」とある。これは「きりきり痛む」のような実質動詞における用法で、「きりきりする」のような形式動詞では頭・胸とは共起しない。実質動詞と形式動詞においては、擬態語との共起にも違いが見られる。

122 「痛む」は「痛い」「キリキリする」に比べると若干不自然さがあるとも言える。その場合、通常の動詞の表しにくい〈感情表出〉機能を「擬態語する」は表しうること示す。また、自然であるとするならば、感情を表わす動詞である「喜ぶ」「憎む」などが全くこのような例文を作ることができないことと比較すると、「痛む」という動詞が感情を表わす動詞の中でも特殊な動詞であることを示す。山岡(2000b)では「感覚表出動詞」としている。

a は発話時現在の話者の〈感覚表出〉であるが、「擬態語する」と形容詞が成立するのに対し、「痛む」動詞文はどこか不自然さがある。そして、b は「朝からずっと」という時間幅を示す語によって、「擬態語する」はテイル形をとり継続状態を示す。形容詞はアスペクト形式を付加することはできないが、形容詞の状態が継続していることを示しうる。しかし、「痛んでいる」は形式的にはアスペクト形式をとれるものの文として不自然さがある。d は同じアスペクトでも動作の開始の局面を描き出すので、形容詞は状態との意味を示す為に不可能である。しかし、e のような提題の文においては、恒常的な事態を表すので、その日はいつもそうだ、の意味であり可能となる。

以上の通り、「キリキリする」は「痛い」と「痛む」の双方を包括する表現として存在している。その瞬間の話者の感覚を表現する場合は「痛い」と同様の機能を示し、継続的な痛みの状態についてはテイルを付加するアスペクト形式をとることによってそれを示し、形容詞が表しえない動作の開始の局面や動作の種々の側面は「痛む」と同様に動詞として形態を変化させることが可能である。この意味で、「擬態語する」は動詞でありながらも形容詞と類似した意味機能を持ち、さらに、形容詞の表しえない局面も表しうる、動詞としての性質も示すという点で、多機能であると考えられることができる。

「擬態語する」の形容詞との関係で特筆すべきことは、以上の例だけでなく〈感覚表出〉や〈情意表出〉機能を示す例が多く存在し、一つの語群をなしているということである(例、ムカムカする、クラクラする、ヒリヒリする、ウキウキする、ムズムズする、ドキドキする等)。それは、〈感覚表出〉や〈情意表出〉機能を持つ語群である形容詞と同じである。このように「擬態語する」は動詞でありながらも形容詞と類似した意味・機能を持ち、さらに形容詞の表しえない動きあるいは時間的推移の局面も表しうるという点で多機能であると考えられることができる。

4.3.7.7. 知覚を表す属性形容詞

ここまでは、「感情や感覚を表すもの」と一括りにしてきた。しかし、感情と感覚では構文的に異なる点が見られる。「擬態語する」には感覚・知覚を表わす次のような例がある。感情を表わす「ドキドキする」と異なる点は、知覚の主体である第1人称経験者格を文中に顕在化させることができない点である。知覚である以上、知覚する主体が存在するわけだが、言語形式上は表わせない。

(74) { *私は、*私には } このタオル、ふわふわしている。

(75) { *私は*私には } このタオル、ゴワゴワするね。

(79) { *私は、*私には } 会場はしんとしている。

(80) { *私は、???私には } 地下室はひんやりしている。

(87) { *私は、*私には } ガラスがピカピカしている。

これは形容詞文においても同様であり、この文が知覚者という潜在的存在を持っていながらも、文の表すものは客観的な物質の描写であることを示していると考えられることができる。このことは西尾(1972)や山岡(2000b)で述べられているように、外的対象である「タオル」「会場」などに対する内的な知覚(ゴワゴワする、ふわふわしている、しんとしている)

が表現されてはいるが、経験者格を言語化できないという点で属性形容詞であると考えられるものである。

4.3.8. 「擬音語する」の存在

擬音語に「する」が後接することはないと先行研究（宮地 1978、中北 1991）では言われている。この点を確認するため数が増えるが以下に例を挙げる。

- (88) はい、あーんして。
- (89) さ、ふうふうしてあげますからね。（辞典 p482）
- (90) いきなり飲んでたコーヒーをぶっとした。
- (91) 急に顔色を変えて窓をピシャッとした。
- (92) 電子レンジでチンする。
- (93) 水溜りの中を子供がバシヤバシヤしている。
- (94) 車に触ったら静電気でバチッとした。
- (95) そばを一気にずるずるとした。
- (96) かゆくてかゆくて背中をぼりぼりする。
- (97) たくあんを {ポリポリ／バリバリ／パリパリ} する。
- (98) 窓ガラスの間に大きな蛾がばたばたしている。（辞書 p394）
- (99) 鍵穴をカチャカチャしている音が聞こえた。

このように、擬音語が「する」と接続する例も見られる。特に幼児に対して用いられる言葉の中に「擬音語する」が多いために、一見、通常は用いられないと考えがちだが、日常の話し言葉ではその場その場の状況に応じて多様な「擬音語する」が作られ用いられているのではないかと考える。さらに、以下の例のように¹²³、インターネットの中ではかなり自由に作られ使われているものも多く見られる。

- (100) 3つくらいある扉を全部がしゃんがしゃんしてみただけど入れず
- (101) 今まで秋に帰ることが多かったので、久しぶりのじゅるじゅるな桃が美味しかったのなんの！ 何年ぶりに食べたことか！ 皮を剥くだけでもじゅる ... 全然、じゅるじゅるしないんですよ（涙）

- (102) 【肉詰め野菜の鉄板焼き】～ジュージューするだけで気分はゴージャス

擬音語は、擬態語よりも実際に耳にする音の側面をそのまま言語化していると考えられるために、話し言葉のように自由度の高い使用においては、擬態語よりもむしろ多く作られる可能性があるのではないだろうか。

さらに、次のような例は、「ハーハー」が擬態語か擬音語か判然としにくいもので、そもそも擬音語か擬態語か明確に分けにくいものも存在する。

- (103) a. 彼はハーハーいいながら階段を上がってきた。（辞典 p375）
b. 高橋選手はレース後も全然ハーハーしない。（辞書 p375）
c. 彼はハーハーしながら階段を上がってきた。

¹²³ いずれも google で検索した結果である（2008 年 11 月現在）。

「ハーハー言いながら」は実質的な意味が「言う」にあるために「ハーハー」は実際の音、擬音語と解釈できる。また、「ハーハーしながら」は実質的な意味が「する」にないために「ハーハー」が実際の音なのか、その様態なのか（つまり、あえぐ様子全体を捉えた）解釈は判然としないが、「ハーハー」に関してはどちらも擬音語と捉えられるだろう。しかし、「ハーハーしない」に関しては、「ハーハー」は実際の音を捉えたのではなく、喘ぐことを表わすため擬態語として解釈されると考えられる。

以上、いくつか例を見たが、擬態語に比べれば少ないものの、やはり「擬音語する」は存在すると言える。

4.3.9. 「擬音語・擬態語する」全体のまとめ

本節では、擬音語や擬態語が「する」と結合することによって、動詞一語として振舞う例を取りあげ、「擬態語だ」や「擬態語やる」と比較しながら、その文法的特徴を考察してきた。その結果、「擬態語する」は独自の意味を持つこと、また類義の実質動詞を持つものはその動詞の意味を限定し、意味の広がりをも的確に表現仕分けしていることがわかった。さらに、「だ」「やる」との違いは、擬態語が何のサマを表わすものの違いとして捉えることができる。「擬態語だ」はモノのサマを、「擬態語する」はモノのサマとコトのサマを、「擬態語やる」はコトのサマを表わす。加えて「擬態語する」には何のサマかという観点からは明らかにできない独特の用法（感情感覚）がある。そして、「擬態語する」の文法的機能としては、実質的な意味を擬態語に担わせて「する」自体は述語としての文法的な役割を果たすことが主となっている（しかし、機能動詞ではない）。また、形態論的な観点では、実質動詞が示しうるアスペクト・テンス的意味のすべてを示しうることがわかった。その他、「擬音語」にも「する」は結合すると考えることができる。

このように「する」は様々な語と結合することができるという特性によって、その一体となった語結合は、一語として様々な文法的機能を示すことになる。「擬音語・擬態語する」は形容詞のような特徴を示すものがあり、意味は状態から動作までを表わす。さらに、その状態は属性から感情表現までを示し、その動作は変化、瞬間的動作、継続的動作までを示す、様々な特徴を示すことがわかった。

第4節「～とする」文と「～にする」文の構造と意味

「～とする」と「～にする」を述語に持った文は、共起する格助詞がトかニかという一文字違いでありながら、両者が示す意味・用法、そして統語構造は大きく異なっている。これまで両者を比較する研究は見られなかったが、「する」動詞を考察する本研究では、その類似点と相違点は明らかにしておかなければならない問題である。また、この二つを一緒に考察することによって、それぞれの特徴がさらに明らかにされたいと考え、実例を収集し比較した。

問題のありかは、例えば以下の例のように、一方では可であるのに、一方では不可であり、また両方が可となる用法が見られる点である。

(1) 万一俺たちがつかまった {と／＊に} する。

(2) 会社は彼を重役 {＊と／に} した。

(3) 課長を停職 3 か月の懲戒処分 {と／に} した。

このように「する」は、格助詞トあるいはニと共に起する時、トとニが置き換え可能な場合と置き換え不可能な場合がある。たった一つ格助詞が異なるだけで、この二つの表現はどう違ってくるのだろうか。また、動詞「する」はこの二つの表現の違いにどう関わるのだろうか。本節ではこの二点について考察していく。

4.4.1. 先行研究とその課題

先行研究には、「とする」と「にする」を同時に比較、考察した論文が管見のところ見られないという事実がある。なぜなのだろうか。

「とする」に関する先行研究では考察の観点は大きく二つに分かれ、一つは引用構文としての考察、もう一つは条件節としての考察、という重要な文法事項との関わりから論じられることが主である。そのため、「引用」と「条件」という二大観点の前には、類義表現「にする」との比較という観点は微小なものに映ったのかもしれない。しかしながら、「とする」が、なぜ引用と条件という全く別の意味・用法を担うことになるのか、その他にまだどのような意味があるのかなど、類義表現の「にする」との比較は、これらを明らかにするうえでは見過ごしてはならない点である。

4.4.1.1. 「とする」の先行研究

「とする」の先行研究の中で、意味・用法の分類について述べた中山英治 (2000) と岩男考哲 (2007) について触れたい。ただし、「にする」との比較はいずれも行われていない。

中山英治 (2000) は、統語論的考察の結果「N¹²⁴ヲ N トスル」「S トスル」の二つの構文があること、テンスの分化の有無によって「取り決め」「対象同定」「発話引用」「仮定的事態設定」の意味に分けられることを述べた。ここでは、問題点を 3 つ挙げ課題を明らかにする。一つ目は、発話引用の文を「N ヲ N トスル」型に入れていることである。発話引用文は発話された文を補文として引用するものなので「S トスル」に分類されるべきである。そのうえで、「S トスル」という同じ構造をとりながら、一方は発話引用となり、一方は仮定的事態設定となるのはなぜなのか考えてみたい。二つ目は、「N ヲ N トスル」型の文に仮定的事態設定を認めていないことである。例えば「仮に Aさんを社長とする」のように、仮定の文は「N ヲ N トスル」型でも可能である。三つ目は、「取り決め」と「対象同定」の差は「テンスの分化の違い」には見られないことである。例えば、「特別減税の額は、平成 6 年分の所得税額の 20%相当額とする (『取り決め』中山 2000 例文)」に「テンスの分化はない」としているが、「とした」に置き換えても問題はなくテンスの分化があるということになる。したがって、「取り決め」と「対象同定」にこのような違いは無い。統語論的な根拠として挙げたテンスの分化が根拠にならないとすれば、これらの意味・用法を分かつ特徴が

¹²⁴ N は名詞、V は動詞、S は文を表す。

何なのか考えてみたい。「とする」を引用あるいは仮定のどちらかに限って考察するのではなく、広く全体を捉え、それを統語論的特徴によって差異化しようとしたという点は参考にするべき点である。これを踏まえて、本節でさらに詳細に分析を進める。

岩男考哲（2007）は、「とする」を引用構文の観点から考察したものだが、モダリティやアспектとの関わり、動作主の有無、「と」と「する」の緊密性、文体差など様々な点から分析している。ただし、その意味分類は「引用」「仮定」「近未来」という三つだけであり、すべてを分類できてはいない。また、分析の一部で疑問に思う点もある。例えば、仮定の文は「テイル形をとる」としているが、「計算を簡単にするために、コインを 10 回投げて検定を行うものとしている（岩男 2007 例文）」は、テイルに置き換えることで元の「仮定」の意味を喪失してしまっている。つまり、テイルは取れないとすべきである。様々な観点をを用いた分析のやり方は方法として妥当だと考え、特に本節では動作主の有無について取り上げ、考察を進めたい。

その他、小泉保ほか（1989）の中に詳細な意味記述があるが、これは 4.4.1.3. で参照する。

以上、「とする」自体の先行研究が少ないだけでなく、それぞれが引用構文、仮定用法など「とする」の一部を取り上げ論じているために、全ての「とする」の意味機能、構文、用法が網羅されたものを見ることができないと言っている。それだけ「とする」文が広範囲に及ぶ特殊な構文であることを物語る証左である。「する」にトという格助詞を一つ付加しただけの表現がどれくらいの表現力を持つのか、どのようにその機能を分化させているのかについて、その全体を捉える必要がある。

4.4.1.2. 「にする」の先行研究

次に「にする」であるが、逆にこれだけを扱った論文は管見のところ見当たらない。「にする」には取り上げるべき課題がないのだろうか。

変化動詞という観点から格助詞のニ・トを論じているのが菊池律之（2008）である。主に「なる」を取り上げニ・トの違いを述べているが、この結果が「する」にも当てはまるものとは言い難い。例えば「息子は医者 {と／に} なった」は「息子を医者 {＊と／に} した」となり、トが許容されないからだ。一方で、「先生の判断で森さんは不合格 {と／に} になった」「先生は森さんを不合格 {と／に} した」は、どちらもニ・トが許容されるが、「する」はニとトでは意味が異なり、しかも「とする」は変化を表していない。さらに、「と／にする」は変化だけを表すわけではないため、更なる考察を必要とする。菊池（2008）は、その結論部分で、「述語に立つ変化動詞が変化の結果を要求するために、ニであろうとトであろうと、名詞句に変化の結果という意味を持たせることになった（菊池 2008）」と述べている。しかし、「する」そのものは変化動詞ではない。変化の結果を要求しないのに変化の意味を持つとはどういうことなのか、動詞に注目して考えなければならないだろう。菊池（2008）では、ニとトを変化の結果を表すマーカーとして、その違いについて述べているが、「にする」「とする」の詳細な比較までは行なっておらず、その結果がこちらにまで通用するものとは思えない。変化動詞とニ・トを考えるうえでも、ニ・トを使い変化を表す用法と、ニ・トを使っても変化を表さない用法がどういうものであるか考えることは重要である。

4.4.1.3. 先行研究—「とする」と「にする」の表す意味

先行研究で明らかにされた「とする」「にする」の表す意味についてまとめると、以下のようになる。

「とする」：岩男考哲（2007）「引用文」「仮定条件」「近未来」

小泉保ほか（1989）「ある事柄を決める」「何かが起こる、または、何かを起こす寸前の状態にある」「あることを仮定する」

中山英治（2000）「発話引用」「仮定事態の設定」「取り決め」「対象同定型」

「にする」：菊池律之（2008）「変化」

小泉保ほか（1989）「ある職業・役割・係などに誰かを従事させる」「ある事柄を決める、または、配慮する」「ある物や人を別の物や人に変える」「実際はそうではないのに、そうであると見なす」

以上のように先行研究では「とする」「にする」は比較されることがなく、異なる表現として捉えられているようである。果たしてそうだろうか。以下、両者を比較することの意味について、まず考えてみたい。

4.4.1.4. 問題提起—「にする」は変化だけを表すのか、「とする」は変化を表さないのか

以上見たように「にする」は「変化」を表す表現として、その他の変化動詞と共に論じられることが多い。果たして「にする」は変化だけを表すのか、例文を元に考えてみたい。

(4) 先生は森さんを不合格にした。

この文を「変化」だと解釈することも可能だが、一方で「取り決め（決定）」だと解釈することも可能である。そして、この文はトに置き換えが可能である。

(5) 先生は森さんを不合格とした。

これは先行研究で「取り決め（決定）」と言われる例であるが、「判断」の意味もある。しかし、さすがに変化の意味を読み取ることは難しい。

それでは、次に変化の意味を明らかにするために、変化前と変化後を示す語を加えてみる。

(4)' 先生は一変、森さんを合格から不合格にした。

(5)' 先生は一変、森さんを合格から不合格とした。

(4)' は変化の意味が決定的になり、(5)' は決定だけでなく変化の意味も出てくる。さらに、次の例を見てみる。

(6) タイガースは8対4と点差を4点にした。（菊地 2008 例文）

(7) タイガースは8対4と点差を4点とした。

(7) は「取り決め」でも「対象同定」でもなく寧ろ「にする」と同様「変化」とも言える。

このように「にする」は変化、「とする」は決定という説明がそれほど絶対的なものではなく、両者は時にその意味において重複する部分（同義）を持つと言ってもいい。したがって、「とする」と「にする」は別に扱っていいほど別の物でもなく、共通の意味を有していると断定できるほど単純に似ているわけでもないことがわかる。上記のようにその線引きは明確なものではないが、その点こそが、それぞれ別に論じていても見えてこない部分を明

らかにしてくれるのではないかと考え、両者の比較を試みる。

以下、4.4.2.で「～とする」文だけに見られる意味・用法、4.4.3.で「～にする」文だけに見られる意味・用法、4.4.4.で両者に共通して見られる意味・用法をまとめていく。

4.4.2. 「～とする」文だけに見られる意味・用法

「～とする」文だけに見られる意味・用法についてまとめる。先行研究では概ね「引用」「仮定」「決定」がその表す意味とされた。また、「～とする」文にしかない構文は、「S モノトする」「S トする」「S [V (ヨ) ウ] トする」の3つである。「にする」との置き換えの可否について見ながら、意味・用法をまとめていく¹²⁵。

4.4.2.1. 引用—「Nガ[S] トする」

(8) 検察側は「犯行は計画的、常習的、組織的で、極めて巧妙かつ悪質」と主張。被害は未遂1件を含む23件で計1049万円とし、「長年組織犯罪を行い、規範意識が鈍磨し、再犯の恐れがある」{と／＊に}した。2012.3.15¹²⁶

(9) 平野氏は、アジアでも、法人向け融資を拡大するだけでなく、「第2のユニオン・バンクを持ちたい」と述べ、個人と取引する地元金融機関の買収に意欲を示した。そのうえで、全体の収益に占める海外の比率を、現在の約25%から将来的には40%程度まで高めたい{と／＊に}した。2012.4.14

(10) 区はこの日の区議会で、後継医療機関に決まっている地域医療振興協会（千代田区）がまとめた「事前相談計画書」の概要を初めて公表した。小児科の常勤医師の人数は日大病院から7人減の9人、産婦人科は3人減の2人{と／＊に}した。2012.3.15

(11) また、非常勤医師について、小児科で7人、産婦人科で2人をそれぞれ確保している{と／＊に}した。2012.3.15

(12) 理由について、区は「協会から『獲得交渉に影響する』などと言われている」など{と／＊に}した。2012.3.15

いずれも「S トする」の統語構造を持ち、発話や判断の引用を示している。引用されるものは「」で閉じられることもある。また、発話や判断の内容（つまり引用内容）を示す補文(S)の他に、「とする」と述べた主体を提示できる¹²⁷という特徴を持つ。厳密に言えば、「Nガ[S] トする」である。例えば、(8)では「検察側が〔長年組織犯罪を行い、規範意識が鈍磨し、再犯の恐れがある〕とした」であり、(9)では「平野氏が〔全体の収益に占める海外の比率を、現在の約25%から将来的には40%程度まで高めたい〕とした」である。

(10)以降の例も文脈を見ると、「区が〔小児科の常勤医師の人数は日大病院から7人減の9人、産婦人科は3人減の2人（だ）〕とした。」「区が〔非常勤医師について、小児科で7

¹²⁵ 4.4.2.の実例は全て「とする」で検出されたものである。

¹²⁶ 日付は出典のYOMIURI ONLINEの記事の日付を表す。

¹²⁷ 提示できるということであって、常に文の中に顕示されるわけではなく潜在化していることもある。「とする」「にする」の主体の違いについては第4章第5節で論じる。

人、産婦人科で2人をそれぞれ確保している]とした。」「区が[協会から『獲得交渉に影響する』などと言われている]とした。」となる。

4.4.2.2. 仮定—「S トする」「S モノトする」「仮に N ヲ N トする」

- (13) もし雨がまだ降り続く {と／＊に} すると、川の堤防が危ない。(小泉 1989 例文)
- (14) ここにひとりの病人がいる {と／＊に} する。(塩狩峠)
- (15) 万一、俺たちがつかまった {と／＊に} する。(驢馬)
- (16) 仮に誰も死なないもの {と／＊に} する。(人生論ノート)
- (17) アキレスがA点、亀がB点にいて、アキレスが亀を追いかけるもの {と／＊に} する。(若き数学者)
- (18) かりに一町歩当りの植林費を六万円 {と／＊に} しても、この事件は約六億円の損害である。(パニック)

「S トする」「S モノトする」「仮に N ヲ N とする¹²⁸」の統語構造を持ち、仮定を表す。従属節で使われる以外(主文末)はル形であること、主語が存在しないことがその特徴である。

4.4.2.3. 将前—「S [V (ヨ) ウ] トする」

- (19) 日が暮れよう {と／＊に} している。(小泉 1989 例文)
- (20) 猫が屋根から降りよう {と／＊に} する。(同上)
- (21) 弘は大学を受けよう {と／＊に} してやめた。(同上)
- (22) 双子のお星様はどこ迄でも一緒に落ちよう {と／＊に} したのです。(双子の星)

「何かが起こる、または、何かを起こす手前の状態にある(小泉ほか 1989)」とされるものである。簡潔に「将前」とする。「S [V (ヨ) ウ] トする」の構造を持つ。ただし、動詞は未然形で意向を表す助動詞「(ヨ) ウ」と結合したものである。

4.4.2.4. 決定—「N が S モノトする」「N が S コトトする」「N が N ヲ N トする」

- (23) 県は、競争性や公平性を確保する観点から、県財務規則を改正し、随意契約の場合、原則として複数の見積書を取る ことと {と／＊に} する方針を決めた。2006.8.1
- (24) 市はこの新メニューを子供たちに食べてもらうことで家庭料理への普及を図ろうと、学校給食に出す ことと {と／＊に} した。2012.7.18
- (25) 政府は、第一項の計画の達成に必要な措置を講ずるもの {と／＊に} する。(沖縄県の区域内における位置境界不明地域内の各筆の土地の位置境界の明確化等に関する特別措置法昭和五十二年五月十八日法律第四十号)
- (26) 韓国国防省は 14 日、北朝鮮の攻撃で韓国海軍の哨戒艦が沈没し、46 人の将兵が犠牲となった事件から 2 年となる 26 日を「報復の日」 {と／＊に} すると発表

¹²⁸ 「N ヲ N とする」だけでは仮定の意味を示せない。ここには「仮に」「例えば」などの副詞が添えられるか、文末を「としたら」「とすれば」等の仮定形にしなければならない。

した。2012.03.15

「S コトトする」「S モノトする」「N が N ヲ N トする」の構造で「決定」を表し、「ニする」と置き換えることはできない。

同じ「S モノトする」という構造を持つ「仮定」との違いは、先にも述べたように主文末がル形でなければならないのが「仮定」用法であり、この「決定」用法ではその限りではない。また、決定には決定する主体があるため、主体が存在することもその違いである。例えば、以下の通りである。

【仮定】{＊会長が} 誰も死なないものと {する／＊した}。

【決定】{会長が} 全員が実施するものと {する／した}。

つまり、仮定用法は主文末がル形のみで主語の想定ができないが、決定用法は時制の制限がなく主語の想定が可能である。

いずれも決定の主体である「N が」が明示されているところに特徴がある。

4.4.2.5. 同定—「N ヲ N トする N」「N ヲ N トする」

(27) その年の六月下旬、馬場熊男を長と／＊にする十一名の技師・工員たちが、長崎から姿を消していた。（戦艦武蔵）

(28) 有馬馨大佐を艤装員長と／＊にする艤装員たち （戦艦武蔵）

(29) トウモロコシを原料と／＊にするバイオ燃料の使用義務を一時的に停止

2012.8.20

(30) 県は 19 日、この弁当を原因と／＊にする食中毒と断定した。2012.8.20

典型的には「B ヲ C トする D」という連体修飾節を作る。B が C であると見なすという意味を持っているため、「同定」と呼ぶことにする。

この同定の用法では、主語が無い、あるいは主体が明示されない。例えば「この弁当を原因とする食中毒」は「＊食中毒がこの弁当を原因とする」でもなく、「＊県がこの弁当を原因とする」でもない。敢えて作るなら「県がこの弁当を食中毒の原因とする」である。いわば「外の関係」を示す連体修飾節である。このように主語が無い場合には、ヲ格名詞＝ト格名詞（この弁当＝原因）であることを示すに留まり、誰がそう見なしたかに焦点が当たらなくなる。つまり、本来は「A が B を C と同じだと見なす」ということではあるが、主語が無い（あるいは主体が明示されない）ということは、その見なした誰か A が問題にならないために結果的に B が C と同じであるということだけが焦点化されているのである。

4.4.2.6. 決定結果—「S モノトする」「S コトトする」「N ヲ N トする」

(31) 第 8 条で「大学及び高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものと／＊にする」としている。2010.10.22

(32) 昨年 4 月施行の愛知県暴力団排除条例（暴排条例）でも「暴力団員が組から離脱することを促進し、社会復帰の支援に努めるものと／＊にする」と規定。

2012.4.1

(33) 指針では、アプリが利用者の情報を取得する場合、情報の内容や目的を明記し、

利用者の同意を得ること{と／＊に}した。2012.8.15

先の「決定」の用法とよく似ているが、主語が無いあるいは主語が特定しづらい。これは主語や主体が省略されたものではなく、無いのではないかと考えられるものである。つまり、誰がそうしたかを示さない表現であり、結果的にそうなったことを示す。このような例は法令や行政などの文書に多く見られる。意味的には、4.4.2.4.の決定と類似しているが、その決定主体を明らかにしないという表現であることを考えると、決定の「結果」を表す表現であると考え、このような「Nが」のない「Sモノトする」「Sコトトする」を決定結果の用法として一つの分類に立てることにしたい。

なお、決定結果を表す「NヲNトする」は実例ではうまく見つけられなかったが、以下のように作例では自然な例文として示すことができる。

(34) マンション規定でゴミ収集は朝8時まで{と／？に}した。

(35) 条例には違反者を即刻通報{と／＊に}するとある。

(36) 法令でいじめを人権侵害{と／＊に}した。

いずれも決定の主体を明示することなく、結果的にそう決定されたことを示すものとして「NヲNトする」文がある¹²⁹。これは、「NヲV」という他動詞構造を取りながら他動性のない動詞だと言えよう。さらに、もう一步突き詰めるなら「NガNである」と同様の意味を示す状態性を示す動詞になっている。「(Aガ)BヲCトする」の構造を持つ文は、その根底に「B=C」という構図が見られるということである。つまり、「する」は「B=C」であることを決定づける、判断する、あるいは単にそうであることを結ぶ述語である。したがって、決定づける、判断するにはその動作主Aが必要であり、単にそうである状態が現出したことを述べるだけならAが不要となる。これを決定結果と言ってもいいだろう。

4.4.2.7. 「決定」と「同定」の違い―主語の有無―

さて、中山英治(2000)は、「同社は、一九九〇年十月、一人当たり年間休日数を百二十日間とした(中山例文)」を「対象同定」、「オリンピック委員会からの報奨金は非課税とする(同)」を「取り決め」としている。しかし、どちらも筆者には「取り決め」のように感じられる。もう少しこの点を考察してみたい。

(37) まず檜の二間柄のさきに、口輪をはめ、五寸釘を差しこんで穂先{と／＊に}する。それが庄九郎の稽古槍である。(国盗り物語)

これは庄九郎の稽古槍の作り方が述べられ、どんなものが穂先かと言えば「檜の二間柄のさきに、口輪をはめ、五寸釘を差しこんだもの」であり、それを「穂先」と見なすということなので、対象同定の意味を示す。これを取り決めとは言えない。このような同定の文は、主語の存在が明示されていない。

(38) 越前朝倉、尾張織田、美濃揖斐の連合軍がそれぞれ連絡しあって、美濃討入りの日を天文十三年八月十五日前後{と／＊に}した。(国盗り物語)

¹²⁹ 「にする」で置き換え可能なものもなくはないが作例の段階でも作るのが難しかったため(『指針では、利用料金を5000円以下{と／に}することなどが盛り込まれた。』が作れた例文)、「とする」文だけに見られるものとして入れておくことにした。

これは「美濃討入りの日」を「天文十三年八月十五日前後」と決定したことを意味する。討ち入りの日が八月十五日前後と見なすという対象同定の意味ではない。決定の主体である主語（連合軍）が明示されている。

(39) 「待て。今の命中弾は、三分の一の三発 {と／＊に} する」(山本五十六)

命中弾を三発と見なすのか、三発だと決めたのか、読み方によってどちらにも動く。ただし、決定の主体を積極的に読み取れば「私」がそう決めたと言明した文となり、主語の存在を強く読まない場合にはそう見るという意味に傾く。以下は同様に新聞の実例である。

(40) 市財政課によると、同制度は事業費 130 万円以上の工事の入札が対象で、最低価格を下回る金額で応札した業者は即刻、失格 {と／？に} する。2012.03.15

(41) 西桂町の石田寿一町長名義で、町内の支援者宅に贈答用のウナギのかば焼きが宅配された問題で、同町議会は 14 日、調査特別委員会（滝口新一朗委員長）を開き、辞職の意思があるかどうかなど 20 項目の質問状をまとめた。16 日に滝口委員長が石田町長に手渡す。回答期限は 22 日まで {と／＊に} する。2012.03.15

「同制度が業者を失格とする」「町議会が回答期限を 22 日までとする」のように、文脈から主体を引っ張り出してくると決定の意味合いが強くなる。しかし、実例はそうではない。主題化されているのは主体ではなく、対象の方であり、主体を明示するような表現をとっていない。実例をそのまま判断すれば、同定の意味合いが強いだらう。このような同じ統語構造「N ヲ N トする」の場合、主語の存在が両者を分かつ基準になると同時に、その存在の捉え方が「決定」と「同定」の連続性だと考えられる。

ただし、この場合に「にする」が不自然であることはいずれも同じである。これらの例文を見ると、文体的相違が影響していると考えられるが、詳細は 4.4.4. で論じる。

以上の考察結果を表 1 としてまとめておく。

表 1. 「～とする」文だけに見られる意味・用法

| 用法 | 文型 | 主語 | その他 | 例文 |
|----|---------------------------------------------|------|----------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 引用 | N ガ S トする | 主語あり | | 検察側は「長年組織犯罪を行い、規範意識が鈍磨し、再犯の恐れがある」{と／＊に} した。 |
| 仮定 | S トする S モノトする 仮に N ヲ N とする | 主語なし | 主文末ル形に限定 | 万一、俺たちがつかまった{と／＊に} する。 仮に誰も死なないもの {と／＊に} する。 かりに一町歩当りの植林費を六万円 {と／＊に} しても、 |
| 将前 | S [V (ヨ) ウ] トする | 主語あり | | 日が暮れよう {と／＊に} している。 |
| 決定 | N ガ S モノトする N ガ S コトトする N ガ N ヲ N トする | 主語あり | | 市はこの新メニューを学校給食に出すこと {と／＊に} した。 |

| | | | | |
|----------|----------------------------|------|-----------|-------------------------------------------------|
| 同定 | NヲNトする N NヲNトする | 主語なし | 連体修飾 節 | 有馬馨大佐を艦装員長{と／＊に}する 艦装員たち |
| 決定 結果 | Sモノトする Sコトトする NヲNトする | 主語なし | | 指針では、アプリが利用者の情報を取得する場合、利用者の同意を得ること {と／＊に}した。 |

4.4.3. 「～にする」文だけに見られる意味・用法

「～にする」文だけに見られる意味や用法についてまとめる¹³⁰。小泉保ほか（1989）で「にする」の意味を四つに分類している。「ある職業・役割・係などに誰かを従事させる」「ある事柄を決める、または、配慮する」「ある物や人を別の物や人に変える」「実際はそうではないのに、そうであると見なす」である。「とする」との置き換えの可否について見ながら、その意味をまとめていく。

4.4.3.1. 決定—「NガNヲNニする」「NガNヲNトイウコトニする」

(42) 彼らは昼食をカレーライス {に／＊と} した。（小泉 1989 例文）

(43) 何にする？ぼくはうなぎ {に／＊と} するよ。

(44) いつにする？それじゃ、3月のはじめ {に／＊と} しようか。

これは「ある事柄を決める（小泉ほか 1989）」と説明されるものだが、簡潔に「決定」と名付ける。「彼らはカレーライスにした」「昼食はカレーライスにした」も可である。「NガNヲNニする」の統語構造を持つ。さらに、以下のように「NガNヲNトイウコトニする」の統語構造を持つものもある。

(45) ヘビでもモズでもとにかくネズミをとる動物は全部禁猟ということ{に／＊と}
して、密猟した奴は厳重処分（パニック）

(46) 先生が合格点を 80 点以上とということ{に／＊と}してしまった。

4.4.3.2. 変化—「NガNヲNニする」「NガNヲNノヨウニする」

(47) 会社は彼を重役 {に／＊と} した。（小泉 1989 例文）

(48) 娘を教師 {に／＊と} する。（同上）

これは「ある職業・役割・係などに誰かを従事させる（小泉ほか 1989）」と説明されるものだが、「従事させる」の意味は「する」には強すぎる。どちらも簡潔に「変化」でいいのではないか。つまり「会社が彼を重役でない状態から重役の状態へ変えた」「親が娘を教師にならせた」という意味である。そして、「ある物や人を別の物や人に変える（同）」という説明もこの「変化」の中に入れることができる。

(49) 子供たちは板切れを船 {に／＊と} して遊んだ。（小泉 1989 例文）

(50) この工場はパルプを紙 {に／＊と} する。（同上）

¹³⁰ 4.4.3.の例文はすべて「にする」文であり、「とする」との置き換えが不可能なことを例文に加えたものである。

- (51) 鯛を刺身 {に／*と} する。(同上)
- (52) 彼らはそれから僕の昨日一日の行動について微にいり細にわたって詳しく質問し、それを書類 {に／*と} した。(ダンス・ダンス・ダンス)
- (53) それは大阪の市が南へ南へ伸びて行こうとして十何年か前まではまだ草深い田舎であった土地をどんどん住宅や学校、病院などの地帯 {に／*と} してしまい、(のんきな患者)
- (54) あんなあ、ここお家 {に／*と} しょうか。(火垂るの墓)
- (55) 議長は、いや気がさしたが、始めたばかりで閉会 {に／*と} するわけにはいかず、(ブンとフン)

全てが「別の物や人に変える」という意味かという、(49) は別の物にはなっていない。ただ、板切れが船という役割に変わっただけである。そう考えれば (47) と同様、役割・立場・用途の変化である。それと同時に「パルプを紙にする」「水を湯にする」「マジシャンが白布を鳩にする」のように物質的・物的に変化が起こるものも含まれる。いずれにせよ「変化」としてまとめる。

- (56) 加藤は、製図用のクロスをひと引きで真二つ {に／*と} するように、その烏口を鋭く磨ぎ上げようと思った。(孤高の人)
- (57) 近いうちに、上級生の数も半分 {に／*と} するという噂もあるんです。(孤高の人)

「N ガ N ヲ N ニする」の統語構造を持つ。

4.4.3.3. 実現努力—「N ガ S [V ル形] ヨウニする」

- (58) 必ず連絡を取るよう {に／*と} する。(小泉ほか 1989 例文)
- (59) 私たちの行き先が恵子にすぐわかるよう {に／*と} する。(同上)

これらを「配慮する (小泉ほか 1989)」としているが、配慮の意味は広い。そこで、これらが事態実現のために努めることを表しているので「実現努力」と分類したい。益岡隆志・田窪行則 (1992) で「実現への努力や事態の維持の努力を表す (p93)」と指摘されている。「連絡を取る」ことが実現されるように努めることを意味し、それがどの程度の実現度かは示されていない。ただ、その実現のために何等かの行為を行うことを意味している。

- (60) すぐ見積りをとるよう {に／*と} してくれ給え。(パニック)
- (61) 君の席を北村と顔を合わせないようなところ取るよう {に／*と} するから出ろよ。(孤高の人)

4.4.3.4. 仮想同定—「N ガ S [V タ形] コト／トイウコトニする」

- (64) 私たちはそのいたずらを健二がやったこと {に／*と} した。(小泉ほか 1989 例文)
- (65) 警察はその事件はすでに解決したこと {に／*と} している。(同上)
- (66) 君たちの言うことを信じて、今回は私が間違っていたこと {に／*と} する。(若き数学者)

(67) 私たちは太郎がその場にいなかったということにした。

「実際はそうではないのに、そうであると見なす(小泉ほか 1989)」と説明されるもので、簡潔に「仮想同定」とする。つまり、仮にあるものをあるものと見なすという意味で、「いたずら＝健二がやった」と考えることを意味している。補文はタ形であるという特徴を持つ。「N ガ S [V タ形] コト／トイウコトニする」の統語構造を持つ。

4.4.3.5. 様態—「N ガ N ヲ N ノ ヨウニして」「N ガ V (ル形) ヨウニして」

(62) ゴーシュも口をりんと結んで眼を皿のよう {に／*と} して楽譜を見つめながらもう一心に弾いています。(セロ弾きのゴーシュ)

(63) ボーイ長がまた床をすべるようにしてやってきた。(ブンとフン)

これらは、行為の様子や様態を表すものである。主文末に来ることがなく、テ形で用いられることに特徴がある。

4.4.3.6. 「～にする」文の「決定」と「変化」の決定要因

「決定」と「変化」の用法が見られたが、その統語論的な違いは見られない。どちらも主語があり、そして、「N ガ N ヲ N ニする」という格表示パターンを取る。これらの用法をもたらすものは、文脈や名詞の表す意味だと考えられる。例えば、「皆は昼食を簡単に済ませるために蕎麦にしようと考えていたが、時間ができたので定食にした。」という文の「蕎麦にしよう」は決定の用法であるが、「定食にした」は「うどん」からの変化と捉えれば変化の意味になる。また、「社長は太郎を部長にした」という文の「部長に」は先にも述べたが、部長でなかった太郎に部長の役割を担わせたという意味では変化であり、しかし、社長の権限で部長への昇進を決定したので決定でもある。このような名詞の組み合わせは、文脈で変わってくる可能性があるものである。「殿様はこの土地を拠点にした」の文であれば、「この土地」は元々何か役割があったのではなく、新規にそうなったという意味が「この土地」と「拠点」の関係に見られるために、これは決定の意味である。

以上のように「～にする」の「決定」と「変化」は同じ構造を持つために、その意味の決定には文脈と名詞の意味が関わると考えられるのである。

以上の考察結果を表 2 としてまとめておく。

表 2. 「～にする」文だけに見られる意味・用法

| 用法 | 文型 | 主語 | 例文 |
|------|-------------------------------------|------|------------------------------------------------------|
| 決定 | N ガ N ヲ N ニする N ガ N ヲ N トイウコトニする | 主語あり | 彼らは昼食をカレーライス {に／*と} した。ネズミをとる動物は全部禁猟ということ {に／*と} した。 |
| 変化 | N ガ N ヲ N ニする | 主語あり | 会社は彼を重役 {に／*と} した。 |
| 実現努力 | N ガ S [V ル形] ヨウニする | 主語あり | 必ず連絡を取るよう {に／*と} する。 |
| 仮想同定 | N ガ S [V タ形] コト／トイ | 主語あり | 私たちはそのいたずらを健二がやっ |

| | | | |
|----|--------------------------------------|------|-----------------------------------------------------------------------|
| | ウコトニする」 | | たこと／ということ{に／*と}した。 |
| 様態 | N ガ N ヲ N ノヨウニする N ガ V (ル形) ヨウニして | 主語あり | ゴーシュが眼を皿のよう {に／*と} して楽譜を見ついている。ボーイ長が床 を滑るよう {に／*と} してやってき た。 |

4.4.4. 「～とする」文と「～にする」文に共通する意味・用法

ここでは、トでもニでも可能な例を見ていく。まず、両者が置き換え可能かどうか、次に置き換えたものがほぼ同じ意味だと考えていいかの二点を確認しながら、両者の重なるの部分について考察する。

4.4.4.1. 決定—「N ガ N ヲ N {ト／ニ} する」「N ガ S コト {ト／ニ} する」

さて、これまで見たように「N ガ N ヲ N ニする」の文で「決定」と「変化」の意味を、「N ガ N ヲ N トする」の文で「決定」の意味を表した。主体の意志が表に現れるような文脈の場合、変化よりも決定の意味が強くなる。つまり、誰かによる支配的な変化は「決定」という形に解釈されるからである。したがって、「N ニする」は動作主の意志が強く現れると「決定」、そうではない場合は「変化」の意味になる。トでもニでも置き換え可能な文は以下のようなものである。

(68) 耳の会は3月3日を耳の日 {と／に} した。

この文の場合、決定の主体（耳の会）が存在すること、変化前が想定されにくいことが要因となって、「決定」の意味の解釈が出る。

(69) 学校が「母の日」のプレゼントをカーネーション {と／に} すると言い出した。こちらも同様である。「～にする」に変化の解釈がされにくいのは、変化前の状態が想定できないためである。例えば、以下のように変えとこの文の解釈は変化に変わるが、「とする」は言えなくなる。

(69) a. 学校が「母の日」のプレゼントをバラからカーネーション にすると言い出した。

b. *学校が「母の日」のプレゼントをバラからカーネーション とすると言い出した。また、その決定した主体が「学校」のような公的な機関であれば、「とする」との共起がなじみやすくなる。これを個人である「兄」に置き換えると以下のように一転して非文となる。

(70) *兄がプレゼントをカーネーション とすると言い出した。

決定の主体として公的な要素を求める点は、「～とする」文の持つ特徴でもある。

以下は、決定主体を明示せず、「プレゼントを」を主題化した文である。

(70)' プレゼントはカーネーション {と／に} する。

この例の「にする」は私的な決定、「とする」は公的な決定で自分ではない誰かが勝手に決めたことというニュアンスがある。「とする」には常にこのような文体的堅さというものがつきまとう。したがって、以下の実例では「とする」が用いられるもののほとんどが法令や公的機関による決定を示す例文である。

(71) 警視庁の命令により、青山の分院は患者の転院が済み次第閉鎖休院 とする。(楡

家の人びと)

- (72) 同省は、特に発生量が多く、保管場所の確保が難しい 4 県では国有地を活用することとした。2012.8.21
- (73) 特例法案は、被災程度が激しく、予定通り選挙を執行できない自治体に限り、投票日を 2-6 か月間延期できるとする内容。新たな投票日は自治体の被災程度に応じて別途、政令で定めることとする。2011.3.15
- (74) 県教委は 14 日、胎内市でひき逃げ事故を起こし、道路交通法違反（ひき逃げ）などの疑いで逮捕された中学校の男性教諭（49）を停職 3 か月の懲戒処分とした。2012.3.15
- (75) 県は集団食中毒と判断し、同店を 13 日から 5 日間の営業停止処分にした。2012.3.14

厳密に言えば、文体の硬さが異なるため、実例の「にする」を「とする」に変える方が「とする」を「にする」に変えるよりも難しいという違いはある。

以上、両者に共通する意味「決定」を示す文は、「N ガ N ヲ N {ト／ニ} する」「N ガ S コト {ト／ニ} する」の二つである。

4.4.4.2. 同定—「N ガ N ヲ N {ト／ニ} する」

「A ガ B ヲ C {ト／ニ} する」の統語構造を持つものは、B=C と見なす「同定」の意味を表す。

- (76) 小川教諭は、基礎基本の定着のため、3 年生全員に年間 300 日の家庭学習を目標 {と／に} するなど、石狩で実践してきた指導法を持ち込んだ。2012.03.15
- (77) それは人間の存在が虚無を条件 {と／に} するのみでなく虚無と混合されていることを意味している。（人生論ノート）
- (78) その痣は自分が付けたものだ、という事実を、伊木は心の支え {と／に} した。（砂の上の植物群）
- (79) 「風疹 {と／に} した理由は？」「熱がでて鼻水と眼脂が多かったのです」「口の内の粘膜は？」「……………」「診なかったのですね。それでは風疹と断定できません、一番肝腎な個所を見逃しています」（花埋み）
- (80) （私は）糠をまるめてふかしたのを弁当 {と／に} し、車中、きぬにもたれかかって居眠りする大男を肘でついて、逆に頭をこづかれ、（焼土層）
- (81) 宮村の頭を北に向け、ピッケルをその枕元に立てて置いた。遺体発見の目じるし {に／と} するためだった。（孤高の人）
- (82) 足立区内産のコマツナをメイン {に／と} した「コマツナ給食の日」も設け、食育や地産地消にも力を入れる。2012.3.13

以上の考察結果を表 3 としてまとめておく。

表 3. 「とする／にする」重複の意味・用法—置き換え可

| | 文型 | 主語 | その他 | 例文 |
|----|-----------------------------------------|------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------|
| 決定 | N ガ N ヲ N {ト／ニ} する N ガ S コト {ト／ニ} する | 主 語 あ り | 主語：公的な機関や団体（とする）>私的な立場や個人（にする） | 県教委は男性教諭を停職 3 か月の懲戒処分 {と／に} した。同省は、国有地を活用すること {と／に} した。 |
| 同定 | N ガ N ヲ N {ト／ニ} する | 主 語 あ り | | 伊木はその事実を心の支え {と／に} した。 |

4.4.4.3. 「決定」と「同定」の違い—文体的違い—

4.4.2.2.で「とする」における「決定」と「同定」の違いについて述べたが、ここでは、「とする」「にする」どちらにも出現する二つの意味が何を条件に発現するのか考えてみたい。統語構造という点では、「N (A) ガ N (B) ヲ N (C) ト／ニする」で同じであり、そして、その基礎として「B=C」であることも同じである。そのイコールの判断の仕方が「決定」か「同定」かの違いとなって現れると考えられる。

まず、「決定」であるためには既に述べたとおり、決定を下す主体の存在が必要であり、「～とする」文はその決定主体が公的機関である例が多く見られる。一方、「同定」は、決定ほど強い認定ではなく、ただ単にそう見なす、見るというレベルのため、公的な機関よりは個人的・私的なものが主語となるものが多い。また、同様に B と C の組み合わせも「ピッケル＝目じるし」「糠のふかしたもの＝弁当」のように、決定の意味はない。「決定」では「3 月 3 日＝耳の日」「男性教諭＝懲戒処分」と、単に見なすだけでなく B が C と決定的に結びついたことを意味する。

以上のように、「決定」か「同定」は、主語の存在、その主体の特徴、B と C の結び付きによって決まる。このような理由のため同じ統語構造を持ちながら、置き換えができない例が見られることになる。以下がそれである。決定主体が「私」「俊介」「彼」など個別で私的であり、いずれも「とする」を許容する文体的特徴がない。

(83) そういうあれこれが面倒になって、私は大学を退職すること {に／*と} した。

(1Q84)

(84) 「一体どんな薬です？」と素直に聞き返してみることに {に／*と} した。(のんきな患者)

(85) 俊介は方向を変えて課長の説を歓迎すること {に／*と} した。(パニック)

(86) 彼は雑木林などのかげに携帯の一人用のテントを張って野宿すること {に／*と} していた。(パニック)

4.4.4.4. 置き換え可能だが、意味が変わるもの

ニとトが置き換え可能だが、意味が異なってしまうものを取りあげる。つまり、統語的には同じ構造 (N ガ N ヲ N {ト／ニ} する) を共有するが、意味がずれる用法である。一つは、「とする」が決定を「にする」が変化を表すもの、もう一つが「とする」が同定を「に

する」が変化を表すもの、さらに「とする」が仮定を「にする」が変化を表すものである。

4.4.4.4.1. 「とする」決定、「にする」変化

- (87) 武雄市は 27 日、指定管理者に来年 4 月から委託する市図書館について、改修工事に伴って 11 月～来年 3 月末の 5 か月間を休館 {に／と} すると発表した。

2012.8.28

「武雄市」が「する」の主語であり、その意味的特徴は「市」という公的な立場である。「とする」文はこのような主語の特徴と共に、解釈の可能性として考えられる「変化」の用法がない。以上の点から「決定」を意味するものと捉えられる。そして、「にする」文は、変化前である「開館」していた状況を想定でき「開館⇒休館」という事態に変化したという解釈が自然である。どちらも同じ統語構造であり、それぞれに主語の明示、主語の公的性質、変化前の想定が特徴として抽出できるが、やはり別の意味が出ると考えられるものである。以下はいずれもこのような例である。

- (88) 今後諸君は海軍技術員嘱託として、所長は、勅任官待遇、技師は、奏任官待遇 {と／に} する。(戦艦武蔵)

- (89) 防火用に外壁をぬらせ、わらぶきを廃止し、できるだけ瓦屋根 {と／に} した。
(国盗り物語)

- (90) 家は仕舞屋風の小さな家で、玄関六畳を患者控室 {と／に} し、次の八畳間を診察室 {と／に} した。(花埋み)

- (91) 同社は、来夏のセールでは、開始時期をさらに後ろにずらして 8 月 1 日頃 {と／に} する方針だ。2012.8.22

- (92) 県警は 17 日、刑事課長を 27 日付で同署付 {と／に} する人事異動を発表している。2012.8.18

- (93) やりくりしてトレーナーを常時 7 人体制 {に／と} するなど、選手の支援に力を入れてきた。2012.8.28

4.4.4.4.2. 「とする」同定、「にする」変化

- (94) 光秀は、百姓家に行ってわらを貰って来、それを一隅に積みあげて寝具 {と／に} した。国盗り物語

- (95) 花子をリーダー {に／と} したクラスメイトを憎んだ。

- (96) 警察は佐藤さんを犯人 {に／と} した。

(94) の「にする」は「わら⇒寝具」と変化させた、「とする」は「わら＝寝具」と見なした、と解釈される。(95)「花子⇒リーダー」の変化を引き起こしたのは「クラスメイト」という意味を持つのは「にする」であり、「花子＝リーダー」である集団の「クラスメイト」という意味を持つのは「とする」である。(96)「佐藤⇒犯人」と変化させ、そう仕立てるという意味が感じられるのが「にする」であり、「佐藤＝犯人」と判断したことを意味しているのは「とする」である。それぞれの格助詞二とトがこのような違いを引き起こしている。

4.4.4.4.3. 「とする」仮定、「にする」変化

(97) たとえば、佐藤を犯人 {と／に} する。

「たとえば」が挿入されているが、仮定としての前提の働くところが両者では異なる。「とする」文では、「佐藤＝犯人」つまり、佐藤が犯人かどうかはわからないが、仮に今そうであると「たとえば」仮定するということである。「にする」文では、「佐藤⇒犯人」つまり、佐藤を犯人でもないのに犯人に仕立てることを意味し、その変化全体が「たとえば」という例示である。

「N ガ N ヲ N ト／ニする」においては、「にする」の基本的な意味は「変化」だと言えることができよう。「とする」はどれか一つが突出しているのではなく、「決定」「同定」「仮定」の意味が文脈によって変化すると考えることができそうだ。

以上の考察結果を表 4 としてまとめておく。

表 4. 構文的には置き換え可能だが、意味が異なるもの

| | 意味 | 主語 | 例文 |
|-------|-------|------|--------------------------|
| と／にする | 決定／変化 | 主語あり | トレーナーを常時 7 人体制 {と／に} する。 |
| と／にする | 同定／変化 | 主語あり | 警察は佐藤さんを犯人 {と／に} した。 |
| と／にする | 仮定／変化 | 主語あり | たとえば、佐藤を犯人 {と／に} する。 |

4.4.5. まとめ

以上の「A が B を C とする」と「A が B を C にする」には、「変化」「同定」「決定」「仮定」という意味が見られるが、それらの根本にある共通の意味は、「B＝C」として認める（事実か非現実かは関係なく）ということになる。その認め方が、一つは変化前の想定があれば変化前と変化後との対照によって「B⇒C」という点が強調される。また、B と C を同じだと単に見るのか、そう決めるのか（顕著なのは公的機関が主語の場合）、あるいは、事実ではないがそうだと仮に考えるのか、という認め方、判断の仕方の違いでもある。そのために、これらの解釈は難しいものがあるが、本節では表 1～表 4 のように、構文や主語という統語的な違いや主語の特性といった意味的な違いを合わせて、両者の違いを省察した。そして、B のない文が「引用」の「とする」である。

さらに主語という点では、A の存在の必要性、そしてその明示と非明示が問題となる。さらに、意味の核心である「B＝C」の具体的解釈の要因は B と C の意味関係、変化前の想定可否、加えて A の関与という総合的な関係性によって最終的に決まってくる。

このことは、畢竟するところ「する」が形式動詞であること、またもっぱら具体的な意味を連語の各要素（名詞、格助詞）に委ね、述語としてのまとめを引き受けるという特質による。つまり、格助詞一つの違いで幅広い用法の広がりを示すに至っている。また、その広がりとは、4.4.2.6.で述べたように「N ヲ N {ト／ニ} する」という他動詞構造を取りながら他動性が認められず「N ガ N である」と同様の意味を示す状態性を示す動詞になっている場合すらあった。

第 4 章第 4 節で「～とする」文と「～にする」文の構造と意味について見たきたが、第 5 節では両者の主語の存在に焦点を当てて考察を進める。

第5節「～とする」文と「～にする」文における主語の存在

文において主語は、述語と同様に重要な位置を占める。それは、文が述べる内容である「何がどうする」の「何が（主語）」と「どうする（述語）」という二大要素となるからだ。ところが、日本語においてはその主語が文の中に顕在化しないことがしばしば起こる。それは、重複することを避け経済的に言語活動を行うための省略もあるが、その一方で、単なる省略ではなく、そもそも主語を必要としていないのではないかと思われる文も存在する。とりわけ、形式動詞「する」を述語とする文ではそのような現象が見られるのである。このことは何を意味するのであろうか。形式動詞特有の問題なのだろうか。

主語の在り様を明らかにすることは、形式動詞という特殊な動詞を考察するうえで大きな示唆を与えてくれると考え、本節では、特に「～とする」文と「～にする」文における主語の存在にアプローチしながら両者の違いと動詞の特徴について考察していく¹³¹。

4.5.1. 「～とする」「～にする」と主語

「～とする」についての先行研究の中で、主語の問題が考察ポイントの一つとして取り上げられている。具体的には中山英治（2000）「主体の明示・非明示」、岩男考哲（2007）「動作主の有無」という用語によって、それぞれ分析が行われている。一方、「～にする」の先行研究では、もともと「にする」だけを取り上げた論文がないことから、主語に関する論考も見られないのが現状である。

以下では、まず「主体」「動作主」「主語」などの用語の検討を行い、そして実例をもとに主語の存在について検証し、考察を行う。このことによって、明らかにされる点が三点あると考える。一点目は、主語の存在の有無、特に無い場合の意味するものとは何かということである。二点目は、「する」という形式動詞の特徴である。動詞述語にとって対となるべき主語の存在は、動作のあり方と関係する。もし動詞によって主語の提示の仕方が変わるとすれば、主語の存在を確認することは動詞の性質や特徴を明らかにするはずである。そして、三点目は、「～にする」文と「～とする」文という格助詞が一つだけ異なる二つの文の相違点である。

4.5.2. 主となる語とその存在—用語の検討

動詞にとって、また文にとって、主となる語は「主語」「主格」「主体」「動作主」などと呼ばれるが、本節の分析においてどの用語を用いるべきか考えてみたい。

まず、動詞を中心に考えるならば、その動作を行う者は「動作主」である。これは意味論的な観点から形式的な格を表記したものである。ところが、「～とする」「～にする」文の「する」が「動作」かと言えば、必ずしもそうとは言えない。「する」が何か具体的な意味を持

¹³¹ 筆者は「する」の研究に関心を寄せているため、日本語文全体における主語の存在を考察するという観点は取らないし、また取りえない。本節における結果が、主語の存在についていくらかの参考にすべき知見となることを目指す。

つ場合と、まさに形式動詞らしく意味が非常に曖昧な場合とがある。当該の文におけるそれは、必ずしも動作を表す主体とは限らない。

また、「主体」という用語は、統語論的な用語としても意味論的な用語としても一般的に認められた用語ではない。むしろ通常に用いる語の側面が強く、その意味も曖昧である。ただし、述語の持つ動作あるいは状態の主体として、両方の意味でそれを表せるという利点を持っている。

そして、「主格」という用語は、その名詞がその動詞にとって主となる存在であることを示す、統語論的分析に使われる用語である。文における名詞と動詞との関係性を示すのが格であるならば、その見方は、形式的に顕在化している名詞を扱うのであって、潜在化している名詞はその対象にはなりえない。

最後に、「主語」という用語は、統語論と意味論どちらの側面も持ち合わせており、述語に対する主となる語を指す。「する」は単独で述語となるだけでなく、その他の要素と結合して述語としての働きを示すこともある。そのため動詞と対になる概念である「主格」や「動作主」よりも、「する」を述語と捉え、それに対する主となる語「主語」の方がより適していると考える。また、顕在化・潜在化の可能性がある要素を分析するにも、動作・状態の主であることを示すにも問題がない。したがって、本節では以上の理由から「主語」という用語を用いることにする。

さらに、先行研究におけるこれらの「明示・非明示(中山 2000)」や「有無(岩男 2007)」 「特定可能(岩男同)」 「生起できない(岩男同)」 との用語は、何を意味するものか、この点も確認し整理しておく。

用語は異なるものの、これらの意味する点は共通している。つまり、文中に形式的に現れているものを「明示」あるいは「特定可能」とし、文中に現れていない場合には「非明示」あるいは「生起できない」としているのである。本節では、これをさらに細かく限定し、以下の三つに分けることとする。

- ・主語が文中に形式上指示できるものとして現れているものを「顕在化」とする。
- ・主語が文中に形式上指示できるものとして現れてはいないが、前後の文脈の中にそれを指示・指定できるものを「潜在化」とする。
- ・主語が文中にも文脈の中にも指示あるいは特定できず、その文が主語を必要としていないものを「生起不可」とする。

4.5.3. 「～とする」文の主語

以下では、実例を提示しながら主語にあたる名詞に点線を引いて示す。また、主語が潜在化している場合には、それを()の中に入れ点線を引く。潜在化したのではなく、生起不可の場合には(φ)と記することとする。以下、構文ごとに見ていく。構文は、補文を持たない構文として「名詞ガ名詞ヲ名詞トする」「{名詞ガ名詞ヲ／名詞ガ} 動詞(ヨ) ウトする¹³²」を挙げ、補文を持つ構文として「文コトトする」「文モノトする」「文トする」を挙げる。実

¹³² つまり、他動詞構文と自動詞構文がある。

例は、新聞記事¹³³と小説という二つのジャンルから取り上げた。

4.5.3.1. 「名詞が名詞ヲ名詞トする」文の主語

4.5.3.1.1. 主語が顕在化している場合

- (1) 中日が 4 連勝で、貯金を今季最多の 20 とした。2012.8.18
- (2) 同社は、来夏のセールでは、開始時期をさらに後ろにずらして 8 月 1 日頃とする方針だ。2012.8.22
- (3) 人間の虚栄心は死をも対象とすることができるまでに大きい。(人生論ノート)
- (4) その痣は自分が付けたものだ、という事実を、伊木は心の支えとした。(砂の上の植物群)

いずれの例も主語があり、それが顕在化している。

4.5.3.1.2. 主語が潜在化している場合

- (5) 区はこの日の区議会で、後継医療機関に決まっている地域医療振興協会（千代田区）がまとめた「事前相談計画書」の概要を初めて公表した。（中略）（区は）小児科の常勤医師の人数は日大病院から 7 人減の 9 人、産婦人科は 3 人減の 2 人とした。2012.3.15
- (6) J R 北海道は 14 日、昨年 5 月の J R 石勝線特急脱線炎上事故など脱線事故やトラブルが相次ぎ、今冬の運休本数が過去 10 年間でワースト 1 になったことなどを受け、安全輸送のための体制強化策を発表した。（J R 北海道は）過去の事故などを分析して再発防止につなげる専門部署を新設するほか、2013 年春の採用で現場の技術職を前年の 3 割増とする。2012.3.15
- (7) 「出る時は（出て官途に就く時は）人に任せ、退く時は自ら決せよ」というのが気に入っていて、（彼は）信条としたいような口ぶりであったという。（山本五十六）
- (8) （私が）頼みとするものは、小さな茶筒に入った甘納豆一缶であった。（孤高の人）
- (9) （私は）糠をまるめてふかしたのを弁当とし、車中、きぬにもたれかかって居眠りする大男を肘でついて、逆に頭をこづかれ、（焼土層）

いずれも主語と考えられるものは文脈の中に存在し、それを特定することができる。潜在化していると考えられる例である。

4.5.3.1.3. 主語が生起不可の場合

- (10) （φ）北海道十勝地方南部を震源とする地震があり、浦河町、浦幌町で震度 4 を観測した。2012.8.22
- (11) 札幌市周辺の高齢者関連施設で発生した（φ）白菜の漬物を感染源とする腸管出血性大腸菌 O157 による集団食中毒 2012.8.20
- (12) （φ）最高の状態を 100 とすると、現在はどれくらいの仕上がりかという質問に、

¹³³ 例文はすべて実例である。新聞記事（YOMIURI ONLINE）は日付のみ付した。

尾崎は「90」、木崎は「60～70 くらい」 2012.8.4

(13) 加藤は、その彼の行動が、一種の取りみだしであって、そのように彼を追いこんだのは、彼におさがりを押しつけようとした影村一夫の不信行為に対する怒りと、...(φ)...影村一夫を代表とする人間への抵抗であると考えた。(孤高の人)

(14) 私がさまよい込んだ丘陵地帯は、...(φ)...ブラウエン、アルベラ、オルモックの各作戦地区を頂点とする三角形の中心に近く、いわば颱風の眼のように無事であった。(野火)

これらの例は前後の文脈を確認しても、主語を指示できず生起不可と判断される例である。生起不可であるということは何を意味するのか、次項から考察する。

4.5.3.1.4. 主語生起不可の連体修飾節—「とする」状態

主語が生起不可能だと考えられる文のうち、連体修飾節の構造をとる例は、以下のように、連体修飾節を通常の文に直そうとすると主語を立てることができない。

(13) 影村一夫を代表とする人間 → #人間が影村一夫を代表とする

(14) 各作戦地区を頂点とする三角形 → *三角形が各作戦地区を頂点とする

(13) は、影村一夫を代表とした(決めた)のは誰かわからないだけでなく、そもそもそのこと自体が問題とされていない。「影村一夫がその代表である人間」という意味であって、「する」に動作性は感じられない。さらに、(14) では、当然ながら「三角形」が作戦地区を頂点と決めたわけではない。こちらも元々「する」には動作性がない。つまり、「各作戦地区が頂点である三角形」あるいは「各作戦地区が頂点となっている三角形」という意味である。したがって、主語の生起が不可能な「～とする」連体修飾節における「とする」は、動作ではなく状態を表す動詞であることがわかる。先行研究の用語を用いるならば、「対象同定」の意味に近い。しかし、ここで強調しておきたいのは、「対象を同じものとして見なす」という「対象同定」の意味よりも、さらに「である」のようなコピュラとしての意味を示している点である。動作動詞でありながら【状態】を示すという点こそが特筆すべきことと考える。そのため、新たに【状態】という意味・用法を加えたい。

ただし、主題のある文にするとこの文は成立する。また、このような主語が無いと考えられる文は、実例でもたいてい有題文である。

(14) ' この三角形は各作戦地区を頂点とする。

(14) " 丘陵地帯は各作戦地区を頂点とする。

ただし、(13) の例はこれも許容しづらい。

(13) ' *人間は影村一夫を代表とする。

さらに、主語を立てられないだけでなく、その被修飾語はどのような格をもっても修飾部の中に埋め込むことができない。つまり、外の関係¹³⁴を示す連体修飾節である。(13) では「人間」がその被修飾語であるため、それをガ、デ、ニ、ヲの格助詞で埋め込んでみる。

影村一夫を代表とする人間

¹³⁴ 寺村秀夫(1975)による。外の関係とは「底の名詞(被修飾語)にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができないもの」である。

→*人間が影村一夫を代表とする

*人間に影村一夫を代表とする

*人間で影村一夫を代表とする

*人間を影村一夫を代表とする

このようにいずれも不可能である。同様に (14)「各作戦地区を頂点とする三角形」に対して行くと、「*三角形が各作戦地区を頂点とする」「*三角形に～」「*三角形で～」「*三角形を～」とこれも不可能である。主語の無い外の関係であり、外の関係であるということは被修飾語を主語とすることのない連体修飾節であるということである。

4.5.3.1.5. 主語生起不可の主節—「とする」状態・仮定

次に、主語が生起不可と考えられるもののうち、「とする」が主文の末尾に来る例を見てみる。

(15) 早瀬がいった。「今夜は、とくに罐詰を支給して...(φ)...慰労会とする。」(驢馬)

「慰労会とする」と早瀬が言った以上、慰労会に決定した人物は早瀬である。そのため、主語は早瀬、つまり「私」であってもいいはずだが、実際にその文を作ると「*今夜、私が慰労会とする」のようにかなり不自然な文ができあがる。そのため、このような「とする」文は有題文であっても主語そのものは無い文だと考えられる。意味は【決定】を示している。ただし、これは自動詞的である。当該の表現は本来「名詞ガ名詞ヲ名詞トスル」のように対象のヲ格名詞が入っているのが普通だが、(15)はヲ格名詞のない文である。その点で自動詞的であり、事態の変化そのものをさしだすような表現である。

(16) ...(φ)...警視庁の命令により、青山の分院は患者の転院が済み次第閉鎖休院とする。

(楡家の人びと)

この文は解釈にいくつかの可能性を持っている。例えば、閉鎖休院という事態を引き起こしたものが、警視庁なのか、警視庁の命令を受けた別の機関なのか、あるいは話し手自身なのかは判然としない。それは以下のいずれとも異なるものである。

?警視庁が青山の分院を閉鎖休院とする。

?警視庁の命令を受けたある者が青山の分院を閉鎖休院とする。

?警視庁の命令により私が青山の分院を閉鎖休院とする。

原文は、提題によって「青山の分院は」と取り上げ、結果的に閉鎖休院となったことを述べているに過ぎない。要は、青山の分院が閉鎖休院になることを提示していると考えられ、【決定結果】という意味を示している。この文においても主語の存在は曖昧である。

(17) ...(φ)...市財政課によると、同制度は事業費 130 万円以上の工事の入札が対象で、最低価格を下回る金額で応札した業者は即刻、失格とする。 2012.3.15

この例の場合、業者を失格と決める主語は何かというと、この文の主題である「同制度」と考えるのが一応筋だが、これを主語とする文を作ると以下のように少し違和感がある。あるいは、「市行政課」を主語と考えると以下のようにできなくはないが、やはり解釈のしづきと感じられる。

? 同制度が業者を失格とする。

？市行政課が同制度によって業者を失格とする。

したがって、文脈を調べてみても主語が無いのがむしろ自然である。さらに、次の例を考えてみたい。

(18) (φ) 当刑務所は、サービスをモットーとしております。(ブンとフン)

文脈を見ても主語が何かを明確に指示することはできなかった。例えば、(18) を次のように考えることはやはりできない。

* 当刑務所がサービスをモットーとしております。

* 所長が経営においてサービスをモットーとしております。

ところが、「当刑務所はサービスがモットーです」と同意と言ってもいい。助詞のパターンは「DはBをCとする」に対し「DはBがCである」で異なるが、提題で取り上げた事柄「D」についてどうであるかを述べる文と考えられる。この他にも「文芸部は創作活動をメインとしている」「我が家は居間を寝室としている」「芸術は心を舞台としている」などの例を簡単に作ることができる。やはり、状態性のある動詞であることを示している。

以上、主語が生起不可能な「～とする」が主節の末尾に用いられる場合は、典型的には【状態】、【決定結果】をさしだす、あるいは自動詞的に【決定】を表すものである。

4.5.3.1.6. 主語が生起不可能であることの意味

さて、主語がないというのはどういうことだろうか。主語はあるがそれが重複などの理由によって潜在化しているというのは理解できるが、もともと主語そのものが要求されない文とは何なのか。

「～とする」の例文と意味的にほぼ同じ文を作例すると、以下のようになる。

(14) 各作戦地区を頂点とする三角形

- a. 各作戦地区が頂点である三角形
- b. 各作戦地区が頂点となっている三角形
- c. 各作戦地区が頂点と考えられる三角形
- e. ???各作戦地区を頂点と考える三角形

しかし、いずれもそこには主語が存在する。あるいは、eのように無理に作ることはできない。

まず同義文の述語を見ると、「～とするN」の連体修飾節は意味的には、これら「である」「なる」「考えられる(受身)」などのように「他動性のない」表現であることが見えてくる。「とする」は「する」という動作動詞であり、しかもヲ格名詞句をとることを考えれば、他動詞であるはずである。それにもかかわらず、他動性はなく「状態」を示しているということになる。形式的には他動詞であるゆえに他者に影響を与える主語(動作主)を要求するのが当然であるが、その本質は自動詞や受身、状態動詞と変わらないためにその仕手である主語を求めることがないということになる。これは、「～とする」文における重要な点として特筆すべきもののだろう。

さらに、次の例文は文脈から主語を見つけることはできる(潜在化)が、それが不自然な主語認定ではないかと考えてしまうものである。

(19) 四十歳をもって初老とすることは東洋の智慧を示している。それは単に身体の老衰を意味するのでなく、むしろ精神の老熟を意味している。この年齢に達した者にとっては死は慰めとしてさえ感じられることが可能になる。死の恐怖はつねに病的に、誇張して語られている、今も私の心を捉えて離さないパスカルにおいてさえも。真実は死の平和であり、この感覚は老熟した精神の健康の徴表である。どんな場合にも笑って死んでゆくという支那人は世界中で最も健康な国民であるのではないかと思う。(人生論ノート)

文脈から「(支那人が) 四十歳をもって初老とする」と捉えることもできる。しかしながら、これほど文脈を探って(特に後方照応)まで主語を確定しなければならない理由はどこにあるのか。私たちが文を読み理解する場合に、「とする」を行った主体をそこまでして探るだろうかと考え、このような「とする」は本来的に「誰かが」そうしたことに言及しない表現なのではないか。「そうした」ことの結果に焦点があり、「誰が」は問題とされないということである。つまり、「とする」は「する」でありながら「である」という状態性を持つものだということが、主語が潜在化している例にも見られるということである。

4.5.3.1.7. 主語の存在と「とする」の意味・用法

以上の考察をまとめると、「名詞ガ名詞ヲ名詞トする」文においては、主語が顕在化しているもの、主語が潜在化しているもの、さらに、主語が生起不可、あるいは特定する必要のないもの、の三パターンが見られた。主語が生起不可能であることは、主語が不要であることを意味し、「～を～とする」の他動詞構造を取りながら、その動作主たる主語を必要としない、他動性のない動詞である。加えて、他動性だけでなく「～を～とする」は「～が～である」と同様の意味を示す。「する」は行為でありながら、その表向きの動作性を取り去った、状態性を示す動詞であり、その点で形式動詞の形式性を示していると言っている。

さて、「名詞ガ名詞ヲ名詞トする」の表す意味について、主語との関係から改めて述べたい。以下では意味・用法は【 】の中に入れて示す。

(20) 県は 19 日、この弁当を原因とする食中毒と断定した。2012.8.20

この(20)の文は以下の二つの文に展開することが可能である。

(20)' 県はこの弁当を食中毒の原因とした。【決定】; 県→(弁当=原因)

(20)"...(ϕ)...食中毒はこの弁当を原因とした。【同定】; (弁当=原因)

主語を持つ(20)'は「決定」という意味を表わしている。一方、主語を持たない(20)"は「同定」つまり「この弁当=原因」という対象を同じものと認定する意味を示し、事実描写であり、「とする」はコピュラの役割を果たしている。次の(21)は主語がある文であり、「決定」を表すと考えられる。

(21) 体制強化策を発表した。...(J.R北海道は)過去の事故などを分析して再発防止につなげる専門部署を新設するほか、2013 年春の採用で現場の技術職を前年の 3 割増とする。【決定】; JR 北海道→(技術職=3 割増)

このような新聞の実例によく見られるものは、前の文脈に「発表した」「公表した」が述べられ、その内容について報告するという形で「～とする」が用いられるという流れがある。

つまり、「とする」は報告という文脈あるいはスタイルの中で用いられることが多い。

(1) 中日が4連勝で、貯金を今季最多の20とした。【同定】；(貯金=20)

(1) は、4連勝の結果、貯金=20である状態であることを表している「同定」と捉えることができる。このような状況は「中日」という主語が引き起こしたとの積極的な読みはなため、変化の意味とまでは言いにくい。

以上のような「とする」は「対象同定型」「取り決め型」(中山英治 2000)と言われるものである。

次に、いわゆる「仮定」を表すものはどうだろうか。

(12) (φ)最高の状態を100とすると、現在は何れくらいの仕上がりかという質問に、尾崎は「90」、木崎は「60~70 くらい」2012.8.4【仮定】

(22) (φ)かりに一町歩当りの植林費を六万円としても、この事件は約六億円の損害である。(パニック)【仮定】

前後の文脈を見ても、そう仮定しているのが「私」なのか「我々」なのか定められず、また定めるのも文意からすると正しくない。したがって、主語が無い。先行研究においても、中山英治(2000)は「仮定的事態設定型」は「主体非明示」と述べ、岩男考哲(2007)は「タイプ2(いわゆる『仮定条件』のこと)」は「動作主は生起困難」と述べた。非明示というよりは生起困難の方が妥当であろう。ちなみに、「仮定する」という実質動詞と比較すると、以下のように実質動詞の方が主語を想定しやすい。

(22)' かりに一町歩当りの植林費を六万円と(私が) 仮定しても、この事件は約六億円の損害である。

この点が「する」という動詞の曖昧性によるものなのではないかと考える。

4.5.3.2. 「{名詞ガ名詞ヲ／名詞ガ} 動詞(ヨ)ウトする」文の主語

4.5.3.2.1. 主語が顕在化している場合

(23) 専門家は「紛争の激しさや、日本軍が秘匿しようとした敗戦の実態がわかる貴重な資料」と評価している。2012.8.14【将前】

(24) 俊介は策略のむだを説明しようとして口をひらきかけたが、圧倒的な不利をさとってやめることにした。(パニック)【将前】

(25) 宮村の中には関東の登山家たちに笑われまいとする関西人登山家としての魂が眼を覚ましていた。(孤高の人)【将前】

主語は文の中に顕在化し、点線部のように指示することができる。

4.5.3.2.2. 主語が潜在化している場合

(26) 吉田さんは、爆弾を搭載できるよう改造された練習機「白菊」で体当たり攻撃の訓練を繰り返した。「覚悟を決め、両親に向けて辞世の句も詠んでいた」という。

8月15日、沖縄への出撃のために準備を進め、(吉田さんが)飛行機のエンジンをかけようとした際に、玉音放送が流れた。2012.8.16【将前】

(27) (私は)もどろろとすると呼びとめられた。(パニック)【将前】

主語が文脈の中に見出せ特定が可能なもので、潜在化と分類できる。岩男考哲（2007）でも「タイプ3『意志形+とする』」は「動作主は特定可能」としている。ところが、特定可能なものもある。

- (28) 現在の静岡県は、遠江、駿河、伊豆の3国を併合して1876年に発足した。同館市史編さん室嘱託員の梅原郁三さんによると、図解は「郡役所の位置などが明記してあり、（φ）新体制を多くの人に知らしめようとしたのではないかと

2012.8.16【将前】

潜在化している可能性を考え前後の文脈を探すが、具体的な名詞は現れない。文意をくみ取って想定するというレベルで言えば、図解を制作した人物がこの文の主語として考えられる。その場合は「図解は『郡役所の位置などが明記してあり、（製作者が）新体制を多くの人に知らしめようとしたのではないかと』という」となる。これは生起不可、つまりは不要というレベルではない。主語は文意を取って解釈するのに任されている。ただし、「する」に意志性や動作性が感じられるので、動作主である主語が一応潜在化していると捉え、ここに入れる。

なお、まったくの生起不可はこの文には見られなかった。

これらの文の意味・用法は「何かが起こる、または、何かを起こす手前の状態にある（小泉保ほか1989）」と述べられた用法であり、4章4節で分類した【将前】に当るものである。

4.5.3.3. 「文コトトする」文の主語

4.5.3.3.1. 主語が顕在化している場合

- (29) 同省は、特に発生量が多く、保管場所の確保が難しい4県では国有地を活用することとした。2012.8.21【決定】

- (30) この二つの留保条件をつけて、ぼくは彼に企画をゆだねることとした。（裸の王様）【決定】

両文の構造はそれぞれ「同省は〔（同省が）4県で国有地を活用する〕こととした」、「ぼくは〔（ぼくが）彼に企画をゆだねる〕こととした」である。これらの例では「とする」の決定の主語と決定内容の主語とは同じであるが、例えば「会社は〔小野自身がその土地を管理する〕こととした」であれば、「とする」の決定の主語は「会社」、決定内容の「管理する」の主語は「小野自身」となる。「名詞ガ文コトトする」であり、いずれも主語がある。

4.5.3.3.2. 主語が潜在化している場合

- (31) 各委員は、いじめの実態を把握するには、生徒からの聞き取りが不可欠との認識で一致。精神的負担をかけないよう配慮することを申し合わせた。（第三者調査委員会は）個人情報扱うケースも多いとして会合は原則、非公開にすることとした。2012.8.26【決定】

- (32) 同社の僚船6隻は、赤道付近でカツオ漁の途中、無線で地震発生を知り、焼津港に引き返した。日本人乗組員計約70人の多くが宮城県出身。（同社は）家族の無事は確認出来たが物資の窮乏が深刻と聞き、同県の離島や被災地を海上から支

援することとした。2011.3.22【決定】

(33) 紫の上はここ長年、自身の発願として、人々に法華經千部を書かせていた。...(紫の上は)それをいそいで供養することとした。(新源氏物語)【決定】

主語が顕在化・潜在化している例では、「する」の意味は「決定」である。加えて言えば、特に新聞の例では決定だけでなく、そのような決まりや約束が公的に締結されたというニュアンスがある。そこに公表・発表という意味も含まれるのは、「とする」には次の「文トする」に見られるような引用動詞の役割もあるためだろう。これは、後に出てくる「にする」の決定の意味との微妙な違いにも反映されている。

4.5.3.3.3. 主語が生起不可の場合

(34) ...(ϕ)... 指針では、アプリが利用者の情報を取得する場合、情報の内容や目的を明記し、利用者の同意を得ることとした。2012.8.15【決定結果】

前後の文脈を探しても、「利用者の同意を得る」という内容を決定した主体、つまり「とする」の主語を見つけ出すことが難しい。「指針では決定の結果、そうなった」という事実を差し出している表現だと考えられる。

(35) 投資家から提示された投資契約案の中に、...(ϕ)...「何年間で上場できなかったら、会社と社長は連帯して、株式を(投資家の都合のいい価格で)買い取ることとする」といった条項が、シレッと入っていることがあります。2011.8.24【決定結果】

この例も「(?が) [会社と社長が株式を買い取る] こととする」となり、「とする」の主語が「投資家」なのか「投資契約案」なのか断定することができない。その決定事項が「投資契約案」の「条項」の中でそう決まりそうになっていることを示す表現であり、「決定結果」のみを示すと言っていい。次の例も同様である。

(36) 特例法案は、被災程度が激しく、予定通り選挙を執行できない自治体に限り、投票日を 2-6 か月間延期できるとする内容。...(ϕ)... 新たな投票日は自治体の被災程度に応じて別途、政令で定めることとする。福島県の原子力発電所事故に関連し、退避要請が出されている地域についても、延期の希望を募る対象となる。

2011.3.15【決定結果】

新聞記事の中では、このような「～こととする」は多用され、「条件」「法案」「規定」「条項」「案」などの公的な文書によく見られる。したがって、このような「文とする」の場合、「する」には動作性はなく、「決める」のではなく「決まる」という自動詞的な意味を示していると考えられる。

次に、小説の例もある。

(37) その際、崔からかなり細かい条件が提示された。試合は六月九日に大邱市で行なう。百六十万の挑戦料と二千ドルのファイトマネーが交互に支払われる。内藤を含む二人分の航空券と滞在費は崔が負担する。...(ϕ)... 内藤が勝った場合のオプション、つまり興行の優先権は二次防衛戦まで崔が保持することとする。契約は来週の木曜日にしたいが、その時アドバンスを用意してきてほしい。百六十万のう

ちの六十万はほしいと崔は主張したが、私はそれを四十万に値切って了承した。

(一瞬の夏) 【決定結果】

これも「条件」「契約」といったことを示す例であるが、その構造は「(?)が[興業の優先権は崔が保持する] こととする」である。決めた主体は、文脈からは「崔と私」と推察できるが潜在化とは異なる。もともとの構造は「名詞ガ文コトトする」で「名詞ガ」が「とする」の主語である文だったが、この「名詞ガ」を敢えて問題にせず【決定結果】を示す「文コトトする」に発展したと考えることもできよう。

4.5.3.4. 「文モノトする」文の主語

4.5.3.4.1. 主語が生起不可の場合

(38) 昨年4月施行の愛知県暴力団排除条例(暴排条例)でも「...(φ)...暴力団員が組から離脱することを促進し、社会復帰の支援に努めるものとする」と規定。2012.4.1 【決定結果】

(39) 第8条で「...(φ)...大学及び高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」としている。2010.10.22 【決定結果】

新聞ではほぼ全てがこのタイプの例で主語を想定することができない。条例や法律などでそう規定されたことを意味する文で、「モノトする」に実質的意味を感じられない。また、これら「文モノトする」は先の「文コトトする」と意味がほとんど同じであり、同様に【決定結果】を示すものとなっている。

(40) 利益は長期的に一定の率で成長すると考え、...(φ)...企業は永続するものとすると、理論株価は次の式で表される。2011.5.26 【仮定】

(41) ...(φ)...仮に誰も死なないものとする。(人生論ノート) 【仮定】

(42) ...(φ)...アキレスがA点、亀がB点にいて、アキレスが亀を追いかけるものとする。(若き数学者) 【仮定】

(43) ...(φ)...すべての利益には、次のA、Bを含むものとする。(一瞬の夏) 【仮定】

(44) ...(φ)...もしも、あのドスト氏が、罪と罰をシノニムと考えず、アントニムとして置き並べたものとしたら? (人間失格) 【仮定】

小説の例は、ほぼ全て仮定の意味を表す文であった。いずれもやはり主語が想定されない。また、これらの仮定を意味する「モノトする」から「モノ」を削除しても意味的に何ら変化が起こらない。「モノトする」の方が幾分古めかしい堅い表現である。

4.5.3.4.2. 主語が顕在化・潜在化している場合

以上、「文モノトする」の実例では主語が顕在化・潜在化する例がなかなか見当たらなかった。一つの実例は、「政府は、第一項の計画の達成に必要な措置を講ずるものとする。(沖縄県の区域内における位置境界不明地域内の各筆の土地の位置境界の明確化等に関する特別措置法昭和五十二年五月十八日法律第四十号)」であり、【決定】を表すものであった。しかし、作例をすれば、決定を意味する文では顕在化がないわけではない。例えば以下のも

のである。

(45) 調査委員会は田中氏が損失を埋めるものとした。【決定】

(46) 地方自治体は企業が税率 5%を上乗せするものとする。【決定】

これらは「名詞ガ文モノトする」であり、主語の顕在化と潜在化は認められる。

4.5.3.5. 「文トする」文の主語

4.5.3.5.1. 主語が顕在化している場合

(47) 府交通道路室長は「この取り組みを足がかりに、統合に向けた作業を進める」とした。2012.3.15【引用】

(48) 平野氏は、アジアでも、法人向け融資を拡大するだけでなく、「第 2 のユニオン・バンクを持ちたい」と述べ、個人と取引する地元金融機関の買収に意欲を示した。そのうえで、全体の収益に占める海外の比率を、現在の約 25%から将来的には 40%程度まで高めたいとした。2012. 4.14【引用】

(49) 区は「協会から『獲得交渉に影響する』などと言われている」などとした。
2012.3.15【引用】

「府交通道路室長は[この取り組みを～進める]トした」の構造を持ち、「名詞ガ文トする」とまとめることができる。主語がある文である。いずれも【引用】を意味している。

4.5.3.5.2. 主語が潜在化している場合

(50) 検察側は「犯行は計画的、常習的、組織的で、極めて巧妙かつ悪質」と主張。被害は未遂 1 件を含む 23 件で計 1049 万円とし、... (検察側は) ...「長年組織犯罪を行い、規範意識が鈍磨し、再犯の恐れがある」とした。組織内の役割については、... (検察側は) ...大下被告は「社員を指揮しており、責任は重大」とした一方、岩間被告は「重要な役割を担ったが、トップの大下被告に従わざるを得なかった」と指摘した。2012.3.15【引用】

主語が顕在化・潜在化している場合の「とする」は、引用を表す。引用を表すマーカーとして格助詞トがあり、その前の補文が引用の内容である。それを受ける形で引用動詞の「する」が後続する。引用動詞「する」によってどのような引用が示されているかについては、4.6.に譲るが、「言う」「判断する」「考える」などの様々な意味を含みうるのが「する」という引用動詞である。その判断や発話を行った動作主として主語が存在するため、顕在化、潜在化の二つが可能性としてある。なお、小説には「とする」を用いた引用の例は見つからなかった。

4.5.3.5.3. 主語が生起不可の場合

(51) ... (φ) ...例えば、十三という数字の上に一ドルを置いたとする。(若き数学者)【仮定】

(52) ... (φ) ...まあ、なんとか、我慢しとおせたとする。(砂の女)【仮定】

(53) ... (φ) ...君が何かを信じるとする。それはあるいは裏切られるかもしれない。(世

界の終り) 【仮定】

- (54) ..(φ)..例えば初めて来た家政婦に自分の書斎の掃除をまかせるとする。(人生論ノート) 【仮定】

これらは全て【仮定】を意味し、これまで述べた通り仮定を意味する文では、主語は無い。

(54)「[初めて来た家政婦に自分の書斎の掃除をまかせる]と(*私が)する」となり、仮定の主語を設定すると不自然である。なお、「～とする」「～たとする」の二つの形態があるが、その意味はほとんど変わらない。構文的には「名詞ガ文トする」の「名詞ガ」がなくなっていると考えられる。

次に、文末ではなく仮定を意味する条件節を作る文についても、以下同様である。

- (55) ..(φ)..宮村があくまでも加藤と二人で北鎌尾根を狙うとするならば、今日中に肩の小屋に着いて、そこで天気の間合を見て北鎌尾根へ出かけるという手を使うしかない。(孤高の人) 【仮定】

- (56) ..(φ)..たとい山本が名を名のつたとしても、彼の名前は、未だ部内にそれほど知れわたってはいなかった。(山本五十六) 【仮定】

4.5.3.6. まとめ

以上、「～とする」文における主語について考察してきた。その結果をまとめると表1になる。

表1. 「～とする」文の主語の存在と意味・用法

| | 文型 | 主語顕在 | 主語潜在 | 主語生起不可 |
|------|--------------------------|--------------|-----------|------------------------------------------|
| 補文なし | 連体修飾節 ([名詞ヲ名詞トする] 名詞) | × | | 【状態】 |
| | 主節 (名詞ガ名詞ヲ名詞トする) | 【決定】 【同定】 | × 【同定】 | 自動詞的 【決定】 【決定結果】 【状態】 【同定】 【仮定】 |
| | {名詞ガ名詞ヲ／名詞ガ} 動詞 (ヨ) ウトする | 【将前】 | | × |
| 補文あり | 名詞ガ文コトトする | 【決定】 | | 【決定結果】 |
| | 名詞ガ文モノトする | 【決定】 | | 【決定結果】 【仮定】 |
| | 名詞ガ文トする | 【引用】 | | 【仮定】 |

一般的な実質動詞であれば、この表の主語の欄は、主語顕在と主語潜在の全てが埋まり、主語生起不可の欄が全て×になるはずである。ところが、表のとおり「～とする」文はあるべき主語の存在が無いものがあり、ないはずの主語生起不可がほぼすべて埋まるという結果となった。これは、「する」の特徴である。

ここまでの考察と先行研究の結果を比較する。

まず、中山英治(2000)では「発話引用型＝主体明示」とされたが、主体非明示(潜在化)が見られた。「対象同定型＝主体明示・非明示」はこの通りだが、それに加え「AガBヲCトする」の最大の特徴である、その結果のみ、つまりBという対象をCと同じであるということを示すコピュラ的な働き(B=C)が見られた。つまり、【状態】の用法である。「仮定的事態設定型＝主体非明示」はこの通りで、補文のあるなしに関わらず仮定する主体が存在しないという結果となった。

さらに、岩男考哲(2007)の「タイプ1(益岡隆志の『思考の意味と引用の意味を表す』＝動作主・特定可能)はこの通りだが、顕在化と潜在化と二つが見られた。「タイプ2(いわゆる『仮定条件』＝動作主・生起困難)はこの通りである。「タイプ3『意志形+とする』(三上章の『近未来』のこと)＝動作主・特定可能」もこの通りだが、顕在化と潜在化の二つがあった。

そして、大事な点は主語が生起不可能であることの意味である。「する」は動作動詞でありながら、その意味は、実は状態動詞のレベルにまで広がっており、ヲ格をとりながらそれは他動性を示すものではないという動詞の性質の特異性が指摘される。また、「～とする」文は、その内容を吟味すると動詞であれば当然求められるべき主語がそもそも求められていない。つまり、仕手である動作主は必須事項とならないという点が、主語が生起不可能であることの意味である。そのため【決定】にも、主語のない自動詞的決定と主語のある他動詞的決定の二つが見られたのである。

4.5.4. 「～にする」文の主語

「～にする」文の主語について同様に構文ごとに見ていく。構文は、補文を持たない構造として「名詞ガ名詞ヲ名詞ニする¹³⁵」を挙げ、補文を持つ構造として「名詞ガ文[動詞ル形]ヨウニする」「名詞ガ文{動詞ル形/動詞タ形}コトニする」を挙げる。

4.5.4.1. 「名詞ガ名詞ヲ名詞ニする」文の主語

4.5.4.1.1. 主語が顕在化している場合

- (57) 武雄市は、27日、指定管理者に来年4月から委託する市図書館について、改修工事に伴って11月～来年3月末の5か月間を休館にすると発表した。2012.8.28
- (58) そのうち外の象どもは、仲間のからだを台にして、いよいよ塀を越しかかる。(オツベルと像)
- (59) 節子は砂の中から拾い出したアイスクリームしゃくる道具を玩具にしている。(火垂るの墓)
- (60) もう一方は猛獣の習性をよく心得ていて、猛獣の習性を逆に利用して生けどりにするタイプ。(ブンとフン)
- (61) 私は寒いから、昼ごはんをうどんにするわ。

¹³⁵ この文型には他に「名詞ガ名詞ヲ名詞トイウコトニする」「名詞ガ名詞ヲ名詞ノヨウニする」もあるが、その代表として「名詞ガ名詞ヲ名詞ニする」を挙げた。

4.5.4.1.2. 主語が潜在化している場合

(62) 小林所長は北京大会（2008 年）後に強化委員長に就任した。日本障害者スポーツ協会の今年度の強化費は 5 億 6000 万円で、韓国の 10 分の 1 程度。最も多く分配される陸上でも 2500 万円だが、（小林所長は）やりくりしてトレーナーを常時 7 人体制にするなど、選手の支援に力を入れてきた。2012.8.28

(63) あんなあ、（僕達は）ここお家にしようか。（火垂るの墓）

(64) （南アフリカの凶悪な盗賊団『ライオン』が）女の子をつれさって奴隷にする南アフリカの凶悪な盗賊団「ライオン」のめくらの首領ホールズ（ブンとフン）

(65) （私たちが）今日の夕食はすき焼きにしようか。

全ての例文で、主語が特定可能であった。「A ガ B ヲ C ニする」文の意味は、B を C と見なすこと【同定】、B を C へと変えること【変化】、B を C と決めること【決定】である。主語が生起不可の例は見られなかった。

4.5.4.2. 「名詞ガ文〔動詞ル形〕ヨウニする」文の主語

4.5.4.2.1. 主語が顕在化している場合

(66) 日本と韓国の両政府は、1 台のトラックに両国のナンバープレートを取り付け、公道を相互に乗り入れできるようににすることで合意した。2012.8.28

(67) 父は、前の時のようになるべく来るようににするといったが、交通事情が許さないのは、避難民でごったがえした新潟までの道のり思えばわかり（死児を育てる）

「日本と韓国の両政府は〔トラックが公道を相互に乗り入れできる〕ヨウニする」という構造を持つので、そのような方向へ努力する主語は「日本と韓国の両政府」であることがわかる。

4.5.4.2.2. 主語が潜在化している場合

(68) ファミリーマートは、徳島県で開催されている「第 27 回国民文化祭・とくしま 2012」の応援商品の第 1 弾として、徳島産の野菜をふんだんに使った「鶏と野菜の甘酢あんかけ弁当」（税込み 480 円）を、四国の約 260 店舗で 24 日まで販売している。（ファミリーマートは）国文祭を PR するとともに、1 日当たりの野菜摂取量が全国で最下位クラスであることから、1 食で 1 日当たりの野菜摂取量（350 グラム）の 3 分の 1 がとれるようににしたという。2012.9.4

(69) （あなたが）すぐ見積りをとるようににしてくれ給え。（パニック）

(70) 「（私が）君の席を北村と顔を合わせないようなところ取るようににするから出ろよ」（孤高の人）

主語は顕在化しなくとも文脈の中で指し示すことが可能である。主語の生起不可能なものも見られなかった。いずれもそのような事態の実現に努めることを表すので、【実現努力】と分類する。

4.5.4.3. 「名詞ガ文〔動詞現在形／動詞過去形〕コトニする」文の主語

4.5.4.3.1. 主語が顕在化している場合

(71) 農業分野への進出を検討していた東海運が、工場によるフルーツトマトの栽培で実績がある津市の農産物生産販売会社「浅井農園」を知り、土地を借りて技術支援を受けることにした。2012.8.25

(72) 私は大学を退職することにした。(1Q84)

(73) マイケルは他人と理解し合おうとし、理解し合えなくても理解し合えたことにする。2011.10.31

(74) しかし、君たちの言うことを信じて、今回は私が間違っていたことにする。(若き数学者)

(72) は「私は〔私が大学を退職する〕コトニした」、(73) は「マイケルは〔他人と自分が理解し合えた〕コトニする」という構造を考えられる。両者の意味は異なり、補文の述語がル形の場合はこれから行うことを決定したこと（【決定】）、補文の述語がタ形の場合は事実と相違するがそう見なすこと（【仮想同定】）を意味する。いずれも主語が顕在化している。

4.5.4.3.2. 主語が潜在化している場合

(75) 実行は、計画を思いついてから四日目……（私は）いつも、行水用の水が配給されることになっている、土曜の夜をえらぶことにした。その前夜は、（私は）あらかじめ風邪をよそおって、ぐっすり眠っておくことにする。(砂の女)【決定】

(76) （あなたは）私をただ隣にいるというだけで、なんの交際もないことにして置いてくれ。(孤高の人)【仮想同定】

(77) （私が）君はご飯を食べていたことにするよ。【仮想同定】

主語が顕在化しているのと同様に、意味の違いはあるが、主語は潜在化していても特定が可能である。

4.5.4.3.3. まとめ

「～にする」文は「～とする」文と異なり、主語が生起不可である場合がなかった。いずれも主語は存在し、顕在的にあるいは潜在的に見つけることが可能であった。考察の結果を表2にまとめる。

表2. 「～にする」文の主語の存在と意味・用法

| | 文型 | 主語顕在化 | 主語潜在化 | 主語生起 |
|------|-----------------|--------------|-------|------|
| 補文なし | 名詞ガ名詞ヲ名詞ニする | 【同定】【変化】【決定】 | | × |
| 補文あり | 名詞ガ文〔動詞ル形〕ヨウニする | 【実現努力】 | | × |
| | 名詞ガ文〔動詞ル形〕コトニする | 【決定】【仮想同定】 | | × |

4.5.5. 「～とする」文と「～にする」文の主語の存在

表1と表2を比較すると、大きな違いは「～とする」文に見られる主語の不在である。あるべき主語がなく、ないことに意味がある。主語の不在が引き起こす特徴を簡潔にまとめる

と、「他動性の欠如」、「状態性の出現」による【状態】の用法、「結果への視点移動」による【決定結果】の用法、そして【仮定】である。

一方、「～にする」文の主語は、普通の実質動詞と同様に、主語の存在は特定される。その特徴は、そうではないのにそうであると認定する【仮想同定】の意味を持つ点と【変化】の意味を持つ点である。両者は、構文の違いと意味の違い、さらに本節で見たように主語の存在の在り方まで異なっていた。「～とする」文が特に先行研究で取り上げられた理由も、背景にはこのような主語不在がもたらす諸特徴のためと考えられる。

4.5.6. まとめ

以上、主語に着目して両者の違いに迫ってきたが、これによって両者が大きく異なる点を持つことが明らかになった。たった一文字「ニ」か「ト」かによって、これだけの違いをもたらすことは、やはり日本語の膠着語としての特徴によるものであり、改めて格助詞の果たす役割の重要性に気づかされる。しかしながら、実はこの違いを生むのは何も格助詞一字だけではない。このような特異性を示し多様な用法を可能にしているのは、動詞「する」の持つ形式性であることは言うまでもない。意味が規定されない故に自由であること、それを支える諸要素の力を借りるからこそ多様性が生まれること、これらが「する」の持つ力でもある。

主語の存在は当然のことのよう考えられている。あるいは、日本語の特徴として主語が省略される現象は広く知られているが、そもそも主語の必要のない文があることは興味深い事実である。そして、それが「する」文において多様に見られたことを指摘した。また、それが「～とする」文と「～にする」文の違いであり、意味や用法の違いまでを引き起こしていることがわかった。

第6節「～とする」における引用と決定・同定の連続性

本章の第4節と第5節では、「～とする」と「～にする」を比較しながら、その意味・用法や主語の特徴について考察してきた。第6節では、特に「～とする」文に見られた意味・用法のうち【引用】に注目し、その機能性を「～と言う」という実質動詞と比較して分析する。そして、引用以外の用法との連続性について考察することとする。本節の流れは、まず、「～とする」における「する」の形式性について考察し、次に実質動詞による引用である「～と言う」と比較する。そして、その結果から「～とする」の他の意味・用法である【決定】【同定】との相違について論じる。

4.6.1. 「～とする」の形式性

「～とする」の「する」はどのような形式性あるいは機能を持っているのだろうか。改めて確認したい。

形式的な動詞として、これまで形式動詞、機能動詞、軽動詞との用語が使われてきた。機能動詞とは村木新次郎（1991）にある通り、実質的な意味が希薄で概ね文法的な機能を果

たしている動詞であり、その基本は「名詞＋動詞」の連語である。そして、動詞に希薄な実質的意味は連語の名詞が担っているとされる。例えば「賭けをする」なら「賭け」が実質的な意味を表し、「する」は述語としての文法的な機能を果たすのみで、この連語は「賭ける」という動詞一語に相当する。

さて、引用を表す次の例を見たい。

(1) 県は来年度予算を 10%削減するとした。

名詞ではないが、補文「(県が) 来年度予算を 10%削減する」がその実質的意味を示す。そのため動詞「する」は意味が希薄であり、「した」「している」などテンス・アスペクトの分化を示し、述語としての文法的な機能を果たすのを主な役割としている。そして、「と」という引用標識を介在させることで文全体として【引用】の意味をなしている。このように、引用を表す「～とする」もまた、動詞の形式性と意味の希薄さを示している。

また、形式動詞という点について橋本進吉(1935)、山田孝雄(1936)、松下大三郎(1928)、時枝誠記(1950)を見ると、松下(1928)には「名詞＋と＋して」、時枝(1950)には「名詞＋と＋する」が形式動詞の例に見られる。ただし、引用の典型である、補文をトで引用する例ではない。しかし、形式動詞の概念、例えば「形式用言とは陳述の力を有することは勿論なるが、実質の甚しく欠乏してその示す属性の意味甚だ希薄にして、ただその形式をいふに止まり、その最も抽象的なものはただ存在をいふに止まり、進んでは単に陳述の力のみをあらはすに止まるものなり(山田 1936)」という定義から判断すれば、「～とする」の引用もまた形式動詞と捉えることができる。

次に、その統語論的特徴について考察する。実質的な意味を担う部分と機能動詞・形式動詞は強い結びつきを持つとされる。それを村木(1991)では具体的に「名詞＋機能動詞」とし、これを機能動詞結合と呼ぶ。そして、その結合の強さを語句の挿入、語順の交替、連体構造への変換によって示した。また、軽動詞研究においては、影山太郎(2004a,b)が定性制限と統語的操作の禁止(受動文・強調文変換の不可)によって、軽動詞であることを示した。そこで、引用の「～とする」において「～と」と「する」の結合が強いものかどうか検証する。本節では、a.語順交替、b.受動文、c.強調文、d.指示性¹³⁶の四点を統語的分析として用いる¹³⁷。a～dの全てが可能であれば、その動詞は実質動詞であると判断でき、それらが不可能であれば形式的な動詞と判断できる。

(1) 県は来年度予算を 10%削減するとした。

- a. 語順交替 ? 「来年度予算を 10%削減する」と県はした¹³⁸。
- b. 受動文 * 「来年度予算を 10%削減する」と県にされた。

¹³⁶ 影山(1993, 2004a)は名詞句の不定性を軽動詞構文の特徴として挙げる。独立した名詞は指示性を持つとし、軽動詞例えば「青い目をしている」のようにワ格名詞が動詞と一体となり述語化している場合には、その指示性が喪失していると考えられるからである。

¹³⁷ 機能動詞研究も軽動詞研究も、「名詞＋動詞」の結びつきを念頭に置くために、補文をとる「～とする」に必ずしも当てはまるわけではないが、「～と」と「する」の関係性を検証する上では有効と考える。

¹³⁸ 藤田(2001)で「主語を「～と」と「スル」の間に割り込ませることも不可能ではない」と指摘する。また岩男(2007)で「～ともしている」の実例を挙げ、「このことは、「とする」の「と」と「する」がそれぞれ、独立性を保っていることを意味する」と述べる。

- c. 強調文 * 県がとしたのは「来年度予算を 10%削減する」だ。
- d. 指示性 * 「来年度予算を 10%削減する」？
 ——そう、県がそれ（そう）としたんだ。

(2) 検察は被害は総額 1 億円とした。

- a. 語順交替 ? 「被害は総額 1 億円」と検察はした。
- b. 受動文 * 「被害は総額 1 億円」と検察にされた。
- c. 強調文 * 検察がとしたのは「被害は総額 1 億円」だ。
- d. 指示性 * 「被害は総額 1 億円」？
 ——そう、検察がそれ（そう）としたんだ。

どちらも不可あるいは不自然であり、引用の「～とする」が通常の動詞とは異なり「～と」と「する」の関係が緊密であることがわかる。したがって、引用を表す「～とする」は形式動詞と考えることができる。

4.6.2. 「～と言う」との比較

さて、「～とする」は引用を示す形式動詞であるが、一方で引用を示す実質動詞は数多くある。例えば、「言う」「思う」「伝える」「述べる」などである。それらと「する」は引用という点においてどのような違いがあるのだろうか。

「～とする」と「～と言う」を相互の置き換えによって比較したものに藤田保幸（2001）がある。藤田（2001）は、「～とする」は「～と言う」に「ほぼ同義的に書き直せる」が、「～と言う」は「～とする」の置き換えが「少なからず不可の場合が見られる」と言う。その結果、引用でありながら、その内実は他者の発言を引いて示すという典型的な引用とは異なるものであることを示した。4.6.2.では「～とする」がどのような引用かについて、実質動詞「言う¹³⁹」による引用と形式動詞「する」による引用の違いという点から再度考察してみたい。

4.6.2.1. 「～と言う」の結合度

先に「～とする」の結合度を見たが、「言う」は実質動詞であるため「～と」と「言う」の結合度は高くないはずである。実質動詞による引用文の「～と」と動詞の結合度の確認のため以下、同様の操作を行う。

(3) 太郎は「花子が学校を休んだ」と言った。

- a. 語順交替 「花子が学校を休んだ」と太郎は言った。
- b. 受動文 「花子が学校を休んだ」と太郎に言われた。
- c. 強調文 * 太郎がと言ったのは「花子が学校を休んだ」だ。
- d. 指示性 * 花子が学校を休んだ？

¹³⁹ 松下大三郎（1928）では形式動詞の中に「擬音語という」「副詞という」の「いう」を入れている。他にも「鈴木という男」の「という」なども形式化しているものであろう。この点、引用の「と言う」は実質動詞ではあるが、「言う」の意味範囲の広さは形式化と言う点で「する」に似た部分を持つことにも留意すべきだと考える。

——そう、太郎がそれ（そう）と言ったんだ。

実質動詞による引用でも c.強調文と d.指示性の操作ができない。この理由は、一つは格助詞「と」が補文と離れることができないという特徴による。もう一つは指示の場合「そう言った」となるのが普通で、ここに「と」はもはや必要ない。したがって、「～と」と「言う」は独立した要素であるが、「引用部分（補文～）」と「と」は結合していなければならないことがわかる。

4.6.2.2. 「言う」から「する」への置き換え

藤田保幸（2001）で、「～と言う」が「～とする」に置き換えることができないとされたのは、「感情表出」「働きかけ」「眼前描写」の引用文である。改めて、動詞の形式性という観点から分析してみる。以下、例文はすべて実例で新聞¹⁴⁰と小説のジャンルから検索した。「感情表出」として「～たい（願望）」、「働きかけ」として「～しようか（勧誘・提案）」「～か（疑問）」「～しろ（命令）」を取り上げる。先行研究の指摘通り、これらが置き換え不可能かどうか確かめる。

4.6.2.2.1. 「言う」が「する」に置き換え不可能な場合

置き換えが不可能だったものは、引用される補文が勧誘・提案の場合と眼前描写の場合である。勧誘・提案の補文を持つ文は基本的に会話文であり、勧誘・提案を働きかける対象が存在する。以下、実例の後に（ ）内に置き換えたものを示す。

(4) 何とかそれを目標にしようじゃないかと言った（*とした）途端、連敗。2007.1.1

(5) 物量もレイアウトの大事な側面だから、カット数の多い「千と千尋」は壁中に展示してみたらどうかと言った（*とした）り。2008.7.29

(6) あと片づけをして戻って来た与平が、掻巻でも掛けようかと云った（*とした）が、栄二はそれには及ばないと答えた。（さぶ）

一方、眼前描写文を引用した文は、目の前に起こっていることをそのまま伝えるものである。「する」の置き換えが不可能ということは、「そのまま伝える」という引用ではないことを示すものと考えられる。

(7) 北九州市の男性（69）は「昨年も来たが、今年もきれいに咲いている」と言い（*とし）ながら、盛んにカメラのシャッターを切っていた。2012.8.3

4.6.2.2.2. 「言う」が「する」に置き換え不可能と可能の両方を持つ場合

置き換えが不可能なものと同可能なものが見られたのが、「疑問」、「命令」、「願望」の文を引用する文である。

最初に、「疑問文」を引用する文を示す。

(8) 「干しヤツメはないかと言って（*として）くれるお客さんが多いのでやっている。」2007.12.13

¹⁴⁰ 新聞の例文はすべて読売新聞（YOMIURI ONLINE）より。日付だけ記載した。

- (9) 東京都知事選で4選を確実にした石原慎太郎氏は10日夜、都内の事務所で「4選して何をやるかと言った（*とした）ら、同じ事をやるしかない。2011.4.10
- (10) それが、十五世紀初めになると、十万あるかどうかと言われる（*とされる）ほどに減少する。（コンスタンティノーブル）
- (11) 食べる物もありあわせの物しか出せないがそれでもいいかと言う（*とする）ので、私は承諾して二階の、冬は若者たちでいっぱいになる部屋にありました。（錦繡）

以上が、置き換え不可の例である。置き換え可の例は極めて少なかったが以下である。

- (12) そのサブテキストであった『古事記』の起源を説くために作られた神話が、序文ではないかと言う（とする）。 2012.6.11

次に、「命令文」を引用する文である。

- (13) 「お義母さんの料理のまねをしろと言う（*とする）」 2012.6.28
- (14) 実際には、歳をとり、心身ともに弱ってきた親御さんに「好きなように言うのは我慢しろ」「子供を褒めて育てろ」と言う（*とする）のも酷なこと。2012.7.12
- 以上が置き換え不可能なもので、以下が置き換え可能なものである。
- (15) 鈴木氏は「競争が成り立たないものまで一般競争入札にしろと言った（とした）覚えはない」とも発言。2007.2.11

そして、「感情表出（願望）」を引用する文である。

- (16) 父に競技を始めたいと言った（*とした）。 2012.7.29
- (17) 「首相が皆さんの話を聞きたいと言っている（*としている）」ので今夜、集まてほしい」 2011.6.9
- (18) それが性こりもなく今度は女医者になりたいと言う（*とする）。（花埋み）
- (19) 監督官立会いのもとで、機密事項の削除をしたいと言う（*とする）のだ。（戦艦武蔵）

以上が置き換え不可能なもので、以下が置き換え可能なものである。

- (20) 首相は「超党派で議論し、自民党が言った消費税『10%』を一つの参考にしたい」と言った（とした）。 2010.7.4
- (21) 2兆円の予備費などが組み込んであるのに、菅内閣はその半分を支出したいと言っている（としている）。 2010.9.7
- (22) ヴェネツィア人だけで決行したいと言った（とした）トレヴィザン提督の申し出も、もっともに思われた。（コンスタンティノーブル）

以上、先行研究が指摘するように置き換え不可能な場合が多いが、可能なものも見られた。

4.6.2.3. 「言う」から「する」への置き換えに関する両者の比較

さて、引用の「言う」が「する」に置き換えられるものの特徴について考えてみたい。まず、文末に単独で用いられ、後ろに助動詞などのモダリティ表現がつかないものという

特徴がある。例えば、「～たいと言ったみたいだ」のように、様態のモダリティである「みたいだ」が後続するものは「する」に置き換えられない。つまり、「*～としたみたいだ」の表現を取らない。加えて、「～たいと言ったんです」の「んです」のような口語表現が「する」には不可能である(*～としたんです)。このことから「とする」は話し言葉ではなく、書き言葉であると考えられる¹⁴¹。

さらに、誰に対する伝達（もはや引用ではなく）であるかが二格名詞句で明らかな場合、あるいは二格がなくとも特定可能な場合は、「する」に置き換えることができない。その伝達の対象が曖昧あるいは全体的である場合（例えば『皆に』）、「する」が可能となる。

(23) 太郎は花子に5時に帰ると言った (*とした)。

(24) 社長は皆に創立記念日を有給休暇に変えると言った (とした)。

藤田保幸(2001)では「～トスル形式の述語『スル』が対者を示す二格をとれない」と述べ、「ある具体的な場面における誰か他者に向けての伝達行為を表すというような具体性は持たない」と指摘する通りである。

書き言葉ということと関連して、話題が政治・経済・教育・研究などの硬い場合、また、主語が公的な人物である場合も「する」に置き換えやすい。日常的で個人的な言辞の場合には「～とする」は難しいという特徴を持つ。例えば、次の(25)の主語「父」を「大臣」に変え、口語的な表現「んですが」を省いてみる。

(25) 父は農家を続けたいと言った (*とした) んですが、2007.12.13

→大臣は農家を続けたいとした。

その結果、「言う」から「する」への置き換えが可能になってくる。そして、内容を硬いものにすればさらになじみがいいと考えられる。そして、(17)は主語が公的立場の人物である点は「とする」の条件を満たすが、この文全体が会話であるために置き換えができないと考えられる。そこで、「今夜集まってほしい」という相手に対する働きかけの強い主文を削除し、さらに「皆さん」という呼びかけの言葉を省くと「とする」と置き換え可能な表現に変わる。

(17) 「首相が皆さんの話を聞きたいと言っている (*としている) ので今夜、集まってほしい」 2011.6.9

→首相が当事者の話を聞きたいとしている。

これ以外に、「言う」が「する」に置き換え不可能なものをまとめておく。

(26) むしろ私がボートをやると言った (*とした) とき、母が『別に親がやっていたからって無理にやらなくてもいいのよ。自分の好きなことをやってね』と言われた (*とされた) くらいですので…2012.6.19

(27) 医者の返事には、亮子はかならずしも寝たきりではない。ときには湯河原の親類の家に遊びに行くこともある と言 (*とし) ました。(点と線)

¹⁴¹ 研究発表など話し言葉でも書き言葉の要素が強い場合は「とする」は用いられる。一方小説は書かれたものだが、語るように書かれており話し言葉の性質は弱い。ここで言う書き言葉とは、文体的に硬いこと、報告・論評の文体であることを指す。岩男考哲(2007)も引用の「とする」が出現する「テキストタイプ」は「新聞に限られた」と述べている。

いずれも先に述べた特徴を持つと同時に、直接引用である。

(28) さあ、可哀そうと言って(*として) ごらん、言えるでしょう。(あすなろ物語)
さらにこの例は「可哀そう」という言葉を「声に出す」ことを表している。言葉を単に再生するだけの引用は「とする」にはないことがわかる。そのため、話者の知覚した感覚をそのまま表出した次のような発言についても、「とする」は引用しない。

(29) 「あ、痛い！」と言った(*とした)。

(30) 「わあ、すごいですね～」と言った(*とした)。

ところが、話者の感情ではあるが、以下のような書き言葉的な硬さを持つ表現であれば「とする」も可能である。

(31) 「それは遺憾だ」と言った(とした)。

(32) 「極めて理不尽である」と言った(とした)。

以上、「そのまま引用する」「声に出す」という意味は「とする」には無い。つまり、「そのまま伝えたのではない」という点¹⁴²が「とする」であり、さらに、文体差が両者の使い分けには関係している。

4.6.3. 「する」から「言う」への置き換え

今度は逆に「～とする」の例を「～と言う」に置き換えられるか検討する。

明らかに誰かの発言を引用したという意味の「～とする」は、小説の中では一つも見つけることができなかった。以下は新聞記事からの例である。

(33) 県は基地病院が 50 キロ圏内にある長野県と連携を視野に入れた協議を進めているほか、埼玉県とも話し合いたいとしている(?と言っている)。2012.8.3

(34) ただ、線量は低減しなかったといい、偽装はこの1回だけとした(?と言った)。
2012. 7.23

(35) 市教委は「複式学級でも存続は厳しい」として(??と言って)、2006年に再編計画に着手。「通学に時間がかかる生徒もいるだろうが、多くの友人をつくる機会が増えるので、集団生活を楽しんでほしい」とする(と言う)。2012.8.3

藤田(2001)では、「～とする」は「～と言う」に「ほぼ同義的に書き直せる」とあったが、置き換えは少々難があるものが多い。つまり、「言う」を「する」に置き換えられるレベルと、「する」を「言う」に置き換えられるレベルには差があるということである。これは、「言う」に置き換えることによって「言葉に出して述べる」という意味が前面に押し出されるため、形式動詞「とする」の持つ「何らかの表明」という意味があまりに限定されてしまうからだと考えられるのである。

ところが、以下の例は同義に置き換えが可能である。

(36) 市長は前日、事業凍結の意向を表明しており、「住民投票の必要はない」とする(と言う)意見を付けた。2012.8.3

(37) 同社は「迷惑をかけ、深くおわびする。安心して利用してもらえよう引き続き

¹⁴² 藤田保幸(2001)では「～トスル形式の引用句にとれるのは、もっぱら“判断”を述べる文」とある。

努める」とする(と言う)コメントを出した。2012.8.3

これらは「と言う」ではなくて「という」と表記の方がふさわしく、「言う」が実質的に持つ意味は薄れ、前後を結ぶ表現形式に移行している。このような形式化したレベルでは「とする」と「言う」は近くなる。

4.6.4. 「～とする」の引用

ここまでのまとめをしておく。「～とする」がどのような引用かということを明らかにすべく、実質動詞「言う」と比較してみた。その結果、次のことがわかった。「～とする」引用は書き言葉であること、硬い文体で用いられること、伝達性が弱いことの三つの特徴が挙げられる。

さらに、「する」は「言う」だけではなく、他の実質動詞とも置き換えが可能である。

(38) 今後、若い世代の目に触れるよう、雑貨店やインテリアショップなどでも販売していきたいとしている(と考えている)。2012.5.11

(39) 今後、若い世代の目に触れるよう、雑貨店やインテリアショップなどでも販売していきたいと言っている(*と考えている)。

このように「～としている」は「～と考えている」も可である。しかし、「～と言っている」は「～と考えている」と置き換えることは不可能である。「とする」が形式動詞であるということは、引用の意味に幅を持たせているという点も大きな特徴である。

そして、引用の「～とする」は通常の動詞が可能な次の表現を持たない。「*～とするのだ」「*～とするにちがいない」などモダリティ表現が後続しない。「*～としたら」「*～とすれば」「*～とすると」の条件形をとらない¹⁴³。さらに「*～とさせる」の使役表現が無い¹⁴⁴。もっぱら「～とする。」単独で用いられる。つまり、表現形式が「～とする。」言い切りだけに限定されるのである。この点は他の実質動詞による引用にはない特異な点である。

また、伝達性が弱いという点については、藤田保幸(2001)で「とする」を「そのような見解をとる、そのような知識を是とすることをもっぱら抽象的に表す」ものと説明している。また、益岡隆志(2006)では『とする』は『と言う』のような発話の引用の意味と『と思う』のような思考の引用の意味を表す、ということが予想される」と述べている。伝達性の弱い引用という特徴は、表現形式が「～とする。」に限定されることとも関連性がある。加えて、終助詞を付加する例が見つからないという事実がある。以下の作例でも不可である。

(40) 気象庁は、今年の夏は猛暑日が続くとした。(*としたよ / *としたね / *としたか¹⁴⁵)

藤田保幸(2001)は「～とする」の「引用句」である「～」には、感情表出などの働きかけのある文はとれないとした。それに加えて、(40)のように「～とする」文自体にも表出

¹⁴³ これらは引用ではなく仮定表現に変わってしまう。

¹⁴⁴ 「とされる」の受け身表現は実例に見られた。

¹⁴⁵ 「?気象庁は今年の夏は猛暑日が続くとしてたよ」は多少可能だとの判断があがるが、それでもかなり不自然である。

性が無いということがわかった。以下、「～とする」引用の特徴をまとめておく。

| | |
|--------------|---------------------------------------|
| 「～とする」引用文の特徴 | 書き言葉である |
| | 硬い文体で用いられる |
| | 伝達性が弱い |
| | 形式動詞として意味に幅がある |
| | 表現形式が「とする」言い切りだけに限定される ¹⁴⁶ |

4.6.5. 引用と決定・同定の連続性

ここまで「～とする」の引用の特徴について考察してきた。引用が発言と思考のどちらも示うことが益岡隆志（2006）で指摘されたが、引用という一つの用法内で意味の幅があるだけでなく、「とする」の持つその他の用法（決定や同定）との間にも解釈が幅を持つことが観察されるのである。

次の例は、引用と捉えるべきか、あるいは、決定と捉えるべきか、解釈に揺れが生じる。

(41) 他の診療科の医師数について、区は非公表とした。2012.3.15

(42) 検察側は「犯行は計画的、常習的、組織的で、極めて巧妙かつ悪質」と主張。被害は未遂1件を含む23件で計1049万円とし、2012.3.15

(43) 大下被告は「社員を指揮しており、責任は重大」とした一方、岩間被告は「重要な役割を担ったが、トップの大下被告に従わざるを得なかった」と指摘した。2012.3.15

(44) 「人命救助に県境はない」とする現場の独自判断で出動し、ヘリを使って命が助かった例もあった。2012.8.3

先行研究では「～とする」について、以下のようにその意味を分類している。岩男考哲（2007）は「引用文」「仮定条件」「近未来」¹⁴⁷、小泉保ほか（1989）は「ある事柄を決める」「何かが起こる、または何かを起こす寸前の状態にある」「あることを仮定する」、中山英治（2000）は「発話引用」「仮定」「取り決め」「対象同定¹⁴⁸」と分ける。

一方で、「～とする」はこれまで「引用」と「条件」という大きな二つの枠組みで論じられてきた。当然と言えば当然だが、引用の研究では引用だけを取り上げ、その他の用法については述べておらず、またその他の用法との関連性が問題にされることもほとんどなかった。しかし、「～とする」の引用とは何かを考察するために、実質動詞の「言う」と比較した結果見えてきたのは、「～とする」は単に発話を他者に引用して伝達するものではなく、藤田（2001）も指摘するように、むしろそのような見解や判断を示すという点であった。判断を示すことが引用「～とする」の意味とすれば、その他の用法である「決定・取り決め」「対象同定」もまた「判断」と言える。すべてが「判断」でひとくくりにされては分類が大

¹⁴⁶ 「～とする」「～とした」「～としている」「～としていた」などテンスとアスペクトの分化はある。

¹⁴⁷ 岩男（2007）は引用構文という立場から「仮定」「近未来」も含め論じたものとして興味深いものだが、「決定」や「同定」の用法については述べていない。本節は寧ろ後者2つこそ引用との連続性が考えられるとするものである。

¹⁴⁸ 中山（2000）では「対象同定型のトスル文」として「同社は、1990年10月、一人当たり年間休日数を120日とした」という新聞の実例を出す。

粹すぎ¹⁴⁹、また、「引用」と「決定・同定」が全く異なるものであると一線を引くほど明確な違いではない場合が、上記の例のように存在する。

そこで、「～とする」における引用と判断の関係について考察し、「決定」や「同定」の用法との連続性を明らかにしたい。

4.6.5.1. 引用、決定、同定の文構造

「～とする」が「引用」「決定」「同定」の意味をそれぞれ明確に示す場合の、文構造はどのようなものかについて整理する。

まず、引用であることが明確な文は、引用する内容（つまり『と』の前の部分）が「文」である。そして、引用箇所が「 」によってくくられると、より一層引用であることが際立つ。以下はすべて引用の意味である。

(45) 府交通道路室長は「この取り組みを足がかりに、統合に向けた作業を進める」とした。2012.3.15

(46) 第三者委員会の報告書で「隠蔽を主導した」とされた理事長への退職金支給について、「各方面からご意見をいただいて判断した」としている。2012.3.15

(47) 現在は埼玉、群馬、長野各県で行っている焼却灰の最終処分については、「相手先の自治体と協議する」とした。2012.3.15

次に、物事の取り決めや決定であることが明確な文は、「と」の前の部分が「文コト」「文モノ」であるものがその典型と言える。以下の例である。

(48) 運転手は「交通局自動車運行管理課」という同交通局にはない課名で「当該路線には乗務しないこととする」とする公文書まがいの書類を作り、家族に渡した。2012.4.5

(49) 見解では、さい帯切断は、「医療行為」にあたり、医師か助産師が行うものとした。2015.7.14

そして、「対象同定（同定）」は「と」の前の部分は名詞であり、「A（名詞）をB（名詞）とする」という構造をとるのが典型で、A=Bであることを示すものである。以下の例である。

(50) 手びねりの細工物を得意とする父 2012.8.21

(51) 白菜の漬物を感染源とする腸管出血性大腸菌 O157 による集団食中毒を受け、2012.8.20

基本的には上記のような統語構造を持つ場合には、それぞれの意味・用法の間に揺れは生じないと考えられる。

¹⁴⁹ 文を述べるということは、言わばどのような表現をとろうとそれは結局のところ話者の判断に基づくものであるため、判断という枠組み自体は分類の項目として不適切である。

4.6.5.2. 解釈の揺れる文の構造

「と」の前が文である場合には引用の意味が強く出るということから、その他の用法との間で解釈が揺れるのは、「と」の前が名詞の場合ということになる。(2) の例文をもとに考察する。

(52) 検察は被害は総額 1 億円とした。

この文を見ると、「は」が二つある。「とした」という判断の主体は一つ目の「検察は」であり、格助詞「が」のついた「検察が」を主題化したものである。しかし、二つ目の「被害は」は格助詞の何を取り立てたものかということにいくつかの可能性がある。そして、「総額 1 億円とした」は「総額 1 億円だとした」の「だ」が省略された可能性もある。これらの可能性が解釈の揺れを引き起こしていると考えられるのである。(52) を以下のような形に変え、それぞれの意味を【 】で示す。

- ア. 検察は被害は総額 1 億円だとした。【引用】
- イ. 検察は被害が総額 1 億円だとした。【引用】
- ウ. 検察は被害が総額 1 億円とした。【引用】【同定】
- エ. 検察は被害を総額 1 億円だとした。【引用＞同定】
- オ. 検察は被害を総額 1 億円とした。【同定】

アは、「1 億円」の後ろに「だ」を挿入することで補文構造を示すことができ、引用の意味が明確になる。また、イは「被害が総額 1 億円だ」が補文となり、やはり引用の意味が出てくる。その場合「～が～だ」が補文になり、その「だ」が省略であると解釈されれば、ウの引用となる。あるいは、「だ」は元々無いと解釈されればウの同定の意味が引き出される。

ところが、(52) の二つ目の「は」が取り立てたものが「被害を」だった場合は、「A が B を C とした」の文構造となり、「被害」「総額 1 億円」の各要素は「検察」という主格と一つの文をなす要素とみるため、引用の意味が生じにくいということになる。それがオである。

また、エは、「A が B を C とした」の文構造を想起させるため、同定の意味が生じるが、一方で「だ」があるために引用の意味も出てくる。どちらかと言えば、引用の意味が強く感じられるものである。

このことをわかりやすく表示するため、それぞれのまとまりを次のように示す。「 」は補文であり、空白は文の要素の区切りを示す。

- ア. 検察は 「被害は総額 1 億円だ」と した。【引用】
- イ. 検察は 「被害が総額 1 億円だ」と した。【引用】
- ウ. 検察は 「被害が総額 1 億円」と した。【引用】
- ウ. 検察は 被害が 総額 1 億円と した。【同定】
- エ. 「検察は 被害を 総額 1 億円だ」と した。【引用＞同定】
- オ. 検察は 被害を 総額 1 億円と した。【同定】

引用の意味が出現するア、イは、「検察」が「被害が1億円だ」と表明した主体である。ウは、検察は「被害=1億円」という判断を下した主体であると捉えると同定の意味が、そう判断し表明したと捉えると引用の意味が出現する。エも同様だが、「だ」の存在によって同定より引用の意味が強い。ウとエがもっとも中間的な判断になる構造と言えよう¹⁵⁰。オは、「AがBをCとする」という構造を取るため「同定」つまり「B=C」と捉えるという意味が浮上する。「市が期限を2日とした」「県警が刑事課長を同署付けとする」のような決定と同じ構造となる。以上が、いくつかの解釈の可能性を示したものである¹⁵¹。

したがって、「市は予算を1000万円とした」と「市は予算が1000万円とした」では、前者が決定、後者が引用の意味が出現する（ただし、決定の意味が消えるわけではない）。そして、「市は予算は1000万円とした」はそのどちらかがわかりづらくなる。なぜなら、「決定」も「同定」も「引用」も何らかの「判断」が関わっている。以上のように、統語構造の違いが「は」によって、あるいは補文末の「だ」の欠落によって見えなくなっている場合、特にその意味が「引用」と「決定」や「同定」の間で不透明になる。つまり、そのような連続性が「判断」とその「表明」という点において存在するということである。

また補足すれば、「仮定」もまた同様である。

(53) 六十代七十代の作品が空いっばいに枝を広げた満開の桜の木だとすると最晩年の作品は黒く太い幹に二、三輪花が咲く桜の老木であった。2012.3.15

(54) もし我々が君に〈世界の終り〉とはこうこうこういうものだと内容を教えてしまったとすると。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

(55) その可憐なうしろすがたのゆくてにまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、そだてるのだろう。（二十四の瞳）

仮定を意味する「～とする」は、条件節になっているものが代表的なものだが、上のように言い切りのものもある。これらは引用という解釈を受けることはないが、そこには判断がある。「～とする」における判断とは、基本的には「～とする」の「～」が補文だった場合は、「～」の示す内容を認定することであり、その認定が、文脈あるいは共起する語句との関係から、引用の場合は「表明」の意義が出現し、新たな実現や変化の場合は「決定」「同定」が出現する。そして、仮定は仮定形あるいは「もし」という副詞によって仮定の意味が付与されて「仮定」を出現させると考えることもできよう。

4.6.6. まとめ

「～とする」の引用について動詞の形式性を確認し、実質動詞「言う」による引用と比較した。その結果「～とする」という形式動詞による引用が伝達ではない、言わば判断に基づく表明であることを確認した。また、その違いとして、書き言葉、硬い文体、形式動詞とし

¹⁵⁰ どちらの意味かは実際には前後の文脈から決めることができることが多いだろう。

¹⁵¹ 厳密には（52）はそれでも引用の意味が全く消えるとは言えない。なぜなら、文の意味は、そこに出現する単語の意味によって規定される側面が大きいからである。ここでは、その構造面としてどのような形をとるかについて考察した。

て意味の幅を持つこと、表現形式が「～とする。」に限定されることが明らかになった。さらに、「～とする」の判断の表明という結果から、その他の「～とする」の用法である「決定」や「同定」が「引用」と連続するものであることを述べた。本節では主文末に来る「～とする」を中心に考察したため、「～として」という連用用法については述べられなかった。この点は課題として残る。

第5章「やる」との比較から見る「する」の多機能性

「する」には類義語として、具体的な動作や行為を表すのではなく、漠然と何らかの動作や行為を行うという意味の「やる¹⁵²」という動詞がある。以下のように、「する」と置き換えが可能であり、また例えば「終える」という実質的な意味を持つ動詞に比べると「やる」はその具体的な意味が欠けている。

(1) 宿題を {した／やった／終えた}。

しかし、「やる」の方は「する」のように様々な意味・用法を持てるほど、動詞の形式性あるいは機能性を展開しているかと言えば、以下のようにそうではない。

(2) 頭痛が {する／*やる}。

(3) 人に優しく {する／*やる}。

(4) 娘を医者 {する／*やる}。

(5) 毎週火曜日を定休日と {する／*やる}。

このように意味的に「する」と似ている「やる」を本章では取り上げ、それと比較することで、「する」という動詞の多機能性をさらに浮き彫りにしていく。特に、両者が言い換え可能な場合に焦点を絞ることにする。つまり、「する」が「やる」と最も類似しているところ、最も近いところを詳細に分析することで、両者の相違を探ろうとするものである。

ちなみに、両者が明らかに異なる点は上記のような文型を「やる」が持たないことであり、既に述べたようにそのような広がりには「やる」には無い。したがって、「やる」は「終える」よりは意味的に曖昧で実質性に欠けてはいるものの、「する」ほどの形式性は示すことができないのである。その点において、実質的な意味を持つ実質動詞である。

その実質動詞である「やる」と重なる部分とは何か。その重複部分は「する」にとっては実質動詞との境界線であり、「やる」にとっては一般的な実質動詞が形式動詞と最も近づく点であるとも言えるだろう。したがって、両者が共に共起する可能性が考えられる「名詞が名詞をする／やる」のようなヲ格名詞句をとる文型について以下、考察を進める。

第1節では生理現象や病理現象に用いられる例について考察する。第2節と第3節では、ヲ格名詞を非動作性名詞と動作性名詞に分け、その意味と用法を分類する。第4節では、「やる」の持つ俗語的な性質に焦点をあて「する」と比較する。第5節では、日本語教育に目を転じ、これらの「する」と「やる」の違いがどのように扱われているのか、日本語教科書を分析した。

第1節 生理・病理現象の名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」

5.1.1. 問題の所在

「する」と「やる」は、どちらも漠然とした「何らかの行為」を表す動詞であるが、両者はその意味と用法において共通する部分と共通しない部分とをもっている。本節は、その

¹⁵² 「花に水をやる」のような「与える」という意味の「やる」は除く。

異同を明らかにすることを目的とする。ただし、両者の使用範囲は非常に広い¹⁵³ので、全範囲を一度に扱うことは結局、研究を大雑把なものにしてしまい、両者の使い分けを十分に説明するものとはならない¹⁵⁴。したがって、両者の意味と用法を明らかにするうえでは、むしろ分割して考察の方が有益であろう。そのため、本節では特に生理・病理現象の表現における「する」と「やる」を取り上げることにしたい。これを特に取り上げる理由は、第1に、この表現において両者間に交替現象が見られること、第2に他の名詞群の場合よりも両者の使い分けがはっきりしていること、第3に両者はこの表現において特異な振る舞いをするにある。

ところで、「する」と「やる」の比較という先行研究は数少ない。とりわけ、意味と用法に関する研究となると、ほとんど見られないのが現状である¹⁵⁵。その中であって、森田良行（1980）は注目される。これは、「する」が生理・病理現象の表現に使われることを初めて指摘し、その説明を試みたもので、生理現象の表現について次のように述べている。

「AハCヲする」「Cヲする」のCには“生理的な現象”が入る。「息、あくび、くしゃみ、咳、しゃっくり、げっぷ、おなら、まばたき・・・をする」いずれも動作性の生理活動。平常は起こらない特異な現象「痙攣、めまい、悪寒、寒け」などは「・・・がする」の自動詞文型となる。（森田 1980）

また、病理現象の表現については次のように説明する。

当人にとって、一つの肉体的経験や病歴となるような“傷病”関係の語、「怪我、骨折、火傷、結膜炎、下痢、便秘、はしか、疫痢、盲腸、結核、マラリア、病気、流産、妊娠・・・」などがCに立つと、「君は骨折をした経験があるかい。」「大火傷をしたことがある」など、「AハCヲする／した」文型となる。

人間行為なので「やる」を使うこともできる。（森田 1980）

森田良行（1980）は、両語の別をいくらか明らかにしているが、以下のような問題点がある。

ア．「動作性の生理活動」とあるが、生理活動に動作性と状態性の別が考えられるのかということ。

¹⁵³ 例えば名詞をヲ格にとって現れる場合だけでも何百語という名詞の交替が考えられる（大塚望 1997）。また名詞の特徴や性質も様々であり、どう分類するかということだけでも大きな問題である。

¹⁵⁴ 先行研究の成果である「動作性」「意志性」「具体性」だけでは様々な用法をもつ両者の使い分けの全てを説明できない。例えば「散歩」「洗濯」はどちらも先の特性をもつが用法の上では「*散歩をやる」「洗濯をやる」になる。逆に「はしか」は先の特性が弱いにもかかわらず、「はしかをやる」を作るのである。

¹⁵⁵ 先行研究には構文論的観点からの研究、「動作性」「意志性」「具体性」などの意味論的観点からの研究などがいくつかあるが、意味と用法の詳細な記述となると森田良行（1977）がその先駆となるものである。

- イ. 「怪我…」の全てが「AハCヲする／した」文型を作るとは言えないこと、(「*はしかをする」「*結核をする」「*マラリアをする」)。
- ウ. 「怪我、下痢、便秘」が「肉体的経験や病歴」であるとは考えにくいこと。
- エ. 生理・病理現象の表現での「やる」の使用を指摘しながら、どのような場合に使われ、それが「する」とどのような関係にあるかについては説明がないこと。
- オ. 問題の発端となっている「する」は、「AハCヲする」「Cヲする」の二つの文型しか作らないのかということ。

これらの疑問は、次の三つの課題にまとめられる。

1. 「する」と「やる」のとり格と文型はどのようなものか。
2. 「Cヲする／やる」のヲ格名詞(C)について、
ヲ格名詞(C)になるものは何か、
ヲ格名詞(C)の意味的特徴は何か。
3. 「Cヲする／やる」の動詞の機能と意味は何か。

1は、先行研究では文型が「AハCヲする」「Cヲする」の二つだけだったが、それだけなのか再度整理し直す。2は、これらを明らかにすることで「する」と「やる」の生理現象と病理現象における意味・用法の分布の違いが見えてくる。また、3によって先行研究では説明されていない「する」と「やる」の機能と意味がヲ格名詞との関係から明らかにされるはずである。以下、この順番で考察を進める。

5.1.2. 「する」と「やる」のとり格と文型

「する」と「やる」のとり格と文型をまとめ直して、両者の使い分けがされている領域はどこなのか、問題点を改めて確認しておきたい。具体例を整理してみると、次の五つの文型を引き出すことができる。なお、A、B、C、D、Eはそれぞれ異なる名詞であることを意味している。また、場所(デ)、日時(ニ)、原因(デ、カラ)の格は自由に現れるので省くことにする。

I. 「Aガ¹⁵⁶Cヲする」文型

猫がくしゃみをする。生徒が欠伸をした。赤ちゃんがげっぷをする。嫁が流産をした¹⁵⁷。父が捻挫をする。母が便秘をした。

II. 「AガBニCヲする」文型

子供が腕にけがをする。私が背中に火傷をした。

III. 「AガDニCヲする」文型

犬が畑にうんこをする。太郎が布団におもらしをした。

IV. 「Eガする」文型

¹⁵⁶ 森田(1977)では副助詞(とりたて助詞)の「は」であったが、「は」は格ではないこと、また主格以外も主題化できるため、ガ格を用いた。

¹⁵⁷ 「嫁が赤ちゃんを流産をした」や「父が足首を捻挫をする」は、「嫁が赤ちゃんを流産した」「父が足首を捻挫する」のサ変動詞の方が自然なので二重ヲ格の文型は立てなかった。サ変動詞と「ヲする」との関係についてはここでは立ち入らず、あくまで「やる」との比較に焦点を置くことにする。

寒気がする。めまいがした。頭痛がする。吐き気がした。

VI. 「AガCヲやる」文型

子供がはしかをやる。息子がおたふく風邪をやった。祖父が腰をやった。選手が肩をやった。

以上のように、「する」はガ格、ヲ格、二格をとり、二つの他動詞文型¹⁵⁸と一つの自動詞文型を作る。一方、「やる」はガ格とヲ格をとり、他動詞文型を1つだけ作る。つまり、「する」の方が生理・病理現象の表現では広く使われ、「する」は自動詞・他動詞両方に使われるが、「やる」は他動詞にしか使われないということが分かる。これは、生理・病理現象の表現における両者の大きな違いである。

また、それぞれの格に立つ名詞について見てみると、ガ格名詞のAは生理・病理現象の動作者または経験者であり、ヲ格名詞のCは生理・病理現象（『する』と『やる』のCが同じであるとは言えない）である。また、二格名詞のBはAの一部分で病理現象（傷）が直接生起するところ、同じ二格名詞のDは生理活動が及ぶところである。そして、ガ格名詞のEは同じガ格名詞のAとは異なり、まず人や動物などの有情物ではない。感覚的な生理・病理現象の名詞であり、かつ、C以外である。

さて、「する」と「やる」の使い分けで問題となるのは、どちらも「AガCヲ動詞」文を作るという点である。ガ格名詞（A）は、生理・病理現象の動作者または経験者であればその選択は自由であるから、両者の使い分けには関与しないはずである。しかし、「する」と「やる」のヲ格に立つ名詞（C）はそれぞれ異なることが予想され、この選択が両者の違いや使い分けの要因になっていると考えられる。つまり、「する」と「やる」の比較研究の焦点の一つはヲ格名詞にもとめられるのである。そこで、本節では「Cヲ動詞（する／やる）」¹⁵⁹という形式を考察の対象として、以下進めていく。

5.1.3. 「する」と「やる」のヲ格名詞（C）

ここでは、ヲ格に立つ名詞は何かを明らかにし、その特徴をまとめる。なお「Cヲ動詞」に焦点を当てるので、「AガB二Cヲ動詞」と「AガD二Cヲ動詞」も一緒に考えることにする。

5.1.3.1. ヲ格名詞の使用実態

まず、「Cヲする」「Cヲやる」のヲ格名詞は、どのような生理現象あるいは病理現象の名詞であるか確認したい。生理現象や病理現象、身体部位の名詞 42 語について、その共起について表 1¹⁶⁰のようにまとめた。当該の文型を作ったときに、非文または不自然な表現にな

¹⁵⁸ II「AガB二Cヲする」文型とIII「AガD二Cヲする」文型は名詞の種類は異なるが、格パターンは同じであるため、これらは一つと考え、「～ガ～ヲする」と「～ガ～ニ～ヲする」の二つを他動詞文型と数えた。

¹⁵⁹ 丁寧な文体「です」「ます」形式が付いたものは考察外とする。また、テンス・ヴォイス・アスペクトの違いについても取り上げない。しかし、形態変化による両者の違いも結局はヲ格名詞の意味内容によるものと考えている。

¹⁶⁰ アンケートの調査結果(大塚望 1997)を参考にした。

るものを×、自然な表現になるものを○、どちらとも言えず判断に迷うものを△と記入した。

表 1. 「～ヲする」「～ヲやる」の生理・病理現象の名詞の共起

| | する | やる | | する | やる |
|-------|----|----|---------|----|----|
| 息 | ○ | × | 胃潰瘍 | × | △ |
| あくび | ○ | × | はしか | × | ○ |
| げっぷ | ○ | × | おたふく風邪 | × | ○ |
| くしゃみ | ○ | × | 水疱瘡 | × | ○ |
| しゃっくり | ○ | × | 結核 | × | ○ |
| まばたき | ○ | × | インフルエンザ | × | ○ |
| おなら | ○ | × | コレラ | × | × |
| おしっこ | ○ | × | マラリア | × | × |
| うんこ | ○ | × | エイズ | × | × |
| 妊娠 | ○ | × | 白血病 | × | × |
| 流産 | ○ | × | 心臓病 | × | × |
| 下痢 | ○ | × | 癌 | × | × |
| 便秘 | ○ | × | 胃 | × | ○ |
| 怪我 | ○ | × | 腰 | × | ○ |
| 打撲 | ○ | × | 脚 | × | ○ |
| 火傷 | ○ | × | 目 | × | ○ |
| 骨折 | ○ | × | 肩 | × | ○ |
| 捻挫 | ○ | × | 肺 | × | △ |
| 病気 | ○ | × | おなか | × | × |
| 大病 | ○ | ○ | 咽喉 | × | × |
| 盲腸 | × | △ | 頭 | × | × |

表 1 から、生理・病理現象の表現「A が C ヲする／やる」において、「する」と「やる」の現れる領域は「大病」を除けば、重複なく二分されていることがわかる。

5.1.3.2. 「する」のヲ格名詞（C）の意味的特徴

表 1 から「する」のとするヲ格名詞は、生理現象を表す名詞群と外傷を表す名詞群であることがわかる¹⁶¹。

生理現象を表す名詞群には「息、あくび…」「妊娠、流産」「下痢、便秘」などがある。「妊娠、流産」は誰にでも起こる生理現象ではないが、生得的にその現象の可能性を持つことから、広い意味で生理現象と言ってよいであろう。また「下痢、便秘」は、症状のひどいもの

¹⁶¹ 「する」のヲ格名詞には具体的な病理現象の総称である「病気」、そして「大病」もあるが、病理現象の名詞はこれら以外にはない。

は病原菌によって引き起こされた病気とも言えるが、その場合には単に下痢というよりも何らかの病名がつけられる可能性がある。すなわち、これらは日常的に生じる生理現象と捉える方が妥当である。

一方、外傷を表す名詞群には「怪我、火傷、骨折…」がある。生理現象に比べると外傷は外からの作用によって引き起こされるもので、内在的な可能性ではない。そして、外傷を表す名詞の全てが「する」のヲ格に立つわけではなく（*外傷をする、*擦り傷をする）、ここに属するものの多くは、形態的にサ変動詞語幹に相当する名詞であるという特徴がある（『怪我をする』→『怪我する』）。

以上、これら二つの名詞群に共通する特徴とは、日常にかつ頻繁に起こりうる現象であること、繰り返し生じる現象であることの2つが挙げられる。これを「日常性」「頻発性」という特徴として抽出する。

5.1.3.3. 「やる」のヲ格名詞（C）の意味的特徴

表1から、「やる」のとするヲ格名詞には、「盲腸、はしか、おたふく風邪…」の病理現象を表す名詞群と、「腰、膝、肩…」の身体部位を指す名詞群とがある。

病理現象を表す名詞群は、その特徴から二つに分けられる。一つは「はしか、水疱瘡、結核…」の名詞群であり、もう一つは「盲腸、胃潰瘍…」の名詞群である。前者は病原菌によって引き起こされる、伝染性のある病理現象である。しかし一般的には、死亡するような不治の病ではなく、多くは幼児期に誰もがかかるような病気である。後者は、病原菌によって引き起こされるような病理現象ではないが、前者同様、治癒の見込みのない重病に値する病理現象でもない。しかし、入院もしくは手術を要するような病気であると言えよう。これらに共通する特徴は、「治癒する」と認識されているような病気であること、何度も繰り返し起こるのではなく「病歴」になるような病理現象であることの二つである。これを「する」のヲ格名詞と比較すると、その特徴は「非日常性」「一回性」ということにあると考えられる。

そして、身体部位を指す名詞そのものは生理現象でも病理現象でもないが、「AがCヲやる」という文を成すことで、外傷や身体的障害を引き起こすという意味を出現させる表現である。したがって、やはり病理現象の表現を作るものとして捉えるべきである。これには、例えば「胃、心臓、腸…」など身体の内側を指すものと、「腰、肩、目…」など身体の外側を指すものがある。「やる」のヲ格名詞になるものの多くは、身体の外側の部分である。内側では「胃」以外は不自然になる場合が多い。慣用的に定着した用法である可能性もあるが、その理由は判然としない。

5.1.3.4. 「する」「やる」をとらないヲ格名詞

先行研究では「コレラ、マラリア、癌…」などの病理現象を表す名詞群は、「する」もしくは「やる」のヲ格に立つとされた。しかし、これらがヲ格に立つことはかなり難しいと言わざるをえない。

これらに共通する特徴としては、治癒の見込みの非常に低い病気であり、一般的に死に至

ると認識されているような病気であることを挙げることができる。

この他に、先行研究では取り上げられていないが、「風邪、鼻水、涙、嘔吐、虫歯、喘息…」などはヲ格名詞にならない。これらは個別的であり、共通する特徴は見出しにくい。

5.1.3.5. ヲ格名詞（C）のまとめ

森田良行（1980）では「する」と「やる」は交替可能であるとされている。しかし、これまで見てきたように、両者はともに行為を表す動詞でありながら、生理・病理現象の表現を作るときには、概ね「交替不可能」であることが分かった。「する」は病理現象・身体部位の名詞をヲ格にとることはなく、逆に「やる」は生理現象・外傷の名詞をヲ格にとることはない。また、ヲ格名詞の意味的な特徴は「する」が「日常性」「頻発性」、「やる」が「(病の)治癒性」「病歴」というものであった。以上の結果をまとめたものが表2である。○は「Cヲ動詞」を作るもの、×はつくらないもの、△は判定の揺れるものである。

表2. 生理・病理現象の表現「AガCヲする／やる」の相違

| 意味的特徴 | ヲ格名詞 | ヲ格名詞の例 | する | やる |
|-------------|------|--------------------------------------------------|----|----|
| 日常性 頻発性 | 生理現象 | 息、おしっこ、うんこ、おなら、げっぷ、あくび、しゃっくり、まばたき…流産、妊娠、下痢、便秘、咳… | ○ | × |
| | 外傷 | 怪我、火傷、捻挫、打撲、骨折… | ○ | × |
| 病の治癒性 病歴 | 病理現象 | 病気 | ○ | × |
| | | 大病 | ○ | ○ |
| | | 盲腸、胃潰瘍 | × | △ |
| 致死 | 伝染性 | おたふく風邪、はしか、結核… | × | ○ |
| | 重病 | マラリア、コレラ、ペスト、百日咳、エイズ… | × | × |
| | | 心臓病、白血病、血友病、癌… | × | × |
| | 身体部位 | 目、腰、肩、胃… | × | ○ |

5.1.4. 「する」と「やる」の機能と意味

ここではヲ格名詞（C）と「する」「やる」との関わりを機能動詞¹⁶²という観点から見ていく。あわせて、「する」と「やる」が示す意味についても考えたい。

5.1.4.1. 「する」の機能と意味

5.1.4.1.1. 「する」の機能

生理現象の表現における「する」の表す漠然とした動作の意味を限定し、実質的な意味内

¹⁶² 機能動詞は岩崎英二郎（1974）で取り上げられ、村木新次郎（1980）で詳細かつ体系的に研究されている。

容を示しているのはどこかと言えば、それはヲ格名詞ということになる。このように「する」は、名詞と結合することにより実質的な意味が名詞に示され、動詞自体はおおよそ文法的な機能を果たしており、いわゆる「機能動詞」と考えることができる。例えば、「あくびをする」では実質的な意味はヲ格名詞の「あくび」によって示され、「する」は文法的な機能だけを担っている。

5.1.4.1.2. 「する」の意味

このような動詞の機能的特徴から、「する」は、ヲ格名詞を切り離してはその意味を記述できない。そこで、「Cヲする」全体を視野に入れて「する」の意味を考えることにする。ただし、実質的な意味の中心はヲ格名詞にあるので、あえて「Cヲする」の意味を記述するとなると、いささか不自然な表現にならざるをえないが、解釈されるおおよその意味として表すことにする。

「する」の表す意味は、生理現象でも外傷でもほぼ同じである。例えば「あくびをする」は、「あくび」という生理現象が生じることを表す。あるいは、例えば「下痢をする」は「下痢」という日常的な病理現象が生じその状態になることである。外傷の場合は、例えば「骨折をする」は「骨折」という現象が生じて、そのような骨が折れた状態になることを意味する。そのヲ格名詞が瞬間的に生じて終わるような現象か、生じてある状態を持続する現象かによって多少の違いはあるが、このような「Cという現象が生起すること、生起しその状態になる」ことを表している。

5.1.4.2. 「やる」の機能と意味

「やる」は、その機能を考える上では先に意味を明らかにする必要があるので、意味を先にまとめる。

5.1.4.2.1. 「やる」の意味

病理現象の表現における「やる」も「する」同様、「Cヲやる」全体から動詞の意味を考えることにする。

「やる」の表す意味は二つある。一つは、伝染性の病理現象や入院・手術を要するような病理現象がヲ格に立ち、「Cヲやる」の形式をとるときの意味である。ただし、その病理現象は治癒することが前提となっているようなものである。そのような病理現象(C)が生じ、そのような状態(C)になり、治療を受けたり体が回復したりして「治る」という一連の過程を含んだ、「病歴」と言えるような「経験」を意味している¹⁶³。例えば、「子供がはしかをやった」では、単に子供がはしかにかかることだけではなく、はしかという病気の状態になり、治療などをして治るということまでを表すと解釈される。これは、「*病気をやった」が不可なのに対し、「大病をやった」が可能であることの説明にもなる。つまり、「大病」が

¹⁶³ 「やる」は過去形「やった」の形式で使われることが多い。その理由は、ヲ格名詞の意味内容が非過去形の表す基本的なテンス的意味（未来）と相容れないためだと考えられる。

病歴として「経験」と言うに足るものであるということが、「やる」との共起を許している要因であると考えられるのである。また、同じ伝染病でも「マラリア、ペスト、エイズ…」は治る病気であるという認識が低い。同様に入院・手術を必要とするような「心臓病、白血病、癌…」も治癒の可能性は低く、治る病気であるという認識をされていないのが一般的である。「やる」が病理現象の発症から完治までを表すとすれば、完治するという認識のない、このような重病には「やる」は結合しにくいということになる（「*エイズをやる」「*癌をやる」）。

しかし、病気を克服したという経験があるならば、その限りではない。例えば「私は若いころマラリアをやった」と言うこともできる。したがって、「Cヲやる」という表現は、ヲ格名詞が一方的に「やる」との共起を決定づけるわけではなく、「Cヲやる」全体で「病歴」や「経験」という意味を表わせる場合に可能になる表現である。

もう一つの意味は、身体部位を指す名詞がヲ格に立ち「Cヲやる」の形式をとるときである。例えば「父がストレスで胃をやる」の場合、父がストレスのために胃を痛める、悪くする、病むということを表すと解釈されよう。あるいは「農作業で腰をやってしまった」は、腰を痛める、悪くするという意味である。これらの身体部位をヲ格に取る場合は、「治る」過程までを意味していない。

5.1.4.2.2. 「やる」の機能

先行研究で「やる」を形式動詞または機能動詞として位置付けたものはない。その理由は、「やる」には「与える」や「移す」という実質動詞としての在り方があるからだと考えられる。しかし、病理現象の表現における「やる」を見てみると、実質的な意味が希薄かつ漠然としている。そして、その希薄な意味を補足し、漠然とした意味を限定するのはヲ格名詞である。この点から、少なくとも病理現象の「やる」は「する」同様、機能動詞の側面を持っているということになる。

先述したように「はしかをやる」は、はしかの発症から治癒までを一つの過程として含み、「経験」という意味を表している。この「経験」という意味は、ヲ格名詞の表す事柄（はしか）以上の意味であり、その意味は「はしかをやる」という語結合によって初めて生じる意味である。したがって、「やる」という動詞自体が「経験する」という意味を持つわけではない。もし「やる」が「経験する」という実質的な意味を持つ実質動詞だとすれば、ヲ格名詞にはその「経験」という行為を受ける様々な名詞が立ちうるはずであるが、ヲ格に立つのはあくまでも病理現象の名詞に限られている。したがって、「失恋を経験する」という意味で「*失恋をやる」とは言えない。すなわち、「やる」はこの用法においては機能動詞であると考えられるのである。

一方、「父がストレスで胃をやる」は、胃を「痛める、悪くする、病む」などの意味を表し、「やる」という動詞部分に実質的な意味が担われていると考えられなくもない。そのため、このような意味が実現されるのはヲ格名詞が身体部位のときだけではない。すなわち、「痛めつける」対象であれば、どのような名詞でもヲ格に立てることができる。例えば、「敵をやる」、「あいつをやる」などのように可能である。こう考えると、「やる」は実質動詞で

あるとも言えるということになる。一つの動詞が実質動詞であったり、機能動詞であったりすると言うよりも、ヲ格名詞によって、より強く機能性を示す場合と機能性だけでなく一般的に意味と機能とを示す場合とがあるとすべきである。

よって、「やる」は機能性を示す場合と示さない場合とがあると考えられるのである。

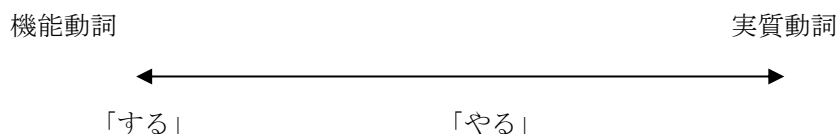
5.1.4.3. 「する」と「やる」の比較—機能と意味—

ここまでは「する」と「やる」を別に考察したが、ここでは両者を比較し、その相違をまとめる。

5.1.4.3.1. 「する」と「やる」の機能的相違

これまでの機能動詞論に則るならば、生理・病理現象の表現における「する」は機能動詞という働きをもち、「やる」は機能動詞と実質動詞という働きを持つことになる。つまり、両者は機能動詞という働きをもちながらも、「する」はより機能動詞的働きを示し、「やる」はより実質動詞的働きを示しているということになり、それを図示すると以下のようになる。

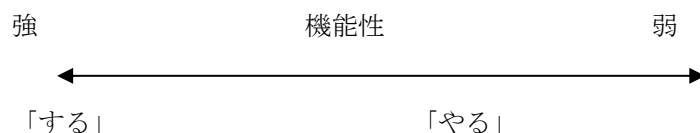
図1. 生理・病理現象の表現における「する」と「やる」の機能（機能動詞論）



この説明は、実は矛盾をはらんでいる。図の矢印は動詞の形式性あるいは機能性の強さと段階を示したものであるため、本来ならばこの両端にあるべきなのは、その機能性や形式性の強弱であるべきである。機能動詞論にあてはめると、当該の「やる」は実質動詞と機能動詞という二つの動詞であるということになってしまう。一つの「やる」という動詞が実質動詞と機能動詞という二つの動詞にまたがって分類されてしまうというのは、動詞の枠組みとしては妥当とは言えない。しかも、これらは二項対立を成す動詞である。

したがって、「やる」の特徴を機能動詞論にあてはめて述べると、「実質動詞としての用法」と「機能動詞としての用法」があることになり、動詞が「用法」に変わっているのである。また、動詞の性質はそのために「実質動詞寄りの」「実質動詞的な」あるいは「機能動詞寄りの」「機能動詞的な」という表現を用いざるを得なくなる。それは機能という点では明らかに矛盾である。本研究では1つの機能性の幅で「やる」を正しく位置付けたい。同じような図で示すとすれば、以下のようなになる。

図2. 生理・病理現象の表現における「する」と「やる」の機能（多機能動詞論）



このように捉えれば、どのような動詞でも一つの機能性というスケールの中で、一律にその機能性や形式性の幅を捉えることができるはずである。

5.1.4.3.2. 「する」と「やる」の意味的相違

「Cヲする」の実質的意味はほぼヲ格名詞（C）が担うため、「する」自体は漠然とした行為であることを意味している。

一方、「Cヲやる」の実質的意味は、ヲ格名詞（C）だけでなく「やる」にも担われている。つまり、「経験する」や「痛める、悪くする、病む」という意味を表している。ただし、ヲ格名詞がその実質的な意味を担うと言っても、あるいは、動詞が実質的意味を担うと言っても、それはあくまでも「～をやる」という語結合であって、通常の動詞のように、担う意味を目的語と動詞の二要素に明確に分けられるものではない。したがって、「はしかをやる」で「はしかにかかったことがある」という意味を示すのである。その意味において、動詞単独で「やる」が「経験する」と同じように実質的意味を担って機能するかと言えば、それは不可能である。先にも述べた通り、経験や病歴に値するような病気を表す名詞をすべてヲ格名詞に取れるわけではないからである。

一方で、「腰をやってから、どうも動けなくなった」「ストレスで胃をやる」のように、ヲ格名詞に身体部位を表す名詞を立てるものがある。「やる」はヲ格名詞を対象にした「予害」を表す。そのため実質的な意味が担われている。

しかし、「やる」は単独で用いられるとこれらの意味を表すことが不可能であるため、一般的な動詞とは異なっている。例えば、「作る」は「作ったんだよ」だけでもその意味は明確であるが、「やる」は「やったんだよ」だけでは、病気の経験や痛めるという先ほどの意味は出てこないからである。

以上の考察から、「やる」は機能性を強く示す用法も見られるが、そうではなく語彙的な意味を持つ動詞としての用法もあるため、機能性としては弱い動詞であるということになる。一方、「する」は機能性の強い動詞である。

5.1.5. まとめ

本節では、「する」と「やる」の用法の一つである生理・病理現象の表現を取り上げ、両者の取るヲ格名詞の違いを明らかにし、その意味と機能について考察した。その結果、「する」の方は使用範囲が広く、自動詞・他動詞として使われること、「AガCヲする」文型では生理現象・外傷の表現で使われ、そのヲ格名詞の意味的特徴は「日常性」「頻発性」であることがわかった。一方、「やる」は他動詞としてのみ使われること、「AガCヲやる」文型では病理現象の表現で使われ、そのヲ格名詞の意味的特徴は「(病の)治癒性」「病歴」及び身体部位であり、「非日常性」「一回性」であった。

そして、「する」は機能性の強い動詞、「やる」は機能性の弱い動詞としての働きを示すものであった。

第2節 非動作性名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」

「する」と「やる」は非常に使用範囲が広い¹⁶⁴ため、第1節に続き、第2節でもその範囲を分割して考察を進めることとする。

第2節は、考察の対象となる形式を第1節と同様「～ヲする／やる」に限定する¹⁶⁵。この形式は「する」と「やる」の交替が可能なものが多く、その使い分けが最も曖昧かつ重複する部分であるため、先行研究でも多くの問題を残している。更に、そのヲ格に立つ名詞にも様々なものが考えられるため、「～ヲ」の名詞を「動詞・形容詞と派生関係にない名詞、及び現象を表す名詞以外の名詞」つまり「非動作性名詞」に絞ることとする。よって、第2節では、このような非動作性名詞をヲ格にとる場合の「する」と「やる」¹⁶⁶について、両者の意味と用法の異同を明らかにすることを目的として考察するものである。

5.2.1. 先行研究と課題

「する」と「やる」についての先行研究は少なく、意味・用法に関するものとなると森田良行(1977)を除いてはほとんど見られないのが現状である。森田(同)では、特に「する」について詳細に記述されており、「する」の作る文型ごとにそれぞれの格に立つ名詞の種類と、動詞の表す意味について述べている。

本節の考察対象である「～ヲする」は、森田(同)の「AハCヲする」の一部と「BニCヲする」の項にあたる。まず、「AハCヲする」について『『する』対象(C)には名詞が来るが、その名詞の意味範囲、意味内容に応じて『する』の意味も動く。』とし、いくつかに分けてその意味を記述している。それを以下に森田(同)から抜粋して挙げる。

- (1) 状態を表す無意志的な「する」:「対象とする人や動物の身体部分がある様相を呈していること」「格好、様子、表情、態度などの外観・外見に表れた特徴や、主体が所有する固有の性質・様相などをCに立てることもできる」
- (2) 行為と状態を表す意志的な「する」:「装身具などを身につけることを表す」「身体の外面的状態となる」
- (3) 行為を表す意志的な「する」:「(ア) ”ある任務・役職・職業につく。商売などを営業する”」「(イ) ”日常の動作・行為・活動をなす”」

更に「BニCヲする」では『『包丁の背でたたいた豚肉に塩・胡椒をします』のような例

¹⁶⁴ 「NPガNPヲV」「NPガNPニNPヲV」「NPガV」「NPガNPヲNPニV」など多くの構文があり、その上、ヲ格をとる構文だけを見てもヲ格名詞になりうるものは数も多く、その性質・種類も様々である。

¹⁶⁵ 生理現象や病理現象を表す用法については、第5章第1節で考察したため、ここではそれ以外の用法を扱うこととする。

¹⁶⁶ 本節では「する」と「やる」の比較をするので、両者のヲ格に立たない名詞については基本的には考察外である。また場所・方角・部分を表すような名詞は「する」と「やる」どちらのヲ格にも立てるが、それは文中には現れないある動作を行う場所・方角・部分を示すにすぎず、他の名詞とは異質なので省く。例えば「川向こうをする／やる」の場合、どんな動作を行うのかこれだけではわからない。つまり、動作内容はヲ格名詞ではなく、この語結合の外の要素、例えば清掃作業の場面での発話であれば、その場面もしくはコンテキストによって「清掃」という行為であることがわかり、「川向こう」が「清掃の場所」になるのである。それは言わば、ある動作行為の部分対象である。

もまれにはある」とし、「ふつう品物はCに立たない」と説明している。

一方、「やる」については『ヲ』格に立つ語は行為を表す名詞で（略）意志的な動作・行為によって成立する状況に限られる。」と述べるに留まり、用例も「する」に比べると少ない。このように非常に重要な指摘が多いものの、以下の点が疑問として残る。

- ・「～ヲする」のヲ格名詞にはどのような性質の名詞がどこまでの範囲で立ち得るのか。
- ・これに関連して、(イ)「日常の動作・行為・活動」とは全ての日常の動作・行為・活動を指すのか。あるいは、その日常の動作の範囲は決まっているのか。
- ・「～ヲやる」のヲ格名詞には行為を表す名詞しかないのか。
- ・(3)は「やる」への言い換えが大体可能だとするが、どの程度可能なのだろうか。
- ・「その名詞の意味範囲、意味内容に応じて『する』の意味も動く」とあるが、どのような意味範囲、意味内容に応じて、どう動くのか。「やる」にも同じことが言えるのか。

これらの点から、次の課題が導き出せる。

- ①「する」と「やる」のヲ格名詞の記述と分類。
- ②「～ヲする」「～ヲやる」の用法の記述と以下の考察。
 - i. ヲ格名詞はどのような性質を持つか。
 - ii. その表す意味は何か。

次に、「する」と「やる」についての比較研究ではないが、「する」のもつ動詞としての機能について重要な指摘をした研究がある。それが、村木新次郎（1980、1991）に見られる「機能動詞¹⁶⁷研究」である。そこでは「する」は「典型的な機能動詞（同 1991）」とされ、「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞（同 1991）」と定義づけられている。これまでの「する」と「やる」の研究では動詞自体が示す機能についての言及があまりなかったことを踏まえ、新たにこの機能動詞という概念を導入し、「する」と「やる」の機能的な相違についても考察していきたい。

村木（同）から得た課題としては、次の二点が挙げられる（課題③④としてまとめる）。

- ③「する」は常に典型的な機能動詞として働くのか。また「やる」に関する記述は見られないが、「やる」にも「する」と同様の機能があるのか。

そして、動詞の「実質の意味の空疎化にはいろいろな段階がありうる（同 1991）」と述べていることから、

- ④「する」と「やる」は実質的な意味の空疎化という点でどのような段階を示すのか。あるいは、どのような意味の連続体をなすのか。

③と④を明らかにする作業では、「実質の意味のありなしによって、実質動詞と対立する（同 1980）」という記述に従い、実質の意味の有無を判断基準とする。

先行研究から得られた以上のような①～④の課題を明らかにすることを目的として、考察を進める。

¹⁶⁷ 機能動詞は岩崎英二郎（1974）で取り上げられ村木新次郎（1980）で詳細かつ体系的に研究された。

5.2.2. 考察の対象

前節で課題が明らかにされたが、「する」と「やる」のヲ格に立つ名詞には様々な性質¹⁶⁸のものが考えられるため、考察の対象を更に絞り込む必要がある。

先行研究の中には「する」と「やる」のヲ格名詞について次のような指摘がある。『～をする』の対格名詞は典型的に動作性のものである（佐藤琢三 1995）。また、機能動詞研究の側から「する」は機能動詞の典型例であり、その「機能動詞と結びつく名詞は典型的には行為を表す名詞である（村木新次郎 1991）」。また、森田良行（1977）では「やる」の『ヲ』格に立つ語は行為を表す名詞であるとされる。このように、特に「～ヲする」あるいは「～ヲやる」のヲ格名詞が「動作性」という性質を典型的に持つという指摘がなされている¹⁶⁹。それでは、逆に典型的ではない、この他の名詞はどのような性質を持ち、またどのようなものがあるのだろうか。

そこで、本節では、典型的ではない方に両者の相違を説明する事実が潜んでいるのではないかと考え、「動作性」以外の名詞に焦点を当てて考察していくことにする。

さて、この「動作性」以外の名詞を抽出する方法について述べたい。まず、動作性の名詞を規定する。次に、名詞全体からこの動作性の名詞を差し引く。そうすることによって、非動作性の名詞を選定する。但し、「動作性」の判断を内省だけに頼ると判定に揺れが出るものもあるため、形態的な特徴をその判定材料の基本とする。村木新次郎（1991）の「動作性名詞」の考察を基に、ひとまず動作性名詞を次のように規定する。

【動作性名詞】

・動詞と派生関係にある名詞

サ変動詞語幹：練習、決定、影響、実験、手術、洗濯、運動、相談、休憩など

動詞の連用形：盗み、代わり、賭け、脅し、戦い、笑い、伸び、続きなど

合成語の前要素：焚き火、利き酒、編み物、食べ方、うめき声、悔し涙など

合成語の後要素：種まき、逆立ち、草取り、歯磨き、早食い、共働きなど

二つの動詞性成分合成語：買い食い、行き来、立ち読み、放し飼いなど

・形容詞¹⁷⁰と派生関係にある名詞：元気、自由、楽、不幸、幸せ、けち、親切など

・形容詞に接尾語「さ」を付随させた名詞：だるさ、痛さ、暑さ、寒さ、暖かさ、高さ、恐ろしさ、恥ずかしさ、傲慢さ、謙虚さ、愚かさ、不気味さ、さわやかさ、かわいさなど

・形容詞に接尾語「み」を付随させた名詞：痛み、楽しみ、高み、甘み、面白み、かゆみ、悲しみ、温かみ、厚みなど

・現象を表す名詞

自然現象：稲妻、落雷、津波、地震、夕立、吹雪、竜巻、雷雨、日没など

¹⁶⁸ 先行研究では「具体性」「動作性」「意志性」の観点から述べられることが多かった。

¹⁶⁹ 金子比呂子（1985）は話しことばだけを調査した結果、『やる』の『を格』に立つ名詞は行為、動作を表すものが多いだろうと予測していたが「実際には『を格』に立つ名詞は実に多様であり、（中略）行為の対象が多かった。」と述べている。「行為の対象」という言い方には曖昧さがあるが、「やる」のヲ格名詞にはこのような多様性が見られることは本研究でも確認されたことである。

¹⁷⁰ 形容詞には形容動詞（ナ形容詞）も含むものとする。

生理現象：息、あくび、くしゃみ、まばたき、おなら、いびきなど

病理現象：咳、吐気、悪寒、じんましん、大病、盲腸、はしかなど

感覚・知覚表現：感触、音、気配など

以上の名詞群は、動詞または形容詞と派生関係にある、言わば形態の上から明らかに動作性を具えた名詞と、形態からは派生関係にはないが現象という動作性を表す名詞である。これに加えて「～ことヲする／やる」の「こと」でうける名詞節は動作性または事象性をもつので、上の中に入るものとした。

よって、ここでは上記のような名詞群以外の名詞がヲ格となって「する」または「やる」と結合する表現に注目して、両動詞の意味と用法について考察する。典型的ではないとされる用法を考察することによって、新たな側面を明らかにできると考えるものである。

5.2.3. 考察の手順と方法

改めて、ここで考察の手順と方法についてまとめておきたい。5.2.2.で、考察の対象をまず形態的な特徴を基に抽出した名詞群に絞った。次に、それらの中で「～ヲする」もしくは「～ヲやる」を作り得る名詞群だけを残し考察する。その考察にあたっては、「～ヲする」「～ヲやる」という、名詞と動詞が結合した形式（語結合と呼ぶ）における、名詞の性質と動詞の機能について見ていくものとする。まとめると次のようになる。

1. 主として形態上の特徴を基にして「非動作性名詞」を抽出する
2. 1の中で「～ヲする」「～ヲやる」を作るものを抽出する
3. 「～ヲする」「～ヲやる」におけるヲ格名詞の機能上の特徴（性質）、及び動詞部分の機能を実質的意味の有無を基に考察する

しかし一方で、最初の出発点として3を選び（1、2の手順は全くとらずに）、「～ヲする／やる」という語結合を見たときに名詞部分が非動作性名詞であると判断できるような場合だけを考察するという方法も考えられる。3から出発する方法というのは、名詞の性質は単独の姿ではわからず、語結合の中で初めて決定付けられるものであるという考え方に基づくものであり、それは妥当な考え方でもある。

しかし、あえて本研究で3からの出発という方法をとらなかったのは、次のような理由による。5.2.1.の課題でも述べたが、動詞の機能、特に先行研究でも指摘されていた「実質的意味の空疎化（村木 1991）」という様々な段階の姿、あるいは機能動詞から実質動詞までの連続性といったものを捉えるためには、1→2→3という流れが有効だと考えられるからである。

もし3の方法だけをとった場合、ヲ格名詞はすべて非動作性、つまり具体的な「物」などを表すモノ名詞しか考察対象に入らないために、動詞部分は実質的な意味の空疎化など見られるはずもなく、すべての用法における動詞は実質動詞という結果しか得られないことが大いに予想される。そして、このことによって、形態的あるいは意味的に一見、非動作性だと感じられる名詞が語結合においては動作性という性質を十分に示し得るという用法（これがまさに途中の段階あるいは連続性の一部なのであるが）との接点を切り捨てるこ

となる。以上の理由から、「する」と「やる」を考察する本研究では、あえて1→2→3の手順を踏むことにした。

以下、用例は実例として文学作品 30 点（本節掲載分は内 25 点）、シナリオ 9 点（本節掲載分は内 8 点）、エッセイ 1 点、辞書 1 点から抽出し、実例を補うものとして内省によって判定¹⁷¹した名詞を付け加えた。なお、一つの名詞がいくつかの用法に重複して用いられることもあり、その用法ごとに表す意味もまた異なるため、名詞の分類にあたっては大まかな意味グループに分けた。次項からの項目名が意味分類の結果である。

5.2.4. 「～ヲする」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「～ヲする」だけを作り、「～ヲやる」を作らないものには次の二つの用法が見られた。（以下、例文の該当箇所には下線を付す）

5.2.4.1. 様相・様子

- (1) お前はあんなざまをしながらそれでも潔白だと云える積りか？（痴人）
- (2) そんな恰好をするほど寒いのかね。（雪国）
- (3) 青い目にばら色の頬をして、きよらかなきりっとした看護婦の服装をしていました（ビルマ）
- (4) 小さい女の子が出て来て、厭な眼つきをして私を見ては引っこむ。（放浪記）
- (5) あの痩せつぼちの小さな体軀をしながら相当強いのを引いたからネ。（本因坊）
- (6) 豊子さんが何だか、そんなような口ぶりをしたことはあったけど（青春）
- (7) 牛が一匹優しい眼をして私を見ている。（放浪記）
- (8) 思い切ってふざけた無作法な態度をする。（モオツァルト）
- (9) 黒い頬鬚をはやして、堂々とした威厳のある様子をしていましたが、（ビルマ）
- (10) 伯父は固い表情をしたまま、何も答えなかった。（青春）
- (11) 「変な顔をするねえ。はっはっはっはっは」（野火）
- (12) 写真を見ると、「万次郎」は、ラグビーボール型をしており（みみず）
- (13) 昼間は、上がY字形をした棒によって、亀の甲らは持ち上げられ（みみず）
- (14) 割って見ると、きれいな黄色をしている。（みみず2）
- (15) （西洋ごぼう）は、ごぼうと同じような根をしているが（みみず2）

以上のようなものが実例には見られ、森田良行（1977）の『「Cヲ」の上に修飾語を冠して」とあるように点線のような修飾語もしくは指示代名詞を伴った表現で使われている。また、次の例のように修飾する動詞が名詞と一体となって慣用句的なものになっているものもある。

- (16) そしてこの頃は逢っても知らん顔をすることを努めていた。（友情）

「様相・様子」を表す用法に見られるヲ格名詞を次に列挙しておく（いずれも修飾語を伴う）。

¹⁷¹ できるだけ網羅的に調査したいと考え、『分類語彙表』を用いて判定した。これを用いた理由は、量的にも内容的にも広範囲なものが偏りなく入っているとの判断によるものである。

【様相・様子】を表す用法でのヲ格名詞群

(目、体、顔、頭、髪、面、鼻、唇、歯、脚、腕、肩、肌、頬、皮膚、年、気性、性格、目つき、体つき、顔つき、体軀、顔立ち、目鼻立ち、口ぶり、表情、態度、様子、なり、ふり、ざま、色、形、服装、格好、姿、型、根・・・)

この用法には「変な顔をする／している」「汚い恰好をする／している」のようにル形とテイル形のどちらも取れるものと、「ばら色の頬をしている」「不思議な形をしている」のようにテイル形しか取らないものがある。以下の例を見てみる。

- (17) a. 私がそう言う、彼女は急に変な顔をした。
b. 私が話している間中、彼女は変な顔をしていた。
c. 彼女はきれいと言うには程遠く、いわゆる変な顔をしているのだ。

(18) 白雪姫は、ばら色の頬を { *する／している }。

(a) と (b) は顔の変化あるいはその変化した状態の持続、または変な顔を作る動作の持続を表していると考えられる。一方 (c) は、彼女の顔の状態を述べているが、その状態というのは変化の結果ではなく、もともとそうであるという彼女の属性を表している。そして、テイル形しか取らない (18) は、(c) と同様に主語の属性である状態だけを示すものである。このように、「様相・様子」を表す用法では、「顔」がヲ格に立つ例のようにル形・テイル形どちらも可能で、状態だけでなく変化という動きまでを表す用法と、「頬」がヲ格に立つ例のようにテイル形のみ可能で、状態だけを表す用法との二つが見られるのである。それから、この用法は森田 (同) や他の先行研究では「する」に見られる特徴として述べられているが、「やる」にも次のような実例が見られた¹⁷²。

- (19) 「どう？ こうやるとあたしの顔は西洋人のように見えない？」などと云いながら鏡の前でいろいろな表情をやって見せる。(痴人)

更に次のような作例も考えられる。

- (20) お父さん、もう一回変な顔をやって。
(21) 少女漫画みたいなキラキラお目々をやります。

しかし、全ての表現において両者の交替が可能なわけではない。

- (1) 〳 *あんなざまをやりながらそれでも潔白だと云える積りか？
(2) 〳 *そんな恰好をやるほど寒いのかね。
(3) 〳 *青い目にばら色の頬をやって、
(5) 〳 *小さな体軀をやりながら
(7) 〳 *優しい眼をやって
(8) 〳 *無作法な態度をやる
(10) 〳 *固い表情をやったまま

つまり、状態を表す用法では全く交替不可能である。

「やる」が交替可能なのは変化の用法の中でも、「顔」の動き (表情も含まれる) を表す

¹⁷² 用例が限られていることとこれを別項にする煩雑さを避け、ここに分類する。

場合に限られる。顔でも「?厭な目つきをやる¹⁷³」「*生意気な口ぶりをやる」など「目」や「口」は不可能である。しかも、この変化を表す「顔」に関しても「する」に比べると表現の範囲は更に狭いと言えよう。以下の通りである。

*女は悲しい顔をやった。

*生意気そうな顔つきをやって出て行った。

但し、(20) (21) のように、故意にその様子を作ってみせるような場合には、ある程度許容されるようである。

次に、動詞の機能とヲ格名詞の性質について見ていく。「変な顔をする」の「する」は「変な顔」への変化を表し、「変な顔」は「する」と結合することによって、単なる「変な顔」という物体を示す名詞ではなく動作性を示す名詞へと変化していると考えることができる。一方、「ばら色の頬をしている」は「ばら色の頬」であるという状態を示し、動作性を帯びるには至っていない。あくまで「ばら色の頬」という具体的な物としての側面を示している。このように、変化を示す用法と状態を示す用法ではヲ格名詞の性質に違いが見られる。そして、「する」自体に実質的な意味があるかという基準から見れば、実質的な意味はなくヲ格名詞の意味内容を作ること、あるいはその状態、を表すのみである（これを『実質的な意味なし』と記す）。つまり、様相・様子を表す「する」は機能動詞としての働きを示していることがわかる。更に機能動詞であるということは、実質的な意味を名詞部分に預けているために単独で用いても、様相・様子の意味が出てくることはない（これを『単独不可』と記す）。以上のことをまとめると、次のようになる。

【変化】動作性名詞 ヲ する／している；実質的な意味なし；単独不可：機能動詞

【状態】非動作性名詞（具体物） ヲ している；実質的な意味なし；単独不可：機能動詞

以上、様相・様子の用法には「状態を表す無意志的な『する』（森田 1977）¹⁷⁴」だけではなく、動作を表す意志的な「する」があることがわかった（一部『やる』も見られた）。

5.2.4.2. 着 装 ・ 付 帯

(22) 彼は手袋をしたままの手で女の頬をしたたかに打った。（青春）

(23) 黒の蝶ネクタイをして、いつも真白なワイシャツを着ていた。（青春）

(24) 結婚指輪をしている男の手をかざす。（皆月）

(25) 塩、コショウを適量加えて、鍋にふたをして、弱火で二時間、煮る（山小屋）

(26) 傷は手当をして包帯をしてありました。（ビルマ）

(27) 頭に布をまいて、長いきちんとしたルーンジをしています。（ビルマ）

(28) 扉を開けてくればよかったとか、窓は閉めてくればよかったとか、カーテンを

¹⁷³ 「厭な目つきというものをやってみせた。」のように「というもの」「てみせる」などが付く場合には「やる」が言えるものもかなり出てくる。それは「というもの」によって一般化された名詞句は、直接、名詞句が来る場合と違って「やる」と結合しやすくなること、更に「てみせる」のような実際に動作で示すという意味が動作性の強い「やる」と相俟って、一層ヲ格名詞の幅を広げる可能性があることに起因すると考えられる。しかし、あくまで具体的な名詞句がヲ格に立つ場合を考えるとやはり様相・様子の用法での「やる」表現はかなり限定されたものと言えよう。

¹⁷⁴ この中の説明に「かなり動作性へと近づき、意志的なものとなっていく。」との指摘もある。

してくればよかったとか、色々思っても（みみず）

(29) ビニールトンネルをして雨にあてないようにし、なおかつ、農薬を用いて病気を防ぎ、梅雨時期に収穫してしまう促成栽培が、かぼちゃ作りの主流だ。（みみず）

これらは、着装あるいは付帯を表す用法としてまとめることができる。次のような名詞がヲ格に立つものである。

【着装・付帯】を表す用法でのヲ格名詞群

体あるいは体の一部に付ける物（眼帯、マスク、猿ぐつわ、お面、首輪、ネクタイ、蝶ネクタイ、マフラー、ショール、ストール、スカーフ、チェーン、ベルト、エプロン、おしめ、おむつ、手袋、軍手、グローブ、ミット、かんざし、バンダナ、イヤリング、ピアス、指輪、指貫、鼻輪、チャック、リボン、ブローチ、ネックレス、マニキュア、眼鏡、腕時計、手錠、湿布、包帯、枕、水枕、氷枕・・・）物に対する付帯物（栓、蓋、重石、輪ゴム、キャップ、クリップ、ホチキス、カバー、塩、塩胡椒、酢、カーテン、蚊帳、ビニールトンネル・・・）

森田（同）では、以上のような名詞を伴う表現は「AハCヲする」と「BニCヲする」とに分かれており、「AハCヲする」例の方が「BニCヲする」例よりも多く挙げられている。しかし、森田（同）の「相手Bに対してなされる」「Bには、人・物・事柄などが立つ」に従えば、「BニCヲする」に当てはまるものが多くなるはずである¹⁷⁵。実際、付帯するということ自体、何かが何かに対して付くことを示すものであるから、（文中に現れなくても）ニ格をとる例が多くなる。例えば、「赤ちゃんにおしめをする」「爪に真っ赤なマニキュアをする」「犬に首輪をする」「大事な物にカバーをする」「お菓子の袋に輪ゴムをする」「女の子に眼帯をしてあげた」「夫にネクタイをしてあげた」などがある。但し、その動作が何に対してなされるものかということが、定まっている場合はそれをBに立てて「BニCヲする」を作ることはあまりない。「ネクタイ」→相手：首「？首にネクタイをする」、「マスク」→相手：口「？口にマスクをした」など。

また「ふつう、品物はCに立たない（森田 1977）」とあったが、以上から品物であってもCに立つものも少なからず見られることがわかる。

これら「ネクタイをする」「手袋をする」「手錠をする」「塩をする」は、「具体的な物」をつける、はめる、巻く、かけるなどの動作を表しており「する」自体に実質的な意味がある。しかも、ヲ格名詞は動作性名詞ではなく、あくまで具体物である。この二点からこの用法における「する」は実質動詞であると考えられそうである。しかし、純粋な実質動詞である「話す」「食べる」などが単独でもその意味を十分に示しうるのに比べ、この用法における「する」は単独では付帯の意味を表せない。「単独不可」である以上、まったくの実質動詞とは言えない。以上を考え合わせると、「する」は機能動詞であり、しかし、語結合の中での限定ではあるが実質的な意味を担い得るという点で実質動詞であるから、実質動詞寄りの機能動詞¹⁷⁶と考えることができる。

¹⁷⁵ 森田（1977）『『だれかが何かにあることをした』結果、生じた状態』として「犬が首輪をする」を挙げているように、「首輪をする」という連語だけでどちらの文型に属すかが決まるのではなく、文中での振る舞いによるものであるが、それでも「BニCヲする」に入るものは多い。

¹⁷⁶ 本節では機能動詞論の枠組みで考察を進めるが、その問題点については終章で論じることにした。

非動作性名詞（具体物）ヲ する；実質的意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

5.2.4.3. その他

一つのカテゴリ項目を立てるほどはないが、次のような例も見られたのでここに挙げる。

(30) 栗おこし工場の二十三銭也にもさよならをすると（放浪記）

(31) 竜造とさくらが相手をしている。（男）

(32) 「見つけてくれたら、もっとお礼をするわ」（愚か者）

(30) は他にも様々な挨拶ことばを入れることができ、「おやつもらったら、ありがとうをしようね。」「こんにちは／おはよう／こんばんはをする。」など、いずれも語結合の中では単に挨拶のことばではなくて挨拶行動自体を示している。つまり、「さよならという挨拶をする」「ありがとうの挨拶をする」の意である。(32) は接頭語「お」を付けずに「礼をする」と言うこともできる。しかし、「？相手する」や「＊礼する」という動詞は不自然なため、「相手」「礼」を形態的に非動作性名詞であると判断し、ここに分類した。但し、接頭語「お」を付けた表現の方が「お相手する」「？お礼する」のような動詞表現の可能性を高めるが、常に接頭語のある姿で現れるもの「お供をする」などは「お供する」というサ変動詞との関係が強いのでこれとは一線を画すものとする。この他には実例では見つけれなかったが、「お茶（喫茶の意）をする」などもある¹⁷⁷。

5.2.5. 「～ヲやる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「～ヲやる」だけを作り、「～ヲする」は作らないものに次の4つの用法が見られた。

5.2.5.1. 嗜好

(31) 「近頃君も煙草をやるのか、君は煙草をやらぬ様に思っていた」（浜菊）

(32) 「どうだ、前祝いに一杯やるか」（青春）

(33) 「お前は酒はどうだ」と伯父は言った。「まあ、人並みにはやれます」（青春）

(34) きせるで一服やる¹⁷⁸。（学研）

これには「コーヒー」「紅茶」などの一般的な嗜好は含まれない。主に「酒」「煙草」「麻薬」などの嗜好に限られ、具体的には次のような名詞である。

【嗜好】を表す用法でのヲ格名詞群

（酒、ビール¹⁷⁹、スコッチ、バーボン、焼酎、煙草、煙管、パイプ、紙煙草、アルコール、ドラッグ、麻薬、阿片、シンナー、スピード、シャブ、覚醒剤・・・）

「酒をやる」「煙草をやる」「麻薬をやる」は、ヲ格名詞を飲む、吸うなどの動作を表す。

¹⁷⁷ 「お茶する」で一動詞として使われる場合もあるが、一般的な動詞というよりも俗語的な動詞表現と考え、「お茶をする」も非動作性名詞扱いとした。他には「電子レンジでチンをして、柔らかくします。」など（「チンする」の方が自然）、擬態語は名詞扱いできないので本節の考察対象からはずれるが「ゴシゴシする」「ピチャピチャする」「ガンガンする」など幅広い用法がある。一部は「やる」も交替可能。

¹⁷⁸ 「きせるで一服する」も可能であるが、これは動詞「一服する（休憩の意）」である。「祖父はきせるをやる」は可能だが、「祖父は＊きせるをする」は不自然なことからも、喫煙の用法が「やる」だけのものであることがわかる。

¹⁷⁹ 「酒」以外の具体的な酒の種類を表す名詞の場合は「ビールを一杯やってから、焼酎を二杯やった」のように量を示す語句を語結合の間に差し挟む場合に可能な表現である。

しかも、この動作は習慣から止められないもの（悪癖）となり、その結果好ましくないという判断が下される可能性のあるものが多い。この点に関連して、中本正智（1986）に『やる』のもっている強い意志性が、この語を、『やり手、やり口、やり込める』など、マイナスイメージの意味へと転化させていく」とあるが、マイナスイメージの表現は「～ヲやる」という形式においてヲ格名詞が酒、煙草、麻薬だけに制限されるという点にはっきりと現れることがわかる。

この語結合におけるヲ格名詞は具体的な物で動作性はない。また、動詞部分には「飲む」「吸う」などの実質的な意味を汲み取ることができるため、実質動詞と考えられる。しかし、単独ではこの実質的な意味を表すことができないという点では、純粋な実質動詞とは言えない。つまり、実質動詞に近い機能動詞ということになる。ただし、「一杯やる」「ちびりちびりやる」「一服やる」などの表現に見られるように、ヲ格名詞を切り離しても「一杯」「ちびりちびり」「一服」などからこの「やる」がお酒を飲むこと、煙草を吸うことを表すことができることを考えると、この「やる」はかなり実質動詞に近い動詞でもある。このことをまとめると次のようになる。

非動作性名詞（具体物）ヲ やる；実質の意味あり；単独不可（様態・量を表す語句がある場合、可）：かなり実質動詞に近い機能動詞

5.2.5.2. 害悪・殺傷

- (35) 「彼奴をやっつけるよりしようがねえ。やらなきや、こつちがやられちやう」「俺をやったらどうだ」「お前やるんなら、最初にやってる。」（中略）「どうでもいい。とにかく一緒に行こう。安田をやって、食糧を作ってから、米さんそこへ行こうじゃねえか」（中略）手榴弾を持った安田を殺すために永松が考えた方法は、彼の若さに似合わぬ、狡猾なものであった。（野火）
- (36) 小屋には鶏の羽が散乱していた。「鶏、やったんですか」「二匹だけしめたが、あとは逃げられたよ」と上等兵は笑った。（野火）
- (37) 「やられた」と負傷を告げる声が聞えた。（野火）
- (38) 「大島隊だ。ブラウエンへ斬り込んで、散々やられての帰りさ。落下傘部隊と協力するはずだったんだが、上空でやられて、三十人ぐらいつきや降りやがらねえ。それもさっさと、俺達の方のジャングルへ逃げ込んで来やがった。お蔭でこつちもやられちゃったのさ。」（野火）
- (39) 「どうも、こうもねえ。すっかりやられちゃったよ」「何をやられたんだ」「何をって、——あんなひでえ奴はねえ」「誰がひでえんだ」「あの安田のおっさんと一緒に歩くことにきめたなあいいが、何のかんのって我儘ばかりいやがって。体のいい小使よ。お蔭様で、今じゃ、こうやって煙草売りさ。あの野郎てんで動かねえんだ」（野火）
- (40) 「（略）心臓をやられた可能性が有るっていうんだが、ハッキリしないんだ」（あつもの）
- (41) 「あんた、どうしてもその婆さんをやると言ったわね」「ああ、やってやるさ」「う

ちの姉様をやってみない?」(略)「俺はね、寝る女の子ならどれだっていいんだ。

それで、おまえの姉さんを、そのアパートでやるのかい?」(冬の旅)

(35) (36) (39) は後に続く文脈の中で「やる」の意味が明示されている。(35)「やる」は最後に出てくる「安田を殺す」によって「殺す」ことを意味していることがわかる。(36)は「しめた」こと、(37) (38) は「負傷」したこと、(39) は「体のいい小使い」にされたことを意味している。いずれも殺傷あるいは害悪を与えることなどを表し、受身の形で被害を表している。(40) では「心臓」が悪くなったことを表している。誰かまたは何かによって悪くなることが引き起こされたわけではないのに、受身の形をとることがある。例えば「祖母は畑仕事の最中に腰をやられてずっと寝たきりだ。」「この投手は肩をやられてからはぱっとしないね。」などは怪我をさせたものがはっきりしない、あるいは、ない場合でも受身を使って表現している。そして、(41) は主として女性を表す名詞がヲ格に立ち、害悪でも強姦の意味合いが強い。

この用法では「敵をやる」「胃をやる」「鶏をやる」などの語結合を作り、ヲ格名詞を殺す、傷つける、害する、悪くするなどを表す。特にヲ格名詞が女性の場合には「犯す」という意味を表す場合がある。また「やりやがったな」「やっちまえ」「やられた」など単独でもこれらの意味を表すことができるので、実質動詞である。先の「嗜好」の用法と同様にマイナス評価¹⁸⁰の行為を表すことができるものである。

この用法でのヲ格名詞は人を表す名詞であれば、個人名から役職名まで具体的に何でも可能であり、動物をヲ格に立てる場合も同様である。それから、「胃」「胃腸」「肝臓」「心臓」「肺」などの臓器や「肋骨」「尾骶骨」「頭蓋骨」などの骨部分、また「腕」「脚」「頭」「腹」「肩」「腰」などの身体部位などもヲ格に立つ。ここでは、身体の内側にある部位である臓器や骨部位なども、身体の外側にある部位と合わせて「身体部位」としてまとめておくこととする。なお、特に身体部位をヲ格に取る場合、受身形で自然な表現になるものが多い。

【害悪・殺傷】を表す用法でのヲ格名詞群

(人(あいつ、お前、敵、女、社長・・・)、動物(鶏、馬、豚、牛、猫・・・)、身体部位(胃、胃腸、肝臓、肺、肋骨、尾骶骨、頭蓋骨、腕、脚、頭、腹、肩、腰、目・・・))

非動作性名詞(人、身体部位、動物)ヲ やる；実質的意味あり；単独可：実質動詞

5.2.5.3. 放送・放映

(42) だが呆然と眼を開くと、血の鳴る音がずっと消えてお隣でやっている蓄音器のマズルカの、ピチカットの沢山はいった嵐の音が美しく流れてくる。(放浪記)

¹⁸⁰ 一方「やったあ！」で達成の感嘆を表すことがあり、この用法とは反対のプラス行為である。これは慣用句的な表現であることから一概には論じられないが、マイナス行為とプラス行為という両極端な行為を「やる」が表しうる理由は、「やる」のもつ動作性及び意志性の強さということが関与しているのかもしれない。というのは、「やれるもんならやってみろ。」「ええ、やってやるわ。やるわよ。」は「する」を使うと受ける印象が変わる。「できるもんならしてみろ。」「ええ、してみるわ。するわよ。」つまり、「やる」の方が動作完遂に対する強い意志(意気込み)を示し得る。このことは「完遂」と言うに足る行為、あるいは意気込みを要する行為に「やる」表現が適することを表し、この点が「害悪・殺傷」というマイナス評価の行為から「達成への感嘆」というプラス評価の行為までを大きく包み込む結果となっているのかもしれない。

- (43) 今日やられる芝居も彼は公にではないが、可なり悪口云った。(友情)
- (44) 山田、ラジオの『♪真夏の出来事』が聞こえてボリュームを上げる。「なんだよ、ナツメロかよ気持ち悪い。ロックンロールとかやってねえのかよ……」(アドレナリン)

この用法でのヲ格名詞には、具体的な放送番組名や演劇や映画の題名なども含まれる(「NHKで8時から『おしん』をやる」「四季劇場で『ハムレット』をやる」等)。これには二つの用法がある。一つは「NHKでは8時からニュースをやります」のような放送する、放映するなどの活動を表す用法で、その動作主は文中では明示されない。(42)～(44)はこの例で、動詞部分には実質的な意味(放送する、上映する、放映する)があるが、単独ではこれらの意味を表すことができないので、実質動詞寄りの機能動詞だと考えられる。

もう一つの用法は、実例は見当たらなかったものの「私は今度映画をやります」のような例に見られるもので、ヲ格名詞の意味内容やそれに関する幅広い動作・行為を表し、動作主が明示されており動作性が強い。しかし、動詞部分だけに実質的な意味を見いだすことは不可能なため、機能動詞である。ヲ格名詞には具体的な放送番組名、放送曲名あるいは上映する劇、映画の題名などがあり、他には「ニュース」「ドラマ」「ミュージカル」「映画」などがある。それをまとめたものが次である。

【放送・放映】を表す用法でのヲ格名詞群

(ニュース、番組、ドラマ、映画、演劇、ミュージカル、具体的な番組名、題名、曲名など)
非動作性名詞(具体物)ヲやる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞
動作性名詞ヲやる；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

5.2.5.4. 趣味・習い事・勉強

- (45) 「何というえい景色でしょう。政夫さん、歌とか俳句とかいうものをやったら、こんなときに面白いことが云えるでしょうね。私ら様な無筆でもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん、あなた歌をおやんなさいよ」「僕は実は少しやっているけど、むずかしくて容易に出来ないのさ。山畑の蕎麦の花に月がよくて、こおろぎが鳴くなどは実にえいですなア。民さん、これから二人で歌をやりましょうか」(野菊)
- (46) むかし、謡をやった頃に読んだ本がある。(冬の旅)
- (47) 秋江は声楽をやっていた時期がながくあった。(レズ)
- (48) 「そんならお前、大学院に残って博士コースをやったらどうだ」(青春)
- (49) 「あなたは博士課程をやるつもり？」(青春)
- (50) 「あたし、英語が習いたいわ(中略)それから音楽もやってみたいの」(痴人)
- (51) 「義務教育は中学まででしょう。ここは、職業訓練専門施設の学校として公認されているのです。木工のほかに、钣金、印刷、機械仕上げ、ラジオ・テレビの修理、ミシン裁縫の部門がありますが、僕は木工をやらせてもらいました。結構たのしいですよ」(冬の旅)

(52) 元よりそれは文学をやる仲間同士で云ったので（友情）

実例では圧倒的に「やる」例が多く、調べた限りでは「する」は「学問をする」のみ見られた。以下である。

(53) あなたは学問をする方だけあって、中々御上手ね。（こころ）

(54) 学問をすることも才能を磨くことも（青春）

趣味・習い事に関する行為か（趣味ではなく単に行為の場合もある）、学問・勉学に関する行為かは文脈によって決められるものなので、二つを一つに分類した。名詞は以下の通りである。

【趣味・習い事】を表す用法でのヲ格名詞群

（ギター、ピアノ、バイオリン、チェロ、ビオラ、三味線、写真、カメラ、お茶¹⁸¹、お花、お琴、俳句、和歌、歌、声楽、民謡、日舞、バレエ、園芸、ガーデニング、油絵、日本画、陶芸・・・）

【学問・勉学】を表す用法でのヲ格名詞群

（～学、文学、言語学、物理学、考古学、数学、天文学、国語、理科、社会、生物、体育、美術、木工、～語、英語、フランス語、中国語、～史、美術史、日本史、世界史、～コース、博士コース、～課程、博士課程・・・）

趣味・習い事の場合¹⁸²「写真をやっている」「お琴をやっている」などは、ヲ格名詞を趣味にしていること及びそれに関わる動作全体をも表しており、実質的な意味は取り出せないもので、機能動詞である。また、ル形のままではいくらか不自然さがあり、テイル形の方が自然なものが多い。そしてヲ格名詞は、例えば「写真がある」の「写真」は具体物だが、「写真をやっている」の「写真」は写真を撮ること現像することなど趣味としての一連の動作を示していると考えることができ、動作性の名詞である。

学問・勉学の場合「文学をやる」「考古学をやる」などはヲ格名詞を専攻する、研究する、勉強するなどの行為を表し、実質的な意味がある点では実質動詞と言える。しかし、ヲ格名詞を切り離して「やる」単独ではこれらの意味が表せないことから、実質動詞寄りの機能動詞である。

【趣味】動作性名詞 ヲ やっている；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

【学問】非動作性名詞 ヲ やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

5.2.6. 「～ヲする／やる」ヲ格名詞の分類と動詞の機能

「する」と「やる」どちらもとれる表現には次の四つの用法があった。

5.2.6.1. 遊戯・スポーツ

(55) それはなぜかスポーツをしているときが圧倒的に多かった。（十八歳）

(56) 運動場でドッジボールやフットベースをしている最中（十八歳）

(57) それは、じゃんけんをして負けた者が、皆から順々にびんたを受ける（装飾）

¹⁸¹ ここの「お茶」は「茶道」の意であり、前述の「お茶」は「喫茶」の意の場合である。

¹⁸² 趣味の場合、5.2.6.1.「遊戯・スポーツ」と重複する場合も見られるが、特に習い事としての趣味を表す用法の場合は「遊戯・スポーツ」とは違って「する」との交替がないようである。

- (58) 体育でサッカーをする短パン姿の男子（装飾）
 (59) 私とナオミとはその頃しばしば兵隊将棋やトランプをして遊びました（痴人）
 (60) 子供の時分に、内で姉さんが男の人とお花をする時（痴人）
 (61) つまり私とナオミでたわいのないままごとをする（痴人）
 (62) 有希はそれまで、体育で球技をやるときはいつも点とりやだったし、五十メートル走をしてもクラスで一、二をあらそうくらいのはやさだった。（十八歳）
 (63) 二人は昔のように又馬ごっこをやったことがありました。（痴人）
 (64) 私は何より真っ先にあの時の遊戯をやって見よう。（痴人）
 (65) 「それでお前は、ダンスをやるって云ったのかい」（痴人）
 (66) 「所長はたぶん下の町でパチンコをやっているわ。」（生きたい）
 (67) 相手の学生は、いま仲間と麻雀をやっているからと言って（青春）

この用法を作る名詞には次のようなものがある。

【遊戯・スポーツ】を表す用法でのヲ格名詞群

（ゲーム、花火、かるた、トランプ、麻雀、パチンコ、めんこ、お手玉、将棋、ブランコ、鉄棒、シーソー、腕相撲、ままごと、かくれんぼ、じゃんけん、～ごっこ、馬ごっこ、ハイキング、キャンプ、リレー、～メートル走、マラソン、体操、水泳、野球、卓球、柔道、剣道、球技、テニス、バドミントン、サッカー、アイスホッケー、ダンス、スキー、ボクシング、レスリング、バスケットボール、ドッジボール、フットベース、バレーボール、ハンドボール・・・）

「ゲームをする／やる」「トランプをする／やる」「スポーツをする／やる」「テニスをする／やる」などの語結合を作り、これらの「する」と「やる」はヲ格名詞に示された遊び道具を使って遊ぶもしくはヲ格名詞に示された遊びを行う、またヲ格名詞に示された運動競技を行うといった意味を表している。動詞部分には実質的な意味はなく、どれもヲ格名詞の担う意味に伴った行為を行うことを表しているにすぎず、この用法での両動詞は機能動詞であると考えられる。また、遊び道具などの具体物はこれらの動詞と結合することで、トランプ遊びといった意味を含むようになり、動作性名詞へと変化している。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味なし；単独不可：機能動詞

5.2.6.2. 役職・役割・役柄

- (68) 浅二郎さんはイタチの襲来に備えて明方ごろまで鯉の見張番をする（黒い）
 (69) 剣道部の顧問をしている権高な女教師であったり（装飾）
 (70) その先生がピアノのわきに坐って、譜をめくる役をしていました。（ビルマ）
 (71) 氏は、三十四、五歳で、業務部の課長代理をしていた。（装飾）
 (72) 「それから、こちらは鑑定助手¹⁸³をしてくれる小川香深さんです」（刑法）
 (73) 挽曳《ばんえい》競馬協会の役員をやっている男に見せたら（五味氏）
 (74) 前田は子爵であり、大臣をやった経歴もある。（人民）

¹⁸³ 四字漢語で「する」または「やる」をとるものもあるが、「製造販売をする」「精神鑑定をする」などのように、後ろの二字漢語が動詞と派生関係にある場合は典型的な動作性名詞と判断する。

(75) 警視總監をやった頭のきれる伊沢を送りこみ（人民）

この中に¹⁸⁴は生業と重複するものも見られるが、「田中さんは学級委員長をしている。」のように生業ではないものもあるので、ここに項目を立て役職の名詞も入れることにした。先行研究では取り上げられなかったものとしては、役柄の名詞が見られた。具体的には次のものである。

【役職・役割・役柄】を表す用法でのヲ格名詞群

（～長、～係、～委員、役員、大臣、警視總監、～役、理事、幹部、顧問、幹事、仲人、責任者、司会、講師、助手¹⁸⁵、見張番、留守番、当直、キャプテン、アルト、ソプラノ、テノール、バス、ピッチャー、バッター、キャッチャー、仲人、司会、主人公、主役、ヒロイン、脇役、二枚目・・・具体的な役名など）

「役員をする／やる」「司会をする／やる」「主役をする／やる」などを作り、ヲ格名詞のような役職・役割・役柄を務めることを表している。動詞部分にはこのような実質的な意味がとれるものの、ヲ格名詞を切り離してしまうとこの意味は取り出せないなので、実質動詞寄りの機能動詞である。ヲ格名詞は、「役員は集まって下さい。」の「役員」とは違い、役職名または人物そのものよりも、その役職に関する仕事やその仕事内容を意味しており、動作性の名詞となっている。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

5.2.6.3. 行事・集団活動・催し物

(76) 住吉の神を勧請して燈籠ながしの祭をする。（黒い）

(77) 仲田の家でピンポン大会をするからよかつたらしに来てくれと云う通知（友情）

(78) テストをする風景に被せて、（刑法）

(79) アメリカの大学では、週末になるとダンスパーティーなんかやっ（アメリカ）

(80) 今日は家ですきやきパーティーをやるそうだから（アメリカ）

(81) 私なんか葬式をやりかけられちゃったんですよ（男）

(82) 小学校四年生の父が級友をそそのかして一日ストをやったというのだ。（二十四）

(83) 昔、少し素人芝居をやった事があるけど（放浪記）

(84) 「そこで『証言台』という一人芝居をしていましたね。」（刑法）

この用法に見られるヲ格名詞は以下のものである。具体的な催し物を以下の「～」に入れ、多様な名詞を作ることができる。

【行事・集団活動・催し物】を表す用法でのヲ格名詞群

（会合、座談会、ミーティング、～会、文化祭、祭り、～祭り、～大会、コンテスト、～コンテスト、コンクール、～コンクール、バザー、ミサ、パーティー、～パーティー、コンパ、合コン、～展、法事、～式、～回忌、～芝居、七五三、七夕、テスト、ストライキ・・・）

¹⁸⁴ 方言だが「うちの青年団の団長をしよったの。（あ、春）」「あんた、焼津でマグロ船の船頭をしよった島村の開吉ちゃん（同）」が見られた。また「此所は隅っこだから番をするには好くありませんね（こころ）」「？番をやる」で「やる」の取りにくい例もあった。

¹⁸⁵ 役職でも「教授」「助教授」「准教授」はヲ格に立ちにくい。この用法での「講師」「助手」は例のように役割的な意味（講演をする人、手助けをする人）がある。他の役職はこの限りではない。

「ミーティングをする／やる」「会議をする／やる」「結婚式をする／やる」などは、いずれもヲ格名詞に示された集会・行事・儀式を開く、もつといった意味を表している。動詞部分にはいくらか実質的な意味が感じられるが、ヲ格名詞がないと「開く」「もつ」という意味を表すことができないので、実質動詞寄りの機能動詞である。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

5.2.6.4. 生業

- (85) そこで長年刑事をしている彼にも、意見を聞いてみたいと思いました」（刑法）
- (86) 「優しい父親だった・・・高校の国語の教師をしてた・・・（略）」（刑法）
- (87) 市立病院の看護婦をしてる女でな、（飛び）
- (88) どうも東京でヌードモデルをしていたらしい。（五味氏）
- (89) 内職をする女の姿が、（放浪記）
- (90) 新聞をやっているひとの息子ですってよ（放浪記）
- (91) 「私、隣で板金工場をやっている笠森の父親ですが（略）」（あつもの）
- (92) 百姓もしていれば、かたてまには漁師もやっている（二十四）
- (93) どんな農業をやっていくのかという時に、やっそこ探しあてた（みみず）
- (94) 製糖会社をやっている藤山雷太にたのみ（人民）
- (95) 大学の先生をおやりになっているとか（男）
- (96) 電気製品の小売り店をやっていましたが（学校Ⅲ）
- (97) 「僕はね、バーテンをやりたいんだ」（冬の旅）
- (98) いまでは道場の師範代をやっている（五味氏）

森田良行（1977）に「役職・身分・職種に広く使用できるが、他動詞『……をする』の場合には用法が限られるので注意する必要がある。」とあるように、「*大学者をする／やる」「*直木賞作家をする／やる」は言えないが、「先生をする／やる」「作家をする／やる」は可能である。肩書き、または修飾語句のついた生業の名詞はヲ格名詞にはなりにくく、同じ肩書きでも役職としての「～長、～委員」などは 5.2.6.2. のとおりヲ格名詞になる。また、「職人」は単独使用ではなく「～職人」のような具体的な名詞として使われる。そして、企業に関する名詞ではヲ格に立つものは、具体的な職種に関する会社名（製糖会社、板金工場など）や個人経営で規模の大きくないもの（小売り店、～屋など）に限られるようである（『*デパートをする／やる』）。

【生業】を表す用法でのヲ格名詞群

（旅館、～屋、下宿屋、床屋、魚屋、小料理屋、運送屋、酒屋、駄菓子屋、問屋、呉服屋、花屋、塾、居酒屋、～店、売店、小売り店、～工場、板金工場、～会社、製糖会社、内職、スナック、酪農、農業、漁業、畑、田んぼ、先生、教師、医者、歯医者、弁護士、代議士、エンジニア、教員、百姓、猟師、漁師、大工、農家、占い師、看護婦、薬剤師、助産婦、産婆、保健婦、役者、保母、スチュワーデス、コック、ソムリエ、バーテン、モデル、師範代、刑事、警官、～職人・・・）

「先生をする／やる」「花屋をする／やる」などで、ヲ格名詞を生業にしている、もしくは

は経営する、営むことを表している。動詞部分にはこのような実質的な意味が感じられるものの、やはり単独ではこの意味を表すことができないので、実質動詞寄りの機能動詞である。これらは、単に「先生」という人物や「花屋」という建物を表しているというより、その職業に関する事に携わることや商業活動をするものという動作性の名詞となっている。

動作性名詞 ヲ する／やる；実質の意味あり；単独不可：実質動詞寄りの機能動詞

5.2.6.5. その他

分類項目を立てられるほど用例はないが、次のような例が見られた。いずれも意味的に動作性のある名詞で、意志的な動作である。

(99) 被爆病予防のおまじないに昨日からお灸をする¹⁸⁶ことにしているそうだ。(黒い)

(100) さればと云って道楽をするのでもありませんでした。(痴人)

(101) 自分の信じている亡霊が、そんなへまをするとは(実朝)

(102) ゴルフ場でガッツポーズをしている橋本。(学校Ⅲ)

(103) いたずらをしてみたかった。(青春)

(104) 「女と男と勝負事をすりゃ、いろんなおまじないをするもんだわ。(略) 傍で見ていたらいろんなおまじないをやったわ。」(痴人)

(105) 此方はせいぜい彼女の計略に載せられてやって「ちんちん」と云えば「ちんちん」をする、(中略)、何でも彼女の注文通りに芸当をやっていれば(痴人)

5.2.7. 小まとめ

先行研究では「する」のヲ格に立つのは、典型的に動作性の名詞であるとされたことから、形態的に動作性の名詞ではないものを基本に抽出し、典型的ではない用法について見てみた。その結果、それでも語結合のレベルでは動作性名詞が多いものの、「まれにはある¹⁸⁷」「周辺のなもの¹⁸⁸」とされていた非動作性の名詞あるいは具体的な物としての名詞もヲ格に立つことがわかり、しかも少なくないことが明らかになった。さらに、特に「やる」については「する」と異なる点が上記の四つの用法としてまとめられた。また、「する」が意志性に関わらない状態を表すことがあるのに対し、「やる」は専ら意志性のある動作を表すことがわかった。

5.2.8. 「～ヲする／やる」動詞機能の連続性

村木新次郎(1991)に「機能動詞であるか実質動詞であるかは、その用法によってきまる」、「機能動詞としての性格も(中略)典型的なものから実質動詞の中間的なものまであり、いわば連続している」とある。ここでは、この連続性を捉えることで「する」と「やる」の異

¹⁸⁶ 「お灸をする／やる」「針をする／やる」など治療関係の名詞は「～(という治療)をする／やる」の意となる場合に交替が可能である。

¹⁸⁷ 森田(1977)の「B=Cヲする」項で『包丁の背でたたいた豚肉に塩・胡椒をします』のような例もまれにはある。」とあるが、この他に5.2.4.2.のような例がある。

¹⁸⁸ 佐藤(1995)の注2に「ネクタイをする」の「ネクタイ」、「教師をする」の「教師」を挙げ、「これらの例は『～をする』の型の構文の中では周辺のものであると思われる」とある。

同を更に明らかにしたい。

これまでの考察結果をまとめる形で表1として示す。一番左の欄「動詞の機能」は機能動詞としての働きの強弱を①ヲ格名詞の性質、②「する」と「やる」の実質的意味の有無、③動詞単独でもその意味を表すか否か（可、不可）の3つの点から考察したものである。ヲ格名詞をとるもの○、とらないもの×、とる可能性のあるもの△となっている。「ヲ格名詞の種類」で1つの枠に入っているものは、動詞の機能の程度は同じである。

表1. 「する」と「やる」の動詞機能の連続性とヲ格名詞の性質

| 動詞の機能 | ヲ格名詞の種類 | ヲ格名詞の性質 | する | やる | 実質的意味 | 単独 |
|-------|---------|---------------|----|----|-------|------------------|
| 機能動詞 | 強 | 「遊戯・スポーツ」 | ○ | ○ | 無 | 不可 |
| | | 「趣味・習い事」 | × | ○ | 無 | 不可 |
| | | 「映画・演劇・放送番組」 | × | ○ | 無 | 不可 |
| | | | ○ | △ | 無 | 不可 |
| | | 「様相・様子」 | ○ | × | 無 | 不可 |
| | | 〃 | | | | |
| | 弱 | 「生業」 | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | | 「行事・集団活動・催し物」 | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | | | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | | 「役職・役割・役柄」 | | | | |
| | | 「学問・科目」 | △ | ○ | 有 | 不可 |
| | | 「着装物・付帯物」 | ○ | × | 有 | 不可 |
| | | 「映画・演劇・放送番組」 | × | ○ | 有 | 不可 |
| | | | | | | |
| | | 「嗜好品」 | × | ○ | 有 | 可 ¹⁸⁹ |
| 実質動詞 | 弱 | 「人・動物」 | × | ○ | 有 | 可 |

機能動詞としての働きの強い四つの用法（内『する』三つ、『やる』三つ）から、中間的な三つの用法（内『する』三つ、『やる』三つ）、そして弱い三つの用法（内『する』一つ、『やる』二つ）、更に弱い一つの用法（『やる』のみ）までが見られた。そして、実質動詞としての働きの示すのは一つのみ（『やる』のみ）であった。しかし、これも実質動詞としては、他の実質動詞、例えば「叩く」「食べる」「くだく」などに比べれば、その働きは弱い¹⁹⁰と言える。

¹⁸⁹ 「一杯」「ちびりちびり」などと一緒に用いられるときに限られる。

¹⁹⁰ 佐藤琢三（1995）では「する」は形式動詞、「やる」は意味的に抽象度の高い行為志向の他動詞だという結果が出されたが、機能動詞及びヲ格名詞の変化という観点をとることで、「やる」にも機能動詞的な働きがあることが本節で示された。

また、全体的に見ると「する」は機能動詞としての働きしかなく、この点は先行研究の指摘通りである。一方、「やる」は実質動詞として働く用法も見られ、非動作性名詞をヲ格に立てる場合に限れば、「やる」の方が「する」よりも広い用法をもつことがわかった。

また、「する」の用法に共通する特徴は、その動作・行為が他者に何らか直接的な影響や物理的な働きかけのあるものではないという点である。もちろん典型的な機能動詞のヲ格名詞（動作性名詞）は動作の対象ではないため働きかけは当然少ないが、たとえ具体的な物の名詞であっても（「ネクタイをする」）働きかけは弱い。一方、「やる」に見られる特徴は働きかけという点で強弱どちらも示しうるということである。働きかけが弱いのは、機能動詞の働きを示す用法であり、これこそが「する」と言い換え可能な箇所である。一方で、働きかけが強い¹⁹¹のは、実質動詞の働きを示す用法であり、特筆すべきはそれらの動作が好ましからざるマイナスイメージを伴うことがあるという点であった。

最後に述べておきたいのは、表1の一番左の列が示す違和感と矛盾である。それは、三点ある。

1. 機能動詞という動詞の枠に強弱を入れなければならなかった点
2. 実質動詞という動詞の枠に弱と表記せざるを得なかった点
3. 機能動詞と実質動詞の境界線を実線で示すことができてしまう点

動詞にはさまざまな振る舞いというものがあり、一つの動詞にもその共起する名詞との関係性によって、その機能性に強弱が出てくるものである。それにもかかわらず、その程度性を無理に機能動詞という枠の中に入れ込むことの違和感が1で指摘したいことである。そして、このことは2でさらに明確なものとなる。つまり、実質動詞という多くの一般的な動詞の性質までもがその結果、強弱といった程度性で論じざるを得なくなるからである。そして、以上のような機能の強弱や程度の差が見られるにもかかわらず、機能動詞と実質動詞と2項対立にする以上は、両者の間を境界線で区切るようなことが実現してしまう。これは本来は程度性という段階で示されるべきものではないのかという疑問である。

これらの点は、考察結果を機能という点でまとめる上で簡単に言えば、やりにくさ、おかしさという形で実感された点である。このような実質動詞と機能動詞の立て分けについては、終章で多機能動詞として改めて論じることとする。

5.2.9. まとめ

以上、一旦、動作性名詞を形の上からはじき出し、典型ではない方の名詞群がヲ格に立つ表現における「する」と「やる」について考察した。その結果、表1のような結果が得られた。これまで何らかの行為を表すと言われ、ひいてはあらゆる行為を表すまで考えられが

¹⁹¹ 中川秀太（2001）は『やる』には主体の〈行為を完遂しようとする積極的な心構えが非常に強い〉と述べ、これについては同様の指摘を大塚望（1997）でも「完遂までを念頭に置いた」「意気込みを必要とする」と述べた通り「やる」の重要な側面の一つである。中川（同）ではVN（動作名詞）だけを対象としたが、本節ではVNではない「嗜好品」「人・動物」についても同様のことが言えることがわかった。しかし、「嗜好品」「人・動物」以外は、「完遂への意気込み」が「やる」を使うことの理由として当てはまるものは少ない（表1参照）。ここがこの問題の難しさであり、細かく考察対象を絞っていく必要性を示すものである。その上で全体像に迫るというやり方を本節ではとったものである。

ちだった「する」が、意外にもヲ格に立てるような名詞に関するある行為しか表さないことや、その「する」の俗語であるというだけで片付けられていた「やる」にも独自の用法があることがわかった。

今回の調査で「やる」が会話文中での出現が多いことやインフォーマルな内容で用いられることが印象として残った。位相や文体の違いなどにも留意し、文章や談話といった大きな視点での語用にも目を向けていきたいというのが課題である。

第3節では、「する」の典型的な用法である動作性名詞をヲ格にとる場合の「する」と「やる」の異同を明らかにする。

第3節 動作性名詞がヲ格に立つ「する」と「やる」

「実験をする」は「実験をやる」と言えるが、「散歩をする」は「散歩をやる」とは言えない。「実験」「散歩」はサ変動詞の語幹であり、ヲという格助詞を後接する点で名詞である。そして、その意味的な特徴はサ変動詞に由来するという点で動作性を示している。

第2節では、ヲ格名詞を非動作性名詞に限定して「する」と「やる」の意味・用法を記述し、動詞の機能性について考察した。第3節では、第2節で残された課題である動作性名詞と「する」と「やる」について考察する。特に、「実験」「散歩」のようなサ変動詞語幹を動作性名詞の代表として取り上げ、それがヲ格に立つ「する」と「やる」について比較する。考察では、実例を基に、サ変動詞語幹と動詞との関係性を統語的操作によって明らかにする。つまり、「する」と「やる」の交替現象が見られる用法の一つである、「サ変動詞語幹＋ヲする／やる」における両者の交替、非交替の現象を説明するのが目的である。

5.3.1. 先行研究

サ変動詞語幹と「する」「やる」に関しては、森田良行（1977）、王鉄橋（1988）、神田靖子（1982）、中川秀太（2001）が意味論的な観点から分析し、「動作性」「意志性」「具体性」「継続性」を示す行為について、「やる」が用いられると述べている。しかし、そのいずれの特徴も持ちながら「散歩」「挨拶」「返事」「結婚」は「やる」を取ることはない。また中川（2001）は、「一方から他方へ与えられるモノ」と「軽い気持ちで行う単純な行為」には、「やる」が使いにくいとする。しかし、「説明」は前者によって、「散歩」は後者によって説明していることは、そこに全く別の観点、そして異なる説明を用意することとなり、一貫性に欠ける。

このように、サ変動詞語幹がヲ格に立つ「する」と「やる」の交替現象の説明として、一貫性のある統一的な説明はまだなされていない。例えば「実験をする／やる」「練習をする／やる」と「散歩をする／*やる」「挨拶をする／*やる」のサ変動詞語幹である、「実験」「練習」と「散歩」「挨拶」を比べてみても、両者の間に意味論的な差を見出すのは難しいと言えよう。

5.3.2. 「する」の意味的・統語的振舞い

5.3.2.1. 結合の強さ

「する」が、実質的な意味が希薄で文法的な機能を主とする動詞であることは、これまで形式動詞、機能動詞、軽動詞と呼ばれ、様々に考察されていることからわかる。そこに共通する点は、実質的な意味の希薄さと文法的な機能性である。そして、その実質的な意味の希薄さを補うのは「する」に隣接する語彙¹⁹²であり、当該の構文で言えば、サ変動詞語幹ということになる。そのため、意味論的な分析ではサ変動詞語幹に注目し、「動作性」「意志性」「具体性」「継続性」という特徴が抽出されてきたのである。意味が希薄であって、その意味の希薄さを補うものが必要となる形式動詞「する」にとっては、当然ながらサ変動詞語幹との関係性は、通常の名詞と動詞の関係とは異なることが考えられる。このことは同時に、サ変動詞語幹と「する」、サ変動詞語幹と「やる」の関係性にも違いが見られるのではないかとの予測を立てることができるのである。そこで、本節ではサ変動詞語幹の名詞と動詞との結合の強さを考察の観点として取り上げ、分析する。

5.3.2.2. 名詞の動作性

動詞は、動的な姿を示すのを根本とするために、その動詞が持つ実質的な意味を名詞部分に預けるとすれば、当然ながらその名詞部分は具体物ではなく、動作性を帯びた名詞であるということになる。サ変動詞語幹は、サ変動詞を構成するという点を見ても、その動作性の存在を確認することができる。しかしながら、「やる」はサ変動詞語幹と当該の構文を成しても、漢語と一体となった一つの動詞を構成することはない。例えば、「*実験やる」という動詞は無い。

この点について影山太郎（1993）は、Grimshaw（1990）を援用しながら、三つの名詞分類を行っている。まず、「NPのVNをする」から「NPをVNする」を派生する場合のVN（動名詞）を「複雑事象名詞」とし、「～をする」を成すが「VNする」を派生しない「～」の名詞は、物と動作の二つの概念を併せ持つ、VNではない「単純事象名詞」とした。そして、「～をする」も「VNする」も作らない、具体的な対象を指す名詞を「結果名詞」と呼んだ。このように、名詞を動作性のある名詞「複雑事象名詞」、動作性を示しうる名詞「単純事象名詞」、動作性を示さない名詞「結果名詞」とし、動作性の幅と「する」との関係性を示している。本節の考察対象であるサ変動詞語幹は、「VNする」を成立させる名詞であるため、「複雑事象名詞」に該当し¹⁹³、三つの名詞分類において最も動作性の強い名詞ということになる。次の例文は、影山太郎（1993）の例に「やる」を加えたものである。

¹⁹² 形式動詞研究では、形式動詞の範疇にサ変動詞や「擬態語する」「副詞する」「形容詞・形容動詞する」なども含まれるため、その動詞の意味の希薄さを補うのは「名詞」だけではないと考えている。その初期の研究である山田孝雄（1908）が「この用言の賓語たるものは体言及び体言の資格を得たる用言及び副詞の一部なり（p 317）」と述べる通りである。一方、機能動詞研究や軽動詞研究では、動詞「する」の意味の希薄さを補うものはあくまでも「名詞」に限定されている。それは、「名詞」との関わりでこのような特徴的な動詞が扱われてきたことによるものと考えられる。以上を踏まえ、本節では実質的な意味の希薄さを補うものは名詞と限定せず、広く語とした。

¹⁹³ ただし、同一の名詞が、ある文では「複雑事象名詞」として現れたり、他の文では「単純事象名詞」として現れたりすることは、影山太郎（1993）で述べる通りである。しかし、サ変動詞語幹は、まさにサ変動詞語幹である点を以て既に複雑事象名詞であり、「～する」を成さない単純事象名詞ではないにもかかわらず、振舞いとして、単純事象名詞と同じ特徴を示すことがあるということを指摘したい。

「複雑事象名詞」(影山太郎 1993 : 271)

胃潰瘍の父が胃の手術を {した／*行った／*実施した／やった}。

課長が北海道に出張を {した／*行った／*やった}。

息子が突然、家出を {した／*行った／*やった}。

影山 (1993) では、複雑事象名詞は、述語として通常他動詞「行く」「実施する」を取らないとされている。しかし、「やる」は上記のように取り得るものもある。つまり、「VN する」「VN をする」を成す複雑事象名詞が、「VN をやる」を成す場合と成さない場合があることがわかる。

そこで、「複雑事象名詞」という動作性の強い名詞群の中にも、統語的に異なる振舞いをするものが混在しているのではないかと予測し、以後考察を進める¹⁹⁴。この点は、意味論的な分析においても取り上げられてきたが、本節では統語的な面から考察するものである。以下、サ変動詞語幹と動詞との結合の度合と、動作性の強い複雑事象名詞と動詞との関係性について考察し、「する」と「やる」の交替現象を明らかにしていく。

5.3.3. 統語的分析

サ変動詞語幹と「する」「やる」との結合の度合を統語的操作によって検証する。先行研究では、機能動詞研究において、村木新次郎 (1991) が機能動詞結合を成す「名詞＋機能動詞」について、語句の挿入、語順の交替、連体構造への変換によって結合の強さを示している。また、軽動詞研究において、影山太郎 (2004a, b) が定性制限と統語的操作の禁止 (受動文・強調文変換の不可) によって、日本語における軽動詞を抽出している。先行研究は、機能動詞あるいは軽動詞の存在を日本語動詞の中から抽出するのが主たる目的であるために、形式動詞と言われる、典型的な機能的な動詞「する」が取り上げられている。しかし、「やる」が機能動詞の働きをすることの可能性については、拙稿 (2002) ¹⁹⁵に指摘されるのみである。

本節では、機能動詞あるいは軽動詞とされた「サ変動詞語幹ヲする」が、全て、いつも、そのような姿を示すものか考察したい。つまり、「する」であっても、サ変動詞語幹であっても、具体的には単語ごとにその関係性は異なる場合があるのではないかと考えるものである。

そこで、統語的分析の観点を次のように設定する。

統語的分析の観点：語順交替、名詞節、受動文、強調文、指示性¹⁹⁶

統語的分析の観点は同時に統語的操作でもある。つまり語順交替、名詞節への変換、受動文への変換、強調文への変換を行う。いずれも、動詞と目的語とが分離される操作であり、

¹⁹⁴ 影山 (2004b) では「する」の目的語について「Event」、「Entity」、「State」との考え方も示されている。本節では、「する」と「やる」の交替現象に関わるサ変動詞語幹の統語現象に注目し、名詞全体を踏まえた動作性の体系化は、今後の課題としたい。

¹⁹⁵ 第5章第2節に該当する。

¹⁹⁶ これは「定性制限 (DR)」の有無という観点である。なお、定性制限 (DR) の量化詞修飾については、VN に量化詞をつけるのは不自然さがかなり大きいように思うので (第1章第3節で述べた)、今回は指示性だけを検証に用いる。

分離操作後も自然な文として生ずれば、目的語（ヲ格名詞）と動詞のそれぞれが独立した成分であることが示される。また、独立した名詞句であるということは、定性・指示性があるとされる。

「指示性」について、影山太郎（1993、2004a）は「名詞句の不定性」を軽動詞構文の特徴とし、複雑事象名詞も同様に不定性の特徴を示すとする。なぜなら、独立した名詞句は指示性を持つが、軽動詞構文のようにヲ格名詞句が動詞と一体となり述語化している場合には、その指示性が無くなっていると考えられるからである。名詞句の不定性は、「代名詞で置き換えられない」ので、指示代名詞の「それ」との置き換えの可否によって判定することができる。これは、軽動詞構文を判定するためのものではあるが、複雑事象名詞と動詞との関係性を見るために、ここで援用するものである。

以下、これらの統語的操作を用いて、サ変動詞語幹と動詞との関係性を考察する。

5.3.3.1. 動詞と目的語との関係性

まず、形式動詞ではない通常の動詞について、ヲ格名詞との結合の度合を先の統語的操作によって確認する。

(1) 太郎は故郷に家を建てた。

| | |
|------|-------------------|
| 語順交替 | 太郎は家を故郷に建てた。 |
| 名詞節 | 太郎が故郷に建てた家 |
| 受動文 | 家が故郷に太郎によって建てられた。 |
| 強調文 | 太郎が故郷に建てたのは家だ。 |
| 指示性 | 家？———そう、それを建てたんだ。 |

このように、通常の動詞と目的語とは互いに独立した要素として文中に存在するために、統語的に引き離しても不自然な表現とはならない。また、「家」は動作性を示さない個物（結果名詞）であり指示性を有している。しかし、「する」はこのような関係を目的語との間に持たないとされる（影山 1993、村木 1991）。以下では、目的語と動詞の結合の度合と指示性について見ていく。

5.3.3.2. サ変動詞語幹の種類

結合の度合を測る前に、サ変動詞語幹に「をする」「をやる」が後接できるか否かによって、サ変動詞語幹を二つに分類しておく。

その一つが、「をする」は可能だが「をやる」が不可能なもので、例えば「約束、準備、散歩、心配、食事、説明、返事、指導、連絡、我慢、要求、破産、邪魔、妥協、苦勞、挨拶、結婚、行動、提案…」である。

もう一つが、「をする」「をやる」両方が可能なもので、例えば「実験、戦争、練習、統制、宣伝、査定、点検、面接、講演、手術、除雪、調査、投資、運動、交換、実習…」である。

前者をサ変動詞語幹（A）とし、後者をサ変動詞語幹（B）とする。動詞「する」から見ればAとBの全てがヲ格に立つが、「やる」から見ればBがヲ格に立ち、Aはヲ格に立たないということになる。ちなみに、「やる」だけを取るサ変動詞語幹のヲ格名詞は無い。

このことを以下のようにまとめておく。

表 1. サ変動詞語幹をヲ格にとる「する」と「やる」の種類

| ヲ格名詞 | ヲ「する」 | ヲ「やる」 |
|------------|-------|-------|
| サ変動詞語幹 (A) | ○ | × |
| サ変動詞語幹 (B) | ○ | ○ |

5.3.3.3. サ変動詞語幹 (A) と動詞

Aと「する」との結合の割合を見るために、統語的操作を加える。以下の例文は、実例¹⁹⁷を基に、検証のため一部主語や場所成分などを加え変更してある。操作後の文の許容度の判断は、記号で示す（*：非文、?：不自然）¹⁹⁸。

(2) 私は1時間千円で約束を {した／*やった}。

語順交替 *私は約束を1時間千円でした。

連体修飾 私が1時間千円でした約束

受動文 *約束が1時間千円でされた。

強調文 *私が1時間千円でしたのは約束だ。

指示性 約束? —— *そう、1時間千円でそれをしたんだ。

(3) 太郎が花子に対して心配を {する／*やる}。

語順交替 ?花子に対して心配を太郎がする。

連体修飾 太郎が花子に対してする心配。

受動文 *心配が花子に対して太郎によってされる。

強調文 ?太郎が花子に対してするのは心配だ。

指示性 心配? —— *そう、太郎が花子に対してそれをするんだ。

(4) 太郎は花子と結婚を {している／*やっている}。

語順交替 ?太郎は結婚を花子としている。

連体修飾 *太郎が花子としている結婚。

受動文 *結婚が太郎によって花子とされている。

強調文 *太郎が花子としているのは結婚だ。

¹⁹⁷ いずれも実例（『新潮文庫の100冊』）から抽出したサ変動詞語幹である。本節の例文は、サ変動詞語幹に修飾語句を付さず、シンプルな形での検証を行った。以下、実例と出典。「一カ月三十五円で約束をしてしまった」「夜更けて谷中の墓地の方へ散歩をする」「そして結婚をするかも知れないと云っている」林芙美子『放浪記』、「子供のくせにくだらぬ心配をするおなごだ」司馬遼太郎『国盗り物語』、「賢一郎は上手に焦点を逸らすような返事をした」石川達三『青春の蹉跎』

¹⁹⁸ アンケート調査を行い、43名から回答を得た。例(2)～(11)の文すべてに対して「自然(ふつう)」「?不自然(少しおかしい)」「*非文(かなりおかしい)」の3つのレベルで判断をしてもらった。「不自然、非文」と答えた割合のみを示す。(例文番号)、語順交替、連体修飾、受動文、強調文、指示性の順で示す。(2) 67%、37%、60%、72% (3) 67%、23%、98%、56%、77% (4) 67%、88%、100%、72%、88% (5) 47%、49%、98%、19%、49% (6) 21%、14%、77%、56%、81% (7) 9%、5%、48%、9%、9% (8) 11%、11%、25%、11%、39% (9) 34%、5%、27%、16%、27% (10) 16%、9%、37%、5%、5% (11) 34%、5%、27%、16%、27%

指示性 結婚?——*そう、太郎は花子とそれをしたんだ。

(5) 太郎が公園で散歩を{した/*やった}。

語順交替 *太郎が散歩を公園でした。

連体修飾 *太郎が公園でした散歩。

受動文 *散歩が公園で太郎によってされた。

強調文 太郎が公園でしたのは散歩だ。

指示性 散歩?——*そう、太郎が公園でそれをするんだ。

(6) 太郎が花子に返事を{する/*やる}。

語順交替 太郎が返事を花子にする。

連体修飾 太郎が花子にする返事。

受動文 *返事が花子に太郎によってされる。

強調文 ?太郎が花子にするのは返事だ。

指示性 返事?——*そう、太郎が花子にそれをしたんだ。

以上、程度の差はあるが、いずれも(1)のような通常のヲ格名詞と動詞との関係性に比べると、不自然さが見られるものが多い。サ変動詞語幹(A)と動詞「する」との関係は、このような統語的操作を許容しにくいという点で、結合の度合いが一般的な動詞に比べて高く、一体化された構造を持つと考えられる。この点が形式動詞、機能動詞と呼ばれた点でもある。

また、指示性については、全ての例で、代名詞で代用することが不自然となり、名詞として独立したものでないことを示す。複雑事象名詞の示す特徴は、動詞との関係性において述語の一部として機能するというものであり、それゆえに指示性が無いとされるわけだが、サ変動詞語幹(A)は複雑事象名詞としての特徴を明示している、動作性の強い名詞であることがわかる。

5.3.3.4. サ変動詞語幹(B)と動詞

Bと動詞との結合の度合いを見るため、同じように統語的操作を加える。以下は、実例¹⁹⁹を基に、統語的操作のために一部加工してある。同様に判定を付した。

(7) 太郎は大学で実験を{する/やる}。

語順交替 太郎は実験を大学でする。

連体修飾 太郎が大学でする実験。

受動文 ?実験が太郎によって大学でされる。

¹⁹⁹ サ変動詞語幹の場合、「やる」は「する」に置換可能であるために、実例は「サ変動詞語幹ヲやる」を抽出した。「彼は、実験をやると決める何日か前に」「戦争をやるかやらぬかは、政府の決めることだ」「統制をやった効果よりもそれによって生れる逆効果の方が多いとなれば考えなければならぬ」阿川弘之『山本五十六』、「松高生が三、四人、蹴球の練習をやっていた」北杜夫『楡家の人びと』、「文士祭りの前座で講演をやった」五木寛之『風に吹かれて』。

強調文 太郎が大学でするのは実験だ。
指示性 実験？——そう、太郎は大学でそれをするんだ。

(8) 政府が大陸で戦争を {する／やる}。

語順交替 政府が戦争を大陸でする。
連体修飾 政府が大陸でする戦争
受動文 戦争が政府よって大陸でされる。
強調文 政府が大陸でしたのは戦争だ。
指示性 戦争？——？そう、政府が大陸でそれをするんだ。

(9) 政府が経済活動に対して統制を {した／やった}。

語順交替 経済活動に対して統制を政府がした。
連体修飾 経済活動に対して政府がした統制。
受動文 経済活動に対して統制が政府によってされた。
強調文 経済活動に対して政府がしたのは統制だ。
指示性 統制？——そう、政府が経済活動に対してそれをしたんだ。

(10) 太郎が祭りの前座で講演を {する／やる}。

語順交替 太郎が講演を祭りの前座でする。
連体修飾 太郎が祭りの前座でする講演。
受動文 講演が祭りの前座で太郎によってされる。
強調文 太郎が祭りの前座でするのは講演だ。
指示性 講演？——そう、太郎が祭りの前座でそれをするんだ。

(11) 高校生がグラウンドで練習を {していた／やっていた}。

語順交替 グラウンドで練習を高校生がしていた。
連体修飾 高校生がグラウンドでしていた練習。
受動文 ？練習がグラウンドで高校生によってされていた。
強調文 高校生がグラウンドでしていたのは練習だ。
指示性 練習？——そう、高校生がグラウンドでそれをしていたんだ。

以上のように、統語的操作後もほぼ自然な表現として許容される。サ変動詞語幹（B）と動詞との関係は、一般的な動詞と目的語との関係と全く同じとは言えないものの、結合の度合について自由度があり、分離され得ないほど強いものではない。概ね独立した要素と言える。また、指示性については、いずれも代名詞で代用することが可能であり、名詞として独立したものであることを示している。そして、このことは、サ変動詞語幹（B）が形態的に複雑事象名詞に分類されるものでありながら、その特徴としては単純事象名詞が示す特徴を持つということを示している。つまり、語構成という形態面では完全に動詞一語というサ

変動詞を形成する点で、動作性の強い名詞であると言えるが、一方で指示性を示すという点で、その一段弱い動作性を示す名詞と捉えることができる。

ちなみに、以上の例文は受動文を除いて「やる」との交替が可能である。「やる」の受動形式「やられる」は被害を示す用法であるが、これは通常の動詞が示し得る単なる被害の受身（いわゆる迷惑の受身）ではなく、受身の解釈を持たない被害専用の形式として存在する。つまり、第5章第1節で見たように「膝をやられて歩けない」は、通常の受身文「子供が先生に褒められる」のような動作主が普通無い。あるいは、迷惑の受身と言われる間接受身文「隣の人に足を踏まれた」「子供に泣かれた」も、「隣の人が（足を）踏む」「子供が泣く」のように動作主がある。しかし、「祖父は事故で膝をやられて歩けない」の「やる」受身文には、そのような動作主の存在は通常無い。なぜなら、「祖父は事故で膝をやった」の「祖父」は「膝をやる」の動作主ではなく経験の主体と言える。むしろ「膝をやった」のは「事故」である。そのために、通常の受身の意味とそぐわずに交替が不可能となると考えることができる。結合度の問題ではなく、「やられる」固有の語彙的な問題である。

5.3.3.5. サ変動詞語幹と動詞との関係性—「やる」との交替要因—

以上の統語的分析から、サ変動詞語幹と動詞との関係性をまとめる。

サ変動詞語幹（A）と動詞との関係は、サ変動詞語幹（B）と動詞との関係よりも結合の度合いが強く、互いに密着した様態を示すものが概して多い。しかし、サ変動詞語幹（B）と動詞との関係は、結合の度合いが弱く、その関係性は通常の動詞と目的語との関係性に似て、サ変動詞語幹（B）も、動詞も、互いに独立した要素であると考えることができる。したがって、「する」は可能だが「やる」と交替不可能なサ変動詞語幹（A）と、「する」と「やる」が交替可能なサ変動詞語幹（B）には、このような動詞部分との関係性の違いが見られたということである。そして、結合の度合いの強いサ変動詞語幹（A）はその結合の強さゆえに「する」と、より一体化した述語としての姿、機能動詞結合、あるいは軽動詞構文としての振舞いを示す。また、結合の度合いの一段弱いサ変動詞語幹（B）は、その結合の緩さゆえに、「する」だけでなく「やる」との交替も可能になっていると考えられ、機能動詞結合であるが、軽動詞構文とは言えないものである。

さらに、サ変動詞語幹の動作性について述べておきたい。影山（1993）は「VNする」を成すか成さないかによって、複雑事象名詞と単純事象名詞とに分類した。そして、それらの特徴として、複雑事象名詞は述語の一部であるから「それ」で代用できないが、単純事象名詞は通常の名詞なので「それ」で代用可能であると述べた。しかし、以上見てきたように、サ変動詞語幹は形態的には複雑事象名詞に分類されるものの、単純事象名詞のように指示性を持つものがある。そして、その指示性を有するものが「やる」との交替が可能なものであった。このことから、「VNする」を成す複雑事象名詞の中にも、「それ」で代用できる、名詞としての自立性を備えたものが存在していると考えることができる。また、指示性がないサ変動詞語幹（A）は、ヲ格を介して動詞と結合した「（A）をする」において、あたかも一つの述語のように振る舞うのに対し、同じ複雑事象名詞であっても指示性のあるサ変動詞語幹（B）は「（B）をする」全体が述語であるとまでは言えない。つまり、（B）は独立し

た要素として存在すると捉えることができる。したがって、動作性の強い名詞群である複雑事象名詞の中にも、次の段階である単純事象名詞につながるような性質の名詞が混在していると捉えることができ、その点が「やる」との接点につながるものと考えることができる。以上の考察を表2にして示す。

表 2. サ変動詞語幹の性質と「する」「やる」

| | 語の結合度 | VN (動作性) | 指示性 (具体物性) | 機能動詞 | 軽動詞 |
|-----------------------|-------|---------------|---------------------------------|------|-----|
| サ変動詞語幹 (A) ヲする／*やる | 強 | 複雑事象名詞 (強) | 無し (無) | ○ | ○ |
| サ変動詞語幹 (B) ヲする／やる | 弱 | 複雑事象名詞 (弱) | 有り (弱) 単純事象名詞 ²⁰⁰ | ○ | × |

5.3.4. まとめと今後の課題

以上、「する」と「やる」の交替現象について、統語的な側面から考察した。その結果、サ変動詞語幹と動詞との結合が強い場合、そしてサ変動詞語幹に指示性がない場合には、「やる」は「する」に替わって述語として立つことはない。また、逆に結合の度合いが比較的緩く、サ変動詞語幹に指示性がある場合には、「やる」は「する」に替わって述語として立つことができる。前者のような場合は、その語結合は強くこれまで機能動詞結合、あるいは軽動詞構文と呼ばれた性質を示す。後者は機能動詞結合でありながら、軽動詞構文とは言えず、動詞の実質性の希薄さという点では前者ほどに強いものではないと言えるのである²⁰¹。したがって、同じ構文を作りながらも「する」の機能性については、ヲ格名詞たるサ変動詞語幹と一体化して「名詞をする」で述語を形成するものと、述語をなすほどの結合の強さは示さないが「する」が文法的な機能を主として担うものとが見られた。前者は機能性がより強く現れているからこそ、一つの述語として捉えられ、後者はそこまではないものの意味の希薄な機能性の動詞として存在する。この両者の結合のあり方の違いが、「やる」の交替現象を拒否する、あるいは許容する要因となっていたのである。

さらに、この統語的な振舞いの違いを踏まえて、先行研究における意味的な観点を再度考察すると、「やる」はそもそも移動や授受という一般的な動詞の側面を持つ。さらに、単独で「やった」「やるね」「やってしまった」のように、達成と失敗という二つの感情を表現できる。「やってやる」には強い遂行達成への意欲、「やってられない」には遂行の放棄など、単に肯定か否定かの意味を越えた両極の意味を持つ。このような動詞自体が示す「遂行達成」という意味がサ変動詞語幹にも求められ、遂行と呼ぶべき「具体性、意志性、継続性」が求められたと考えられるのである。しかし、動詞自体の持つ意味だけではなく、独立した動詞

²⁰⁰ サ変動詞語幹 (B) の中には「練習する」「統制する」のような「VN スル」を作る複雑事象名詞と、「*戦争する」「*講演する」のような「VN スル」を作らない単純事象名詞がある。

²⁰¹ 佐藤琢三 (1995) では意味論的な分析から、「やる」を形式動詞ではなく「意味的な抽象度の高い」「通常他動詞の1つ」と述べている。

としての振舞いが統語的に実現されているということが、重要な点であったと言えよう。

したがって、これまで意味論的な観点からは説明の難しかったサ変動詞語幹と「する」と「やる」の使い分けが、統語的観点から分析した結果、動詞とサ変動詞語幹との関係性の違い、あるいはサ変動詞語幹の示す文法的性質の違いによるものであることがわかったのである。

第4節 「する」と「やる」の俗語性

「やる」という動詞には様々な用法があり、一つには授受動詞、一つには移動動詞²⁰²、そして一つには漠然たる行為を表す行為動詞としての姿がある。そもそも動詞とは、動作・行為²⁰³を表し、文の述語となり、語形変化する単語のことである。その意味では動詞はすべて行為動詞であり、その動作・行為がどのような内容を持つかということは、その動詞自体が語彙的な意味として持っている。例えば、「食べる」であれば「食物をかんでのみこむ」動作を示している。したがって、動詞は「特定の」動作・行為を表すという意味において行為動詞であるのが一般的である。しかし一方で、そのような特定の動作・行為を示さない動詞が存在する。その典型的な例が「する」である。動詞自体は動作・行為であることを示すに過ぎず、それがどのような動作・行為であるかはその他の要素によって決定されるのである。そして、「する」と同様に漠然と行為であることのみを表す動詞に「やる」がある。

「やる」は、上記のような授受動詞、移動動詞という通常の実質的意味を持つ動詞としての姿と、「する」のように専ら文法的な機能を担う動詞としての姿がある。第4節では、特に後者の側面、つまり動詞一語ではその動作・行為を特定できないという側面を取り上げ、「する」の俗語であると言われる「やる」に焦点を当て考察する。

5.4.1. 俗語

5.4.1.1. 「やる」俗語説

一般的に「ゲームをやる」「実験をやる」などの「やる」は「する」の俗語とされ、そのためか研究対象として取り上げられることも少なかった。第5章第1節から第3節まで見てきたように、「やる」には「する」の俗語であるというだけでは済まされない独自の意味・用法があることが明らかにされた。

しかし、そもそも『やる』は『する』の俗語である」という一般論が正しいのか否か、この根本問題に立ち返り検証する必要がある。俗語であるからには文体としての違いが認められつつ意味的には同じでなければならないが、その実態があるのかどうかである。あるいは、「する」の俗語としてではなく、「やる」独自に俗語であるとされる面があるのかどうか、この二つを「やる」の俗語性という観点から考察したい。

²⁰² 移動動詞とは位置の変化を表す動詞として、「行く、来る、上がる、下がる」などを指す。「やる」も「机を窓際にやる」「部下を得意先にやる」「目を外にやる」など位置の変化を表すので移動動詞とした。

²⁰³ 動詞には、存在を表す動詞もある。しかし、動詞全体の中心的な役割はやはり動きを表すということであり、動作という語彙的な意味によって範疇化されていると考えられる。

まず、「やる」が「する」の俗語と言われる点について、辞書の記述から確認する。以下に、「やる」を見出しとする項目についてまとめて載せる（カタカナの見出しと下線は筆者が付したもの）。

【やる】

- ア. ある動作や行為をする。「する」よりも俗な言い方。『日本国語大辞典』『国語大辞典』
- イ. する。行う。「する」「行う」よりも俗な言い方。『言泉』
- ウ. する。行う。〔種々な行為に関して、ばくぜんと言う。多少品のない言い方〕『学研現代新国語辞典』
- エ. みずから（進んで）する。「する」の乱暴な（またはそれに近い）言い方。『岩波国語辞典』

これらの辞書の記述を見ると、「やる」は「する」よりも俗な言い方であるとされ、「する」の俗語であると捉えられていることが確認できる。辞書に記載されているということは、行為動詞「やる」が「する」の俗語的な言い方として一般的にも認識されていることがうかがえ、「やる」の「する」俗語説があることがわかった。

5.4.1.2. 「やる」俗語としての二面性

次に、それでは俗語とはどういう概念であるのか。以下に、同様に辞書の説明を載せる（カタカナの見出しと下線は筆者が付したもの）。

【俗語】

- オ. ①詩歌、文章などに用いる文字ことば（雅語）に対して、日常の話しことば。②標準的な口語に対して、あらたまった場面では用いられないようなくだけたことば。『日本国語大辞典』
- カ. くだけたことば、卑俗なことば。「雅語」「文章語」に対して日常普通に用いられる語。『日本大百科全書』
- キ. ①文章語や雅語に対して、世間で日常的に用いられる言葉。口語。②あらたまった場面では使われないような卑俗な言葉。スラング。『大辞泉』

俗語あるいは俗とは、一つは「話しことば」を指し、もう一つは「卑俗さ」を指していることがわかる。つまり、「やる」が「する」よりも俗な言い方、あるいは「する」の俗語であると言うとき、「やる」は「する」よりも話しことば的であること、また、「する」よりも卑俗なことばであること、の二点を意味することになる。

この「話しことば性」と「卑俗性」を「やる」の俗語性と捉え、考察を進めることとする。ちなみに、先行研究には「やる」が「する」の俗語であることを検証したものは見られない。この俗語としての二面性の検証と、そして、「やる」との比較によって見られる俗語性とは

別に、前述した「やる」単独での俗語性も考察に入れ、以下のように考察の観点と課題をまとめると。

①話しことば性

→「やる」は「する」よりも話しことば的であるというのは事実か。

②卑俗性

→「やる」は「する」よりも卑俗なことばであるというのは事実か。

③「やる」独自の俗語性

→「やる」だけに見られる俗語性というのはあるのか。

5.4.2. 俗語—話しことば性—

ここでは、まず俗語の特徴である「話しことば」という性質について検証する。

5.4.2.1. 話しことば性を測る

さて、話しことばであること、つまり話しことばという性質を検証する方法には二つあると考えられる。一つは、話しことば資料を用いる方法であり、もう一つは書きことば資料を用いる方法である。前者の方法では話しことば資料を調査対象とし、そこで「やる」が頻出するのを確かめられれば話しことば性が強いことが推測される。また、後者の方法では書きことば資料を調査対象とし、そこで「やる」が稀出であることが認められれば書きことば性の弱さ、ひいては話しことば性を有することが推察されるはずである。「やる」が日常の話しことばで使われるものであるならば、逆に書きことばでは使われにくいということになるからである。今回は後者の方法で検証を試みる。

調査においては、新聞記事を書きことば資料として取り上げる。具体的には朝日新聞記事のデータベースを用いた。今回の調査では、朝刊、発行社東京、本紙を用いる。そして、検索する紙面は内容の偏りを避けるためと、より話しことば性の強い内容を目指して、報道記事が中心となっている、総合記事²⁰⁴を扱う第2総合面とした。調査対象は2005年3月1日から3月31日までの1ヶ月分である²⁰⁵。

5.4.2.2. 新聞記事の言語的性質

検証の前に、新聞記事の言語的性質について先行研究を踏まえ考察する。

これまで、話しことば・書きことばとは何かという観点から両者について、いくつかの考察がなされてきた。特に話しことばへのアプローチが多いが、その中で大石初太郎(1956)は言語行動に着目し、(1)原産の別、(2)即席・なぞりの別、(3)本来の別、の3つの観点から話しことばを分類している。また、南不二男(1996)は(1)初期状態、(2)現在状態、(3)志向目標、(4)構造特性の四つの指標から、その性格を把握しようと試みて

²⁰⁴ 具体的には「時時刻刻」「ひと」それから、教育・政治・社会・科学関連の記事などが見られる。

²⁰⁵ 1ヶ月分の新聞記事は量的にはまだ不十分ではあるが、出現の傾向性(つまり多いか少ないか)という点は検証できると考えた。また、「やる」が何月かという季節や時期に偏りがあるとは考えにくいので無作為抽出にはせず、調査時最近のひと月を対象とした。

いる。いずれも話しことばの性質を抽出する有効な観点、指標となっている。

そこで、大石（1956）の類別を書きことばに应用すると、（１）文字原産、（２）なぞり、（３）本来読ませることばの三つの特徴を有するものが書きことばということになる。新聞記事を振り返ってみると、もともと文字であるという点（１）、即席ではなく何度か考察しながら書き進めた結果であるという点（２）、本来読ませるためのものであり、実際に読み物であるという点（３）から、最も書きことばの性質は強いと言える。

また、南（1996）には「どう見ても話しことばと関連があるとは認められないものもある。『字字文文』の場合がそれで、はじめから黙読されることだけを想定して書かれた記事、論文などがその例である」との記述がある。『字字文文』とは、（１）初期状態、最初から文字である、（２）現在状態が文字である、（３）志向目標、目指すスタイルが文章語的である、（４）構造特性が文章語的である、ということである。この点でも新聞記事は書きことば資料としてその最たるものと言える。

俗語の持つ「話しことば」という性質から最も離れた文体が新聞記事であるということは、「やる」が俗語であるならば新聞記事には用いられないということになろう。

次に、さらに書きことば性質の強い資料を調査対象とするために、意見や論考あるいは投稿などの記事は避け、報告記事が中心と考えられる紙面を選択した。それが第 2 総合面である。

したがって新聞記事は、媒体が文字であること、黙読を前提に書かれてあり、目的が読み物であること、また同じ書きことばであっても小説やシナリオなどに比べると内容的に硬いこと、さらには新聞であるという点で公共性、標準性、規範性なども帯びている。以上の点から、新聞記事は、書きことばの性質を強く持つものであり、調査対象として「やる」の俗語性を検証するのに適した資料だと考える。

5.4.2.3. 話しことば性の強さ

新聞記事を調査対象とし、「やる」についてはその活用形「やる」「やった」「やって」「やろう」「やらせ」「やらな」「やり」「やれ」を検索した。その結果、これらの使用が認められたのは記事にして 35 件あった。そのうち今回の調査に該当しないもの（例、てやる、やりとり等）を省くと 30 件となる。そして、各記事の一つ一つ確認したところ、30 件の記事に「やる」動詞を用いた用例は 30 例で、一つの記事に 1 例ずつしか見当たらなかった。総記事数が 180 件（異なり数）であり、記事の長さは長いもので 3000 字強、少ないものは 130 字程度であるが、記事件数と字数を考えると「やる」の出現率がかなり低いことがわかる。

次に、これら 30 例の「やる」の用例には共通した点が見られた。それは、用例の全てが会話文中に出現したことである²⁰⁶。新聞記事は書きことば資料であるが、その中でも会話の箇所は話しことばを書き取って表現したものと捉えることができる。三尾砂（1942）も「文

²⁰⁶ 今回の調査では、全ての「やる」が会話文中に現れるという結果となったが、調査の分量を増やせば会話文中以外に出現するものもあるかもしれない。いずれにせよ、「やる」が新聞記事、とりわけ書きことば性の強い「地の文」に出にくいということは確かである。

字に書きあらはされた言葉でも、小説の中の会話部分や脚本の会話部分など、つまり話言葉をそのまま文字に書きあらはしたものは、もちろん話言葉（かなり書言葉化されてゐますが）であります」と述べているように、会話部分は書きことばの中に現れる話しことば性質を示す箇所と言える。

さらに「やる」の例のうち、漠然とした何らかの行為として「する」と置き換え可能だと考えられる例を抽出してみた。その結果は27例であった。これは、「する」に置き換えられるにもかかわらず「やる」を使っている表現であり、いずれも会話内に出現している。つまり、会話という話しことば性質を示す環境に「する」ではなく「やる」を用いているということであり、「やる」の話しことば特徴を示していると考えることができる。

ちなみに、「する」を同様に検索すると、824件の記事（延べ数）が出力され、一つずつ記事の中身を確認し用例数を数えた結果、2406例（延べ数）が見られた。そして、「やる」に置き換えられると考えられる例は42例あったが、やはり新聞記事の報道記事という書きことば性質の強さに応じて、「やる」ではなく「する」が使われたと考えられるものであった。

以上、書きことば性の強い新聞記事、しかも総合面という報道記事を対象にして調査を行った結果、総記事数180件のうち「やる」の出現する記事はわずかに30件であり、その用例数も30例と極めて少数であった。また、その出現箇所がすべて「会話文」中であることに特徴が見られた。したがって、この二点から俗語性の一つである「話しことば」性質が「やる」に強く見られることがわかる。一方で、新聞記事、特に報道記事（会話ではなく地の文）に現れないということは、「やる」の書きことば性質の弱さを示すものであろう。

表 1. 「やる」の新聞記事における出現数

| | 記事数 | 用例数 | 両者置換可 | 出現場所 |
|------|-----|------|-------|---------|
| 「やる」 | 30 | 30 | 27 | 会話文の中 |
| 「する」 | 824 | 2406 | 42 | 俗語—卑俗性— |

5.4.3. 俗語—卑俗性—

次に、俗語のもう一つの特徴である「卑俗性」について考察する。

『日本俗語大辞典』（2003）には、「やる」と「する」に関する記載として以下のようなものが見られる。

- 【やる】：「やられた」「やりー」「やるー」「やったー」「やっちまえ」
「やる①性交する。②殺す。いためつける。③酒を飲む。食べる。」
「やらかす」
【する】：「しでかす」
【する】【やる】混合：「してやったり」「してやられる」

また、国語辞典などで俗語であると明記されていたものもあった。

【やる】：(俗語で) 危害を加える。『大辞泉』

：男女が肉体的に交わる行為をする。卑俗な言い方。『言泉』

この他に拙稿（1999、2002）でまとめた「やる」の意味・用法を参考に、卑俗性つまり「下品な、乱暴な、公では用いられない（用いにくい）」意味・用法を探してみる。すると、以下のような俗語としての用法を加えることができる。表2としてまとめる。

表2. 「やる」の卑俗な意味・用法

| | 意味 | 例 |
|----------------------|------------------|------------------------|
| 喫煙 | タバコを吸う | 一服やる |
| 飲酒 | 酒を飲む | 一杯やる |
| 薬物中毒 | 常用する | 覚せい剤をやる |
| 病気の経験 ²⁰⁷ | 病気を経験する | 大病をやる |
| 加害 | 殺す、痛めつける | 敵をやる、腰をやる |
| 被害 | だまされる、詐欺にあう、盗まれる | 財布をやられる ²⁰⁸ |
| 性交 | 性交する | 彼女とやる |

先行研究の他に、「やってらんねー」「やってられっか」のようなマイナスの感情表現²⁰⁹にも使われる。以上から「やる」が、俗語の性質である卑俗な用法を持つことがわかる。

一方、「する」は上記の辞典には「しでかす」が1例のみ挙げられているだけで、「やる」に比べると、その例は極端に少ないと言える。「する」は卑俗な意味・用法がほとんど見られないということになる。

したがって、表2が「やる」だけに見られる独自の俗語性であり、いずれも「する」と置き換えができない。「する」とは関係無く存在する独自の意味・用法であり、「する」とは無関係に存在する卑俗性と言える。

5.4.4. 「やる」独自の俗語

ここでは、「やる」だけに見られる俗語性について、俗語の「話しことば」と「卑俗」の二点から考える。

まず、「話しことば」性という観点では、「やる」にその性質が強いことがわかった。しか

²⁰⁷ 病気の経験の場合、「大病をやる」「はしかをやる」はそれぞれ「大病を経験する」「はしかをすませる」などの、より正式さ、丁寧さなどが上だと思われる表現があり、この意味で公さにおいて低いのが「やる」である。

²⁰⁸ 「あいつをやる」は「あいつ」を「殺す、痛めつける、殴る…」の意味しか持たず、そこに「だます、詐欺、スリ…」の与害行為の意味は出ない。「財布をやる」にしても同様。しかし、後者のような行為は被害行為として「財布をやられた」の受身の形で種々の被害を表し得るものである。

²⁰⁹ 「やる」の表す感情表現としては、他に「やるね」「やった」「やってやる」などがあり、マイナスイメージの表現とともに、達成、遂行などを表すプラスイメージの表現もある。「卑俗性」という側面を捉えるならばマイナスイメージの感情表現が入り、プラスイメージの感情表現は「話しことば性」の方に入られるものかもしれない。

も、「する」と「やる」が置き換え可能な表現がその中に見られたという点から、「やる」は「する」の俗な言い方という点が確認されたことになる。話しことば性という俗語の側面については、「やる」独自の俗語性を見出すことはできない。なぜなら、話しことばか書きことばかという性質は、どの言語要素も持つものであるから、「やる」だけに見出される性質ではそもそもないからである。

次に、「卑俗」性という俗語の側面において、「やる」独自のものが見られたかという点である。これについては5.4.3.でも取り上げた通り、表2のような意味・用法が全て「やる」独自のものであった。「する」が卑俗な意味・用法が「しでかす」以外に見られないことを考えると、「やる」は特に卑俗な意味・用法を多く持つ動詞であると言っていい。寧ろ「やる」は「する」の表現しない卑俗な意味・用法を肩代わりしている可能性がある。

したがって、「する」は「やる」よりも俗な言い方だと言うとき、厳密には「やる」は「する」よりも話しことばという性質を強く持つという点で、より俗な言い方であるということである。しかし、卑俗性という面では、寧ろ「する」の持ち合わせない独自の俗語性を「やる」が示すことができる。この点は「やる」単独の俗語性の強さとして特記すべき点である。

このように行為動詞「やる」は、より汎用な「する」という動詞に隠れていたが、「する」と比較の上で見られる単なる文体差と言うだけでは留まらない、一つの動詞としての別な意味を持つ行為の側面を示すものであった。

5.4.5. まとめ

以上、「やる」の俗語性について「話しことば」性、「卑俗」性の二点から検証を行った。具体的には、①「やる」は「する」よりも話しことば的であるというのは事実か。②「やる」は「する」よりも卑俗なことばであるというのは事実か。③「やる」だけに見られる俗語性というものはあるのか。について考察した。その結果、①はその通りだった。新聞記事の調査から「やる」の話しことば性質の強さが、表1の通り、その出現数の少なさと出現箇所が会話文中であることから検証された。また、②はその通りだったが、一部その意味するところは異なっている。つまり、「する」は、そもそも卑俗なことばとしての使用がほとんど無い。一方、「やる」は卑俗な意味・用法が極めて多かったのである。そして、③については、表2の通り「やる」独自の俗語性が明らかになった。特に、「やる」の「卑俗」性という性質が確かめられた。重要なのは、それが「する」が示せないような俗語性であるという点であった。

「する」は機能性の動詞として展開するのがその中心的役割であり、類義語である「やる」は置き換え可能なものもありながら、実質動詞としての側面を保ちつつ、「する」の示さない卑俗な意味・用法（これは語結合の強さという点で機能的な性質があるが）に広がることがわかった。

第5節 初級日本語教科書における「する」と「やる」

日本語の動詞「する」は、われわれが日常最もよく使用する単語であることは論をまたない。これまでの大規模な語彙調査によっても、それは裏付けられている。例えば、総合雑誌の用語調査（国立国語研究所 1957）では「する」が第1位であり、新聞語彙調査（同 1971）でも動詞全体で「する」が第1位、語彙全体で第7位となっている。さらに、日本語教育のための基本語彙調査（同 1984）では、「する」は教育すべき基本語彙として最高判定（40 点満点）を受けている。以上のように、動詞「する」は最頻出単語であり、同時に、日本語学習者に教えらえるべき最重要単語と言える。

第5節では、「する」が初級日本語教科書（『みんなの日本語初級』『初級日本語げんき』）でどう提示され、何を教えられているのか²¹⁰全文調査を行い、それが「する」の使用実態を十分に反映したものなのか、問題点や課題を明らかにしたい。加えて、類義語「やる」についても全文調査を行う。「やる」は「する」のくだけた言い方とされ、日常会話の中で耳にする機会の多い動詞でもある。最頻出・最重要の「する」及びその類義語「やる」が、果たして初級の日本語教育において十分に教えられているのか、日本語教科書を分析することで考察していく。そして、その結果を日本語学習の更なる充実のための基礎資料としたい。

5.5.1. 調査概要

初級レベルの日本語を教えるための総合的な教科書に、『みんなの日本語初級』と『初級日本語げんき』がある。これらを調査対象とする。両者の概要を示す。

『みんなの日本語初級』は、『新日本語の基礎』（1990 年初版）の姉妹編として 1998 年に初版が発行、2012 年に 2 版の改訂を経ている。国内だけでなく海外でも広く使用されており、聞くこと、話すことを中心に、読むこと、書くことも教える総合教材である。全 2 巻・50 課で初級の文法項目全てと、語彙約 2,000 語が学べる。副教材として『翻訳・文法解説』が各国語版で出されている。本調査では、『第 2 版本冊』全 2 巻の本文全てに目を通し、「する」と「やる」が用いられている文全てを抽出した。本文全てというのは具体的には、各課の「文型」、「例文」、「会話」、「練習」、「問題」、その「解答」、さらに「復習」、「副詞・接続詞・会話表現のまとめ」、本冊末尾の「索引」である。そして、何が学習のポイントになっているのか把握するため、『みんなの日本語初級 I（第 2 版）翻訳・文法解説英語版』の「Vocabulary」「Useful Words and Information」「Grammar Notes」を参照した。また、後半の『みんなの日本語初級 II 翻訳・文法解説英語版²¹¹』は初版の「Vocabulary」「Reference Words and Information」「Grammar Explanation」を参照した。

『初級日本語げんき』は、1999 年に初版、2011 年に改訂版として第 2 版が出され、初級日本語を 4 技能「話す・聞く・読む・書く」にわたって学習する総合教材である。全 2 巻・23 課で初級の文法項目と、漢字 317 字、語彙約 1,700 語が学べる。国内・海外の日本語コ

²¹⁰ 初級日本語教科書における「する」の扱いについて調査・研究した先行研究は管見のところ見つけることができなかった。

²¹¹ 本章を執筆現在（2013 年 11 月末）、まだ第 2 版用の『翻訳・文法解説 II』が出版されていなかったため、初版のものを使用した。

ースで数多く採用されている。この教科書は、本冊の中に英語による文法解説があるため、調査においては『初級日本語げんきⅠ』と『初級日本語げんきⅡ』（全2巻）の本文と練習問題の解答及び索引に目を通し、同様に「する」と「やる」が用いられている文を全て抽出した。本文とは、「会話」「単語」「文法」「練習」「Culture Note」「Useful Expressions」である。

なお、両者から抽出したものは、本文、練習、問題に出現した「例文」であり、実際にその単語の意味が用例として文の形になって示されているものである。学習者にとっては、単語レベルではなく文レベル・文型になってこそ使えるものになるため、どのように教えられているかを探るうえでは、文レベルのものを扱うのが妥当と考えたからである。

以上のとおり、代表的な初級教科書（総合教材）において「する」とその類義語「やる」は何をどこまで教えられているのか、またその説明や提示の方法を調査し、問題点や課題を明らかにしたい。

5.5.2. 初級日本語教科書に見られる「する」文

「する」が最もよく使われる動詞であること（つまり頻出する理由）は、「する」が様々な要素と共起可能であるという事実によるところが大きい。

このことは、日本語教育の立場から言うと、「する」は文型が多岐に渡ることになる。「する」は名詞、形容詞、副詞などと連語を形成する。さらにその名詞だけでもガ格、ヲ格、ト格、ニ格と様々な格助詞を取り得る。そして、それら一つ一つに別の意味・用法が存在するというのが、「する」の実態でもある。ここでは、「する」の文型ごとに教科書の扱いを見ていくことにしたい。

5.5.2.1. 名詞を補語にとる「する」文

名詞（以下、Nと表示）を補語にとる文には、「Nをする」「Nがする」「Nにする」「Nとする」「Nする」がある。以下、例を全て提示する。ただし複数回出現するものは、初出の文例のみを記載し、（ ）内に初出の課を表示する。（読）とあるのは、〈読み書き編〉を意味する。

5.5.2.1.1. 「Nをする」文

名詞をヲ格にとる文型は7つの意味・用法に下位分類することができる（拙稿2002、本章第1節～第3節）。

①動作（サ変動詞語幹・動詞連用形からの転成名詞、動作性名詞）

『みんなの日本語初級』（以下、『みんな』と表示）

(L16) 食事[を]して、うちへ帰って、それから日本語を勉強しました。男の人は週末に旅行をしました。国へ帰ってから、大学に入って、経済の研究をします。（復習D）佐藤さんは今コピーをしています。（L18）寝るまえに、お祈りをします。（L19）きのうからダイエットをしています。ゴルフの練習をします。（L23）学生のとき、アルバイトをしましたか。

（L24）もうパーティーの準備をしましたか。おばあちゃんは僕に古い日本のお話をしてく

れます。(L28) 運転しながら電話をしないください。(L38) 本を読んだり、犬の世話をしたりするのが好きです。(L40) どんな発表をするんですか。(L42) 貯金はしないんですか。みんなでお祝いをしましょう。(L43) 彼女とけんかをしてしまった。(L44) じゃ、シャンプーをしますから、こちらへどうぞ。(L47) 女性は化粧をしたときと、していないときでは、ずいぶん変わるそうです。(L49) どなたがあいさつをしますか。

『初級日本語げんき』(以下、『げんき』と表示)

(L3) 電話をします。デートをします。(L4) たけしさんは土曜日にアルバイトをします。
(L8) 私は日本語の勉強をしました。たけしさんは部屋の掃除をしました。だれが料理をするのが上手ですか。(L9) 毎日運動をする人(は元気です)。(L14) 男の人は三月十四日にお返しをしなきゃいけないんですよ。(L15) 握手をする。メアリーさんは日本でいろいろな経験をしようと思っています。(L17) 私の友だちの会社は休みが多くて、残業をしなくてもいいそうですよ。コンタクトを入れてから、化粧をします。(L18) たけしさんは歌を歌いながら洗濯をしています。(L21) 予約をしておきました。パーティーの準備をしなきゃいけませんね。社長が会議に出ている間に、昼寝をします。(L22) 高校の時、一人暮らしをする。今日は子供の誕生日なので、一緒に晩ご飯を食べる約束をしたんです。予習をすれば、授業がよくわかります。ピアノの練習をしなさい。(読み書き編(以下、読) L8) アンケートをして、日本の会社員はとても大変だと思いました。(読 L9) 晩ご飯の後、いろいろな話をした。(読 L10) どんな生活をしていると思いますか。(読 L14) どんなアドバイスをしましたか。(読 L17) ヨーコとジョンはいろいろな平和活動をしました。平和のための活動をしています。(読 L18) よく朝寝坊をする。(読 L19) 奨学金の申し込みをしたいのですが、どうしたらいいですか。(読 L21) 安いアパートに住んで、めったに外で外食をしたり、旅行に行ったりしません。

この他に、サ変動詞語幹や動詞連用形ではないが、動作性の名詞として以下のようなものがある²¹²。

『みんな』(L25) もう一度若くなったら、勉強して、いい仕事をしたいです。(L26) ボランティアをします。

『げんき』(L4) インターネットをしますか。よく友達にメールをしますか。(L8) よく仕事をしますか。ホームステイをしています。(L11) ダイエットをする。(読 L18) 時々、引越しなどの力仕事もします。(読 L23) バンザイをしているからです。

②遊戯・スポーツ

『みんな』

(L6) わたしはサッカーをします。あしたテニスをしませんか。(L13) スキーをします。釣

²¹² 『明鏡国語辞典第二版』に基づき、名詞かサ変動詞かを判定した。

りをします。(L14) ダンスをしています。(L15) 公園で野球をしています。(L16) 朝ジョギングをして、シャワーを浴びて、会社へ行きます。(L17) きょう男の人はスポーツをしてはいけません。(L12) 生け花をします。(L40) 男の人は盆踊りをしてみます。(L48) 柔道をしたいと言ったので、柔道教室に行かせています。

『げんき』

(L3) テニスをしませんか。スポーツをしますか。(L4) ゲームをしますか。バドミントンをしませんか。(L7 表現ノート) トランプをする。(L11) 釣りをする。(L13) サッカーをする。メアリーさんはゴルフをしますか。(読 L15) 今年の夏、私は沖縄で初めてダイビングをしてみました。(読 L19) お兄さんとしょうぎをしたりしたことを今も思い出します。(読 L19) 落語をする人を落語家と言います。

③ 催し物

『みんな』

(L6) あした友達とお花見をします。(L14) 今週の土曜日うちでパーティーをします。(L21) 今会議をしています。(L31) 結婚式はどこでしますか。(L40) 毎日漢字のテストをしていますが、ハンス君はいい成績ですよ。(復習 J) どこで忘年会をするか、相談しているんです。(L49) あなたが話を聞きたい人に来てもらって、講演会をします。

『げんき』

(L8) たけしさん、あしたみんなでバーベキューをしませんか。(L15) うちでパーティーをしようと思っています。週末にキャンプをする。(L22) 私が先生だったら、学生に毎日テストをさせます。

④ 付帯

『みんな』(L 22) 赤いネクタイをしている人はだれですか。

『げんき』(L17) ネクタイをしなきゃいけませんか。

着装や付帯を表す用法で「マスク／手袋／マフラー／湿布／カーテン／チャック／蓋／塩をする」などが日常会話でも使われる。これらは、「する」を使わない場合、ヲ格名詞によって別の実質動詞をセットで覚えなくてはならない。例えば、「マスクをつける」「手袋をはめる」「マフラーを巻く」「湿布を貼る」「カーテンを引く」「チャックをしめる」「蓋をかぶせる」「塩をふる」のように、動詞を多く覚えておく必要が出る。学習者の記憶の負担を減らすためにも、「ネクタイ」以外にもこれらをまとめて教えることは重要だと思われる。

⑤ 様子

『げんき』(L23) そんな悲しそうな顔しないで。もらったプレゼントが気に入らなくても、うれしそうな顔をしたほうがいい。

「長い髪／きれいな歯をしている」のように常にテイル形で用いられるもの、「派手な格

好をする」のようにどちらでもいいものなど、ある人物の様子や状態を描写するのに使われる。これらは、別の言い方ができる（髪が長い、歯がきれいだ、格好が派手だ）ものもあり、必ずしも教えなくてはならないものではない。『みんなの日本語』には無かった。

⑥職業・役割

『げんき』（読 L18）今、家庭教師をしている。

これは、「エンジニア／弁護士／モデル／コックをする」などの表現を指し、自分の職業を述べる表現として話し言葉では一般的である。『みんなの日本語』には無かった。なお、「役割・役職」の名詞がヲ格に来る「司会／会計係をする」などの例文は、どちらの教科書にも見られなかった。

⑦病気・怪我

『みんな』（L32）やけどをしたんです。足にけがをしたんです。（L17 useful words and information）下痢をします。便秘をします。

『げんき』（L12 Useful Expressions）やけどをしました。けがをしました²¹³。

病名などはヲ格に立つことはほとんどない（*風邪をする、*胃炎をする）ため、教科書に見られた使い方がその中心である。他に、生理現象「くしゃみ／せき／おなら／げっぷをする」が日常会話で使われるため、まとめて提示すると便利ではないだろうか。

⑧その他「～ものをする」「～ことをする」など

「～もの」：『みんな』（L29）今の電車に忘れ物をしてしまったんですが……。『げんき』（L4）メアリーさんはいつ買い物をしましたか。

「～こと」：『みんな』（L35）悪い友達と仲良くすると、悪いことをします。（L36）何か特別なことをしていらっしゃいますか。『げんき』（読 L10）おじさん、いいことをしましたね。（L22）私は自分の子供に好きなことをさせてあげるつもりです。

連語：『みんな』（L32）無理をしないほうがいいですよ。『げんき』（読 L21）私はそんなにぜいたくができません。

この他に『みんなの日本語』には「（L6）うちで宿題をします。」、『げんき』には「（読 L23）笑って Vサインをしています。」が見られた。

5.5.2.1.2. 「N をする」文の説明

以上のような「N をする」についてどのような説明がされているだろうか。まず、『みんなの日本語初級』について抜粋する。

²¹³ 『初級日本語げんき』では「下痢です」「便秘です」という表現を掲載し、「下痢をする」「便秘をする」という表現は見られなかった。

- ・ **Nをします** L6 (『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』 p44)

A fairly wide range of nouns are used as the objects of the verb します, which means that the action denoted by the noun is performed. Some examples are shown below.

- 1) Play sports or games サッカーをします トランプをします
- 2) Hold gatherings or events パーティーをします 会議をします
- 3) Do something 宿題をします 仕事をします 電話をします

- ・ **します** [ネクタイを〜] put on [tie] L22 (同 p136)

他に、当該の名詞が「〜をする」の形を取れる場合は、語彙表にそのことが補足されている (例、L9 アルバイト (〜をします : work part-time))。

しかし、一方でサ変動詞の語幹が名詞として使われ「Nをする」になることについての説明はない。例えば、L15 に「研究します」が初出するが、「研究」が名詞として使われ「研究をする」の形になることについての言及はどこにもない。そして、L16 に「国へ帰ってから、大学に入って、経済の研究をします」という文例がいきなり出てくる。同様に、「コピーします」が L14 に初出するが「〜をする」になることは書かれておらず、数課後のまとめ (復習 D) に説明がないまま「佐藤さんは今コピーをしています」が出現する。

「Nをする」になるサ変動詞を挙げてみると、「買い物する、食事する、散歩する、結婚する (L13)」「コピーする (L14)」「研究する (L15)」「見学する (L16)」「残業する、出張する (L17)」「運転する、予約する (L18)」「掃除する、洗濯する (L19)」「修理する (L20)」「説明する (L24)」など数が多い。一方、「Nをする」の形をとれないものは「心配する (L17)」だけである。このことも踏まえ、「名詞として用いられること」「『〜をする』の形で用いられること」を加えてもいいのではないかと考える。

また、「準備」という単語は、L24 に名詞として出現し「〜[を]します : prepare」と説明があるが、サ変動詞の「準備する」は出てこない。「電話」という単語は、名詞が L3 に、「電話する」が L16 に出てくるが、いずれも「Nをする」になることの説明がない。そして、説明がないまま、L28 に「運転しながら電話をしないでください」が出てくる。先の「研究する」「コピーする」の例も合わせて、整合性に欠ける。

つまり、『みんなの日本語初級』では、サ変動詞語幹が名詞として導入されている場合は、「〜をする」の形になることが教えられている (ただし、全てではない) が、サ変動詞として導入されている場合は、その語幹が名詞になる可能性やそれを用いた「〜をする」の存在については教えられていないということである。一方で、「〜をする」の形になるものがサ変動詞として使われる可能性についても説明されていない。学習者が混乱する可能性がある。

次に、『初級日本語げんき』では、「表現ノート」という補足説明の項に次のように出てくる (一部省略)。

- ・ 〜する Most irregular verbs are compounds of nouns and the verb する. If you

have learned an irregular verb, therefore, you have also learned a noun.

勉強する(Verb) 勉強(Noun) ex. 日本語の勉強は楽しいです。

Some of these nouns can be used as the “object” of the verb する.

私は日本語の勉強をしました。 Compare: 私は日本語を勉強しました。

・する to wear small items(necktie, watch, etc.)

サ変動詞語幹が名詞として使えることを指摘しているために、それぞれの単語が出てきたときに、いちいち「～をする」になることを説明しなくて済んでいるわけだが、一方で、サ変動詞語幹の全てを名詞と誤解してしまう可能性がある。例えば、「がっかりする (L23)」の「がっかり」は、当然ながら名詞ではない。

どちらの教科書も「N をする」の説明が不足していると言えるだろう。「する」は用例の幅が広いと、学習者にとっては「簡単に見えるのに難しい」ということになりかねない。したがって、「N をする」が多様な用いられ方をするをまとめて説明する箇所が設けられるべきだと考える。「する」は意味的には大変シンプルなものであるが、それ故に、どこまで使えるのかその広さと限界について知っておく必要がある。また、話せなくても聞く機会の多い「する」の用法がわからないということがないように、説明はNの種類によって示すことが必要だと考える。ただし、上記7つでは細かいので、教育的には以下のようにまとめて示すことを提案したい。

1. 「動作」をする
2. 「遊び・スポーツ」をする
3. 「催し物・会合」をする
4. 「身に着けるもの」をする
5. 「様子・身体部位」をする
6. 「役割・職業」をする

1 には、「～もの（買い物、忘れ物、書き物、調べ物）」「～こと（楽しいこと、次のこと、頼まれたこと）」も入る。外来語に「をする」をつける「メールをする」「ネットをする」などは造語力の強いところである。サ変動詞語幹、動詞の連用形など多くの名詞が含まれるため、初級学習者にはその広がりを示し、中級以降その限度に注意するよう指導するのはどうか。4は「ネクタイ」の他に、「マスク」「ネックレス」「指輪」など身近なものの例が入ってもいい。6は「家庭教師」の他に、職業や役割を表す「司会」「受付」「幹事」「モデル」「先生」などがあってもいいのではないかと考える。

5.5.2.1.3. 「Nがする」文

「Nがする」は、ある感覚を表現する文で、Nには「味、におい、音」などの知覚、それらの具体化した「寒気、頭痛、めまい」などの症状、「～気」「～感じ」などの雰囲気がある。意味・用法を以上の3つに分類し、教科書を見ていく。

①知覚

『みんな』(L47) にぎやかな声がしますね。いいにおいがしますね。変な味がしますね。変

変な音がしますね。(復習 L) 隣の部屋で音がします。

「声、におい、味、音がする」が教えられている。これらの名詞は修飾語句を伴うことが多く、単独で使うと非文になるものもある（＊においがする、＊味がする²¹⁴）。ところが、『みんなの日本語』には、1 例だけ「隣の部屋で音がします」という修飾語句の無いものがあった。これは、「隣の部屋で何か（の）音がする」「隣の部屋で物音がする」でも同様の意味を表せる²¹⁵。一方で修飾語句が必要、一方で修飾語句が不要というのは学習上難しい。

ただし、厳密には、どのような知覚かを具体的に示さない場合や否定文では、修飾語句を伴わない方が自然である。例えば、「あれ？音がする」「これにおいがしないよ」「全然味がしない」など。初級の日本語教育ではわかりやすさを優先し「知覚を表現する」文として、修飾語句を伴った例だけにすることが望ましいと思われる。

②症状

『みんな』（L17 useful words and information）吐き気がします。寒気がします。めまいがします。

『げんき』（L12 useful expressions）めまいがします。

どちらも特に説明はない。この他には「悪寒、頭痛、耳鳴り」などがあるが、「頭が痛い」など別の表現もあるため、初級はこれで十分だと思われる。

③雰囲気

どちらの教科書も教えていない。例えば「彼は怒っている気がする」「ここは嫌な感じがする」などは、別の初級文法で同じことが言える（彼は怒っているようだ、ここは嫌だなと思った）ので、必ずしも教えなければいけないことはないだろう。

5.5.2.1.4. 「N がする」文の説明

『みんなの日本語初級』の説明は、以下の通りである。

・声／音／におい／味がします L47（『みんなの日本語初級 翻訳・文法解説』 p135）

変な音がしますね。

A phenomenon that is perceivable by the sense is described by using ～がします. Expressions in this category are こえがします, ににおいがします, and あじがします. All these expressions mean that these things have been perceived or sensed regardless of the speaker's intention.

²¹⁴ 「味がしない」という否定形はあるが、「＊味がする」はない。

²¹⁵ 「隣で声がする」も「隣で人の声がする」の省略だと考えられる。話し言葉で、くだけた表現になっているとも言える。

これらの表現が、修飾語句を伴わなければならない点が述べられていないことは問題である。また、①知覚については説明があるが、②症状については説明はない。一方、『初級日本語げんき』には、例も説明も無かった。

以上、「N がする」は、現状あまり教科書では取り上げられていないが、知覚と症状の用法をまとめて提示すると学習者にとっては使える表現を学べると思われる。

5.5.2.1.5. 「N にする」文

「N にする」の意味・用法は、「選択・決定」と「変化」の2つに分類することができる(拙稿 2013、第4章第4節)。分類ごとに教科書を見ていく。

①選択・決定

『みんな』(L44) 飲み物は何にしますか。ビールにします。晩ごはんはカレーライスにします。晩ごはんはてんぷらにします。出発はいつにしますか。18 日にします。飛行機は何時の便にしますか。11 時の便にします。ホテルはどこにしますか。「ホテルひろしま」にします。部屋はシングルにしますか、ツインにしますか。会議はあしたにします。食事は和食と洋食とどちらにしますか。和食にします。(復習 K) 今晚のおかずはすき焼きにしましょう。じゃ、それにします。

『げんき』(L15) 昼ご飯は何にする？

②変化

『みんな』(L44) 水の量を2 ばいにします。ごはんが多いので、半分にしてください。塩の量を半分にします。今週は都合が悪いですから、来週にしてください。ショートにしたいんですけど……。

『げんき』(L17 Useful Expressions (床屋／美容院で) ボブ・マーリーみたいな髪型にしたいんですが。

以上のように、『みんなの日本語初級』では「N にする」の文例が多く、特に①選択・決定の理解をはかっていることが読み取れる。用例が食事の場面に偏らせないためには、例えば「プレゼントは何にする？時計にしよう。」「会場はどこにする？駅前のバーにしたい。」などの例があってもいいかと思う。②変化の用法については少ないが、他に「魚を刺身にする」「クッションを枕にする」「スカーフをリボンにする」「娘を医者にする」などの用例が考えられるが、これらに類したものは見られなかった。話しことばにおけるこの表現は自然さという点で重要な意味を持っているため、もう少し取り入れてもいいか考える。例えば、「面談の日を3時ではなく、4時にしてください。」は「3時ではなく、4時に変えてください」よりも柔らかく使い勝手がいいはずである。

次に、『みんなの日本語初級』での説明は以下の通りである。

・N にします L44 (『みんなの日本語初級 翻訳・文法解説』p117)

N にします expresses selection and/or decision.

部屋はシングルにしますか、ツインにしますか。
会議はあしたにします。

これは、①選択・決定の説明である。一方、②変化は「形容詞する」の変化の用法と一緒にまとめて説明している。また、『初級日本語げんき』では例文は一例ずつしかなく、説明もない。単語の訳に「する to decide on(an item) (itemに)」とあるだけである。

この用法は話し言葉ではよく使われると考えられるため、例文が多い方が望ましいと考える。

5.5.2.1.6. 「Nとする」文

この文型には「試験日を11日とする(決定)」と「このお酒はトウモロコシを原料としている(同定)」の用法がある(拙稿2013、第4章第4節)が、教科書には一例も見られなかった。前者は硬い表現で書き言葉であり、後者も別の易しい表現が可能(このお酒はトウモロコシが原料だ)であるため、初級レベルでは必要ではないだろう。

5.5.2.1.7. 「Nする」文

『げんき』(読L20) 一枚三百両もする皿だったのです。

説明は、語彙表に「[する]to cost」とあるだけである。『みんなの日本語初級』には無かった。「値段」を表す「金額する」は、「この時計は20万円(も)した」「古い人形が1000円もして驚いた」「*皿は1枚100円した」などのように、単に金額がいくらであるかを示す「～は(金額)だ」とは意味が異なる。つまり、高い値段あるいは思いがけなく高額であることを示すような内容について用いられ、驚きや強調の意味が加わって表現されるものだということに注意が必要である。

この他に、「時間」の経過を表す「3分するとカップ麺ができあがる」「1時間したら戻ってきて」などがあり、これは条件節の中でのみ用いられる。実質動詞の「経つ」を使うより話し言葉では使いやすい表現である。その意味では、「時間」を教えると便利である。

5.5.2.2. 形容詞と共起する「する」文

形容詞と「する」が連なって使われる「(イ形容詞く)する」「(ナ形容詞に)する」は「変化」を表す。どちらの教科書にも文法説明があり、また用例も多い。基本的な学習項目として教えられていることがわかる。以下、例文は初出のものを出す。

『みんな』(L44) ズボンを短くしてください。もう夜遅いですから、静かにしていただけませんか。

『げんき』(L17 Useful Expressions 床屋／美容院で) あまり短くしないでください。(L21) 冷たくする。簡単にする。

文法説明は、『みんなの日本語初級』の方が詳しいのでそちらを以下に載せる。

い-adj (〜~~い~~) →〜く
 な-adj[~~な~~]→に
 Nに

} します L44 (『みんなの日本語初級 翻訳・文法解説』p117)

〜く／〜にします, as shown in ⑪, ⑫ and ⑬, indicates that somebody “turns” something into a certain state.

⑪音を大きくします。⑫部屋をきれいにします。⑬塩の量を半分にします。

先の「Nにする」の変化の用法を「形容詞する」と一緒にまとめて説明している。どちらも L44 の学習項目であり、一気に変化の用法を教えている。

5.5.2.3. その他の動詞と共起する「する」

その他の動詞（以下、V と表記）と共に用いられる「する」として、以下では、「V たり V たりする」「V とする」、形式名詞が被修飾語となる「V ることにする」「V たことにする」「V るようにする」「V ようとする」もここに入れ、初級教科書でどう教えられているか見ていくことにする。例は初出のものだけを載せる²¹⁶。

5.5.2.3.1. 「V たり V たりする」

『みんな』(L19) 休みの日はテニスをしたり、散歩に行ったりします。

『げんき』(L11) 韓国で買い物をしたり、韓国料理を食べたりしました。

この文型は様々な例が出されており、基本的な学習項目として教えられていることがわかる。文法説明はどちらも「～て、～する」との違いを述べながらその意味を説明している。ここでは『初級日本語げんき』の説明が簡潔なのでそちらを載せておく。

(activity A)たり (activity B)たりする do such things as A and B 『げんき』p255

5.5.2.3.2. 「V とする」

これには、「新聞各社は検察が犯人を既に逮捕したとした」「マスコミは今後報道を自粛するとした」のような「引用」と、「お金がたくさんあったとする」「日本語が上手に話せるとする」のような「仮定」の用法がある（拙稿 2013、第 4 章第 4 節）。いずれも動詞は辞書形とタ形が可能であり、動詞は補文の中に収まる。両者の違いは主語が存在するか否かにあり、「新聞各社は[検察が犯人を既に逮捕した]とした」「マスコミは[(マスコミが)今後報道を自粛する]とした」のように引用内容を提示した主語が存在する。一方、仮定の用法では「[お金がたくさんあった]とする」「[日本語が上手に話せる]とする」のように、仮定した主体を主語として示すことがない。簡単に述べると以上のような文法的違いがある。

どちらの教科書でも教えられていない。引用の用法は、特に新聞などの報道関連の記事を

²¹⁶ N と共起する「する」の文型は、N に制限があるためその種類を示すため全ての例を掲載したが、V と共起する「する」の文型は V に制限がないため初出の例文のみを掲載する。

読む際には必須の表現となるため、中級以降の読解には重要な学習項目となる。一方、仮定の用法は「～たら」を初級で学習するため敢えて提示する必要はないが、「仮定する」といった実質動詞よりは使いやすい表現であるため、中級以降はやはり必要となるだろう。

5.5.2.3.3. 「V ることにする」

『げんき』(L23) この夏はアメリカに行くことにしようか。メアリーさんは一日に二回、犬を散歩に連れていくことにしています。

～ことにする 『げんき』 p259

ことにする means “decide to do…” It follows the short form present tense of a verb.

ことにしている means “do something as a regular practice”, that is, you have made up your mind that you should do something and have stuck to that determination.

『みんなの日本語初級』には無かった。この文型は「Nにする(決定)」と比べると「～こと」が名詞修飾節になっているため、基本的には名詞か名詞節かの違いだが、学習者にとっては別に説明と例がある方がわかりやすいだろう。ただし、「V ことにする」には「変化」の用法は無いため、その点は注意する必要がある。

5.5.2.3.4. 「V たことにする」

どちらの教科書にも無かった。「私はそのレポートを自分で書いたことにした」のように、実際には自分でやっていないのにそうだったかのように取り繕うことを意味し、「レポート＝自分で書いた」と見なすので「仮想同定」である。動詞はタ形になる。別の表現で言い換えるとすると、「私はそのレポートを自分で書いたと嘘をついた／偽った」「自分で書いていないのに、自分で書いたと言った」などが考えられる。当然ながら意味は同じではなく、「V たことにする」は、「言った」かどうかはわからないがそういうことになるよう何かをしたというような曖昧さを含む言い方である。初級に必要なだとは言えないが、中級以降には必要な表現である。しかし、もし『初級日本語げんき』のように「V ことにする」を初級で教えているなら、それがタ形になるだけで「仮想同定」の用法になるのは便利のため、合わせて教えてもいいだろう。

5.5.2.3.5. 「V るようにする」

『みんな』 毎日日記を書くようにしています (L36)。

V dictionary form

V ない-form ない

} ようにします L36 (『みんな 翻訳・文法解説』 p69)

This sentence pattern is used to express that one habitually or continuously makes efforts to do something or not to do something.

『初級日本語げんき』にはこの文型は無いが、これによく似たものとして先の「V こと

にする」がある。一方、『みんなの日本語初級』はこの文型はあるが、「V ることにする」がない。この二つは意味が似ているため、両方を初級レベルで提示すると混乱の可能性がある。それは、先の「V たことにする」よりも難しい。例えば「毎日日記を書くことにしています」と「毎日日記を書くようにしています」は、違う点は前者で「決意」が、後者で「努力」が強く示されている点であり、しかしながら決意にも努力が必要であり、努力にも決意が込められている点では違いがわかりづらい。

そこで、基本的な意味の違いとして「V ることにする（決意）」「V るようにする（努力）」を示す以外に、両者の違いをわかりやすく提示するには次の二つの方法が考えられる。一つは、「～てください」の例を示すことである。「もっと野菜を食べるようにしてください（みんな L36）」「？もっと野菜を食べることにしてください」、「あしたは絶対に時間に遅れないようにしてください（みんな L36）」「*あしたは絶対に時間に遅れないことにしてください」、以上のように「V ることにする」は他者に対する依頼の表現が取れない。もう一つは、タ形である。「野菜を食べるようにした」と「野菜を食べることにした」では、前者は実際にそれを実行しているが、後者は決意だけでまだ行動には移していない。タ形を示すと違いが見えてくる。

どちらの文型を初級教科書に載せるかの判断は使用例（特に話し言葉）の頻度を調べてからでないとと言えないが、「V るようにする」の方が教えられるべきではないか。別の表現に言い換えると、「日記を書くことにした」は、「日記を書くことに決めた²¹⁷（みんな L30、げんき L10）」という表現が既に両方の教科書にはあるため、「V ることにする」が無くても表現が可能である。しかし、「野菜を食べるようにした」は、「野菜を食べるように努力した（みんな無、げんき無）」と似た意味であるが、「努力する」という動詞は教えられていないうえに、この表現は硬くて使いづらい。以上の理由で、どちらか一つだけを教えるなら「V るようにする」が適当と考える。

ただし、テイル形では例えば「日記を書くことにしている」と「日記を書くことに決めている」では少し意味するものが異なる。そうなれば、「V ることにする（決意）」「V るようにする（努力）」はどちらも使える表現であるため、初級で両方教えるということがあってもいいだろう。

5.5.2.3.6. 「V ようとする」

「勉強しようとしてやめた」「秋が終わろうとしている」のように、何かを行う（何かが起こる）寸前の状態であることを表す。この文型はどちらの教科書にも無かった。「勉強しようと思ってやめた」「秋が終わりそうだ」など別の表現が可能のため、どうしても初級レベルで教えなければならないものとは言えない。

5.5.2.4. オノマトペと共起する「する」

オノマトペは日本語学習において難しいとされるが、教科書ではどの程度出現するだろ

²¹⁷ 「決める」という動詞よりも「にする」という表現の方が汎用性が高く、話しことばでは知っておくべきではないかと考える。

うか。全ての用例を以下載せる。

『みんな』(L39) 地震のニュースを見て、びっくりしました。パーティーに彼女が来なくて、がっかりしました。(L39 Reference Words and Information 気持ち) うっとりする、いら
いらする、どきどきする、はらはらする、わくわくする。(L 47Reference Words and
Information 擬音語・擬態語) ざらざら(している)、べたべた(している)、つるつる(し
ている)。

『げんき』(読 L10) おじいさんは戸を開けて、びっくりしました。(L23) 誕生日のプレゼン
トが靴下だったら、がっかりしますか。(読 L13) ニヤニヤする。(読 L20) 男は猫を抱き、
にこにこしながら主人に言いました。

気持ちの表現や状態の表現として、形容詞だけでなく、「オノマトペする／している」の
有用性も考えなければいけない。『みんなの日本語初級』にあるように、いくつかの基本的
な動作や感情に関わる表現をまとめて提示することは大切である。状態を表す「オノマトペ
している」も形容詞を学習した後に関連項目として導入するといい。「さらさら／きらきら
／つやつや／ふわふわしている」など視覚や触感を表すものなら、具体的に物を持参しその
見た目や触り心地を体験しながら学ぶとわかりやすいだろう。味覚や食感(あっさり／ぱり
ぱり／もちもちしている等)も食べるという体験ができればわかりやすくなる。この他、ど
ちらの教科書にも掲載されていた「びっくりする」「がっかりする」は重要な動詞である。

5.5.2.5. 「する」文型のまとめ

以上の調査を表 1 としてまとめた。表中の数字は、出現した例文の数(異なり数)であ
る。○は例が存在したこと(その要素に共起制限がないため数は提示していない)、×は例
が無かったことを表す。

表 1. 初級日本語教科書の「する」文型一覧

| 文型 | 意味 | 『みんな』 | 『げんき』 |
|------|-----------|----------|----------|
| Nをする | (動作) | 21 | 36 |
| | (遊戯・スポーツ) | 11 | 11 |
| | (催し物) | 7 | 4 |
| | (付帯) | 1 (ネクタイ) | 1 (ネクタイ) |
| | (様子) | × | 1 (～顔) |
| | (職業・役割) | × | 1 (家庭教師) |
| | (その他) | 4 | 4 |
| Nがする | (感覚) | 5 | × |
| | (症状) | 3 | 1 (めまい) |
| | (雰囲気) | × | × |
| Nとする | (決定) (同定) | × | × |
| Nにする | (選択・決定) | 16 | 1 (何) |

| | | | |
|----------|----------------|----|---------|
| | (変化) | 3 | 1 (髪型) |
| Nする | (値段) | × | 1 (三百両) |
| | (時間) | × | × |
| Adj. する | (変化) | ○ | ○ |
| VたりVたりする | (動作の例示) | ○ | ○ |
| Vとする | (引用) (仮定) | × | × |
| Vることにする | (決定) | × | ○ |
| Vたことにする | (仮想同定) | × | × |
| Vようにする | (継続的努力) | ○ | × |
| Vようとする | (行為の直前) | × | × |
| オノマトペする | (感情) (状態) (動作) | 10 | 5 |

5.5.3. 初級日本語教科書に見られる「やる」文

「する」の類義語である「やる」は、話し言葉で使われ「する」のカジュアルな言い方として使用されることが多い²¹⁸。実際に日本語母語話者が「する」ではなく「やる」を使っていることも多く、初級で教えないわけにはいかない動詞である。しかし、類義語だが同義語ではないため、全ての「する」が「やる」に置き換えられるわけではなく、置き換えてはいけなないもの（例、*散歩をやる）も多い。そのため、教科書で教える際には注意しなければいけない点が多いと考えられるが、実際の教科書ではどう扱っているだろうか。

以下、「やる」については掲載されている全ての文を抽出し、意味・用法の違いに従ってまとめる。「する」と異なり、多様な文型パターンは見られないため「N をやる」文しかない。

5.5.3.1. 「N をやる」文

「N をやる」の意味・用法は、以下 10 に下位分類することができる（拙稿 2002、第 5 章第 4 節）。

①動作（サ変動詞語幹・動詞連用形からの転成名詞、動作性名詞）

『みんな』（L26）盆踊りの練習をやっています。（L29）漢字の宿題はもうやっしまいました。夏休みの宿題は全部やりました。この仕事をやっしまいますから、お先にどうぞ。

『げんき』（L20）宿題は難しかったけど、～ないで、やりました。（L22）私にこの仕事をやらせてください。

②遊戯・スポーツ

『げんき』（L5）サーフィンが好きです。あした一緒にやりましょうか。

²¹⁸ 実際は「する」にはない「やる」独自の意味・用法があるため、「する」の俗な言い方であるとは言えない（大塚 2002, 2006、第 5 章第 4 節）

③催し物

『みんな』(L47) 何かやっているようですね。

④趣味・習い事

『みんな』(L48) 音楽をやります。

『げんき』(読 L11) 私といっしょにバンドをやりませんか。(L13) 何か楽器をやりますか。

教科書に例文が無かった用法は以下のとおりである(⑤以外は『やる』独自の用法)。

⑤役割・職業:「司会をやる」「医者をやる」

⑥放送・演劇:「ニュースをやる」「映画をやる」

⑦習慣的嗜好:「煙草をやる」「酒をやる」「麻薬をやる」

⑧加害行為:「奴をやる」「腹をやる」「豚をやる」

⑨病気の経験:「はしかをやる」「大病をやる」

⑩その他(単独で使われる)「やるね!」「やってられない!」「やるか!」

これ以外で教科書に見られたものは「やる」が単独で用いられる例で、以下のとおりである。

『みんな』(L26) 何をやっていますか。(L30) わたしがやりますから、そのままにしておいてください。(L34) 先生がやったとおりにやりました。(L40) できるかどうか、やってみます。日本で何をやってみたいですか。やってみようか。(L48) お母さん、僕にやらせて。

『げんき』(私は) トムさんがやったと思います(L9)。

意味や用法の説明については、「やります do(『みんな』L26 語彙表)」「やる to do; to perform (～を)(『げんき』L5 語彙表)」とあるだけで、説明は一切ない。これでは「する」と「やる」が同義語だとの誤解を与えてしまう。この他、『初級日本語げんき』には「referring to musical instruments in general, やる and できる (for potential) are usually used.

(表現ノート)」があるが、詳しい説明は他にはない。『みんなの日本語初級』の方が用例の数と種類が多いが、そこから読み取れるのは、「やる」が単独で使われること、「N をやる」のNには「練習、仕事、音楽」があること、「催し物をやる」があること、「やってしまう」「やってみる」の表現があることである。『げんき』は用例も少なく、この他「やった!」などの決まり文句が紹介されている。いずれにせよ、どちらも練習や問題の中に出てくる表現であり、積極的に教えるのではなく、少しだけ例を入れるという形で示されている。「やる」には卑俗な表現も見られるため、すべてを初級で教える必要はないが、「する」との違いについては説明がある方がわかりやすいだろう。

以上の調査を表2としてまとめた。

表 2. 初級日本語教科書の「やる」文型一覧

| 文型 | 意味 | 『みんな』 | 『げんき』 |
|-------|-----------|-----------|----------|
| N をやる | (動作) | 3 | 2 |
| | (遊戯・スポーツ) | 1 | × |
| | (催し物) | 1 | × |
| | (趣味・習い事) | 1 | 2 |
| | (役割・職業) | × | × |
| | (放送・演劇) | × | × |
| | (習慣的嗜好) | × | × |
| | (加害行為) | × | × |
| | (病気の経験) | × | × |
| | その他 (単独) | ○ (やってみる) | ○ (やった!) |

5.5.4. まとめ

以上、『みんなの日本語初級』と『初級日本語げんき』において、最頻出語であり教育重要語でもある「する」と、類義語「やる」がどのように教えられているかをまとめ、問題点や提案をいくつか述べてきた。また、一方で教えられていないものが何か、それはどのレベルが望ましいかについても考察した。いずれも基本的でよく使われると思われる文型については導入されているが、その説明は十分とはいえない。今回の結果は、「する」をどう教えていくかの基礎資料として位置づけ、これに加えて、表にある文型や表現のうち「どれが最も出現率が高いのか」を明らかにしていく必要がある。それを今後の課題としたい。

第6章「ある」の構文的な多機能性

本章では動詞「ある」について考察する。「ある」は存在を表わす動詞であるが、それが第3章でまとめたような多様な名詞と結びつくことによって、その存在の意味が多様化していると考えられる。本章第1節では「～がある」文が表わすその多様な機能について概観する。第2節では、同じ存在を表わす「いる」と比較し意味・用法の広がりをつまみながら、「でいる・である」「ている・てある」「形容動詞にいる・ある」「形容詞くいる・ある」「とある」の構文全てを一括して考察する。第3節では、数量詞が「ある」と共に出現する文に焦点をあて、存在物と数量の関係について考察する。第4節では、「伝統ある行事」のように名詞に直接「ある」が接続し、形容詞のように振る舞う現象について考察し、「ある」の更なる広がりについて述べる。以上、本章では、動詞「ある」の機能的な振る舞いについて論じるものである。

第1節 「～がある」文の多機能性

動詞「ある」は、その文法的な特徴から形式動詞や助動詞あるいは補助動詞として位置付けられ、また、その意味的な特徴から同じ「存在」を表す「いる」との比較研究や、「ある」自体の持つ多様な用法を記述するといった研究がなされてきた。しかし、存在という実質的意味が希薄となった機能動詞としての「ある」に注目し、その構文的機能・対人的機能について考察した研究はこれまであまり見られない。

本節では、形式上の主語が事実上は述語の一部となっている「～がある」文に注目し、動詞「ある」の機能、その文法的特徴などについて明らかにしたい²¹⁹。これは、文末要素への注目に限定されがちな日本語モダリティを批判し、文の総合的な機能としてモダリティをつまみ直すことを主張するものである。

そして、「～がある」文の構造を第3章とは異なる観点で分類し、他の動詞・形容詞との異同についても考察を加え、「～がある」文、ひいては動詞「ある」が日本語の中でどのような位置にあるかについて考えていく²²⁰。そして、このような存在表現が多様な機能を持ち得ることの意味論的な根拠を示したい。

6.1.1. 動詞「ある」に関する先行研究

第1章で述べた以外にも「ある」の先行研究は見られる。ここで再度、「ある」の研究の流れを再確認したい。大きく分けると、研究の流れには以下のような5つのあり方が見られるようである。

1. 形式動詞「ある」の研究
2. 存在動詞「ある」の研究（『いる』との比較）
3. 状態動詞「ある」の研究（アスペクト研究）
4. 機能動詞「ある」の研究

²¹⁹ 一文の文機能を担うのは主文の述語であるため考察対象は主文が中心である。

²²⁰ 補助動詞「てある」「である」と動詞「とある」などは第1節では考察外とし、第2節で扱う。

5. 軽動詞「ある」の研究

1 は、実質的意味の有無から動詞範疇を大きく二分した概念である実質動詞と形式動詞という範疇における「ある」の位置付けが行われた研究である。形式用言の主体として山田孝雄(1936)は存在詞「あり」を挙げ、「ここに梅の樹がある」の「ある」は「存在」を表し、「これは梅の樹である」の「ある」は「陳述」を表すと述べた。さらに「てある」も形式動詞に入るものとした松下大三郎(1924)、一方、「てある」だけを形式動詞とした時枝誠記(1950)などもある。形式動詞としての「ある」研究は、動詞ないし用言を文法範疇の中の一つとして位置付け、その中でさらに下位分類するという立場からの研究であったため、詳細な「ある」に関する個別的な研究というものではない。

2 は、特に同じ存在を表す「いる」との比較を中心に、その意味・用法の違いから共起する名詞の種類までを記述した研究である。その中でも高橋太郎・屋久茂子(1984)は豊富な用例に基づく記述研究で、「～がある」の意味・用法という点では網羅的なものである。しかし、「ある」文がその他の動詞文とどう関係するか、また「～が」と「ある」との統語的な関係についての言及などはまだ十分とは言えない。他には、「ある」を存在動詞と所有動詞とに分けた研究(柴谷方良 1978、竹沢幸一 2003)も見られる。

3 は、アスペクト的観点から動詞を分類した中で、ル形のみでテイル形にならない動詞として「ある」を状態動詞と区分した研究(金田一春彦 1950)が代表的なものである。他には状態動詞とは何かという視点から「ある」について触れられているものがある。これも 1 と同様、「ある」に関する個別的な研究ではない。

4 は、実質的意味が希薄で概ね文法的な機能を果たしている動詞(機能動詞)という観点から、日本語動詞全体を捉えた研究(村木新次郎 1980、1991)である。全体を見ての位置付けという点で 1 と共通している。「ある」については、「連絡がある、夕立がある」などの例についてわずかながら行われている。

5 は、見かけは句でありながら機能的には語に近い振舞いを示すものを軽動詞(影山 1993)とし、「親族名詞+アル(影山 2004b)」と「動作主名詞(出来事発生名詞)+アル(影山 2004b)」が軽動詞構文であるとする。その他の「ある」の表現は軽動詞とは認めていない。

以上、大まかではあるが、動詞「ある」はこのように違った観点から様々に研究されてきたと言えよう。その中でも「ある」の果たす文法的機能あるいは対人的機能について注目した研究は非常に少ない。しかも、機能動詞「ある」の用法が上述の村木(同)による指摘以外にも見られ、かつ多岐にわたることがほとんど言及されておらず、したがって、それを述語とする「～がある」文の一文としての機能についても同様に全く研究対象となっていない。また、第 1 章で述べた通り、非常に限定的に動詞の機能性を捉える軽動詞研究では、機能的な振る舞いを見せるその他の「ある」文をそぎ落とす結果となっている。本節では、「ある」文全体を見直し、その機能性の段階を全て考察することを目指したい。

6.1.2. 「～がある」文の多機能性を記述するために

6.1.2.1. 「～がある」文の意味するもの

以下の例を見てみる。いずれも動詞「ある」は、ガ格名詞句の存在を表している。形式的な意味を見るならば、「～がある」文は先行研究で言われたように存在文である。(以下、該当部に下線を付す)

- (1) 机の上に本がある。
- (2) 今日父に客がある。
- (3) 中田は財産がある。
- (4) 腹の辺りに痛みがある。
- (5) この点に疑問がある。
- (6) 私には世界一周旅行をしたいという願望がある。
- (7) 私には君を助ける意志がある。
- (8) 説明と事実との間には大きな矛盾がある。
- (9) 彼は人気がある。
- (10) 犯人は女性である可能性がある。

しかし、これらの例文のガ格名詞句は、具体物から抽象的概念まで様々に性質が異なり、それによって「存在」ということの意味それ自体が多様化している。その結果、「～がある」文は様々な機能を示すこととなる。例えば、(1)は「本」の物理的存在を客観的に描き出しており、(2)は「来客」という動的な事象が時間軸上に存在していることを描写している。(3)は所有者の領域に存在する事物が所有物であることを表している。(4)～(7)は感覚、情意、願望、意志などの主観的な感情を表出しており、(8)(9)は「矛盾」「人気」といったある事物に付随する概念の存在を叙述している。(10)はある事柄の「可能性」という抽象概念存在を述べることで、その事柄を述べ立てる態度を表現している。このように「～がある」文は聴者を前提として考えた場合、その表す意味は、単にあるものの存在を示すという語彙的な意味に留まらず、上記のような〈描写〉〈表出〉〈叙述〉といった対人機能的意味を持つのである。

そして、この対人機能的意味は、これまでの日本語研究ではモーダルな意味とされている。したがって、「～がある」文の多機能性もまた、日本語研究におけるモダリティ論との関連性が示唆されることになる。

6.1.2.2. 日本語モダリティ論に見る「～がある」文

文は、様々な観念や概念などをまとめ一つの事態内容として成立したものである。その文を統合し完結させる働きとは何であるのか、またはその働きはどこに帰することができるのかという問題について、日本語研究においては山田孝雄(1936 など)以降いわゆる「陳述論争」が展開され、その後、様々な変遷を経て現在のモダリティ論へと至る。

陳述論の中でこれまでの「陳述」概念を整理し精密化したと言われるのが芳賀綏(1954)である。陳述の中に、客体的表現内容についての話し手の態度「断定・推量・疑い・決意・感動・詠嘆」などの言い定めである「第一種の陳述＝述定」と、事柄の内容や話し手の態度を

聞き手に向かってもちかけ伝達する言語表示「告知・誘い・命令・呼びかけ・応答」などの「第二の陳述＝伝達」とを区別した。

これは現在のモダリティ論に引き継がれ、仁田義雄(1985、1989)ではモダリティの中に「判断のモダリティ²²¹」と「伝達のモダリティ」の二つがあると説明し、ここに至って「対人機能的意味」である命令や表出などが「伝達のモダリティ」の中に組み入れられることとなった。したがって、「～がある」文が持つ対人機能的意味も日本語モダリティ論として考察すべきということになる。

例えば、仁田(1979、1985)のように、主語の人称制限がある「～タイ」や「～ウ・ヨウ」をモダリティとして扱うならば、同じく人称制限を引き起こす「自信がある」や「覚悟がある」もまたモダリティに入るものとなる。しかし、果たしてそれは妥当なのだろうか。これは先行研究にも指摘されるように、モダリティとは本来何かという問題と密接に関係するものであり、「日本語独特の“モダリティ論²²²”」(尾上圭介 1996)と言われる事態を含む問題でもある。

ここでは、特に「～がある」文を日本語モダリティ論の中で扱うことの問題点について述べることにする。

まず、「～がある」文からモダリティ形式を抽出することは可能か。先に述べたように仁田(同)では、「～タイ」や「～ウ・ヨウ」をモダリティ形式として扱っている。しかし、山岡政紀(2000b)でも指摘されている通り、主語の人称制限などの点で「～タイ」と全く同じ振る舞いをする感情形容詞からは、モダリティ形式を抽出することができないという矛盾が生じる。また「～ウ・ヨウ」もモダリティ形式とするが、それが意味すると仁田(同)が考えている「意向(一人称主語)」「誘いかけ(二人称主語)」「推量(三人称主語)」は文全体から出てくる意味であって、この形式にのみ対応するものとは言えない。つまり、これらのような対人機能的意味は文末形式だけに帰着させることは難しく、文を構成する様々な要素から複合的に出て来る意味として取り上げる必要がある。同様に「～がある」文の対人機能的意味も文全体に対して発生するのであって、動詞「ある」やその語尾の部分などをモダリティ形式とみなすことはできない。なぜなら、例(1)～(10)を見てもわかるように、これらの対人機能的意味は動詞「ある」に上接するガ格名詞句の意味によって生じていると考えられるからである。しかし、言うまでもなく、実質的意味を担う名詞句をモダリティ形式とみなすことはできない²²³。

以上のような根本的な問題点が見られるが、仮に動詞「ある」をモダリティ論式の中に持

²²¹ 仁田(1989)で「ムード」という用語が「モダリティ」に変更されているため、ここでは変更後に合わせ「モダリティ」としておく。

²²² 尾上(1996)では「日本語以外の言語を対象としたモダリティ論において、話し手の発話の姿勢、対聞き手の気持ちや、疑問、命令などの文の種類というようなものが『モダリティ』に数えられたことは、ない」と日本語研究におけるモダリティ論の特異性を指摘する。本研究は日本語モダリティ論で扱いきれない「～がある」文を機能動詞論、文機能論の立場によって、考察しようとするものである。

²²³ 仁田(1979)では〈感情感覚表現〉として「シタイ」や感情・感覚を表すイ形容詞・ナ形容詞を文末尾に持った文を挙げてはいるが、これはモーダルな意味を表す表現であってモダリティではないと考えられる。また実質語について「～感ガアル」が、実質形式とモダリティ形式の中間に位置するとある(仁田1991)だけで、具体的な動詞についての詳細な記述はほとんど見られない。

ち込んだ場合、どのような問題あるいは限界が生じるだろうか。森山卓郎(2000)によれば、述語形態レベルでのモダリティの違いには有標叙法と無標叙法とがあり、「～がある」言い切り文には特に言及はないが、無標叙法の「断定」にあたると考えられる。しかし、「意志がある」などは意志形ではないのに、有標叙法の事態制御類に属するようなモーダルな意味を持っていることになる。そして、日本語モダリティ論では文のモーダルな意味を決定するのは文末形式であると考えられているため、無標叙法に類する「～がある」文の“モーダルな意味”を記述することは困難になる。同様に、仁田(2000)では「基本形(いわゆる断定形)で表されるものには、確認と確信とがあった」とし、「確認」の下位的タイプとして「感覚器官による直接的な補足」と「既得情報」を挙げているが、この「～がある」文に見られる多機能性を説明するには十分とは言えない。

このように、「～がある」文の多機能性は、既存の日本語モダリティ論の考察領域と重なっているが、既存のモダリティ論では説明できないことになるのである。以上の点から、「～がある」文の多機能性を日本語モダリティ論の立場から記述するのは妥当ではないと考える。

6.1.2.3. 「ある」の多機能動詞論

そこで、述語「～がある」を構成する動詞「ある」の文法的機能について見直し、「～がある」文を考察するのに妥当な方法とは何か考えてみたい。

ガ格名詞句と動詞の関係を見ると、「本がある」の「本」は具体的な物を示しているが、「客がある」の「客」は人物としてではなく「来客」という動的な事象を示している。この違いは「ある」との関係性によるものである。これによって後者の「ある」は前者の「ある」よりも「存在」という実質的意味が希薄になり、述語を形成するという文法的機能のみを有すると考えることができる。このような「ある」は機能動詞、あるいは軽動詞とされてきた。

さらに、「痛みがある」という語結合は、名詞句「痛み」が持つ実質的意味と、述語形成のための動詞「ある」が持つ文法的機能とを組み合わせることで、「痛い」という実質語の形容詞一語に相当する述語となる。動詞一語相当という考え方は機能動詞にはあるが、ここで示したのは動詞ではなく「形容詞一語相当」である。したがって、これは機能動詞にも軽動詞にも該当しない。この点に既存の機能動詞や軽動詞の枠組みでは測り切れない「ある」の機能性の幅が見られるのである。このように、「～がある」は動詞だけでなく形容詞が示す意味にまで広がっていることこそが、多機能な動詞の典型例と言っていいだろう。「ある」が多様な機能を持つ動詞＝多機能動詞として、どのような広がりを持つのかを見ることにより、その多機能性を記述できるのではないかと考えるものである。

6.1.2.4. 「～がある」文の機能

さて、「～がある」文が様々な対人機能的意味を引き出し得るその条件とは何かという点を明らかにする必要がある。この点について、文としての機能と構造との関係について研究した文機能論(山岡政紀 2000b)を援用して考察していくのが有効であると考えられる。

文機能論では二段階の言語機能(文機能と発話機能)を考えている。文機能とは、「話者が

発話に際して文に担わせている、聴者に対する対人的機能のこと(山岡同)」であり、「文を構成する構造的要素群から複合的に発生する意味範疇(同)」である。すなわち、従来日本語モダリティ論の中でモダリティの一部として論議されてきた、命令や意志表出などの文の対人的機能を文末形式に限定することなく、文中の諸要素を複合的条件群として導き出されるものとする理論である。これは先に指摘した日本語モダリティ論の問題点を克服するものであり、モダリティ形式として認められない機能動詞「ある」の記述に適していると言える。

また、「～がある」文の多機能性を記述する上でも、文の対人的機能を詳細に範疇化し、類別化している文機能論が有効であると考えられる。山岡(同)には既に形容詞文、感情動詞文、叙述動詞文について、その文機能の詳細な考察結果が出されている。それらと「～がある」文とを比較することによって、日本語における「～がある」文の機能的な位置付けが明らかにできると考えられるのである。

以上が、文機能論を機能動詞論に併せて用いることの意義である。どちらも機能について考察するものであるが、機能動詞論における機能とは構文論的に果たす機能のことであり、文機能論における機能とは対人的(発話行為論的)に果たす機能のことである。このような違いはあるが、動詞「ある」が機能的意味(述語としての文法的な働き)のみを担うとき、それを述語とする「～がある」文の対人的機能が多機能化するという相関関係が認められる。本節は、この立場でまずは「～がある」文の文法的機能について考察するものである。なお、対人的機能については、第7章第2節で改めて論じる。

6.1.3. 「～がある」文に見られる多機能動詞としての文法的特徴

動詞「ある」を通常の存在動詞としてではなく、多機能動詞と見なし得る文法特徴について多面的に考察する。

6.1.3.1. 「～がある」の結合度

「机の上に本がある」は「本が」と「ある」とが、言わば独立して文の要素として出現している。それに対して、「腹の辺りに痛みがある」は、「痛みが」と「ある」とが前者と同程度に独立した要素とは考えられない。そこで、語順の交替によって、ガ格名詞句と「ある」との結合の強さを見てみる。交替テストを行う要素は、動詞「ある」の存在場所たるニ格名詞句(あるいはその主題化したもの)とした²²⁴。

- | | |
|------------------------------------|----------------------------------|
| (1)机の上に <u>本がある</u> 。 | → <u>本が</u> 机の上にある。 |
| (2)今日父に <u>客がある</u> 。 | →??今日 <u>客が</u> 父にある。 |
| (3)中田は <u>財産がある</u> 。 | →?? <u>財産が</u> 中田は <u>ある</u> 。 |
| (4)腹の辺りに <u>痛みがある</u> 。 | →?? <u>痛みが</u> 腹の辺りに <u>ある</u> 。 |
| (5)この点に <u>疑問がある</u> 。 | →?? <u>疑問が</u> この点に <u>ある</u> 。 |
| (6)私には世界一周旅行をしたいという <u>願望がある</u> 。 | |

²²⁴ これは「～がある」文におけるガ格名詞句と「ある」との結合度を見るテストであり、各文相互の結合度の比較を目的としたものではない。したがって、一文において交替前と交替後に結合度に違いが見られるかが焦点となる。

→世界一周旅行をしたいという願望が私にはある。

(7)私には君を助ける意志がある。→君を助ける意志が私にはある。

(8)説明と事実との間には大きな矛盾がある。

→？大きな矛盾が説明と事実との間にはある。

(9)彼は人気がある。

→？？人気が彼はある。

同じ存在を表す「～がいる」文は、「子供が奥の部屋にいる」「奥の部屋に子供がいる」のように、語順を交替させても不自然さはない。しかし、「～がある」文は上記右例のように不自然さが見られる。各例文同士の結合度の強弱は一樣ではなさそうだが、「～がある」で一語的な働きを示す述語語彙が多い。つまり、「～がある」で連語をなし、実質的な意味はガ格名詞句が担い、動詞は述語としての文法的な機能を果たすことが主となっている動詞である。高橋・屋久(1984)でも「湿度は温度と関係がある」について、「もちぬしをあらわす成分は、『～がある』という述語に対する主語であるかもしれない」と述べ、「～が」を述語の一部だと考えている。また、村木(1991)では「客がある、迷子がある、連絡がある、夕立がある」などを機能動詞結合の性質を持つものとして挙げている。

なお、例文(10)は「[犯人は女性である] 可能性がある」という補文構造を持つために、語順の交替テストになじまない。なぜなら、補文内の要素を抜き出してガ格と動詞の間に挿入することは構造上意味をなさない上、この文には他の要素(二格名詞など)を新たに立てることもできないからである。この構文構造については後に詳述する。

6.1.3.2. 「～がある」と形容詞との関係

「～がある」には意味的・構文的な観点から、形容詞と共通する特徴を持つものが見られる。先行研究にもいくつかの指摘が見られる²²⁵が、改めて多機能性という点から考えてみたい。

6.1.3.2.1. 形容詞との意味的な近親性—置き換え、翻訳—

形容詞との意味的な近親性が認められる最も顕著な例は、格の交替はあるものの、形容詞一語と置き換えられる例である²²⁶。

(4)腹の辺りに痛みがある。→腹の辺りが痛い。

他には「体全体にだるさがある→体全体がだるい」「目にかゆみがある→目がかゆい」などが考えられる。

²²⁵ 山田(1936)に「あり」は「意義の上よりいへば、状態をいふといひてもよきさまに考へられ、形の上よりいへば、イ韻の音にて終止する点は所謂形容詞と共通する点あり」とあり、形容詞との共通点が指摘されている。柴谷(1978)には「一般的に言って、形容詞・形容動詞その他の状態動詞(例えば『できる』)等は、あるものの状態を述べるもの」と説明し、状態動詞である「ある」が形容詞・形容動詞と一緒に括れるような性質を持ち合わせるものとしている。

²²⁶ 大鹿薫久(1984)は「状態・性質であるとした『ある』コトは、言うまでもなく形容詞文によって表されるコトに連続する」と言う。翻訳可能な点(例、開閉に難がある⇔開閉が難しい)を主たる理由として、(情態性)形容詞への連続性を判断している。しかし、情意形容詞文「うれしい」と「興味がある」「知識がある」「理解がある」文との比較によって形容詞との連続性を述べることは、構文的に対象と場所という関係は似ていても、その意味において異なるものを一緒に扱うことになり、問題も残る。

また、外国語の形容詞に対応する日本語の形容詞がない場合、「～がある」が訳語として使われることがある。例えば、英語の「popular」に対応する日本語の形容詞はない。その場合、(11)のように「人気がある」をもって充てている(以下、辞書(Kenkyusha)の翻訳例)。この点からも意味的な近親性が見て取れる。

(11) He's popular with the other children. 彼は子供仲間に人気がある。

(12) I'm very (much) interested in music. 音楽にとっても興味があります。

他には「comprehensive 理解力のある」「valuable 価値がある」「a thoughtful person 思いやりのある人」「feverish 熱のある」「sensible 分別のある、思慮のある」などが見られた。このように、双方向に翻訳可能な点(『～がある』→形容詞、英語の形容詞→『～がある』)によって、形容詞一語²²⁷と同じ意味特徴が備わっていることがわかる。つまり、「～がある」という述語語彙は形容詞との類似性が大きく、動詞「ある」はガ格名詞句に形容詞述語の特徴を与える動詞であると言える。

6.1.3.2.2. 形容詞との構文的な近親性—副詞による修飾—

西尾寅弥(1972)は、『すこし』『かなり』『非常に』などの、いわゆる程度副詞は、主として形容詞を修飾することを職能とする²²⁷と言う。つまり、「非常に」などの程度副詞による修飾が可能であるとすれば、それは形容詞的な特徴と言える。一方、量副詞は動詞を修飾するものと限定されている。したがって、「たくさん」などの量副詞による修飾が可能であるとすれば、それは動詞的な特徴と言える。

「～がある」文において、程度副詞あるいは量副詞による修飾が可能か否かについて検証し、構文上から形容詞との類似性を考察する。例文に「非常に」と「たくさん」を挿入すると次のようになる²²⁸。

- (1) '机の上に〔*非常に／たくさん〕本がある。
- (2) '今日父に〔*非常に／たくさん〕客がある。
- (3) '中田は〔?非常に／たくさん〕財産がある。
- (4) '腹の辺りに〔非常に／*たくさん〕痛みがある。
- (5) 'この点に〔非常に／*たくさん〕疑問がある。
- (6) '私には〔*非常に／*たくさん〕世界一周旅行をしたいという願望がある。
- (7) '私には〔*非常に／*たくさん〕君を助ける意志がある。
- (8) '説明と事実との間には〔非常に／たくさん〕矛盾がある。
- (9) '彼は〔非常に／*たくさん〕人気がある。
- (10) '〔?非常に／*たくさん〕犯人は女性である可能性がある。

²²⁷ 三井正孝(2001)では、ニトツテ格の考察の中で、ヨリ格の共起から機能動詞のアルが「形容詞相当」であるとの記述がある。

²²⁸ 西尾(1972)に「数や量の大小をも、『程度』に含めて考えることにした」とある。しかし「机の上に雑誌が(かなり)ある」の例では、「雑誌を(かなり)読んだ」と同様、量副詞による動詞の修飾と言える。この場合の「かなり」は程度副詞と量副詞とを兼務するものと考えべきであり、その兼務のない程度副詞として「非常に」、量副詞として「たくさん」を、ここでの検証に用いることとする。同様の主張は山岡(2000b)にもある。

程度副詞による修飾が可能で量副詞による修飾が不可であるという、形容詞的特徴を持つものが(4)′(5)′(9)′の3例において見られた。また、(8)′は程度副詞による修飾が可能である点、(6)′(7)′(10)′は量副詞による修飾が不可である点で、それぞれ形容詞的特徴をいくらか備えていると言うことができる。

6.1.3.2.3. 形容詞との構文的な近親性—比較表現—

西尾(1972)には「程度性ということは、『比較』ということと深い関係がある」とある。簡単に比較表現についても確認しておく。(→以下が比較表現)

- (1) →*本棚より机の上に本がある。
- (2) →*今日私より父に客がある。
- (3) →?鈴木より中田は財産がある。
- (4) →背中の方より腹の辺りに痛みがある。
- (5) →あの点よりこの点に疑問がある。
- (6) →?彼より私の方が世界一周をしたいという願望がある。
- (7) →彼より私の方が君を助ける意志がある。
- (8) →説明と事実との間には当初の予想より矛盾がある。
- (9) →彼は山田君より人気がある。
- (10) →?犯人は男性である可能性より、女性である可能性がある²²⁹。

このように、「～がある」は比較表現を作るものがあり、それは形容詞との構文的な類似性を示すものである。本来、存在の「ある」には程度性がなく、比較する場合には次のように量副詞を補わなければならない。量的な程度性を示しており、形容詞に特徴的な純粋な程度性とは異なる。

- (1)→→本棚より机の上にたくさん本がある。

6.1.3.2.4. 形容詞との構文的な近親性—人称制限—

「～がある」文の中には、感情形容詞の構文的特徴である人称制限が見られることを指摘しておきたい。例として(4)について見てみる。人称代名詞を加える。

- (4) ”a. 私は腹の辺りに痛みがある。
- b. *君は腹の辺りに痛みがある。→君は腹の辺りに痛みがあるはずだ。
- c. ?彼は腹の辺りに痛みがある。→彼は腹の辺りに痛みがあるらしい。

以上のように、いずれも意味上の主語(経験者格)が第一人称以外の場合には、何らかのモダリティ形式の付加が要求されることが多い。これは、感情形容詞文に見られる人称制限と同質である。

- (13) a. (私は)腹の辺りが痛い。
- b. *君は腹の辺りが痛い。→君は腹の辺りが痛いはずだ。

²²⁹ 元の文は補文全体を「可能性」が受けるために比較の名詞句「～より」もまた補文の中に入ってしまう、「可能性がある」に比較表現が可能かテストすることがこのままでは難しい。そこで連体修飾節(被修飾名詞を含む)全体を比較した。

c. ??彼は腹の辺りが痛い。→彼は腹の辺りが痛いらしい。

また、感情形容詞文の第一人称は形式化されないことが多いが、(4)～(7)のような「～がある」文も同様である。そして、「～がある」文はガ格名詞句によっては人称制限を持ち得るのであり、これは形容詞との近似性を示している。

6.1.3.3. 小まとめ

以上、「～が」と「ある」との結合度の強さ、さらに意味的特徴(置き換え、翻訳)、構文的特徴(副詞による修飾、比較表現、人称制限)から「～がある」が、それぞれ形容詞的特徴をいくらか備えた動詞結合であることがわかった。

また、形容詞一語だけでなく他の動詞一語との関連性を示す例も多い。例えば、「恨みがある」は形容詞「恨めしい」とともに、動詞「恨んでいる」との近親性が感じられる。「恨めしい」はもともと状態性を持った形容詞であり、「恨んでいる」は動詞「恨む」という動作性の用言がアスペクト形式の付加によって状態性が付与されたものと考えることができる。そして「恨みがある」は「恨み」という実質語である名詞に「がある」が付加され、一つの述語となり、状態性が付与されている。このように「～がある」は動詞、形容詞への広がりを見せている。

6.1.4. 「～がある」文の構造

「～がある」文の構文構造について分析し、新たに二つの構文を提示したい。

6.1.4.1. 5種の構文

「～がある」文の構文構造は五種に大別できると考えられる。(A)場所存在構文、(B)事象存在構文、(C)所有構文まではこれまでも十分に知られている。

(A) 場所ニ(ハ) 事物ガ アル

例文：(1)机の上に本がある。

(B) 時間(ニ)(ハ) 事象ガ アル²³⁰

例文：(2)今日父に客がある。

(C) 所有者ニ(ハ) 所有物ガ アル

例文：(3)中田に財産がある。

本研究が注目している多機能動詞の「～がある」を述語とする文については、程度副詞による修飾や比較表現などの観点から、6.1.3.2で形容詞との近親性が論証された。そのうち、「～がある」が述部のみを構成して主題と対置される構文では、主題名詞句が有する感情や属性が述語の「～がある」のガ格名詞となっている。これを主題名詞句の所有物の外延に含めるならば、(C)所有構文の延長上に位置づけることができる²³¹。しかし、既に形容詞との

²³⁰ この構文は場所(デ)や、対象(ニ)なども共起可能だが、共通して現れる要素(時間(ニ))だけを事象存在構文の記述に用いることにした。なぜなら、「事象とは何らかの時間的制約を含意する現象の総称(山岡2000b)」と考えるからである。

²³¹ 柴谷(1985)の「主語プロトタイプ論」では主語の特徴の一つとして動詞の尊敬語化を挙げている。所有構文「中田先生には財産がおありになる」において述語「ある」の尊敬語化を引き起こしているのは、

近親性が確認されていることから、これは所有構文に類する形式を取ってはいるが文機能としては〈感情表出〉文、〈属性叙述〉文である。これを(D)疑似所有構文と呼ぶことにする。

(D) 主題(ニ)ハ 感情／属性ガ アル

多機能動詞としての「～がある」文のもう一つの構文は、「～がある」が文全体を受ける構文である。これは(E)疑似存在構文と呼ぶことにする。

(E) [[主題ハ)連体修飾節] N] ガ アル

以上の中から、(D)疑似所有構文、(E)疑似存在構文の二つについてそれぞれ詳しく考察することにする。

6.1.4.2. 疑似所有構文

(D)の構文をさらに詳しく表示する。第一に、ガ格名詞を「感情」と「属性」に立て分けて2つの構文として考える。第二に、それらガ格名詞が連体修飾を受けた場合、その全体が述部として主題と対置されることを考慮する。この二点を考え合わせると、以下のようになる。

(D1) [主題(ニ)ハ] [(連体修飾句・節)感情ガ アル]

例文：(4)腹の辺りに痛みがある。

(14) (私は) 試験に合格する自信がある。

(D2) [主題(ニ)ハ] [(連体修飾句・節)属性ガ アル]

例文：(9)彼は人気がある。

(15)首相 (に) は解散の説明をする責任がある。

前述の(4)～(7)は(D1)に当たる。この構文に用いることのできるガ格名詞としては、他に「用意、覚悟、かゆみ、だるさ、しびれ、心配、不安、懸念、願い」など、主題名詞句に立つ人物の意志や感情を表す名詞が用いられる。前節で人称制限があったとしたのはこのタイプの構文である。

また、前述の(9)は(D2)に当たる。この他に「勇気、才能、威力、効果、上背、情緒、風情、見込み」など主題名詞句の属性を表す名詞が用いられる。

前述の(8)もこの(D2)に類するが、二つの概念を総称する名詞句が主題となり、その概念間の関係を表す名詞が「～がある」のガ格名詞句となる。関係を表すガ格名詞としては他に、「相違、関係、差、ずれ、隔たり」などがある。関係と属性とを立て分ける考えもあるが、ここでは広義の属性に含める。

6.1.4.3. 疑似存在構文

(E)疑似存在構文では、ガ格名詞 N に上接する連体修飾節が実質的に文としての情報価値を有する。

(E) [[主題ハ)連体修飾節] N] ガ アル

ニ格名詞句「中田先生」であることから、この文を与格主語構文ともいう。同様に「総理(に)は解散の理由を説明する責任がおりになる」となり、尊敬語化を引き起こすのがやはりニ格名詞句「総理」である点で、この構文は所有構文と共通の性質を持っていると言える。

例文：(10)犯人は女性である可能性がある。

つまり、「～がある」が文全体を受けており、これと対置される主題は存在しない。存在構文にも場所存在構文と違って、「UFO は実在する」のように場所項を必要としない単純存在構文があるが、この構造を援用したものとも考えることもできる。

この構文は、連体修飾により補文が埋め込まれた補文構造をなす。補文は(16)のように中立叙述の無題文である場合も少なくない。補文構造を(16)’で示す。

(16)犯人が捕まる可能性がある。

(16)’ [[犯人が捕まる] 可能性] がある。

したがって、ここで直接構成要素分析を行うと、主文の主語「犯人が捕まる可能性が」と述語「ある」とが(16)の直接構成要素となる。しかし、この主文の主述構造は形式上の主述構造に過ぎないことが、(16)と補文「犯人が捕まる」の意味の差から見て取れる。いずれも意味上の主述構造は共通している。その証拠に、「可能性がある」の部分は言い切りを避けて累加されるモダリティ形式「かもしれない」と意味的にほぼ等価である。(16)と(17)を比べてみるとそのことがよくわかる。

(17)犯人が捕まるかもしれない。

つまり、(16)は意味的には「(i)犯人が捕まる」と「(ii)可能性がある」とに分割される。なぜなら、(i)だけの文と(ii)が付加した文との意味上の差という観点から、(i)が命題、(ii)がモダリティに相当することになるからである。

有題文であっても同様で、その場合の主題は「N がある」とは対置されず、連体修飾節の一部となる。先に述べた通り、(10)は次のような構造を持つ。

(10)’’ [[犯人は女性である] 可能性] がある。

このような形式と意味とのずれにより、(10)の主文構造は形骸化し、「可能性が」のガ格もまた、主語としての文法的特徴を持たない機能的要素となる。この構文に用いることのできるガ格名詞としては、他に「危険、恐れ、憾み、場合」などがある。

6.1.5. 「ある」の特質

ここでは、以上の考察結果を踏まえ、「～がある」文の多機能性が何に起因するものか、考えてみたい。そして、「～がある」文の述語には、名詞、動詞、形容詞のそれぞれの特徴が混在している点を指摘したい。

6.1.5.1. 「ある」という前提

名詞 N が持っている多様な性質は「がある」によって述語化することにより、「N がある」文として、6.1.4.1. で見たような構文の多様性を生み、同時にそのことは文全体を多機能なものへと発展させている。例えば、名詞「痛み」「恨み」には語彙的意味に主観性が含まれている。それが「がある」によって「痛みがある」「恨みがある」を述語とする疑似所有構文が形成されることで、語彙的意味としてあった主観性が文全体の機能的意味の中に展開されたと考えることができる。したがって、動詞「ある」は、名詞の語彙的意味における性質を述語化するためのプリミティブな機能を持っていると考えられる。

また、多くの場合、名詞にはそれ自体に「存在」というものが前提として含まれている。例えば、「彼は人気がある」において、名詞「彼」には「彼がいること」が前提として含意されている。同様に、名詞「人気」にも前提として「人気があること」がもともと含意されているのである。したがって、実際に言語化された「人気がある」の「がある」は、上接する名詞「人気」に内在する前提「人気があること」を引き出して言語化したものと言うこともできる。そのために、動詞「ある」は文法的な役割を担うだけの多機能動詞となり、逆に言えば、名詞が一文となって機能するためには述語という形式「ある」が必要なのである。

つまり、その根底には「Nがある」の「N」、つまり名詞自体にもともと前提として「Nがあること」という概念が含まれており、それを引き出す形で「がある」は文法的に機能し得る形式となって、言語化しているということである。また同時に、その名詞自体が持つ性質が「がある」と文をなすことにより、一文全体の機能的意味へと展開されているのである。

そして、この「～がある」の多機能性は語彙と文法の問題に関わるものであり、山田(1936)が「ある」を用言の中に組み込むことなく、新たに「存在詞」と名付けたことに通じる。

「あるものがある」という存在を表す「～がある」文は、一方で形容詞文に関係し、一方でその他の動詞文に関係するのである。それを川端善明(1976)は「《～がある》という共通の意味の上に立ち、いわばその《～がある》の意味が情況的に変容されたもの」を形容詞文の述語と捉え、「～がある」という在り方が「在ることの発生・経過・終結・在ることの確実さの度合いなど」の作用的な意味の面に関して分析されることにより発生したものを動詞文と呼んだ。つまり、その中心には「～がある」文の存在が考えられるのである。また、岡智之(2003)は、認知言語学の視点から存在構文が日本語構文の中心にあることを説明している。

6.1.5.2. 英語「have」との比較

外国語において、以上のことはどう考えられるのか。例えば、英語の場合、「ある」と似た振る舞いをする動詞に「have」がある（以下、辞書例）。

(18) We had a pretty strong earthquake this morning.

今朝がたかなりの地震があった。

(19) The room has three windows. その部屋には3つ窓がある。

(20) She has a good head for mathematics. 彼女には数学の才能がある。

(21) She has three cousins. 彼女には3人のいとこがある。

(22) I have a pain in my stomach. 私は胃に痛みがある。

(23) I have a grudge against him. 私は彼に恨みがある。

これらは〈事象描写〉〈状態描写〉〈属性叙述〉〈感情表出〉の文機能を示す。また、「have a bath 入浴する=bathe」、「have a walk 散歩する=stroll」のように動詞一語と置き換えられることから、「have+N」もまた機能動詞結合である。

しかし、「ある」が何かの存在を示す動詞であるのに対し、「have」は他動詞として何かを何かを持つという形で存在する動詞である。池上嘉彦(1981)は、「have」は本来が所有の意味であり、「〈所有〉という概念が本来〈人間〉に（〈所有者〉となりうるという）特別の地

位を与えることによって成り立つ」のであり、英語が「〈動作主〉指向的」であると述べている。一方、日本語は「〈出来事全体〉把握的」であり、「〈状態の変化〉が〈拡大の中心〉になっている」と述べている。つまり、その前提にもやはり状態、存在という「～があること」が日本語の中心に存在すると考えられるのである。

しかし、「have」が持つ「所有」の意味の中にも、所有した結果の状態におけるあるものの「存在」は含まれているのであり、「存在」という概念自体が最も基本的な概念であること、つまり様々なものの存在あるいは様々な形での存在があるということが、これらの表現を多機能たらしめていると考えられるのである²³²。

6.1.5.3. 日本語におけるその他の多機能動詞

名詞を述語化する機能を持っている点を「～がある」を多機能動詞と考える論拠とすることができ、動詞「ある」が様々な名詞句と結合して機能的な振る舞いをするを見てきた。そこで、日本語動詞全体に視点を動かすと、「ある」と似た機能を持つ動詞がもう一つ存在する。それは、「機能動詞の典型例(村木 1991)」と言われる「する」である。両者は、その表す意味特性の点からは「状態」と「動作」という対称性を示している。つまり、「する」は動作を示す多機能動詞として、「ある」は状態を示す多機能動詞として、日本語において多機能な表現を作り出し対称的に存在していると考えられる。

「する」には漢語の熟語に「する」を添えて用いる、いわゆるスル動詞「Nする」とヲ格を用いる「Nをする」表現が見られる。ただし、よく言われることだが両者は文法的特徴が異なる。次例のように、前者は連体修飾が不可(例(25))であり、後者は可能(例(24))である。

(24) 精一杯の努力をするつもりです。

(25) *精一杯の努力するつもりです。

(25)で「の」を取り「精一杯」を副詞とすれば文法的になる。それは「努力」が既に名詞ではなく「する」とともに動詞化しているためである。

一方、「ある」にはスル動詞のように名詞に直接「ある」を添えて用いる「Nある」はなく、常にガ格を伴う「Nがある」だけである。なお、ガ格が脱落した「Nある」の実例は見られた((26)『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』、(27)『週刊テレビ番組』より)。

(26) 「いや、今の日本の海軍では、何人が長官になっても沈黙だね。責任ある者は沈黙するんだ」(『山本五十六』阿川弘之)

(27) 「(ムッと) 私、英語には自信あります。(後略)」(『ママのベッドへいらっしやい』伴一彦)

しかし、「Nある」の N が連体修飾を受けている例は見られず、連体修飾を受けるためには格助詞ガが必要であり、この点は「する」も同様である。

そして、「～がある」文の特徴の一つは、(15)「首相(に)は解散の理由を説明する責任

²³² 竹沢幸一(2003)でも、存在と所有を表す「ある」の構文の内部に統語的な二面性があることを踏まえ、所有構造が存在構造の上に重なった階層構造([_{所有所有者} [_{存在(場所)対象}]])をなすことを述べている。

がある」のように、連体修飾を受けることができることである。(15)の文の述部は属性形容詞的な特徴を備えていると言える。しかし、その一方で、「責任」の内容を連体修飾で受けるための名詞性も保持されており、「～がある」文は、この形容詞性と名詞性という両面性を合わせ持つものである。

6.1.5.4. ナ形容詞（形容動詞）との類似

「Nがある」は、ナ形容詞（形容動詞）との類似も問題となる。次の例は国語辞書の品詞分類で名詞と形容動詞を兼ねるとされている「元気」の例である。

(28) a. 太郎は元気である。

b. 太郎は元気がある。

aはナ形容詞文、bは「～がある」文で非常によく似ているが、構文的にはaは同定文であるのに対し、bは疑似所有構文で「太郎」を二格で受けられる点や、bのみ「元気」が連体修飾を受けられる点など、相違点が見られる。しかし、両者とも述部を程度副詞（たいへん、非常に、など）が修飾可能である点など共通性も見えて取れる。

6.1.6. まとめ

動詞「ある」は、日本語の中で非常に幅広くまた多岐にわたって用いられる単語である。これまで、その姿を記述する場合、意味や用法に注目することが多く、様々な「存在」のあり方が示されてきた。本節では、機能に注目して考察した。特に、「～がある」について、機能動詞という枠組みから考察することによって、形容詞との近親性、五つの構文構造、対人的機能の広がり、「する」との関係などが明らかになった。そして、このように多機能であるという現象の根底には、〔～があること〕が名詞の前提としてもともと含まれているということ、そして、日本語の発想の中心には「～がある」文が存在するのではないかという結論に至った。

第2節 動詞「ある」の持つ意味—存在・状態・属性の連続性—

現代日本語における存在を表す動詞である「いる」と「ある」は、これまで多くの研究がなされてきた。有情物の存在を表す「いる」、無情物の存在を表す「ある」という成果は日本語教育でも利用されている。その一方で「家の前にタクシーがいる」「私には妹が二人ある」などこの説明に合わない例も指摘されるが、それについても移動、所有、集合、捉え方などの概念により説明が試みられてきた。これらの結果はいずれも「～がいる／ある」というガ格名詞句を中心に考察したものである。これ以外の構文に関しては、例えば「～ている／てある」はアスペクトの問題として別に扱われ、「元気でいる／ある」「一緒にいる／ある」などは用法の一つとして補足的に取り上げられる程度であった。

本節では、この補足的に扱われてきた部分に焦点をあて、両者が単なる存在だけでなく、

属性や状態といった形容詞的な性質にまでその機能を広げている姿を捉え²³³、「いる」と「ある」の全体像に迫りたいと考えている。以下、例は基本的には作例を用い、作例が難しいあるいは、その表現があまり用いられない特殊なものと感じられた場合は BCCWJ を検索した。作例を中心にした理由は、例文が極めて普通の表現であり、作例しても違和感が生じることがないと判断するレベルだからである。

6.2.1. 意味・用法の分布

「～がいる」と「～がある」では、「ある」の方が多様な用法を持つことは、豊富な用例から詳細に用法の分類を行った高橋太郎・屋久茂子（1984）に示されていることからわかる。また、「ある」はそのような形式上様々な種類の名詞をガ格にとるだけでなく、何を表すかという機能の面でも多様であることを 6.1. で述べた。

ところが、一方「いる」というと、その用法は限定的であると言っていい。その分布を図に表すと以下のようなになる²³⁴。

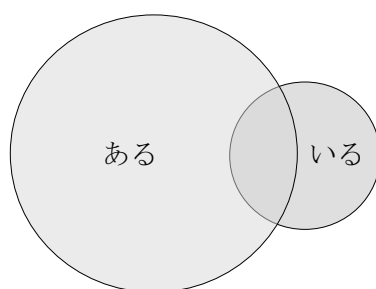


図 1. 「～がいる」と「～がある」の分布

6.2.2 ではこの図が示すそれぞれの部分、具体的には「ある」だけが持つ用法、「いる／ある」両方が持つ用法（共通する部分）、「いる」だけが持つ用法の三つに分ける。そして、意味・用法に関する代表的かつ包括的な先行研究である高橋・屋久（1984）を基にしながら、それらを検証し、改めて分類しなおすことにする。

6.2.2. 「～がある」だけが持つ意味・用法

ここでは、動詞「ある」だけが持つ意味・用法について、高橋・屋久（1984）を検証しつつまとめていく。以下、ゴシック体の文字がその意味・用法の分類項である。例文とともに挙げる。動詞には実線を、ガ格名詞には点線を付す。

²³³ 拙稿（2004）（第 6 章第 1 節）では「～がある」文が持つ多機能性について、その形容詞的な働きを持つことを意味と構文から確認した。本節では「～がある」以外にもその性質が現れることを述べ、存在動詞「いる」「ある」の全体像に迫りたいというのが目的でもある。

²³⁴ この図は概略であるが、先行研究などを踏まえてみてもこの図の面積の大小や重複のあり方こそ両者の分布であると捉えることができるだろう。

①無情物の存在

- (1) 卒業生の写真が学校にある。(高橋・屋久 1984、例 29)
- (2) 家に図書館の本がある。

②無情物の所有

- (3) 彼は東京に家がある。(同、例 188)
- (4) 祖父は葉山に別荘がある。

高橋・屋久(1984)ではこれを単に「所有」としているが、次の「ある／いる」重複用法にも「所有」の用法がある。本節は両者の違いを明らかにすることがその目的の一つでもある。こちらの所有の対象はモノであり、次の所有の対象はヒトである。そのため、こちらを〈無情物の所有〉とし、重複用法の方は〈人の所有〉とする。

③属性

- (5) 瀬川君は生徒間に人望がありますから。(高橋・屋久 1984、例 201)
- (6) 佃の声にも優しさがあつた。(同、例 190)
- (7) 対戦型ゲームは人気がある。
- (8) 言うべきことを言える人は勇気がある人だ。

先行研究ではやはり「所有」の用法の中に入れられているものだが、これは「いる」になり用法であること、またいずれも主体の属性を述べる文であるという特徴があるので、所有ではなく「属性」という分類項を立てる。

④出来事

- (9) 東海寺で法事があるんだ。(高橋・屋久 1984、例 18)
- (10) 伸子は父と、客があつて階下の広間にいた。(同、例 347)
- (11) 近所で火事があつた。
- (12) 学校で 10 月に文化祭がある。
- (13) 父から電話があつた。

場所を表わすデ格をとることが多く、催し物や行事、出来事を表わす。

⑤経験

- (14) 君は恋したことがありますか。(高橋・屋久 1984、例 25)
- (15) 一度イギリスに行ったことがある。
- (16) カエルを食べたことがあると言ったら驚かれた。
- (17) ゲームをすることがありますか。
- (18) 図書館に行くことがある人は学生証を忘れないでください。

「～たことがある」で過去の経験を、「～ることがある」でその時点での経験や機会を述べる用法である。

⑥関係

(19) 此姉と K の間は大分年齒の差があつたのです。(高橋・屋久 1984、例 87)

(20) 其の身と芳子とは盡きざる縁がある。(同、例 278)

(21) 温度と湿度は不快指数に関係がある。

(22) 大学と自宅の間は数十キロの距離があつた。

(23) 延焼してしまったのには様々な原因がある。

(19) は、高橋・屋久 (同) の「Ⅱ範囲・わくぐみの中の存在」の「関係的存在」とされるものである。(20) は、「Ⅳ所有されるもの・所属するものとしての存在」の「(3) 関係的なもの」である。これらは二つの名詞が表す概念間に、ある関係性を認めそれを述べた文であり、単なる無情物の存在や物の所有という範囲を超越している。また、この用法に入る例は「差」「縁」だけでなく、「関係、隔たり、時間、距離、位置、原因、由来、理由…」など、関係を表す多くの名詞群の存在が認められる。このことは、これが例外的な用法ではなく一つの用法として認めるべき存在であることを示している。そのため、これを一つの分類とする。

⑦感情

(24) よもや其雲のわだかまりが、お志保の上にあらうとは(高橋・屋久 1984、例 81)

(25) それにもかなり不純な気持があつた (同、例 271)

(26) あいつには積年の恨みがあるんだ。

(27) あれ、背中に痛みがある。

(24) (25) は、高橋・屋久 (同) では「Ⅱ範囲・わくぐみの中の存在」の「心理的な存在」、「Ⅳ所有されるもの・所属するものとしての存在」の「(2) 思考・感情・態度的なもの」にある例である。これをまとめて一つの分類項としたい。これらを一つの項目とする理由は、感情や感覚の例が多いこと、加えて、単なる所有を表す表現にとどまらず話し手の「今」の感情をそのまま表出する形容詞のような用法であることが挙げられる。

⑧モダリティー

(28) 踏み倒される恐れがある。(高橋・屋久 1984、例 103)

(29) 撤退する可能性がある。

(30) 合格する見込みがある。

(31) うまくいくような感じがある。

さらに、新たに加えたいのが (28) のようなモダリティー表現である。「場所無限定の存在 (同 p11)」とあるが、これは単なる存在ではなく命題に対する蓋然性や話者の判断を表す表現となっている点で特殊である。この他に「可能性がある」「見込みがある」「感じがある」「憾みがある」などが考えられ、いずれもモダリティーを表すものである。

以上、「ある」だけが持つ意味・用法は、「無情物の存在」「無情物の所有」「属性」「出来事」「経験」「関係」「感情」「モダリティー」の八つに分類することができた。

6.2.3. 「～がいる／ある」両方が持つ意味・用法

ここでは、「ある」と「いる」のどちらも可能な場合の意味・用法について見ていく。どちらも可能ということは、両者共通の部分であり類義語とされる領域を指している。

①人の所有（人間関係）

(32) 芳子に恋人があるのを知って（高橋・屋久 1984、例 336）

(33) 貴方にはお秀さんという人がいる（同、例 344）

(34) 私には娘が三人 {ある／いる} んですが。

親族名詞をガ格名詞とする文が代表的で、他は「恋人、親友…」などの人間関係を示すものがある。人を表わす固有名詞はガ格に立たない（*私には田中さんがある）。また、これを有情物の所有としない理由は、人以外はガ格に立たないためである。ただし、あまり用いられることはないようである²³⁵。

②部分集合の存在

(35) 居眠りをしている議員が半分以上あった。（寺村 1982、例 24）

これは「いる」も可能である。寺村（同）では「部分集合」という用語を用いて、ある集合の中のある種の（連体修飾節（句）のような）部分集合が存在することを表す文であると述べている。ただし、通常あまり用いられることが少ないように思われる²³⁶。

③有情物の存在（文章語的『ある』）

(36) 新左衛門という家に三人の若者があった（高橋・屋久、例 328）

(37) 山本の家には年寄の三太夫がいた。（同、例 415）

(38) そこに、駆け寄ってくる者があった。（佐々木譲(著)、『週刊新潮』新潮社 2003）

(39) 土居の上で、怒鳴る者があった。（同）

どれも同じ文構造を持ちガ格名詞も同じ「人」であるが、意味の違いをそれほど感じない²³⁷が、「ある」の方はいささか文章語的である。話し言葉で用いることはない。③は①の「人の所有」というような人間関係ではなく、単に人の存在を描く用法である。一方で①の方は、文章語的ではあるが話し言葉で用いることがないとまでは言い切れない。デス・マス体で丁寧な話す際に出現しても違和感はないだろう。

「～がいる／ある」両方が持つ意味・用法として以上三つに分類したが、これらは注意を要する。『ある』の言い方が若い人の規範意識から抜け始めている（鈴木 1998）」と言われ

²³⁵ BCCWJ を用いて「娘がある」「息子がある」「子供がある」「恋人がある」「友達がある」を検索したがいずれも 0 件であった。テ形とタ形も同様であった。

²³⁶ BCCWJ で「人がある、あって、あった」「議員がある、あって、あった」を検索したが 0 件であった。文字列検索のため、ガ格の後ろに他の語が挟まる用例が抽出されないが、それでも 0 という数字はやはり用いることがあまりないか、ほとんどないと考えていいと思われる。

²³⁷ 「ある」文の方が文章語的あるいは改まった感じがするだけで、どちらかに何か意味上の違いを見出すことはできない世代に筆者はいる。自ら使用するかというレベルでは「ある」は使わない。許容できるかというレベルでは文章中であれば自然だが、話し言葉としては少し特殊な感じがあり、改まった表現を「敢えて」使ったとの印象を受ける。

るように、「いる」の方が普段使う一般的な用法であるという感覚を筆者自身も持っており、上記の「ある」を使っているという認識はない。もしもこのような意識が定着していくならば、有情物を主語に持つ「ある」用法は消滅する可能性もある。その場合、有情性（その認識も含め）が「いる」の特徴、無情性が「ある」の特徴となってそれぞれが独立する、あるいは独立していると言っていい段階に来ているのかもしれない²³⁸。

(40) MHは学校や病院と、それぞれすでに所有者があり、手離すことを拒否している。

(海部美知(著)、iNTERNET magazine、インプレス、2002)

ただし、(40)は「ある」の方が特殊で「いる」を使った方が普通だとも言えない。このような例が他にも多くあるのか、また、上記三つの使用状況の調査は今後の課題としたい。

6.2.4. 「～がいる」だけが持つ用法

①有情物の存在

(41) その家の女中がそこにいた。(高橋・屋久 1984、例 4)

(42) 図書館に太郎がいる。

(43) 公園に犬がいる。

②無情物の存在—有情扱い

(44) 沖あいにはいつも警備艇がいて我々をみはっていた。(金水敏 1984、p284)

(45) 駅前には数台のタクシーがいた。

(46) 急いで。ほら、バスがいるから。

先行研究では移動するもの「乗り物」や自然現象の「台風」などがその例としてよく挙げられる。金水(1984)では「自己制御性」の認められる物でなければ「いる」は使えないとしている。

このような無情物を主語にとる文は、「いる」が可能であれば当然本来の用法である「ある」も可能だ、と考えてしまう。しかし、実際はそうではない。「*沖あいにはいつも警備艇があつて我々をみはっていた」「急いで。*ほらバスがあるから」となり、ガ格名詞が無情物であっても、既に文中にあつては有情物としての認め方をされているので「ある」は使えない。さらに、「駐車場に怪しい車が {いる／ある}」は自己制御性だけでなく、「いる」が有人であること、「ある」が無人であることも示唆している。寧ろ有人であることが「いる」を動詞として選ばせているとも言える。そのため「乗り物がある」は、乗り物としての使命を終えたあるいはその働きのない（故障、廃車など）場合と、無人であるためにその働きのない場合が考えられる（所有の場合を除く）。

6.2.5. 分布のまとめ

以上、先行研究を基に用法に注目してガ格名詞句のある「いる」と「ある」をまとめなお

²³⁸ もしもこの用法がほぼ消えているとすれば、「ある」と「いる」は「存在」という根幹的意味を持つという点で類義語ではあるが、用法という点では重複の無い単語として独立しているということになる。確かに認知的には全く同じことを表わすのに二つのものが存在する方が特殊であると考えべきであるため、用法の点で二つに分かれ重複することがないというのが、類義語の至る道なのかもしれない

した。その結果を図2として示す。

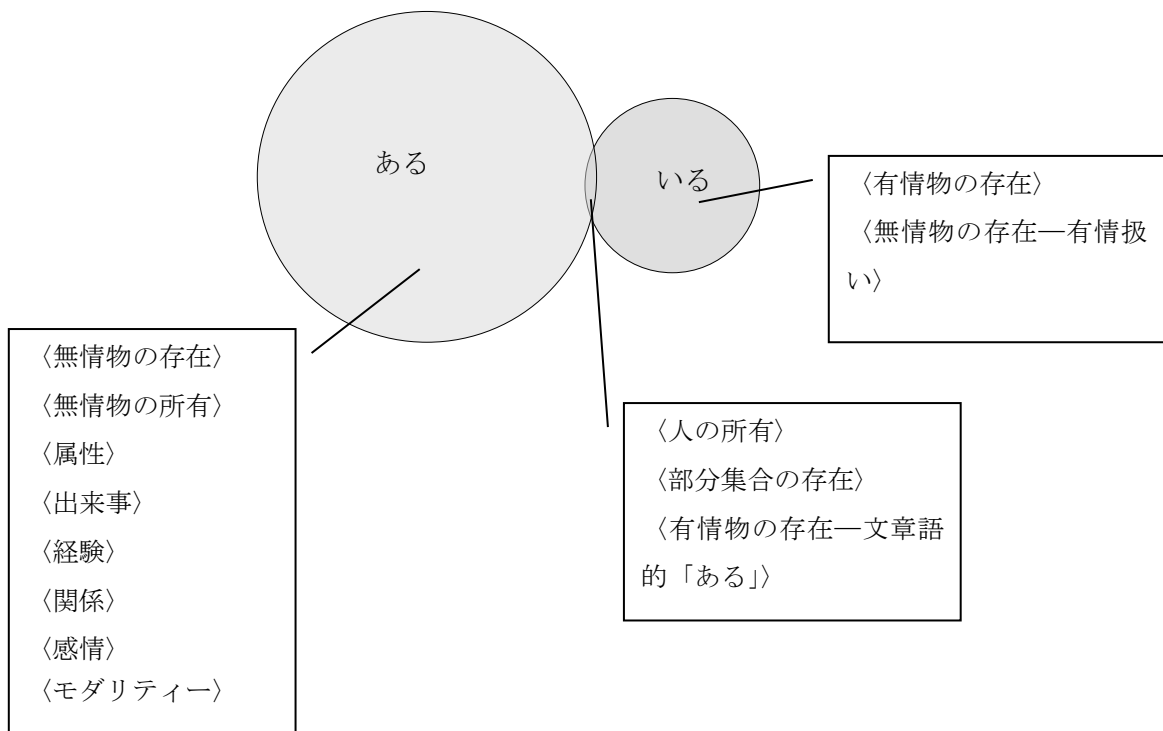


図2. 「～がいる」と「～がある」の用法と分布

6.2.6. 「～がある／いる」以外の用法

前述したとおり、これまでの研究では「～がある／いる」という構文を中心にガ格名詞の種類と二格の範囲について考察され、これ以外の構文についてはその存在の指摘をするに留まりほとんど考察されたことがない。それは次のような構文である。例文には、「いる」と「ある」に実線を、その前の要素に点線を付す。

- (47) 太郎はいつまでも学生でいるつもりだ。
- (48) 太郎は花子と一緒にいる。
- (49) 出発までには半年ある。
- (50) 人には優しくあれ。
- (51) その本には「諸問題の解決になる」とある。
- (52) 夕飯を食べてある／食べている。

これらは、助動詞に関わるもの、引用の表現、補助動詞としてアスペクトに関わるものなど、単に存在を表すものに留まらない。実はこの周辺部分とも言える用法が両者の違いを強く表す部分であり、またその広がりを示す部分でもある。

以下では、まず「～でいる／ある」について、次に「～にいる／ある」と「～くいる／ある」について、それから引用の表現、次に「～ている／ある」の表現、「数量詞いる／ある」の順に、それぞれ考察していく。

6.2.7. 「～が～でいる」と「～が～である」

(47) や (48) のような例は、鈴木英夫 (1998) で『『人がいる』特有の言い方』として指摘されている。さらに、南得鉉 (1999) ではこれらを「具体物の存在を表さない用法」と呼び、「主体の属性の表出」と「主体の状態化の表出」の二つに分けている。「具体物の存在を表さない用法」とは「根底では有情物の存在を表わしてはいるものの、場所が限定されず、存在するモノの属性を表わしていると見られる (南 1999、p59) ²³⁹」ものとある。その例として「私、こんなに長く女でいても、まだどこかに男の自分が、本当に自分がある、これは役割によっておもっていたのに。(同、例 5)」を挙げる。

南 (同) の考察は興味深いものであり、これまで問題にされなかった点に焦点を当てた研究として意義がある。しかし、この定義で気になるのは、存在する「モノ」という点である。上例を見ると、存在するのはあくまでも主語である「私」で、それはモノではなくヒトである。注には「モノはさらに人・動物と事物に分けている」とあるが、このような注をつけるならば、先の引用箇所の前半「根底では有情物の存在を表わしてはいるが」は不要であり、下線部分が矛盾する言い方になる。前半も同様に「根底ではモノの存在を表してはいるが」とすべきだろう。あるいは、そもそも「いる」の中心的な意味は「ヒト (有情物) の存在」であるのだから、このような言い方は望ましくないのではないか。ここでは、主体の存在と属性との関わりについて再度考察を加えたい。

さらに、後半部分の「存在するモノの属性を表わす」という点であるが、女であるという属性を単に表わすならば、それは「私、こんなに長く女でも…」という「だ」の表現でも構わないはずである。しかし、この後に続く文脈から考えると「だ」の方は不適格である。「だ」とは「である」の縮約形でもある (もちろん文体差はある) が、「である」とは言い換えが不可なのか、それはなぜなのか、についても考察したい。

また、「一人でいたいんだ。(南 1999、例 14)」を「主体の状態化の表出」例として挙げるが、例えば「あいつはいつも一人でいる」は「主体の状態化の表出」とは言えず、むしろ「属性」と捉えるべきである。そこで、「属性」と「状態」の関係についても考察を加える必要がある。

先行研究ではこのような用法を「いる」独特の用法と捉えているが、本研究では「いる」だけでなくその一部は「ある」にも見られる用法であると考えている。以下では「いる」に新たに「ある」を加え、比較しながら考察していくことにしたい²⁴⁰。

6.2.7.1. 属性をもった存在「～でいる」と「～である」

まず、属性とは何かという点を確認する。「～が～でいる」における属性とは、主語に立つガ格名詞が本質的に持つ性質や特徴のことである。形容詞的な概念に近いものもあり、その場合抽象的な性質を持つ。また一時的にそのような状態にあるのではなく、ガ格名詞がど

²³⁹ 下線は筆者が付したもの。

²⁴⁰ 青空文庫内の検索サイト、また新潮文庫の 100 冊を利用した。例文に引用記載がないものは作例である。

ういうものかという本質に関わるような性質や特徴である²⁴¹。

以下のような例が属性を表わす「～でいる」文である。以下の実例はいずれも「いる」で検出されたものであり、比較するために「ある」を（ ）に加えた。

(53) 独立独歩の人でいながら (でありながら)、正確にこまやかなところもあるオーちゃんはそれに気づき、(南 1999、例 12)

(54) ぼくはいつも真面目でいたい (でありたい) と思っているのです。(虚構)

(55) いつまでも、お人形みたいなからだでいたい (でありたい)。(生徒)

(56) おれたちはみんなひとりぼっちだからな、ひとりぼっちでいる (である) のが当たり前なのに (孤高)

先行研究では名詞の例しか取り上げられていないが、実際にはナ形容詞の連用形も見られた。多くが「ある」と置き換え可能であり、ほぼ同じような意味を伝えている。ただ、文体的な点でいうと、「いる」の方が話し言葉としても書き言葉としても一般的だが、「ある」の方は書き言葉的であり、文語調の硬さがある。

主語に該当する名詞はいずれも有情物であり、デの前部分に属性を表わす名詞あるいはナ形容詞が来て、存在主体である有情物がどのようなあり方で存在するか、ひいては、そのようなあり方を属性として持つものとして存在することを表す。例えば (53) は「オーちゃん」が本質的にどういう人かという、「独立独歩」というあり方で存在する人であり、つまり独立独歩という特質を持つ人物であることを表す。(54) は「ぼく」が本質的にどういう人として存在したいかという、「真面目」というあり方で存在すること、真面目であることを表している。作例も考えてみた。

(57) 姉はいつも母親でいる (である)。だから女性の面などあるとは思わなかった。

(58) 父は真面目でいながら (でありながら)、時折ユーモアのある話をする人だった。

(59) 太郎は誠実でいて (であって)、堅苦しきのない人である。

「～が～でいる」が属性を表わす場合は、従属節で用いられる場合が普通で、主文末に用いる場合は稀であることがわかる²⁴²。特にそれは、ナ形容詞の場合に顕著で例えば「太郎はいつも真面目でいる」より「太郎はいつも真面目である」の方が自然である。ナ形容詞がデアルの形をとる場合は、ナ形容詞の辞書形「真面目だ」のデアル体で文体が変わっただけという点でナ形容詞の通常の活用の一つに当てはまるからである²⁴³。

また、これらは属性を表す以上、具体的な存在場所を必要としないため、「いる」文に通常現れるあるいは想定される存在場所二格がないのが特徴である。

先行研究では、これを『『人がいる』特有の用法』としているが、少なくとも「属性」を表わす「～でいる」は「～である」とほぼ同じと考えられ、両者重複の部分に該当する。ま

²⁴¹ 属性か状態かの区別はコンテキストや文意によって決定されることであり、デ格が前接する要素によって決まるものではない。「一人でいたい」は状態、「いつも一人でいる」は属性となる。

²⁴² 用例を検索していても見つけることはできなかった。また全体的に用例も多くはない。

²⁴³ 「ひとりぼっちでいる」と「ひとりぼっちである」は「ひとりぼっちの太郎」のようにナ形容詞ではない。純然たる名詞でもないが、こちらの方が「でいる」の主文末の不自然さは減る。それはナ形容詞のような終止形ではなく、「でいる」も「である」も構造的に「名詞＋接続助詞＋補助動詞」であるためどちらかが主という関係がないためであろう。

た、「ある」の側からこの点を改めて見ると、属性を表わす場合には主体が有情物であっても、「ある」が可能となるとも言える。しかし、「彼に人望がある」のような〈属性〉を表す用法は、ガ格名詞が抽象的な名詞で属性の内容を表し、二格名詞が属性の持ち主であるが、〈有情物の属性〉を表す「彼がひとりぼっちでいる」はガ格名詞が属性の持ち主であり、「〜で」が属性の内容を表す。また〈属性〉の方は、無情物の属性も表しうる（例、金は柔軟性がある）のに対し、「〜が〜でいる／ある」は不可であるため、これを〈有情物の属性〉とする。

6.2.7.2. ある状態での存在「〜でいる」と「〜である」

次の例はいずれも主体がある状態で存在することを表している。同様に、「いる」で検出された実例に「ある」を入れたものが以下の例である。

(60) かがんだままの姿勢でいる (?である) よりも虫のようにちぢこまって横に寝るほうが楽だということも彼は知っていた。(孤高)

(61) 活動写真雑誌をひろげて篤介が制服でいた (*であった)。(海浜)

(62) 結局絵をかいている間は無言でいたい (*でありたい) というのが本当です。(油絵)

(63) 加藤とそこにふたりだけでいる (*である) ことが恥ずかしかった。(孤高)

これらは、主体が有情物であることの制約を受け「いる」が使われている。主体の状態を表すのであれば、「ある」が使われてもいいはずだが、この例はそこまでコピュラの意味を持ってない。そのため、(63) は「ふたりだけ」というあり様で一時的に存在することを表し、「ふたりだけだ」という完全なる状態を表すものとは異なっている。(61) は文脈が状態ではなく存在を要求している。このようなものは、存在場所二格が示されるのが基本である。これを〈有情物の一時的存在〉と呼ぶ。

一方で、次の例は「ある」との置き換えが可能である。

(64) これは園子がまだ達者でいた (であった) 頃の下座敷の光景だ。(新生)

(65) 思いの外、泉太や繁は平気でいた (であった)。(新生)

(66) 彼のした行為のあらゆる結果に、責任を持つ気でいた (であった) 訳ではない。(大石)

(67) 今日こそ、心を引締めてこの勝負に片をつける決心でいた (であった)。(小画)

これらは、主体の状態が属性と言えるほどの恒常性・常態性を持たず一時的なものである。また、「である」との置き換えが可能であっても、意味的に若干違うものを表している。

園子が達者でいた (園子＝達者) + 存在

園子が達者であった 園子＝達者

前者が園子の「存在」が文字通り顕在化しているのに対し、後者は園子の「存在」は潜在化している。園子の存在は、ヒトとして認知される以上は「存在している (あるということ)」が是非もなく前提となること、形式的に名詞となって主語に立つということによって保証されているので、どちらも「園子」という主語自体に存在が前提としてある。その述語部分

が、コンピュータとして働くまでにその意味を削ぎ落とし、述語であるとの機能性の部分を前面に出したと考えられるのが「である」であり、あくまでも主体の存在という意味を保持して述語に立つのが「でいる」なのである。つまり、「である」は既に現代では「だ」と同じであり、その「だ」は名詞述語文・ナ形容詞述語文を支える文末詞となっている。「でいる」はそこまでには至らず、現代も「～で+いる」との分析が明確に残されている。そのため、その顕在的あり方によって「存在」の意味が強調されている。一方、「である」は主体の存在が潜在化し、単に主体の状態述べを行っているに過ぎない。これを〈有情物の一時的状態〉とする。

また、デの前には様々なものが立つ（顔、格好、姿、姿勢、気分、気持ち、思い、状態、態度、多忙、予定、現場主義、推進役…）。そして、存在場所ニ格設定が可能であるものが基本である。一方、「ある」は「である」になると属性でも一時的状態でもニ格不要であり、「存在」の意味が希薄化している。

以上の例はいずれも有情物が主体である「でいる」の例であるが、無情物が主体でありながら「でいる」をとる例が一例だけ見られた。

(68) その風が風だけでいるうちは、なにもおそれることはなかった。(孤高)

「である」はコンピュータになっているために、「ある」に文法的な要素が後続することはないが、「でいる」は以下の実例に見るように多様な意味を展開する。

(69) 酒は嫌いではないが、なしでいられないほどの呑ん兵衛でもない。(涙はふくなく、凍るまで)

(70) それでヤバくなったら、こっちのドジのせいにして逃げちまう気でいやがる。(闇の刃)

(71) 心さえ美しければ、きっと女性はいくつになっても清楚でいられる。(文化夜總會)

(72) 製品は「いつまでも素肌美人でいられるように」を基本コンセプトに作られています。(Yahoo!ブログ)

6.2.7.3. 「～が～でいる／である」のガ格とデ格

このような存在主体の「様態」について述べる用法におけるガ格・デ格・ナ形容詞中止形と動詞の関係は、通常存在文「～に～がある／いる」や出来事「～で～がある」におけるそれとは異なったものである。

太郎が（制服でいる）。

存在の様態

大学で（講演会がある）。

出来事

「太郎が制服でいる」はガ格が存在の主体で、デ格名詞は存在のあり様を説明する要素であるために動詞とのつながりが強い。一方「大学で講演会がある」は、デ格が動作の起こる場所を表し、ガ格名詞は動詞と一体になって出来事が行われることを表す。つまり、「～が～でいる」と「～で～がある」は同じ助詞を取りながらも動詞との結びつきが異なる。

また、属性を表す場合は「太郎は一人ぼっちでいる」のように、存在主体はハによって主題化されていなければならない。属性とは、何かについてその特徴を述べるということであ

るので、当然その何かについて取り上げるという姿勢が伴う。ガ格は属性を叙述するという前提と合わないため、ガ格になると状態を表す用法へと変りやすい。

さらに、「太郎と一緒にいる」は「?一緒に太郎がいる」よりも自然な表現である。単純存在表現の「研究室に太郎がいる」「太郎が研究室にいる」におけるガ格とニ格の関係とは異なっている。

6.2.7.4. コピュラとしての「～である」

存在場所を持たない「～が～である」文はコピュラの役割を果たす「である」であり、「で」と「ある」で切り離すことができない。その意味は〈指定〉〈措定〉である。「これは本である」「5月3日は憲法記念日である」「社長は田中氏である」のように、主語は「ある」から有情性という指定をもはや受けないため、無情物・有情物の両方が立つ。これが〈指定〉を表わすもので、主語と述語の名詞を入れ替えることが可能であることが知られている(松岡弘ほか(2000))。一方で、〈措定〉とはこの両者が入れ替え不可能なもので、「母は教員である」「エレベーターは日本製である」「地球は惑星である」のような例を指す。これに加えて、ナ形容詞の終止形に出現する「携帯電話は便利である」「田中さんはマメである」のような〈属性〉を示すものがある。以上の点を〈指定〉〈措定〉〈属性〉とする。

6.2.7.5. 小まとめ

以上、「～でいる」と「～である」の用法をまとめると以下ようになる。

表1. 「～でいる」と「～である」の用法

| | 文型 | 用法 | 場所のニ格 |
|-------|---------------|--------------|-------|
| 「いる」 | 「～が～に～でいる」 | 〈有情物の一時的存在〉 | ○ |
| 「ある」 | 「～が～である」 | 〈属性〉〈指定〉〈措定〉 | × |
| 共通の用法 | 「～が～でいる／ある」 | 〈有情物の属性〉 | × |
| | 「～が～に～でいる／ある」 | 〈有情物の一時的状態〉 | ○ |

・「～が～に～でいる」は、存在主体の存在のあり方(存在様態)を「～で」によって示す用法であり、デ格には名詞、ナ形容詞²⁴⁴が来る。また、場所のニ格が共起する。

・「～が～でいる」が主文末かつ単独で使われることは稀である。

・「ある」との相違点は、「いる」が存在の意味を保持している点である。

6.2.8. 「～が～に～にいる／ある」と「～が～くいる／ある」

まず、「～に」にナ形容詞または副詞を立てる「～が～に～にいる／ある」を見る。

(73) 彼は愛情を持っていないとも、一しょにいる(＊にある)ことさえ(幾度)

(74) 伸子は、いまのモスクで、自分たちが不如意にいる(＊にある)のは、いいこと
だと思った。(道標)

²⁴⁴ ナ形容詞は中止形の形「～で」をとりその後に「いる」が後接する。イ形容詞も同様に考えると中止形が「くて」であるので「くている」が一方で存在すると思われるが、実際にはこの実例は一例も見つけれなかった。その場合は「美しくある」のように「ある」が用いられる。

(75) モスクに合法的にいる（*にある）日本人と、非合法に行っている人たちの間には（道標）

これは有情物の存在のあり方を述べている。その有情物主語によって「ある」は置き換え不可である。したがって、無情物が主語に立てば以下のように可能となる。

(76) ペンは青い表紙の本と一緒にあった。

一方、イ形容詞は「～くいる」の形をとる。

(77) その日その日にかつかつに生きている人たちが、数えきれないほど多くいる。
（孤高）

(78) 病院にずっと長くいる医者の名だけでいいだろう。（楡家）

これらは存在主体がある場所に（明示されない場合あり）存在することを表し、その数や期間がどうかを述べているのであって、イ形容詞は必須ではない。その点で状態を表す(73)～(75)とは異なる。一方で、無情物主語であればこの用法として考えられるが、以下のように文語調で不自然さもある。

(79) ?家は地震に強くあれ。

感情形容詞は「～くいる」の形すら見られない²⁴⁵。

(80) *私はうれしく {いた／あった}。

感情は一時的状態とも言えるので「いる」が可能かと思うが、実際は「いる」も「ある」も不可である。「うれしい」状態で存在することが、そのまま「うれしい」ということだからであろう。

属性形容詞「優しい」や「美しい」は「ある」が可で、属性形容詞だが恒常的な性質というよりも、主語の人物の状態を表わすと捉えられる。ただし「いる」は不可である。「ある」も文末では「あれ」「ありたい」、名詞修飾節で「あること」など、表現が限られている。

(81) a.花子は人に優しく {＊いろ／あれ}。

b.花子は女優として常に美しく {？いたい／ありたい} と思っている。

c.女優として美しくあることが求められている。

以上をまとめると次のようになる。

表2. 「ナ形容詞・副詞に」「イ形容詞く」に続く「いる」と「ある」の用法

| | 文型 | 用法 | 場所の二格 |
|-------|----------------|-------------|-------|
| 「いる」 | ～が～に～にいる。 | 〈有情物の一時的存在〉 | ○ |
| 「ある」 | ～が～に～にある。 | 〈無情物の一時的存在〉 | ○ |
| | ～が～く（属性形容詞）ある。 | 〈有情物の状態〉 | × |
| 共通の用法 | φ | φ | φ |

6.2.9. 文書の引用「～とある」

「ある」の持つ「いる」にない用法として〈引用〉がある。『引用箇所』とある」という

²⁴⁵ 「うれしくもあった」のようにとりたて助詞（副助詞）のモを挿入する場合には可能である。ただし「うれしくもいる」は不可である。

構造を持つ。特徴はガ格を必要としない点である。

- (82) 忠敬組と坂部組の天文方二隊が、関所の定番人立ち会いのもと「旅人溜まり」の
広場で測量したとある。(伊能忠敬の歩いた日本)

引用箇所は文頭の「忠敬組と坂部組の天文方二隊が～測量した」までの補文であり、「とある」は特に書かれたものの中にそのような内容のものが見られるという意味の引用を意味する動詞である。そのため、その引用の出典が、二格名詞あるいは「～によれば」という形で示される場合も多い。以下の例である。二格にも点線を付す。

- (83) LP ジャケットの端に小さく「FROM NAKAMURA」とある。(エリー)
(84) 紙に大きく“精華服装学園・小柳春江校長”とある。(夜に)
(85) 銘文には「右尚方師」「右尚方工」と記されるべきなのに、なぜ「師」は陳氏とあるのか。(邪馬台国論)
(86) 小学館の日本国語大辞典によれば、「掃除が行き届いていて、塵一つ落ちていないさま」とある。(私の古寺巡礼)
(87) 人がこの風景について書いているのを読むと、そこは醜い、砂漠で、地獄のような所だ、とあるのです。(光速スローネス)

書かれたものに限定された引用であることは、(83)「LP ジャケットの端」、(84)「紙」、(85)「銘文」、(86)「辞典」そして(87)「書かれているのを読むと」からわかる。〈文書の引用伝達〉の「とある」と分類できよう。

引用については、一方で『引用箇所』とする」という表現が見られ、小説では今回検出できなかったが、論文では多く使われる。「とする」は論者が結論づけたという積極的な関わりを見ており、「とある」は中立的にその存在のみを述べる。「とする」は引用箇所を述べた人物の決定や責任を暗に示す結果となるため、ガ格名詞句を必要とする²⁴⁶。

6.2.10. 補助動詞「～てある」と「～ている」

動詞連用形に接続助詞のテがついて、補助動詞の「ある／いる」と接続したのが「～てある」と「～ている」である。これらは「ある」と「いる」との対立ではなくアスペクト表現「てある」と「ている」の対立として考察されてきた。ここでは、アスペクト表現ではなく、もともとの「ある」と「いる」の対立として考えてみたい。

6.2.10.1. 「～てある」

主語が無情物で「～が～てある」の構文を作る例が以下のものである。

- (88) 「非常持出」という赤い貼紙がしてある (路傍の石)
(89) 石と石とはセメントで固めてあるのだ。(路傍の石)
(90) 収容所のまわりには竹の柵がゆってあります。(ビルマの豎琴)

また、「～を～てある」の形をとり、通常出現するはずのガ格名詞句が無い²⁴⁷のが以下の

²⁴⁶ 例、「渡辺晃宏・奈良文化財研究所室長は『藤原一族が、長屋王を失脚させ、結果的に土地まで奪ったのだろう。壮絶な権力闘争が読み取れる』とする」(読売新聞 2009 年 12 月 4 日)

²⁴⁷ 今回の検索では 1 例も見出せなかった。

ような例である。

(91) 私の知ってることを、書いて隠してあるんだ。(女社長)

(92) 台所の窓をわざわざ開け放ってある。(女社長)

この例に動作の主体をガ格名詞として出現させると、以下のように非文となる。

(91)' *社長が私の知ってることを隠してあるんだ。(○隠しているんだ、ておいたんだ)

(92)' *社長が台所の窓をわざわざ開け放ってある。(○開け放っている、ておく)

このように、「ある」という動詞が要求するガ格名詞句の無情性という問題がもはや「てある」には存在しない。つまり、テ形に動詞「ある」が接続した形式が文法化されたアスペクト形式に変化しているのである。その意味は「結果残存」あるいは「効果の継続」と言われるもので、「～が～てある」も「～を～てある」も、動作主は存在するがそれを明示しない表現であり、その動作を「ある」によって結果や効果の方へ重点をずらしている。したがって、動作を状態に変えている。このような「てある」を〈動作の結果状態(動作主の含意)〉と呼ぶことにする。

6.2.10.2. 「～ている」

(93) 鮎太は、雪枝が自分を待っているに違いないと思った。(あすなろ物語)

(94) 自分は相変らず、油のしみ込んだ着物をきている。(路傍の石)

(93) は動作が継続段階にあることを示し、(94) は動作の残存を表わすアスペクト表現である。以下の例に見るように「ている」も主語に無情、有情の制約がない。まず、無情物主語の文について見てみる。

6.2.10.2.1 アスペクトを表わさない「～ている」:「存在状態」

(95) 夜なのではっきりしたことは分らないが、とにかく方向は印刷所の方だった。いくら離れているようにも思うが、こいつは放っておけないと思った。(路傍の石)

(96) 屋敷より一段高くなっている田圃の畔道を (あすなろ物語)

(97) 地面が低くなっているため (あすなろ物語)

(98) あんな奴は資本家のおこぼれを折詰にして、有難がって持って帰るのが、丁度似合っているんだ。(路傍の石)

(95) の「印刷所が離れている」というのは、「離れる」という動作の結果によるもので、「離れる」という動作が継続するのではなく、「印刷所が遠い」ことを表している。つまり、離れ始め、離れる動作中であり、離れ終わる、のような一連の動作の過程を踏まえておらず、「離れて存在すること＝遠いこと」を示すという点で、もはやアスペクトではない。最初から、状態を表わしているのである。同様に(97)「地面が低くなっている」も、「低くなる」という動作の結果ではなく、地面は今も昔も「低い状態にある」と言える。そして、(98)「似合っている」は「似合う」と意味的に差がなく、動作を表わしてはいない。

このように、これらは形式的には動詞を用いたアスペクト表現ではあるが、アスペクトの意味はなく、動作を表してもいない。むしろ形容詞に近いのである。以上の点から、これら

の「～ている」は単に状態であると考えられる。これを〈存在状態〉と呼びたい。しかも、それは「である」に見られたような動作から状態への変化や重点の置き方の変容というものではなく、最初から状態であることにその特徴がある。

6.2.10.2.2 アスペクトを表わさない「～ている」:「存在様態」

(99) 主人の手の平の上に光っている金時計 (路傍の石)

(100) 五、六十軒の農家が、清澄な空気の中に、それぞれ木々の茂みを抱いて散らばっている。(あすなろ物語)

(101) 伊豆半島の基部に位置している避暑や海水浴で名を知らされているN市の中学校 (あすなろ物語)

(99) も、金時計が光り輝く様子をしていることを表しており、形容詞的である。なぜなら、金時計は光を放ち始めたり、光が止んだりする事態を想定することができないものであり、その意味ではアスペクトの意味する動作の過程や段階と言ったものがそもそもないからである。この例は「手の平の上」という場所に、「光って」「存在する」ことを表わしている。

(102) 車のライトが闇の中で光っている。

一方で(102)は、車のライトが点いていない状態から点けられることで光り出し、その光る動作が継続していることを示すもので、ライトが消されれば光る動作は終結段階を迎える。したがって、(99)は「光る」という語が動詞の形状を持つために、それを状態にして示すために「ている」という形を利用したと考えることができる。

(100) も、「散らばる」という動作の段階や過程を表わしてはならず、かつ、動作が行われた結果でも動作の進行中でもない。「散らばって存在する」ことを表わしている。その意味でやはりアスペクトではない。また、(101)は「位置する」と置き換えることが可能である。これらを〈存在状態〉と呼ぶ。

6.2.10.2.3 存在様態と存在状態の連続性

野村剛史(2003)は「テーブルの上りんごが転がっている(同、例1)」のような文を「存在様態文」と述べ、りんごの存在だけでなくリンゴが存在している時の様子をも表すと説明している。そして、存在様態文の条件は「二格で場所が表されること」「動作・作用が行われた結果と言にくいこと」と野村(同)は規定する。上記の例も二格で場所を表わし、動作の結果と言にくいという点で野村(2003)の言う「存在様態文」に当たるものである。しかし、野村(同)は、結果残存²⁴⁸と存在様態とは連続的であると述べている。この点を再考してみたい。

アスペクトとは「ある一連の動作の中のどの段階にあるものかを示す文法範疇」とするならば、「着物を着ている」のような結果残存文は、「着始める」→「着終わる」という動作の完了を経て、その動作の完了したことが結果として残っている側面を表わしている。厳密な

²⁴⁸ 純粋な結果残存の文とは例えば「電気が点いている」のようなものであろう。「電気が点く」という動作の結果が引き続いていることを表わすが、電気の存在の様態とまでは言えない。

動作のプロセスという点ではその範疇をやや超えている。しかし、動作の過程を経たその連続性を捉えている点で、アスペクト的である。しかし、「手の平の上に光っている金時計」という存在様態文も、「地面が低くなっている」という存在状態文も、動作の過程に関わらないため、明らかにアスペクトではない。野村（2003）が「テーブルの上りんごが転がっている」を結果残存と連続するものだと考えた理由は、「転がり始める」→「転がり終わる」→「転がっている」という動作の過程を想定したからだと考えられるが、当該の文はこのような動作の結果とは明らかに異なる面を描出していると考えるのが自然である。りんごが転がり終わって放置されているのではなく、最初から「転がる」ような様態で、つまり、りんごが横になったような状態で、あるいはいくつかのりんごがまるで転がったように散乱していることを、「転がる」という動詞を利用して表現したのではないか。その意味では、結果残存とは関係なく、あくまでも存在を表わす際にその様態を示す手段として「転がる」という動詞を比喩的に、あるいは連想的に用いたものと言えないだろうか。

したがって、結果残存は存在様態とは一線を画すものであり、むしろ存在様態は存在状態と連続しているのである²⁴⁹。

そして、その連続する両者の違いは二格の有無である。二格の存在があるのが「存在様態」、二格の存在がないのが「存在状態」である。二格が現れることは存在場所を持つ存在の文であることを意味している。しかし、二格がない方は存在のありかを持たないということであり、単に状態や性質を表わすということである。そのために、「存在状態」は言わば「(存在)状態」であり、形容詞文に近いものとなっていると言える。このことは、振り返ってみて、「～がいる／ある」文でも、その二格の有無が「存在」と「属性」を分かつ一つの条件でもあったこととつながる。

表 3. 非アスペクト「～ている」

| 用法 | 文型 | 例文 | 特徴 | |
|------|-----------|--------------------------------------------------------|---------|-------------------|
| 存在状態 | ～が～ている。 | 印刷所はここから <u>離れている</u> 。 地面が <u>高くなっている</u> 。 | 形容詞的 | 動作・変化の過程を表わしていない。 |
| 存在様態 | ～が～に～ている。 | 農家が盆地に <u>散らばっている</u> 。 リンゴがテーブルの上 <u>に転がっている</u> 。 | (情態)副詞的 | |

6.2.10.3. 存在、状態、属性の連続性

以上、「てある」も「ている」もすでに主語の制約がないという点では文法的な機能性が強まった形式であることは間違いないが、補助動詞としての「ある／いる」が動詞「～がある」の場合だけでなく、形容詞との境界にまでその機能性を広げていることが確認された。形容詞と関わる「ある」と「いる」の表現についてまとめると以下ようになる。

²⁴⁹ 「子供たちが教室に集まっていた。」は場所の二格のある「ている」だが、これは結果残存の用法である。「ネコが部屋の隅で／に丸まっていた」のデ格の方が結果残存、二格の方が存在様態的である。このような例が結果残存と連続する部分で、デ格を用いると結果残存になるという特徴を持つようだ。「リンゴがテーブルの上で転がっている」のデ格文は動作の継続である。

表 4. 形容詞との接点

| | 文型 | 用法 | 例 | 形容詞 |
|------|---------|------|--------------------------------------------|----------------------------------------|
| 「ある」 | ～に～がある | 属性 | 太郎に <u>勇気がある</u> 。 | 太郎が <u>勇敢だ</u> 。 |
| | ～に～がある。 | 感情 | 背中に <u>痛みがある</u> 。 太郎は父に <u>恨みがある</u> 。 | 背中が <u>痛い</u> 。 太郎は父が <u>恨めしい</u> 。 |
| 「いる」 | ～が～ている。 | 存在状態 | 印刷所が <u>離れている</u> 。 | 印刷所が <u>遠い</u> 。 |
| | | | 土地が <u>低くなっている</u> 。 | 土地が <u>低い</u> 。 |

また、先に見た「～でいる」が単なる存在ではなく、どのように存在するか（存在様態）へ視点を動かした用法であったことを考えると、「いる」は「～がいる」→「～でいる」→「～ている」の順に存在の意味を希薄化させていると考えることができる。

まとめると以下ようになる。|| は意味的に似ているものを区切る記号である。

・「いる」の存在、状態、属性、形容詞性の連続性

〈存在〉「人がいる」|| 〈一時的存在〉「親が子と一緒にいる」「太郎が窓辺に制服でいる」、
〈一時的状態〉「立ったままではいる」、〈存在様態〉「金時計が手の平の上に光っている」||
〈属性〉「太郎はいつもひとりぼっちでいる」、〈存在状態、形容詞的〉「印刷所が離れている」、
|| 〈結果残存〉「灯りが点いている」|| 〈動作の継続〉「人が走っている」

・「ある」の存在、状態、属性、形容詞性の連続性

〈コピュラ〉「本である」、|| 〈存在〉「本がある」、〈所有〉「財産がある」、|| 〈一時的状態〉「立ったままである」、|| 〈属性〉「ひとりぼっちである」「勇気がある」、〈感情〉「恨みがある」〈動作の結果〉「花が活けてある」、〈モダリティー〉「雪崩が起こる恐れがある」、
〈形容動詞〉「親切である」、|| 〈変化の最中〉「ピークが過ぎつつある」、〈出来事〉「火事がある」

また、どのように存在するかを表現する用法が実に広いことがわかった。それは野村（2003）による指摘だけでなく、他の文型にも見られるものであった。いずれも場所を表わす二格名詞句を持つことが特徴である。

表 5. 存在様態の広がり

| | 文型 | 本節での用法名 | 例文 |
|------------------|------------------|-----------|------------------------------|
| 「ある」 | ～が～に～にある。 | 無情物の一時的存在 | ペンは机の上に本と <u>一緒にあった</u> 。 |
| 「ある」と「いる」 両方可 | ～が～に～である／ いる。 | 有情物の一時的状態 | 祖母が田舎に <u>達者でいる／ある</u> 。 |
| | | 有情物の属性 | 太郎はいつも <u>ひとりぼっちでいる／ある</u> 。 |
| 「いる」 | ～が～に～でいる。 | 有情物の一時的存在 | 子供が部屋の隅に裸足でいる。 |

| | | |
|-----------|-----------|--------------------------|
| ～が～に～にいる。 | 有情物の一時的存在 | 日本人がモスクに <u>合法的に</u> いる。 |
| ～が～に～ている。 | 存在様態 | 農家が盆地に <u>散らばっている</u> 。 |

6.2.11. ガ格名詞が必須ではない用法—数量

数量詞に直接「ある」が後接する用法がある。

(103) 卒業までにまだ三カ月ある。(孤高)

(104) ただ白い和紙の中に五円ある。(花埋)

(105) 須磨から宝塚まで五十キロある。(孤高)

これらはガ格名詞が無いが、ガ格名詞を顕在化させることはできなくはない(例、卒業までにまだ時間が三カ月ある。須磨から宝塚まで距離が五十キロある)。しかし、「三カ月」ならば「時」、「五円」ならば「お金」であることは明らかであるため実際には顕在化させない(実例はいずれも主語たるガ格名詞は出現しなかった)。ただし、「枚、冊、個」などはその数量詞を受ける可能性のあるものが複数あるため、ガ格名詞が必要になる場合もある(例、{紙／着物／シーツ…} が一枚ある)。

同様に、「いる」にもこのような用法がある。

(106) ええ、一人いるわ。(植物)

(107) 六頭いる。(国盗)

有情物でも人数の場合ガ格名詞は必須ではないが、動物の場合は数量だけでは何を指すかわからないため、主語が必要になることが多い。これについては、第3節で詳しく考察する。

6.2.12. 存在の場所ではない「～に」—「～が(位置)にいる／ある」—

「ある」と「いる」が存在を表す動詞であれば、当然ながらその存在場所であるニ格が求められるはずである。しかし、その存在場所はそれほど単純なものではなく、高橋・屋久(1984)では、「Ⅰ空間的な存在」「Ⅱ範囲・わくぐみの中の存在」の二つを考えている。特に後者は「一定の範囲・わくぐみの中に、一定の抽象的なものが存在することをあらわす。これらは、存在するものの性格にしたがって、存在するわくぐみの性格も変る。存在場所が抽象的である。」としている。これは「～がある」について述べているものであるが、「ある」よりも用法範囲の狭い「いる」においてもこの説明があてはまるはずである。ところが、「いる」の例の中には、存在場所が抽象的なものでありながら、この説明とは異なるものが見られるのである²⁵⁰。例えば、次の例である。

(108) あたしは今そんな事を想像しなければならない地位にいるんではないでしょうか。(明暗)

「存在するもの」にあたる「あたし」は「抽象的なもの」ではなく、「あたし」の性格によ

²⁵⁰ この他には「一緒にいる」などの「ニ」も存在場所ではない例であるが、既に述べたのでここでは触れていない。

ってそのわくぐみの性格が変わるとも言えない。高橋・屋久（同）でⅡとしているものは「家庭の内には陽気な混雑があるばかりであった（例 83）」「此姉と K の間は大人年齒の差があったのです（例 87）」「そのうちにたった一つの例外があった（例 99）」などであり、いずれもその存在するもの（混雑、差、例外）は説明の通り抽象的なものである。（108）のような例は、大量の用例を扱った高橋・屋久（同）²⁵¹の中にも見られず、この他の先行研究にも管見の限りでは特に触れられたことがない²⁵²。しかも、言うまでもなくこの例は「所有」の用法ではない。

さらに、「人間・動物をあらわすガ格の名詞と組みあわせる『ある』の用法」として、高橋・屋久（同）は次の七つを挙げているが、どれにもこの例はあてはまらない。「1. 所有のカテゴリー」「2. おこり・おこなわれのカテゴリー」「3. 聞き手のまだ知らない人や動物を登場させ、新しい場面を設定する」「4. 一定の属性をもった場所に、一定の属性をもった人や動物が存在する」「5. 場所を限定せず、『世間』『世の中』ということばであらわされる漠然として広い範囲の中に、一定の属性をあわせもった人や動物が存在する」「6. メンバー全体の中に、別の一定の属性をもった人や動物が存在する」「7. 組織体の中に、一定の属性をもった人や動物が存在する」。4 は似ているが、その例として挙げられているのは「こんな山の中にもこんなハイカラな女があるかと思ふと（例 325）」であり、異なる。

さらに、寺村（1982）にもこの存在は示されていない。参考になるのは「物理的存在（あるとき、あるものがある空間を占めて存在する）（寺村、p161）述語：アル、ナイ、イル、多イ、少ナイ 補語：存在するもの→X が 存在の場所、位置→Y ニ（準必須補語）（注）X が人、動物であれば述語はイル、イナイ、それ以外であれば述語はアル、ナイ」という箇所である。「存在の場所、位置」を表す「～に」は「準必須補語」とある。しかし、「～に」は（108）においては「必須補語」であるため「～に」を削除すると、次のようにおかしい文となる。

（108）’ #あたしはいるんでしょうか。

さらに、寺村（同）の言う X は以下の通り「人」でありながら、「ある」も述語になりうる。

（108）” あたしは今そんな事を想像しなければならない地位にあるんでしょうか。

しかも、こういった例は少ない。

（109）日本の知識ある若い婦人として代表的な立場にいるとすべきであろう。（結婚）

（110）先生というよりも、おあいてのような関係にいるのね（道標）

（111）自分は、今より大変楽な身分にいる若旦那であった。（明暗）

²⁵¹ さらに、高橋・屋久（同）p18に「ある」の基本的な使い方は「Ⅰものが空間にある」であり、この場合「ある」は「空間との結びつきが非常に強い」と述べている。さらに、「この空間が抽象化されて「範囲」を示すようになると、「ある」の「範囲」との結びつきは弱まってくる」とし、「Ⅱ範囲にものがある」との語順になる傾向がⅠよりも強くなるとしている。先ほどの例で考えてみると、「太郎」は「もの」でない点でこの説明におさまらない。さらに、「地位」は「空間」ではなくこの用語で言えばどちらかと言うと「範囲」にあたる。ところが、Ⅱはあくまでも「抽象的なもの」の存在を表すという点で異なる。したがって、このような「いる／ある」については先行研究で述べられていない。

²⁵² 鈴木（1998）にも一例だけ次のような例を載せている。「今まで我輩がいくらか原ノロの位置にあったが（例 48）」これは、人称代名詞がガ格に立つ場合は「いる」が使われるのが普通である、という主張の「非常にまれ」な例外として取り上げている。

(112) 私たちは罪を作らずにはいられないような状態にいる。(哲学)

(113) 自分がある「高さ」にいるということにさえ(愛撫)

「有情物が～にいる」の構文を作り、二格名詞句は存在主体の位置であり必須補語である。さらにその二格名詞は修飾語句を伴う。また、有情物主語でも「ある」との言い換えが可能で意味的な変化が伴わない。このような例は、人がある抽象的な位置に存在し、「その抽象的な位置を主体が属性として有する、またはその抽象的な位置に主体が一時的状態として存在すること」を表すものである。これを新たに、有情物の存在を表す「ある」の用法の一つとして加えたい。これは両者に重複する用法である。

一方、「無情物が～にある」の用法も同じように考えられるが、こちらは「いる」との置き換えはできず「ある」単独の用法である。

(114) 会社はリーダーシップを発揮しなければならない立場にある。

これは、構文上は異なるが「彼は人気がある」「彼に恨みがある」のような「～(に)は～がある」に見られた形容詞的な用法と類似のものである。しかし、決して二格とガ格は言い換えることはできない(太郎が高い地位にある→??高い地位が太郎にある、彼に人気がある→*彼が全国民に愛されるほどの人気にある)。存在の実質的意味は、「太郎が高い地位にある」では二格名詞句にあり、「太郎には人気がある」ではガ格名詞句にあるからである。

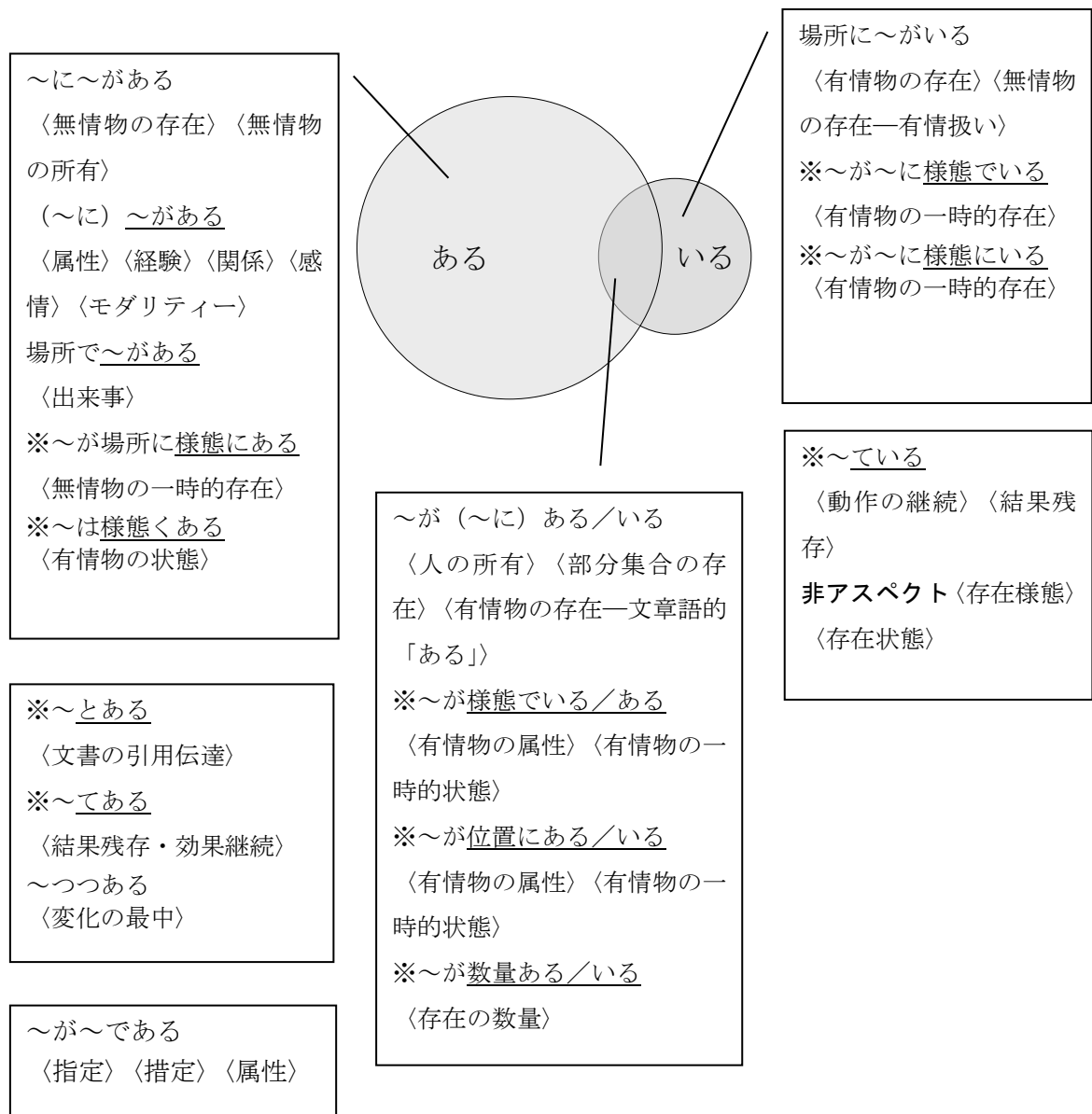
6.2.13. まとめ

「ある」は無情物の存在を「いる」は有情物の存在を表す。この基本的な違いが両者にはあり、「ある」はそのガ格名詞である無情物のバリエーションの広さにより、「いる」よりも多様な意味・用法を持つ。そのため、本節で取り上げた「いる」にしかない用法は珍しいものと言え、それは有情物の「一時的状態」を示すものであった。また「一時的状態」あるいは「属性」を示すものとして「～でいる／である」が見られたが、ほぼ同じ意味として解釈できるものの「～でいる」の方がいくらか存在のニュアンスが効いている。それは、「である」は既に「だ」の存在によってその文法化を遂げているせいでもある。

また、「～がある／いる」に焦点が当たってきたためにこれまであまり述べられることのなかった、引用や数量表現についても考察した。さらに、補助動詞の「てある／ている」も再度、存在という意味から問い直した。その中で見えてきた興味深い点は、存在と状態と属性のつながり、品詞で言えば名詞概念から形容詞概念の連続性である。また、存在場所を表さない二格を持つ「～が～にいる」についても指摘した。

以上の考察を図3によって示すことにする。下線は一続きである(つながりが強い)ことを表す。※の箇所が本節で特に論じた点である。

図3. 「いる」と「ある」の意味・用法



第3節「～が数量詞ある」文の考察—ガ格名詞と数量詞の省略を中心に—

6.3.1. 問題の所在

存在を表す動詞「ある」の用法の一つに、数量を表す名詞（数量詞²⁵³）が共起するものがある。数量詞浮遊現象として知られる通り、数量詞は名詞でありながら文中で副詞の位置に

²⁵³ 数量詞は、数詞（1、2、3…）に助数詞（本、冊、枚…）が加わったもの、あるいは数詞のみのものとする。

立ったり（例、鉛筆が1本ある）、形容詞の位置に立ったりする（例、1本の鉛筆を買う）。本節では特に数量詞が副詞の位置に立つ場合、つまり、「～が＋数量詞＋ある」という文に注目して考察する。

一見すると単純な構造しか持たないように見えるが、例えば「机の上に本が3冊ある」と「この道路は幅が10メートルある」と「兄はIQが200ある」では、数量詞の必然性が異なる。「机の上に本がある」のように数量詞を無くしても文として不自然さが無いもの、「#この道路は幅がある」のように数量詞がないことで特別な意味（幅が広い）を持つもの、そして、「*兄はIQがある」のように数量詞が無いと文が成立しないものとが見られるのである。これらの違いは何によるものなのだろうか。さらに、「試験終了まで時間が1時間ある」は「#試験終了まで時間がある」「試験終了まで1時間ある」のように、ガ格名詞あるいは数量詞のどちらかが省略可能である。それはなぜか。そして、「A氏には金がある」が「金持ち」を表わすのはなぜか、またどのような場合なのか。以上のような様々な課題が考えられる。

そこで、本節では「数量詞ある」と共起する格と名詞の種類、ガ格名詞と数量詞の関係、数量詞が無い「ある」文について、考察していく。そして、存在、所有、属性を表わす動詞「ある」の特徴を数量詞との関係から明らかにしたい。

6.3.2. 「数量詞ある」文の格構造

数量詞が副詞的位置に立つ場合と限定した上で、名詞がどのような格助詞を伴って「ある」を動詞に持つ文として実現するかについて確認する。以下では、共起する格助詞をあげ、そしてそれらを用いた文型と文例をあげる。（ ）内は省略が可能であること、「～」は名詞、無格は数量詞を指す。主題化した「は」を用いた方が自然になる文が多いが、格助詞の記述のために多少の不自然さはあるがガ格をそのまま記載した。また、それぞれの詳細な分析は6.3.3.以降に譲るため、ここでは簡潔にその文型の特徴を記す。数量詞に点線を、ガ格名詞に実線を付す。

二格、ガ格、（無格） 「～に～が（～）ある。」

(1) 机の上に本が (3冊) がある。

(2) 先輩に車が (3台) がある。

これは、存在や所有を表わす文で、数量詞はガ格名詞を詳しく説明する要素のため省略が可能である。

二格、ガ格、無格 「～に～が～ある。」

(3) 私に視力が 2.0 がある。

(4) 兄に IQが 200 がある。

これは、属性を表わす文で、数量詞はガ格名詞の実質的な内容を表わすため省略することはできない。

二格、（ガ格）、無格 「～に（～が）～ある。」

(5) 財布の中に (お金が) 1万円 がある。

(6) 伯母に (お金が) 1億円 がある。

(7) 試験前に(時間が) 15分ある。

これは、存在や所有を表わす文で、数量詞はガ格名詞と関連性が強く、数量詞だけで意味を十分に示せるためにガ格名詞が省略できる。

カラ格、マデ格、(ガ格)、無格 「～から～まで (～が) ～ある。」

(8) 須磨から宝塚まで(距離が) 50キロある。

(9) 卒業まで(時間が) 3か月ある。

これも同様に、格助詞は異なるが、数量詞はガ格名詞やその他の格助詞と関連性が強く、数量詞だけで意味を十分に示せるためにガ格名詞が省略できる。

ニ格、ガ格 「～に～がある。」

(10) 叔父にお金がある。

(11) 太郎に身長がある。

これは、所有や属性を表わす文で、数量詞が無いことで特別な意味を持つものである。例えば、「金がある」は「金持ち」であること、「身長がある」は「背が高い」ことを示す。数量詞の省略ではなく、数量詞を立てない文である。

ガ格、無格 「～が～ある。」

(12) 私の視力が 2.0 がある。

(13) 横綱 (の体重) が 200 キロ がある。

これは、ニ格が省略されているのではなく、もともとニ格は必須ではない。つまり、存在の主体がどの程度で存在するかを表す言い方である。

以上を見てみると、「～に～が数量詞ある」を基本にしながら、数量詞が省略可能なものと必須のもの、ガ格名詞が省略可能なものと必須のもの、さらには、数量詞との関連性が高いのに数量詞が不要（省略可能ではなく）なものがあつた。

数量詞は品詞的には名詞にあたり、文の成分としては修飾要素である。数量を表わす修飾語句と「ある」ものにあたるガ格名詞との関係、「ある」ことの意味について考察していく。

6.3.3. ガ格名詞と数量詞との関係

動詞にとってガ格は言うまでもなく重要な要素である。主格を指すのがガ格であり、それは文の必須成分となる。ところが、「～が数量詞ある」文においてはそれが「無くてもいい」場合が見られるのである。なぜ、普通は無くてはならないガ格が「無くてもいいのか」、ここではガ格名詞と数量詞の関係に注目して考察していく。

6.3.3.1. 一対一関係にあるもの

数量詞は言うまでもなく、あるものの数量を表わすものであり、そのあるものの性質や特徴によって数量の単位が多様に展開される。例えば、お金なら「円」、時なら「時間」「分」「秒」、身長なら「センチメートル」、重さなら「キログラム」「グラム」などのような対応を見せる。ここでは、ガ格名詞と数量詞が意味的に一対一で対応するものを取り上げ、どちらが「ある」にとって必須成分となるのかを考察し、「ある」文の特徴を記述する。

6.3.3.1.1. 「お金」と「～円」

存在を表わす「ある」文は、「机の上に本が3冊ある」のように「～に～が～ある」の形をとる。そして、存在の主体であるガ格名詞は必須であり、数量詞はその存在主体の数量を提示することで具体的な説明をなす要素と考えることができた。ところが、以下の例ではその関係が違っている。

(5) a. 財布の中にお金が1万円ある。

「お金が」が必須であれば、これを文中から削除すると意味が成立しないはずである。しかし、以下のように、ガ格名詞を削除することが可能であり、寧ろ無い方が自然である。

(5) b. 財布の中に 1万円 がある。

さて、「1万円」は「お金」である。「お金」を省略しても「1万円」という数量詞によって、その存在の主体が「お金」であることは明らかである。この二者のどちらかを残すとすれば財布の中にお金が入っていることは当然であり、1万円はお金の具体物である。そのため、文の情報として残すべきは「1万円」の数量詞の方ということになる。したがって、(5)では必要なのは数量詞であり、その前提たる存在の主体（ガ格）は副次的なものである。つまり、ガ格名詞と数量詞が意味的に一対一の対応をなしているのである。それは、「?机の上に3冊ある」の「3冊」が様々な冊子体のものを想定できることとは異なるからである。「～冊」には「本」「辞書」「日記」「ノート」「手帳」「メモ帳」「漫画」「雑誌」「図録」「帳簿」などの可能性があるため、存在の主体を省略することはできない。

一方で、財布の中にお金があるのは当然であり、財布はそのためにある。二格名詞が「財布の中」であるためにガ格名詞の「お金」が不要になるという可能性もある。そこで、場所を表わす二格を「図鑑の間」に置き換えてみると以下ようになる。

(14) a. 図鑑の間にお金が1万円ある。

b. 図鑑の間に 1万円 がある。

このように二格名詞をお金と直接関係のないものに変えても、同様のことが可能である。

以上の考察の結果、ガ格名詞と数量詞の対応関係が一対一の場合には、必須なのはその具体的な数量を表す数量詞の方だということがわかる。つまり、ガ格と数量詞の関係性が意味的に強い場合、二格に関わらず、ガ格は省略可能で数量詞が必須となる。

では次に、二格名詞を場所ではなく、所有者に変えるとどうなるか²⁵⁴。

(15) a. 太郎はお金が{*100円/1億円} がある。

b. 太郎は {*100円/1億円} がある。

これらは所有を表わす文である。所有する金額が低い場合は、そもそも動詞「ある」を用いた文で表現することが難しい。しかし、存在を表わす文の方は(16)のように金額の高低でこのような違いはない。

(16) 筆箱の中にお金が{100円/1万円} がある。

そして、どちらもガ格名詞は無い方が自然である。数量詞という側面から見れば、数量詞は名詞との関わりが強いために、関連があれば、主格のガ格名詞すら退けることがあると

²⁵⁴ すべて主題化した形の「には」または「は」で文例を表示する。主題化しないままだと不自然さが出るため。

言えよう。

ところで、ガ格名詞は無い方が自然だとしたが、そのお金が「どのようなお金であるか」が示された場合は、ガ格名詞はあった方が自然になる。それは、情報量が増えるためだと考えられる。

(17) 太郎は遺産が1億円ある。

(15) c.財布の中に預かったお金が1万円ある。

この場合は、どのようなお金かが示されているために、ガ格名詞句は通常省略されない。

6.3.3.1.2. 「時間」と「～分」²⁵⁵

次に、「時間」について考えてみたい。

(7) a.試験前に時間が15分ある。

b.試験前に 15分ある。

これらもガ格名詞が省略可能である。ガ格名詞の「時間」と数量詞の「～分」は一对一の対応を見せる。「～分」が時間を表わす単位であれば、当然その存在主体は「時間」ということになるために、具体的な内容である数量詞を残し、その主体の方は省略が可能となる。

(7) c.試験前に説明の時間が15分あった。

この場合は、どのような時間かが示されているために、ガ格名詞句は通常省略されない。以上は存在を表わす文であったが、文の意味が「所有」になるとどうであろうか。

(18) a. ?太郎は時間が1時間ある。

b. ?太郎は 1時間ある。

どちらも文の成立が危うい。そこで、修飾語句を付加し時間を限定すると以下のように「～に～が～ある」は成立するが、ガ格名詞句の省略は難しい。

(19) a.私には残された時間がまだ3年ある。

b. ?私にはまだ 3年ある。

このような、人が時間を所有するという意味の場合、修飾語句のあるガ格名詞が無いと文の理解が難しい。人が所有する時間がどのような時間なのかの説明が不足してしまうためだと考えられる。一方、「お金」と「～円」の場合は、「彼には残されたお金が1000万円ある」と「彼には1000万円ある」のように、ガ格名詞が無い文が情報量の不足と捉えられることはない。寧ろ、どのようなお金であれ、お金を所有する意味として解釈するだろう。しかし、時間の場合は「彼には3年ある」がどのような3年なのか、前後の文脈を探ってみたくないのである。

加えて、以下の例を見たい。

(9) a. ?卒業までに時間が3か月ある。

b.卒業までに 3か月ある。

「今から卒業までに時間が3か月ある」のようにガ格名詞を挿入することは不可能ではないが、この言い方は寧ろ不自然である。これは「財布に1万円ある」と同様で、存在の主体

²⁵⁵ 時間の量を表わす数量詞は「時間」「分(間)」「秒(間)」とあるが、それらは全て「時」の量を表わすものであり、その意味において一对一の対応を見せる。タイトルは代表として「～分」を使った。

(ガ格名詞) が明白な場合はそれを顕在化させないと言った方がいい。これらの例は、カラ格とマデ格、特にマデ格が必須(カラは話し手の現在地や現状が基点となることがあるため)であり、ガ格は用法上、必須ではない。

6.3.3.1.3. 「人」と「～人」

「1人」「2人」の「～人」²⁵⁶は「人数」を表わす数量詞であり、その意味では人とその数という一対一の対応をなす。ちなみに、存在主体が人である場合は「いる」が用いられるため、「ある」を動詞にとる文は所有の文しかない。以下の例を見てみる。

(20) a. 私には姉が 2人 ある。

b. *私には 2人 ある

(21) a. 彼は部下が 1人 あった。

b. *彼は 1人 あった。

この場合ガ格名詞は必須である。数えられる人には、「親族」「友人」「同僚」「仲間」などの可能性があるが、その可能性がお金や時間のように「いずれにせよ所有している」ことを表わすだけでは済まされないためである。これは「遺産が1億円ある」のように「お金」が具体性を持つ(つまり遺産)と、省略されにくくなるのと似ている。「人」がどのような人か具体性を持つと情報に価値が出るために、このように省略不可能となると考えられるのである。

このようにガ格名詞と数量詞が意味的に一対一で対応するものでも、お金、時間、人という順番で、ガ格名詞が省略可能であったり必須であったりすることがわかった。これは、動詞「ある」の特徴と言えるのではないかと考える。お金や人という具体物も、時間と言う抽象的概念も、広くその存在を表わし得るからである。普通の動詞ではガ格名詞が必須、あるいは稀に省略可能、のどちらか一方の現象が出るだけだと推察される。

6.3.3.2. 一対複数の関係にあるもの

ここでは、ガ格名詞と数量詞が一対一の対応関係にあるのではなく、一つの数量詞が複数の名詞に対応するものについて見ていく。

6.3.3.2.1. ガ格名詞が省略可能なもの—属性—

(22) a. この猫は体重が 5キロ ある。

b. この猫は 5キロ ある。

(23) a. 温泉は湯温が 43度 ある。

b. 温泉は 43度 ある。

「円」と言えば「お金」のような一対一の対応とは異なり、「キロ」は「重さ」と「距離」、「度」は「温度」と「角度」に対応する。そのため、一対一ではなく、「一対複数」となる。その場合、ガ格名詞の選択肢が多いために、それを省略すると意味が通じにくいということ

²⁵⁶ 「～人」の他に「～名」もあるが、代表して「～人」とした。

が考えられる。しかしながら、上記の例文でその選択が揺れることはない。bのようにガ格名詞は省略可能である。その選択が揺れることがないのは、二格名詞と数量詞の二つによって、ガ格名詞が限定・指定されるからである。「5 キロ」は体重と距離の単位であるが、二格名詞の「猫」によってそれが距離ではなく体重であることが限定される。また、「温泉」によって「43 度」は角度ではなく温度であることが決まる。そのため、ガ格名詞句の省略が可能になっている²⁵⁷。

(24) a. 太郎は身長が 180 センチある。

b. 太郎は 180 センチある。

「センチ」は「長さ」「幅」「厚み」「高さ」「身長」「胸囲」「胴囲」「座高」など様々な長さに対応するが、二格名詞の「太郎」と「180」という数値によって身長であると限定される。しかし省略可能とは、数量詞と二格名詞からガ格名詞が特定できる場合のことであり、特定できない場合はその限りではない。(24) c では、「太郎」と「90 センチ」からは何の長さかを特定できないためにガ格名詞は必要となる。

(24) c. ? 太郎は 90 センチある。

d. 太郎は胸囲が 90 センチある。

また、あるものを描写するときどの側面を捉えて述べるかについて、一般的な認知の仕方が決まっているということもあるようだ。

(25) 建物は 10 メートルある。

この場合、通常高さと捉え、幅だとは考えない。

(26) 道路は 10 メートルある。

この場合も道路の長さは普通これ以上(キロメートル)であり、幅以外にないという判断ができるため、ガ格名詞は省略可能である。

このようにガ格名詞が不在でも文が成立するのは、属性を表わす文である。なぜ属性を表わす場合にそれが可能なのか。

「ある」を動詞に持つ文において、属性の持ち主は二格で示される。そして、二格名詞の持つ性質や特徴の、ある観点がガ格名詞で示され、その具体的な数値が数量詞である。したがって、この三つの名詞は関係性が強い。意味的に強い関係性を持ちながら、一つの文の中に存在していると言える。その強い意味的な関係性があるために、そのいずれかの省略が可能となると考えられるのである。したがって、二格名詞の一般的な状態を想定し、それに合った数値を捉えることができるのであれば、ガ格名詞は省略可能ということになる。

6.3.3.2.2. ガ格名詞が必須なもの—存在、所有、属性の一部—

存在と所有の文でも数量詞とガ格名詞が一对複数のものは当然見られる。ガ格名詞が無くてもいい文は前項の通り「属性」を表す文であったが、存在と所有の文は以下の例に見るようにガ格名詞は必須である。ガ格名詞の情報が数量詞によって限定されないためである。

²⁵⁷ 「須磨から宝塚まで 50 キロある。」も「～カラ～マデ (～ガ) 数量詞ある」の形だが、同様である。

(1) ' ?机の上に 3冊 ある。

(2) ' ?先輩は 3台 ある。

次に、属性を表わす文²⁵⁸であってもガ格名詞の不在が許容されない文が見られる。

(3) a.私は視力が2.0 ある。

b.*私は 2.0 ある。

(4) a.兄は IQが200 ある。

b.*兄は 200 ある。

いずれもガ格名詞が無いと意味が不十分である。数量詞が単位を表わす助数詞がなく数詞しか示されていないために、何の数値か（対応するガ格名詞が何か）ということが他の数量詞よりもわかりづらいからだと考えられる。そのため、「兄は 200 ある」と言われたら即「何が？」と問いたくなる。数量詞と二格名詞からガ格名詞が推測できない場合には、ガ格名詞は必須となる。

6.3.4. 数量詞が無い「ある」文

以上、ガ格名詞の必要性について考察してきたが、ここで数量詞に目を転じ、数量詞の必要性について考えてみたい。「ある」文の数量詞を削除した例を以下にあげる。

(1) c.机の上に本がある。

(2) c.先輩は車がある。

(3) c. ?私は視力がある。

(4) c. ?兄は IQ がある。

数量詞が無いと文が成立しない（しにくい）のは (3) (4) のような属性を表わす文である。ある人に「視力」や「IQ」があることは多くの場合に当てはまり、「誰にでもあるもの」と通常考えられている。とすれば、「いくつあるか」が伝える価値のある情報ということになる。一方で、存在 (1) や所有 (2) の文は、数量詞はより詳しく説明するための情報で、無くてはならないものではない。このように同じ「ある」文でも、数量詞の情報価値が異なることがわかる。

ところが、同じように「通常ある」と考えられているものにも関わらず、以下のように数量詞が無くてもしっかり見られるのである。

(10) 叔父にはお金がある。

(11) 太郎は身長がある。

これらの例は、「数量詞が無くてもしっかり」のではなく、実際は「数量詞が無いことに意味が

²⁵⁸ 存在と所有と属性の区分を明確に線引きすることは難しいが、属性は「ある人、動物や物の特徴や性質を表わす」ものと定義し、広義には所有に入ると考えられる。所有は「ある人や動物が何かを有している」こと、存在は基本的に「ある場所にあるものがある」ことと考えている。「男の背中にほくろが3つあった」の「ほくろがある」ことは男の特徴であると考えれば属性を表わすものと考えられなくはないが、しかし、「男の背中に」という場所を明示する二格があることから、この文は存在を表わすものと考えられる。一方、「祖父は顔にこぶが1つある」は「祖父の顔に」の「祖父」が主題化した文であり、祖父がどのような人かを表現した属性の文と考える。そうすると、これも属性となるが、本文中の属性の文との違いは、ガ格名詞が「身長、体重、幅、高さ、湯温…」のような何かの「量」を示す名詞の場合は属性をもつばら表し、ガ格名詞の省略が可能ということである。

ある」ものである。「机の上に本がある」は本の存在を示すだけだが、(10)は単にお金の所有を表わすだけでなく「お金持ち」であることを意味している。また、(11)は「背が高い」ことを表わす。したがって、単に具体的数量が無い文というわけではない。数量詞が無いことで、特別な意味を表わすのである。

このことについて、角田太作(2009)は「日本語の所有の動詞」の「ある」が「『普通のXよりも』の意味」＝「特別な意味」を持つ場合があるとし、それは「修飾要素が無い」²⁵⁹場合で、かつ、ガ格名詞が「身体部分」「属性」「その他の所有物」である場合だと指摘している。さらに、そのガ格名詞は「普通、誰にでもあるもの」＝「普通所有物」であると説明した。つまり、(10)は「普通の人よりも」お金があることを表わす例である。この指摘は、大変興味深く新たな視点を与えてくれるものである。ここでは、修飾語句を数量詞に限定して、さらに考察してみたい²⁶⁰。

6.3.4.1. ガ格名詞—誰にでもどれにでもあるもの—

このような、修飾語句を伴わずに使われ特別な意味を表わす「ある」文のガ格名詞を、角田(2009)は「普通、誰にでもあるもの」と規定した。しかし、「ある」は様々なものの存在を表わし得るため、「誰にでも」という「人」に限らず、「どれにでも」「何にでも」という「物」の例も存在する。以下の例である。

(27) あべのハルカスは高さがある。

(28) この近くの道路は幅があるので、横断するとき気を付けなければならない。

(29) 金塊は重さがあった。運ぶことは困難だった。

(30) 休憩室は広さがある。たくさんの人が入れる。

(31) うちの犬は体重がある。マンション内で歩かせずに抱っこで運ぶのは厳しい。

これらはガ格名詞の存在を表わしているのではなく、「あべのハルカスが高い建物であること」「道路の道幅が広いこと」「金塊が重いこと」「休憩室が広いこと」「犬が重いこと」という意味を表わす例である。このようにガ格名詞は人間に限らず、人間以外の生物や物までである。そして、それらの意味特徴は、ハで取り立てられた人や物や生き物にとっては、「普通、あるもの」である。その意味で、角田(2009)の言う「普通所有物」に該当する。しかし、厳密に言えば「普通、誰にでもあるもの(角田2009:p158)」ではなく、「普通、誰にでも、どれにでも、何にでもあるもの」である。まず、数量詞の共起しない「ある」文のガ格名詞はこのような特徴を持つことがわかる。

6.3.4.2. 「特別な意味」の意味

「特別な意味」について、角田(2009)では「『普通のXよりも』の意味を持つ(同:p152)」あるいは「普通所有物の場合、修飾要素が無いと、特別な意味(『普通よりも』)」

²⁵⁹ 数量詞も修飾語句であるため、数量詞が無いことは修飾語句が無いことに通じる。しかし、数量詞は修飾語句の一部であって、全部ではない。本稿では数量詞に限定して考察するが、その結果はある程度まで広く、修飾語句の無い「ある」文の特別な意味の解明に資すると考えている。

²⁶⁰ 「普通所有物」でも「兄はIQがある」「私は視力がある」など特別な意味を持たないだけでなく、文自体が成立しにくいものもある。特別な意味を持つ例に限って考察する。

になる（同：p163）」と述べ、「特別な意味」を「普通よりも」と規定している。

ここでは、数量詞の無い「ある」文が持つ「特別な意味」について詳しく考察する。

6.3.4.2.1. 普通よりも程度が大きいこと

「太郎は身長がある」「花子は体重がある」は角田（2009）の言う「普通よりも」の意味を持つものであるが、特に「普通よりもその程度が大きいこと」を表わすと明示したい。

普通より程度が大きいことは、つまり、に身長なら高いこと、体重なら重いことを表わすため、程度は大と言える。

6.3.4.2.2. 思ったよりも程度が大きいこと

「普通よりも」という基準ではなく、「思ったよりも」程度が大きかったという意味があると考えられる。

(32) 横に立ってみると、三郎は身長があった²⁶¹。

実際の三郎の身長が 165 センチで普通の成人男性として高くはなかったとしても、例えば座っている姿から想定していたのが 155 センチだった場合など、それが思ったよりも大きいのであれば、「身長がある」を使って表わすことができる。つまり、「普通より」よりも低い基準でも構わないことになる。

(33) 骨太なのか、裕子は体重がある。

同様に、裕子の体重は普通よりも重いという解釈ではなく、たとえ裕子が 46 キロで成人女性の平均体重より軽かった（つまり、普通よりも軽い）としても、それが想定していたよりも重かったならば、このように表現することが可能である。例えば、見た目はとても細くて 40 キロ程度しかないと思っていたのに、実際に抱きかかえてみたらそれなりに体重を感じた場合などである。

したがって、思ったよりも程度が大きいというのは、実際の程度は小さくても大きくても構わないのである。

6.3.4.2.3. 他と比べて程度が大きいこと

(34) 若者には時間がある。

(35) 定年後の人生には時間がある。

例えば、時間の長さも相対的なものであるため、基準によってその長さも変わる。「若者には時間がある」は多義的である。例えば「高齢者」に比べれば、残された人生の時間という意味で、時間が多くある。あるいは、「中年」の仕事や子育てを抱える年代と比べれば、使える日常的な時間が多くあるという意味にも解釈できる。いずれも「普通より」という比較とは言えない。そして、「定年後の人生」は「定年していない現役」に比べて、あるいは「人生の様々な区分のどれに比べても」その程度が大きいという解釈ができる。何か他と比

²⁶¹ この例に「思ったより」を挿入したものは修飾語句の「有る」場合ということになる。あくまでも一文の中に修飾語句が現れない場合に限定して考察している。すべて同様である。

べて程度が大きいことを表わしている。したがって、この特別な意味も実際はその時間が数時間、数年だったとしても成立可能である。

6.3.4.2.4. 「何を差し置いても」という強調の意味

(36) 俺達には金がある。

この文はもちろん「大金がある」「金持ちである」という解釈もある。また、文脈によっては、先に述べたような「思ったよりも」「誰かよりも」お金を多く持っていることを表わすことも可能である。しかし、これ以外にも特別な意味があると考えられる。それが「何を差し置いても」という意味である。例えば、「俺達には何を差し置いても『金』という頼るべきものがある」という意味を表わすと解釈可能である。それは数量の多少に関わらず、所有物や属性の存在を強調するのである。

しかも、これは特別な意味を表わすとされる「普通所有物」の場合だけではない。

(37) 俺達には船がある。島から脱出することも可能だ。

(38) 俺達には辞書がある。今度のテストは持ち込み可だからいけるよ。

「船」や「辞書」は、角田（2009）の「普通、誰にでもあるもの」ではないため、「非普通所有物」とされているものである。非普通所有物の「ある」文は「特別な意味」を持たないとされている。確かに、この文は「普通より」船が多いことや船が良いこと等の意味はない。同様に、辞書が普通より特別だったり多かったりすることを表わしてはいない。しかし、自分たちには何を差し置いても「船」という重要な価値ある特別なものがあること、あるいは、自分たちには何を差し置いても「辞書」という強い味方があること、を表わしている。その意味で特別な意味なのである。したがって、これも以下のように単に数量詞の省略あるいは数量詞の挿入を許すような通常の用法ではない。

(37) '俺たちには船が1隻ある。島から脱出することも可能だ。

(38) '俺達には辞書が1冊ある。今度のテストは持ち込み可だからいけるよ。

このような数量詞がある文とは意味が明らかに異なっている。つまり、「どのくらい」という数量の問題とはかけ離れており、「ある」の主体を強調し、「あるものがある」ことを述べる文なのである。

そして、このことが実は「普通より」という特別な意味を導き出したのではないかと考えるのである。「あるものがある」と強調されるためには、「ある」と強調されるものが「ある」と主張するに足る十分な量が認められなければならない。そう認められるものの方が、存在感を持つ。とすれば、「あるものがある」と言えるものは、「普通より」程度の大きいものの方がその存在を強調するにふさわしいということになる。つまり、「あるもの」の強調は「何を差し置いても」という意味として実現され、そのことが他の何かを基準にして「それよりも」という特別な意味を出現させた理由だと考えられるのである。

6.3.4.3. ガ格名詞—実例検索—

このような特別な意味を表わす「ある」文のガ格名詞は、「普通、誰にでもどれにでもある」ものという意味特徴を持つが、そのような名詞が全て特別な意味を表わすわけではない。

角田 (2009) では、それを「身体部分」「属性」「その他の名詞」と限定している。ここでは、このようなガ格名詞には具体的に何があるのか明らかにすべく、『書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) を用いて検索を行った²⁶²。書き言葉のコーパスを用いることで、話し言葉で「言え言える」というレベルのものをひとまず別にし、より規範的なレベルでの用法を探ることができる。(39)～(40) と (42)～(46) a と注にある例は BCCWJ からの実例である。

6.3.4.3.1. 身体部分—腕—

身体部分を表わす名詞を検索した結果、1 億 430 万語のうち「腕がある」3 件、「頭がある」1 件が見つかった。実例は 1 件のみ示す。

(39) あとからきたくせに、なま意気な。腕があるなら、赤糸で、白の下着をしあげてごらん、おまえなんかにできはしないだろう。(路傍の石)

(40) 彼らを封じこむには、井沢が最も適任であると判断した。井沢には、モロッコの辰のように喧嘩の強さだけでなく、頭があった。(修羅の群れ)

また、数量詞という観点で見ると、この「腕」は 1 本、2 本と数えられるようなものではない。

(41) a. 鈴木シェフは腕がある。

b. *鈴木シェフは腕が 2 本ある。

c. *鈴木さんは料理の腕が 2 本ある。

したがって、この普通所有物である「腕」は「腕がある」で慣用句を成しており、これ以外には身体部分を用いて特別な意味を表わすものはないと考える²⁶³。

その他の身体部分で可能性のあるもの「手、口、脚、顔」を検索した結果は、いずれも実例無しだった。特別な意味を表わすものではない例は以下のように、「当然あるべきものがある」「普通ないものにそれがある」の意味で用いられている。

(42) だけど、蛇は思ってるの。足があるほうがいい。足があるほうが幸せだって。(宮部みゆきが読まれる理由)

(43) われわれは目がある以上、物は目で見えるわけであり、耳がある以上、必ずものを耳で聞くわけであります。(禅と建築・庭園)

このように「目がある」「耳がある」「口がある」「顔がある」「脚がある」などは修飾語句無しでは不可能である²⁶⁴。

6.3.4.3.2. その他の名詞—金、時間—

次に「その他の名詞」としては、「金」の他に「時間」がガ格名詞として挙げられるが、これ以外には単独使用で特別な意味を表わすものはやはり無いようだ。

²⁶² 「～がある」の形で検索しヒットしない場合だけ「～があって (た)」を検索した。修飾語句の無い例文だけを収集した。

²⁶³ 「頭がある」は実例にはあったが辞書には無い。

²⁶⁴ 角田 (2009) ではラジオなどの例を引いて「可能」としているが、話し言葉はかなり文脈に依存して発話するためにどのような身体部分であるかが前後の文脈に現れる。また、多少奇異な表現でも使用えるということもある。ここでは、より規範的なレベルでの判断をした。

- (44) 食事は近くの食堂を利用し、金があるときはレストラン『ソレイユ』にスパゲッティとかハンバーグを食べに行く。（あなたを忘れきれない男たち）
- (45) 第1は、留守中や忙しいときの番組を録画して、時間があるときに見るという使い方である。（「超」整理法）

6.3.4.3.3. 量

残りの「属性」を表わす名詞について見ていくが、本節では数量詞との関係を見ていく。そのため数量詞という修飾語句に限定するならば、それは「量の概念を表わすもの」である。実際にこれが最も多い。そこで、この特別な意味を表わす「ある」文のガ格名詞を全て収集することを目標に、まず『分類語彙表』の「量」を表わす「体の類」から該当すると思われるものを全て抜き出した。そして、その抜き出した「量」を表わす名詞をガ格にとる「ある」文を BCCWJ で検索した。その結果が以下である。例文は多いため本節末尾に1例ずつ掲載した。

特別な意味を表わす「～がある」文の実例が見られたもの

身長、丈、上背、背、草丈、重さ、体重、重量、量²⁶⁵、数、品数、件数、高さ、標高、距離、間隔、幅、横幅、葉幅、肩幅、胸囲、深さ、水深、角度、面積、厚み、体積、年齢差、点差、得点差

実例が見られなかったもの

背丈、ウエート、容量、含有量、排水量、排気量、降水量、雨量、湯量、肺活量、生産量、収穫量、水揚げ量、潮位、海拔、道のり、胴回り、腰回り、バスト、ヒップ、刃渡り、水位、水温、室温、気温、地温、震度、血压、緯度、圧力、水压、気圧、風圧、密度、湿度、速度、建坪、広さ、太さ、厚さ、直径、差、時差、高度差、温度差、打率、確率、防御率、視聴率、支持率、失業率

以上、数量詞の無い「ある」文が程度の大きいことを表わすものについて考察してきた。ガ格名詞は「普通、誰にでもどれにでもあるもの」であり、実例には「量の概念を表わすもの」にほぼ限定されることがわかった。また、特別な意味は「ある基準よりも程度が大きいこと」あるいは「何を差し置いても」という意味であることが明らかになった。

6.3.5. まとめ

以上、「ある」を動詞に持ち、数量詞を副詞的位置に立てる文について考察した。数量詞は、普通の名詞とは異なり、名詞でありながら別の名詞の数量を示すという特殊な役割を担うため、他の名詞との意味的な関係性が強い。そのことをガ格名詞と数量詞の意味的対応か

²⁶⁵ 「交通量がある」、「運動量がある」も特別な意味の使用例が多く見つかったが、本節では、数量詞が共起する場合に限定しているため、その量が数量詞で示されうるもの以外は本文には取り上げなかった。

ら、一対一の対応関係にあるものと、一対複数の対応関係にあるものとに分け考察した。その結果、ガ格名詞という重要な役割を持つ要素が省略可能、あるいは寧ろ無い方が自然であるという例まであった。つまり、一対一の対応を持つもの、二格名詞と数量詞の意味関係からガ格名詞が推測できるものがそれに該当した。

また、数量詞の無い「ある」文は、「普通よりも、思ったよりも、他と比べて、程度が大きいこと」、「何を差し置いても」という「特別な意味」を表わす。この特別な意味は「あるものがある」ということの強調から生まれるものと考えた。さらに、このような特別な意味を持つ文のガ格名詞は「量の概念」を表わす名詞にほぼ限定されていることが、コーパス検索から明らかになった。

このような現象を可能にしているのは「ある」自身の特性による。「ある」は存在という普遍的で核心的な意味を示すために、ありとあらゆるものの存在、つまり「アルこと」を示し得る。実に、具象物から動作・行為、そして抽象的な概念まで広がっているのである。

本節では、数量詞そのものの考察が十分だったとは言えない。数量詞自体の機能や役割についても深めながら、存在を表わす「ある」について考察することが課題としてある。

BCCWJからの実例

身長があるので見た目は全然太ってはいません。(Yahoo!知恵袋、2005) / 一方の死体と比べると心持ち丈があるようにも思える。(闇の鳩毒、庄司圭太|著、集英社、2001) / 上背がある男だから、適当にLLサイズの甚平を選んで渡した。(お見舞い道楽、高山宗東|著、ワールドフォトプレス 2004) / 年を考えると大人っぽいかもかもしれませんが、背があるのでファッションに興味があるようなら、ぜひ。(Yahoo!知恵袋、2005) / 草丈があるこの花の足元には、ニチニチソウのつややかな濃い緑の葉や、ペゴニアの多肉質の葉を添えて、安定感を持たせるといいでしょう。(季節の草花多年草・球根、小黒晃|監修、学習研究社 2005) / 私はマッスルトレーナーといって靴に重さがあるものを履いていきました。(Yahoo!ブログ 2008) / 大人は体重があるのでぬかって歩けない。(確かな読みを拓く課題解決学習の新視点、中西信行|編著、明治図書出版 2002) / タイルの材料は重量があるので、足場等の積載荷重を確認し仮置きする。(建築工事安全施工技術指針・同解説、国土交通省大臣官房官庁営繕部建築課営繕技術管理室|監修;公共建築協会|編、公共建築協会;大成出版社 2003) / 高価でしかも量があるので、日本ではホテルのパーティー用に特注されたものがほとんど。(ハム・ベーコン台所工房、若林仏蘭|著、雄鶏社 1997) / 子供は汚す頻度も成長も早いので高いもの買うより、安くても数があるほうが清潔感がありきれいです。(Yahoo!知恵袋 2005) / 品数があるのはy a h o o (有料) 以外に、ビッターズ・楽天フリマでしょう。これが大手のベスト3ですね。(Yahoo!知恵袋 2005) / 目の矯正手術をしたいのですがどこの病院がよいでしょう? 広告にあるものは件数があるけれど、それだけではね? 実際した方のアドバイスお願いします! (Yahoo!知恵袋 2005) / アルゼンチンは馬力があって高さがある。(予感、セルジオ越後・金子達仁|著、廣済堂出版 2002) / 標高がある分、花はまだのようだが、蕾は大きく膨らんでいた。(Yahoo!ブログ 2008) / さらに、坂道で距離があるが、潮風ラインとよばれる道路を進み、島根半島の東端にある美保関灯台にむかう。(松江・出雲散歩 24 コース、勝部昭|ほか著、山川出版社 2003) / (2) のように、記号と記号との間

に間隔があるときは、六十の束が 2 つと 1 が 3 つという意味で、百二十三を表す。(数学基礎、岡本和夫|ほか著、東京書籍株式会社 2006) / マンションの上層階に住んでいて、自転車を自室や部屋のある階に置かなきゃいけない場合、幅があるからエレベーターにのせるのが少し面倒。(アンドウ マサヒロ(著)、s a b r a、小学館 2005) / 屋外に作られた煉瓦造りの便所みたいにながっかりしてて、背が低いぶん横幅がある。(コーラムとセフィーの物語、マロリー・ブラックマン|作; 富永星|訳、ポプラ社 2004) / 大葉性の中垂葉。緑地で葉幅がある。(新しい春蘭、平野綏・朴相吉|著、八坂書房 1995) / 肩幅があつて、身のこなしに隙がないところはさすがに“八丁堀の旦那”と呼ばれる風格充分だが、両の眉毛がやさしく垂れ下がった、いたって柔和な面差しの男だ。(埴保己一推理帖、中津文彦|著、光文社 2002) / 手持ちの白いシャツを着てみたんですが、もともと胸囲があつて(胸板が厚いついていうか…) シャツが似合わないの、やっぱりちょっと変でした…。(Yahoo!知恵袋 2005) / 茶箱は深さがあるので、大きくなる植物(樹木)でも大丈夫です。(Yahoo!知恵袋 2005) / 海流(潮)の早い、又は水深がある魚場では具(道糸)がふけて船(魚群探知機)で狙ったポイントへ仕掛けが落ちない為に、道糸に重量をかけ、垂直に仕掛けを投下し、アタリを敏感に捉え獲物をゲットする。(Yahoo!知恵袋 2005) / 山の斜面によって、鎌と柄の角度が違うことを知っていますか? 角度があると刃先が土にささりにくくなるので、たいていは多少角度がついています。(遊ぶ! レジャー林業、羽鳥孝明|著、日本林業調査会 2001) / 前頭葉について面積があるのが側頭葉で、以下頭頂葉、後頭葉と続く。(脳の力なるほど事典、中原英臣|監修、実業之日本社 2002) / 通常のアルミケースとは違い、厚みがあるタイプ。(簡単手作りクッキー&ケーキ、村井りんご|著、西東社 2002) / 「あれー」伊良部が、時代劇の娘役みたいな声をあげてネットに落ちていく。しばらく毬のように跳ねていた。けれどギャラリーからは、どよめきと笑い声が起こった。体積があると、失敗しても絵になるのだ。(空中ブランコ、奥田英朗|著、文藝春秋 2004) / 年齢差があるお二人の関係は、このマンション内では、けっこう評判になっていたんですよ。(加賀友禅愛憎殺人、山村正夫|著、徳間書店 1993) / しかし、いくら点差があるとは言え、9 回裏、もっとスッキリ終われんのかねえ。(Yahoo!ブログ 2008) / あまり得点差があるようなら、組み分けを替えてみましょう。(生きがいつくり健康づくりの明老ゲーム集、豊田君夫・今井弘雄|著、黎明書房 1988)

第 4 節「名詞ある」について—「名詞がある」「名詞のある」との比較—

6.4.1. 問題の所在

「ある」「する」も様々な名詞と様々な格助詞を用いて文として成立するが、「する」は「名詞をする」という連語から「を」を脱落させ、「名詞する」という一語のサ変動詞を生み出すに至った。つまり、動詞句が動詞になったわけである。例えば「勉強をする」「調査をする」が「勉強する」「調査する」として用いられている。

一方「ある」は、「名詞がある」という連語を形成することは確かめられたが、「が」を脱落させ「名詞ある」という一語の動詞を出現させるには至っていない。例えば、「彼は人気

がある」は用いられても、「彼は人気ある」は用いられない²⁶⁶。しかし、動詞としては一語化していなくとも、名詞を修飾する要素として一語化している現象が見られる。例えば以下のような例である。

(1) 勇気ある行動が求められていた。

(2) 由緒ある家柄に生まれた。

このように「が」が脱落した形で名詞を修飾し、一語化して名詞を修飾している。一方で、以下のように「が」「の」が挿入される表現とそれが不自然なものがある。

(1) ' 勇気 {が／の} ある行動

(2) ' 由緒 {？が／の} ある家柄

そして、そもそも「名詞ある」の形がない例も多い。

(3) *人気あるアイドルを追っかけている。

(4) *深みある話に皆が感動した。

本節では、このような「名詞ある」という表現を取り上げ、どのような文法的な特徴があるのか、「が」「の」が残っている表現との違いは何か、どのような名詞がこの表現を作るのか、明らかにしたい。

「名詞ある」の先行研究については、管見のところ彭広陸（2002）しか見られない²⁶⁷。

以下では、まず「名詞ある」の文法的な特徴を分析し、そして、「が」「の」が残っている「名詞がある」「名詞のある」との相違を明らかにしていく。用例は基本的に辞書、小説、新聞²⁶⁸から用い、参考にインターネットでも検索を行った。ただし、インターネットの例はかなり特殊な例もあり、内省により自然だと判定したものを採用することにした。なお、出典のないものは作例である。

6.4.2. 「名詞ある」の文法的特徴

「名詞ある」は、名詞に「ある」が助詞の挿入なしに直接付加されている表現である。通常、名詞が動詞と共に用いられる際にはその名詞がどのような役割を果たすにしても、格助詞の存在は不可欠である。それにも関わらず、当該の表現にはそれがない。このような特殊な語結合が文法的にどのような特徴を示すのか、様々な角度から考察を行う。

6.4.2.1. テンス対立が無いこと

動詞で表わされる概念は基本的に時間軸に沿って展開される動作であるために、テンスやアスペクトを持つ。例えば、(5)のように名詞修飾節においてもテンスの分化やアスペクトを示す。

(5) 仕事で {使う／使った／使っている} 道具をきれいにする。

しかし、動作ではなく存在を表す「ある」は(6)のように、動作の過程がないために通常

²⁶⁶ 会話における助詞の脱落は発話の経済性に基づくものと考えられるため、この限りではない。

²⁶⁷ 他は、村木新次郎（2002）が「第三形容詞」という分類の中でこの存在を指摘しているのみである。

²⁶⁸ 毎日新聞データベースによる。

テンスはあってもアスペクトはない。

(6) 机の上に {ある／あった／*あっている} 本をもらった。

ところが、「名詞ある」は (7) (8) のように、アスペクトもテンスも見られないのである。

(7) 魅力 {ある／*あった／*あっている} 人物に出会う。

(8) 勇気 {ある／*あった／*あっている} 青年を求めている。

つまり、「名詞ある」は、彭広陸 (2002) でも指摘されるように、時間に関する文法的機能を担わず、動詞という特徴を削ぎ落としてしまっていると言えよう²⁶⁹。また、テンスを表すことがない点において、通常の述語用法を持つ動詞、形容詞、名詞述語 (名詞+だ) と異なることがわかる。

6.4.2.2. 結合度が強いこと

「名詞ある」は「名詞」+「ある」という二語なのか、あるいは「名詞ある」で一語なのだろうか。ここでは、「名詞」と「ある」との結びつきの強さを測るために、両者の間に別の要素を挿入してみる。挿入できればそれぞれが独立した単位として存在し、二語であると考えることができる。また、挿入できなければ両者は連語として強い結合を示し、一語であると考えることができよう。

まず、「ある」の用法でも具体物の存在を表し、その主体が「が」「の」でマークされる名詞修飾節について確認する。→は、語の挿入という操作を示す。

(9) 先日魅力ある人物に出会った。 →*魅力先日ある人物に出会った。

(10) 相手に誠意ある態度をとる。 →*誠意相手にある態度をとる。

(11) 家に妻子ある人 →*妻子家にある人

以上のように語の挿入を許さない。「名詞」と「ある」の間に「が」「の」がないこともあり、一層結合が強い。このような「名詞ある」は一語とみなすことができる。

6.4.2.3. 形容詞との類似性

6.4.2.3.1. 程度副詞の修飾

村木新次郎 (2012) で『『伝統ある』『魅力ある』という形式は (中略) 形容詞と見てよい可能性があります』と述べている。形容詞と見ていいかどうかについて、形容詞が持つ特徴の一つである「非常に」「もっと」などの程度副詞による修飾の可能性から検証してみたい。以下は、程度副詞を加えた文である。

(12) {もっと／非常に} 魅力ある政策を打ち出さなければいけない。

(13) {もっと／非常に} 勇気ある行動が求められている。

いずれも程度副詞の修飾を受けることができる。

一方、「たくさん」などの量を表す副詞は「*たくさん赤い実」で形容詞を修飾せず、「たくさん食べる人」のように動詞を修飾する。「名詞ある」が量を表す副詞の修飾を受けながら、「ある」が動詞の性質を示すと考えられるが、どうであろうか。以下は、量の副詞を加

²⁶⁹ 彭 (2002) では「『Nアル』が完全に用言らしさを失っている」と述べ、テンスの対立、副詞の修飾がないことを挙げている。

えた例である。

(12) ' *たくさん魅力ある人物

(13) ' *たくさん勇氣ある行動

いずれも量の副詞によって修飾されることがない。

以上、程度副詞による修飾が可能で、量副詞による修飾が不可能であることから、当該の表現が形容詞の特徴を持ち、動詞の特徴を持たないことがわかる。

6.4.2.3.2. 別の形容詞との言い換え

彭広陸 (2002) でも、「名詞 (φ／が／の) ある」を「形容詞に近い」とし、「～的な」という形容詞と言い換えが可能であることを指摘している。確かに「伝統ある行事」が「伝統的な行事」と、「魅力ある人物」が「魅力的な人物」と言い換え可能である。意味的に「～的な」というナ形容詞と同じであるということを意味している。

「～的な」は「～」に漢語や外来語を入れて量産できる形容詞の一つであるが、これ以外の形容詞とも言い換え可能か否かについて考えてみたい。以下のそれぞれを形容詞に言い換えると→以下の下線のようにになる。全く同じ名詞を用いて言い換えられるものと、意味的に類似した別の形容詞と言い換えられるものが見られたが、いずれも意味的に形容詞のような内容を意味していることがわかる。

(14) 活気ある町 → にぎやかな町

(15) 栄えある優勝 → 名誉な優勝

(16) 風情ある庭 → 風雅な庭

(17) 興味ある研究 → おもしろい研究

(18) 名誉ある地位 → 名誉な地位

(19) 善意あるメディア → 善良なメディア

(20) 誠意ある態度 → 誠実で正直な態度

(21) 勇氣ある行動 → 勇敢な行動

「～的な」との言い換えは、例えば「魅力ある」が「魅力的な」のように元々「魅力」という語がそのまま用いられている点で類義性が示されるのは当然としても、以上のように別の形容詞との言い換えが可能であることは、当該の表現が形容詞と類似していることをさらに明確に示すものと考えることができる。

6.4.2.3.3. 形容詞のテンス

形容詞との意味的な類似性が明らかになったが、さらに、形容詞との類似についてテンスの観点から見ていきたい。

テンスについて、形容詞は以下のような用いられ方をすることがある。

(22) 今年は {暑い／*暑かった} 日が続いた。

主文のテンスは過去であり、主語の示す「日」も過去のものを指し示している。しかし、それを修飾する形容詞は過去形「暑かった」では非文となる。形容詞は名詞にある特徴を付与するため、「どんな日か」という属性付けにおいて、「暑い日」であることを示すためである。

つまり、形容詞はテンスとは関わりのない、名詞の持つ本来の意味特徴を提示する用法を持つ²⁷⁰。

では、「名詞ある」の例を見てみる。

(23) 亡くなった伯父は{魅力ある／*魅力あった}人物だった。

「名詞ある」の例においても同様に主文のテンスの制約を受けない。つまり、伯父がどのような特徴を持つ人物かについて、主文のテンスに影響されることなくその本質を示している。したがって、「名詞ある」もまた、名詞の本来持つ意味特徴を提示する用法を持つわけである。

一方、過去形が出現する形容詞の例は以下のようなものである。

(24) あんなに {*暑い／暑かった} 夏も終わり、秋風を感じるようになった。

これは、時間的推移を表すために主文のテンスより以前を表している。ところが、この点においては「名詞ある」は、時間的推移を表す場合に用いられることはない。

(25) あんなに {*勇氣ある／*勇氣あった} 青年も年をとり覇気を失った。

このように「ある」「あった」どちらも非文となり、「あんなに」が示す過去の状態を表すことができない。テンスの分化として過去形がないだけでなく、過去の状態を表わす文脈で用いることができないということである。この点は形容詞とは異なる。そして、過去を示すためには、「が」「の」を挿入しなければならない。

(25) ' あんなに {*勇氣 {が／の} ある／勇氣 {が／の} あった} 青年も年をとり覇気を失った。

したがって、「名詞ある」は形容詞の示すテンス特徴のうち、「属性付け」の面のみを示すと考えることができる。

以上、6.4.2.3.では程度副詞の修飾が可能なこと、形容詞との言い換えが可能なこと、テンスの特徴の三点から、「名詞ある」が形容詞に非常に近似したものであることがわかった。

ただし、すべての「名詞ある」がこのような形容詞的な特徴を示すわけではない。例えば「妻子ある身」「十数本ある梅林」のような例は形容詞的な特徴を示さない。「*非常に妻子ある身」、「*非常に十数本ある梅林」のように程度副詞の修飾を受けず、また、「妻子ある≠家庭的な」、「十数本ある≠多い」のように他の形容詞と言い換えることはできない。この点は後に論ずる。

6.4.2.4. 連体詞との相違

さて、単語の中には、活用がなく、名詞の前に置かれその名詞を修飾する役割しか果たさないものが存在する。「あらゆる、ほんの、この、一介の、とんだ…」などがこれにあたり、連体詞と呼ばれてきた。「名詞ある」もまた名詞の前に置かれるが、連体詞と考えるべきか、あるいは先に見たように形容詞と考えるべきか、ここで考察を加える。

まず、連体詞は形容詞のように「—い」「—な」のような形態的な統一性を持たない。また、機能的には名詞を修飾するだけで、形容詞のような述語の用法を持っていない。

²⁷⁰ 動詞の場合は「今年は強い風が {吹く／吹いた} 日が多かった。」のようにどちらも可能である。

連体詞の中に形容詞的なものがあるか考えてみると、「小さな」「大きな」は名詞の前に置かれるという統語的特徴と活用を持たないという形態的特徴からは連体詞に入れるべきだが、その意味的特徴においては「小さい」「大きい」と同義であり形容詞である。このように形容詞に似たものも含まれている。一方、「名詞ある」は既に見たとおり、その多くが形容詞に意味的に似ている。しかし、形態的な特徴という点では「赤い」や「親切的な」が示すような活用体系を持たない。さらに、次の例のように、形容詞が持つ述語用法を基本的に持たない²⁷¹。

(26) *太郎は魅力ある。

(27) *次郎は勇氣ある。

村木新次郎（2000、2002）では、「—い」「—な」以外で形容詞の特徴を持つものを「第三形容詞」「ノ形容詞」と捉えている。第三形容詞は、名詞を修飾する規定用法と文末の述語に立つ述語用法を持つが、「名詞ある」は規定用法しかない。それゆえに、村木（2012）では「規定用法専用の形容詞」である可能性を指摘している。

村木（2012：150）を参考に、形容詞、連体詞、「名詞ある」の相違について考えたい。そこで、形容詞として「赤い」と「親切的な」、三形容詞として「真紅の」、連体詞として「とんだ」、「名詞ある」として「魅力ある」と「妻子ある」を例に比較する。

まず、「規定用法」とされる名詞修飾が可能かどうか例を見てみる。

(28) a.赤い花

(29) a.親切的な青年

(30) a.真紅のバラ

(31) a.とんだ災難

(32) a.魅力ある人物

(33) a.妻子ある男

いずれにも規定用法があり、名詞を修飾する規定語としての特徴をやはり持っている。

次に、形容詞が持つ述語としての用法「述語用法」を持つかどうか確認する。

(28) b.その花は赤い。

(29) b.その青年は親切的だ。

(30) b.そのバラは真紅だ。

(31) b.*その災難はとんだ。

(32) b.*その人物は魅力ある。

(33) b.*その男は妻子ある。

形容詞と第三形容詞が述語用法を持ち、連体詞と「名詞ある」には無い。

そして、連用修飾の形を取れるかどうか（『修飾用法』と呼ぶ）見てみる。

(28) c.花の絵を赤く塗る。

(29) c.青年が親切に道を教える。

²⁷¹ 実例に見られないわけではないが、いずれも不自然な例ばかりであり「が」が脱落した話し言葉的な感じがある。自然な例は、彭広陸（2002）にもあるように「～には一理ある。」「～には諸説ある。」しかないようである。

- (30) c.バラが真紅に染まる。
 (31) c.*事件がとんだで起こる。
 (32) c.*その人物が魅力あって振る舞う。
 (33) c.*男が妻子あって暮らす。

修飾用法もまた形容詞と第三形容詞があり、連体詞と「名詞ある」には無い。

また、形態的に統一した形を持つか（『体系性』と呼ぶ）を考えると、先にも述べたが、形容詞には「－い」の形を持つイ形容詞と「－な」の形を持つナ形容詞があり、これは体系性がある。また、第三形容詞は「－の」の形を持つ。そして、「名詞ある」はまさにこの形が統一的に見られるために、この両者もまた体系性がある。体系性がないのは、連体詞である。「とんだ」「一介の」「いわゆる」「ある」などさまざまである。

活用の有無を見てみたい。これまで言わば連体形と連用形、終止形を見てきたと言い換えてもいいが、その他の未然形、仮定形を確認する。形容詞は言うまでもなく活用体系を持つ。連体詞と「名詞ある」はこれまで見た通り、活用形で言えば連体形しかない。第三形容詞は「真紅じゃない」「真紅で」「真紅に」「真紅なら」のようにナ形容詞型の活用を持つと言える。

以上の点に、これまで見た程度副詞の修飾と形容詞一語との言い換えの二点を加え、結果を表 1 としてまとめる。有るまたは該当する場合に○を、無いまたは該当しない場合に×を付した。

表 1. 形容詞、連体詞、第三形容詞と「名詞ある」の比較

| | 規定用法 | 述語用法 | 修飾用法 | 活用 | 体系性 | 程度副詞 | 形容詞 |
|---------------------|------|------|------|----|-----|------|-----|
| イ形容詞 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| ナ形容詞 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 第三形容詞 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 名詞ある ²⁷² | ○ | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| 名詞ある ²⁷³ | ○ | × | × | × | ○ | × | × |
| 連体詞 | ○ | × | × | × | × | × | × |

以上まとめてみると、「名詞ある」は統語論的には述語用法がない点、形態論的には活用がない点で、形容詞の範疇には入りづらい。また、「魅力ある」の「魅力」は「魅力を探す」「魅力が出てくる」のように格助詞が後接でき、「人々を引き付ける魅力」のように連体修飾を受けることもできるため、紛れもなく名詞である。しかし、意味的な面を見ると、程度副詞による修飾や形容詞一語との言い換えが可能な点は、非常に形容詞に類似している。しかも、体系性という点で「名詞ある」はこの形態で生産性があり、「－い」「－な」のような体系性を持つ形容詞の一類として考えることも可能であろう。

一方、第三形容詞に入っている「真紅の」の「真紅」は格付与できず、名詞ではないと村

²⁷² こちらは「魅力ある」など、「名詞ある」では一般的で数の多いものを意味している。

²⁷³ こちらは「妻子ある」など、「名詞ある」では少数のものを意味している。

木新次郎（2000、2002）でも指摘されている。これらを鑑みると、「名詞ある」はちょうど連体詞と形容詞の中間に位置する語と考えられる²⁷⁴。「連体形容詞」とでも呼ぶべき存在である。連体形容詞を設定するなら、「小さな」「大きな」はこれに入るだろう。

6.4.2.5. 格助詞が無いことの意味—歴史的変遷

格助詞は、動詞に対する名詞の役割を規定するために、格助詞の付与されない名詞は通常、文においてありえない。ところが、「名詞ある」は当然あるはずの格助詞が存在しない。この統語論的な特徴によって、一語であるとの主張がより強められている。当然あるべき「が」「の」が無いことは何を意味するのであろうか。また、「名詞 {が／の} ある」の「が」「の」が脱落したものと捉えるべきであろうか。

野村剛史（1993）によると、上代における「の」「が」は「所有」「主格」の機能を持っていたとされる²⁷⁵。さらに、金水敏（2011）で、上代～平安時代は「主語を表示する基本的な格はゼロ格であり、連体形句など限定された埋め込み節に限って属格主語表示が認可される」とある。つまり、名詞を修飾する構造では、主語を表示する手段はゼロ格（無助詞）、「の」が存在し、後に「が」が出てきたということである。

すると、「 ϕ ²⁷⁶／が／の」の三つは古くから可能だったということになる。ところが、「が」が主文主格助詞として発展していく過程で、ゼロ格（無助詞）は消えていき、「現代共通語で『の』が主語を表示することができるのは、上代・平安時代以来の属格主語表示の化石的な名残である（金水 2011：96）」という事態に至ったようである。

すなわち、「名詞 { ϕ ／が／の} ある名詞」だったものが、「名詞 {が／の} ある名詞」に変化し、さらにこの「が」「の」が省略されることで「名詞ある名詞」が出現したと考えられる。そして、この助詞の省略が「名詞ある」の文法化を進めた可能性がある。そして、「化石」的な名残である「名詞の」がこの三者の中で最もよく使われる（彭広陸 2002）という矛盾した事態が、現在見られるのである。

したがって、「が」「の」は歴史的にはもともと「あって当然」という存在だったのではなく、古くは「なくて良かった」ものが、あることが求められるようになり、そして省略によって削られたということになるだろう。あるいは、なくても良かったという古い感覚は「名詞ある」の文体的特徴という形で復活したと考えることもできよう。この点については 6.4.4. で詳しく述べる。ここでは、このような可能性があることを指摘するにとどめたい。

6.4.3. 「名詞ある」における名詞の特徴

ここでは、「名詞ある」を成す名詞について実例を収集し、その特徴を探る。

²⁷⁴ 村木新次郎（2012）の第三形容詞の中には、述語用法を持たないものも入っている。例えば、「過小の資本」→「*資本が過小だ。」、「耐火の建築物」→「*建築物が耐火だ。」、「燃えさしのろうそく」→「*ろうそくが燃えさしだ。」。このようなものも第三形容詞に入れるならば「名詞ある」も第三形容詞に入れられていい。さらに連体詞も第三形容詞に入ることになるだろう。

²⁷⁵ 野村剛史（1993）「上代のノとガについて（下）」『国語国文』62-3、「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』12-11 など。本論では通時的に検証することは不可能であるため、先行研究の論及を引用するのみとした。

²⁷⁶ 無助詞であることを意味する記号である。

6.4.3.1. 抽象的な名詞

「名詞ある」を構成する名詞の特徴について、彭広陸（2002）が『夫』『妻子』を除いては全部抽象名詞である」と述べているとおり、基本的に抽象的な意味を表す名詞が来ることは本調査でも認められた。そして、その抽象性が「名詞ある」を形容詞的にしている要因でもある。実例で見られたものを以下、掲載する。（ ）は出典である。

興味ある意見、形ある劇の演技、統一ある観念（モーツァルト）、活気ある冒険、同情ある言葉、合理性と能率ある運営（人民）、教養ある人（偶像崇拜）、名誉ある軍人（山本五十六）、実行力ある政治家、一旦事ある場合（弟子）、魅力ある文章、特色ある著書（蘇我）、裕福な商人の自信ある微笑（裸の王様）、機会ある毎、価値あるもの（青春）、余裕ある私の学生々活（こころ）、フランスで最も権威ある写真賞（2014.11.12）、国内の歴史あるリゾートホテル（2014.11.12）、均衡ある発展（2014.11.12）

いずれも具体物ではなく抽象的な意味合いの名詞である。意味するところも「どのような被修飾語かということを表すものである。

6.4.3.2. 時を表す名詞

一例だけ次のような例文が見られた。「光秀のこんにちあるのは信長のその偏執的なまでの道具好みのおかげではある（国盗り物語）」このように、「こんにち」「現在」「今」という時を表す名詞と一体化して、「こんにちある」「現在ある」「今ある」を作る場合がある。この場合は、「こんにちあるのは～のおかげだ」というパターンが一般的で、「*こんにちある私」「*現在ある田中さん」のような普通名詞を修飾する形をとらない。

一方で、未来を示す「将来」「未来」は、「将来ある身」「未来ある子供たち」などのように名詞を修飾する形で用いられる。

しかし、同じ時名詞でも、過去はない。例えば「*過去ある女」「*昔ある人物」などのようにである。時名詞も抽象的な意味の名詞に入る。

6.4.3.3. 親族名詞

他には「妻子ある男性」のように「妻子」「妻」「夫」などの親族を表す名詞もある。親族の中では、ほぼ配偶者を指す「妻ある男」「夫ある身」か、あるいは子供を加えた「妻子ある人」かのどちらかしかない。親、兄弟、祖父母、甥姪は用いられない。これは抽象的な意味の名詞ではない。特殊な例と言える。

6.4.3.4. 数値・数量を表す名詞

抽象的な名詞以外では「数値・数量+ある」の表現が多く見られた。以下実例である。

幅十メートルはある広い通路、幅二十メートルは優にある堀（コンス）、幅二百メートル以上もある濁流、二尺ほどもある大きな蜥蜴（ビルマ）、数基ある墓石（冬の旅）、

俺の部屋の数ある道具（桜の木）、三里もある大山さままで（路傍）、何百枚もあるモーツァルトのレコード（錦繡）、十数本ある梅林（あすなろ）、高さが 1.9 メートルある大型の壕（2014.11.13）、市内に 29 ある防音校舎（2014.11.12）

以上のように、「幅、高さ、距離、数」などの語と共に用いられる。これらは以下のように「が」「の」を挿入することが不可能であり、また述語にも用いられるという特徴がある。

(34) *数基（が／の）ある墓石

(35) *1.9 メートル（が／の）ある大型の壕

(36) 梅林が数十本あった。

(37) 通路は幅十メートルあった。

大きさを比喩的に表現した例には、以下のようなものが見られた。これらは「名詞ほどもある」「名詞くらいある」という表現が固定的で、「名詞ある」では用いられないものである。

(38) 大の男の二の腕ほどもある太さの鉄の棒（コンス）→*二の腕ある太さ

(39) 掌ほどもある大きな燐のいろの塊り（ビルマの堅琴）→*掌ある塊り

さて、存在あるいは所有を表す文は連体修飾節として二つの形式をとることができる。文とそれから作られる連体修飾節をまとめると、以下のようになる。

（場所）に（物）が（数量）ある。→①（物）が（数量）ある（場所）

→②（場所）に（数量）ある（物）

(40) 家に車が2台ある。→①車が2台ある家、②家に2台ある車

実例を見てみる。下線のあるものが実例である。

(41) 村に墓石が数基ある。→①墓石が数基ある村、②村に数基ある墓石

(42) 市内に防音校舎が29ある。→①防音校舎が29ある市内、②市内に29 ある防音校舎

(43) 裏山に梅林が数十本ある。→①梅林が数十本ある裏山、②裏山に数十本ある梅林
同じ存在を表す文であるが、実例はいずれも②のパターンしか用いられていない。

以上のような「物がどのくらいあるか」を示す用法の他に、「物がどのくらいであるか」を示す用法もある。以下の例は、実例を文に直す形で提示する。

(44) 三里ある大山さま →ここから大山さままで3里ある。

(45) 高さが 1.9 メートルある大型の壕 →大型の壕は高さが1.9メートルある。

(46) 俺の部屋の数ある道具 →*俺の部屋に道具が数ある。

(47) 二尺ある大きな蜥蜴 →?大きな蜥蜴は二尺ある。

(48) 幅十メートルある通路 →?通路は幅十メートルある。通路は幅が十メートルある。

いずれも「（場所）に（物）が（数量）ある」のパターンではなく、「（場所）まで（数値）ある」「（物）は（（単位）が）（数値）ある」であり、物の存在ではなく、物が「どのくらいであるか」を表すものである。他に、「米は5キロある」「お湯は80度ある」「小説は200頁ある」など、いずれも主体がどのくらいであることを示す。さらに、「数ある」は文に戻す

ことができない。「たくさんある」ことを表し、量副詞のような意味を持っている。

以上、「数値ある」は物の存在が「どのくらいか」を表す通常の用法の他に、「どうであるか」を表す用法があることがわかった。「数値・数量ある」は述語用法があるため、「抽象名詞ある」とは異なる用法であり、形容詞的なものではない。しかし、「名詞ある」の形をとるためここで整理した。

6.4.4. 「名詞がある」「名詞のある」との比較

ここでは、「名詞がある」と「名詞のある」の特徴や「名詞ある」との違いについて考察する。

6.4.4.1. 語構成

まず、「名詞ある」は既に見たとおり一語化し、形容詞に類似していた。一方、「名詞のある」「名詞がある」は一語相当のものと、二語のものとが見られる。それを語の挿入によって確認する。

(49) 家 {が／の} ある故郷 →家 {が／の} 2 軒ある故郷

(50) 子どもに人気 {が／の} ある俳優 →??人気が子どもにある俳優
→*人気の子どもにある俳優

(49) は具体物の存在を示し、「家」と「ある」がそれぞれ独立した要素であるため「2 軒」という語の挿入も可能である。一方、(50) は見かけ上は二語であっても強い連語性を持っており、「子どもに」という語の挿入は不自然か不可能である。しかし、彭広陸 (2002) でも指摘するように、「名詞 {が／の} ある」は「名詞ある」の持たないテンスの分化を持つ。

(50) ' 子どもに人気 {が／の} あった俳優

そして、「名詞ある」の持たない述語用法を「名詞がある」は持つ。

(50) ” その俳優は子どもに人気がある。

その意味では、「名詞がある」の方を第三形容詞に入れるべきだと言えよう。

6.4.4.2. 「名詞がある」について

ここでは「名詞がある」の構造について考えてみたい。「勇氣がある男」の「勇氣」は構造的には連体修飾節の中にある主語である。しかし、その主語としての性質は他のものと同じなのだろうか。

(51) 花子が食べるおにぎり

(52) 太郎が賛成する第一案

(53) パソコンがある部屋

(54) 勇氣がある男

(51) の「花子」は「食べる」という動作の主体であり、連体修飾節中の述語に対する主語であることは明確である。次に、動作ではなく意思表示としての「賛成する」もその主体は「太郎」であり、同時に主語である。そして、存在を表す (53) も「部屋」という場所に「パソコン」という具体物が存在することを表し、「パソコン」が存在の主体で主語である。し

かし、(54)は「男」の中に「勇気」という性質が存在することを表すが、「勇気」は抽象的な概念であり、それが存在の主体で主語であるとするには異質さを感じる。なぜなら、主語は通常「～がどうした」「～がどんなだ」における動作や状態の主体であるために、第一には人や動物などの有情物、第二には具体的な物である無情物が主語になりやすい。ところが、「男」と「勇気」ではどちらが主語たるにふさわしいかなければ、「男」であって「勇気」ではない。また、先に見たとおり「勇気がある」は連語で、その結合度が強く、程度副詞の修飾を許す点や形容詞との置き換えが可能である(大塚 2004)ことを考え合わせると、これは「主語＋述語」ではなく、全体で形容詞的な要素である。

「勇気がある男」を文に展開すると「男に勇気がある」「男が勇気がある」の二通りが可能である。後者はガ格が二つ現れるが、「男が」が主語であることが明確である。存在を表す(53)ではこのようなことは許容されない(*部屋がパソコンがある)。さらに、「殿様には勇気がおありになる」のように、述語の尊敬語化と対応するのは「殿様」の二格名詞であり、こちらが主語であって「勇気が」が主語ではないことがわかる。したがって、このような「名詞がある」の「名詞が」は見かけ上の主語でしかない。「その男は(主語)、勇気がある(述語)」とすら見える。

最後に、ガ格の脱落した「名詞ある」と比較すると、6.4.4.1.で見たとおり、「名詞がある」は「名詞ある」が不可能な三点(述語に立つ、テンスの分化)があることが特徴である。また、他に以下のような連体修飾節を作ることができる点は「名詞ある」には見られない特徴である。

(55) たった一人で敵陣に攻撃をしかける {勇気がある／*勇気ある} 男

(56) 女性が興奮のあまり卒倒してしまうほどの {魅力がある／*魅力ある} 俳優

6.4.4.3. 「名詞のある」について

「名詞のある」は、述語に立つことが無い点で「名詞ある」と同じである。また、その結合の強さ、形容詞との類似性も見られる。程度副詞による修飾も以下のように可能である。

(57) もっと 品格のある 態度

(58) かなり 位のある 聖職者

異なる点は、名詞修飾節を受けること、さまざまな格助詞と共起可能な点である²⁷⁷。

(59) 名刺を取次いだ 記憶のある 妻 (ころろ)

(60) 先生と 深い縁故のある 土地 (ころろ)

(61) もしおめえに 恨みのある 者でもいればべつだが (さぶ)

(62) これは統計学の分野に も関連のある ことだが…… (人民)

(63) 三原製薬と つながりのある 学者 (人民)

二格・ト格は形容詞の必要とする格の1つであり、二格をとる形容詞には「詳しい、ふさわしい、適切な、厳しい、親切的な」などがあり、ト格をとる形容詞には「親しい、無関係な」などがある。二格・ト格どちらも取る形容詞には「等しい、平行な、同じ」などがある。ま

²⁷⁷ 彭広陸(2002)では「Nのある」が二格、ト格、カラ格の名詞を支配する場合があると実例を載せている。

た、比較を表す場合「塀より高さのある木」「ゲームより人気のある遊び」など、ヨリ格が使われる。

「ある」の必須成分は、存在の意味ではガ格とニ格、出来事の意味ではガ格とデ格である。しかし、以上のようにト格、カラ格、ヨリ格が格として求められる点で単なる存在文を超えていることが確認できる。また、これらの特徴は「名詞がある」にも共通のものである。

以下、三者を比較した結果を表 2 にまとめる。規定用法は先述した名詞を修飾する用法のことであり、連体修飾節は連体修飾節を受けるかどうか、述語用法は述語として主文末に立つかどうかを意味する。また、テンスの分化があるかどうか、他の格（ト格、カラ格など）との共起、形容詞との類似性、物の存在を示すか否かについて、それぞれ該当する場合に○を、該当しない場合に×を付した。

表 2. 「名詞がある」「名詞のある」と「名詞ある」の比較

| | 規定用法 | 連体修飾節 | 述語用法 | テンスの分化 | 他の格との共起 | 形容詞性 | 物の存在 |
|-------|------|-------|------|--------|---------|------|------|
| 名詞ある | ○ | × | × | × | × | ○ | × |
| 名詞がある | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 名詞のある | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ |

6.4.4.4. 「名詞がある」が「名詞のある」より少ない理由

彭広陸（2002）は、「名詞がある名詞」が「名詞のある名詞」よりも極めて少ないことを指摘している。その付録に掲載された実例も「 ϕ 、の、が」の中で「が」が最も少ないという結果であった²⁷⁸。

連体修飾節では主格を示す助詞は「が」・「の」交替が可能であるが、「が」に比べて「の」にはいくつかの制約があるとされ（高橋美奈子 2005：98）その使用範囲は「が＞の」である。また、6.4.2.5. で見たように日本語史から見ると、連体修飾節の「の」の使用は「化石的な名残」であるという。果たして現在「の」による主語表示に制約があるのは、この化石的な名残が「が」に押され消えつつあることの現れであろうか。

「全般的に言ってガノ交替は衰退しつつある。つまり主格『が』が一般化し、属格主語表示の『の』が駆逐されつつあるということである（金水敏 2011：110）」とある。つまり、全体的・一般的傾向性は「が＞の」であるのに対し、「名詞 {が／の} ある名詞」においては「が＜の」という逆の現象が起こっていることになる。ちなみに、使用数という事実に再度着目すると、本調査（小説）で「『が』12 例＜『の』119 例」であった。このことをわかりやすく、表 3 としてまとめておく。

²⁷⁸ 彭（2002）の結果は、「の」の削除という新聞の見出し特徴が「名詞ある」の用例数を多くした可能性もある。したがって、彭（2002）にはかなり不自然な実例もある点を指摘しておきたい。

表 3. 「が」「の」 交替

| 連体修飾節（高橋 2005、金水 2011） | 名詞が／のある名詞（彭 2002） | 名詞が／のある名詞（本研究） |
|------------------------|-------------------|-------------------------------|
| が＞の | が＜の が：（極めて少ない） | が＜の 「が」 12 例：「の」 119 例（小説） |

連体修飾節全体からすれば駆逐されつつある「の」が、むしろ好んで使われているということになる。さらに、歴史的変化の方向性を考えると、「化石」がむしろ存在感を強めていることになるわけである。

「名詞がある」は既に見たとおり、例えば「勇気がある」の「勇気」は主語の性質が弱く、全体で述語と見てもいいほどである。このような弱い主語性が「が」の使用の少なさを引き起こす理由ではないかと考える。弱い主語性しか持たないものに明確な格表示である「が」は必要ない。むしろ、その性質を弱めている「の」がふさわしい。少なくとも「名詞 {が／の} ある名詞」においては、このような主語性を明示しない「の」の選択が行われているのではないかと考えられるのである。だからこそ、ゼロ格が許容され「名詞ある名詞」が作られるようになったとも言えよう。

なお、主文末で用いられる「～は名詞がある。」の「が」も形骸化しているとは言え、「が」をはずすことまでは行われていない。それは、構文的に「～に～がある」が形式上求められるからである。一方で、「が」をはずした「彼はやっぱり人気あるね」「これは関係あるな」のような表現は、話し言葉には見られるようだ。

6. 4. 4. 5. 文体の違い

「名詞ある」には他の二者にはない文体的な特徴があると考えられる。そのことを新聞と標語という文体から考える。以下は、新聞の見出しとその本文である。

- (64) （見出し）「可変性」ある物件人気、（本文）間取りの変更や増改築が手軽にできる「可変性」のある住宅を選ぶ人が増えている。2014.10.25

見出しは、「可変性のある物件が人気だ」の「の」「が」「だ」が省略されている。本文に入ると「可変性のある物件」となり、「の」が保持されている。このように見出しには「名詞ある」は多く出現するが、そのほとんどが「名詞 {が／の} ある」の「が」「の」が省略されたもので、「魅力ある」のように「 ϕ ／が／の」全てを許容する表現とは異なる。このような、無理に削除して短縮化したものが見出しには多い。以下も全てこのような例である。

- (65) （見出し）命のヘルメット山小屋に計 1000 個配備 火山ある自治体に広がる、（本文）今回の噴火を教訓に、火山のある県内外の自治体にヘルメットを用意する動きが出ている。2014.10.09

- (66) （見出し）伏見工が企画設計案プレゼン 生徒ら「潤いある空間に」、（本文）生徒らは「音楽学校らしい潤いのある空間に」と意気込んでいる。2014.10.10

- (67) （見出し）産経記者在宅起訴 前支局長「問題ある対応だ」、（本文）「刑事処

分をもって応じるのは極めて問題のある政権の対応だ」と話した。2014.10.09

(68) (見出し) 新・改装 「高級感ある売り場に」、(本文) 「高級感のある売り場で、買い物を楽しんでもらいたい」と話している。2014.10.25

彭(2002)はこの理由を「スペースの節約を狙っての使い分けであろう」とするが、この他にも理由があると思われる。まず、「名詞ある」は記事の見出しだけでなく、標語やスローガンに適した雰囲気を持つ表現であるという点である。以下は、標語の入賞作品一覧(1960年～2013年)から検出したもので、「名詞ある」が2例、「名詞のある」が1例、「名詞がある」が0例だった。また、1961年～2014年までのテーマ一覧からは、「名詞ある」は3例、「名詞のある」「名詞がある」はどちらも0例だった。

(69) お客様の笑顔まで繋いでいこう 価値ある品質 (2013年標語入選作²⁷⁹)

(70) 改善の心が生み出す 質ある職場 夢ある職場 (2008年標語入選作)

(71) 改善の心が生み出す “夢” ある職場 (2005年品質月間テーマ)

(72) 価値ある品質で新たな成長を！ (2013年品質月間テーマ)

(73) 価値ある品質 技と想いをつないで (2014年品質月間テーマ)

(74) 限りのある資源を活かす品質管理 (1979年標語入選作)

標語やスローガンは「5・7・5」のリズムを取る傾向が強い。実例は確かに「名詞ある」で5字になるものもある(例、ゆとりある)が、「価値ある」は4字、「価値のある」で5字になるもの関わらず、上記の例では4字の方を採用している。また、5字の「ゆとりある」も「ゆとりのある日」にすれば7字になるので、5字にも7字にもできることを考えれば、「の」の脱落が「5・7・5」に縛られた結果とは言えないだろう。やはり「名詞ある」という表現自体が見出しやスローガン、標語に用いられやすい文体的特徴を持つと考えられるのである。

以下も標語やスローガンである。交通安全年間スローガンでは「名詞ある」「名詞のある」が1例ずつ、「名詞がある」が0例、市民健康づくり標語と安全衛生標語はそれぞれ「名詞ある」が1例のみで、「名詞のある」「名詞がある」は0例だった。

(75) 節度ある生活習慣 身を守る (平成21年度秋田市「市民健康づくり標語」入選)

(76) ゆとりある作業手順で職場の安全 (安全衛生標語入賞作品昭和62年)

(77) ゆとりある朝の五分が事故ふせぐ (平成9年交通安全年間スローガン)

(78) 出発を早めてゆとりのある運転 (昭和54年交通安全年間スローガン)

もしスペースの節約が唯一の理由であるならば、標語という文体に特に使われる理由はないはずである。寧ろ、タイトルや標語などの文体に「名詞ある名詞」が合致するという理由によるものと考えられるのである。同時にまた、「古めかしい言い方」という印象もあるが、それは先に見た歴史的に古くは主格をゼロ格で示した感覚から来るものであろう。

6.4.4.6. 共起可能性

一つの名詞が「名詞ある」「名詞がある」「名詞のある」の三つの用法のうち、どこまで用

²⁷⁹ 品質月間委員会による標語の入賞作品の一覧(1960年～2013年)から検出した標語。

いることができるのか、その共起可能性の範囲について考察する。ただし、ここでは連体修飾節のある名詞を除き、単独で用いられる場合の名詞に限ることとする。なぜなら、例えば「人を助けたいという心 { * φ / が / の } ある人に来てほしい」のように、「名詞ある」は構造的に連体修飾節を受けることが不可能であるという特徴を持っている。ところが単独の場合は「心 { φ / * が / * の } ある人が助けてくれた。」のように、「名詞ある」しか許されない。そのため、ここでは単独で用いられる場合に限定して、三つの用法の可能性について考察する。その三つとは、全て可能なもの、二つ可能なもの、そして一つだけ可能なものである。「名詞ある」が単に「が」「の」を省略したものであるならば、全て可能なはずであるが、実際はそうではない。以下、例を提示しながらどのようなパターンがあるのか見ていく。

6.4.4.6.1. 全て可能な名詞—「名詞 (φ / が / の) ある」

ここには「名詞ある」「名詞がある」「名詞のある」の全てに共起可能な名詞を列挙する。

趣、勇気、名誉、価値、興味、魅力、才能、迫力、見ごたえ、風情、分別、誇り、理解、余裕、恩、格式、権威、気品、気骨、教養、経験、見識、光沢、個性、実績、常識、思慮、信頼、誠意、責任、節度、説得力、実行力、善意、先見性、弾力、知恵、力、秩序、伝統、特徴、良識、命、未来、落ち着き、分別、ゆとり、歴史、機会、活気、特色、実効性、限り、形

以上は、すべて抽象的な名詞である。

この他、家族を表す「妻子、夫」があるが、ゼロ格が最もよく使われ、「が」は「妻子がある身」という例しか見られなかった。また、「現在、こんにち」は「現在あるのは」あるいは「～のおかげでこんにちある～」の形でしか用いられない (* 現在ある友人)。

6.4.4.6.2. 二用法が可能な名詞—「名詞 (* φ / が / の) ある」

例えば「味 { * φ / が / の } ある筆字」のように、ゼロ格だけが不自然な表現になるものについてまとめる。ここには「絵 { が / の } ある部屋」のような具体物を表す例は際限なくすべて該当する。したがって以下は、存在を表す例ではなく形容詞的な意味を示す例に限定した。以下は、全て抽象的な名詞である。

味、好奇心、可能性、必要、貫禄、意欲、能力、機知、緊張感、義理、権力、好意、効果、功績、根性、罪、調和、度胸、徳、人気、リーダーシップ、歯ごたえ、含み、ボリューム、かさ、問題、厚み、異常、腕、潤い、思いやり、関係、記憶、癖、元気、交際、自信、親しみ、渋み、自由、障害、すごみ、背、体力、蓄え、知名度、使いで、つや、強み、弱み、手ごたえ、素質、まとめ、ばらつき、不安、矛盾、高さ、深さ、重さ、弾力性、思想性、実現性、意外性、柔軟性、可能性、社会性、安定感、透明感、安心感、親近感、存在感、演技力、資金力、拘束力、決定力、実力、忍耐力、説得力、判断力、

6.4.4.6.3. 二用法が可能な名詞—「名詞（ ϕ ／？が／の）ある」

例えば「実り { ϕ ／？が／の} ある研修」のように「が」が、まったく不可ではないが、不自然に感じられるものである。数は少ないが存在する。この分類に入るものは判断に揺れが見られるものもある。以下がその例である。

含蓄、実り、意義、由緒、善意、確信、同情、メリハリ、はじめ

6.4.4.6.4. 一つだけ可能な名詞—「名詞（ ϕ ／＊が／＊の）ある」

例えば「栄え { ϕ ／＊が／＊の} ある勝利」のように「名詞ある」で固定的に用いられる表現である。数は少ないが以下のようなものである。

一理、諸説、数、大恩、心、生、事、誉れ、栄え、数メートル（数値・数量）

6.4.4.6.5. 一つだけ可能な名詞—「名詞（＊ ϕ ／＊が／の）ある」

例えば「名 {＊ ϕ ／＊が／の} ある人物」のような例で、「名詞のある」で固定的に用いられるようである。数は少ない。以下に例を挙げる。

ゆかり、働き甲斐、名、花、雰囲気、骨

以上から、「名詞のある名詞」が最も使われる形式であり、「名詞がある名詞」だけで使われる名詞はないことがわかった。特筆すべきは、「名詞ある名詞」が分量的にも用法的にも存在感のある表現であることである。

6.4.5. まとめ

以上、本節では「名詞ある」を中心にその文法的特徴を探り、連体詞・形容詞と比較した。さらに、「名詞がある」「名詞のある」との違いについて考察し、最後に「ある」の前接する名詞の種類と「 ϕ ／が／の」のパターンを確認した。

その結果、「名詞ある」は一語として働き、形容詞に類似していること、さらに「名詞のある」「名詞がある」よりもその性質が強いこと、文体的には見出しに適したものであることがわかった。また、連体修飾節における「が」・「の」交替が現在「が＞の」が一般的になっているのに、「名詞（が／の）ある名詞」においては「が＜の」である理由は、その主格の性質の弱体化にあることを述べた。また、「名詞ある」の「名詞」に来る要素も様々な広がりとかかなりの分量を持つことがわかり、一つの体系的な語群をなすことを見た。

今回は、歴史的な変化については先行研究を引用するに留まった。また、「 ϕ ／が／の」のうち三つ全てが可能なものと二つだけ可能なものと、一つしか用いられないものの「差」がなぜ生じるのかについては述べることができなかった。これらの点は今後の課題としたい。

第7章 「する」文と「ある」文の対人的機能

ここまで、「する」と「ある」について、その構文の記述、意味や用法といった側面を分析し文法的な機能を中心にして論じてきた。本章では、その文を用いる時の対人的な機能に焦点をあて分析する。以下の「する」と「ある」を用いた例を見たい。

(1) あー、頭痛がする。

(2) 先生、背中に痛みがあるんです。

文の下線部は(1)が「頭が痛いこと」、(2)が「痛いこと」を表わす。これらは、つまり連語の意味である。次に、それぞれの「一文」が何を意味するかを捉えるならば、(1)(2)は、どちらも『痛い』という話者の感覚を聴者に伝えている」のであり、〈表出〉という伝達の機能を果たしていると考えることができる。

そして、これは以下のような感情形容詞文が持つ機能と同じである²⁸⁰。したがって、(1)は(3)と、(2)は(4)と同じ機能を果たすことがわかる。

(3) あー、頭が痛い。

(4) 先生、背中が痛いんです。

このように文レベルの機能を見てみると、動詞文と形容詞文の共通点が見えてくる。すなわち、(1)の「頭痛がする」という「する」文と、(2)の「痛みがある」という「ある」文と、そして、(3)(4)の「(頭、背中が)痛い」という形容詞文は、動詞文や形容詞文という品詞の別、あるいは語の別を超えて、共通した機能を発揮することが捉えられるのである。これが、文法的な機能だけでなく、対人的な機能までも同時に考察すべきだと考える理由の一点目である。

さて、コミュニケーションを行う際の基本的単位は、「文」である。私たちが言語を使って誰かと意思疎通したり、誰かに何かを伝達したりする際に使うのは、単語一語ということとは通常ほとんどなく²⁸¹、単語と単語が連なった「文」という単位で行う。しかし、「する」や「ある」という多機能な動詞を研究するにあたって、「発話」、「聴者」という対人的な意味はほとんど考慮されてこなかった。また、そのような視点を持つ先行研究も管見のところ見られない²⁸²。とりわけ、このような多機能な動詞の機能性を分析するためには、文法的な機能だけでなく、対人的な機能もあわせて見ていく必要がある。なぜなら、語結合レベルの意味は発話を前提とした文レベルの意味とは異なるからである。これが、本章で文レベルの対人的機能を見る理由の二点目である。例えば、「ワクワクする」という「オノマトペ+する」で考えてみる。

(5) (私が) ワクワクするなあ。

(6) 太郎はワクワクした。

(7) 旅行に行けると思ってワクワクしていた。

²⁸⁰ 形容詞文の方が感情表出機能は強いと考えられるが、「する」という動詞を用いて感情を伝える方法が日本語にもあるという意味であり、全く同じであるという意味ではない。

²⁸¹ 「火事!」「あ、桜」のような一語でコミュニケーションが成立する場合も確かにあるが、その場合も一語で文レベルの役割を果たすという意味で「一語文」という用語が使われたほどである。

²⁸² 文機能を提唱する山岡政紀(2000b)以外には「する」を取り上げ、文機能を論じたものはない。「ある」は山岡(同)でも見られないため拙稿(2004)で考察した。

第一人称主語の(5)は、話者自身の今の感情を伝えているために、文としては〈情意表出〉という機能を示す。一方、第三人称主語の(6)は、太郎について起こった事柄を伝えるという〈事象描写〉機能を示す。そして、(7)は主語が第一人称でも第三人称でもその時の主体の状態を伝える〈状態描写〉機能を示している。このように、述語の語結合は同じ「ワクワクする」であっても、主語の人称、時制、アスペクト、活用形などの文法的諸特徴²⁸³によって(つまり、そのような具体的な形を実現しているのが『文』である)、出現する機能が異なるのである。したがって、「する」や「ある」が述語として文の要素に組み込まれ、コミュニケーションのレベルに至ったとき、これらを述語に持つ文がどのような機能を持つのかは、語結合レベルの機能とは異なると考えなければならない。したがって、文の機能を探ることには研究の意義がある。言い換えれば、「する」や「ある」を中心にした語結合のレベルでは確認できない、文レベルの意味を考察することができるからである。

このような、文としての機能とは何かという点について、山岡政紀(2000b)が「文機能」という枠組みを設定し、感情動詞文と形容詞文について詳細な分析を行い、日本語文には〈遂行〉〈意志表出〉〈感情表出〉〈命令〉〈事象描写〉〈状態描写〉〈属性叙述〉〈関係叙述〉の八つの文機能があることを類型化している。これらの結果と比較することによって、「する」と「ある」の「文」としての機能の広がりとその位置づけを行うことができる。これが本章で文レベルの機能を見る理由の三点目である。

なお、考察の中心は文機能にあるが、「聴者の存在が前提されてはじめて発動する機能(山岡 2008)」である《発話機能》についても合わせて第4節で記述していく。以下、文機能は〈 〉、発話機能は《 》で括り、記号内の左が右の下位範疇とする。例えば〈A : B〉ならAはBの下位分類であることを表わす。また、一文の機能を見るため、「する」と「ある」が主文の述語に立つ場合に限定する。

第1節では「する」文の機能を、第2節では「ある」文の機能を分析し、第3節で両者の文機能を比較する。そして第4節で「する」文と「ある」文の発話機能について述べる。

第1節 「する」文の文機能

対人的な機能の、第一の機能は「聴者を前提とせず、発話の素材である文が話者から発話されることそれ自体における機能(山岡 2000b : 62)」であり、それを「文機能」と呼ぶ。文機能は、文で用いられている要素とその構造によって複合的に生まれる、一つの文として機能である。

以下、「する」文が示す文機能の全体を、先に例文と共に提示する。語結合のパターン全てを挙げ、当該の語結合に下線を引く。

(8) ここに開会の宣言をする。〈遂行〉

(1) あー、頭痛がする。〈感覚表出 : 感情表出 : 表出〉

(5) (私が) ワクワクするなあ。〈情意表出 : 感情表出 : 表出〉

²⁸³ 山岡(2000b)では、文機能を決定づける文法的諸特徴を「命題内容条件」と呼ぶ。

- (9) 胃がギリギリする。〈感覚表出：感情表出：表出〉
- (10) 明日友達とテニスをする。〈意志表出：感情表出：表出〉
- (11) 将来息子を医者にする。〈意志表出：感情表出：表出〉
- (12) 毎日部屋をきれいにする。〈意志表出：感情表出：表出〉
- (13) 明日から毎日 5 時間勉強する。〈意志表出：感情表出：表出〉
- (14) 毎日公園を走ることにする。〈意志表出：感情表出：表出〉
- (15) 留学を希望する。〈願望表出：感情表出：表出〉
- (16) 合格したと確信する。〈思考表出：感情表出：表出〉
- (17) うまくいったような気がする。〈思考表出：感情表出：表出〉
- (18) 国が環境破壊を問題とした。〈事象描写：描写：演述〉
- (19) 花子が顔を赤くする。〈事象描写：描写：演述〉
- (20) 授業中は読んだり書いたりする。〈事象描写：描写：演述〉
- (21) 太郎が勉強をしている。〈状態描写：描写：演述〉
- (22) 次郎がハロウィンでモンスターの恰好をしている。〈状態描写：描写：演述〉
- (23) 鉛筆が一本百円する。〈状態描写：描写：演述〉
- (24) A は B と一致する。〈関係叙述：叙述：演述〉
- (25) 彼女はきれいな目をしている。〈属性叙述：叙述：演述〉
- (26) 地下室はジメジメする。〈属性叙述：叙述：演述〉
- (27) そこ、静かにする。〈命令〉

以上、「する」がとる格や語のパターン別に例文をあげ、それらがどのような文機能を示すか例示した。次から、一つ一つの文機能について取り上げ、その特徴を記述する。

7.1.1. 〈遂行〉

- (8) ここに開会の宣言をする。

この文は発話と同時に、宣言という行為が遂行される。そのため、文としては〈遂行〉という機能を果たす²⁸⁴。文の特徴である命題内容条件は、①主語が第一人称動作主格である、②非過去時制「する」の形式をとる、③モダリティ形式を付加していない、④アスペクト形式「している」の形をとらない、が挙げられ、①～④の時に〈遂行〉という機能が発現する。非過去時制の「する」は通常の動作動詞とは異なり、未来ではなく現在を表わしている。

7.1.2. 〈表出〉

「話者自身の主観を言語化する機能（山岡 2000b : 86）」が〈表出〉とされる。そのうち「話者の現在の感情状態（情意・感覚・思考など）を直接に言語化する機能（同）」が〈感情表出〉である。〈感情表出〉文にはいくつかの特徴が見られる。①人称制限が見られ、主語は第一人称経験者格である、②アスペクト形式「している」をとらない、③モダリティ形

²⁸⁴ 「発話者は、遂行動詞が示す行為を、発話と同時に遂行する（山岡 2000 : 62）」と〈遂行〉機能を説明している。

式を付加しない²⁸⁵、④非過去時制「する」に限定されている、の四つである。この条件の下「話者の現在の感情状態（情意・感覚・思考など）を直接的に言語化する機能」である〈感情表出〉を実現する。したがって、以下のように過去形になると〈感情表出〉という機能はなくなる。

(1) ' 昨日は頭痛がした。

これは過去における状態を描写しているのであって、現在の感情を表出するという機能を果たしてはいない。したがって、ル形（言い換えると、非過去時制の - ru の接続）で〈感情表出〉機能を発揮すると言える。

7.1.2.1. 〈情意表出〉

(5) (私が) ワクワクするなあ。

このような話者の情意を表出するものには、「発表会、考えただけでもほらドキドキする。」のように「擬態語する」の形式が見られる。

〈情意表出〉の「する」文は、主語である第一人称経験者格が含意あるいは潜在的に存在していて形式化されない（？私は頭痛がする。＊旅行、私はワクワクする）。

7.1.2.2. 〈感覚表出〉

(1) あー、頭痛がする。

(9) 胃がキリキリする。

このような感覚を表出する文には「うーん、めまいがするなあ。」「頭がズキズキする。」「肌がカサカサする。」「喉がイガイガする。」などのように、「感覚部位が擬態語する」の形式をとる。また〈感覚表出〉文は、その感覚が現れる場所あるいは感覚を覚える直接的な所在（感覚部位）を有する場合があります、ガ格を伴う。特に、それが第一人称経験者格の身体部位である点に特徴がある。

7.1.2.3. 〈知覚表出〉

さて、次の例を見てみたい。

(28) 台所から嫌なにおいがする。

(29) あれ？人の声がする。

(30) わあ、懐かしい味がする。

(31) 砂が入ってくるのか、床がザラザラする。

これらは、以下のように第一人称経験者格である「私」を顕在化することができない。

(28) ' ＊私は台所から嫌なにおいがする。

(29) ' ＊あれ？私には人の声がする。

²⁸⁵ 終助詞や聞き手めあてのモダリティと呼ばれるものはこの限りではない。例えば、「わよ」は「伝達態度のモダリティ」と言われ（益岡隆志 1991）、付加以前の文機能を変化させるものとまでは考えられない。また「のだ」は「説明のモダリティ」と言われ（同）、命題内容に変更が加えられるようなモダリティ機能を持つものではない。

(30) ' *わあ、私は懐かしい味がする。

(31) ' *砂が入ってくるのか、私は床がザラザラする。

この理由から、山岡（2000）では感情表出動詞の下位分類である知覚表出動詞に加えることはできないとされた。そのため、その文機能を〈知覚表出〉ではなく〈状態描写〉と説明している。しかし、同じように第一人称経験者が完全に潜在化している「頭痛がする」は、〈表出〉機能があるとされている。これらも同様に〈表出〉であると考えられないだろうか。

(28)「台所から嫌なにおいがする」は、あくまでも話者自身の経験による知覚であると解釈する方が適切だと考えられる。〈状態描写〉の機能が出現するのは、「台所は変なにおいがする」「台所から変なにおいがしている」という文である。前者は「台所」について述べた文で、台所がどのような様子かを描き出している。また、後者はテイル形を取ることで動作の継続状態（匂いが出続けること）を描き出す。このような場合こそ〈状態描写〉の機能が現れると考えられる。したがって、「人の声がする」「懐かしい味がする」の文も、話者が人の声を聞き取ったり、味覚を感じたりしたこと、つまり知覚を伝えていると考えることができる。

(31)「床がザラザラする」には対象格のガ格が出現し、床の状態を描写していると捉えられる可能性もあるが、その一方で「床がザラザラしている」という表現があることを考えると、テイル形の方が床の〈状態描写〉という機能を明らかに示すため、(31)は話者の知覚を表出する機能を示すと解釈できよう。したがって、これらは本研究では〈知覚表出〉としたい。先に述べたとおり「擬態語する」文の一部は、このような〈情意表出〉〈感覚表出〉〈知覚表出〉機能を持つ²⁸⁶。

7.1.2.4. 〈意志表出〉

(6) 明日友達とテニスをする。

(7) 将来息子を医者にする。

(8) 毎日部屋をきれいにする。

(9) 明日から毎日5時間勉強する。

「話者の未来の動作への意志などを言語化する機能（山岡 2000 : 86）」が〈意志表出〉とされ、これらの例はいずれも①意志を表わす、②主語が第1人称動作主格である、③非過去時制「する」である、④モダリティ形式を付加していない、⑤アスペクト形式を付加していない、という特徴を持つ。所謂、ル形で未来時を表わす動詞である。「～をする」「～にする」「～する」の形式をとる。

7.1.2.5. 〈願望表出〉

(10) 留学を希望する。

²⁸⁶ 「ワクワクする〈情意表出〉」と「キリキリする〈感覚表出〉」の違いについて、山岡（2000）では後者は「話者の肉体の上で生じる内的経験に対する指向性が強く、外的原因への志向性が弱く、そのため語彙の意味が身体的・直接的で、人格や主観による把握という意識が弱い点が特徴である（p 195）」と説明している。

「未発の事象に対する志向性を持った情意を表出している（山岡 2000 : 145）」として、そのような情意を特に「願望」と呼び、その具体的例としてタイ構文をあげている。「する」文では(10)のように「希望する」というサ変動詞の形で話者の願望が表現される例が見られた。

7.1.2.6. 〈思考表出〉

(11) 合格したと確信する。

(17) うまくいったような気がする。

また、他には「そんなことしても無駄な感じがする。」のように、「～気／感じがする」の形式をとる。このような話者の考えを表出する機能が見られ、この他に「～と推測する」「～と判断する」《主張：演述》、「～たいと希望する」《意志表出：表出》、「～てもらいたいと期待する」《依頼：働きかけ：指動》などが見られる。

7.1.3. 〈命令〉

(12) そこ、静かにする。

(32) 8時間の勉強をしなさい。

(33) 人には親切にしろ。

〈命令〉の文機能を示すものの典型は、(32) (33) のような命令形をとるものである。これは①意志動詞である、②主語が第二人称動作主格である、③命令形の形をとる、の特徴を持つ文の時に〈命令〉の機能が現れる。〈命令〉は「聴者に未来の行為の遂行を促す（山岡 2000 : 92）」機能である。また、(12) が「静かにすること」で命令を表わすことがあるのと同様命令をとらない例で、この場合の命題内容条件の③は、「ル形の形をとる」に変わる。

7.1.4. 〈演述〉

〈演述〉は「なんらかの命題内容を聴者に伝達する（同 : 94）」機能とされ、下位に〈描写〉と〈叙述〉があり、さらにそれぞれ〈事象描写〉〈状態描写〉、〈関係叙述〉〈属性叙述〉に分けられる。「する」文はこれら全ての機能を示すことができる。

7.1.4.1. 〈描写〉

まず、〈描写〉の機能を示す「する」文から見ていく。

(12) 花子が顔を赤くする。〈事象描写：描写：演述〉

(13) 国が環境破壊を問題とした。〈同上〉

(14) 授業中は読んだり書いたりする。〈同上〉

(34) 太郎が勉強をしている。〈状態描写：描写：演述〉

(35) 次郎がハロウィンでモンスターの恰好をしている。〈同上〉

〈描写〉は「客観世界の現象をそのまま話者が言語化する文機能（山岡 2000b, p96）」であり、〈事象〉は「時間的制約を含意する現象（同）」であり、〈状態〉は「時間軸上の生起や変化を含意しない現象（同, p97）」である。これらの機能を発現する文法的な条件は、〈事

象描写〉では無い、〈状態描写〉でもほとんど無いとされている。

〈事象描写〉文には人称や時制の制限はないため、「花子が顔を赤くした」「太郎はワクワクした」「息子を医者にした」「頭痛がした」「床がザラザラした」なども全てこの機能を果たすことができる。一方、〈状態描写〉文は、状態動詞以外はテイル形の形式であるという特徴がある。そのため、同じ述語でも「顔を赤くしている」「ワクワクしている」「頭痛がしている」「床がザラザラしている」は〈状態描写〉の機能を発現する。このように、述語の語結合は同じでも主語の人称、時制、アスペクト、活用形などの文法的（形態的）諸特徴によって、コミュニケーションのレベル、文レベルでの機能が異なることが文機能の枠組みでは、明らかにされる。したがって、「ワクワクする」が「(私が) ワクワクする」では〈情意表出〉、「太郎はワクワクする (した)」は〈事象描写〉、「ワクワクしている (た)」は〈状態描写〉と機能が異なるのである。

次に、通常の動詞と異なる点を指摘したい。〈状態描写〉の機能を発揮するには、動作動詞の場合はテイル形でなければならないとされるが、「する」はテイル形でなくとも状態を表わすことができるものがある。次の例である。

(11) 鉛筆が一本百円する。〈状態描写〉

これは「名詞（物）が数量詞（値段）する」という文に限られるが、ル形で〈状態描写〉の機能を示す。

(11) ' ? 鉛筆が一本百円している。

(11) '' 鉛筆が一本百円もしている。

テイル形にすると寧ろいささか不自然さがあり、とりたて助詞の「も」を挿入すると自然になる。「する」は「行きさえする」「行きはした」「行きもしない」などとりたて助詞を伴った特別な語結合もあるため、「も」無しの言い方は通常無いと考えていいと思われる。このような通常の動詞とは異なる特徴も持つことがわかった。その理由は、「する」はある要素との結びつきが強く、慣習的であるものも多いため、動詞の形態もそれに伴って固定化する傾向があるのではないかと考えられる。

7.1.4.2. 〈叙述〉

次に、〈叙述〉の機能を示す「する」文について見てみる。以下は全て〈属性叙述〉である。

(12) 彼女はきれいな目をしている。

(36) 花子は長い髪をしている。

(37) 容器は細長い楕円形をしている。

(38) 新種のイチゴは赤ではなく、なんと白い色をしている。

〈叙述〉は「二つの概念を話者の責任において一つに結びつけることによって、文のレベルで高次の概念を創出する文機能（山岡 2000b, p96）」とされ、「名詞的概念と属性的概念（形容詞的概念）とを結びつける（同, p98）」のを〈属性叙述〉とする。

(12) 「彼女」がどのような人かその特徴を述べると「きれいな目」がその「属性」として述べられている。これらは全てテイルの形を持ち、ル形では用いられない。これらのよう

な「目、髪、形、色」などをヲ格にとる「する」文における〈属性叙述〉の特徴は、①主題があること、②非過去時制であること、③アスペクト形式テイルを付加すること、である。この「する」文についての指摘は、山岡（2000）の叙述動詞文に見られないため、このような動詞文があることを付け加えたい。

一方で、〈属性叙述〉の機能を示すのは通常もっぱら形容詞文である²⁸⁷。例えば「地球は丸い」「桜は美しい」「携帯電話は便利だ」「日本は安全だ」など、主体の属性を示す役割は形容詞の主たる特徴である。そのため、動詞がこの機能を担うものは少ないと言っていい。山岡（2000b）で取り上げられているものでも、「書ける、食べられる」などの可能動詞、「役立つ、儲かる」などの属性動詞、「かかる、要する」などの所要動詞だけである。ここに「～をする」を一つの体系性を持つ用法として加えることができる。

次もまた〈属性叙述〉文である。

(39) 地下室はジメジメする。

(40) 閉め切った部屋はいやなにおいがする。

(41) 林檎飴は懐かしい味がする。

これらは、第1人称経験者を顕在化できないが、対象が主題化されることによってそのものが持つ属性を述べるという機能に傾いている。つまり、「～は～というものだ」を示すような文である。

この場合の〈属性叙述〉文の特徴は、①主題があること、②非過去時制であること、③アスペクト形式テイルが付かないことである。これらの条件は、可能動詞、属性動詞、所要動詞と同様である。

したがって、「目、形、色をしている」だけでなく、「味、におい、音がする」「擬態語する」の文も〈属性叙述〉の機能を示すということである。

7.1.5. 「～する」サ変動詞の文機能

ここまでは、あえてサ変動詞（漢語＋する、外来語＋する）を含めずに見てきた。サ変動詞はあまりに多様で数も多いため、それを含めればどのような文機能も示せることが当然だからである。そのため、あえて考察外に置いたわけだが、サ変動詞以外でも以上の通り、〈関係叙述²⁸⁸〉以外の全ての文機能を示せることがわかった。文レベルにおいても非常に多機能であることが確認された。既に、サ変動詞については山岡（2000）の中で整理されているものが多くあるので、それを借りる形でまとめると以下のようなになる。

(42) 君に転勤を命令する。〈遂行〉

(43) 君を解雇する。〈遂行〉

(44) 君に約束する。〈遂行〉

(45) この子を太郎と命名する。〈遂行〉

(46) 合格したと確信する、推察する、推測する、判断する。〈思考表出〉

²⁸⁷ 山岡（2000b）でも〈属性叙述〉の「最も典型的な例は属性形容詞文によるものである（同、p101）」と述べている。

²⁸⁸ 〈関係叙述〉とは「名詞的概念どうしを結びつける（山岡 2000：98）」機能である。

- (47) ～たいと希望する。〈思考表出〉
 (48) ～てほしいと期待する。〈思考表出〉
 (49) 留学を希望する。〈願望表出〉
 (50) 感謝する、期待する、軽蔑する、信用する、尊敬する、同意する、同情する、評価する 〈情意表出〉
 (51) 大学進学には 50 万円を要する。〈属性叙述〉
 (52) ゲーテの価値は世界的な名声に値する。匹敵する。〈属性叙述〉
 (53) 一致する、競合する、共通する、相違する、対立する、反する、符合する、矛盾する、両立する 〈関係叙述〉
 (54) 関係する、該当する、抵触する、意味する、位置する、存在する 〈関係叙述〉

特に〈関係叙述〉は、既に山岡（2000）にある通り「事物関係」「因果関係」「半規範的關係」「包含・所有関係」「記号関係」「位置関係」を示すことができる。

7.1.6. 文機能論からの「～がする」文の位置付け

以上記述してきた「する」文の文機能を表にまとめる。

表 1²⁸⁹ 「する」の文機能

| 文機能の種類 | | | 機能実現のための条件の概略 | | | | |
|--------|------|-------|---------------|-------------------------------------------------------------------|-------|-----|---|
| 上位 4 | 下位 8 | 下位 12 | 主語 | 述語語彙 ²⁹⁰ | -tei- | 時制辞 | M |
| 遂行 | | | [I] Ag | (宣言) ヲスル、(命令、解雇、約束、命名、宣言…) スル | × | -ru | × |
| 表出 | 感情表出 | 思考表出 | [I] Ex | (期待、希望) スル | × | -ru | × |
| | | 情意表出 | [I] Ex | (感じ、気、気持ち、頭痛、悪寒、めまい、吐き気…) ガスル、擬態語スル、(感謝、期待、軽蔑、信用、尊敬、同意、同情、評価…) スル | × | -ru | × |
| | | 感覚表出 | [I] Ex | 擬態語スル | × | -ru | × |
| | | 知覚表出 | [I] Ex | (音、匂い、声、味…) ガスル、擬態語スル | × | -ru | × |
| | | 願望表出 | [I] Ex | (希望) スル | × | -ru | × |

²⁸⁹ 表中の記号は以下を示している。M=モダリティ形式の付加を許す(○)、拒否する(×)、不可能(ー)。 = 主語の意味属性。I = 第一人称。II = 第二人称。Ag=動作主格 (Agent)。Ex=経験者格 (Experiencer)。時制辞が無制限 (無限)。

²⁹⁰ サ変動詞は種類も数も多いため、その文機能を表わすサ変動詞が限定される場合のみここに記す。その他、多くのサ変動詞があてはまる場合はこの表中には記載していない。

| | | | | | | | |
|--------|--------|------|---------|--------------------------------------------------------|---|---------------|---|
| | | 意志表出 | [I] Ag | (意志を表わす名詞) (ヲ) スル、 形容詞ニスル、名詞ニ／トスル | × | -ru | × |
| 命令 | | | [II] Ag | (意志を表わす名詞) (ヲ) スル、 形容詞ニスル、名詞ニ／トスル | ○ | -ro/- runa | — |
| 演 述 | 描 写 | 事象描写 | 無制限 | 全てのスル | × | 無限 | ○ |
| | | 状態描写 | 無制限 | 動作を表わすスル | ○ | 無限 | ○ |
| | | | 無制限 | 状態を表わすスル | × | 無限 | ○ |
| | 叙 述 | 関係叙述 | 主題 | (一致、競合、共通、相違、対立、 反、符合、矛盾、両立、関係、該当、 抵触、意味、位置…) スル | × | 無限 | ○ |
| | | 属性叙述 | 主題 | (音、匂い、声、味…) ガスル、擬 態語スル、(要、値…) スル | × | 無限 | ○ |
| | | | 主題 | (目、髪、体、形、色…) ヲシテイ ル | ○ | 無限 | ○ |

このように「する」文は聴者を前提として考えた場合、その表す意味は、単に動作や行為を示すという語彙的な意味に留まらず、上記のような〈遂行〉〈表出〉〈描写〉〈叙述〉といった機能的意味を持つのである。しかも、現代日本語文が持つ12全ての機能を表わし得るという点で、最も多機能な動詞としてその日本語動詞の中に位置していると言っていい。それは、実に、形容詞（感情形容詞（感覚形容詞、情意形容詞）、叙述形容詞（属性形容詞、関係形容詞）、描写形容詞）から動詞（感情表出動詞（感覚表出動詞、情意表出動詞、思考表出動詞）、属性動詞、意志動詞、関係動詞、事象動詞、感情描写動詞、状態動詞、所要動詞）までが示す文機能の広がりを見せている。

このことは、例えば「食べる」のような一般的な動詞を述語に持つ文と比較すると、その多様性がよくわかる。

- (55) 私がケーキを食べる。〈意志表出〉
- (56) ケーキを食べろ。〈命令〉
- (57) クジラはプランクトンを食べる。〈属性叙述〉
- (58) 太郎がケーキを食べている。〈状態描写〉
- (59) 太郎がケーキを食べた。〈事象描写〉

「食べる」は、以上、五つの文機能までしか表わすことができない。

一方で、類義語の「やる」の文機能も考えてみる。

- (60) 私が司会をやる。〈意志表出〉
- (61) 君が司会をやれ。〈命令〉
- (62) 大人の男は全員煙草をやる。〈属性叙述〉
- (63) 太郎が司会をやっている。〈状態描写〉
- (64) 太郎が司会をやった。〈事象描写〉

同様に五つの文機能を示すだけで、動作の域を超えることができない。

両者とも特に形容詞文に特徴的な〈感情表出〉(情意、感覚、知覚、思考)を表わすことがない。ところが「する」文は、日本語文の持つ全ての文機能である12全てが可能である。このような動詞は他には見られないと言っていいだろう。多様な対人的な機能を示すのが「する」文なのである。

第2節 「ある」文の文機能

「～がある」文の対人的機能を考察する。ここでは先行研究の考察と比較しながら、文機能の確認と日本語における「ある」動詞の位置付けを中心に考えていく。「～がある」文の文機能の全てを示すと以下ようになる。

- (1) 机の上に本がある。〈状態描写〉
- (2) 今日父に客がある。〈事象描写〉
- (3) 中田は財産がある。〈属性叙述〉
- (4) 腹の辺りに痛みがある。〈感覚表出〉
- (5) この点に疑問がある。〈情意表出〉
- (6) 私には世界一周旅行をしたいという願望がある。〈願望表出〉
- (7) 私には君を助ける意志がある。〈意志表出〉
- (8) 説明と事実との間には大きな矛盾がある。〈関係叙述〉
- (9) 彼は人気がある。〈属性叙述〉
- (10) 犯人は女性である可能性がある。〈状態描写〉
- (11) 私に考えがある。〈思考表出〉

このように「～がある」文は〈遂行〉と〈命令〉以外の文機能を発揮することができる。

7.2.1. 〈表出〉

(4)～(7)(11)の〈表出〉文は、話者の現在の感情状態を直接的に言語化している。特に(4)～(6)(11)の〈感情表出〉文にはいくつかの特徴が見られる。①二格名詞句が主語として機能していること、②人称制限が見られ、主語は第一人称経験者格であること、③モダリティ形式を付加しないこと、④時制がル形に限定されていることである。①②③はこれまでに論じているので、④について述べる。

- (4) ’’腹の辺りに痛みがあった。

これは過去における状態を描写しているのであって、現在の感情を表出するという文機能を果たしてはいない。したがって、ル形(言い換えると、非過去時制の - ru の接続)で〈感情表出〉機能を発揮すると言える。

〈感覚表出〉と〈情意表出〉を示す「～がある」文の主語である第一人称経験者格は、含意あるいは潜在的に存在していて形式化されないことが多い。また〈感覚表出〉文は、その感覚が現れる場所、あるいは感覚を覚える直接的な所在(感覚部位)を有する場合があり、二格を伴う。特に、それが第一人称経験者格の身体部位である点に特徴がある(手先にしび

れがある、胸に圧迫感がある等)。

〈願望表出〉文は、未発の事象に対する志向性を持った情意を表し、願望の内容が引用される（「世界一周旅行をしたいという」願望がある）という特徴がある。

〈意志表出〉文は、①③④の点は同様であるが、②が一部異なる。主語は第一人称であるが、経験者格ではなく動作主格である。なぜなら、次のような補文構造が考えられるからである。

(7) '' 私には [私が Ag 君を助ける] 意志がある。

主語の意味格は、意志表出の主体であり、しかもそれは未来の動作に対する意志であるため動作主格 (Agent) となる。以上の①～④が満たされる場合に「～がある」文は〈意志表出〉という文機能を発揮すると考えられる。

なお、人称制限については仁田義雄 (1979、1985、1991) が伝達のモダリティの文法的特徴として挙げており、他の先行研究にも主として主語の省略という点から第一人称に制限される現象を指摘したものや、モダリティ形式、あるいは述語におけるモーダルな意味による人称制限を取り上げたものなどがある。そして、この現象がその他の多くの動詞、形容詞を述語に持つ文においても見られることを記述したのが山岡 (2000b) である。したがって、人称制限は文の果たす機能における一つの現象として包括的に捉えられるものと言える。

7.2.2. 〈演述〉

(1) (2) (10) は〈描写〉の文機能を、(3) (8) (9) は〈叙述〉の文機能を示している。これらは全体で「客観的に描き出す」という〈演述〉の文機能を示すものである。

7.2.2.1. 〈描写〉

〈描写〉文には、(1) (10) のような〈状態描写〉文と (2) のような〈事象描写〉文がある。前者はあるものの状態を、後者は動作や事象を、描き出している。両者を分かつ特徴はそのガ格名詞句が動作性名詞である (後者) か、否 (前者) かによる。また、両者の文機能を分かつ条件もまた同様である。(10) の〈状態描写〉文は、判断や思考というよりも、その状態を「犯人は女性である」という可能性のあるものとして描き出したということに重点が置かれている。森山卓郎 (2002) でも「可能性がある」「おそれがある」などは「事実としてのコメント」であり「客観的情報」の表現に向いていると述べている。

先行研究では、「空間的な存在 (高橋・屋久 1984)」「物理的な存在 (寺村秀夫 1982)」など意味・用法に従って詳細な記述が見られるが、文機能という観点から見れば、いずれもそれらは〈状態描写〉を示すものである。その描写の仕方が、空間 (存在場所) を伴ってあるものの存在を表すという形をとるのであり、それは構文の問題となる。よって、高橋・屋久 (同) 「空間的な存在」だけでなく「範囲・わくぐみの中の存在」「所有されるもの・所属されるものとしての存在」を表す文の中にも〈状態描写〉文は見られる。

〈事象描写〉文は、高橋・屋久 (同) の「おこり・おこなわれとしての存在」の「事件・出来事」「行事」「連絡・伝達の成立」、及び「所有されるもの・所属するものとしての存在」の「他に対する働きかけ・かかわりの存在」の「行為的なもの」の二つに関わる。いずれに

せよ、現象をそのまま言語化したという機能を示す文である。

〈事象描写〉文では、ニ格とデ格を取る場合がある。

(12) 先生にはその日ホテルで出版記念パーティーがおありになった。

(13) ??先生には事故がおありになった。

(14) a. 実家に不幸があった。

b. 実家で不幸があった。

(15) a. *駅前ビルに殺人があった。

b. 駅前ビルで殺人があった。

動詞の尊敬語化の現象から、(12) が与格主語構文であることがわかる。しかし、〈事象描写〉文では(13)のように常にそうであるとは限らない。そのガ格名詞に注目すると、(12)は「パーティー」という計画的に執り行う事象であり、(13)は「事故」という突発的な事象である。さらに、前者がル形・タ形を許すのに対し、後者はタ形でないと不自然で、ル形の場合は(16)のように、事象発生に対する強い確信を述べる「宣言」といった語用論的な意味合いを持つ。

(16) 明日あなたには不幸があります。気をつけなさい。

例(14)はニ格デ格両方が可能であるが、(14) a は、不幸なことが起こった事実が家に属するものとして表され、その点は与格主語構文と似ていて所有文的である。このニ格については、高橋・屋久(同)で「おこる場所が対象語的になり、《に格》で示される」として対象として捉えているが、「ある」の存在という基本的な意味を考えると対象というよりは出来事の起こった結果がある場所に存するものと捉える方がいいように考える。その点、(14) b は事象の場所がデ格で示され、より一層動作的である。また「不幸」という名詞は動作性が弱いのにに対し、(15)のように動作性の強い場合には〈事象描写〉という文機能がはっきりと示され、もはや(15) a のようにニ格を取ることはできない。

また〈事象描写〉には、事象が「～こと」によって表される典型的なものがある。「～することがあった」「～したことがあった」「～したことがある」「～することがある」などテンス形式²⁹¹が様々であり、また〈事象描写〉というよりも〈属性叙述〉である場合もある²⁹²。ここでは〈事象描写〉の文機能を示す場合があるとの指摘をするに留め、相互の違いや詳細な記述は別稿に譲る。また、ガ格名詞を修飾する節によって事象の内容が示される点で「～こと」に似ている文「～した体験(経験)がある／あった」がある。しかし、その事象が一回的なものに限られる点や、修飾節の動詞がタ形でなければならない点(ル形非文)が「～こと」文とは異なる。

7.2.2.2. 〈叙述〉

²⁹¹ 高橋(1994)は「シタコトガアル(アッタ)」を「第一テンス形は過去形で(略)絶対的なテンス」「第二テンス形は、積極的なテンスの意味をあらわさない」とし、「スルコトガアル(アッタ)」を第一テンス形は「第二テンス形のしめす時間を基準とする相対的なテンス」「第二テンス形は絶対的なテンス」とする。前者は〈事象描写〉の文機能を示すことが多いが、後者は様々な文機能を示す。

²⁹² 「彼は留学したことがある」は、「彼」の属性として経験を述べているとの解釈も可能であり、経験が属性となりうるのかなど未だはっきりしない点がある。

「～がある」文の〈叙述〉には、(3) (9) の〈属性叙述〉と (8) の〈関係叙述〉とが見られる。

7.2.2.2.1. 〈属性叙述〉

属性とは「主語名詞句によって表される名詞的概念に何らかの観点から、二次的、依存的に把握される静的な特性（山岡同）」である。(9)「彼は人気がある」では、主語名詞句によって表される名詞的概念「彼」を主題²⁹³として取り上げ、それに属性概念を表す命題「人気」を結びつけていると捉えることができる。この文機能を発揮する条件は「主題があること」である。用法としては、高橋・屋久（同）の「所有されるもの・所属するものとしての存在」にあたり、その中の一部がこの文機能を果たすものである。

(17) 大学進学には 200 万円を用意する必要がある。

(18) その問題には議論の余地がある。

これらは所要動詞文に似ているが、主語名詞句について、ある観点から把握される静的な特性を述べた文として〈属性叙述〉の機能を示している。

7.2.2.2.2. 〈関係叙述〉

また、(8)「説明と事実との間には大きな矛盾がある」は「説明」と「事実」という二つの名詞的概念間に「矛盾」という関係性を認め叙述した文であり、主題を持つ。また、関係という概念は、ある時間との関係付けの上で成立したり消滅したりするようなものではなく、恒常性のある概念であると捉えられる。よって、典型的にはこの文の時制は非過去である。これらが〈関係叙述〉の機能を示す条件である。しかし、「～がある」文の場合、以下のように過去時制でもその表す命題は現在も過去も変化がなく、恒常性を保っているようなものも見られる。

(19) 太郎と花子には血のつながりがある／あった。

これに関して、高橋・屋久（同）には「所有されるもの・所属するものとしての存在」の「他に対する働きかけ・かかわりの存在」のうち「関係的なもの」との記述がある。また、「範囲・わくぐみの中の存在」の中に「関係的存在」として「へだたり」と「つながり」を挙げ、更に「位置づけのはっきりわからないもの」として「区別がある」などが見られる。構文的には二つの異なる存在のあり方の中に「関係」が見られるというものであるが、文機能という観点から見れば、いずれも名詞的概念間に関係性を認め、それを言語化した文との捉え方ができる。

下位分類として次のようなものが挙げられる。

(20) 学校から家まではおよそ 10km ある。〈距離関係〉

(21) 電車は十一分後に出るから、まだ少し時間がある。〈時間関係〉

²⁹³ 形式上の提題がなくても、文脈、場面によって主題が提示される場合もあり、主題を助詞がでうけることで総記の解釈が発生する場合もある。ちなみに、仁田（1991）でも「判定文」「疑いの文」は「通常題目を有している」とあり、文機能とのアプローチの仕方が異なるので単純に比較できないが、判定文の説明には〈叙述〉との類似点も見られる。

(22) 故郷から見る海は常に北にある。〈位置関係〉

〈距離関係〉では、実際の数値を言う場合(20)のようにガ格は立たない。〈時間関係〉では「時間／期間／間／日数」など時間概念を表す語だけでなく、「一時間の猶予、数世紀の隔たり、八つの違い」など具体的な時間を表す語もガ格名詞句となる。〈位置関係〉では、位置基準(点線部)がニ格を取り必須である。これら以外の関係は、大きく括って〈事物関係〉として捉えることができる。

この他に〈因果関係〉がある。これには次のような三つの格関係と概念間の意味関係が見られる(『』以外の語彙は具体的な内容)。

①a. 「結果ハ原因ニ『原因がある』」「事実ハ理由ニ『理由がある』」

(23) 彼女が離婚したのは姑の口出しに原因がある。

(24) 彼女が外出を嫌ったのは火傷に理由があった。

①b. 「結果ノ『原因は』原因ニ『ある』」「事実ノ『理由は』理由ニ『ある』」

(25) 離婚の原因は姑にある。

(26) 外出嫌いの理由は火傷にあった。

② 「結果ニハ『原因がある』」「事実ニハ『理由がある』」

(27) 彼が話さなくなったのには複雑な原因がある。

(28) 母は晩婚であった。それには理由がある。

③ 「事物ニハ『由来がある』」

(29) その名前にはおもしろい由来がある。

〈関係叙述〉では、同じ「差がある」を一文中に持っていても、「十一分の差がある」であれば〈時間関係〉、「5kmの差がある」であれば〈距離関係〉、「能力に差がある」であれば〈事物関係〉、として捉えることができる。

7.2.3. 文機能論からの「～がある」文の位置付け

以上、文機能論から「～がある」文の示す九つの文機能の記述とその発揮される仕組みである文法的な条件(命題内容条件)を探ってみた。その考察結果を表に示すと、以下のようになる。

山岡(2000b)によれば、文機能の類型として上位四つ〈遂行〉〈表出〉〈命令〉〈演述〉、下位四つ〈感情表出〉〈意志表出〉〈描写〉〈叙述〉、さらに下位九つ〈思考表出〉〈感覚表出〉〈知覚表出〉〈情意表出〉〈願望表出〉〈状態描写〉〈事象描写〉〈関係叙述〉〈属性叙述〉が日本語文の文機能として挙げられている。「～がある」文の文機能と比較したい。

表 2²⁹⁴ 「～がある」の文機能

| 文機能の類型 | | | 機能実現のための条件の概略 | | | | |
|--------|------|------|---------------|------------------------------|-------|-----|---|
| 上位 4 | | 下位 8 | 下位 12 | 主語 | ガ格名詞句 | 時制辞 | M |
| 遂行 | | | | | — | | |
| 表出 | 感情表出 | 思考表出 | [I] Ex | 考え、思い、確信など | -ru | × | |
| | | 情意表出 | [I] Ex | 関心、興味、焦り、不安、自信、心配、懸念、照れ臭さなど | -ru | × | |
| | | 感覚表出 | [I] Ex | 痛み、しびれ、かゆみ、だるさ、～感、～感じなど | -ru | × | |
| | | 知覚表出 | | — | | | |
| | | 願望表出 | [I] Ex | 願い、望み、願望など | -ru | × | |
| | 意志表出 | | [I] Ag | 意志、用意、覚悟など | -ru | × | |
| 命令 | | | | | — | | |
| 演述 | 描写 | 事象描写 | 無制限 | 試験、会議、挨拶、客、火事、体験、～する／したことなど | 無制限 | ○ | |
| | | 状態描写 | 無制限 | 無制限 | 無制限 | ○ | |
| | 叙述 | 関係叙述 | 主題 | 関係、隔たり、時間、距離、位置、差、原因、由来、理由など | 無制限 | ○ | |
| | | 属性叙述 | 主題 | 人気、勇気、人望、才能、風情、癖、威力、能力、上背など | 無制限 | ○ | |

以上のように「～がある」文は、日本語文が表す文機能のうち、〈遂行〉〈命令〉〈知覚表出〉以外の全てを発揮することができる²⁹⁵。それは、実に、形容詞（感情形容詞（感覚形容詞、情意形容詞）、叙述形容詞（属性形容詞、関係形容詞）、描写形容詞）から動詞（感情表出動詞（感覚表出動詞、情意表出動詞、思考表出動詞）、属性動詞、意志動詞、関係動詞、事象動詞、感情描写動詞、状態動詞、所要動詞）までが示す文機能の広がりを見せている。

同じ存在を表わす動詞「いる」と比較するなら、「いる」は次のような文機能を果たすことが考えられる。

(30) 子供が公園にいる。〈状態描写〉

(31) 私は娘がいる。〈属性叙述〉

このように二つの文機能しか示せないことは存在を表わす動詞であれば、普通のことである。それが際立って多機能な振る舞いを見せるのが「ある」であることがよくわかる。

しかし、「ある」はその意味としても機能としても、存在という状態を示すことに中心が

²⁹⁴ 表中の記号は以下を示している。M＝モダリティ形式の付加を許す（○）、拒否する（×）、不可能（－）。〔 〕＝主語の意味属性。I＝第一人称。Ag＝動作主格（Agent）。Ex＝経験者格（Experiencer）。

²⁹⁵ 「美しくあれ」のような「形容詞＋ある」の命令形を含めれば、「ある」を述語に持つ文の文機能は全部で 10 ということになる。

ある動詞であるために、同じ文機能を果たしていながら、その他の動詞文や形容詞文に比較すれば、ややその機能の発揮性（発揮の程度）が薄い場合が見られる。特に〈感情表出〉文、例えば「奥歯に痛みがある」と「奥歯が痛い」とでは、形容詞文の方が〈感情表出〉の程度は大きい。しかし、形容詞で表すしかない〈感情表出〉が「～がある」文の存在によって、感情のあり方にバリエーションが見られることになる。同様に、〈意志表出〉が「～う・よう」や言い切り文（例、僕が助ける）しか表現手段がない中で、「～がある」文によって意志のあり方のバリエーションを表現し分けることができる。したがって「～がある」文が表現にバリエーションの幅を広げているとも言えよう。

「～がある」が機能的な動詞として働くとき、様々な対人機能的な意味が発生する。形容詞文に特徴的であるはずの機能から動作を表わす動詞文が担う機能までを示すことが確認できた。

第3節「する」と「ある」の文機能を比較

以上、文レベルの機能を考察した結果、日本語文が示す12の文機能の全てを「する」文が示せることがわかった。一方、「～がある」文は10の文機能を示し得る。日本語文が示す12の文機能は言うまでもなく、名詞述語文、形容詞述語文そして動詞述語文の全てを網羅した数である。簡潔にその文機能の分布をまとめると以下になる。比較のために、類義語の「やる」「いる」、そして形容詞の「嬉しい」「赤い」、感情動詞の「困る」についても示す。

表3. 「する」文と「ある」文の文機能の広がり

| 文機能 | する | ある | やる | いる | 嬉しい | 赤い | 困る |
|------|----|----|----|----|-----|----|----|
| 遂行 | ○ | | | | | | |
| 思考表出 | ○ | ○ | | | | | |
| 情意 | ○ | ○ | | | ○ | | ○ |
| 感覚 | ○ | ○ | | | | ○ | |
| 知覚 | ○ | | | | | | |
| 願望 | ○ | ○ | | | | | |
| 意志表出 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 命令 | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 事象描写 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ |
| 状態描写 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| 属性叙述 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| 関係叙述 | ○ | ○ | | | | | |

コミュニケーションにおける対人的な機能として、「する」文と「ある」文は動詞文でありながら、名詞述語文や形容詞述語文までその機能を広げていることがわかる。

文機能の広がりという点では、「する」が「ある」よりも広い機能を示すという結果となった。存在を表わす動詞よりも動作を表わす動詞の方が、文機能の分類で該当するものが多いということは、「いる」と「やる」という一般的な動詞の文機能の幅を見てもわかる。

動詞「ある」は、「～がある」という一つのパターンだけでこれだけの広がりを見せることから、「ある」という意味の普遍性をここに見出すことができよう。動詞「する」は、「～がする」「～をする」「～にする」「～する」と様々な格をとり、様々な種類の語と連結する、その展開の広がり、多機能性の理由となっている。そして、その中でも最も生産性が高いのがいわゆるサ変動詞である。その造語力の高さはありとあらゆる語と結びつき、その語の持つ性質を吸収する。現代日本語において「する」ほど多機能な動詞はないと結論付けることができる。

第4節 「する」文と「ある」文の発話機能

第3節までに見た通り、「する」文は山岡（2000b）で示された現代日本語文が持つ12全ての機能を表わし得るという多機能性を持っている。一方、「ある」文は、〈遂行〉〈命令〉〈知覚表出〉以外の9つの文機能を発揮することがわかった。このように「する」文も「ある」文も文機能が非常に幅広く多様であることがわかる。これを踏まえたうえで、第4節では第2の機能である、語用論的な条件を取り入れた段階、つまり聴者を前提としたコミュニケーション上の機能である発話機能について考察を加える。

発話機能とは、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの（山岡 2008：2）」とされ、「発話の文脈や発話参加者の人間関係などの語用論的条件を加味したものが、発話機能ということになる。（同 2008：4）」とある。つまり、文機能を根底に、それに、聴者との関係性や行為の目的、前提などの語用論的条件が加わって発動するのが発話機能である。まさに、これが文をコミュニケーションで用いるときに発揮する実際の機能である。

さて、一つの文が担う発話機能は膨大になる可能性がある。なぜなら、語用論的条件に関わるものは、話し手と聞き手の関係性、話される内容（命題）、そして文脈など様々な条件が加わるからである。そのために、例えば「休憩するよ」という一言が、友人間で行われたのか、上司と部下で行われたのかによっても、前者では《誘い》、後者では《指示》という機能になり得る。それは、一つの述語が展開する文機能の多様性とは比べものにならない。したがって、「する」文と「ある」文の発話機能をすべて記述することは実質不可能に近く、また、そのような記述は発話機能論からのアプローチとしても妥当とは言えない。そこで、第4節では「する」文や「ある」文が果たし得る発話機能の実例を考察し、その対人的な機能の多様性を確認すること、また、先行研究の説明と合わない部分を解明すること、の二つを目的として考察することにした。このことを通し、「する」文と「ある」文の多機能性の考察をさらに深めたいと考えている。

7.4.1. 「する」文の発話機能

ここでは、先行研究で示された発話機能の中で「する」文に関して問題になるところを取り上げ、考察を進める。以下、発話機能は《 》でくくりにする。

7.4.1.1. 《命令》の「する」文

まず、《命令》の発話機能について見ていく。以下の例は、教師 A が生徒 B に対して発話したものである。

(1) A (教師) : そこ、静かにする。《命令》

B (生徒) : はい、すみません。《服従》

教師 A の発話は、生徒 B にとっては《命令》という機能を果たしていると考えることができる。この判断を単なる主観的な感覚ではなく、客観的な指標を立てて行なうことを山岡 (2008) では提案している。その客観的な指標というのが、語用論的条件である。以下が、《命令》という発話機能が発現する語用論的な条件とされるものである。

《命令》の語用論的条件—山岡 (2008 : 56)

- ①当該行為が参与者 B の意志によってなし得る行為であること。
- ②通常の事態の進行において参与者 B が当該行為を実行するのは自明ではないこと。
- ③参与者 A が参与者 B の行為を規制する権限を有していること。

(1) は、①「静かにする」という行為が生徒 B の意志によってなし得る行為であり、②通常の事態の進行において、生徒 B が「静かにする」という行為を実行するのは自明ではなく、③教師 A が生徒 B の行為を規制する権限を有している。このように、(1) は語用論的条件の全てに該当し、《命令》という発話機能が発動していると判断できる。

次に、この文の特徴として注目したいのは、述語の形態が命令形ではなく終止形であることである。述語が命令形であれば、「命令形」という語形変化によって一文の機能 (= 文機能) が〈命令〉となることは必然である。例えば次のような例である。

(2) そこ、静かにしろ。〈命令〉《命令》

(2) は、文機能が〈命令〉、語用論的条件を加えた発話機能もやはり《命令》である。このような命令形による《命令》は山岡 (2008) に取り上げられているが、(1) のような終止形で終わる文は《命令》の中に取り上げられていない。しかしながら、以上確認したように終止形で終わる文もまた《命令》という発話機能を発揮していると考えられる。したがって、まず一つ目の提案として、終止形で終わる意志的行為を表す動詞文を《命令》の文に加えることを挙げたい。

7.4.1.2. 終止形《命令》の文機能

次に、(1) のような終止形で終わる文の文機能は何か、考えてみたい。終止形で終わる文は通常 (3) のように、「客観的世界の事象をそのまま話者が言語化する文機能 (山岡 2000b : 96)」である〈事象描写〉とされる。

(3) 先生が来たから、静かにした。〈事象描写〉

あるいは、(4) のように「話者の未来の動作への意志などを言語化する機能 (同 : 86)」である〈意志表出〉である。

(4) 今度からは静かにします。〈意志表出〉

《命令》の発話機能を発動し得る日本語文機能は、「〈命令〉、〈遂行〉、〈意志誘導〉、〈意志要求〉、〈可能要求〉、〈意志表出〉、〈願望表出〉」の七種である。(同：55)」とされる。まず、この中で述語の形態が決まっているものがある。命令形をとる〈命令〉、否定形＋疑問形をとる〈意志誘導〉、疑問形をとる〈意志要求〉、可能形＋疑問形をとる〈可能要求〉、意向形をとる〈意志表出〉、タイ形をとる〈願望表出〉である。以上六つは、当該の文が終止形であるという事実と一致しない。そのため残る一つは、〈遂行〉である。

〈遂行〉とは、例えば「君に地方支店への転勤を命じる。(同：59)」のような文で、〈遂行〉を発揮する命題内容条件は、①述語の形態が無標、②述語の時制が非過去、③述語が遂行動詞、④主語の人称が第一人称であるとされる。①と②に関しては、(1)も同じ条件を備えている。しかし、③と④は該当しない。「静かにする」という述語は、遂行動詞の定義である「その動詞を発話すること自体が、その動詞が表す行為を遂行することになるような特殊な動詞群」という説明と合わないため、遂行動詞ではない。また、文の主語は聴者である第二人称(生徒 B)であって、この文を発話している話者・第一人称(教師 A)ではない。したがって、(1)の文機能は〈遂行〉にも当たらない。

このように考えてくると、先行研究で《命令》を発現するとされる七つの文機能いずれにも該当しないということになる。例文を「する」に限定して、さらにあげる。

(5) A(教師)：遊んでないで、今はしっかり勉強をする。

B(生徒)：はい。

(6) A(医者)：はい、ここで目を大きくする。

B(患者)：はい、これくらいでいいですか。

(7) A(指揮者)：フルート、ここで小さくする。

B(フルート奏者)：(うなづく)

このように例をいくつも考えることができる。

このことに関して、発話機能を中心に論じた山岡(2008)には無かったが、文機能を中心に論じた山岡(2000b：91)には、「君は今すぐに行く。」という文を「発話機能としては主に《予告》で、語用論的条件によっては《命令》ともなり得る。」という指摘が一箇所だけ見られる。そして、これを〈事象描写〉という文機能を果たすものと記述している。しかし、先に見たように、山岡(2008)ではこの〈事象描写〉は《命令》を発動する文機能に入っていない。

次に、当該の文の文機能が〈事象描写〉でいいのか考える。(1)「静かにする」の文法的な特徴を、述語の意味特徴、形態、時制、主語の人称という命題内容条件から見ると、以下のようにまとめられる。

①述語の語彙：意志動詞

②述語の形態：-tei- (不可)、モダリティ付加辞 (不可)、無標 (終止形)

③述語の時制：非過去

④主語の人称：第二人称

一方で、〈事象描写〉の命題内容条件は制限が緩い。以下に引用しつつまとめる²⁹⁶。

- ①述語の語彙：意志動詞
- ②述語の形態：-tei-（不可）、モダリティ付加辞（可）
- ③述語の時制：無制限
- ④主語の人称：無制限

以上2つを比べると、かなり異なることがわかる。当該の文では制限が多く、それは本来の〈事象描写〉文とは相容れない性質である。したがって、〈事象描写〉という文機能を当てはめるのは不適當である。それでは、他のどれに該当するか、あるいは新しく文機能を立てべきかということが問題になる。

当該の文は、文機能の分類枠の中で上位類型である〈遂行〉〈表出〉〈命令〉〈演述〉の中で言えば、やはり〈命令〉に入れるべきものである。「〈命令〉は、聴者に未来の行為の遂行を促す文機能である。（山岡 2000b : 92）」という定義に最もよく該当する。他の文機能を見ても、話者自身の主観を言語化する〈表出〉、その文の発話と同時にその文の表す行為が遂行される〈遂行〉のいずれとも異なる。最後の〈演述〉は「何らかの命題内容を聴者に伝達する文機能（同 : 94）」とされるが、上に見たように人称や時制の制限が基本的でないという点で、制限が多い当該の文とは相容れない。また、新たに一枠を設けるほどの独立的、差異的な実質が伴わない。したがって、文機能の中の〈命令〉という機能を発揮する文であると判断すべきだと考える。

しかし、従来の〈命令〉が発動する命題内容条件は当該の文とは合致しないため、これを修正することが求められる。ちなみに、〈命令〉文の命題内容条件は以下とされる。

〈命令〉の命題内容条件—山岡（2000b : 92）

- ①述語の語彙：意志動詞
- ②述語の形態：-tei-（可）、モダリティ付加辞（不可）
- ③述語の時制：非過去（-ro/-runa）
- ④主語の人称：第二人称

これらの中で修正の必要がある点は②である。②のアスペクト付加辞（-tei-）が可能であるという点が当該の文とは合わない。例で確認したい。

- (1)' *そこ、静かにしている。
- (5)' *しっかり勉強をしている。²⁹⁷
- (6)' ?ここまで、目を大きくしている。

このようにアスペクト付加辞は不可能である。ところが、命令形文末の場合は、以下の通り可能である。

- (1)" そこ、静かにしていろ。
- (5)" しっかり勉強をしてい

²⁹⁶ 山岡（2000b : 85, 92）から抜粋しまとめたものである。意志動詞の場合に限定した内容を示した。

²⁹⁷ 「しっかり勉強をしていること。」のように文末が「～こと」の名詞で終わる文の場合も〈命令〉の文機能と言える。しかし、この場合は述語が文末に来る文とは異なり、これは名詞なのか、「火事！」のような一語文と同じように文とするかという問題もあり、ここでは指摘するに留めたい。

(6) ”ここまで、目を大きくしている。
したがって、以下のように修正する案を提起したい。

〈命令〉の命題内容条件（修正）

- ①述語の語彙：意志動詞
- ②述語の形態：-tei-（命令形るとき可、終止形るとき不可）、モダリティ付加辞（不可）、命令形と終止形
- ③述語の時制：非過去
- ④主語の人称：第二人称

このことは、「する」文だけでなくその他の動詞文においても同様である。

- (8) A（寮長）：はい、みんな電気を消す。
B（後輩）：わかりました。
- (9) A（カメラマン）：その人、顔を上げる。
B（モデル）：はい、これでいいですか。

7.4.1.3. 否定命令の「する」文

ここでは、命令に引き続き、否定命令について「する」文を考察する。

7.4.1.3.1. 非意志的行為の否定命令

- (10) A：気にするな。（山岡 2000b：94 の例）
B：あ、はい…。

この文は「な」という終助詞が最後につくことで、「～しないことを命令する」否定命令（＝禁止）の機能を果たしている。山岡（2000b）では、この否定命令は〈命令〉に含まれているが、山岡（2008）ではこれが〈命令〉ではなく〈禁止〉という文機能に修正され、発話機能についても《禁止》という項目を立てている。ただし、この《禁止》を立てたのは「特に文末形式において《命令》と異なる形態が用いられる面があり、便宜的に一つの範疇として立ててもよい（同 2008：81）」との判断だとしている。そのために、《禁止》の語用論的条件は《命令》の語用論的条件と同じである。

そこで、ここでは「する」文に見られる否定命令（禁止）の文に焦点をあて、《命令》（あるいは《禁止》）という機能を果たすのか、その語用論的条件は《命令》と同じかどうかについて考察したい。

改めて、2.1. で引用した《命令》の三つの語用論的条件を（10）と突き合わせてみる。まず、当該行為が B の意志によってなし得る行為であるという条件①がいきなり該当しない。それは「気にする」は意志動詞ではないからである。そのため、「気にするな」だけでなく「気にしろ」のような命令形による典型的な〈命令〉もまた《命令》の発話機能を示すことがないということになる。以下の例である。

- (11) A（上司）：人の目も少しは気にしろ。
B（部下）：はい、すみません。気にするようにします。

この他に、「ヘラヘラするな」「へまをするな」「ぼーっとするな」のような文があるが、いずれも意志動詞ではないため、先行研究に従えば《命令》の発話機能はないということになる。つまり、「参加者の行為に対する制御機能」と定義される{策動}という《命令》の上位概念にもあたらないということになるのである。しかし、聴者に、ある行為を行わせようとするという点では「対動」にあたり、それはまさに{策動}である。しかし、条件②の「気にしない」という行為の実行が自明ではないという点は合致する。そして、条件③の、参加者A(上司)がB(部下)を自分の権限で「気にする」「気にしない」に規制する権限という点では、当該の行為は権限とは無関係であると言わざるを得ない。立場上権限はあるが、行為自体が権限とは無関係に規制不可能である。したがって、③の条件は合致しない。したがって、当該の文は、意図としては命令だが、事態そのものは制御不可能なため「気にしない」「気にする」という結果にまでは変更できない行為である²⁹⁸。さて、これらをどのように考えればいだろうか。

まず、(11)〈命令〉の文機能を持つものから見てみる。

(11) A(上司): 人の目も少しは気にしろ。〈命令〉《不満表明》

これは、先に見たとおり{策動}の特徴である[実行可能]という①の条件に該当しないため、{策動}ではなく{表出}に当たると考えられる。そして、{表出}の下位分類である《不満表明》である。《不満表明》は「相手が自分にもたらした不利益に対する否定的評価を相手に伝える発話機能(山岡 2008: 114)」とされるものである。(11)が、Bが人目も気にせず振る舞うことでAが不利益を被っているとする、AがBに対して不満を持っていることを伝えている文だということになる。これは《不満表明》の語用論的条件④「参加者Bは現に参加者Aに不利益をもたらししている(同)」に合致する。また、(11)のような非意志的行為は、意志を持って実行することが不可能であるために、その行為を命令形で伝えたとしても、《命令》の発話機能は発揮できず、《不満表明》を表出するだけで終わる²⁹⁹わけである。以上の考察から、《不満表明》を発動する文機能として〈命令〉を新たに加えたい。

次に、「気にするな」という〈禁止〉の文機能を持つ文について、その発話機能が何か考えてみたい。

(10) A: 気にするな。〈禁止〉《慰め》

この文も先に見た通り、語用論的条件の①と③が合致しない。したがって、《禁止》の上位類型の{策動}ではない。他の発話機能についても見てみると、{宣言}は[非自明][権限有]が語用論的条件であるため、これとも合わない。また、{演述}は[非自明][根拠共有]が語用論的条件であり、「情報伝達機能を担う」とされるため、これにも該当しない。残る{表出}であるが、{表出}は「発話参加者の一方が他方に自分の心理状態を伝える(山岡

²⁹⁸ 《命令》《禁止》については、語用論的条件③[権限]が最重要であり、①は典型的には実現可能なこと(意志的行為)、中には実現困難なもの(非意志的行為)も見られる。〈命令〉の中には「～しろ」「～して」「～てください」など表現そのものに段階性がある。それが発話機能の分化を生む可能性を考えていかなければならないと思っている。

²⁹⁹ ただし、当該の文は「実行不可能」なため山岡(2008)の定義に従うと《改善要求》ではないということになる。この文の使用感覚では《改善要求》になってもいい感もある。細かな条件設定がさらに求められるのかもしれない。

2008 : 113)」ものであり、[情報根拠なし]の特徴を持つ点で{演述}と決定的に異なるとされる。したがって、(10)は語用論的条件から見て{表出}にあたると考えられる。しかし、先行研究では{表出}については概略のみ記すに留まり、まだ詳細な分析は行われていない。そのため、(10)が該当するような発話機能がない。ここで、新たに《慰め》という発話機能を提起したい。

そして、もう一点注目したいのは、当該の文には先行行為がある点である。つまり、(31)の参与者Bは参与者Aが「気にするな」という文を発話する以前に、既に「気にしている」のである。当該行為は「気にしないこと」であるが、それに先行して既にその逆の行為が実現しているという点で先行行為があるわけである。そして、それに対して、行動の変容を伝えることで参与者Bの心的負担を軽減しようとする発話である。しかし、このような先行行為は、2.3.2.で見る意志的行為の否定命令には見られないため、非意志的行為の否定命令のみ見られる条件となる。

この新たに提起した《慰め》という発話機能の語用論的条件は以下のようにまとめられる。

《慰め》の語用論的条件（新規）

- ①当該行為が参与者Bの意志によってなし得る行為ではないこと [実行不可能]
- ②通常の事態の進行において参与者Bが当該行為を実行するのは自明ではないこと [非自明]
- ③発話の目的は参与者Bの心理的負担を軽減すること [負担の軽減]
- ④当該行為の逆の行為が既に実現していること [先行行為]

《慰め》には参与者の権限は関与しないためこれを削り、新たに、発話の目的と先行行為の有無を設定した。この他、「する」文では「がっかりするな」「イライラするな」なども入る。これを果たす文機能は〈禁止〉である³⁰⁰。

7.4.1.3.2. 意志的行為の否定命令

ここまでは無意志動詞について見てきたが、ここから意志動詞である「する」文について考えてみたい。《禁止》の語用論的条件は《命令》と同じだとされるため、以下では、条件① [実行可能]、条件② [非自明]、条件③ [権限] から考える。具体的に二つの例を見てみる。

(12) A (上司) : だらしない格好をするな。《禁止》

B (部下) : あ、すみません。ネクタイします。

条件①「だらしない格好をする」ことが部下の意志によってなし得る行為であり [実行可能]、条件③上司は部下の行為を規制する権限を持つ [権限]。そして、条件②部下が「だらしない格好をしない」ことは [非自明] である。この三つの語用論的条件を満たすので、《禁止》の発話機能を示すと捉えられる。

³⁰⁰ この他にも文機能は多く該当すると思われるが、本研究では「する」文に限定しているため、その考察は別稿としたい。

一方で、他の可能性として考えられるのは《不満表明》である。《不満表明》の語用論的条件には「参与者 A に不利益をもたらしている」という点がある。部下 B のだらしなな格好が上司 A に不快感を与えたり、上司 A が規範とする在り方とは異なっているという違反感情を想起させたりすることが、不利益であるとはいにくい。また、{表出}は心理状態を伝えることがメインである³⁰¹が、当該の文は単に伝えるのではなく、禁止という行動変容を求めている点で{策動}である。したがって、{策動}の《禁止》とやはり考えるべきである。

次に、先行行為の在り方について考えてみたい。非意志的行為の否定命令については 2.3.1. で見たように、「先行行為がある」という特徴が見られた。(12) は、参与者 B がだらしなな格好を既にしているため、先行行為がある例である。次の例はどうか。

(13) A (上司) : 書類は雑にするな。 《禁止》

B (部下) : はい、雑にいたしません。

(13) は、雑に既になっている書類を目にして上司が言った発話とも、あるいは、雑な書類になってしまうことを未然に防ぐ意味で上司が言った発話とも考えられる。つまり、意志的行為の否定命令は「先行行為がある場合と無い場合がある」という特徴がある³⁰²。しかし、《命令》の場合には先行行為はない。例えば「静かにしろ」「私を身代わりにしろ」などは前提となる先行行為は存在しない。《禁止》には「前提」があるということであり、先行行為は既実現あるいは実現した場合の想定である。それは、とりもなおさず「否定文」の表す意味のためである。肯定文は前提を必要としない表現であるが、否定文は「何かを否定する」という機能の中に、既に「何かの存在を認めている」わけである。その何かの存在を否定して発話するのが否定文である以上、否定命題には先行行為あるいは前提が存在する。したがって、既に実現した行為があつて、文として〈禁止〉を述べる場合は《改善要求》と《禁止》が発動する可能性があり、実現はしていないが実現した場合を想定した前提があつて〈禁止〉を述べる場合は、《禁止》が発動すると考えられるのである。以上から、《禁止》の語用論的条件に④を追加し、以下とする。

《禁止》の語用論的条件（追加）

④当該行為には実現した、あるいは、実現したと想定する先行行為が前提にあること。

7.4.1.4. 「する」文の発話機能全体

ここでは、「する」文が発動する他の発話機能について見ておきたい。以下、{宣言}{演述}{表出}{策動}という大分類で見ていく。

7.4.1.4.1. {宣言}

³⁰¹ 一方で、だらしなな格好を変えるかどうか部下に任されている（つまり「自己権限あり」）ならば{表出}の中の《改善要求》に当たるが、上司が受けた不利益が明確ではない場合には《禁止》となる。

³⁰² 先行行為があつてもなくても、《禁止》は発動するということであるため、語用論的条件に入れる必要はない。

(14) ここに開会の宣言をする。〈遂行〉《行事進行：宣言》{宣言}

{宣言}は「その発話自体が行為として完結している(山岡 2008 : 111)」とある。語用論的条件である[非自明]、宣言者の[権限]のどちらも該当している。

7.4.1.4.2. {演述}

{演述}は、「情報伝達機能を担う(山岡 2008 : 112)」もので、初期語用論的条件は[非自明]と、情報提供者側が情報とその根拠を有することを参加者が共有していることを示す条件が必要とされる。以下、{演述}の下位分類である《陳述》《報告》《主張》の発話機能について見ていく。

《陳述》

「情報付与者の何らかの判断を扱う(同 : 112)」のが《陳述》とされ、これを発動する文機能は主として〈関係叙述〉〈属性叙述〉、それらに対する〈陳述要求〉を用いるとされる。

(15) AはBと一致する。〈関係叙述〉《陳述》

(16) 彼女はきれいな目をしている。〈属性叙述〉《陳述》

(17) 地下室はジメジメする。〈属性叙述〉《陳述》

《報告》

《報告》は「現象世界の事柄を伝えることを目的とする(同 : 113)」もので、これを発動する文機能は主として〈事象描写〉〈状態描写〉、それらに対する〈描写要求〉とされる。

(18) 国が環境破壊を問題とした。〈事象描写〉《報告》

(19) 花子が顔を赤くする。〈事象描写〉《報告》

(20) 授業中は読んだり書いたりする。〈事象描写〉《報告》

(21) 太郎が勉強をしている。〈状態描写〉《報告》

(22) 次郎がハロウィンでモンスターの恰好をしている。〈状態描写〉《報告》

(23) 鉛筆が一本百円する。〈状態描写〉《報告》

《主張》

《主張》は「他者とは共有されていない情報付与者独自の見解を扱う(同 : 113)」もので、これを発動する文機能は主として〈思考表出〉と、それに対応する〈思考要求〉を用いるとされる。

(24) 合格したと確信する。〈思考表出〉《主張》

(25) うまくいったような気がする。〈思考表出〉《主張》

7.4.1.4.3. {表出}

{表出}は「発話参加者の一方が他方に自分の心理状態を伝える(同 : 113)」もので、客観的な情報根拠を持たないとされる。「{表出}には語用論的条件がないようである(同 : 116)」と述べられている。「する」文に見られる{表出}は以下のような《感情表出》で

ある。

- (26) あー、頭痛がする。〈情意表出〉《感情表出》
- (27) (私が) ワクワクするなあ。〈情意表出〉《感情表出》
- (28) 胃がキリキリする。〈感覚表出〉《感情表出》
- (29) 留学を希望する。〈願望表出〉《決意表出》³⁰³

7.4.1.4.4. {策動}

{策動}は「参与者の行為に対する制御機能(同:73)」であり、初期語用論的条件は[実行可能][非自明]とされる。以下、「する」文に見られる《意志表明》、間接的《依頼》、間接的《改善要求》、間接的《勧誘》について見ていく。

《意志表明》

これを発動する文機能は〈意志表出〉〈関係叙述〉であり、語用論的条件は[実行可能][非自明]とされる(山岡 2008: 79)。以下全て〈意志表出〉による《意志表明》である。

- (30) 明日友達とテニスをする。〈意志表出〉《意志表明》
- (31) 将来息子を医者にする。〈意志表出〉《意志表明》
- (32) 毎日部屋をきれいにする。〈意志表出〉《意志表明》
- (33) 明日から毎日5時間勉強する。〈意志表出〉《意志表明》
- (34) 毎日公園を走ることにする。〈意志表出〉《意志表明》

間接的《依頼》

これを発動する文機能は〈事象描写〉〈所有要求〉〈感情表出〉であり、語用論的条件は[実行可能][非自明][自己権限][参与者Aへの与益][参与者Aの欲求]とされる(山岡 2008: 83)。

- (35) A: 変なにおいがする。〈知覚表出〉 間接的《依頼》
B: 窓を開けるね。
- (36) A: 背中がチクチクする。〈感覚表出〉 間接的《依頼》
B: いいよ、見てあげる。

このような〈感情表出〉³⁰⁴文による間接的な《依頼》は多く例が挙げられる。話者の知覚や感覚、感情を聴者に伝えることが、上記のような語用論的条件が整えば、間接的な依頼になる例である。さて、次のような文もまた《依頼》を発動するとは言えないだろうか。

- (37) A: うー、歯がガチガチする。〈状態描写〉 間接的《依頼》
B: ストーブつけるね。
- (38) A: ここザラザラしてますよ。〈状態描写〉 間接的《依頼》

³⁰³ 「当該行為が参与者の意志によって直接に実行可能とは言えないものの、事態としての実現可能性がある場合は《決意表出》となる(山岡 2008: 115)」とあるので、当該の例文(「志望している」など)はこれに該当する機能だと考えられる。例が多くないため、《感情表出》の中に入れておく。

³⁰⁴ 〈感覚表出〉〈知覚表出〉は〈感情表出〉の下位分類である。

B：あ、拭きます。

先行研究では、このような〈状態描写〉は《依頼》を発動する文機能の中に入っていない。しかし、参与者 A に部屋を暖めてほしいという欲求があった場合、現在の自分の状況を描写することは、語用論的には「部屋を暖めてください」の間接的な依頼になるはずである。また、掃除をしている B を目の前にして、その場所が埃でザラついていることを描写することは、ひいては「拭いてほしい」ということの間接的な依頼になり得る。このような、現在の状態を伝えるだけで、それが語用論的条件によって《依頼》となるパターンは多いと考えられる。特に、日本語のように「空気を読む」高コンテクスト文化の場合は、〈状態描写〉や〈事象描写〉という「そのまま事実を伝える」ことが語用論的条件によって「間接的な依頼」「間接的な命令」「間接的な改善要求」になり得ると考えられるわけである。この点も新たに提起したい点である。

間接的《命令》

他にも次のような例が考えられる。参与者 A がクライアントで、B が請負業者であり、建築現場に状況視察に来た場面で、A が B を自分の要求に従わせる権限があるならば、以下のような発話は間接的な《命令》という機能を発揮できる。

(39) A：あの、ずいぶん大きな音がしますね。〈状態描写〉 間接的《命令》

B：今すぐ止めさせます。おーい、ちょっとストップ！

先行研究には《命令》はあっても間接的《命令》は無かったが、これを新たに加えたい。

間接的《改善要求》

間接的《改善要求》を発動する文機能は〈感情表出〉〈状態描写〉とされ、その語用論的条件は〔実行可能〕〔非自明〕〔自己権限〕〔参与者 A への現状与害〕〔参与者 A の欲求〕と提示されている（同：92）。例えば、以下のような「する」文が考えられる。

(40) A：あの、足、踏んでるような気がします…。〈感情表出〉 間接的《改善要求》

B：すみません。大丈夫ですか。

「～な気がする」という表現は話者の考えを表出するものであるが、この例では「気がする」の内容が「足を踏んでいる」感覚があるということのために、全体としては〈感情表出〉である。A への現状与害があるために B に対して《改善要求》となる。ただし、「気がする」は「足踏んでますよ」という表現よりもさらに間接的であるため、かなり婉曲的な《改善要求》と言っていいたいだろう。

間接的《勧誘》

先行研究には《勧誘》はあるが、間接的な《勧誘》については無い。

(41) A：明日うちで忘年会をするんですよ。〈意志表出〉 間接的《勧誘》

B：あ、行きます。

この例は、話者が忘年会を持つという意志を伝える〈意志表出〉が、語用論的条件の〔実行可能〕〔非自明〕〔参与者 A の欲求〕などによって《勧誘》となると考えることができる。

ただし、述語の形態が意向形「行きましょうよ」などの明確な勧誘の形をとっていないため、これは間接的な《勧誘》と言える。新たに加えてもいいと考える。

7.4.2. 「ある」文の発話機能

「ある」文は「する」文と異なり、存在を表す動詞を述語に持つ。あるものの存在を述べることによって、さまざまな文機能を示すものではあるが、聴者を目の前にした具体的な発話の際には、その存在を示すという特徴が消極的な対人的機能となって働く。つまり、{策動}のような「世界を言語に近づける」というような発話機能は実現しにくいようである。以下、{演述}{表出}{策動}という大分類で見ていく。なお、{宣言}の機能は「ある」文には無い。

7.4.2.1. {演述}

{演述}の中の《陳述》《報告》《主張》という発話機能を発揮する。以下は例文である。

- (42) 机の上に本がある。〈状態描写〉《報告》
- (43) 今日父に客がある。〈事象描写〉《報告》
- (44) 中田には財産がある。〈属性叙述〉《陳述》
- (45) 説明と事実との間には大きな矛盾がある。〈関係叙述〉《陳述》
- (46) 彼は人気がある。〈属性叙述〉《陳述》
- (47) 犯人は女性である可能性がある。〈状態描写〉《主張》

7.4.2.2. {表出}

《感情表出》

さまざまな感情を伝える機能を持つことがわかる。以下は例文である。

- (48) 腹の辺りに痛みがある。〈感覚表出〉《感覚表出》
- (49) この点に疑問がある。〈情意表出〉《情意表出》
- (50) 私には世界一周旅行をしたいという願望がある。〈願望表出〉《願望表出》
- (51) 私には君を助ける意志がある。〈意志表出〉《意志表明》
- (52) 私に考えがある。〈思考表出〉《意志表出》

7.4.2.3. {策動}

{策動}の発話機能の中心は、先の「する」文でも述べたが、状況を描写することで聞き手に行動判断を任せるような「間接的な」{策動}である。

間接的《依頼》

- (53) A: 肩に痛みがあるんですよ。〈感覚表出〉 間接的《依頼》
B: 少し、揉みましょうか。
- (54) A: 駅まで行く必要があるんです。〈状態描写〉 間接的《依頼》
B: じゃ、送ります。

〈状態描写〉もまた間接的《依頼》を発動する文機能の一つに入れた方がよいというのは、既に述べた通りである。

《提供要求》

《提供要求》も間接的《依頼》と同じ語用論的条件を持っている。《提供要求》は発話の目的が「参与者 A のために、参与者 B が参与者 A にある事物を提供すること（山岡 2008 : 95）」とある。

(55) A : お水ありますか。(山岡 2008 の例 : 96) 〈所有要求〉 《提供要求》
さて、次の例は山岡 (2008 : 88) では間接的《依頼》の例として挙げられているものだが、《提供要求》とすべきだと考える。

(56) A : 灰皿ありますか。(同上 : 88) 〈所有要求〉 《提供要求》

B : はい、どうぞ。

《依頼》は「参与者 A の利益のために、参与者 B がある行為を行うこと (同 : 88)」であり、依頼は「行為」を求めている。この例は「煙草を吸うこと」を求めているわけではなく、「灰皿」の提供を求めているという点で《提供要求》に入れるべきだと考える。そのため、両者の返答はいずれも《提供》を示す B の発話が適切である。

間接的《勧誘》

《勧誘》を発動する文機能は〈遂行〉〈意志表出〉〈意志誘導〉とされる (同 : 108) が、以下のような〈状態描写〉もまた同じ語用論的条件を満たして、B を誘うという発話機能を發揮している。

(57) A : チケットが二枚あるんですが。〈状態描写〉 間接的《勧誘》

B : ええ、行きましょう。

(58) A : おいしいお酒があるんですよ。〈状態描写〉 間接的《勧誘》

B : いいですね。ぜひ一緒に。

ただし、〈状態描写〉による《勧誘》は、間接的《勧誘》と言うべきものである。これを新たに加えたい。

間接的《脅迫》

《脅迫》を発動する文機能は〈意志表出〉〈許可要求〉とされる (同 : 110)。《脅迫》の発話の目的は、参与者 B に不利益を与えるため、参与者 A がある行為を行うことである。以下の例もまた《脅迫》の機能を發揮すると考えられる。

(59) A : いいか、俺にも考えがある。〈思考表出〉 《脅迫》

B : まさか…やめてくれ。

この例の A の発話には、参与者 B に不利益を与えるために A が行う行為が具体的に何かは明示されていない。しかし、その不利益な行為が双方にとって想定される場合には《脅迫》になり得る。これを語用論的条件の一つとして新たに提起し、このような《脅迫》を間接的《脅迫》としたい。

7.4.3. まとめ

以上、「する」文と「ある」文の発話機能について考察してきた。発話機能は語用論的条件が変わると発現する機能が変わる。そして、その条件は文機能のレベルよりも数が多く複雑である。そのため、発話機能の一つ一つから出発して、その機能に該当する文の代表例や典型例を集めて分析するという方向に比べ、本節で行った「する」文、「ある」文の具体的な一文から出発して発話機能を分析していくという作業は、これまでの理論への細かい検証となるため難しい面もあった。しかし、先行研究を逆の方向から検討することで、まだ扱われていなかった具体的な文を通して、発話機能論を補強するいくつかの点を示せたのではないかと考えている。また、このような対人的な機能、特に語用論的な機能についての確たる理論を援用することで、「する」と「ある」の多機能性について、一步深く検討することができた。以上、二点の目的は達成できたと考える。

また、文機能と発話機能の関係性であるが、文機能が多機能であるということをベースにして、発話機能もまた多様となる。つまり、両者は比例する関係にあると言っていい。特に、日本語では「～をする」や「～がある」という文が示す〈事象描写〉や〈状態描写〉が、間接的な《依頼》や《勧誘》などの発話機能へつながることは、日本語教育やコミュニケーション研究においても重要と言えるだろう。

終章 本研究のまとめ—多機能動詞研究—

以上、「する」と「ある」という動詞について、その文法的な機能と対人的な機能を明らかにしてきた。これまでの考察から、本章では動詞の「機能」とは何かについて再検討し、新たに「多機能動詞」という概念を提起したい。そして、最後に全体のまとめと今後の課題について述べる。

第1節 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

まず、動詞の機能性を見るという本研究の立場から、これまでの機能性の動詞に関する研究について特に問題と思われる点を簡潔に振り返ってみたい。機能性の動詞を研究する大きな流れとしては、形式動詞研究、機能動詞研究、軽動詞研究の三つがある。

形式動詞研究の問題点は、これが品詞論の枠組みであること、動詞の機能が意味の希薄さと陳述という点から述べられるだけで、補充する語との関係性が述べられていないこと、そして動詞の機能の程度性や段階性について説明がないことである。

次に、機能動詞研究の問題点は、それが「名詞＋動詞」の語結合に限定されること、機能動詞の概念規定に矛盾があることである。

そして、軽動詞研究の問題点は、それが「名詞＋動詞」に限定され、かつ語と語の形態的緊密性を厳密に見るために、機能性の段階やその他の語との関係性を見ることができないことである。

とりわけ、機能動詞研究と軽動詞研究では、機能性の動詞が「名詞＋動詞」の語結合に限定されているために、以下のようなものは全てその範疇から漏れてしまうことが大きな問題だと考えた。「(顔を)赤くする」「静かにする」などの〈形容詞＋動詞〉〈形容動詞＋動詞〉、「しばらくする(と)」「閑散とする」などの〈副詞＋動詞〉、「読んだり書いたりする」「詰め寄りさえする」などの〈動詞＋動詞〉、「ドキドキする」「ズキズキする」などの〈オノマトペ＋動詞〉、「仮に雨が降ったとする」などの〈文＋動詞〉、「回復しつつある」などのモダリティ表現などである。しかしながら、これらはその動詞の実質的意味、接続する要素との緊密性、動詞部分の文法的機能、そのいずれにおいても機能性の動詞と判断すべき特徴を備えている。これらを含めて考えるのが本研究における「多機能動詞」である。扱われる対象の広さという点は、形式動詞研究と類似している。

また、機能動詞研究における概念規定の矛盾を大きな問題だと考えている。既に、第1章第2節でも述べたが、「機能動詞であるか実質動詞であるかは、その用法によってきまる(村木新次郎 1991)」としている点についてである。実質動詞と機能動詞という二極的な用語を用いている以上、動詞の機能性の段階をその両極の間にとるのには難がある。なぜなら、実質動詞である以上は機能動詞ではなく、機能動詞とする以上は実質動詞ではないからである。そのため、その段階性を説明するとなると、「実質動詞寄りの機能動詞」「かなり実質動詞寄りの機能動詞」、「実質動詞的な動詞」「機能動詞的な動詞」という用語を用いざるを得なかったわけである(第5章『やる』との比較)。これは、佐藤琢三(1995)においても、「やる」を「抽象度の高い行為志向の他動詞(佐藤琢三 1995)」とし、機能動詞ではな

それを図に示すなら、以下のようになる。

動詞の機能

弱
淡

強
濃

実質的意味の空疎化

文法的機能の段階性

対人的な機能の多様性

第 1 章第 4 節でこれらの動詞研究の比較を行ったが、それに加えて、以下をまとめとして表にしておく。「範囲」はそれぞれの動詞が該当する対象の範囲であり、「対概念」はそれ

306 加えて、この機能動詞の説明にその最も該当すべき動詞である「する」が合わないのである。つまり、「する」は「実質的な意味を持った本来の用法」がそもそも無く、「本来の用法」が機能動詞なのである。

それぞれの動詞が対義語として設定する動詞のことである。「文法的特徴」には動詞の規定において重要とされた基準をまとめた。「対人的な機能」とは聴者を前提としたコミュニケーション上の機能について何を設定しているかを加えた。「―」の記号はそのような視点を持たないことを示す。

表. 機能性の動詞の比較

| 研究 | 範囲 | 対概念 | 文法的な特徴 | 対人的な機能 |
|-----------------|-------|-----------|--------------------|-------------|
| 形式動詞研究 | 限定せず | 実質動詞 | 動詞一語との交替 | ― |
| 機能動詞研究 (村木論) | 名詞＋動詞 | 実質動詞 | 動詞一語との交替 | ― |
| 軽動詞研究（影山論） | 名詞＋動詞 | 重いアル、重いスル | 名詞がモノではないこと | ― |
| 多機能動詞研究 (本論) | 限定せず | 設定せず | 動詞一語との交替、形容詞一語との交替 | 文機能 発話機能 |

第2節 多機能動詞の定義と特徴

次に、多機能動詞の定義づけとその特徴を述べる。まず、本研究で提案する多機能動詞とは以下のような動詞のことである。

多機能動詞とは、意味的に、統語的に、対人的に多様な機能を示す動詞を見るための枠組みであり、そこには程度や段階といったものが見られる³⁰⁷。

次に、多機能動詞の意味的、統語的、対人的な機能性の特徴とその程度性を記述する。

意味的な特徴

1. 実質的な意味の濃淡がある。
2. 共起する要素への意味的な依存度に差がある。
3. 共起する要素の種類の多様性が見られる。

※1（実質的な意味が希薄であるほど）、※2（共起する要素に頼った意味の実現を行っているほど）、※3（多様であればあるほど）、動詞の機能性が高くなる。

統語的な特徴

1. 共起する要素との結びつきに強弱がある。

³⁰⁷ 多くの動詞がその程度の差こそあれ、多機能動詞に該当すると思われる。その実態の解明は今後の課題としたい。

※1 が強であるほど動詞の機能性が高くなる。

2. 前接する要素と一体化し、動詞一語あるいは形容詞一語との置き換え可能性が見られるものがある。

3. 単独使用でその意味の実現に差がある。

※3（単独で用いられることが無いもの）が最も機能性が高い。

4. 共起する要素は、具体名詞＜抽象名詞＜動作名詞の順で、動詞は機能性が高くなる。

5. 文の構造は、さまざまな格助詞を取り、文型が多いほど動詞は機能性が高くなる。

6. 動詞の枠を超え、形容詞や助動詞、補助動詞、接続詞など他の品詞として用いられるものは機能性が高い³⁰⁸。

対人的な特徴

1. 文機能と発話機能の多様性が見られる。

※1 の性質に合致するほど動詞の機能性が高くなる。

2. 行為動詞では、〈叙述〉や〈描写〉に限らず〈表出〉まで示すものが最も機能性が高い。

このような特徴の全てにわたってその程度が高いのが、本研究で取り上げた動詞「する」と動詞「ある」である。そして、「する」は「ある」よりも更に多機能を示す動詞と言える。したがって、現代日本語動詞の中で最も機能性の高い動詞は「する」であり、そして「ある」である。「する」は動作性の動詞として、「ある」は状態性の動詞として、意味的には逆の特徴を示しながら、機能的には同じように多様であり、動詞の範疇を超えて展開する動詞と言うことができる。このような動詞が存在することで、造語力による語彙の拡充、表現のバリエーションの広がりなどが実現されていると考えることができる。

そして、以上の特徴や定義は、言うまでもなく動詞「する」と動詞「ある」の全容を解明しようという本研究から得られた結果である。

さて、以上のような多機能動詞の枠組みを用いて、動詞の機能性について少し考えてみたい³⁰⁹。

例えば、「かける」という動詞は、「コートをかける」「会議にかける」「誘いをかける」の例が見られ、統語的な特徴の1「共起する名詞との結合が強い」、2「動詞一語（誘う）に置き換え可能である」、3「単独使用では連語の意味を実現できない」、4「共起する名詞に動作名詞が見られる」、5「格構造のパターンが複数見られる」、そして、意味的な特徴の2「共起する要素に依存した意味の実現が見られる」から、多機能動詞として認定できる。ただし、意味的な特徴の1「実質的な意味が無いとは言えないこと」、統語的な特徴の6「動詞

³⁰⁸ 他の品詞に転用あるいは変化を遂げている段階で「多機能動詞」の枠を超えてしまうが、そのような他の品詞への転用が可能であるという事実はとりもなおさずその動詞自体の持つ多様な機能への変化可能性を潜在的に強く持つことの証左となるため、ここにその特徴として述べた。

³⁰⁹ 他の動詞への応用やその枠組みの精緻化は今後の課題となる。

の枠を超え他の品詞として用いられることはないこと」、そして、対人的な特徴の 1 と 2「文機能は〈事象叙述〉〈状態描写〉に限定されていること」などから、多機能性が「する」と「ある」ほどには高いとは言えない。そのため、「かける」は多機能動詞ではあるが、その程度は中段階だと判断できる。

また、「食べる」は「パンを食べる」「月給だけで食べていく」の例があり、後者が比喩的ではあるが、多機能動詞の特徴の全てにわたってその程度が低い、あるいはその特徴が見られない動詞であることがわかる。一方、「食う」は「食べる」の俗語であるが、「うちで飯を食う」「蚊に食われる」「こんな薄給では食っていけない」「子役が主役を食う」「この機械は電気を食う」「門前払いを食う」「見かけよりは年を食っている」「人を食ったような態度で応対する」など、意味的な特徴の 2「動作性の名詞が見られること」、3「多様なヲ格名詞を持つこと」では機能性を示す条件を備えているが、その他の特徴は該当しないため、多機能動詞としては機能性が弱いと考えられる³¹⁰。

「電話をかける」「会議にかける」の「かける」など、実質的意味がやや薄いという意味的な特徴のみで機能動詞とされた動詞が、「勉強をする」「寒気がする」の「する」や「火事がある」「痛みがある」「勇気がある」の「ある」に比べると、機能性の点では中間程度の機能性を持った動詞だと位置づけられるのである。つまり、機能性の強い「する」と機能性の段階が中間程度である「かける」が、従来の研究では一緒に「機能動詞」という一つ枠の中に入れられていたものを、多機能動詞という概念を用いることで、その機能性の段階を規定することができるようになるのである。その意味において、実質的な意味が薄い文法的な役割を担っていく動詞の実態を捉えるには、多機能動詞という概念が重要だと考えるのである。

以上、形式動詞あるいは機能動詞、軽動詞と呼ばれてきた動詞の筆頭である「する」と「ある」は多機能動詞であると結論付けた。つまり、従来の「名詞＋動詞」の語結合のみが機能動詞・軽動詞であるとする定義によって、機能性の各段階にあるその他の動詞や表現をはじきだしてしまう限定的な枠組み、あるいは、機能動詞を実質的な意味が薄い動詞であるとする定義によって生じる曖昧さ、機能動詞と実質動詞という二つの用語を用いて機能を測ることの矛盾を乗り越えるには、機能性を軸に置いた多機能動詞という概念が有効であると考えられるのである。さらに、多機能動詞という概念を用いることで、機能動詞あるいは形式動詞という一つの枠に入っていた各動詞の機能的な相違を見ることができるようになったものと考えている。

第 3 節 課題と今後の展望

この多機能動詞という概念を用いて、実際に一つ一つの動詞が示す機能性を現代日本語全体において記述していくという膨大な作業が今後の課題として残されている。その分析

³¹⁰ 全ての動詞が多機能動詞に該当するわけではない。例えば「殴る」は「人を殴る」「頭を殴る」などヲ格名詞は人か身体部位に限られ、格パターンも「ヲ殴る」のみであり、どの例も実質的意味をしっかりと持っている。つまり、慣習化する例が見られないということである。

の中で、さらにこの多機能動詞という概念を研磨し厳密化・精緻化していきたいと考えている。特に、本研究でそれぞれ「特徴」として示したもののうち、いくつに該当すれば、あるいはどれにどの程度該当すれば、機能性が「強め」なのか「中間」なのか、あるいは「弱い」のかを規定していくことを目指したい。つまり、「特徴」ではなく「条件」としてまとめることを目指さなければならない。ただし、それも多くの動詞を検証していかなければできないことである。本研究で考察した「する」と「ある」が、機能という点でその最強の位置に置くことができることは間違いない。これを最大値として設定し、その段階や程度を見たいと考えている。同時に、動詞として一つの基本的な意味しか表わさない動詞の実態も解明し（つまり多機能動詞ではないもの）、その基本的な意味がどう派生し拡大していくのかという文法化あるいは慣習化という問題についても検討していきたいと考えている。

このほか、ここではまだ扱えなかった「～つつある」「～ことがある」「～からして」「～にしても」「二人して」などの表現の検討が残されている。そして、さらに深い学びと考察が必要な格助詞の問題³¹¹や名詞の問題（動作性名詞、モノ名詞の程度性）などもある。今後、さらに視点を広げ、それらの研鑽を深めるとともに動詞の機能性について日本語全体について考えていく必要がある。

第4節 本研究のまとめと意義

本研究における目的を最後にもう一度確認し、その結果を対応する形で述べ、本研究全体のまとめとしたい。

本研究の目的

1. 動詞の機能性を捉えるという観点から、形式動詞・機能動詞・軽動詞研究の総括を行う。

→形式動詞、機能動詞、軽動詞の三者の比較を行い、「名詞＋動詞」に限定されない、機能性を示す動詞として「多機能動詞」を提起した（第1章、終章）。

2. 動詞の機能の最大幅とその段階性を捉える。

→「する」と「ある」を分析し、その構文の構造と意味、一文の機能と語用論的機能の記述を行い、「する」が行為を表す動詞として「ある」が存在を表す動詞としてその機能の最大幅を示すことを見てきた。また、それらを述語として持つさまざまな文を分析し、類義語である（機能性が高くない）「やる」と「いる」と比較し、その機能性の段階をより明確にした（第2、3、4、5、6、7章）。

3. 多様な機能を示す動詞を捉えるための新たな枠組みを提示する。

→機能を中心に考察するという本研究の立場から、文法的な機能と対人的な機能を考察し、先行研究の問題であった「名詞＋動詞」のみという範囲の狭さ、機能動詞と実質動詞と

³¹¹ 例えば杉本武（1986）で挙げられている「この町が美術館がある」「加藤さんが奥さんがある」などの二重にガ格が出現する事象については、「この町に美術館がある」のような典型的な格パターンを取り上げた本研究では扱えなかった。同様に二格の問題もある。

いう対概念の中に機能性の幅を捉えるという矛盾を乗り越え、さらに対人的機能の観点を加えることで、多機能動詞を提起した（第1章、終章）。

そして、具体的に明らかにしたかったことと、その考察の箇所を合わせて記す。

①形式動詞、機能動詞、軽動詞の異同を明らかにし、動詞の機能を捉える視点を整理する。→第1章

②動詞「する」と動詞「ある」の文法的機能を捉える。

（ア）文の構造（形式格と意味格、共起する名詞）を記述する。

→第2章「する」、第3章「ある」

（イ）動詞と共起する要素との関係性、表わされる意味を考察する。

→第4章「する」、第6章「ある」

（ウ）類義語「やる」・類義語「いる」との比較を行い、多機能な動詞の特徴を浮き彫りにする。

→第5章「やる」、第6章第2節「ある」、対人的な機能の相違（第7章第3節）

③動詞「する」を述語とする文、動詞「ある」を述語とする文の対人的機能を捉える。

（エ）文機能（一文の機能）を記述する。

→第7章第1節「する」、第7章第2節「ある」、第7章第3節両者の比較

（オ）発話機能（語用論的な機能）の広がり確かめる。→第7章第4節

（カ）文法的な機能と対人的な機能の関係性を捉える。→第7章第4節

本研究の意義とは、以下の点だと考えている。

1. これまで独立的に行われていた形式動詞、機能動詞、軽動詞という機能性の動詞についての研究をまとめたこと。
2. 動詞の機能の研究に、文法的な機能だけでなく、新たに対人的な機能を盛り込んだこと。
3. 多機能性動詞という枠組みを設定し、その機能の段階を捉える特徴を、意味、統語、語用論の三つの観点から設定したこと。そのことで、日本語動詞の機能性を見るための新たな道筋をつけたこと。
4. とりわけ、動詞「する」と動詞「ある」の総合的な分析をまとめて行った例はなかったが、それを「機能」という観点から多角的に考察を行い、その文法的機能と対人的機能の広がりを捉えたこと。

以上が本研究の目的とその結果、そして意義である。

既に刊行された論文との関連―初出一覧―

序章 新規執筆

第1章

「動詞の形式性について―橋本、山田、松下、時枝―」『日本語日本文学』22、創価大学日本語日本文学会、2012年、pp1-17

「『やる』動詞の意味と用法について」筑波大学大学院文芸・言語研究科1997年度修士論文、1998年

第2章

「『する』文の格構造」『日本語日本文学』21、創価大学日本語日本文学会、2011年、pp33-48

第3章 新規執筆

第4章

「『する』文の多機能性―文法的機能―」『日本語日本文学』17、創価大学日本語日本文学会、2007年、pp23-39 の前半

「『形容詞・形容動詞する』文の構造と意味」『日本語日本文学』18、創価大学日本語日本文学会、2008年、pp9-36

「『擬態語する』の語彙と文法的機能」張 威編『日語動詞及周边研究』pp124-134〈清華大学国際フォーラム論文集〉外研社

「擬音語・擬態語と『する』の結合について―『だ』『やる』との違いを中心に―」『日本語日本文学』19、創価大学日本語日本文学会、2009年、pp17-36

「『とする』と『にする』の違い―意味・用法を中心に―」『日本語日本文学』23、創価大学日本語日本文学会、2013年、pp15-33

「『～とする』『～にする』文における主語の存在について」『創価人間学論集』第6号、創価大学人間学会、2013年、pp81-106

「『～とする』における引用と決定・同定の連続性―『～と言う』と比較して―」『日本語日本文学』26、創価大学日本語日本文学会、2016年、pp39-54

第5章

「『する』と『やる』―生理・病理現象の表現を中心に―」『言語学論叢』18、筑波大学一般・応用言語学研究室、1999年、pp39-52

「『する』と『やる』―非動作性名詞がヲ格に立つ場合―」『日本語科学』12、独立行政法人国立国語研究所、2002年、pp7-28

「サ変動詞語幹＋ヲ『する』と『やる』―統語論的観点から―」『新潟大学国語国文学会誌』

第 52 号、新潟大学国語国文学会、2010 年、pp14-24

「行為動詞『やる』の俗語性」『日本語日本文学』16、創価大学、2006 年、p33-41

「初級日本語教科書における『する』と『やる』」『日本語日本文学』24、創価大学日本語日本文学会、2014 年、pp41-61

第 6 章

「『～がある』文における多機能性」『言語研究』125、日本言語学会、2004 年、pp111-143 の前半

「『いる』と『ある』—存在・状態・属性の連続性—」『日本語日本文学』20、創価大学日本語日本文学会、2010 年、pp1-19

「『～が数量詞ある』文の考察—ガ格名詞と数量詞の省略を中心に—」『日本語日本文学』27、創価大学日本語日本文学会、2017 年、pp-53-70

「『名詞ある』について—『名詞がある』『名詞のある』との比較—」『日本語日本文学』25、創価大学日本語日本文学会、2015 年、pp41-58

第 7 章

「『する』文の多機能性—文法的機能—」『日本語日本文学』17、創価大学日本語日本文学会、2007 年、pp23-39 の後半

「『～がある』文における多機能性」『言語研究』125、日本言語学会、2004 年、pp111-143 の後半

「『する』文と『ある』文の発話機能—発話機能論を通して見る多機能性—」『日本語日本文学』28、創価大学日本語日本文学会、2018 年、pp39-56

終章 新規執筆

参考文献

- 青木伶子（1980）「格助詞」『国語学大辞典』国語学会編
- 安達太郎（1999）「『する』の文型と構文」『広島女子大学国際文化学部紀要』7、pp105-117、広島女子大学国際文化学部
- 安達太郎・阿部忍・塩入すみ・白川博之・高橋美奈子・野田春美・前田直子（2008）『現代日本語文法 6 第11部複文』日本語記述文法研究会、くろしお出版
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 岩男考哲（2007）「『とする』構文についての覚書」『日本語・日本文化』33号、pp1-15、大阪外国語大学日本語日本文化教育センター
- 岩崎英二郎（1974）「ドイツ語と日本語の機能動詞」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』6、pp79-93、慶應義塾大学言語文化研究所
- 王鉄橋（1988）「『する・やる・行う』についての構文的分析」『言語と文化』1、pp21-40、文教大学言語文化研究所
- 大石初太郎（1956）「話しことばとその研究」『国語学』24（『話しことば論』（1971）秀英出版、再収）
- 大塚 望（1997）「「やる」動詞の意味と用法について」筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中間論文
- （1999）「『する』と『やる』—生理・病理現象の表現を中心にして—」『言語学論叢』18、pp39-52、筑波大学一般・応用言語学研究室
- （2002）「『する』と『やる』—非動作性名詞がヲ格に立つ場合—」『日本語科学』12、独立行政法人国立国語研究所
- （2004）「『～がある』文の多機能性」『言語研究』125、pp111-143、日本言語学会
- （2006）「行為動詞『やる』の俗語性」『日本語日本文学』16号、pp33-41、創価大学日本語日本文学会
- （2007）「『する』文の多機能性—文法的機能—」『日本語日本文学』17号、pp23-39、創価大学日本語日本文学会
- （2008）「『形容詞・形容動詞する』文の構造と意味」『日本語日本文学』18号、pp9-36、創価大学日本語日本文学会
- （2009）「擬音語・擬態語と『する』の結合について—『だ』『やる』との違いを中心に—」『日本語日本文学』19号、pp17-36、創価大学日本語日本文学会
- （2010a）「『いる』と『ある』—存在・状態・属性の連続性—」『日本語日本文学』20号、pp1-19、創価大学日本語日本文学会
- （2010b）「サ変動詞語幹＋ヲ『する』『やる』—統語論的観点から—」『新潟大学国語国文学会誌』52号、pp14-24、新潟大学人文学部国語国文学会
- （2011）「『する』文の格構造」『日本語日本文学』21号、pp33-48、創価大学日本語日本文学会
- （2012）「動詞の形式性について—橋本、山田、松下、時枝—」『日本語日本文学』

- 22 号、pp1-17、創価大学日本語日本文学会
- (2013) 『『とする』と『にする』の違い—意味・用法を中心に—』『日本語日本文学』23 号、pp15-33、創価大学日本語日本文学会
- (2013) 「『～とする』『～にする』文における主語の存在について」『創価人間学論集』6 号、pp81-106、創価大学人間学会
- (2014) 「初級日本語教科書における『する』と『やる』」『日本語日本文学』24 号、pp15-33、創価大学日本語日本文学会
- (2015) 『『名詞ある』について—『名詞がある』『名詞のある』との比較—』『日本語日本文学』25 号、pp41-58、創価大学日本語日本文学会
- (2016) 『『～とする』における引用と決定・同定の連続性—『～と言う』と比較して』『日本語日本文学』26、pp39-54、創価大学日本語日本文学会
- (2017) 「～が数量詞ある」文の考察—ガ格名詞と数量詞の省略を中心に—』『日本語日本文学』27 号、pp53-70、創価大学日本語日本文学会
- (2018) 「『する』文と『ある』文の発話機能—発話機能論を通して見る多機能性—」『日本語日本文学』28 号、創価大学日本語日本文学会、pp39-56
- 大鹿薫久(1984)「『ある』についての素描」『山辺道』28、pp50-60、天理大学国文学研究室
- 岡 智之(2003)「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク」『認知言語学論考』No. 2、pp111-156
- 奥田靖雄(1966)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『ことばの研究・序説』(1977)むぎ書房所収
- 尾上圭介(1996)『文法と意味 I』くろしお出版 (2001) 第 2 章第 3 節「文をどう見たか—述語論の学史的展開—」『日本語学』9 月号(1996)所収、pp301-314
- 加賀信広 (1993)「形式動詞『する』と文法項の転送現象」『言語文化論集』37、筑波大学
- 影山太郎 (1980)『日英比較 語彙の構造』柏松社
- (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- (2002)『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』(第 8 章 語彙と文法)朝倉書店
- (2004a)「軽動詞構文としての『青い目をしている』構文」『日本語文法』4 巻 1 号、日本語文法学会
- (2004b)「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型』くろしお出版
- 金子比呂子 (1985)「話しことばにおける『する』と『やる』」『ICU 夏期日本語講座論集 2』、pp105-126、国際基督教大学夏期日本語講座
- 金子 弘 (1986)「格助詞『に』の用法分類」『文藝研究』113 巻、p61-p71、日本文藝研究會
- 神田靖子 (1982)『『する』と『やる』』『日本語教育事典』大修館書店
- 菊池律之 (2008)「変化動詞文と共起するニ・トに関する一考察——トの意味・機能の分析を中心に—」『日本語文法』8 巻 2 号、p88-p103、日本語文法学会
- 北原保雄 (1997)『青葉は青いか 日本語を歩く』大修館書店

- 金水 敏 (1984) 『『いる』『おる』『ある』—存在表現の歴史と方言』『ユリイカ』臨時増刊号、青土社
- (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- (2011) 「第3章統語論」『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15、日本言語学会
- 久保田一充 (2012) 『『息子は明日運動会がある』構文—『予定』を表す『象は鼻が長い』構文の変種—』『日本語文法』12-2、pp196-212、日本語文法学会
- (2017) 「出来事の発生を表す『～がある』文」『言語研究』151、pp37-62、日本言語学会
- 国立国語研究所 (1957) 『総合雑誌の用語 現代語の語彙調査』国立国語研究所報告 12、秀英出版
- (1964) 『分類語彙表』国立国語研究所資料集 6、秀英出版
- (1971) 『電子計算機による新聞の語彙調査 (Ⅱ)』国立国語研究所報告 38、秀英出版
- (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』国立国語研究所報告 78、秀英出版
- (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 佐藤琢三 (1995) 「日本語の行為を表す動詞—外国人に対する日本語教育のための基礎的研究として」『国際関係研究 (国際文化編 14)』16-2、pp211-225、日本大学国際関係学部国際関係研究所
- 澤田浩子 (2012) 「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」『属性叙述の世界』影山太郎編、pp203-219、くろしお出版
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』10月号、pp4-16
- 杉本 武 (1986) 「第3章 格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」、奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (1988) 「いわゆる『文法関係』への意味的要因の関与について」『九州工業大学情報工学科紀要 人文・社会科学篇』1、pp1-26
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス」『言語の研究』言語学研究会編、むぎ書房
- 鈴木英夫 (1998) 「規範意識と使用の実態—『(人が)ある』と『(人が)いる』を中心として—」『日本語学』17・5、明治書院
- 高橋太郎 (1994) 「ダブルテンスの観点からみた〈スルコトガアル〉の種々相」『立正大学文学部論叢』100、pp139-159
- 高橋太郎 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 高橋太郎・屋久茂子 (1984) 『『～がある』の用法—(あわせて)『人がある』と『人がいる』の違い—』国立国語研究所報告 79、研究報告集 5、国立国語研究所
- 高橋美奈子 (2005) 「連体修飾節主語を表すガとノ」『新版日本語教育事典』日本語教育学会編 大修館書店

- 竹沢幸一（2003）『『ある』と have/be の統語論』『言語』32-11、pp61-68、明治書院
- 田野村忠温（1988）『『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』』『日本語学』7、11
- 寺村秀夫（1975）「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』4号、大阪外国語大学留学生別科（『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版（1984）所収）
- （1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- （1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店
- （1950）『日本文法 口語篇』岩波全書114、岩波書店
- 外崎淑子（2005）『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房
- 富田美知子（1995）「存在動詞『ある』『いる』の用法」『人文論究』59、北海道教育大学函館人文学会
- 中川秀太（2001）「動詞『やる』とサ変動詞語幹について」『研究年報』15、pp21-29、日本エドワード・サピア協会
- 中北美千子（1991）「擬音語・擬態語と形式動詞『する』の結合について」『国文目白』31、pp247-256、日本女子大学国語国文学会編
- （1993）「形容詞・形容動詞と形式動詞『する』の結合について」『国文目白』32、日本女子大学国語国文学会編
- 中本正智（1986）「やる・する」『日本語研究』8、39-42、東京都立大学国語学研究室
- 中山英治（2000）「仮定的な事態をさしだす『～とする』とその周辺」『人間文化科学研究集録』、p21-p31、大阪府立大学大学院人間文化科学研究科・総合科学研究科編
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- （1981）「〈擬音語・擬態語＋する〉の形式について」（西尾寅弥著『現代語彙の研究』1988年明治書院所収）
- （1983）「音象徴語における意味・用法の転化の一類型」（西尾寅弥著『現代語彙の研究』1988年明治書院所収）
- 仁田義雄（1979）「日本語文の表現類型—主格の人称制限と文末構造のあり方の観点において—」『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』、pp287-306、くろしお出版
- （1985）「主格の優位性—伝達のムードによる主格の人称指定—」『日本語学』10月号、pp39-52
- （1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』、pp1-56、くろしお出版
- （1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- （1993）『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- （2000）「第2章認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』、pp81-159、岩波書店
- （2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- （2005）「日本語の格」『新版日本語教育事典』日本語教育学会編
- 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』72巻8号、京都大学文

学部国語国文学研究室

芳賀 綏(1954)「“陳述”とは何もの?」『国語国文』23-4、pp47-61、中央図書出版社

橋本進吉(1933)『国語学概論』岩波書店

———(1934)『国語法要説』(『国語法研究 橋本進吉博士著作集第二冊』(1948) 岩波書店所収)

———(1935)『新文典 上級用』富山房

———(1936)『新文典 初級用 改訂』富山房

———(1948)『新文典別記 口語篇』富山房

蓮沼昭子(1985)『「ナラ」と『トスレバ』』『日本語教育』56号、p65-p78、日本語教育学会

原沢伊都夫(1993)「存在動詞『いる』と『ある』の使い分け—語用論的アプローチ—」『日本語教育』80、日本語教育学会

針谷明子(1995)「動詞ヤルについて—スルとの相違—」創価大学卒業論文

日野資純(1998)「両形並存の視点から見た方言と国語史—スルとヤル—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』、pp774-802、汲古書店

平尾得子(1990)「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢(日本学篇)』24、大阪大学大学院文学研究科

フィルモア(1975)『格文法の原理—言語の意味と構造』三省堂

藤田保幸(2001)「引用形式『～トスル』の表現性—『当局は、早急に調査するとしている』などの表現について—」『国語語彙史の研究』20、pp271-285、国語語彙史研究会編、和泉書院

彭 広陸(2002)「『Nアル』をめぐって—『Nノアル』『Nガアル』との比較を兼ねて—」『日本語学研究Ⅱ』北京日本学研究中心編

前田直子(2002)「否定的状態への変化を表す動詞変化構文について—ないようにする・なくする・ないようになる・なくなる—」『東京大学留学生センター紀要』第12号、pp1-19、東京大学留学生センター

益岡隆志・田窪行則(1987)『格助詞』くろしお出版

益岡隆志(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

———(2006)「日本語における条件形式の分化」益岡隆志編『条件表現の対照』、pp31-46、くろしお出版

松下大三郎(1903)『日本俗語文典』勉誠社(訂正3版を参照)

———(1924)『改撰標準日本文法』(昭和5年改訂版、昭和49年版を参照) 紀元社

三尾 砂(1942)『話言葉の文法』帝国教育会出版部刊

三上 章(1953)『現代語法序説』(1953年刀江書院、1972年復刊くろしお出版を参照)

三井正孝(2001)「ニトッテ格の共起条件」『新潟大学国語国文学会誌』43、pp12-38

南得鉉(1999)「存在動詞『いる』のもう一つの用法—具体物の存在を表わさない用法を中心に—」『日本語教育の交差点で：今田滋子先生退官記念論文集』今田滋子先生退官記念論文集刊行委員会編

南不二男(1996)「話しことばの研究と各種資料の性格」『日本語学』15.4 明治書院

- Miyagawa, Shigeru(1987) “Lexical Ctegrories in Japanese” *Lingua* 73
- (1989) “Light verbs and the ergative hypothesis” *Linguistic Inquiry* 20
- 宮腰幸一(2007)「結果句の定義と分類について一意味・機能的アプローチ」『日本語文法』7巻2号、日本語文法学会
- 宮地 裕 (1978)「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』115、国語学会
- 松岡 弘 (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク、松岡 弘 (監修)、庵 功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (著)
- 村木新次郎 (1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」国立国語研究所報告 65、『研究報告集』2
- (1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ出版
- (2000)『「がらあき」』『ひとかどー』は名詞か、形容詞か』『国語学研究』39、東北大学文学研究科
- (2002)「第三形容詞とその形態論」『国語論究 10 現代日本語の文法研究』明治書院
- (2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- (2015)「日本語の品詞をめぐって」『日本語文法』15巻2号、pp17-32、日本語文法学会
- 森田良行 (1977)『基礎日本語 1 一意味と使い方』角川書店
- (1980)『基礎日本語 2』角川書店
- 森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- (2000)「第1章基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法 3 モダリティ』、pp3-78、岩波書店
- (2002)「可能性とその周辺—『かねない』『あり得る』『可能性がある』等の迂言的表現と『かもしれない』—」『日本語学』2月号、pp17-27
- 矢澤真人 (1983)「情態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察」『日本語と日本文学』No.3、pp30-39、筑波大学国語国文学会
- (1985)「情態修飾成分と〈シテイル〉の意味」『日本語学』2-2、pp63-80、明治書院
- (1998)「日本語の感情・感覚形容詞」『言語』27-3、pp50-56、明治書院
- (2000)「副詞的修飾成分の諸相」『日本語の文法 I 文の骨格』pp187-233、岩波書店
- (2006)「情態修飾関係の素性分析について」『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』pp325-343、ひつじ書房
- 山岡政紀(2000a)「関係動詞の語彙と文法的特徴—照合行為の介在をめぐって—」『日本語科学』8: 29-53、国立国語研究所
- (2000b)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- (2008)『発話機能論』くろしお出版

- 山岡政紀・大塚望(2009)『『擬態語する』の語彙と文法的機能』張 威編『日語動詞及周辺研究』pp124-134〈清華大学国際フォーラム論文集〉外研社)
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館(昭和4年5版を参照)
- (1922)『日本文法講義』宝文館(昭和29年訂正版、昭和46年復刻版を参照)
- (1936)『日本文法学概論』宝文館
- 楊 淑雲(1993)「擬態語+する／なる」の形式について』『東北大学文学部日本語学科論集』3、東北大学文学部日本語学科
- 鷺見幸美(1996)『『擬音語・擬態語+する』動詞の分類』『名古屋大学人文科学研究』25、名古屋大学大学院文学研究科人文科学研究編集委員会
- Fillmore, Charles(1968)“The Case for Case”, in E. Bach & R.T.Harms(eds.) *Universal in Linguistics Theory*: Holt, Rinehart & Winston, 1-88
- Grimshaw, Jane(1990)*Argument Structure*. MIT Press.
- Milsark, Gary(1979)*Existential Sentences in English*. New York:Garland.

事典・辞典

- 『岩波国語辞典』第六版(2000)西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編、岩波書店
- 『学研現代新国語辞典』改訂第三版(2002)金田一春彦編、学習研究社
- 『学研国語大辞典』(1978)金田一春彦・池田弥三郎編、学習研究社、
- 『国語大辞典 言泉』(1987)小学館
- 『国語大辞典』第一版新装版(1988)小学館
- 『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002)飛田良文・浅田秀子編、東京堂出版
- 『現代言語学辞典』(1988)成美堂
- 『新明解国語辞典』第六版(2004)柴田 武、倉持保男、山田明雄、酒井憲二、山田忠雄編、三省堂
- 『明鏡国語辞典』第二版北原保雄編(2010)大修館書店
- 『大辞泉』(1995)小学館
- 『日本語基本動詞用法辞典』(1989)小泉保、船城道雄、本田晶治、仁田義雄、塚本秀樹編、大修館書店
- 『日本国語大辞典』第二版 第8巻(2001)、第13巻(2002)、小学館
- 『日本俗語大辞典』(2003)米川明彦編、東京堂出版
- 『日本大百科全書』小学館
- 『日本語文法事典』(2014)日本語文法学会編、大修館書店
- New College English-Japanese Dictionary*, 6th edition, Kenkyusha Ltd (1994)

データベース

- 朝日新聞 <http://dna.asahi.com>
- YOMIURI ONLINE <http://www.yomiuri.co.jp/>
- 毎日新聞データベース (毎日Newsパック)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、国立国語研究所

『路傍の石』山本有三(2002)偕成社、『修羅の群れ』大下英治(1984)徳間書店、『宮部みゆきが読まれる理由』中島誠(著)現代書館 2002、古田紹欽(著)『禅と建築・庭園』横山正(編・解説)ペリカン社 2002、高毛礼誠(著)『あなたを忘れきれない男たち』マガジンハウス 1993、『『超』整理法』野口悠紀雄(著)中央公論社 1993、『涙はふくなく、凍るまで』大沢在昌(著)講談社 2001、『闇の刃』勝目梓(著)光文社 1996、『文化夜總會』松岡充(著)、『伊能忠敬の歩いた日本』渡辺一郎(著)筑摩書房 1999、『邪馬台国論』大和岩雄(著)大和書房 2000、『私の古寺巡礼』井上靖(監修)光文社 2005、『光速スローネス』ザラ・ウシマンド(著)/タミコ・ティール(著)/トリン・T・ミンハ(著)/ロベルト・沖中(著)/藤野陽子/分担不明、京都芸術センター;星雲社 2005、Yahoo!ブログ 2008

「青空文庫」 <http://www.aozora.gr.jp/>

(虚構)「虚構の春」太宰治『太宰治全集 1』筑摩書房(1988)、(生徒)「女生徒」太宰治、角川書店(1954)、(播州)「播州平野」『宮本百合子全集 第六卷』新日本出版社(1979)、(海浜)「明るい海浜」『宮本百合子全集 第三卷』新日本出版社(1979)、(小画)「古き小画」『宮本百合子全集 第二卷』新日本出版社(1979)、「道標」『宮本百合子全集 第七卷』新日本出版社(1980)、(結婚)「結婚論の性格」『宮本百合子全集 第十四卷』新日本出版社(1979) 宮本百合子、(油絵)「油絵新技法」小出檜重『小出檜重随筆集』岩波書店(1987)、(幾度)「幾度目かの最期」久坂葉子『久坂葉子作品集 女』六興出版(1978)、「新生」島崎藤村『新生』新潮社(1955)、「飛び出しナイフ」佐野良二『闇の力』構想社(1996)、「レズビアン・ライフ」「十八歳のモノログ」早見 秋『レズビアン・ライフ』海越出版社(1999)、早見秋『装飾の性』近代文藝社(1995)、「本因坊と私」関根金次郎「日本の名随筆別巻 11・囲碁 II」作品社(1992)、「五味氏の宝物」佐野良二『北方文芸』第 28 巻 332 号(1995) 北方文芸刊行会、「みみず物語」「みみず物語 2」小泉英政「三里塚情報」第 360 号(1995)、「山小屋のラタトゥイユ」金井美恵子『月刊百科』平凡社 2001. 10、no.468

『新潮文庫の 100 冊 CDROM 版』(1995)新潮社

(孤高)新田次郎「孤高の人」、(女社長)赤川次郎「女社長に乾杯!」、(女)有島武郎「或る女」、(花埋)「花埋み」渡辺淳一、(植物)吉行淳之介「砂の上の植物群」、(国盗)司馬遼太郎「国盗り物語」、「明暗」「こころ」夏目漱石、「愛撫」梶井基次郎、「山本五十六」阿川弘之、(大石)「或日の大石内蔵助」芥川龍之介、「砂の女」阿部公房、「或る女」有島武郎、(青春)「青春の蹉跎」石川達三、「野菊の墓」「浜菊」伊藤左千夫、「ブンとフン」井上ひさし、(あすなろ)「あすなろ物語」井上靖、「黒い雨」井伏鱒二、「野火」大岡昇平、「パニック」「裸の王様」開高健、「桜の木」「のんきな患者」梶井基次郎、「雪国」川端康成、(楡家)「楡家の人びと」北杜夫、「モオツァルト」「実朝」「偶像崇拜」「蘇我馬子の墓」小林秀雄、「一瞬の夏」沢木耕太郎、(コンス)「コンスタンテ

ィノーブルの陥落」塩野七生、(ビルマ)「ビルマの豎琴」竹山道雄、「人間失格」太宰治、「冬の旅」立原正秋、(新源氏)「新源氏物語」田辺聖子、「痴人の愛」谷崎潤一郎、(二十四)「二十四の瞳」壺井栄、「弟子」中島敦、(アメリカ)「アメリカひじき」「焼土層」「死児を育てる」「火垂るの墓」野坂昭如、「放浪記」林芙美子、「若き数学者」藤原正彦、(人民)「人民は弱し 官吏は強し」星進一、「点と線」松本清張、「塩狩峠」三浦綾子、「驢馬」三浦哲郎、「人生論ノート」(哲学)「語られざる哲学」三木清、「ゼロ弾きのゴーシュ」「オツベルと像」「双子の星」宮澤賢治、「錦繡」宮本輝、「友情」武者小路実篤、「世界の終わり」「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」村上春樹、(路傍)「路傍の石」山本有三、「戦艦武蔵」吉村昭、(砂の上)「砂の上の植物群」吉行淳之介

シナリオ

『‘99 年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編、映人社(「アドレナリンドライブ」矢口史靖、「生きたい」新藤兼人、「皆月」荒井晴彦、「刑法第三十九条」大森寿美男、「あつもの」池端俊策、「あ、春」中島丈博)

『’98 年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編、映人社(「愚か者傷だらけの天使」阪本順治・田村竜、「学校Ⅲ」山田洋次・朝間義隆)

『’71 年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編、映人社(「男はつらいよ寅次郎恋歌」山田洋次・朝間義隆)

「いとしのエリー」1987 年東宝、原作：高見まこ、脚本：藤長野火子

「夜に抱かれて」1994.11.16 日本テレビ放送、脚本：井沢満

その他

『週刊テレビ番組』(1994)東京ポスト

村上春樹『1Q84 BOOK1』(2009)新潮社、村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)講談社

日本語教科書

『初級日本語げんき(第2版)Ⅰ・Ⅱ』坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2011) The Japan Times

『初級日本語げんき(第2版)解答』坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2011) The Japan Times

『みんなの日本語初級Ⅰ(第2版)本冊』スリーエーネットワーク編著(2012)スリーエーネットワーク 『同Ⅱ』(2013)

『みんなの日本語初級Ⅰ(第2版)翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク編著(2012)スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク編著(1998)スリーエーネットワーク